

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第227集

# 上八木田 I 遺跡発掘調査報告書

新盛岡競馬場建設関連遺跡発掘調査

分 冊 1

(住居跡・住居跡内出土遺物)



(財)岩手県文化振興事業団  
埋蔵文化財センター

岩手県文化財調査団埋蔵文化財調査報告書第 227 集  
 上八木田 I 遺跡跡地及び埋蔵文化財調査  
 新盛岡競馬場建設関連発掘調査  
 正 誤 表

分冊 1

ページ	行	誤	正															
3	3	追加 (1) 調査区画の設定 (第 8 図)	(1) 調査区画の設定 (第 7・8 図)															
3	28	追加 ことにした。	ことにした。(第 7 図)															
11	32	訂正 (注) 数量は…	(注) 数量は…															
170	第 114 図	訂正 WD 2 h 坑 WD 2 h 坑	WD 2 h 注 WD 2 h 坑															
248	18 19	訂正 地床が 6 基検出された。… …4号炉のほぼ中央部、換土の下から埋設され た土器が検出された。4号炉と埋設…	地床が 4 基検出された。… …3号炉のほぼ中央部、換土の下から埋設さ れた土器が検出された。3号炉と埋設…															
249	第 169 図	追加	<table border="1"> <thead> <tr> <th>材料</th> <th>1号炉</th> <th>2号炉</th> <th>3号炉</th> <th>4号炉</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>幅</td> <td>50×74</td> <td>28×55</td> <td>55×105</td> <td>32×35</td> </tr> <tr> <td>高さ</td> <td>5</td> <td>4</td> <td>11</td> <td>4</td> </tr> </tbody> </table>	材料	1号炉	2号炉	3号炉	4号炉	幅	50×74	28×55	55×105	32×35	高さ	5	4	11	4
材料	1号炉	2号炉	3号炉	4号炉														
幅	50×74	28×55	55×105	32×35														
高さ	5	4	11	4														
262	24	訂正 遺構 (第 187 図、写真図版 58)	遺構 (第 180 図、写真図版 58)															

分冊 2

ページ	行	誤	正																														
56	第 312 図 49-AT	訂正 (1276・1282を除く)	(1276・1284を除く)																														
86	24	追加 第 VII 土師器	第 VIII 土師器																														
156	32	訂正 網分は行わない。全体にネガティブバルブ…	網分は行わない。全体にネガティブバルブ…																														
162	27	訂正 の外縁に刺刺を伴う (2373・2374他)。…	の外縁に刺刺を伴う (2374・2375他)。…																														
165	第 18 表	訂正 <table border="1"> <thead> <tr> <th rowspan="2"></th> <th colspan="3">I</th> </tr> <tr> <th>a</th> <th>b</th> <th>c</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>遺構内</td> <td>41</td> <td>7</td> <td>0</td> </tr> <tr> <td>遺構外</td> <td>187</td> <td>19</td> <td>2</td> </tr> </tbody> </table>		I			a	b	c	遺構内	41	7	0	遺構外	187	19	2	<table border="1"> <thead> <tr> <th rowspan="2"></th> <th colspan="3">I</th> </tr> <tr> <th>a</th> <th>b</th> <th>c</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>遺構内</td> <td>41</td> <td>7</td> <td>0</td> </tr> <tr> <td>遺構外</td> <td>187</td> <td>19</td> <td>2</td> </tr> </tbody> </table>		I			a	b	c	遺構内	41	7	0	遺構外	187	19	2
	I																																
	a	b	c																														
遺構内	41	7	0																														
遺構外	187	19	2																														
	I																																
	a	b	c																														
遺構内	41	7	0																														
遺構外	187	19	2																														
169	24	訂正 土 1・2 前後のところである。…	土 1, 2 前後のところである。…																														
245	15	訂正 れない点、 <u>標相</u> に異にする点である。	れない点、 <u>標相</u> を異にする。																														
266	4	訂正 …に刺刺を入れたもの (第 497 図 1395) が…	…に刺刺を入れたもの (第 497 図 12) が…																														
267	第 490 図	訂正 																															
271	26	訂正 <その他> 22 の隆帯のモチーフは…	<その他> 23 の隆帯のモチーフは…																														
288	9	訂正 …検討を加えている (藤村東男 198) 。…	…検討を加えている (藤村東男 1985) 。…																														

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第227集

# 上八木田 I 遺跡発掘調査報告書

新盛岡競馬場建設関連遺跡発掘調査

分 冊 1

(住居跡・住居跡内出土遺物)

## 序

本県には、縄文時代を初めとして数多くの埋蔵文化財包蔵地があり、8,000箇所にも及ぶ遺跡が確認されております。これら先人の残した文化遺産を保存し後世に伝えていくことは、県民に課せられた責務であります。

一方、広大な面積を有する本県の大部分は山地であり、地域開発に伴う社会資本の充実は重要な一施策であります。

このような埋蔵文化財の保護・保存と開発との調和は今日的課題であり、当岩手県文化振興事業団では埋蔵文化財センターの創設以来、岩手県教育委員会の指導と調整のもとに、開発事業によってやむをえず消滅する遺跡の発掘調査を行い、記録保存する措置をとってまいりました。

本報告書は、盛岡市八木田地区の新盛岡競馬場建設に関連して、平成3年度に発掘調査をした盛岡市上八木田Ⅰ遺跡の調査結果をまとめたものであります。同遺跡からは、160棟にもおよぶ縄文時代前期に属する大規模な集落跡と、それらに伴う数多くの遺物が検出され、未解明な部分が多かった盛岡盆地周辺の山間部における貴重な考古学的資料を提供することとなりました。

この報告書が、研究者のみならず一般に広く活用され、埋蔵文化財に対する理解と保護の一助になれば幸いです。

最後になりましたが、これまで発掘調査及び報告書作成に、御協力・御援助を賜りました岩手県競馬組合、盛岡市教育委員会をはじめとする関係各位に感謝申し上げますと共に、今後とも御指導・御協力をお願い致します。

平成7年3月

財団法人 岩手県文化振興事業団

理事長 高橋 令則

## 例言

1. 本報告書は、岩手県盛岡市上八木田33-1ほかに所在する上八木田I遺跡の発掘調査結果を収録したものである。
2. 上八木田I遺跡の調査は、新盛岡競馬場建設に伴う事前の緊急発掘調査であり、岩手県教育委員会文化課の指導と調整のもとに、岩手県競馬組合の委託を受け、財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが実施したものである。
3. 本遺跡の岩手県遺跡台帳番号はLE18-1103、当センターの調査略号はKYI-91である。
4. 野外調査および室内整理の期間、担当者等は次の通りである。

野外調査 期間 平成3年4月8日～11月15日

面積 22,400㎡

担当者 平井 進、佐瀬 隆、千葉孝雄、佐々木弘、神 敏明、酒井宗孝、  
笹平克子、金子昭彦、濱田 宏、八重座のり子、山口博英

室内整理 第一次 期間 平成3年11月18日～平成4年3月31日

担当者 平井 進、千葉孝雄、笹平克子、八重座のり子、山口博英

第二次 期間 平成4年4月1日～平成6年3月31日

担当者 千葉孝雄

5. 出土品の鑑定・保存は次の方々、機関に依頼した。(順不同・敬称略)

石器・石製品の石材鑑定	佐藤 二郎 (長内水源工業)
炭化糸の鑑定	中田 節子 (<財>山梨文化財研究所客員研究員)
炭化糸の保存処理	鈴木 稔 (<財>山梨文化財研究所)
炭化植物遺体の同定	(株)パリオ・サーヴェイ
鉄製品の鑑定・保存処理	赤沼 英男・木村 克則 (岩手県立博物館)
火山灰同定・胎土分析	三辻 利一 (奈良教育大学)
炭化材樹種同定	早坂松次郎 (岩手県木炭協会)
黒曜石分析と産地同定	藻科 哲男 (京都大学)

6. 本報告書の執筆は、「I 調査に至る経過」を鈴木恵治が、他は千葉孝雄が担当した。
7. 使用した地図は、建設省国土地理院発行の5万分の1および2万5千分の1の地形図と、岩手県競馬組合が作成した2千5百分の1の地形図である。
8. 本報告書作成にあたり、次の方々にご指導・御助言・文献のお世話などをいただいた。(順不同・敬称略)

井上雅孝・佐藤敬枝・高橋矩江 (滝沢村教育委員会)、鈴木良一・石本弘・本間宏・吉田

秀孝・菅原祥夫（福島文化センター）、森幸彦（福島県立博物館）、奥野義一（日本考古学協会）、白鳥良一（仙台市教育委員会）、村田晃一（宮城県教育委員会）、大野憲司・利部修（秋田県埋蔵文化財センター）、阿部千春（南茅部町教育委員会）、古屋敷則雄（戸井町教育委員会）、林謙作（北海道大学）、稲野彰子・浅田知世（北上市埋蔵文化財センター）、松田光太郎（神奈川県埋蔵文化財センター）、熊谷常正・小田野哲憲（岩手県教育委員会）、鶴岡幸雄（茅野市教育委員会）、小林公明・樋口誠司（井戸尻考古学館）、鎌田祐二（宮古市教育委員会）、七ヶ浜町歴史民俗資料館、階上町教育委員会

9. 野外調査にあたっては、岩手県競馬組合や盛岡市教育委員会等関係機関の協力を得た。また細野志郎氏をはじめとする地元の方々には作業員として協力いただいた。
10. 発掘調査に伴う出土遺物および諸記録は、KY I - 91の略号を付し岩手県立埋蔵文化財センターに保管してある。

〈分冊1〉

本文目次

序

例言

I	調査に至る経過	2
II	野外調査方法と室内整理	3
1	野外調査	3
2	室内整理	6
III	遺跡の位置と環境	11
1	遺跡の位置	11
2	地理的環境	11
3	地形・地質概観	12
4	周辺の遺跡	15
5	遺跡周辺の微地形と基本層序	19
IV	検出された遺構と遺物	41
1	竪穴住居跡	41
	(1) 縄文時代の竪穴住居跡	41
	(2) 平安時代の竪穴住居跡	395

---

〈分冊2 掲載内容〉

- 2 土坑
- 3 陥し穴
- 4 炉跡
- 5 土器埋設遺構
- 6 焼土遺構
- 7 遺構外出土遺物

V まとめ

付篇 分析・鑑定・同定報告

〈分冊3 掲載内容〉

- 写真図版
- 遺跡全景・遺構
- 遺物

## 図 版 目 次

第 1 図	遺跡の位置	1	第 69・70 図	WC7f 住居跡・出土遺物	111
第 2 図	計測位置・部位名称	10	第 71・72 図	WC8f 住居跡・出土遺物	113
第 3 図	地形分類図	13	第 73・74 図	WC8g 住居跡・出土遺物	115
第 4 図	遺跡周辺の表層地質図	14	第 75 図	WC8j・WC9j 住居跡	118
第 5 図	周辺の遺跡	17	第 76 図	WC8j・WC9j 住居跡出土遺物	119
第 6 図	調査区各地点の層序	24	第 77・78 図	WC9f 住居跡・出土遺物	121
第 7 図	周辺の地形と調査グリッド配置図	25	第 79 図	WC9i-3・WC9i-4 住居跡	123
第 8 図	調査区画図と遺構配置部分図の位置	27	第 80-84 図	WC9i-3 住居跡出土遺物	124
第 9-13 図	遺構配置部分図 1-5	29	第 85・86 図	WC9i-4 住居跡出土遺物	129
第 14-17 図	WD8b 住居跡・出土遺物	43	第 87-89 図	WC9j-2 住居跡・出土遺物	134
第 18-21 図	WD9c 住居跡・出土遺物	46	第 90-92 図	WC0g 住居跡・出土遺物	138
第 22-25 図	WD0c 住居跡・出土遺物	53	第 93 図	WC0g-2 住居跡・出土遺物	142
第 26 図	VD0f 住居跡・出土遺物	57	第 94-97 図	WC0g-3 住居跡・出土遺物	143
第 27-29 図	VD1c 住居跡・出土遺物	59	第 98 図	WC0h・WC0h-2・WC1h-2 住居跡	148
第 30-32 図	VD2c 住居跡・出土遺物	63	第 99 図	WC0h・WC0h-2 住居跡出土遺物	149
第 33 図	VD2d 住居跡・出土遺物	67	第 100 図	WD1d・WD1d-2・WD1d-3 住居跡	151
第 34-35 図	WC2g 住居跡・出土遺物	68	第 101 図	WD1d・WD1d-3 住居跡出土遺物	153
第 36 図	WC2g-2 住居跡	71	第 102 図	WD1e 住居跡	154
第 37-38 図	WC3h 住居跡・出土遺物	72	第 103 図	WD1g・WD1g-2 住居跡	157
第 39 図	WD0g 住居跡・出土遺物	75	第 104-108 図	WD1g 住居跡出土遺物	158
第 40-41 図	WD5f 住居跡・出土遺物	76	第 109 図	WD1g-2 住居跡出土遺物	163
第 42-45 図	WD7g 住居跡・出土遺物	78	第 110・111 図	WD2f 住居跡・出土遺物	164
第 46-49 図	WD8e 住居跡・出土遺物	83	第 112 図	WD2h・WD2h-3 住居跡	167
第 50-51 図	WD8h 住居跡・出土遺物	87	第 113 図	WD2h 住居跡出土遺物	168
第 52-53 図	WD0g 住居跡・出土遺物	90	第 114 図	WD2h-2 住居跡	170
第 54-56 図	WD0h 住居跡・出土遺物	93	第 115 図	WD3g 住居跡・出土遺物	172
第 57-59 図	WD0i 住居跡・出土遺物	97	第 116 図	WD3g-2 住居跡・出土遺物	174
第 60 図	WC3g 住居跡・出土遺物	100	第 117 図	WD3g-3・WD3g-4 住居跡	175
第 61-62 図	WC6f 住居跡・出土遺物	102	第 118 図	WD3g-3 住居跡出土遺物(1)	176
第 63-64 図	WC6g 住居跡・出土遺物	104	第 119 図	WD1g-埋没跡出土遺物・WD1g-埋没跡出土遺物	177
第 65-68 図	WC6h 住居跡・出土遺物	107	第 120・121 図	WD3h 住居跡・出土遺物	180



第 122 図	WD 3 h - 2 住居跡	.....182	第 166 図	WD 8 i · WD 8 i - 2 住居跡	.....244
第 123 ~ 126 図	WD 4 f 住居跡 · 出土遺物	.....185	第 167 図	WD 8 i · WD 8 i - 2 住居跡出土遺物	.....245
第 127 図	WD 4 f - 2 住居跡 · 出土遺物	.....190	第 168 図	WD 8 i - 3 住居跡 · 出土遺物	.....247
第 128 図	WD 4 f - 3 住居跡	.....191	第 169 図	WD 9 c · WD 9 c - 2 住居跡	.....249
第 129 · 130 図	WD 4 h 住居跡 · 出土遺物	.....192	第 170 · 171 図	WD 9 c 住居跡出土遺物)	.....251
第 131 図	WD 4 h - 2 · WD 4 h - 3 住居跡	.....195	第 172 ~ 174 図	WD 9 c - 2 住居跡出土遺物	.....254
第 132 図	WD 4 h - 2 · WD 4 h - 3 住居跡出土遺物	.....196	第 175 図	WD 9 f 住居跡出土遺物	.....257
第 133 図	WD 4 h - 4 住居跡 · 出土遺物	.....198	第 176 ~ 179 図	WD 0 b 住居跡 · 出土遺物	.....258
第 134 図	WD 4 i 住居跡	.....200	第 180 図	WD 0 b - 2 · WD 0 b - 3 · WD 0 b - 4 住居跡	.....263
第 135 図	WD 5 g - 2 住居跡 · 出土遺物	.....201	第 181 図	WD 0 b - 2 · WD 0 b - 3 · WD 0 b - 4 住居跡出土遺物	.....265
第 136 図	WD 5 g ~ 6 g グリット遺構群重複関係	.....202	第 182 · 183 図	WD 0 h 住居跡 · 出土遺物	.....267
第 137 図	WD 5 g - 3 住居跡 · 出土遺物	.....203	第 184 図	WC 1 g 住居跡 · 出土遺物	.....270
第 138 図	WD 5 h 住居跡 · 出土遺物	.....205	第 185 図	WC 1 g - 2 住居跡 · 出土遺物	.....271
第 139 · 140 図	WD 5 i 住居跡 · 出土遺物	.....206	第 186 図	WC 1 h 住居跡 · 出土遺物	.....273
第 141 図	WD 4 h ~ 5 i グリット遺構群重複関係	.....208	第 187 図	WC 1 h - 2 住居跡出土遺物	.....274
第 142 図	WD 5 i - 2 住居跡 · 出土遺物	.....210	第 188 図	WC 2 h 住居跡 · 出土遺物	.....276
第 143 図	WD 5 i - 3 住居跡 · 出土物	.....211	第 189 ~ 191 図	WC 2 j 住居跡 · 出土遺物	.....278
第 144 · 145 図	WD 6 f 住居跡 · 出土遺物	.....212	第 192 図	WC 3 f 住居跡 · 出土遺物	.....282
第 146 · 147 図	WD 6 g 住居跡 · 出土遺物	.....215	第 193 · 194 図	WD 2 g 住居跡 · 出土遺物	.....283
第 148 図	WD 6 g - 2 住居跡 · 出土遺物	.....218	第 195 図	WD 0 i 住居跡 · 出土遺物	.....287
第 149 図	WD 6 g - 3 住居跡 · 出土遺物	.....220	第 196 図	WE 7 a 住居跡	.....288
第 150 図	WD 6 g - 4 住居跡 · 出土遺物	.....221	第 197 図	WE 9 b 住居跡	.....289
第 151 図	WD 6 h 住居跡 · 出土遺物	.....223	第 198 ~ 200 図	WE 0 a 住居跡 · 出土遺物	.....292
第 152 図	WD 6 h - 2 · WD 7 i 住居跡	.....225	第 201 ~ 203 図	IX D 1 e 住居跡 · 出土遺物	.....295
第 153 ~ 155 図	WD 6 h - 2 住居跡出土遺物	.....227	第 204 図	IX D 1 h 住居跡	.....296
第 156 図	WD 6 i 住居跡 · 出土遺物	.....230	第 205 図	IX D 2 g · IX D 3 g · IX D 4 g 住居跡	.....299
第 157 · 158 図	WD 7 g 住居跡 · 出土遺物	.....231	第 206 図	IX D 2 g 住居跡出土遺物	.....301
第 159 図	WD 7 g - 2 住居跡 · 出土遺物	.....234	第 207 図	IX D 2 g · IX D 2 h · IX D 3 h · IX D 3 h - 1 住居跡	.....303
第 160 図	WD 7 h 住居跡 · 出土遺物	.....235	第 208 図	IX D 2 h 住居跡出土遺物	.....304
第 161 図	WD 7 i 住居跡出土遺物	.....236	第 209 ~ 213 図	IX D 3 c 住居跡 · 出土遺物	.....306
第 162 ~ 164 図	WD 8 c 住居跡 · 出土遺物	.....238	第 214 図	IX D 3 g 住居跡出土遺物	.....312
第 165 図	WD 8 h 住居跡 · 出土遺物	.....242	第 215 図	IX D 3 h 住居跡出土遺物	.....313

第 216 ~ 223 図	ⅩD 3 j 住居跡・出土遺物……………315	第 255 図	ⅩD 9 g 住居跡・出土遺物……………370
第 224 図	ⅩD 4 d 住居跡・出土遺物……………325	第 256 図	ⅩD 9 g - 2 住居跡・出土遺物……371
第 225 図	ⅩD 4 f 住居跡・出土遺物……………326	第 257 図	ⅩD 9 h 住居跡……………372
第 226 図	ⅩD 4 g 住居跡出土遺物……………328	第 258 図	ⅩD 0 f・ⅩD 0 f - 2 住居跡・出土遺物…374
第 227 ~ 231 図	ⅩD 4 g - 2 住居跡・出土遺物……330	第 259 図	ⅩE 2 b 住居跡・出土遺物……………375
第 232 ~ 233 図	ⅩD 4 g - 3 住居跡・出土遺物……335	第 260 図	ⅩE 5 a 住居跡……………377
第 234 図	ⅩD 4 h・ⅩD 4 h - 2・ⅩD 5 h・ⅩD 5 i 住居跡…339	第 261 図	ⅩE 6 b 住居跡・出土遺物……………378
第 235 ~ 236 図	ⅩD 4 h 住居跡出土遺物……………341	第 262 図	ⅩD 1 g・ⅩD 1 g - 2・ⅩD 1 g - 3 住居跡…380
第 237 図	ⅩD 5 c 住居跡・出土遺物……………343	第 263 図	ⅩD 1 g・ⅩD 1 g - 2 住居跡出土遺物 ……381
第 238 図	ⅩD 5 g・ⅩD 5 g - 2 住居跡……345	第 264 図	ⅩD 1 j・ⅩD 1 j - 2 住居跡・出土遺物…384
第 239 図	ⅩD 5 g・ⅩD 5 g - 2 住居跡出土遺物……346	第 265 図	ⅩD 2 i 住居跡……………387
第 240 ~ 242 図	ⅩD 5 i 住居跡・出土遺物……………348	第 266 図	ⅩD 3 h 住居跡……………387
第 243 ~ 244 図	ⅩD 6 f 住居跡・出土遺物……………353	第 267 図	ⅩD 3 i 住居跡……………389
第 245 図	ⅩD 7 j 住居跡……………356	第 268 図	ⅩD 4 f 住居跡・出土遺物……………389
第 246 図	ⅩD 8 f 住居跡・出土遺物……………358	第 269 ~ 270 図	ⅩD 4 g 住居跡・出土遺物……………390
第 247 図	ⅩD 8 f - 2 住居跡……………359	第 271 図	ⅩD 6 g 住居跡……………392
第 248 図	ⅩD 8 g・ⅩD 8 g - 4・ⅩD 8 g - 5 住居跡…360	第 272 図	ⅩD 9 e 住居跡・出土遺物……………393
第 249 図	ⅩD 8 g 住居跡出土遺物……………361	第 273 ~ 281 図	ⅩIC 6 b 住居跡・出土遺物……………396
第 250 図	ⅩD 8 g - 2 住居跡・出土遺物……363	第 282 ~ 284 図	ⅩIC 9 a 住居跡・出土遺物……………406
第 251 図	ⅩD 8 g - 3 住居跡・出土遺物……364	第 285 ~ 288 図	ⅩIE 2 b 住居跡・出土遺物……………410
第 252 ~ 253 図	ⅩD 8 i 住居跡・出土遺物……………365	第 289 図	ⅩIE 2 c 住居跡・出土遺物……………415
第 254 図	ⅩD 9 f・ⅩD 9 f - 2 住居跡・出土遺物…368		

## 表 目 次

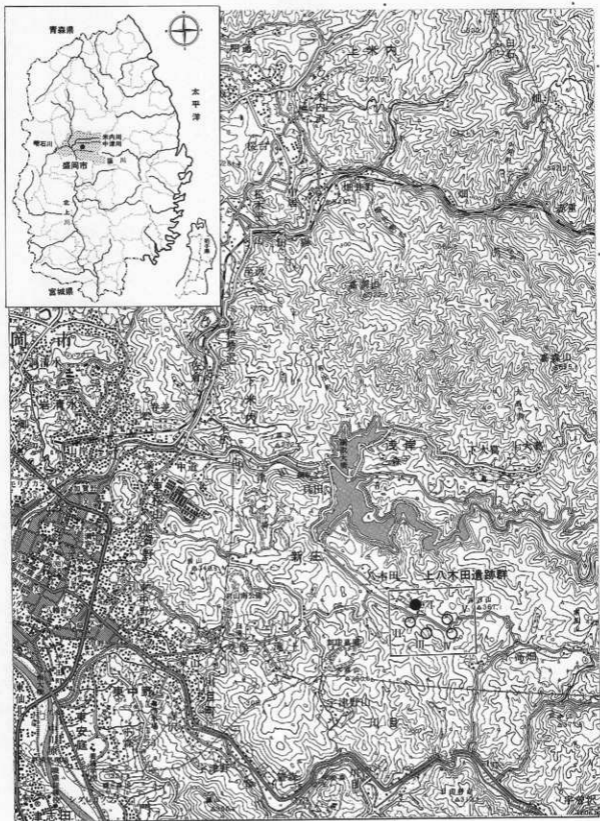
第 1 表	各測点のⅩ系座標と標高値……………4	第 4・5 表	遺構名一覧(1)・(2)……………39
第 2 表	時期別遺跡数……………15	第 6 表	検出遺構数一覧……………41
第 3 表	周辺の遺跡一覧……………18		

## 報告書抄録

ふりがな	かみやがたいちいせきほくつちようちほうこくしよ
書名	上八木田Ⅰ遺跡発掘調査報告書
副書名	新盛岡競馬場建設関連遺跡発掘調査
巻次	
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ番号	第227集
編著者名	千葉孝雄
編集機関	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
所在地	〒020 岩手県盛岡市飯岡11-185 TEL.0196-38-9001
発行年月日	西暦1995年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
かみやがたいち 上八木田Ⅰ	いわてけん 岩手県盛岡市 かみやがたいち 上八木田33-1	03201		39度 41分 34秒	141度 13分 24秒	19910408～ 19911115	22400	新盛岡競馬場 建設に伴う 緊急発掘調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
上八木田Ⅰ	集落	縄文時代 前期前葉～ 中期初葉	竪穴住居跡153棟	縄文時代前期大木式 土器(大木4～6) 剥片石器、礫石器	山地斜面に形成された 集落 地域色濃い前期大木式 土器
		縄文時代 中期末葉	竪穴住居跡6棟	石棒	規格性を有する住居跡
		平安時代	竪穴住居跡4棟	炭化系	



第1図 遺跡の位置 (国土地理院 5万分の1 盛岡の一部使用)

## I 調査に至る経過

新盛岡競馬場の建設構想は、現在の競馬場周辺が住宅地となったことによる競馬開催時の交通環境の悪化や騒音の問題化、施設の老朽化などの解消のため昭和50年に提案され、昭和58年3月に盛岡市新庄字八木田地区が計画予定地と決定された。計画地の総面積は129ヘクタールであり、建設工事は昭和63年から平成7年までの8カ年計画である。

事業の着手にあたり、昭和63年に岩手県教育委員会と盛岡市教育委員会が遺跡の分布調査を実施し、同事業に伴う遺跡として上八木田Ⅰ～Ⅴ遺跡が関わることが判明した。平成元年には盛岡市教育委員会が上八木田Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ遺跡の試掘調査を実施し、縄文時代や古代の遺構と遺物包含層を確認した。その結果をもとに、岩手県教育委員会は岩手県競馬組合と協議を行い、上八木田Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ遺跡については平成2年度に、同Ⅱ遺跡については平成3年度に発掘調査をすることとした。

平成2年、当センターは上記3遺跡の本調査を実施したがそれと並行して、岩手県教育委員会は上八木田Ⅰ遺跡の発掘調査範囲の確認調査を実施した。その結果は同報告書<sup>(注)</sup>に詳しいが、競馬組合との協議を経て22,400㎡を対象に本調査をすることとした。この結果、上八木田Ⅰ遺跡の発掘調査を平成3年度財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターの事業として、Ⅱ遺跡とともに実施することとし、平成3年4月1日付けて岩手県競馬組合と文化振興事業団が委託契約を締結し、本遺跡の調査に着手した。

(注)岩手県教育委員会 1991：岩手県内遺跡群詳細分布調査報告書Ⅱ「岩手県文化財調査報告書第90集」

## II 野外調査と室内整理

### 1. 野外調査

#### (1) 調査区画の設定 (第8図)

上八木田遺跡群(上八木田I～V遺跡の総称として用いる。以下同じ。)の調査に際し、調査対象区域を網羅した共通の座標を用いることとし、平面直角座標第X系にのせて区画を設定した。座標原点は第X系 $X = -33,000.000\text{m}$ 、 $Y = 33,000.000\text{m}$ である。この原点から東方および南方へ一辺50mの大区画を設定し、この一辺をそれぞれ10等分して5m毎の小区画とした。区画名は、大区画に対しては東方向へローマ数字を、南方方向へ大文字アルファベットを順に与え、小区画に対しては各大区画内で東方向へアラビア数字を1～9・0まで、南方方向へ小文字アルファベットをa～jまで順に与えた。これらの組み合わせにより、大区画名はIA、II B、小区画名は大区画名を冠してIA1a、II B2bのように表した。上記のようにして設定された大区画(50×50m)のうち、上八木田I遺跡に関わるものは

ND、VC、VD、WC、WD、WB、WC、WD、WE、VC、WD、VE

XC、XD、XE、XI B、XIC、XID、XIE、XII D

の22区画である。

区画は調査計画立案・進捗状況の把握・粗掘り作業区の設定・遺物の取り上げ・遺構の命名などにおいて多く用いられた。

測量のための座標は1m単位とし、上記原点を起点として南へS1・S2・…、東へE1・E2・…、のように原点から離れるにしたがって増えていく。

調査に際し設定した基準点の座標値(X、Y)および標高は次のとおりである。

基準点7 (S150 E150)  $X = -34,050.000\text{m}$   $Y = 33,150.000\text{m}$   $H = 256.554\text{m}$

基準点8 (S150 E250)  $X = -34,050.000\text{m}$   $Y = 33,250.000\text{m}$   $H = 263.447\text{m}$

基準点9 (S200 E300)  $X = -34,100.000\text{m}$   $Y = 33,350.000\text{m}$   $H = 260.826\text{m}$

基準点10 (S200 E400)  $X = -34,100.000\text{m}$   $Y = 33,400.000\text{m}$   $H = 265.996\text{m}$

遺構実測の精度を高めるために、測点を要所に設けた。地点とその座標値・標高値は表に示した(第1表)。これらとは別に、調査範囲が広いことから、大まかな位置や区域を表すための名称が必要とされた。調査区域の連続・不連続と地形を考慮して、便宜的に次のように呼ぶことにした。

A区…調査区西側の独立した区域

B区…A区とC区間の区域

C区…調査区東側の独立した区域

点名	X	Y	H
No. 1	-34,050.000	+33,175.000	260.531
No. 2	-34,050.000	+33,200.000	263.239
No. 3	-34,050.000	+33,225.000	263.603
No. 4	-34,075.000	+33,200.000	259.401
No. 5	-34,075.000	+33,225.000	260.534
No. 6	-34,050.000	+33,800.000	267.962
No. 7	-34,050.000	+33,325.000	276.526
No. 8	-34,050.000	+33,350.000	272.413
No. 9	-34,050.000	+33,375.000	268.970
No. 10	-34,050.000	+33,400.000	270.082
No. 11	-34,025.000	+33,325.000	272.831
No. 12	-34,025.000	+33,350.000	276.524
No. 13	-34,025.000	+33,375.000	273.394
No. 14	-34,025.000	+33,400.000	272.049
No. 15	-34,075.000	+33,300.000	263.530
No. 16	-34,075.000	+33,325.000	267.913
No. 17	-34,075.000	+33,350.000	268.189
No. 18	-34,075.000	+33,375.000	266.329
No. 19	-34,075.000	+33,400.000	269.814

点名	X	Y	H
No. 20	-34,075.000	+33,425.000	272.548
No. 21	-34,075.000	+33,450.000	274.299
No. 22	-34,075.000	+33,475.000	273.759
No. 23	-34,075.000	+33,500.000	272.805
No. 24	-34,100.000	+33,325.000	261.755
No. 25	-34,100.000	+33,350.000	263.890
No. 26	-34,100.000	+33,375.000	264.505
No. 27	-34,100.000	+33,425.000	267.674
No. 28	-34,100.000	+33,450.000	268.422
No. 29	-34,100.000	+33,475.000	268.562
No. 30	-34,100.000	+33,500.000	270.709
No. 31	-34,125.000	+33,350.000	261.037
No. 32	-34,125.000	+33,375.000	261.156
No. 33	-34,125.000	+33,400.000	264.197
No. 34	-34,125.000	+33,475.000	268.354
No. 35	-34,125.000	+33,500.000	271.680
No. 36	-34,000.000	+33,525.000	283.109
No. 37	-34,025.000	+33,525.000	279.009

第1表 各測点のX系座標と評高値

さらに、B区に2筋ある尾根について、東側のそれとその周辺をB区東尾根、西側のそれとその周辺をB区西尾根または単にそれぞれ東尾根、西尾根と呼んだ。地形との関わりについては後述する。

## (2) 調査体制とその運営

面積が2万㎡以上におよぶこの調査に対し、調査員は都合11名が関わり作業員登録は最大で157名を数えた。調査を効率的に進めかつ可能な限り情報を収集し記録するために次のような体制を整えた。

〈調査員に関して〉2名で1パーティーを組み、概ね大区画毎に担当することとした。このパーティーは固定的なものではなく、調査の進行をスムーズに進めるために時には1名または3名というように弾力的に運営された。1名は担当区画を持たずに調査の進行計画を立て進捗状

況を把握し全体を統括した。統括責任者はまた競馬組合・文化課・その他との渉外を受け持つほか、遺構の認定の他各パーティーとの整合性や調査法にかかわる問題点に常に心を配った。〈作業員に関して〉調査員の各パーティーに対し20名程度の人数を配属し、各々のパーティーの中で粗掘り、精査の作業を分担した。実測については各パーティーから独立して2人1組の実測班が編成され、常時5組程度が各パーティーの調査進行に合わせて統括責任者によって配属された。実測班は図面作成の他、遺り方設定・測量杭の設置、遺物の取り上げも行った。また、写真撮影のためのローリングタワーの組み立て・分解についても実測班同様特別チームが編成されたが、普段は各パーティーの仕事に従事した。

〈記録他〉調査過程および結果についての所見は当センターで作成しているフィールドカードを用いて記録した。観察事項のみならず疑問や不明な点・仮説など調査者の思考過程をも盛るよう努めた。浮かび上がった疑問点・問題点はその日のうちに野外調査終了後のミーティングで話し合うようにした。ミーティングでは他に各パーティーから当日の進捗状況、遺構の登録、翌日の予定、実測班の要不要などの報告・要請および全体的な打ち合わせを行った。

### (3) 粗掘りと遺構検出

区画を設定したあと、前年度に試掘調査をしたトレンチをクリーニングして検出遺構と遺物の確認、盛土内の遺物のとりあげの作業を行った。試掘はすべての大区画で実施されており、トレンチの土層断面観察をしながら粗掘りと遺構検出を行った。調査は概ね、A区とB区西尾根については順次西から東に向かって大区画・小区画毎に進め、B区東尾根とC区については逆に東から西に向かって同様に進めた。

前年度の試掘トレンチおよび本調査に際して入れたトレンチの状況を観察し、検出面までの土量や遺物包含の有無を判断しながら、一部は重機を用いることもあったが、多くは人力によって粗掘りと遺構の検出を行った。

A区については、全調査区の終了とは別に、当該区の調査が終了した6月3日時点で委託者に引き渡され、工事に着手されている。

### (4) 遺構の名称

遺構の名称は、ND8c住居跡・VD2c土坑などのように、その位置する小区画名と遺構種類名を組み合わせて用いた。複数の同種遺構が検出された場合または重複遺構の場合は、WC9i-3住居跡・WD9b-2土坑などのように小区画の次に順次枝番号をつけた。遺構が複数の小区画にまたがる場合は、その大部分を占める小区画名を用いるようにしたが、精査の段階で予想外に遺構が広がることもあり厳密なものとは言えない。

### (5) 精査

精査は、通常の住居跡については四分法、土坑・陥し穴・焼土遺構・土器埋設遺構について



は二分法を原則とし、遺構の性格・遺存状況によって適宜方法を変えて行った。四分法によった場合、分割区北西四半部をQ1とし時計と反対回りに順次Q2～Q4と呼ぶことにした。遺物は埋土内のもはこの分割区毎に、床面出土のものは地点・標高を実測図またはフィールドカードに記入して取り上げている。必要に応じ、埋土上部・埋土下部、床面直上などの区別も行った。しかし住居跡が斜面において検出される場合は遺存状況が悪く、原則通りの方法が取れなかったことも多い。

#### (6) 実測と写真

実測は、遺構の密集度の高い区域は遺り方実測を用いたが、多くは簡易遺り方を採用した。実測図は20分の1を基本に、焼土遺構やカマドの断ち割り断面などでは必要に応じて10分の1で行った。

写真撮影は調査員が行った。遺構の平面・埋土断面・遺物の出土状況など、情報の量・質に応じて可能な限り写真による記録を行った。使用したカメラおよびフィルムは、モノクロームが35mm判と6×7cm判各1台、カラーズライドが35mm判を1組とし、最大4組を使用した。航空写真は、A区の調査終了時点でA区のみを、また全調査区の調査終了時点でA区以外を撮影している。

## 2. 室内整理

### (1) 作業経過

遺物の洗浄や図面合成などの一部は野外調査時の雨天の場合に現場で行ったが、遺物整理・記録整理の大部分は野外調査終了後に行い、おおよそ次の様な内容で行った。

第一次（平成3年11月～平成4年3年）

(遺物整理) 石器…洗浄、注記、登録、実測の一部、写真撮影

土器…洗浄、仕分け・注記、接合・復元の一部

鉄器…写真撮影

(鑑定他) 石器の石質鑑定、炭化材の樹種同定、火山灰鑑定委託

野外調査で採取した埋土などのフローティング作業と検出された  
堅果類の鑑定委託、鉄器の鑑定と保存処理の委託

(遺構図面整理) 点検・合成、第二原図作成、図面台帳の作成

(遺構観察記録の整理) フィールドカードの整理、遺構観察表の作成

(写真整理) 野外調査時の写真の整理、遺構写真台帳の作成  
遺構写真図版の一部作成

第二次（平成4年4月～平成6年3年）

(遺物整理) 石器…実測、トレース  
土器…接合・復元、登録、実測、写真撮影、トレース  
鉄器…実測、写真撮影

(鑑定他) 炭化糸の鑑定と保存処理委託、土器胎土分析委託

(遺構図面整理) 遺構実測図トレース、図版作成

(写真整理) 遺構図版の作成、遺物写真図版の作成、遺物台帳の作成

(報告書作成) 原稿執筆、割り付け、編集、

これらの作業のうち、接合・復元、実測・トレースなどの具体的作業は、調査員の計画と指示のもとに当センターの作業員があたった。

## (2) 整理方法

### <遺構登録と報告書への掲載>

野外調査時に登録した遺構のうち、住居跡として登録した遺構の一部は、室内整理段階で土坑として扱った方が良いと判断された。それについては遺構名を変更して報告してある。また同じく住居跡としたものでも、遺存状態が悪く土坑の可能性も否定できないものがあった。これらについては野外調査時点の名称を踏襲し、事実記載においてその旨説明してある。野外調査において精査の結果、登録が抹消された遺構がある。このうち枝番号をつけた遺構名についてはその番号を順次繰り上げるべきであるが、整理の都合上欠番と同様の扱いとし、野外調査時点の遺構名をそのまま用いている。

重複遺構については、次のように扱った。重複には、壁や床の一部のみ重複する部分重複と、同一床面の中で2棟以上の重複を想定できる完全重複とがある。それぞれに時期や構築主体者を異にする場合と、同一主体者による建替え・拡張・縮小の場合とが考えられるが、その判断は容易ではない。本報告書では、完全にあれ部分であれ、また建替え・拡張・縮小もこれらをすべて重複の概念で把握し、原則的に枝番号を付けて複数の住居として扱い、集計上もそのように処理してある。

遺構の事実記載に当たっては、観察項目にしたがって文章で記述したが、焼土遺構については表形式で表した。

### <遺物登録と報告書への掲載>

土器の登録については接合・復元の作業後に報告書に掲載するものを選び出しそれにのみ番号を付し台帳に記載した。完形品・またはそれに準じて器形・全体の様相または地文が分かるものは遺構内外を問わず登録した。

破片資料では、遺構内土器は、遺構の時期の判断資料となるものや、特徴的な文様を有するものを取り上げた。小破片の場合や別個体でも同種の場合には不掲載とした。地文のみの胴部破

片についても取り上げないことが多かったので、遺物図版に個体数は反映していない。遺構内土器の出土量について、個体数・破片数などをカウントする作業はできなかったため、目安として可能な限り重量を示すようにした。

遺構外土器については特徴を有する口縁部破片を主とし、胴部破片は分類上必要なものを取り上げた。

石器については、剥片石器はフレーク・チップ類を除き、二次的な剝離を有するものはすべて登録した。二次的な加工がされていても道具と認め難いものはリタッチドフレーク（Rフレと略称する）、二次的な剝離が微小なもので加工とは認め難く使用痕と考えられるものはユーティライズドフレーク（Uフレと略称する）という名称をつけて台帳に記載した。礫石器は、使用痕を有するもの、使用痕は認められないが他から本遺跡に持ち込まれたと考えられるものを登録した。

登録した遺構内出土石器はRフレ・Uフレを除きその全てを報告書に掲載することを原則とした。ただし大幅な欠損品はその限りではない。

遺構外石器については、点数が膨大であり全てを取り上げることはできなかったため、任意の分類基準を設け、同一分類に属するもののうち完形品を中心に代表的なものを図化した。図化できなかった遺構外石器（Rフレ・Uフレを除く）については、整理時点の番号を付し、分類・法量・石質などを表で示した。図示した点数は、各分類に属する出土点数の割合を反映するものではない。

#### <図版掲載順>

遺構図版は、本文と共に種類別にして、大調査区毎に北西から南東の順に掲載してある。分番3の写真図版も同様である。遺物図版は、遺構内出土遺物については住居跡・炉跡・土器埋設遺構の場合は原則として当該遺構の次に掲げ、土坑・陥し穴・焼土遺構については遺構図版をまとめて掲載した後、遺構種別毎に一括して掲げた。遺物については整理時点の番号（整理番号）とは別に、遺構内外や種別に関係なく掲載順に1からの通し番号（報告書番号）をつけている。写真図版の番号はこの報告書番号と一致する。

#### <縮尺>

遺構図版は原則として50分の1で表し、必要によっては大縮尺または小縮尺を用いた。各図版にスケールで示した。

遺物については、土器実測図は4分の1、拓影図は3分の1、剥片石器は2分の1、礫石器は3分の1を原則としたが一部異なるものもある。各図版にスケールで示した。

写真図版については、遺構・遺物とも縮尺不定である。

#### <図版>

遺構は、原則として北（公共座標による）を上とし、位置を示すための測量座標を示してあ

る。重複遺構の新旧関係の表現は、その様態が一律ではないことから統一されてはいない。重複遺構または隣接遺構名を図版中に示す場合には、煩雑さを避ける目的で正式遺構名ではなく省略した形で掲げた。住居跡は「住」、土坑は「坑」、陥し穴は「陥」、焼土遺構は「焼」と遺構種別の頭文字のみを用いた。例えば、ⅣD8b住居跡はⅣD8b住、ⅤD9b土坑はⅤD9b坑のごとくである。

使用したスクリーントーンは凡例に示した通りである。単位は、長さはcm、重さはgである。

#### <計測値他>

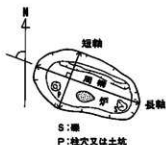
遺構・遺物の部位名称および計測位置は図に示した(第2図)。計測値は土器・石器とも推定値は[ ]、残存値は( )で示した。単位は、長さはcm、重さはgである。

#### <土層注記>

土色は農林水産省農林水産技術会議監修の「新版標準土色帖」(1989年版)による。

〈規模〉長軸：開口部の最大の値をとる位置で計測。

短軸：長軸に直交して最大の値をとる位置で計測。



〈壁高〉東西南北の各壁の最大

の値をとる位置で計測。



遺存状態が悪い場合は、長軸・短軸の計測位置で計測。

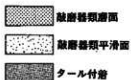
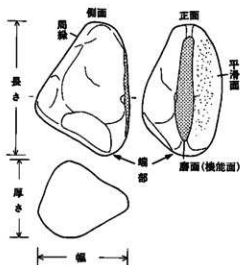
〈深さ〉最大の値をとる位置で計測。



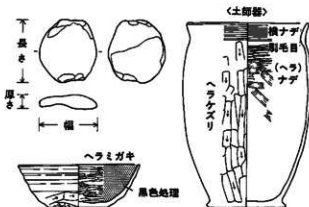
〈石器〉



\* 厚さは、剥片石器の場合、凸形打痕を除いて、主平面と直交する最大値を示した。



\* 他に用いる場合は、その部図版内に注記した。



第2図 計測位置・部位名称

### III 遺跡の位置と環境

#### 1. 遺跡の位置 (第1図)

本遺跡の所在する盛岡市は、岩手県の中央部に位置し、北は岩手郡滝沢村・玉山村、東は下閉伊郡岩泉町・川井村、南は紫波郡矢巾町・紫波町、稗貫郡大迫町、西は岩手郡雫石町に接する。本遺跡は盛岡市街地の東方、盛岡市役所からの距離約5.5km、北上山地の西縁にあたり、北緯39°41'、東経141°13'付近に位置する。

本遺跡一帯は「八木田遺跡」として周知の遺跡であり、縄文土器(早期)および弥生土器を出土するとされている(岩手県史第1巻 1961)。現在は、八木田遺跡、下八木田遺跡、上八木田Ⅰ～Ⅴ遺跡としてそれぞれ登録されている。これらの各遺跡は八木田沢に開析された狭隘な谷底平野の縁辺に分布する。上八木田Ⅰ遺跡は、同沢の北側にあたり北から延びる尾根の南斜面を占地する。沢を挟んで南側には上八木田Ⅱ、Ⅲ遺跡が、また沢の上流部には上八木田Ⅳ、Ⅴ遺跡が所在する。

本遺跡の標高は260～280m前後で、盛岡市街地との比高は135～155mである。現況は主に尾根部は山林、麓部は畑地であり、ほか一部は宅地等である。

#### 2. 地理的環境

盛岡市は岩手県の県庁所在地であり、文化・経済・行政等の中心地である。近世南部氏の城下町として発展し、明治以降旧城下を核に周辺の町村を合併して市域を広げてきた。最近都南村を加え、面積489.15km<sup>2</sup>、人口約28万3千人となり、東北地方北部の中核都市としての名実を備えつつある。行政区の範囲は、東は北上山地の分水嶺に達し、西は奥羽山脈の麓にかかる。市街地は両山地に挟まれた盛岡盆地に形成されており、標高は盛岡市役所付近で約126mである。

市域を東西に分割するように、東北地方最大の大河北上川が南流し、市街地の南寄りの位置で西から雫石川、東から中津川・築川を集めて水量を大きく増加させる。北上川から東側では毛無森の標高1,437mを筆頭に標高600m～900mの山体群が群在しており、中津川・築川等が開析した狭い谷底平野を中心として集落が点在する。交通網はこれらを繋ぎながら河川に沿って延びている。すなわち米内川に沿って東日本旅客鉄道山田線が、築川と並行して国道106号線(旧閉伊街道)が三陸海岸に至る。

年平均気温は10.5<sup>(注)</sup>と全体的には冷涼であるが、最高気温32.5°、最低気温-11.4°と寒暖の差が大きく盆地特有の特徴を示している。年間降水量は1454.5mmであるが、冬の降雪量はそれほど多くはない。

(注) 数値は「盛岡市統計資料」によるもので、人口は平成5年度、他は平成3年度の統計である。

### 3. 地形・地質概観 (第3・4図)

北上川西側は、第四紀の新岩手火山形成期およびそれ以前の火山砕屑物が火砕流となって台地を構成し、さらに北上川・平石川によって形成された河岸段丘や扇状地が広く発達し、平坦地・沖積平野が広範囲に形成されている。

これに比し東側は、西流する中津川・築川の営力は平坦地をほとんど作り出さず、北上川本流は著しく東に寄り北上山地山稜が近くまで迫っている。平坦地は、僅かに中津川が北上川に合流する地点の低位段丘でやや纏まってみられる程度であり、他は狭隘な中位段丘・谷底平野・崖線性扇状地などが、中津川・築川およびそれらの支流に沿って形成されるのみである。

北上山地は、主に先第三系の古期岩類を基盤とし、隆起準平原化作用と隆起の繰り返しによって形成された高度の異なる山体群で構成される。山地のほぼ中央付近を、北西から南東にかけて走る早池峰構造地帯によって、北部北上帯と南部北上帯に二分される。北部北上帯に属する山地は、外山山地と玉山山地である。外山山地は姫神岳の南西部に連なる高度700m～900mの中起伏山地である。玉山山地は高度400m以下の小起伏山地で、第四紀の侵食作用によるものと推定されている。南部北上帯は手代森山地がこれにあたる。高度は400m以下で小起伏山地部と中起伏山地部の双方で構成されている。

早池峰構造体に属する山地は、高森山地、朝島山地および建石山地である。本遺跡は、同構造体上により、標高560mの建石山を中心とする建石山地の範囲にある。小起伏山地にあたるが、中津川と米内川およびその支流によって開析されてやや起伏量は大きくなっている。

基盤岩は主に輝緑凝灰岩と泥岩からなり、これらが北西から南東方向に交互に筋状に走っている。一部には深成岩類の貫入がみられる。遺跡周辺の地形配列は、概ね北西から南東の方向性を示し、これは地質構造に規定されていると考えられている。

本遺跡は、建石山地を構成する深沢山(標高361m)から延びる尾根と、中津川の小支谷である八木田沢が開析した谷底平野との間に形成された、山麓緩斜面を中心とする山地縁辺に立地する。この地形面は最終氷期の周水河作用によって形成されたもので起伏量の大きい山地の全面でよく発達すると考えられている。本遺跡がのる斜面の成因もそれに該当するものと思われる。

#### 引用・参考文献

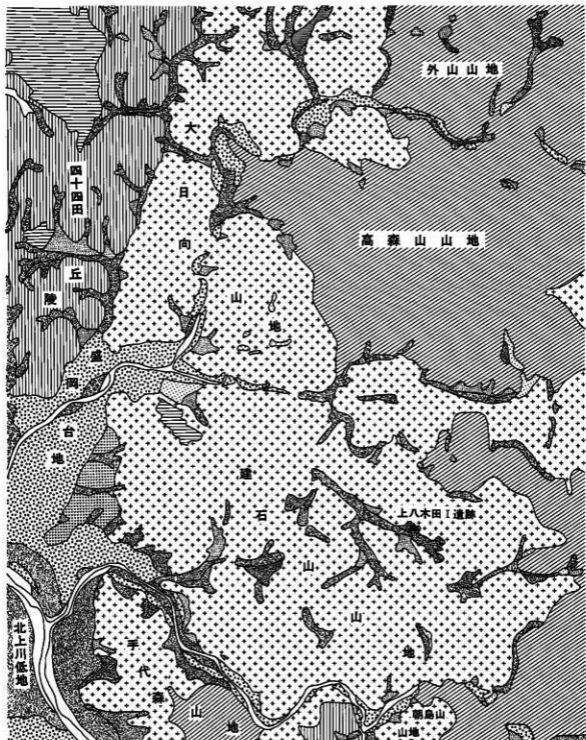
岩手県 1978: 『北上山系開発地域土地分類基本調査 盛岡』

岩埋文 1992: 『上八木田Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ遺跡発掘調査報告書』岩埋文報第 177集

岩埋文 1993: 『上八木田Ⅱ発掘調査報告書』岩埋文報第 194集

(岩埋文は、(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターの、

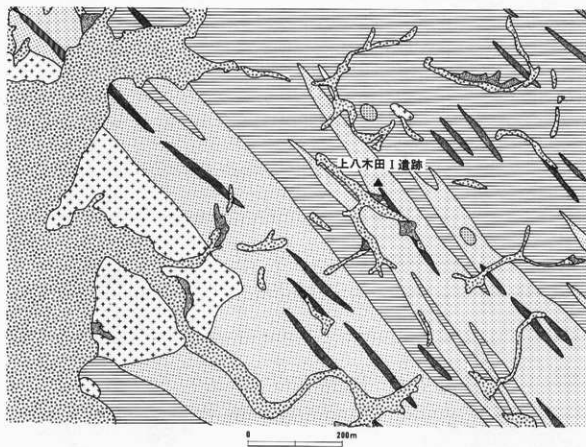
岩埋文報は、岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書の略称として用いた。以下同じ。)



(岩手県 1978「土地分類基本調査 盛岡」による)

第3図 地形分類図





(岩手県 1978「土地分類基本調査 盛岡」による)

第 4 図 遺跡周辺の表層地質図

#### 4. 周辺の遺跡 (第5図・第3表)

盛岡市に所在する遺跡は昭和61年版岩手県遺跡台帳で283、盛岡市教育委員会の遺跡地図(1989年版)では288を数える。ここでは全体を網羅することはできないので、本遺跡が位置する北上川東側を中心に図化した。

図幅の更に東側にも中津川、築川、およびその支流にそって遺跡が散在しているが、密集度は低い。図幅の西側には、雫石川の北岸盛岡台地に縄文時代草創期・早期を主体とした大新町遺跡、中期の拠点集落と想定される大館町遺跡が位置し、平安時代の集落跡も複合している。雫石川以南では沖積地が広範囲に形成され志波城をはじめ奈良時代から平安時代の遺跡が数多く分布している。山地の縁辺の緩斜面は縄文時代の遺跡が占地している。

第5図および第3表は、前掲岩手県遺跡台帳および盛岡市遺跡地図ほかを参考にして、縄文時代に属する遺跡に絞ってその位置と時期を示したものである。土器散布地、集落跡などの遺跡の性格については捨象してある。また一部に複数遺跡をまとめて示したものがあ

る。図幅の範囲内における時期別の遺跡数は第2表の通りである。収集した資料に限りがあり詳細が不明なものもあるが、おおよその傾向は把握できる。すなわち、縄文早期、前期と増加した遺跡数は、中期に急増してピークに達し、後期晩期と漸減傾向を示す。

時 期	早期	前期	中期	後期	晩期
遺跡数	13	18	47	38	25

(注)  
早期では、向館遺跡(18)から押型文土器が数点出土している。貝殻文の時期になると、松

第2表 時期別遺跡数

屋敷遺跡(1)で竪穴状遺構が検出され、近接して発見された焼土遺構は屋外炉である可能性が指摘されている。八木田遺跡群(70他)では物見台系の土器が出土しているが遺構は確認できていない。他には四十四田丘陵の南縁や中津川ぞいに遺跡が点在するが、近辺の河川からの比高がやや大きい場所を占地している。一本松遺跡(60)は貝殻文の他に縄文・縄文土器を出土している。「盛岡市史」によると八木田遺跡からも同様の土器が出土しているが、今回の調査では検出されなかった。

前期の遺跡は、米内川の小支谷である米内沢、中津川中流、および同川の小支谷である八木田沢など、標高200m～300mの山間部に位置するものが多いが、未調査のものが多く詳細は不明である。向館遺跡では、本遺跡のものに類似した前期の土器が出土しているが、遺構は検出されていない。

前期末から中期初頭の遺跡は、砂溜遺跡(93)など建石山地の西縁、北上低地に接する丘陵地にも進出し小山遺跡群と総称される。砂溜遺跡からは大型住居を含む3棟の住居跡が、仁反田遺跡(95)からは土坑群が数多く検出されている。これを居住域と貯蔵施設との場の使い分

けと見ることにについては、報告者は地形の特質から否定的である。最近調査されたほぼ同時期の西黒石野遺跡(117)は、北上川を西の臨む丘陵の西縁に位置する点で立地上の共通性がある。同遺跡は10棟の住居跡が直径40mの規模で環状に配置され、中央には広場を有するという環状集落跡である。

中期の遺跡は、米内川と中津川の合流地点付近の砂礫段丘と、米内沢が米内川に注いで作り出した谷底平野とその周辺の崖線性扇状地において急増する。遺跡の数のみならず、その規模においても大きく発展する。柿ノ木平遺跡(84)や上米内遺跡(19)、向館遺跡などがそれである。また、四十四田丘陵上の松屋敷遺跡も同時期の集落跡である。柿ノ木平遺跡の数多い住居はおおむね大木8b期のなかに収まるもので、集落が次期に継続されない点が特徴的である。

後期には、中期に出現した米内川・中津川の合流地点の砂礫段丘上の集落の多くが姿を消すほか、向館遺跡、上米内遺跡など継続して営まれる集落もその規模を大きく減ずる。因みに向館遺跡では中期の住居数10数棟に対し、後期の住居数は2棟であり、上米内遺跡でも同様の傾向がうかがえる。住居跡は前述の他に、川目A遺跡(113)や大葛遺跡(64)、上八木田Ⅲ遺跡(72)、同V遺跡(74)など山間部で検出されているのが特徴的である。一方、前記砂礫段丘は、落合遺跡(53)で墓塚群・配石遺構が検出され、土地利用の上でその役割を変化させている。

晩期にいたると篠川沿いの遺跡はほとんど姿を消すほか、疎密はあるものの全域的にその数を減じる。四十四田丘陵の西縁部と米内川流域にやや密集域がある。上米内遺跡では晩期の全時期を通じての住居跡・墓塚群が検出されている。

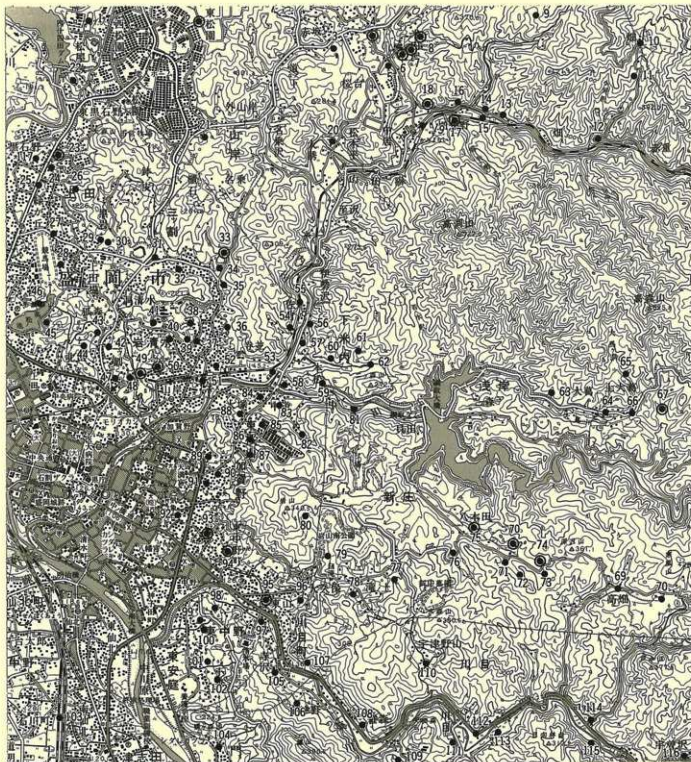
以上、時期をおって概観してきたが、このなかで上八木田Ⅰ遺跡を捉えることとする。本遺跡は前期の大集落跡として際立っているが、図に示した全域で遺跡数が増加する中期には本遺跡においても集落が営まれ、逆に減少傾向を示す後・晩期においては、本遺跡では晩期前葉および中葉のものがそれぞれ1遺構ずつあるに過ぎない。

また、前期に限れば、該期の18遺跡の内容について未詳なものが多いので断断はできないが、北上川東岸の丘陵上を占地する遺跡が末葉から中期初頭にかけての時期に属するのに対し、その前段階を主体とする本遺跡は山間地に位置するという特徴が浮かび上がる。

(注) 番号は第5図・第3表の遺跡番号である。なお、向館遺跡、上米内遺跡、松屋敷遺跡の調査報告書については現在整理中であり、その内容については担当者から教示を得た。

#### 引用・参考文献

- 岩手県教育委員会 1986:『岩手県遺跡台帳』  
草間 俊一 1951:『先史期』『盛岡市史 第1巻』 盛岡市  
小岩 末治 1960:『上古篇』『岩手県史 第1巻』 岩手県



●は縄文時代前期の遺跡

第5図 周辺の遺跡

番号	遺跡名	時期	備考
1	松尾塚	早期-中期	81. 古墳文書調査, 鳥羽市史調査
2	小内沢A-S	前期-中期	82. 古墳文書調査, 鳥羽市史調査
3	道の下入	前期-中期	S43. 古墳文書調査
4	道の下登	前期-中期	
5	和の沢B	前期-中期	
6	和の沢A	前期-後期	
7	下三沢	前期-後期	
8	上三沢	前期-後期	
9	川尻尾	中期-後期	
10	久戸	後期-中期	盛岡市史
11	大崎河原	後期	
12	久戸川	後期	
13	御	中期-後期	
14	西沢下	中期-後期	
15	沢尻	中期-後期	
16	止沢	中期-後期	
17	畑野野	前期-中期	盛岡市史
18	向原	早期-後期	81. 古墳文書調査, 中野市史調査
19	上之内	中期-後期	82. 古墳文書調査, 中野市史調査
20	松木平	中期-後期	82. 古墳文書調査, 中野市史調査
21	太平		
22	四ノ内田		
23	源行野	前期-後期-中期	S43-S47. 古墳文書調査
24	東石野	後期-中期	81. 古墳文書調査
25	西石野	後期-中期	
26	源行		
27	東坂ノ尾	S46, S42, S43	古墳文書調査
28	上川原	早期	S43. 古墳文書調査
29	宇登坂	中期-後期	
30	高田		
31	横川		81. 古墳文書調査
32	洞澤水	後期	
33	鹿ノ神	早期-後期	S37. 古墳文書調査, 遺物量少
34	新築塚	後期	盛岡市史
35	新築山口		
36	新築		
37	新前	早期	盛岡市史
38	イ多田塚		*
39	蓮下	前期-中期	
40	蓮上		
41	白木	S49-S51	古墳文書調査
42	久保原敷A		
43	船高塚		
44	金比羅前		
45	上田山	中期	
46	高田		
47	大原原敷		
48	鏡神沢	後期-後期	S41. 古墳文書調査
49	合原	早期-前期	盛岡市史
50	日向	早期-前期	
51	藤山田	後期	
52	本郷山		
53	原中	後期-後期	S27-S29. 古墳文書調査
54	高崎野	S37	古墳文書調査, 遺物量少
55	船前社前		
56	下家内		
57	大畑門	中期	
58	藤野中込	中期	
59	アサトナ	中期	
60	一ノ谷	早期-後期-中期	S41. 古墳文書調査, 盛岡市史調査

番号	遺跡名	時期	備考
61	藤ノ沢		
62	一ノ谷		
63	三ノ谷	中期	
64	大塚	中期-後期	S42. 古墳文書調査, 盛岡市史調査
65	大馬ノ沢	中期-後期	
66	上大路	中期	
67	後ノ平	早期-中期-後期	
68	高橋A	中期-後期	盛岡市史
69	高橋B		
70	上八木田I	早期-中期-後期	81. 古墳文書調査, 盛岡市史調査
71	上八木田II	早期-後期	81. 古墳文書調査, 盛岡市史調査
72	上八木田III	後期-後期	81. 古墳文書調査, 盛岡市史調査
73	上八木田IV	中期-後期	81. 古墳文書調査, 盛岡市史調査
74	上八木田V	早期-後期	81. 古墳文書調査, 盛岡市史調査
75	下八木田	早期-中期	81. 古墳文書調査, 盛岡市史調査
76	八木田	早期	
77	滝ノ上		
78	滝ノ上掛		
79	白旗	中期	S27. 古墳文書調査, 遺物量少
80	岩山	中期	S29. 古墳文書調査, 野田野
81	栗木平	中期-後期	
82	寺沢	中期-後期	
83	向原	前期-中期	
84	掛ノ水	中期	S49-S51. 古墳文書調査
85	松木原	中期	S49. 古墳文書調査, 盛岡市史調査
86	稲山		
87	大久保	中期-後期	81. 古墳文書調査
88	大塚	後期-後期	81. 古墳文書調査
89	藤子		
90	高田		
91	瀬戸		
92	山玉山	中期	S49-S51. 古墳文書調査
93	小山	前期-後期	S49-S51. 古墳文書調査
94	砂留	前期-中期	81. 古墳文書調査, 中野市史調査
95	北田	前期-中期	81. 古墳文書調査, 中野市史調査
96	新築		81. 古墳文書調査, 中野市史調査
97	沢田	後期-後期	S49-S51. 古墳文書調査
98	金物		
99	貝石	中期-後期	S42. 古墳文書調査
100	空石		
101	石塚		
102	横ノ森	中期-後期	
103	南畑北		
104	門		
105	川目谷		
106	大七山		
107	宇登野		
108	遠成		
109	アサト	後期	
110	込原		
111	掛ノ沢		
112	川田		
113	川田A	中期-後期	盛岡市史, 宇野, 三上益
114	川中	中期-後期	盛岡市史
115	小畑野	後期	
116	宇登沢		
117	西原石野	前期-中期	81. 古墳文書調査, 盛岡市史調査
118			
119			

第3表 周辺の遺跡一覧

- 盛岡市教育委員会 1975：『盛岡市埋蔵文化財調査年報－昭和55～58年度－』  
 盛岡市教育委員会 1976：『盛岡市埋蔵文化財調査年報－昭和59年度－』  
 盛岡市教育委員会 1983：『柿ノ木平遺跡－昭和57年度発掘調査概報－』  
 盛岡市教育委員会 1989：『小山遺跡群－昭和63年度発掘調査報告－』  
 盛岡市教育委員会 1989：『盛岡市遺跡地図』  
 盛岡市教育委員会 1992：『大館遺跡群大館町遺跡 平成3年度発掘調査概要』

## 5. 遺跡の微地形と基本層序 (第6図・第7図)

上八木田I遺跡は、建石山地を構成する深沢山(標高361m)等から延びる尾根と、中津川の小支谷である八木田沢が開析した狭隘な谷底平野との間に形成された、山麓緩斜面を中心とする山地縁辺に位置する。

遺跡内には、八木田沢に注ぐ小沢が3本あり、うち2本は埋没谷となっている。西側埋没谷は試掘調査において遺構・遺物が発見されず湧水がみられたことから調査対象から外されたものである。この埋没谷より西側の区域を便宜上A区と呼ぶことにする(第7図)。また、遺跡東端に現存する沢は、小規模ながら侵食作用による谷部の形成が明瞭であり、同様に調査対象外とされた。この沢部より東側をC区と呼ぶことにする。A区とC区の間にも埋没谷が存在するが調査範囲としては連続するためB区として一括した。B区には2筋の尾根が突き出しているが、西側の尾根とその麓部を含めてB区西尾根、又は単に西尾根、東側の尾根とその麓部を含めてB区東尾根又は単に東尾根と呼ぶことにする。

上八木田I遺跡の基本層序については、その立地が山地緩斜面を中心とするため、安定した一定の表徴をみるることができない。A・B・Cの各区はもちろん、B区でも尾根頂部と麓部とは著しく異なっている。したがって、遺跡全体の基本土層を画的に示すことはできない。ここでは、区域毎に地形の特徴を示す数地点の土層を提示し、その土層がある程度標準化できる範囲を示すこととする。

### (1) A区の微地形と土層

A区の北側には小高い山があり、そこから南東方向に広く走る尾根は約23°の傾斜を有する急斜面である。調査区はこの傾斜が緩く変換する地点によって区分される。A区北側はやや南東方向に傾斜していて山林として利用され、他は南に傾く緩斜面であり畑地として利用されていた区域である。谷底平野との境界は、比高6mの急崖となっている。標高259～267mの範囲にある。

南向きの緩斜面からは縄文時代中期の住居跡が5棟、横並びで検出された。また南東に傾く緩斜面からは縄文時代前期の住居跡が検出された。

本区域の土層は必ずしも一律ではないが、縄文時代中期の遺構を検出したIVD0d付近の土層を概ね標準モデルにすることができる。

NC区・VC区・VD区・VIC区標準土層<IVD0d付近> (第6図④)

I層	灰黄褐色土 ～黒褐色土	シルト	二分される。上位は表土。しまりを欠く。層厚約10cm。 下位(Ib層)は耕作土。Ia層との混土で締まりを欠く部分と、混土せずにややしまる部分とがある。層厚5～15cmで乱調。
II層	暗褐色土	シルト	やや固くしまる。やや粘性あり。縄文時代中期の遺物を含む。層厚約20cm。二分される。上位は黒色土、褐色土を混入する。下位は褐色土の混入が少ない。
III層	黒褐色土	シルト	固くしまっている。VI層の褐色土をブロック状に含む。本層上面が縄文中期の遺構の検出面である。層厚約20cm。
IV層	暗褐色土	シルト	IV層からVI層への漸移層。
V層	黄褐色土	粘土質シルト	ロームで遺物を全く含まない。下位に小礫を含む。本報告書では、遺構・遺物が検出されない本層より下位の層を便宜的に「基盤層」と呼ぶ。

A区の北側のVIC区では、I層には多くの植生根を含む他、一部ではII層が欠落する。VC区・VIC区の北側の調査区境界付近ではI層のうえに道路造成時の盛り土がのる。東側にあたるVD区ではI層の下位に粘性ある黒色土が30cm程度堆積し、層厚を増して埋没谷へと続く。

(2) B区西尾根の微地形と土層

B区西尾根は、尾根の鞍部とその3方の斜面、および南に広がる麓部からなる。尾根頂部の標高は280m、平坦部で275m程度であり、周囲の山体群に比しやや低めであるが、2筋の埋没谷に挟まれていること、傾斜角が急なことから、景観上は実際より高い印象がある。頂部からやや平坦な瘦せ尾根が南に40mほど延び、そこから西側と南側には約20～23°の急角度でほぼ一律に傾斜する。西斜面は表土から縄文前期の土器がやや纏まった範囲で集中的に出土しており、土器捨て場として利用していたものと考えられる。東斜面は尾根平坦部から東10mまではおよそ15°の斜面であるが、いったん勾配を緩めて10mほど続いた後は、ふたたび勾配を増し急崖となって東麓部埋没谷へとつながる。頂部から東斜面にかけて、縄文前期を中心に住居跡、土坑が高密度で重複し連続する。

本区域の土層は地点によって様相が大きく異なり、再堆積と考えられる層の存在が特徴的である。ここではそれが顕著なVIC5h付近の土層を示した。

ⅦC区・ⅦD区・ⅦD区土層<ⅦC 5 h付近> (第6図②)

I層	暗褐色土	シルト	表土。腐植土を含む。
II層	褐色土~暗褐色土	シルト	小角礫を含む。上位はややしまりを欠くが下位はよくしまっている。縄文時代前期末葉から中期初頭を主とする遺物包含層であるばかりでなく、遺構検出面も本層中にあり、異なる文化層が存在するはずであるが、肉眼による観察では分別不可能であった。粉炭が混入する部分もあり、一次堆積層とは考えられない。ソリフラクション等の自然の営力によるほかに、本区域では遺構の重複が著しいものがあり、排土等の人為的再堆積も想定する必要がある。本地点においては、断面では3層に細分できるが一般化はできない。 本報告書では本層を便宜上「再堆積層」と呼ぶ。
III層	暗褐色土	シルト	不均一に固くしめる部分がある。雨裂とも考えられ旧表土と想定される。上面から縄文時代早期の貝殻文土器の破片が出土した。
IV層	褐色土	シルト	しまりあり。本層より下位には遺物、遺構は無い。
V層	黄褐色土	粘土質シルト	しまりなし。基盤層。
VI層	黄褐色土	粘土質シルト	下位ほど礫を含む。

根椋鞍部の南端は岩盤とその赤色風化層が露出している。鞍部から東斜面および南斜面(ⅦC区・ⅦD区・ⅦC区にあたる)では、III層・IV層を欠落し、表土・再堆積層の下は直接基盤層であるV層(一部ではVI層)となる。

南側山麓部は、斜面との漸移部に2つの傾斜変換点を有して順次勾配を減じ、A区のような急崖をつくらずに緩い傾斜で谷底平野に接続する。遺構は、斜面との漸移部に著しい重複関係を有して、縄文時代前期の住居跡が集中する。麓部には縄文前期末葉および縄文晩期の遺構が検出された。標高は漸移部で264 m、麓部260 mである。

南麓部のⅦD 9 j付近の土層を次に示した。ⅦD区・ⅦD区の標準土層として把握できる。

ⅦD区・ⅦD区標準土層<ⅦD 9 j付近> (第6図③)

I層	黒褐色土	シルト	しまりややあり。植生根多い。表土、耕作土。
II層	黒色土	シルト	しまりややあり。やや砂を含む。近世墓墳の検出面。本層とIII層は縄文時代の遺物の包含層である。
III層	黒褐色土	シルト	II層よりも粘性あり。

IV層 黒褐色土	シルト	やや粘性あり。縄文時代の遺構は本層を壁とするものがあり、遺構検出面となるべき層。
V層 暗褐色土	シルト	IV層とVI層の漸移層。
VI 褐色土～黄褐色土	粘土質シルト	基盤層。

II、III層は黒ボク土で谷底平野に近づくほど層厚を増す。IV層は本来遺構検出面となるべき層であるが、平面的な検出は困難で、V層で確認されることが多かった。

山腹斜面、および山麓部との傾斜変換点では、II～V層にかわって黒褐色土を主体とする小角礫含みの固くしまった層が存在する。これらも再堆積層として一括把握した。

### (3) B区東尾根の微地形と土層

B区東尾根は、標高295mの頂部からほぼ南に台形状に延びる。標高276m前後までは急斜面であるが、そこからは勾配を減じて緩斜面となり、40mほど続いた後、標高265mの地点が傾斜変換点となって沢の侵食作用による段差が形成される。西側は麓部が約40mほど緩やかに延びて谷底平野へと漸移する。調査区は概ね標高276mの傾斜変換点から谷底平野に至る緩斜面である。ここでは、疎密はあるものの縄文時代前期の住居跡が斜面全域に分布する。

東尾根中腹部の調査区境界にあたるIXD6d付近と、南斜面下位のIXD7j付近、東側の沢に近いXD6h付近の土層を示した。土色・土質が若干異なる部分もあるが、概ねIXD7j付近が、IXD区・XD区の標準土層となろう。

#### IXD区・XD区標準土層<IXD7j付近> (第6図⑤)

I層 暗褐色土	シルト	表土。腐植土を含む。
II層 褐色土	シルト	しまりなし。縄文時代の遺物を含む。
III層 黒褐色土	シルト	しまりあり。時期不明の焼土遺構が検出される。
IV層 褐色土	シルト	黒褐色土、黄色褐色土を含む、漸移層。縄文時代前期の遺構の検出面である。
V層 黄褐色土	粘土質シルト	基盤層。下位には礫層(VI層)が続く。

#### <IXD6d付近> (第6図④)

1層 暗褐色土	シルト	表土。腐植土を含む。
2層 褐色土	シルト	しまりなし。縄文時代の遺物を含む。
3層 黄褐色土	シルト	ややしまりあり。小角礫を含む。縄文時代前期の遺構の検出面である。
4層 明褐色土	シルト	岩盤の風化層で下位の岩盤に漸移する。基盤層。

#### <XD6h付近> (第6図⑥)

1層 褐色土	砂質ローム	小角礫に富む。粘性なし。層厚は一定しない。
--------	-------	-----------------------



2層	暗褐色土	砂質ローム	小角礫に富む。粘性なし。
3層	黒色土	粘土質ローム	粘性ややあり。埋没腐植層。縄文時代前期の遺物の包含層。
4層	褐色土	粘土質ローム	粘性ややあり。縄文時代前期の検出面。基盤層。

④の1・2層は⑤のI・II層に、3・4層はV・VI層に対応すると考えられる。⑤における黒色土(III層)は、傾斜変換して勾配を減じる部分に至ると出現する。また、⑥の1・2・3層は⑤のI・II・III層に、4層はV層に対応する。すなわち東側ではIV層を欠落する。東尾根の東側にある谷頭凹型斜面は、標高283mから277mの範囲で、傾斜角10°の緩斜面である。ここからは、平安時代の住居跡が2棟検出された。本区域は層厚は異なるもの、おおむね同一の層序を示す。平安時代の住居跡が隣接するXIC6a付近の土層を掲げる。

#### XIC区標準土層<XIC6a付近> (第6図⑦)

I層	暗褐色土	シルト	粘性、しまりなし。植生根多い。
II層	黒褐色土	シルト	粘性ややあり。III層への漸移層。
III層	黒色土	シルト	粘性ややあり。平安時代の遺構の検出面である。
IV層	黒褐色土	シルト	粘性あり。しまりあり。縄文時代の遺構の検出面である。
V層	暗褐色土	粘土質シルト	粘性あり。しまりあり。褐色土をブロック状に含む。
VI層	褐色土	粘土質シルト	固くしまっている。基盤層。

平安時代の住居跡より斜面の上位ではII層～IV層を欠落するほか、I層の上に近年の道路造成時の盛り土と考えられる褐色土をのせる。

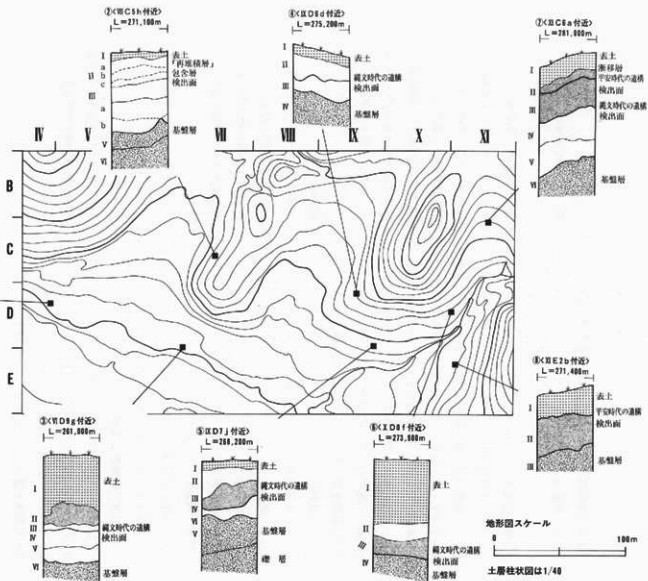
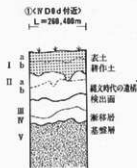
#### (4) C区の微地形と土層

C区は標高304mの小山の西裾部にあたり、沢と急斜面に挟まれた狭隘な部分であるが、近年の作業小屋建造のため一部は削平されている。本区域からは平安時代の遺構が検出されている。

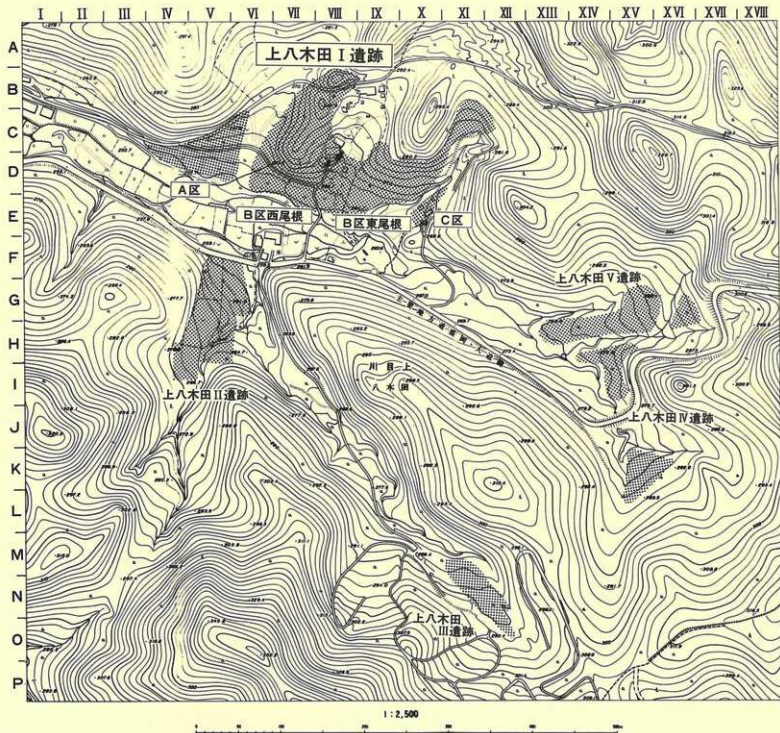
#### XIE区標準土層<XIE2b付近> (第6図⑧)

I層	黒褐色土	シルト質ローム	小角礫を含む。植生根に富む。しまりなし。
II層	黒色土	シルト質ローム	腐植に富む。しまりなし。粘性ややあり。平安時代の遺構の検出面である。本層とIII層の間に火山灰を含む地点がある。同火山灰は、上八木田II遺跡で十和田中環テフラと同定されたものと同一のものと考えられる。
III層	褐色土	粘土質ローム	固くしまっている。基盤層。

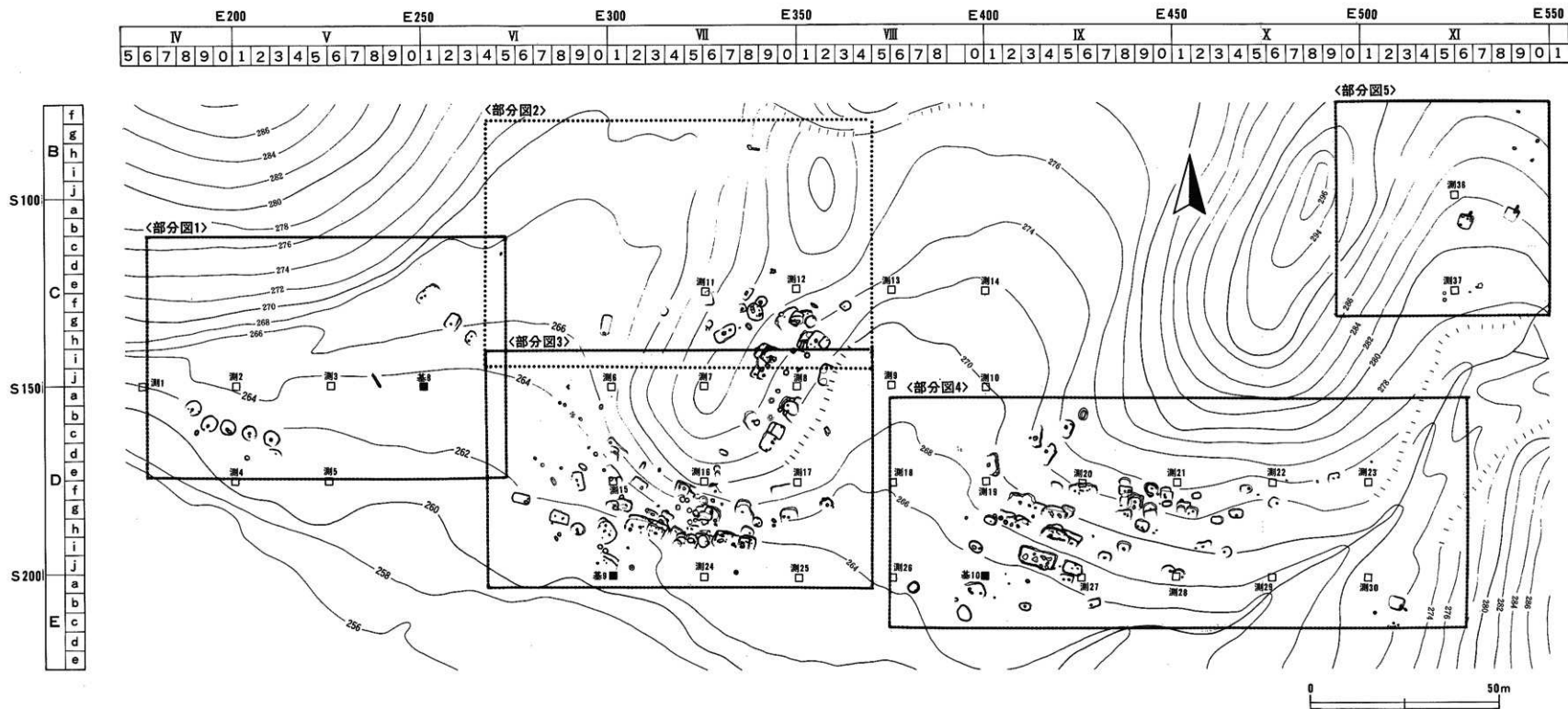
C区東側の沢に近づく部分では、I層・II層の層厚が増す。



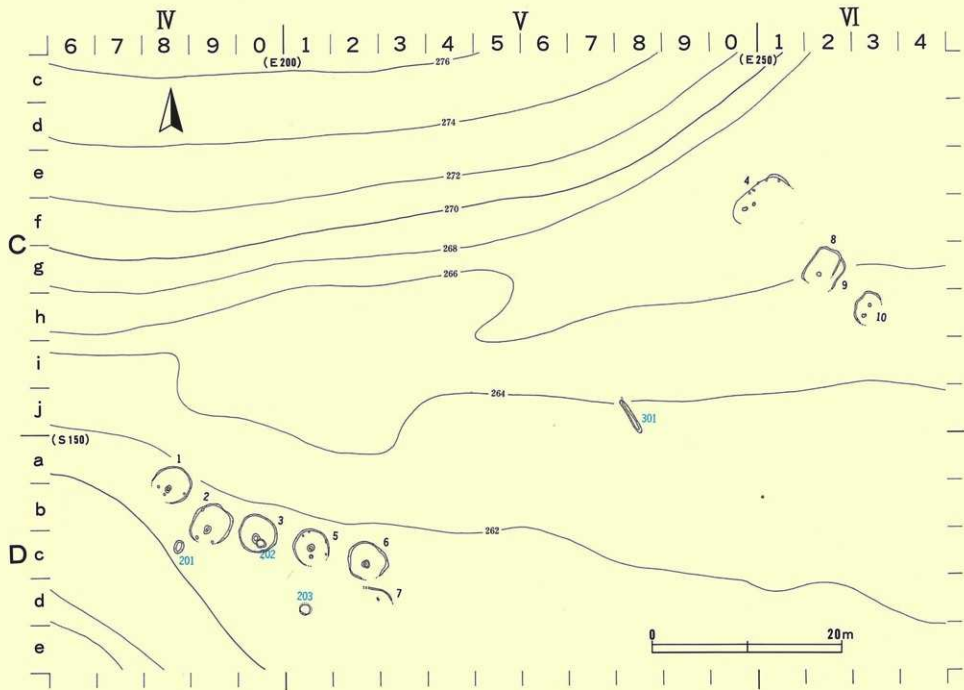
第6図 調査区各地点の層序



第 7 図 周辺の地形と大グリッド配置図

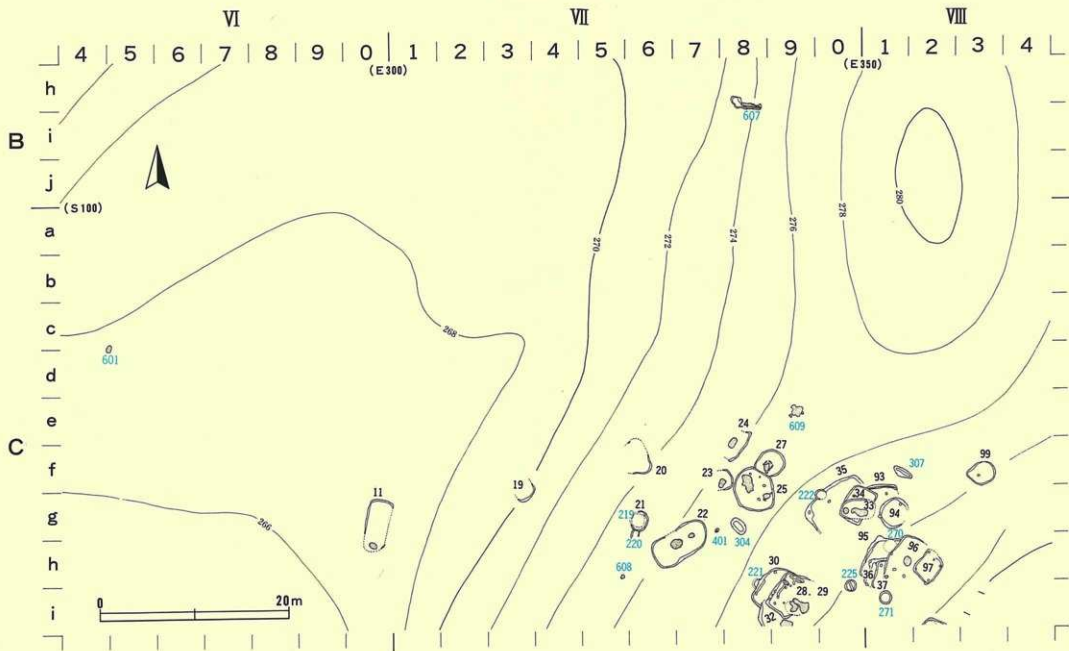


第 8 図 グリッド配置図と遺構配置部分図の位置



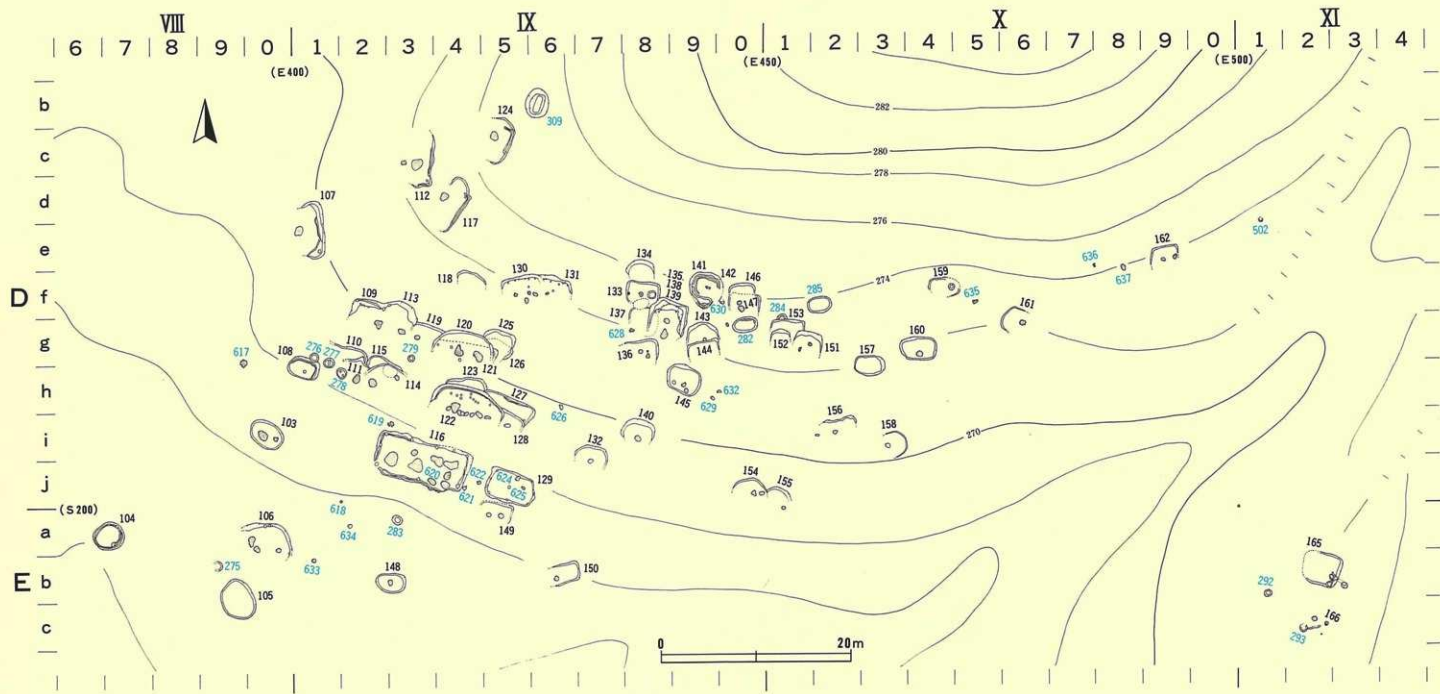
※等高線は調査前の地形を表す  
 ※番号は遺構一覧表(第5・6表)と照応する

第9図 遺構配置部分図1



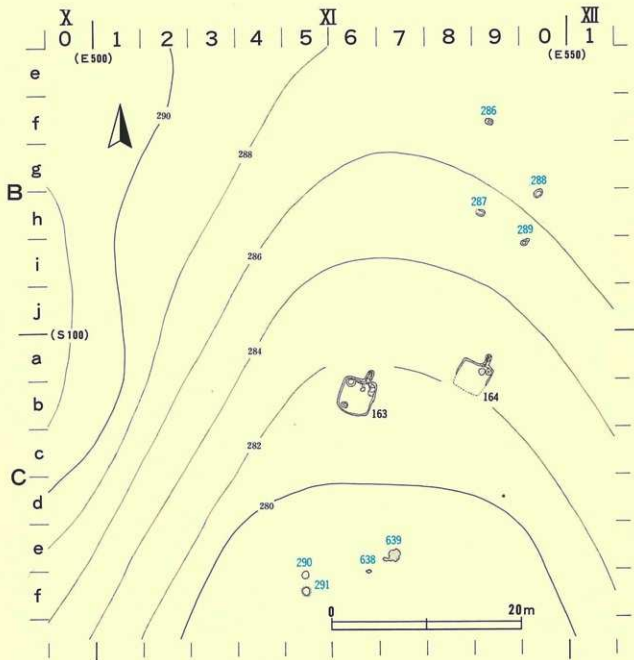
第10圖 遺構配置部分圖2





第12圖 遺構配置部分圖4





第13圖 遺構配置部分圖 5

〈 監穴住居跡 〉

番号	遺構名
1	ⅡD 8 b 住居跡
2	ⅡD 9 c 住居跡
3	ⅡD 9 c 住居跡
4	ⅤC 9 f 住居跡
5	ⅤD 1 c 住居跡
6	ⅤD 2 c 住居跡
7	ⅤD 2 d 住居跡
8	ⅡC 3 g 住居跡
9	ⅡC 3 g-2 住居跡
10	ⅡC 3 h 住居跡
11	ⅡC 9 g 住居跡
12	ⅡD 5 f 住居跡
13	ⅡD 7 g 住居跡
14	ⅡD 8 e 住居跡
15	ⅡD 8 b 住居跡
16	ⅡD 9 g 住居跡
17	ⅡD 9 h 住居跡
18	ⅡD 9 i 住居跡
19	ⅡC 3 g 住居跡
20	ⅡC 6 f 住居跡
21	ⅡC 6 g 住居跡
22	ⅡC 6 h 住居跡
23	ⅡC 7 f 住居跡
24	ⅡC 8 f 住居跡
25	ⅡC 8 g 住居跡
26	ⅡC 8 j 住居跡
27	ⅡC 9 f 住居跡
28	ⅡC 9 i-3a 住居跡
29	ⅡC 9 i-3 b 住居跡
30	ⅡC 9 i-4 住居跡
31	ⅡC 9 j 住居跡
32	ⅡC 9 j-2 住居跡
33	ⅡC 9 k 住居跡
34	ⅡC 9 g-2 住居跡
35	ⅡC 9 g-3 住居跡
36	ⅡC 9 h 住居跡
37	ⅡC 9 h-2 住居跡
38	ⅡD 1 d 住居跡
39	ⅡD 1 d-2 住居跡
40	ⅡD 1 b-3 住居跡
41	ⅡD 1 e 住居跡
42	ⅡD 1 g 住居跡
43	ⅡD 1 g-2 住居跡
44	ⅡD 2 f 住居跡
45	ⅡD 2 h 住居跡
46	ⅡD 2 h-2 住居跡
47	ⅡD 2 h-3 住居跡
48	ⅡD 3 g 住居跡
49	ⅡD 3 g-2 住居跡

番号	遺構名
50	ⅡD 3 g-3 住居跡
51	ⅡD 3 g-4 住居跡
52	ⅡD 3 h 住居跡
53	ⅡD 3 h-2 住居跡
54	ⅡD 4 f 住居跡
55	ⅡD 4 f-3 住居跡
56	ⅡD 4 f-3 住居跡
57	ⅡD 4 h 住居跡
58	ⅡD 4 h-3 住居跡
59	ⅡD 4 h-3 住居跡
60	ⅡD 4 h-4 住居跡
61	ⅡD 4 i 住居跡
62	ⅡD 5 g-2 住居跡
63	ⅡD 5 g-3 住居跡
64	ⅡD 5 h 住居跡
65	ⅡD 5 f 住居跡
66	ⅡD 5 i-2 住居跡
67	ⅡD 5 i-3 住居跡
68	ⅡD 6 f 住居跡
69	ⅡD 6 g 住居跡
70	ⅡD 6 g-2 住居跡
71	ⅡD 6 g-3 住居跡
72	ⅡD 6 g-4 住居跡
73	ⅡD 6 h 住居跡
74	ⅡD 6 h-2 住居跡
75	ⅡD 6 i 住居跡
76	ⅡD 7 g 住居跡
77	ⅡD 7 g-2 住居跡
78	ⅡD 7 h 住居跡
79	ⅡD 7 i 住居跡
80	ⅡD 8 c 住居跡
81	ⅡD 8 h 住居跡
82	ⅡD 8 i 住居跡
83	ⅡD 8 i-2 住居跡
84	ⅡD 8 i-3 住居跡
85	ⅡD 9 c 住居跡
86	ⅡD 9 c-2 住居跡
87	ⅡD 9 c-3 住居跡
88	ⅡD 9 b 住居跡
89	ⅡD 9 b-2 住居跡
90	ⅡD 9 b-3 住居跡
91	ⅡD 9 b-4 住居跡
92	ⅡD 9 h 住居跡
93	ⅡC 1 g 住居跡
94	ⅡC 1 g-2 住居跡
95	ⅡC 1 b 住居跡
96	ⅡC 1 h-2 住居跡
97	ⅡC 2 h 住居跡
98	ⅡC 2 j 住居跡
99	ⅡC 3 f 住居跡

番号	遺構名
100	ⅡD 2 g 住居跡
101	ⅡD 2 g-2 住居跡
102	ⅡD 2 g-3 住居跡
103	ⅡD 0 i 住居跡
104	ⅡE 7 a 住居跡
105	ⅡE 9 b 住居跡
106	ⅡE 9 a 住居跡
107	ⅡD 1 e 住居跡
108	ⅡD 1 h 住居跡
109	ⅡD 2 g 住居跡
110	ⅡD 2 g-2 住居跡
111	ⅡD 2 h 住居跡
112	ⅡD 3 c 住居跡
113	ⅡD 3 g 住居跡
114	ⅡD 3 h 住居跡
115	ⅡD 3 h-2 住居跡
116	ⅡD 3 j 住居跡
117	ⅡD 4 d 住居跡
118	ⅡD 4 f 住居跡
119	ⅡD 4 g 住居跡
120	ⅡD 4 g-2 住居跡
121	ⅡD 4 g-3 住居跡
122	ⅡD 4 h 住居跡
123	ⅡD 4 h-2 住居跡
124	ⅡD 5 c 住居跡
125	ⅡD 5 g 住居跡
126	ⅡD 5 g-2 住居跡
127	ⅡD 5 h 住居跡
128	ⅡD 5 i 住居跡
129	ⅡD 5 j 住居跡
130	ⅡD 6 f 住居跡
131	ⅡD 6 f-2 住居跡
132	ⅡD 7 j 住居跡
133	ⅡD 8 f 住居跡
134	ⅡD 8 f-2 住居跡
135	ⅡD 8 g 住居跡
136	ⅡD 8 g-2 住居跡
137	ⅡD 8 g-3 住居跡
138	ⅡD 8 g-4 住居跡
139	ⅡD 8 g-5 住居跡
140	ⅡD 8 i 住居跡
141	ⅡD 9 f 住居跡
142	ⅡD 9 f-2 住居跡
143	ⅡD 9 g 住居跡
144	ⅡD 9 g-2 住居跡
145	ⅡD 9 h 住居跡
146	ⅡD 9 f 住居跡
147	ⅡD 9 f-2 住居跡
148	ⅡE 2 b 住居跡
149	ⅡE 5 a 住居跡

番号	遺構名
150	ⅡE 6 b 住居跡
151	ⅡD 1 g 住居跡
152	ⅡD 1 g-2 住居跡
153	ⅡD 1 g-3 住居跡
154	ⅡD 1 j 住居跡
155	ⅡD 1 j-2 住居跡
156	ⅡD 2 i 住居跡
157	ⅡD 3 h 住居跡
158	ⅡD 3 i 住居跡
159	ⅡD 4 f 住居跡
160	ⅡD 4 g 住居跡
161	ⅡD 6 g 住居跡
162	ⅡD 9 c 住居跡
163	ⅡC 6 b 住居跡
164	ⅡC 9 a 住居跡
165	ⅡE 2 b 住居跡
166	ⅡE 2 c 住居跡

〈 土 坑 〉

番号	遺構名
201	ⅡD 8 c 土坑
202	ⅡD 9 c 土坑
203	ⅤD 1 d 土坑
204	ⅡD 8 d 土坑
205	ⅡD 7 e 土坑
206	ⅡD 7 i 土坑
207	ⅡD 8 a 土坑
208	ⅡD 8 a-2 土坑
209	ⅡD 8 a 土坑
210	ⅡD 9 h 土坑
211	ⅡD 9 a 土坑
212	ⅡD 9 b 土坑
213	ⅡD 9 d 土坑
214	ⅡD 9 e 土坑
215	ⅡD 9 g 土坑
216	ⅡD 9 g-2 土坑
217	ⅡD 9 i 土坑
218	ⅡD 9 i-2 土坑
219	ⅡC 6 g 土坑
220	ⅡC 6 g-2 土坑
221	ⅡC 8 i 土坑
222	ⅡC 8 g 土坑
223	ⅡC 9 i 土坑
224	ⅡC 9 j 土坑
225	ⅡC 9 o 土坑
226	ⅡC 9 土坑
227	ⅡC 9 e 土坑
228	ⅡD 1 f 土坑
229	ⅡD 1 g-2 土坑
230	ⅡD 2 e 土坑

第 4 表 遺構名一覧(1)

番号	造 標 名
231	ⅣD 2 g 土坑
232	ⅣD 2 h 土坑
233	ⅣD 3 e 土坑
234	ⅣD 3 g 土坑
235	ⅣD 3 g-2 土坑
236	ⅣD 3 g-3 土坑
237	ⅣD 3 h 土坑
238	ⅣD 4 g 土坑
239	ⅣD 4 g-2 土坑
240	ⅣD 4 g-3 土坑
241	ⅣD 4 h-2 土坑
242	ⅣD 5 f 土坑
243	ⅣD 5 g 土坑
244	ⅣD 5 g-2 土坑
245	ⅣD 5 g-3 土坑
246	ⅣD 5 g-4 土坑
247	ⅣD 5 g-5 土坑
248	ⅣD 5 g-6 土坑
249	ⅣD 5 h 土坑
250	ⅣD 5 h-2 土坑
251	ⅣD 5 i 土坑
252	ⅣD 5 i-2 土坑
253	ⅣD 5 i-3 土坑
254	ⅣD 5 i-4 土坑
255	ⅣD 6 d 土坑
256	ⅣD 6 e 土坑
257	ⅣD 6 e-2 土坑
258	ⅣD 6 f 土坑
259	ⅣD 6 f-2 土坑
260	ⅣD 6 g 土坑
261	ⅣD 6 h 土坑
262	ⅣD 6 c 土坑
263	ⅣD 9 a 土坑
264	ⅣD 9 b 土坑
265	ⅣD 9 b-2 土坑
266	ⅣD 9 b-3 土坑
267	ⅣD 9 b-4 土坑
268	ⅣD 9 h 土坑
269	ⅣD 9 h-2 土坑
270	ⅣC 1 h 土坑
271	ⅣC 1 i 土坑
272	ⅣC 2 j 土坑
273	ⅣC 2 j-2 土坑
274	ⅣD 2 g 土坑
275	ⅣE 9 b 土坑
276	ⅣD 1 g 土坑
277	ⅣD 1 g-2 土坑
278	ⅣD 2 h 土坑
279	ⅣD 3 g 土坑
280	ⅣD 3 h 土坑

番号	造 標 名
281	ⅣD 8 f 土坑
282	ⅣD 0 g 土坑
283	ⅣE 3 a 土坑
284	ⅣD 1 g 土坑
285	ⅣD 2 f 土坑
286	ⅣB 9 f 土坑
287	ⅣB 9 h 土坑
288	ⅣB 0 h 土坑
289	ⅣB 0 i 土坑
290	ⅣC 5 f 土坑
291	ⅣC 5 f-2 土坑
292	ⅣE 1 c 土坑
293	ⅣE 2 c 土坑

＜ 陥し穴 ＞

番号	造 標 名
301	ⅣC 8 j 陥し穴
302	ⅣD 7 e 陥し穴
303	ⅣD 8 b 陥し穴
304	ⅣC 8 g 陥し穴
305	ⅣD 1 j 陥し穴
306	ⅣD 7 j 陥し穴
307	ⅣC 1 f 陥し穴
308	ⅣD 2 c 陥し穴
309	ⅣD 6 b 陥し穴

＜ 土器埋設遺構 ＞

番号	造 標 名
401	ⅣC 6 b 埋設土器

＜ 炉 跡 ＞

番号	造 標 名
501	ⅣD 0 j 炉
502	ⅣD 1 e 炉

＜ 焼土遺構 ＞

番号	造 標 名
601	ⅣC 5 d 焼土
602	ⅣD 7 h 焼土
603	ⅣD 8 a 焼土
604	ⅣD 9 b 焼土
605	ⅣD 9 e 焼土
606	ⅣD 0 f 焼土
607	ⅣB 6 h 焼土
608	ⅣC 5 h 焼土
609	ⅣC 9 e 焼土
610	ⅣC 0 b 焼土
611	ⅣD 1 j 焼土
612	ⅣD 3 g 焼土
613	ⅣD 5 f 焼土

番号	造 標 名
614	ⅣD 5 h 焼土
615	ⅣD 5 h-2 焼土
616	ⅣD 6 h 焼土
617	ⅣD 6 j 焼土
618	ⅣD 1 j 焼土
619	ⅣD 3 i 焼土
620	ⅣD 3 j 焼土
621	ⅣD 3 j-2 焼土
622	ⅣD 4 j 焼土
623	ⅣD 5 j 焼土
624	ⅣD 5 j-2 焼土
625	ⅣD 5 j-3 焼土
626	ⅣD 6 h 焼土
627	ⅣD 8 g 焼土
628	ⅣD 8 g-2 焼土
629	ⅣD 9 h 焼土
630	ⅣD 0 f 焼土
631	ⅣD 6 g 焼土
632	ⅣD 0 h 焼土
633	ⅣE 1 b 焼土
634	ⅣE 2 a 焼土
635	ⅣD 7 j 焼土
636	ⅣD 6 f 焼土
637	ⅣD 8 e 焼土
638	ⅣC 6 f 焼土
639	ⅣC 7 e 焼土

第 5 表 遺構名一覧(2)

## IV 検出された遺構と遺物

検出された遺構は、縄文時代に属するものとしては、竪穴住居跡・土坑・陥し穴・土器埋設遺構・焼土遺構、平安時代に属するものとしては、竪穴住居跡・土坑・焼土遺構である。それらの遺構数については表で提示した。住居跡として登録したのもでも、残存状況が悪く、方形の土坑の可能性もあるものが2棟ある。また、伴出遺物がなくて所属時期が決定できず、検出面と埋土等からの推定によるものがある。

	住居跡	土坑	陥し穴	土器埋設遺構	炉跡	焼土遺構	計
縄文時代	162	88	5	1	2	29	291
平安時代	4	1				1	6
不明		4	4			9	17
計	166	93	9	1	2	39	314

第8表 検出遺構数一覧

遺物は遺構内外を合わせて、土器・土製品は中コンテナで170箱、石器・石製品は小コンテナで107箱出土した。

### 1. 竪穴住居跡

#### (1) 縄文時代の竪穴住居跡

##### IVD 8 b 住居跡 (遺構番号1)

##### 遺構 (第14図、写真図版7)

〈検出状況〉Ⅲ層上面で、炭化物を含む黒褐色土が分布する状態で検出した。本住居と同時期で同規模のものが近接して5棟検出されているが、その最西端に位置する。東1.5mにはIVD 9 C 住居跡が検出されている。

〈形状・規模〉径4m程度の円形である。

〈壁・壁高〉基盤層である黄褐色土を壁とし、ほぼ直立している。壁高は北が最も高く45m、東23m、西10m、南で床と同じ高さとなる。

〈埋土〉8層に分けられるが、締まりにむらがあり、褐色土・暗褐色土が混在することから、人為的な堆積と考えられる。全体に焼土粒および粉炭(数cm以下の細かい炭化物、以下同じ)を含む。炭化材が北東四半部に高密度で分布する。樹種はケヤキとクリである。

〈床・柱穴・施設〉全体に固く締まっている。南側が特に固く、出入口の可能性がある。自

然地形に沿って、北側から南側に緩く傾斜する。凹凸はほとんど無い。柱穴状の掘り込みが3個検出された。径はほぼ同規模である。埋土は褐色土でよく締まっている。北側では検出されない。

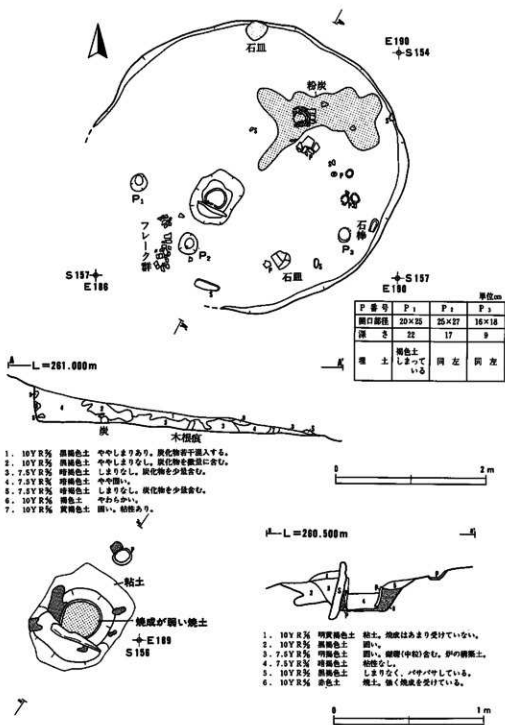
〈炉〉ほぼ中央に位置する。床面を20cmほど掘り込み、1個の偏平な礫(16)と土器(2)とを、両者とも正立に埋設し、そのまわりを粘土で固めている。礫の厚さはほぼ一様であり、石皿の転用品の可能性がある。礫は床面より10cm程突き出ており、その下約30cmが土中にある。最下部の掘り方は確認できなかった。土器に接する面が被熱して赤変し脆弱化している。埋設された土器は円筒状を呈し、底部を欠く。土器の内部には締まりのない暗褐色土が充填し、周囲には焼土が厚く発達している。

遺物(第15～17図、写真図版132・133)

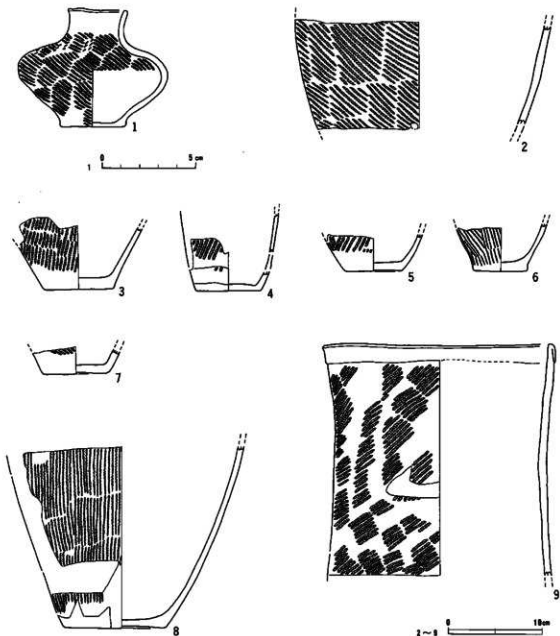
〈土器〉床面またはその直上から3735g、埋土から1260gと多量出土しているが、復元できたものは底部を含めて9個体である。2は炉の中央部に、正立に埋設されていたものである。口縁部と胴下半部は水平に欠損しており、輪積み部分から破損した土器を再利用したものか。下から9～10cmの部分は被熱して変色し脆弱化している。1は中期の住居の中では唯一の小型壺である。単節の地文のみであるが、伴出土器と比較して縄文が極めて細かい。胴上半部に一部異なる方向の縄文が見られる。9は折り返し口縁をもつ土器で、内面は棒状または篋状の工具によりミガキがかけられている。他に底部のみの土器が5個体分(3～7)出土した。住居の東側および炉の北側に掘え置いたかのような状況で出土している。燃糸文は8の1個体のみである。

〈石器・石製品〉10は自然面を片面にのこし、一次剝離面のみを打点方向から粗く二次加工している。11は礫の長軸・短軸両方に打ち欠きが認められるが、長軸側は抉りには至らない。12は岩手火山起源の溶岩で、両面の中央部に溝状の磨面が残る。13は整形加工した石棒である。中央の折損部から下半が、東壁際にの床面に横倒しの状態で検出された。断面形の一面はやや平坦で中央部に線状にやや窪んだ部分がある。上半部はND0c住居跡の床面から出土したものである。14は本遺跡では唯一の整形加工した石皿である。15は北壁際床面から出土したもので、自然石の中央部に溝状の磨痕が観察される。他に、使用痕不明の岩手火山起源の溶岩、Uフレ1点が床面から出土している。

時期 出土遺物から縄文時代中期末葉に属すると考えられる。

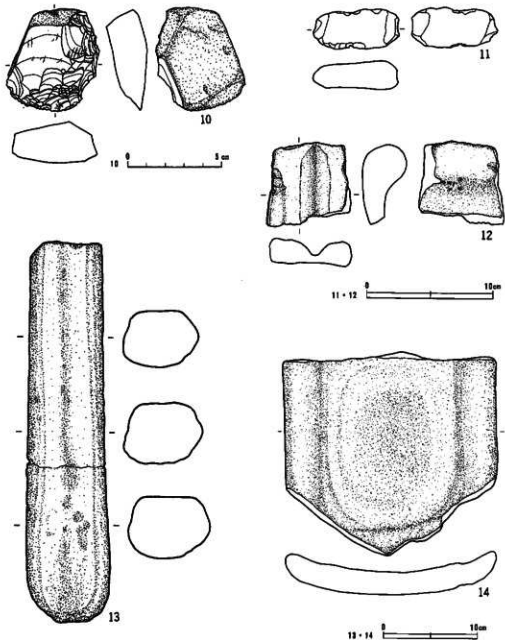


第14図 IV D8b住居跡



番号	出土地点	層位	文様	施文	口径	冠部幅	器高	備考	分類	写真
1	N D 8 b 住	床面	残部から前部にかけて一部刺繍文あり。	L R 縦	3.2	3.5	6.3		図 3 c	132
2	N D 8 b 住	炉		L R 縦	-	-	(12.0)		図 3 b	132
3	N D 8 b 住	床面		L R 横	-	7.4	(6.0)		図 3	132
4	N D 8 b 住	床面		R L 縦	-	7.9	(8.2)		図 3	132
5	N D 8 b 住	床面		R L 縦	-	6.9	(2.9)		図 3	132
6	N D 8 b 住	床面		R 刺繍文	-	5.8	(5.0)		図 3	132
7	N D 8 b 住	床面		L R 縦	-	6.9	(2.9)		図 3	132
8	N D 8 b 住	埋土		L R 刺繍文	-	(10.4)	(19.7)		図 3 b	132
9	N D 8 b 住	埋土	接合口縁。	L R 縦	24.7	-	(24.6)		図 3 b	132

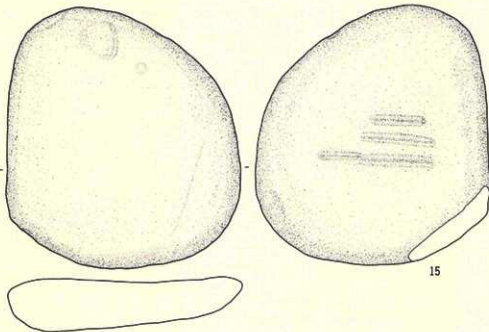
第15図 N D 8 b 住居跡出土遺物(1)



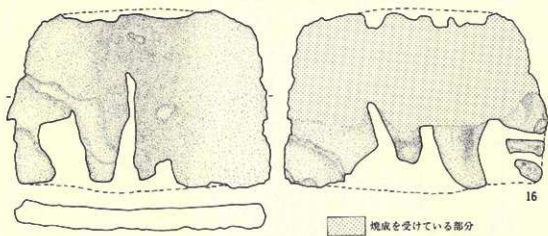
番号	出土地点	層位	種類	石質	産地	長さ	幅	厚さ	備考	分類	写真
10	IV D 5 b 住	埋土下住	不定形石片	福沢質硬質片岩	平石西部	5.3	4.9	2.1	(22.9)	自然破れを片面に残し、打点方向から強い割れ。	原 132
11	IV D 5 b 住		石片	建長質硬質片岩	北上山地	3.1	6.8	2.3	79		原 132
12	IV D 5 b 住		石片	両峰石安山岩	巻手山	6.2	6.6	3.3	80		132
13	IV D 5 b 住	床面	石棒	アイウイト	奥羽山地	40.0	8.7	6.5	2000	IV D 0 c 住の石棒と結合。	132
14	IV D 5 b 住	床面	石原・石原	粗粒砂岩	奥羽山地	(21.6)	22.5	4.7	(180)	表面の内側・外側とも中層を帯び。	132

第16図 IV D 5 b 住層跡出土遺物(2)





15



16

焼成を受けている部分



番号	出土地点	層位	器種	石質	産地	長さ	幅	厚さ	重さ	備考	分類	写真
15	IV D 8 b 住	体面	石皿・台石類	輝石安山岩	北上市地	27.7	25.0	3.8	5000			133
16	IV D 8 b 住	伊	立石	花崗閃緑岩	北上市地	28.7	43.2	4.0	7550	がの歯に埋設		133

第17図 IV D 8 b 住居跡出土遺物(3)

#### ⅣD 9 c 住居跡 (遺構番号 2)

##### 遺構 (第18図、写真図版 8)

〈検出状況〉基盤層上面で試掘段階で検出されていたものである。本住居の北西 1.5 m にⅣD 8 b 住居跡が、東 0.8 m にⅣD 1 c 住居跡が位置する。

〈形状・規模〉径 4.1 × 4.2 m のほぼ円形である。

〈壁・壁高〉基盤層である黄褐色土を壁とし、ほぼ直立している。壁高は北が最も高く 48 cm、東 40 cm、西 20 cm、南で床と同じ高さとなる。

〈埋土〉18層に分けられる。壁際には崩落土が混入する。全体に焼土粒および粉炭を含む。床面より 10～20 cm の高さに、固い焼土が数箇所まとまって検出された。炭化材は細かいものだが、北半部に多く、樹種はナラとケヤキである。住居焼失後自然埋没したのと考えられる。

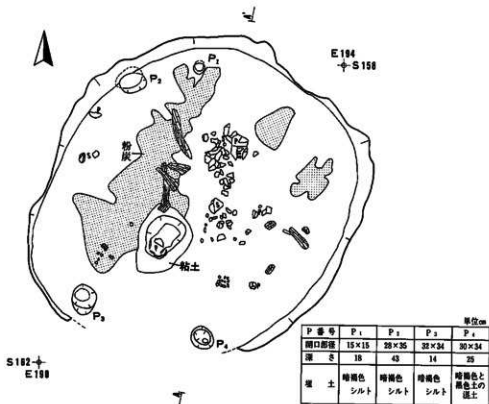
〈床・柱穴・施設〉北半部は基盤層を、南半部は暗褐色土を床とし、ほぼ水平である。南側は、相対的に固く出入り口の可能性がある。柱穴は 4 基検出した。P1～P3 は暗褐色シルトを埋土とする。P4 は底部に凹凸があり木根の可能性もある。

〈炉〉中央よりやや南寄りに位置する。70 × 90 cm の楕円形の範囲を約 50 cm の深さに掘り込み、炉の中央部側に口縁部をむけて斜位に埋め、炉の周囲を粘土で固めている。土器の上位の粘土は明瞭に盛り上がる。土器の底部は無い。焼土は、斜位に埋設した土器の外側から炉を一周するように形成されている。

##### 遺物 (第19～21図、写真図版 133～135)

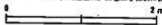
〈土器〉床面から 9300 g、埋土から 375 g が出土した。18 は炉の埋設土器である。被熱して脆弱化している。17 は沈線によって区画された無文帯が、口縁部を全周し、胴上半部には曲線的文様を描出する。胴部から展開した文様は口縁部分で錯状の突起となり、3 単位の緩波状口縁を形成する。19 は口縁部の無文帯は沈線を伴わない。胴部に展開する曲線的無文帯によって形成された円文の周縁と口縁部無文帯との境界部に刺突が施される。20 は胴中央部および胴下半部の一部に朱の顔料が塗布された痕跡が観察される。沈線で区画された無文帯内部には、丁寧なミガキがかけられている。一部に刺突が施される。

〈石器・石製品〉明瞭な刃部を作り出した剥片が 5 点、スクレーパーエッジは有しないが二次加工を施している剥片が 1 点、刃部形成はしていないが使用痕ある剥片が 2 点、他に使用痕・二次加工を明瞭には観察できない剥片が 7 点 (北上山地・チャート、礫石産・硬質泥岩他) 出土した。26 は階段状剝離で粗い加工である。29 は欠損品であるが、良く研磨され光沢を帯びる。部分的に敲打によりザラつく部分がある。32 は自然礫の側面を使用し磨面は平坦である。時期 出土遺物から縄文時代中期末葉に属すると考えられる。



L=200.720m

- |                 |                              |                 |                           |
|-----------------|------------------------------|-----------------|---------------------------|
| 1. 7.5YR% 暗褐色土  | しまりあり。12層に焼土粒、黄褐色土をブロック状に含む。 | 11. 7.5YR% 暗褐色土 | しまりあり。黄褐色土をブロック状に含む。      |
| 2. 7.5YR% 暗褐色土  | しまりあり。黒褐色土、炭化物をブロック状に含む。     | 12. 7.5YR% 暗褐色土 | しまりあり。灰白色土を塊状に、炭化物を粒状に含む。 |
| 3. 7.5YR% 暗褐色土  | しまりあり。褐色土、炭化物を粒状に含む。         | 13. 7.5YR% 暗褐色土 | しまりなし。炭化物を粒状に含む。          |
| 4. 7.5YR% 暗褐色土  | しまりあり。黄褐色土を塊状に含む。            | 14. 7.5YR% 暗褐色土 | しまりあり。黄褐色土、炭化物を粒状に含む。     |
| 5. 7.5YR% 暗褐色土  | しまりあり。褐色土、炭化物を粒状に含む。         | 15. 7.5YR% 暗褐色土 | しまりなし。黄褐色土をブロック状に含む。      |
| 6. 7.5YR% 暗褐色土  | しまりあり。明黄褐色土、炭化物をブロック状に含む。    | 16. 7.5YR% 暗褐色土 | しまりなし。暗褐色土を塊状に含む。         |
| 7. 7.5YR% 暗褐色土  | しまりあり。黄褐色土、焼土粒、炭化物をブロック状に含む。 | 17. 7.5YR% 暗褐色土 | しまりあり。黄褐色土を塊状に含む。         |
| 8. 7.5YR% 暗褐色土  | しまりあり。暗褐色土をブロック状に含む。         | 18. 7.5YR% 暗褐色土 | しまりあり。黄褐色土、黒色土を粒状に含む。     |
| 9. 7.5YR% 暗褐色土  | しまりあり。黄褐色土を塊状に、炭化物を粒状に含む。    |                 |                           |
| 10. 7.5YR% 暗褐色土 | しまりあり。                       |                 |                           |

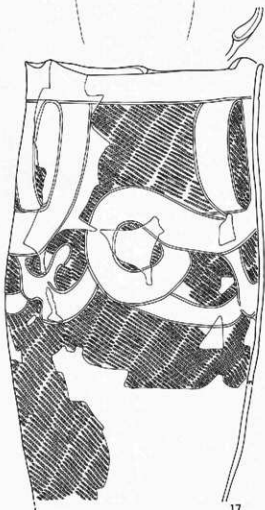
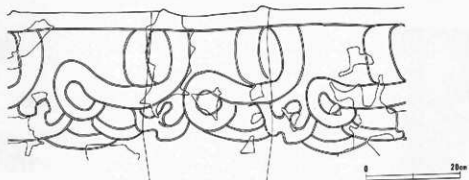


L=200.090m

- |                        |                       |
|------------------------|-----------------------|
| 1. 5YR% 明灰褐色土          | 粘土。固く凝結している。          |
| 2. 5YR% -10YR% 赤褐色～黒色土 | 凝結により土色が漸移的に変化。       |
| 3. 2.5YR% 明赤褐色土        | 粘土。固くしまる。             |
| 4. 5YR% 明灰褐色土          | 粘土。固くしまる。小角礫含む。       |
| 5. 5YR% 赤灰色            | 砂。一部凝結を受けている。         |
| 6. 5YR% 暗赤褐色土          | しまりなく、サラサラしている。炭化物含む。 |

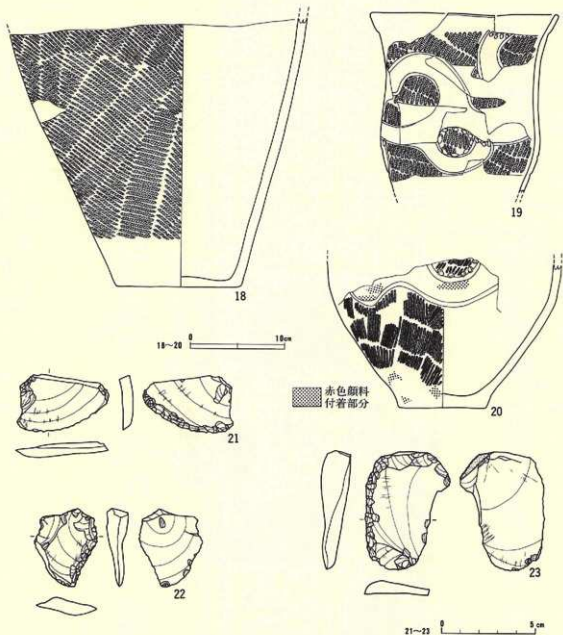


第18図 IV D9c 住居跡



番号	出土地点	層位	文様	地文	口径	底径	器高	備考	分類	写真
17	IV D 9 c 住	床面	沈彫、磨消縄文、蜂状突起 (内面)	L R 縄	25.2	-	(5.6)		III a 7	133

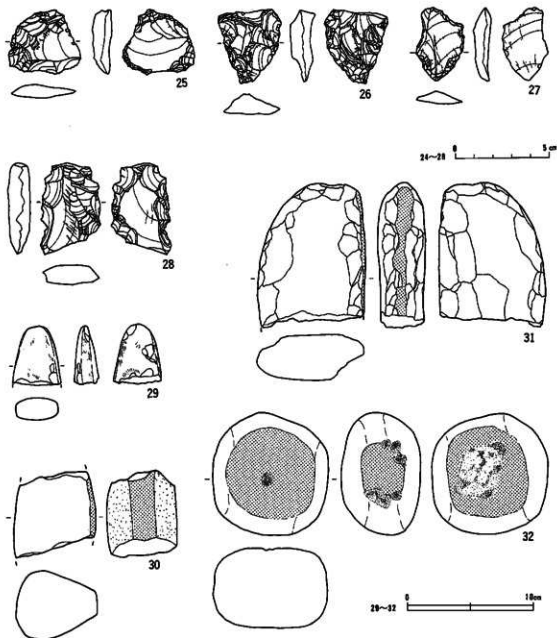
第19圖 IV D 9 c 住居跡出土遺物(1)



番号	出土地点	層位	文様	地文	口径	底径	器高	備考	分類	写真
18	ⅣD9c住	炉	底面近くは横十字。	L.R.横	(21.5)	13.4	(28.5)		Ⅱa 2	133
19	ⅣD9c住	床面	沈線(凹線)、磨面痕文、捺状工具による刺突。	L.R.横	(28.0)	-	(19.0)		Ⅱ3a-f	133
20	ⅣD9c住	床面	沈線(凹線)、捺状工具による刺突、内面ミダキ面著。	L.熟赤文	-	(3.4)	(15.5)	赤色顔料付着。	Ⅱ3a-f	133

番号	出土地点	層位	器種	石質	産地	長さ	幅	厚さ	重さ	備考	分類	写真
21	ⅣD9c住	Q4埋土	不定形石器	珪質泥岩	平石西部	3.0	4.8	0.8	10.07		I a 2	134
22	ⅣD9c住	Q4埋土	不定形石器	珪質泥岩	平石西部	4.1	3.3	1.1	10.04	素材の一端のみ二次加工。	I a 3	134
23	ⅣD9c住	Q4埋土	不定形石器	珪質泥岩	平石西部	6.3	4.6	1.6	17.91	素材のバルブ発達。ネガティブバルブも発達。	I a 2	134

第20図 ⅣD9c住居跡出土遺物(2)



番号	出土地点	層位	器種	材質	産地	長さ	幅	厚さ	重さ	備考	分類	専長
25	IV D 9 c 住	Q 4 堆土	不定形石器	地質泥岩	宇石西部	3.3	3.6	0.7	11.43	刃裏し加工あり。	I b 3	134
26	IV D 9 c 住	床面	不定形石器	地質質細粒凝灰岩	宇石西部	3.9	3.3	1.1	11.96	両面縦線磨状。	III	134
27	IV D 9 c 住	床面	不定形石器	硬質泥岩	宇石西部	3.8	3.5	0.9	6.00		I d 2	134
28	IV D 9 c 住	床面	不定形石器	地質泥岩	宇石西部	4.9	3.2	1.2	19.74	両面縦線磨状。	IV	134
29	IV D 9 c 住	床面	磨製石矛	輝石 燧	北上山地	(4.7)	(3.4)	(1.7)	(60)	欠損品。二次使用の可能性もある。	IV	134
30	IV D 9 c 住	床面	磨製器類A群	凝灰質硬砂岩	北上山地	(9.1)	(5.5)	(2.4)	(380)	平両面2面。斜磨削し。欠損品。	I a 3	134
31	IV D 9 c 住	床面	磨製器類A群	輝石安山岩	莫須山地	(11.4)	(6.4)	(2.6)	(560)	欠損品。	III b 3	135
32	IV D 9 c 住	床面	磨製器類A群	硬砂岩	北上山地	9.6	9.2	6.2	920	両面に磨面。平両部は白石層の凸出。	V	135

第21図 IV D 9 c 住層出土遺物(3)

## ND 0 c 住居跡 (遺構番号 3)

### 遺構 (第22図、写真図版 9)

〈検出状況〉基盤層上面で北側の壁を検出した。ND 0 c 土坑によって切られ、炉の一部が壊されている。西0.8mにND 9 c 住居跡、東1.6mにVD 1 c 住居跡が位置する。

〈形状・規模〉径4 m程のほぼ円形を呈する。

〈壁・壁高〉北側は基盤層である黄褐色土を、南側は暗褐色土を壁とする。壁高は北で40cm、西で38cm、東で25cm、南で7 cmを測る。

〈埋土〉北半部に固く締まった黄褐色土が広く分布する。厚さは一定でなく、平面分布も均一ではない。全体的に粉炭を含み、北西四半部の床直上に異地性の焼土が多く検出された。人為的な堆積と考えられる。

〈床・柱穴・施設〉北半は基盤層を、南半は暗褐色土を床とし、南側は相対的に軟質である。

〈炉〉土器埋設炉で、中央よりやや南寄りに位置する。南西隅はVD 0 c 土坑によって一部壊されている。80×100 cmの範囲を深さ30cm程度掘り下げ、粘土を底面に貼り付けたのち土器を埋設し、シルトで周囲を固定している。さらに幅8～15cm程度の粘土を楕円形に巡らせて区画する。土器(33)は炉の南端に、開口部を炉の中央部に向け、約30度の角度で斜位に埋設されている。

〈石棒〉東壁際において、やや東側に傾くがほぼ直立した状態で検出された。床面基盤層を掘り込んで埋設した痕跡はないものの、黒褐色土を5 cm程度の深さに盛り、その中に据えられている。石棒が底面と接する部分は極めて固く締まっている。

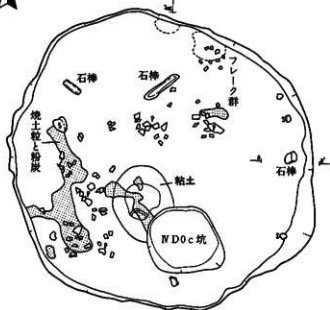
### 遺物 (第23～25図、写真図版135・136)

〈土器〉床面から4778 g、埋土から5133 g 出土した。33は炉に埋設された土器である。地文のみで底部より緩やかに外傾し口縁部付近で緩く外反する器形であるが、土圧によっていびつに変形している。口縁部分で径19×22.8cm、中ほどで19×21cm、底部より5 cmの高さの部分で13.5×14.3cmである。被熱し、脆弱化している。35と36は地文施文後に磨消手法によって曲線的文様を描出している。

〈石器・石製品〉13の上半部は北西四半部の床面に横倒して検出されたもので、WD 8 b 住の石棒と接合したものである。42は両面加工により凸状の刃部を形成する。45は東壁際に直立して検出された石棒である。自然石を敲打によって整形したもので頭部は作り出されない。数箇所に、棒状の工具を用いて意図的に穿ったと考えられる小さな窪みが一定の方向性で観察される。46は加工痕は観察されない。北東四半部壁際から剥片が多量に纏まって出土した。その中には、Rフレ1点、Uフレ11点を数えたが図化は省略した。

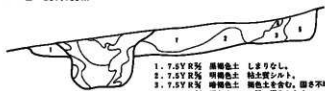
時期 出土遺物から縄文時代中期末葉に属すると考えられる。

E 199  
+ S 158



S 163 +  
E 195

L=261.100m

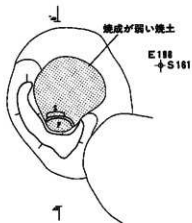


1. 7.5Y R% 黒褐色土 しまりなし。
2. 7.5Y R% 明褐色土 粘土質シルト。
3. 7.5Y R% 暗褐色土 褐色土を含む。礫さ不均一でもうい。
4. 7.5Y R% 褐色土 3層に混入した土。
5. 7.5Y R% 暗褐色土 炭化物が若干混入する。



+ S 165  
E 198

L=268.900m



1. 10Y R% 黒褐色土 しまりなし。褐色土をブロック状に含む。
2. 10Y R% 黒褐色土 しまりあり。褐色土を粒状に含む。

L=285.800m

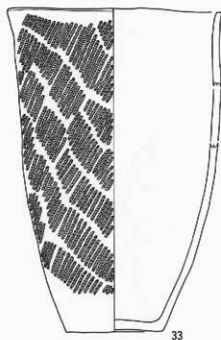


1. 10Y R% 黄褐色 粘土。小内層を少し含む。
2. 2.5Y R% におい赤褐色 1層が焼成を受けたもの。
3. 2.5Y R% 赤褐色 粘土。固い。少量の礫を含む。
4. 7.5Y R% 明褐色 焼成を受けている。

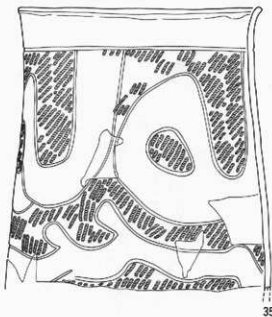


第22図 IV D0c住居跡





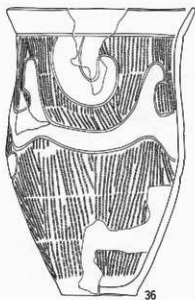
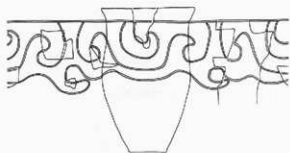
33



35



34

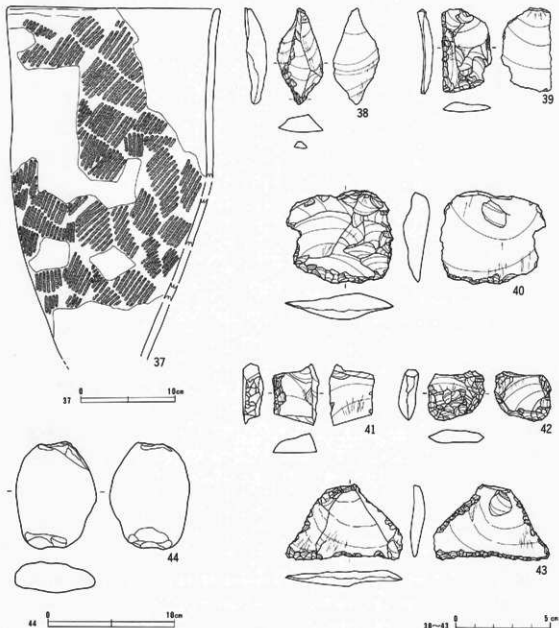


36



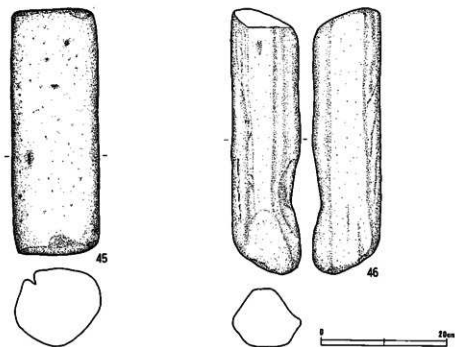
番号	出土地点	層位	文様	地文	口径	底径	器高	備考	分類	写真
33	IV D 0 c 住	炉		R L 縦	22.8	10.0	20.5	つぶれて扁平になっている。	III 3b	135
34	IV D 0 c 住	床面	無文		-	4.0	4.7			135
35	IV D 0 c 住	棟上	沈線(円線)、磨消文、変形J字文	R L 縦	25.8	-	20.2		III 3a7	135
36	IV D 0 c 住	Q 2 埋土	沈線、磨消文、沈消文	L 横糸文	20.0	8.0	30.6		III 3a7	135

第23図 IV D 0 c 住居跡出土遺物(1)



番号	出土地点	層位	文様	地文	口径	底径	器高	備考	分類	写真		
37	ND 0 c 住	埋土		R L 観。	38.4	-	17.0		III 3 b	135		
番号	出土地点	層位	器種	石質	産地	長さ	幅	厚さ	重さ	備考	分類	写真
38	ND 0 c 住	Q 4 埋土	石鏃	粘板岩	北上山地西端	5.1	2.4	1.2	10.10	身部のつくり出しは不明瞭。		135
39	ND 0 c 住	Q 4 埋土	不定形石器	硬質泥岩	礫石西部	4.4	2.6	0.5	6.38		I a 1	135
40	ND 0 c 住	Q 4 埋土	不定形石器	硬質泥岩	礫石西部	4.9	5.7	1.4	32.43		II	135
41	ND 0 c 住	Q 4 埋土	不定形石器	地質泥岩	礫石西部	3.2	2.5	1.1	9.60		I a 3	136
42	ND 0 c 住	Q 4 埋土	不定形石器	地質泥岩	礫石西部	2.6	3.0	0.9	7.58	正面観は強い丸凸状。側面観は直線状。	1 b 4	136
43	ND 0 c 住	Q 2 埋土	不定形石器	硬質泥岩	礫石西部	4.0	6.2	0.9	17.67	バルブの一部をとり除く加工。	I a 3	136
44	ND 0 c 住	埋土下位	石鏃	凝灰岩	北上山地	8.9	6.4	2.5	170		I	136

第24図 ND 0 c 住居跡出土遺物(2)



番号	出土地点	層位	器種	材質	産地	長さ	幅	厚さ	重さ	備考	分類	写真
45	VD0c住	床面	石押	流紋岩	松尾(長巻郡)	39.2	13.7	12.3	1025g		136	
46	VD0c住	床面	石押	流紋岩	北上山地	42.3	10.7	9.4	1890g	磨損部が不規則六角形となる様を看す。表面はやや粗らか。	136	

第25図 VD0c住層跡出土遺物(3)

#### VC0f住層跡 (遺構番号4)

##### 遺構 (第26図、写真図版10)

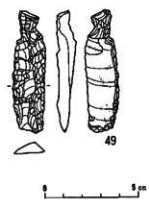
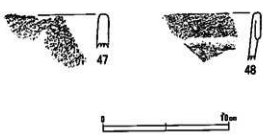
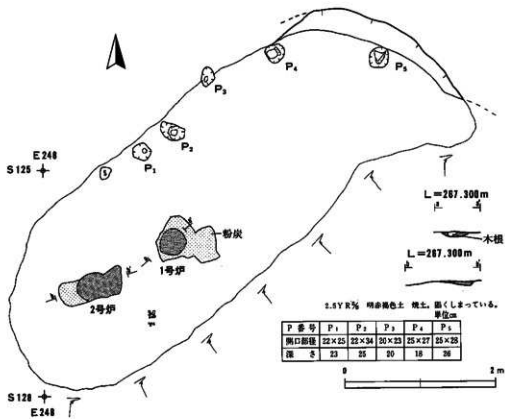
〈検出状況〉Ⅲ層の暗褐色土上面で黒褐色の落ち込みとして検出したが、北側は道路工事に伴い土が移動しており、南側はなだらかな斜面となっていてプランは確定できなかった。しかし、柱穴と焼土が確認され、住層跡と認定した。

〈形状・規模〉平面形は柱穴の配置からは長方形ないしは楕円形が推定される。規模は、残存値で270×650cmである。

〈壁・壁高〉北東四半部でのみ確認できた。基盤層を壁として緩やかに立ち上がり、壁高は6.4cmを測る。

〈埋土〉上位は黒褐色土、下位は暗褐色土と大別される。黒褐色土は遺物と粉炭を包含する。

〈床・柱穴・施設〉北半は基盤層を床とし固く締まっている。南半は暗褐色土でやや締まりに欠ける。床面は凹凸はほとんど無いが、南側がやや低くなっている。柱穴は5個検出されたが、いずれも径20cm深さ20cm前後でほぼ同規模である。壁際に並んでいたものと想定される。



番号	出土地点	層位	文様	地文	口徑	底部径	高さ	備考	分類	写真
47	VC0f住	埴土		L.R.0段多量。				編織をおく含む。乾割。		136
48	VC0f住	埴土	腹合口縁。	L.R.横。				焼成良好。硬質。		136

番号	出土地点	層位	器種	石質	産地	長さ	幅	厚さ	重さ	備考	分類	写真
49	VC0f住	埴土上段	石甕	粉板岩	北上山地	6.5	1.8	1.1	8.95		I b 1	136

第26図 VC0f住居跡・出土遺物

〈炉〉長軸の西側に偏った位置に、地床炉が2基検出された。まわりには粉炭が分布する。東側のものを1号炉、西側のものを2号炉とする。1号炉の焼土は35×38cmの範囲に分布し、厚さは最大で10cmを測る。中央部は木根により攪乱を受けているが、他は固く締まっている。2号炉の焼土は30×60cmの範囲に分布し、最大厚は8cmで固く締まっている。

遺物 (第26図、写真図版136)

〈土器〉埋土から225g出土した。47は植物性繊維を多く混入する前期初頭の土器で、縄文の施文方向は不定である。48は折り返し口縁で口縁部・胴部に単節斜縄文が施文される。焼成が良好で硬質である。中期初頭の土器であろう。他にも縄文のみの小さい破片が出土している。

〈石器〉フレークが埋土から1点出土している。

時期 出土遺物からは時期を特定できない。

#### V D 1 c 住居跡 (遺構番号5)

遺構 (第27図、写真図版11)

〈検出状況〉Ⅲ層上面で黒褐色土が円形に分布することから検出した。斜面下方に当たる南側は一部流失により不明である。東には1m離れてV D 2 c 住居跡が、西1.5mの距離にV D 0 c 住居跡が位置する。

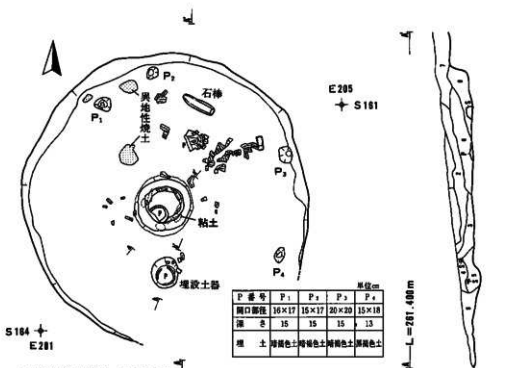
〈形状・規模〉南側が一部不明であるが、径4m程度の円形を呈する。

〈壁・壁高〉斜面上方の北側は基盤層を、他はⅢ・Ⅳ層を壁とし、壁高は北壁40cm、西壁24cmを測り、東壁は試掘トレンチにより削られたため10cmの残存値を示す。

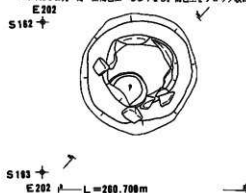
〈埋土〉全体的に粉炭ないしは長さ5cm程度の細かい炭化材を含み、床面まで達する。壁際には一部崩落土を含むが、黒色～黒褐色が卓越し締まりに欠ける。

〈床・柱穴・施設〉北半は基盤層で固く締まっているが、南半は暗褐色土でやや軟質である。柱穴が4個検出された。4個とも径15～20cm、深さ15cm程度ではほぼ同規模である。しかし、P 1～P 3の埋土は暗褐色土であるのに対し、P 4のそれは黒褐色土で固く締まっていることから、4個すべてが対応するものではない可能性がある。北半部の床面から床面直上にかけて焼土と炭化材が検出された。焼土は3箇所分布し、粘土質シルトが焼成をうけたもので固く締まっている。床面との間に5～10cm程暗褐色土を挟むことから異地性のものである。炭化材は北東四半部に密に分布するが、いずれも脆弱であり、分布状況等から規則性を見出すことはできない。樹種は床面出土のものはすべてナラで、断面観察では丸木材と考えられる。

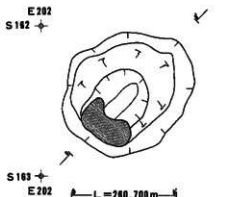
〈炉〉ほぼ中央に位置し、直径約80cmの円形をなす。外郭に幅15～20cm、厚さ4～5cmにわたり褐色の粘土を貼り付けている。内側には円周に沿って長さ15～25cm程度の偏平な角礫を9個巡らしている。炉の南側に、開口部を北壁に向けて約40度の角度で斜位に土器が埋設されてい



- S164 +  
E281
- 7.5Y R% 暗褐色土 黒褐色土を含む。
  - 7.5Y R% 黒褐色土 黒褐色土を含む。
  - 10Y R% 黒褐色土 黒褐色土をブロック状に含む。炭化物を含む。
  - 7.5Y R% 褐色土 しまりなし。暗褐色土を少量含む。
  - 10Y R% 暗褐色土 しまりなし。黒褐色土を少量含む。炭化物とを微量含む。
  - 10Y R% におい黄褐色土 しまりなし。黒褐色土を少量含む。炭化物を微量含む。
  - 7.5Y R% 黒褐色土 しまりなし。暗褐色土をブロック状に含む。
  - 10Y R% 暗褐色土 しまりなし。暗褐色土を少量含む。炭化物を含む。
  - 7.5Y R% 暗褐色土 しまりなし。暗褐色土をブロック状に含む。

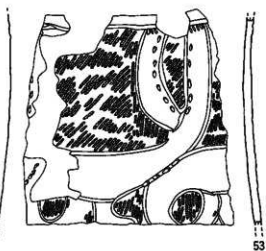
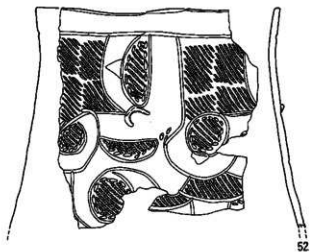
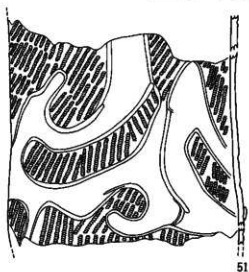
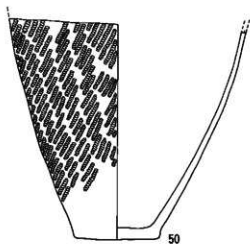


- 10Y R% 褐色土 粘土。固くしまっている。伊の礫層土。
- 2.5Y R% 赤褐色土 粘土。1層の礫層土。
- 7.5Y R% 褐色土 固くしまっている。伊の礫層土。
- 7.5Y R% - 7.5Y R% 暗褐色土 - 黒褐色土 きわめて固い。硬況。粘土粒を若干含む。
- 5Y R% 暗赤褐色土 しまりなし。多量の礫。粘土粒を含む。
- 5Y R% 暗赤褐色土 粘土が塊状を受けたもの。
- 2.5Y R% 赤褐色土 粘土。固くしまる。
- 5Y R% 赤褐色土 しまりなし。粘土。暗褐色土。礫状を含む。
- 7.5Y R% - 暗褐色土 砂。しまりなし。
- 10Y R% 褐色土 しまりなし。



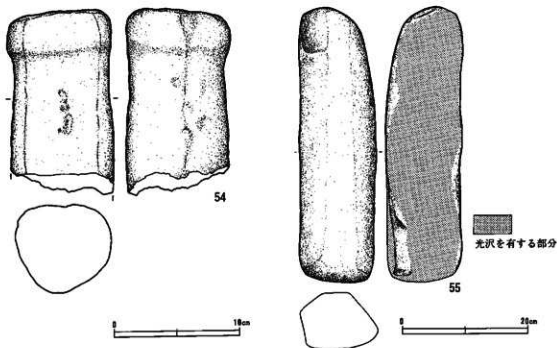
- 7.5Y R% 暗褐色土 褐色土を粉状に含む。
- 10Y R% 褐色土
- 10Y R% 暗褐色土
- 10Y R% 暗褐色土

第27図 YD1c住居跡



番号	出土地点	層位	文様	地文	口徑	底形	器高	器号	分類	写真
50	VD1c住	伊		R L織	-	9.0	(22.3)		器3b	137
51	VD1c住	埋没土器	沈麻(紅縹)、藤須織文、棒状工具による刺突	L R織	-	-	(24.3)		器3a4	137
52	VD1c住	床面	沈麻(紅縹)、藤須織文、変形J文字、棒状工具による刺突、縹状突起	L R織	(26.0)	-	(22.3)		器3a4	137
53	VD1c住	床面	沈麻(紅縹)、藤須織文、変形J文字、棒状工具による刺突	R L織	-	-	(22.3)		器3a4	137

第28図 VD1c住居跡出土遺物(1)



番号	出土地点	層位	器種	石質	産地	長さ	幅	厚さ	重量	備考	分類	写真
54	VD1c住	床面	石碑	流紋岩	北上山地	(34.7)	8.2	7.0	(326)	基部を存り遺す、断面は円形を呈すがやや三角形状となる。	137	
55	VD1c住	床面	石碑	流紋岩	北上山地	(45.3)	11.1	8.5	5650		137	

第29図 VD1c住居跡出土遺物(2)

る。土器の周囲は焼成をうけて固く締まったシルトで覆われる。土器の地山への接地面には細砂が一面に敷かれている。炉は粉炭、焼土粒を多く混入した暗褐色土で、土器の内部には灰を含み極めて締まりのない赤灰色土に覆われる。炉内出土の炭化物はケヤキと鑑定された。

〈床面埋設土器〉炉の南端から40cmの位置に検出された。直径約40cm深さ約20cmの掘り方を持ち、体部上半を正立に埋設している。内部は黒色ないしは暗褐色土で満たされる。

遺物(第28・29図、写真図版137)

〈土器〉床面から6254g、埋土から85g出土した。50は炉内に埋設された土器である。地文のみで、胴下半部を利用している。51～53は磨消し無文帯により曲線的文様を描き、鐘状突起が施される。51は住居南側の床面に埋設された土器である。口縁部と胴下半部は欠損している。52・53は沈線によって区画された円形または楕円形には、区画線に沿って斜位方向から連続した刺突文が施される。52は区画内に、53は無文帯に施される点異なる。

〈石器・石製品〉54は東壁寄りの床面から出土した。断面形はやや三角形状で、頭部を僅かに



作り出している。側面の一部に溝状に窪みが形成されている。55は北壁寄りの床面から出土した。加工した痕跡は見えないが側面の一部はやや凹凸があるが光沢を有する。

時期 出土遺物から縄文時代中期末葉に属すると考えられる。

#### VD2c住居跡（遺構番号6）

遺構（第30図、写真図版12）

〈検出状況〉Ⅲ層上面で黒褐色土が円形に分布することから検出した。並列して検出された5棟の住居のうち東端に当たり、西1mにはVD1c住居跡が位置する。

〈形状・規模〉南側が一部不明であるが、径4m程度の円形を呈する。

〈壁・壁高〉斜面上方の北側は基盤層を、他はⅢ・Ⅳ層を壁とし、壁高は北壁40cm、西壁30cm、東壁25cmである。

〈埋土〉全体的に粉炭ないしは長さ5cm程度の細かい炭化材を含み、床面まで達する。壁際には一部崩落土を含むが、黒色～黒褐色が卓越し締まりに欠ける。

〈床・柱穴・施設〉基盤層で固く締まっており、ほぼ水平で平坦である。柱穴は検出されなかった。床面ないし床直上から焼土と炭化材が検出された。焼土は明瞭なものは3箇所分布し、粘土質シルトが焼成をうけたもので固く締まっている。床面との間に5～10cm程暗褐色土を挟むことから異地性のものである。炭化材は北側と南東部に密に分布しているが、いずれも脆弱であり、材の原形をとどめるものは殆どない。残存状況のよいものの断面観察では丸木材と考えられる。樹種は、1点は針葉樹（詳細不明）で、それ以外はすべてケヤキである。

〈炉〉ほぼ中央に位置し、直径約80cmの円形をなす。外郭に幅10～20cm、厚さ4～5cmにわたり褐色の粘土を貼り付けている。内部は細かい炭化物を含む暗褐色土に覆われ、床面より15cm程下の炉の中央部分にあたる位置に正立に埋設された土器が検出された。掘り方は土器の径と殆ど変わらない。土器の周りの土には焼成をうけた痕跡はみられない。

遺物（第31・32図、写真図版137・138）

〈土器〉実測図で表した2点のみの出土である。56は炉の埋設土器である。沈線によって区画した後、充填手法による縄文帯で丁字状または逆C字状および波頭状の文様を描く。土器に被熱の痕跡は明瞭ではない。57は埋土中位から床直上にかけて出土したものである。磨削手法による無文帯で、下部を連結させた丁字文を描き、連結部区画を斜め下方からの刺突によって充填している。無文帯はミガキがかけられる。

〈石器・石製品〉59は西側の床面から出土したもので、加工痕は観察されない。西壁際の床面にはりついた状態で多数のフレーク（零石産・珪質泥岩他）が纏まって検出された。60は東側の床面から出土した。敲打によって整形し頭部を僅かに作り出している。一側面に縦方向にや



L = 281.000 m



1. 10Y R% 黒褐色土 しまりなし。暗褐色土を含む。
2. 10Y R% 黒褐色土 褐色土をブロック状に含む。炭化物を含む。
3. 10Y R% 褐色土 粘土質土。固くしまっている。
4. 10Y R% 暗褐色土 ややしまる。
5. 10Y R% 暗褐色土 しまりなし。砂炭を微量含む。
6. 10Y R% 褐色土 暗褐色土を含む。



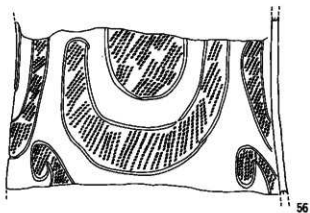
L = 280.300 m



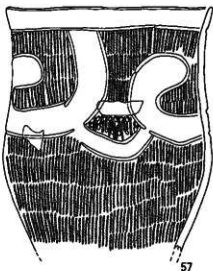
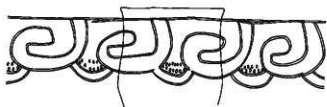
1. 暗褐色土 しまりなし。粉炭を含む。
2. 暗褐色土 焼成を受けている。しまりなし。炭化物を含む。
3. におい黄褐色土 粘土。固くしまっている。焼成を受けている。
4. 褐色土 黒褐色土を含む。
5. 黒褐色土 しまりなし。炭質炭化物を含む。  
(土器の内面の土は5層と同じ)



第30図 VD2c住居跡



56

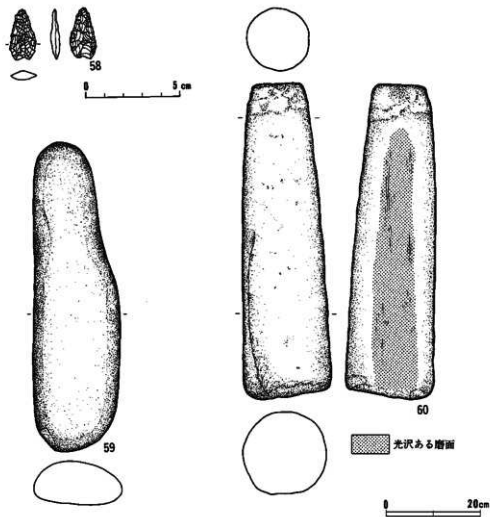


57



番号	出土地点	層位	文様	地文	口径	底径	器高	番号	分類	写真
56	VD 2 c 住	IV <sup>a</sup>	沈線(凹線)、彫明鏡文、J字文、波羅文	L.R.L.横	-	-	(19.0)		第3 a	137
57	VD 2 c 住	埋土中位	沈線区画と彫明によるJ字文、竹管刺突	L.R.横未文	21.9	-	(25.0)		第3 a /	137

第31図 VD 2 c 住層跡出土遺物(1)



番号	出土地点	層位	母岩	材質	産地	長さ	幅	厚さ	重さ	備考	分類	容尺
58	VD2c住	Q3埋土	石旗	粘板岩	北上山地	2.7	1.4	0.5	1.27			138
59	VD2c住	床面	石神	凝灰質硬砂岩	北上山地	32.3	9.3	4.7	2180			138
60	VD2c住	床面	石神	アイサイト	奥羽山地	33.5	9.3	8.6	2900	磨面を僅かに作り出す、磨面に今や光沢があり。		138

第32図 VD2c住居跡出土遺物(2)

や光沢がある。

時期 床面出土遺物から縄文時代中期末葉に属すると考えられる。

#### VD2d住居跡（遺構番号7）

##### 遺構（第33図、写真図版13）

〈検出状況〉VD2c住居跡の南1mに位置し、縄文時代中期末に属する他の5棟のように位置関係の上で規則性は見出せない。基盤層まで下げた試掘トレンチで落ち込みとみられる暗褐色のラインが検出され、住居の北壁と想定して精査に入った。しかし、斜面下方では全体が暗褐色土で壁は確認されず全容は明らかでない。だが、床面の一部と考えられる平坦な部分があること、その一部に埋設土器が検出されたことから、住居跡として認定した。

〈形状・規模〉斜面上方にあたる北壁のみ残存し、形状、規模とも不明である。

〈壁・壁高〉基盤層で、壁高は17cmである。

〈埋土〉締まりを欠く暗褐色土を主体とする。壁際には崩落土を含み、一部擾乱がある。

〈床・柱穴・施設〉平坦な部分は固く締まっている。柱穴は検出されない。

〈埋設土器〉ほぼ同一地点で2個体が検出された。一方は明瞭な掘り方をもつ。

##### 遺物（第33図、写真図版138）

〈土器〉61と62は隣接して埋設された土器である。61は2段の縄の燃系による充填文であり、無文帯は丁寧なナデによって調整される。62は胴下半部で地文のみである。64は凹線で口縁部無文帯と区画される。65は胴部に展開する曲線的無文帯が口縁部と接する位置に刺突が施される。

時期 出土遺物から縄文時代中期末葉に属すると考えられる。

#### VIC2g住居跡（遺構番号8）

##### 遺構（第34図、写真図版14図）

〈検出状況〉A区東斜面はII層を欠き、I層が厚く堆積しているが、その下の暗褐色土を掘り込んでいる。本住居の床面下からVIC2g-2住居跡が検出された。

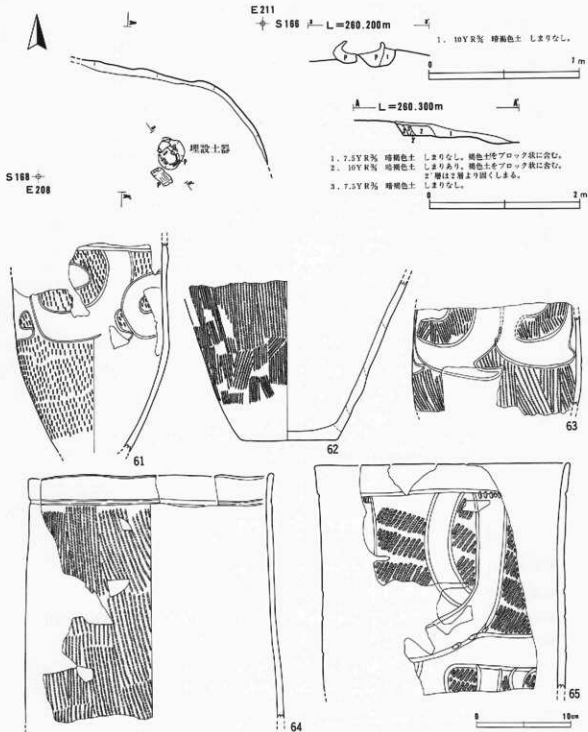
〈形状・規模〉南壁は斜面下位で流失しているが、平面形は長軸が等高線にほぼ平行する長方形を基調とすると考えられる。長軸は推定値で2m、短軸は1.4mである。

〈壁・壁高〉やや軟質の褐色土で、ほぼ直立している。壁高は北で13cm、西で17cm、東で5cmを測る。

〈埋土〉黒褐色土と褐色土で構成される。黒褐色土には褐色土がブロック状に混入するが、軟らかく粉炭を少量含む。暗褐色土はさらに締まりがない。

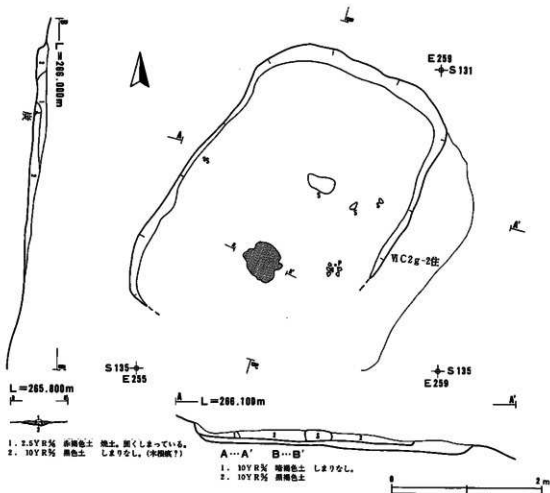
〈床・柱穴・施設〉暗褐色土と褐色土の混土で、やや軟質である。貼床と考えられる。柱穴は検出されない。

〈炉〉長軸の南側に偏った位置に、地床炉1基が検出された。焼土は45×50cmの範囲に分布し、



番号	出土地点	層位	文様	地文	口径	胎厚	器高	備考	分類	写真
61	VD2d住	床面	沈線(四線)、帯消縄文、J字文。	L 隠赤文	—	—	(22.0)		Ⅱ3a7	136
62	VD2d住	埋設土器		L 隠赤文	—	10.1	(17.0)		Ⅱ3b	136
63	VD2d住	床面	沈線(四線)、帯消縄文。	L 隠赤文	—	—	(12.0)		Ⅱ3a1	136
64	VD2d住	床面	沈線(四線)、帯消縄文。	L 隠赤文	(29.0)	—	(28.3)		Ⅱ3b	136
65	VD2d住	埋土	沈線(四線)、帯消縄文、棒状工具による刺突。	R L 縦	(27.2)	—	(24.1)		Ⅱ3a1	136

第33図 VD2d住居跡・出土遺物



第34図 VC2g住居跡

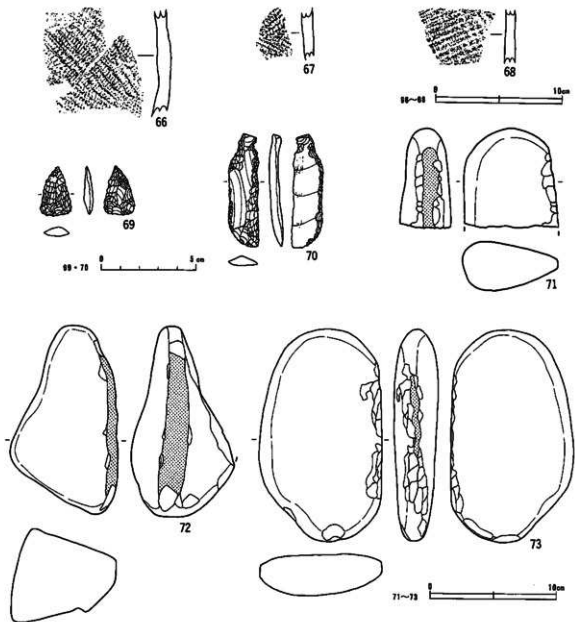
厚さは6cmで固く締まっている。中央部は木根により、攪乱を受けている。

遺物 (第35図、写真図版138・139)

<土器>床面直上から、破片が205g出土した。67・68のように繊維を含むものが多い。66は繊維を含まない。

<石器>69は石鏃であるがやや対称性を欠く。70は右側縁は片面から丁寧な加工が施されるのに対し、左側縁は小刻彫が表裏に連続している。打面調整刻彫の技法であろう。他にUフレ2点、フレーク1点出土した。

時期 破片のみの出土であるが床面出土土器から、縄文時代前期初頭から前葉に属すると考えられる。



番号	出土地点	層位	文様	地文	口径	底部径	高さ	備考	分類	写真
66	VIC 2 g 住	床面上		L.R 縦 (0 段多線)					B 2	136
67	VIC 2 g 住	床面上		L.R の回転方向を変えた羽状縦文。				磨滅没入。	D 1 c 7	136
68	VIC 2 g 住	床面上		L.R 縦。				磨滅没入。	D 1 b	136

番号	出土地点	層位	器種	石質	産地	長さ	幅	厚さ	重量	備考	分類	写真
69	VIC 2 g 住	床面	石製	硬質泥岩	宇石田新	2.6	1.7	0.5	1.64		1 2	136
70	VIC 2 g 住	床面	石製	硬質泥岩	宇石田新	6.0	1.6	0.8	16.47		1 b 2	136
71	VIC 2 g 住	床面	麻布巻層 A 群	緑色質凝灰岩	北上山地	(7.8)	7.4	3.8	(305)		1 a 1	136
72	VIC 2 g 住	床面	麻布巻層 A 群	緑色凝灰岩	北上山地	(13.1)	(7.8)	(7.0)	(300)		1 a 1	136
73	VIC 2 g 住	床面	麻布巻層 A 群	凝灰岩	北上山地	16.8	9.7	3.2	859		1 b 2	136

第35図 VIC 2 g 住居跡出土遺物



## VI C 2 g - 2 住居跡 (遺構番号 9)

### 遺構 (第36図)

〈検出状況〉VI C 2 g 住居跡の床面の下から現地性の焼土を検出し、先行する住居として確認された。本住居はVI C 2 g 住居跡より東壁が30cm程東に広がる。

〈形状・規模〉南壁は斜面下位で流失しているが、平面形は長軸が等高線に平行する長方形を基調とし、長軸は推定値で4.8m、短軸は3.4mである。

〈壁・壁高〉基盤層である黄褐色土を壁とし、壁高は斜面上位である西壁で26cm、北で13cm、東で19cmを測る。

〈埋土〉暗褐色土の単層である。VI C 2 g 住居跡の貼り床と考えられる。

〈床・柱穴・施設〉基盤層を床とし、固く締まっている。ややうねりがあり斜面に沿って幾分傾斜する。柱穴は検出されない。

〈炉〉長軸線上に2基の地床炉を検出した。この2つの炉は同一のレベルにあり同時に使用されたものと考えられる。南側のものを1号炉、北側のものを2号炉とする。1号炉の焼土は45×65cmの範囲に分布し、厚さは最大8cmである。木根により攪乱を受けている。2号炉の焼土は78×85cmの範囲に分布し、厚さは最大10cmである。

### 遺物

〈石器〉床面から花崗岩質の円形の磨石が1点出土したが、極めて脆く崩壊してしまい図化できなかった。

時期 重複関係・住居形態等から、縄文時代前期初頭から前葉に属すると推定される。

## VI C 3 h 住 (遺構番号10)

### 遺構 (第37図、写真図版15)

〈検出状況〉A区の東斜面に位置する。V層上面で検出した。

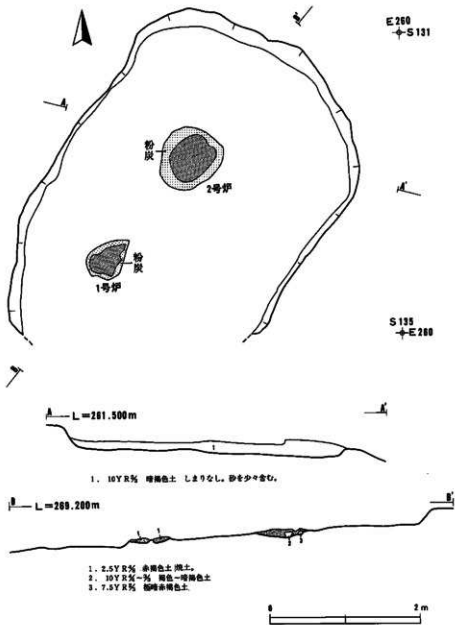
〈形状・規模〉東側は斜面下方で流失しているため不明であるが、平面形は長軸が等高線に平行する楕円形と推定される。規模は長軸が3.25m、短軸が推定で1.8mである。

〈壁・壁高〉やや軟質な暗褐色土褐色土を壁とし、やや外傾する。壁高は斜面上方の西で10cm、北で15cmを測る。東と南は流失により不明である。

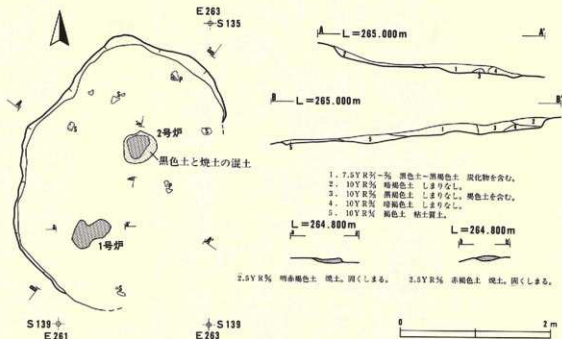
〈埋土〉黒色～黒褐色土を主体とし、粉炭を含む。軟らかく締まりがない。

〈床・柱穴・施設〉斜面に沿ってやや傾斜する。全体的に軟質である。柱穴は検出されない。

〈炉〉長軸線上に2基の地床炉を検出した。2基とも同レベルにあり、同時に使用されたものと考えられる。南側のものを1号炉、北側のものを2号炉とする。1号炉の焼土は37×54cmの範囲に分布し厚さは最大6cm、2号炉の焼土は43×45cmのほぼ円形を呈し厚さは最大で7cmで



第36图 VIC 2g-2住居跡



第37図 VIC3h住居跡

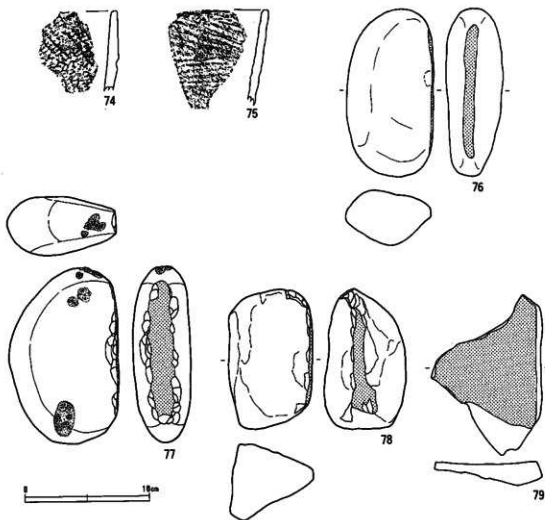
ある。いずれも固く締まっている。

遺物 (第38図、写真図版139)

<土器>床面から破片のみ 425 g 出土した。いずれも繊維を僅かに含む。74は破片中央部にループ文が横走している。75は捺糸文がやや方向を変えて施文されている。

<石器>79は偏平な自然石の一面を平滑になるまで使用したものであるが、擦った方向までは観察できない。

時期 破片のみの資料であるが出土土器から、縄文時代前期初頭から前葉に属すると考えられる。



番号	出土地点	層位	文様	地文	口縁	底縁	器高	備考	分類	写真		
74	ⅤC3h住	床面		R L模。				縦線を僅かに含む。	Ⅱ2b	130		
75	ⅤC3h住	床面		R 横糸文、横団紋。				縦線を僅かに含む。焼成良好。	Ⅱ2c	130		
番号	出土地点	層位	器種	石質	産地	長さ	幅	厚さ	重さ	備考	分類	写真
76	ⅤC3h住	床面	胎野部類A群	凝灰質硬砂岩	北上山地	13.3	6.6	6.7	555	割線無し。	Ⅱa1	130
77	ⅤC3h住	床面	胎野部類A群	硬砂岩	北上山地	14.1	6.6	4.5	890	凹石と模金。	Ⅱa1	130
78	ⅤC3h住	床面	胎野部類A群	チャート	北上山地	11.1	6.6	6.4	600		Ⅱa1	130
79	ⅤC3h住	床面	胎石	凝灰質硬砂岩	北上山地	(11.6)	(6.6)	(5.2)	(1000)	砂質の塊の一面が、平造りになるまで磨製されている。		130

第36図 ⅤC3h住居跡出土遺物

#### VI C 0 g 住居跡 (遺構番号11)

##### 遺構 (第39図、写真図版16)

〈検出状況〉西尾根の麓の埋没谷の際に位置する。厚く堆積した暗褐色土層が消滅して黒褐色土に変わる地点であり、土層の様相は一定でなく、平面プランとしては検出できなかった。地床炉と思われる現地性焼土を検出した後に北壁と西壁を確認した。

〈形状・規模〉東側は掘り過ぎにより不明であるが、北壁と西壁のラインおよび東側の斜面の状況から長軸が等高線に平行する長方形基調のプランを推定できる。規模は不明であるが、周囲の地形を考えると1.2×2.7m程度になるのではないかと考えられる。

〈壁・壁高〉黒褐色土と黄褐色土の混土層を壁とし、やや外傾する。壁土は縮まりを欠く。壁高は西で17cm、北で15cmを測る。

〈埋土〉暗褐色土に黒褐色土をブロック状に含む。暗褐色土層を起源とするものと考えられる。縮まりを欠く。

〈床・柱穴・施設〉黒褐色土と黄褐色土の混土層で、埋土よりは縮まるものの軟質である。ほぼ水平で平坦である。柱穴は検出されない。

〈炉〉長軸線上の南壁寄りに位置する地床炉1基を検出した。焼土は72×77cmの楕円形状に分布し、厚さは最大9cmである。南側に細かい炭化物がみられる。

##### 遺物 (第39図、写真図版139・140)

〈土器〉80は北壁寄りの埋土下位で一括出土したものである。縄端を片結びした2段の縄を縦回転させたもので、口唇部にはその一部分に指頭状の圧痕が施される。他の例では数個連続する場合が多いが、欠損して不明である。

〈石器〉石鏃1点のみの出土である。

時期 出土土器から縄文時代前期後葉から末葉に属するものと考えられる。

#### VI D 5 f 住居跡 (遺構番号12)

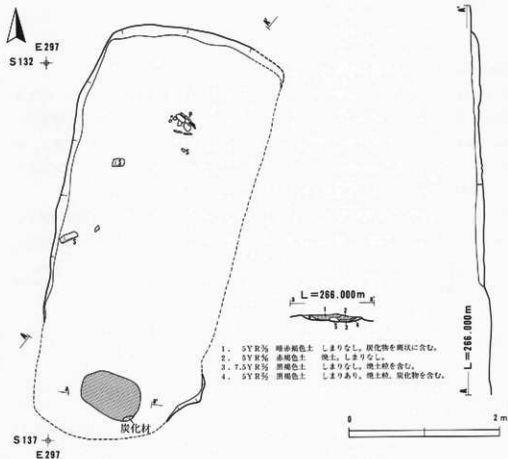
##### 遺構 (第40図、写真図版17)

〈検出状況〉西尾根の南麓に位置する。暗褐色土上面で黒色の落ち込みとして検出した。北壁は倒木痕により攪乱を受けている。

〈形状・規模〉等高線にほぼ平行し、東西方向に長軸をもつ隅丸長方形である。規模は、長軸4.9m、短軸2.6mである。

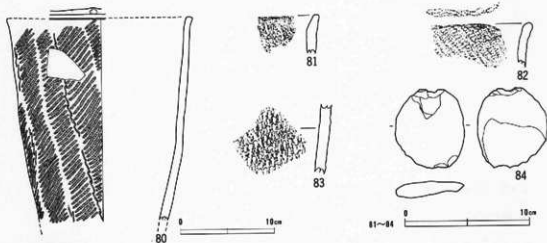
〈壁・壁高〉暗褐色土と黄褐色の混土層を壁とし、ほぼ直立する。壁土は固いものではない。壁高は東壁14cm、西壁20cm、南壁7cm、北壁23cmである。

〈埋土〉上位は黒色土、下位は黒褐色土を主体とし、崩落土である褐色土を幾分混入する。と



1. 5Y R% 褐色細色土 しまりなし、炭化物を塊状に含む。
2. 5Y R% 赤褐色土 焼土、しまりなし。
3. 7.5Y R% 黒褐色土 しまりなし、焼土粒を含む。
4. 5Y R% 黒褐色土 しまりあり、焼土粒、炭化物を含む。

1. 10Y R% 暗褐色土 しまりなし、黒褐色土をブロック状に含む。



番号	出土地点	層位	文様	地文	口径	底径	器高	備考	分類	写真
80	VIC 0 g 住	埋土下位	口唇部付転、口唇部文様あり。		(11.7)	-	(20.7)		II 6 3	139
81	VIC 0 g 住	埋土下位		縦位焼結文。					II 6	140
82	VIC 0 g 住	埋土下位	口唇部にも唇部付転又は唇部付転。地文と異なる原形。	R L 横。					II 6	140
83	VIC 0 g 住	埋土下位		多輪段条状。					II 6	140

番号	出土地点	層位	器種	材質	産地	長さ	幅	厚さ	重さ	備考	分類	写真
84	VIC 0 g 住	埋土下位	石鉢	凝灰岩	北上山地	6.3	5.5	1.2	50		I	140

第39図 VIC 0 g 住居跡・出土遺物



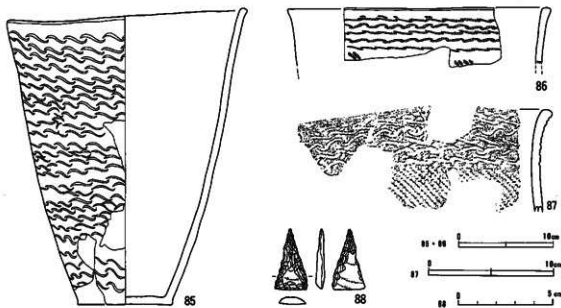
5 cmである。

遺物 (第41図、写真図版140)

<土器>床面から 815 g、埋土から 399 g 出土した。85は北東方向の床面から一括出土したものである。胎土に繊維が混入され、全面にS字状連鎖沈文が施される。口唇部はほぼ平坦になでられる。86・87は口縁部には綾結文が重畳するが、綾結文の間にも斜縄文が観察される。胴部には一面に斜縄文が施される。86・87は繊維をふくんでいる。

<石器>88の1点のみ出土した。やや対称性を欠く石鏃である。

時期 出土土器から、縄文時代前期中葉に属するものと考えられる。



番号	出土地点	層位	文様	施文	口縁径	胴径	器高	番号	分類	写真
85	ⅧD5f住	床面		S字状連鎖沈文。	25.5	(20.0)	31.0		Ⅱ4	140
86	ⅧD5f住	埋土	重畳する横位綾結文。	R.L.様。	(20.4)	-	(16.1)		Ⅱ3a	140
87	ⅧD5f住	埋土	重畳する横位綾結文。	R.L.様。					Ⅱ3a	140

番号	出土地点	層位	器種	材質	産地	長さ	幅	厚さ	重さ	番号	分類	写真
88	ⅧD5f住	埋土	石鏃	粘板岩	北上山地	3.2	1.7	0.35	1.30		Ⅱ4	140

第41図 ⅧD5f住居跡出土遺物



VID7g住居跡 (遺構番号13)

遺構 (第42図、写真図版18)

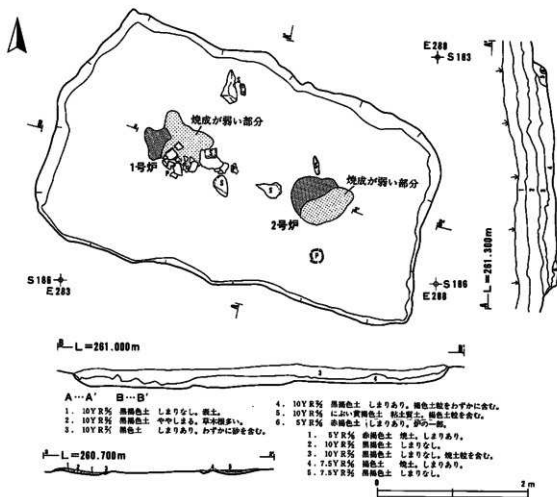
<検出状況>西屋根の南麓に位置する。暗褐色土上面で黒色の落ち込みとして検出した。

<形状・規模>ほぼ等高線に平行し、東西方向に長軸をもつ隅丸長方形である。規模は、長軸5.1m、短軸3.1mである。

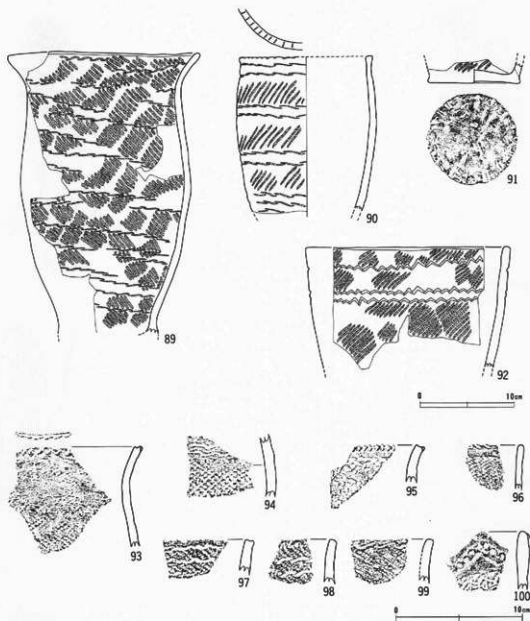
<壁・壁高>暗褐色土と黄褐色の混土層を壁とし、やや外傾する。壁土は固いものではない。壁高は東壁17cm、西壁15cm、南壁18cm、北壁28cmである。

<埋土>上位は黒色土、下位は黒褐色土を主体とし、崩落土である褐色土を幾分混入する。ともに締まりを欠く。自然堆積と思われる。

<床・柱穴・施設>暗褐色土と黄褐色の混土層で、やや軟質である。斜面に沿って南西方向に

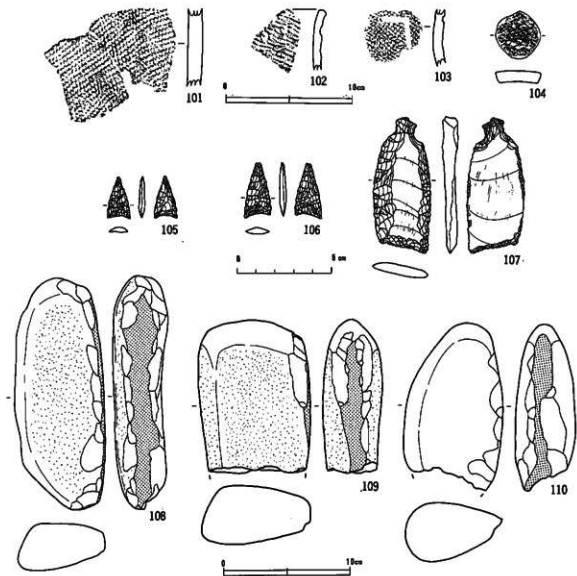


第42図 VID7g住居跡



番号	出土地点	層位	文様	地文	口径	底径	高さ	備考	分類	写真
89	VID 7 g 住	床面		S 1 文、横位波状文。(20.4)	—	—	—	—	Ⅱ	140
90	VID 7 g 住	Q1 埋土	口縁部右方向からの爪形圧痕。	L 2 文、横位波状文。(14.2)	—	—	—	—	Ⅱ 6 b 6	140
91	VID 7 g 住			L 1 文様	—	—	—	—	Ⅱ 6	140
92	VID 7 g 住	埋土	縦直交沈線。	L 1 文様	(22.6)	—	(12.8)	—	Ⅱ 5	140
93	VID 7 g 住	床面	口縁部棒状工具による刻み。S 字状波状文。	縦線。					Ⅱ 4	140
94	VID 7 g 住	埋土	横位波状文。	縦線。				縦線力字か痕入。	Ⅱ 2 a	141
95	VID 7 g 住	Q1、Q2 埋土	口縁部刻み目。(縦線工具による、右側からの駒文)	縦線。				縦線力字か痕入。	Ⅱ 2 a	141
96	VID 7 g 住	埋土	口縁部棒状工具による斜交刻み。	縦線?				縦線力字か痕入。	Ⅱ 2 a	141
97	VID 7 g 住	埋土		R 1 文、横位波状文。					Ⅱ 3	141
98	VID 7 g 住	埋土		R 1 文、横位波状文。					Ⅱ 3	141
99	VID 7 g 住	埋土		R 1 文、横位波状文。					Ⅱ 2 b	141
100	VID 7 g 住	埋土	波状沈線、口縁部棒状工具による刻み? (縦線?)、S 字状波状文。						Ⅱ 4	141

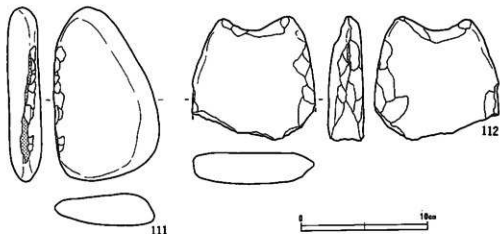
第43図 VID 7 g 住居跡出土遺物(1)



番号	出土地点	層位	文様	地文	口徑	底徑	高さ	備考	分類	写真
101	VID 7 g 住	埋土		縦横縄文。					織線器入。	II a 141
102	VID 7 g 住	埋土		R L 0段多象。又はRR。					織線器入。	II b 141
103	VID 7 g 住	埋土	沈線(縦齒状?)	R L線。						II c 141
104	VID 7 g 住								織線器入。	141

番号	出土地点	層位	器種	材質	産地	長さ	幅	厚さ	重さ	備考	分類	写真
106	VID 7 g 住	Q 2 埋土	石版	粘板岩	北上山地	2.3	1.2	0.3	0.61		II b 2	141
108	VID 7 g 住	Q 2 埋土	石版	粘板岩	北上山地	2.5	1.4	0.3	1.16		II b 2	141
107	VID 7 g 住	Q 2 埋土	石版	硬質泥岩	宇石西郡	7.2	3.0	0.9	5.34		I b 2	141
108	VID 7 g 住	埋土	船形埴輪A群	阿保石安山岩	奥羽山地	16.5	7.1	6.9	630	平端面1面。	I a 1	141
109	VID 7 g 住	埋土	船形埴輪A群	阿保石安山岩	奥羽山地	12.8	8.9	4.1	(850)	平端面3面。欠損品。	I a	141
110	VID 7 g 住	埋土	船形埴輪A群	阿保石安山岩	奥羽山地	12.8	7.5	4.5	(850)	欠損品。	I b	141

第44図 VID 7 g 住層跡出土遺物(2)



番号	出土地点	層位	器種	石質	産地	長さ	幅	厚さ	重さ	備考	分類	写真
111	VID 7 g 住	埋土	炊脩器類A群	凝灰岩	北上山地	13.8	2.4	2.6	400		Ⅱb 1	142
112	VID 7 g 住	床面	炊脩器類A群	凝灰岩	北上山地	19.7	9.8	2.4	570	挟り有り。	Ⅱc 2	142

第45図 VID 7 g 住居跡出土遺物(3)

やや傾斜し、最大比高18cmである。

<炉>長軸線上に地床炉を2基検出した。西側のものを1号炉、東側のものを2号炉とする。1号炉の焼土は、50×85cmの不整形に分布し厚さは最大4cmである。2号炉の焼土は、65×85cmの楕円形状に分布し厚さは最大5cmである。いずれも固く締まっている。

遺物 (第43～45図、写真図版140～142)

<土器>床面から2023g、埋土から1482g出土した。89は、1号炉の上およびその周辺から出土したもので、横位の綾結文が器面全体に施されるが、地文の斜縄文と連動しており原体は縄文を片結びしたものと考えられる。繊維は混入しない。90は斜縄文施文後に綾結文を施したものと考えられる。口唇部は平坦になでられ、爪による刻み目が全周している。92は胎土に砂を多く含み、色調は黄褐色で、前述2点と異なり全体に脆い感じがする。縄文施文後に「八」を連続的に左から右へと施すが、始まる部分が常にやや深く刻まれる。102にはループ状の圧痕が観察されるが、いわゆるループ文とは様相を異にする。

<石器>107は3辺に二次加工が施され、裏面にも一部細かい剝離が連続している。打面調整剝離によるものか。

時期 床面出土土器から、縄文時代前期に属するものと考えられる。89の土器の時期の位置付けが不明であり、よって遺構の時期も詳細は明らかにできない。

## VID e 住居跡 (遺構番号14)

### 遺構 (第46図、写真図版19)

<検出状況>西尾根の南麓に位置する。褐色土上面で黒褐色の落ち込みとして検出した。南側は一部木根により攪乱を受けている。

<形状・規模>等高線に直交し、南北方向に長軸をもつ隅丸長方形である。規模は、長軸5m、短軸3.45mである。

<壁・壁高>基盤層である褐色土を壁とし、やや外傾する。壁土は固く締まっている。壁高は東壁27cm、西壁20cm、南壁6cm、北壁35cmである。

<埋土>黒褐色土を主体とし、壁際に一部崩落土を含む。全体に粉炭を含み、締まっている。自然堆積と思われる。

<床・柱穴・施設>基盤層である褐色土を直接床とし、全体に平坦で固めである。斜面に沿って南側にやや傾斜する。

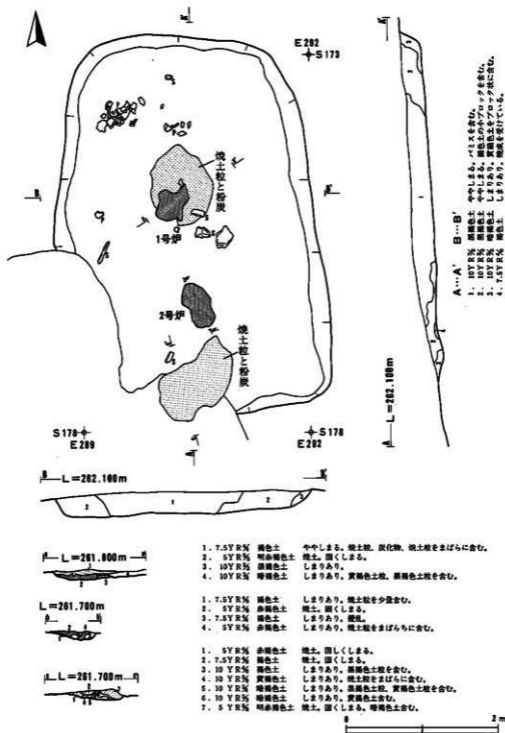
<炉>長軸線上に焼土を3基検出した。南端のものは、70×110cmの楕円形状に分布し厚さは最大10cmである。焼土の下に暗褐色土が入り込み全体に攪乱されている。他の2基は基盤層が焼成をうけてレンズ状に焼土が形成されており原位置を保っていると考えられる。よってこの2基を地床炉とした。北側のものを1号炉、南側のものを2号炉とする。1号炉の焼土は、85×95cmの楕円形状に分布し厚さは最大7cmである。2号炉の焼土は、30×95cmの楕円形状に分布し厚さは最大10cmである。南半の一部が攪乱を受けている。いずれも固く締まっている。

### 遺物 (第47～49図、写真図版142・143)

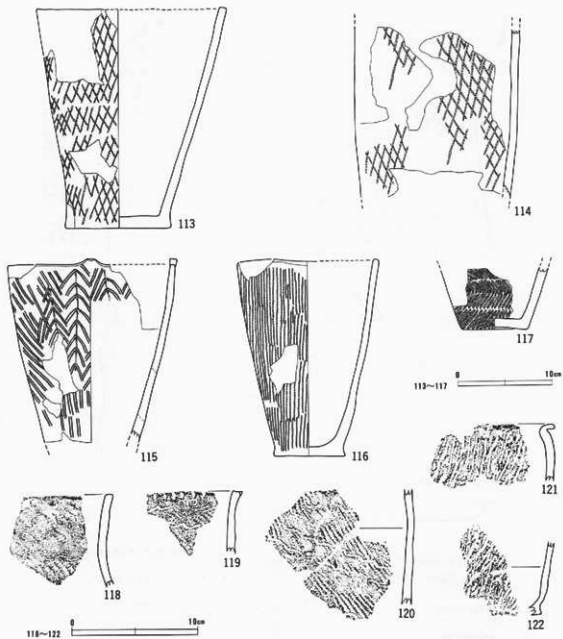
<土器>床面から2895g、埋土から4678gの土器が出土した。113は北西隅の床面から一括出土したものである。115には低平な山形突起がありその上面は僅かにくぼんでいる。突起は1個残存するのみであり、口縁形態の詳細は不明である。121と122は同一個体である。口縁部が大きく外反し、底部外面が外側に張り出す。胎土に粗砂を含み脆弱である。127～128は同一個体で、木目状然糸文を地文とする弁状突起を有する。

<石器・石製品>130は片刃の石匙である。一次剥離のバルブを除去している。131は自然面を残すが、刃部は粗く整形後に小剥離が施される。133は、全周に二次加工が施されて急角度の刃部が形成される。134は敲打痕が観察されるが、凹みには至らない。137は西壁寄り床面から出土した石剣である。擦痕が著しい。

時期 床面出土土器から、縄文時代前期後葉に属するものと考えられる。

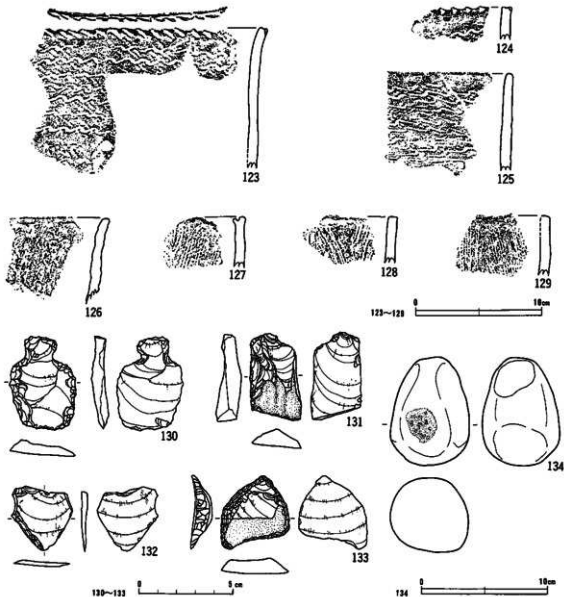


第46図 VID8住居跡



番号	出土地点	層位	文様	地文	口径	底径	高さ	備考	分類	写真
113	VID 8 e 住	床面		L. 網目状燃糸文。	-	11.2	23.0		II 6	142
114	VID 8 e 住			L. 網目状燃糸文。	(20.0)	-	(38.0)		II 6	142
115	VID 8 e 住	埋土	山形状突起。	R. 木目状燃糸文。	(18.0)	-	(39.0)		II 6 a ㊦	142
116	VID 8 e 住	埋土		R. 燃糸文。	(15.0)	7.6	20.9	1枚幅は2枚の焼成分幅に等しい。	II 6 b ㊦	142
117	VID 8 e 住	Q 1 埋土		L. R × R L 第 1 種斜状。	-	(7.1)	(4.4)			142
118	VID 8 e 住	床面		R. L 横。縦位接ぎ文。					II 3 a	142
119	VID 8 e 住	床面	口縁端部は工具による痕。縦位接ぎ文。	R. L 横。縦位接ぎ文。					II 3 a	142
120	VID 8 e 住	床面		L. R 横。片筋の縦位接ぎ文。					II 6	142
121	VID 8 e 住	床面		L. 燃糸文。R. 燃糸文。				122 と同一個体。	II 6 b ㊦	142
122	VID 8 e 住	埋土		L. 燃糸文。R. 燃糸文。				121 と同一個体。	II 6 b ㊦	142

第47図 VID 8 e 住居跡出土遺物(1)

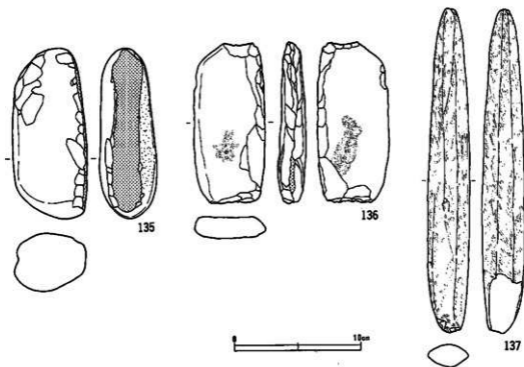


番号	出土地点	層位	文様	地文	口徑	底径	高さ	備考	分類	写真
123	VID e 住	埴土	口縁部に、口唇部に、口唇部から上へ向かって、斜めの線文、R.L.線、横位線文。						II 3 a	143
124	VID e 住	Q 1 埴土	口縁口縁に口唇部から上へ向かっての斜め、R.L.線、横位線文。						II 3 b	143
125	VID e 住	埴土	直線する横位線文。						II 3 b	143
126	VID e 住	埴土		L.網目状線文。				113と同一個体。	II 6	143
127	VID e 住	埴土	波状口縁。頸物(弁状?)	口唇部沈線。	L.2条木目状線文。			128、129と同一個体。	II 6 a f	143
128	VID e 住	埴土	波状口縁。		L.2条木目状線文。			127、129と同一個体。	II 6	143
129	VID e 住	Q 4 埴土	波状口縁。		L.2条木目状線文。			127、128と同一個体。	II 6	143

番号	出土地点	層位	器種	石質	産地	長さ	幅	厚さ	重さ	備考	分類	写真
130	VID e 住		石匙	粘板岩	北上山地	4.9	3.5	0.9	11.11		I b 1	143
131	VID e 住	Q 2 埴土	不定形石器	硬質泥岩	宇石西郡	4.6	3.7	0.9	13.25		I a 1	143
132	VID e 住	床面	不定形石器	硬質泥岩	宇石西郡	3.4	3.2	0.2	2.25	右面に微小刺痕あり。使用痕と見られる。	I a 1	143
133	VID e 住	Q 1 埴土	不定形石器	硬質凝灰質泥岩	宇石西郡	3.9	3.6	0.7	11.60	加工は全周に施される。様式。	I c 2	143
134	VID e 住	床面	扇形磨製石	塊状凝灰質岩	北上山地	8.5	6.3	5.4	430	狭い凹みが片面に集中。	II	143

第48図 VID e 住居跡出土遺物(2)





番号	出土地点	層位	器種	石質	産地	長さ	幅	厚さ	重量	備考	分類	写真
135	VID 8 e 住	Q3 礫土下位	越前巻貝A群	所傳石安山岩	奥羽山地	13.5	4.5	4.6	560	平滑面1面。		1 a 2 143
136	VID 8 e 住	底面	越前巻貝A群	磯灰質硬砂岩	北上山地	12.6	5.7	1.6	230	+西石。		類 b 2 143
137	VID 8 e 住	底面	石質	粘板岩	北上山地	25.7	3.5	1.6	190			143

第49図 VID 8 e 住居跡出土遺物(3)

#### VID 8 h 住居跡 (遺構番号15)

##### 遺構 (第50図、写真図版20)

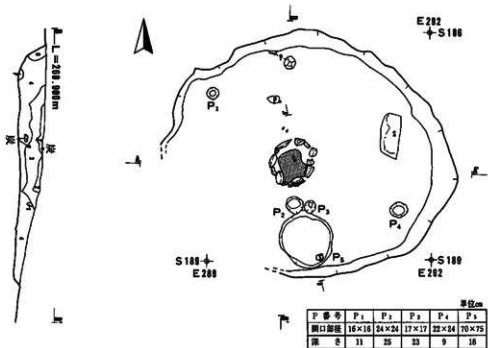
<検出状況>西尾根の南麓の平坦部に位置する。暗褐色土上面で黒褐色土の落ち込みとして検出した。

<形状・規模>いびつな円形で、径は3.1~3.9mである。

<壁・壁高>上半は暗褐色土と黄褐色土の混土層、下半は基盤層である黄褐色土を壁とし、固く締まる。やや外傾する。壁高は東壁22cm、西壁28cm、南壁8cm、北壁32cmである。

<埋土>黒色土と黒褐色土を主体とし、やや締まっている。自然堆積と思われる。全体に細炭・粉炭を含み、床面にまで達する。樹種はケヤキである。

<床・柱穴・施設>基盤層である褐色土を直接床とし、全体に平坦で固めである。南西方向にやや傾斜する。柱穴を4個検出したが、規模・位置から対応関係をとらえることはできない。



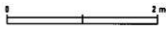
- A...A'    B...B'
- 10Y R% 黒褐色土    しまりなし。
  - 7.5Y R% 黒褐色土    ややしまりあり。草木根含む。
  - 7.5Y R% 黒色土    しまりあり。炭化物を含む。
  - 10Y R% 黒褐色土    しまりあり。炭化物をまばらに含む。黄褐色ブロックを含む。
  - 10Y R% 暗褐色土    しまりあり。
  - 10Y R% 暗褐色土    ややしまりあり。



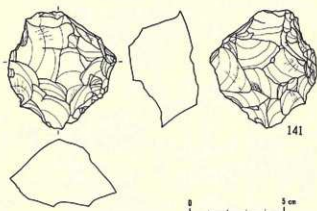
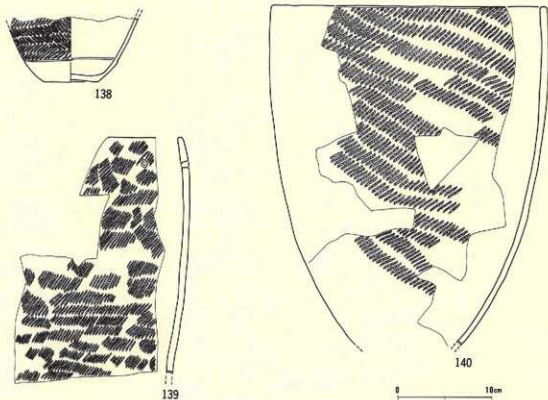
- 炭化材
- 10Y R% 暗褐色土    粘土質土。しまりなし。黄褐色土を含む。
  - 10Y R% 黄褐色土    粘土質土。しまりあり。
  - 10Y R% 褐色土    しまりあり。小角礫を含む。
  - 10Y R% 黄褐色土    しまりあり。2層に区別する。
  - 10Y R% 褐色土    ややしまる。
  - 10Y R% 黄褐色土    ややしまる。黄褐色土を含む。



- 5Y R% 暗赤褐色土    地土。ややしまる。
- 10Y R% 褐色土    しまりなし。炭化材を含む。
- 10Y R% 黄褐色土    しまりなし。炭化材を含む。
- 10Y R% 黄褐色土    ややしまる。3層の黄褐色土ブロックを含む。炭化材を含む。
- 10Y R% 黄褐色土    ややしまる。地土粒。炭化物を含む。
- 10Y R% 黄褐色土    ややしまる。



第50図 VID 8h 住居跡



番号	出土地点	層位	地文様	地文	口径	径的径	器高	備考	分類	写真
138	ⅤD 8 h 住	体割	沈降から下層消し。	L 京 + R L の赤結東彩状縄文。	—	0.6	6.7	後期～晩期	Ⅴ 2	143
139	ⅤD 8 h 住	埋土下位		L 京 横。	—	—	—	後期～晩期、補修孔。	Ⅴ 4	143
140	ⅤD 8 h 住	埋土下部		L 京 横。	(29.2)	—	(38.6)	晩期	Ⅴ 4	143

番号	出土地点	層位	器種	石質	産地	長さ	幅	厚さ	重さ	備考	分類	写真
141	ⅤD 8 h 住	埋土下位	石核	硬質泥岩	宇石西部	4.2	5.7	3.7	11.32			144

第51図 ⅤD 8 h 住居跡出土遺物

P5は埋土に焼土粒や粉炭を含み、本住居に伴うものと考えられる。

〈炉〉床面のほぼ中央部に石囲炉が位置する。おおむね円形を呈し、外郭の計測値で57×70cmを測る。計14個の垂角礫で構成され、個々の礫の長さは9～26cmの範囲にある。うち2個の石材は、北上山地産凝灰岩千枚岩とチャートであった。炉の内部には、厚さ最大で4cmの固く締まった焼土が形成される。焼土層のなかから土器片が出土した。

遺物（第51図、写真図版143・144）

〈土器〉床面から325g、埋土から2093g出土した。3点とも焼成良好で縄文が細かい。138の底部に近接する位置に凹線が一周し、それより下は磨消される。

〈石器〉141は、剝離の方向が一定でなく同一技法によって素材を得る手法とは異なる。他にUフレ、Rフレ各1点、フレーク6点が埋土から出土した。

時期 床面出土土器から縄文晩期前葉に属するものと考えられる。

VID0g住居跡（遺構番号16）

遺構（第52図、写真図版16）

〈検出状況〉西尾根南斜面のややなだらかになる傾斜変換点付近に位置する。基盤層上面で黒褐色土の落ち込みとして検出した。南側は斜面下方に当たり流失している。また南西部には攪乱がある。床面下からVID0g土坑、VID0g-2土坑が検出された。本住居はこの2基の土坑を埋めて構築されている。

〈形状・規模〉残存部分からの推定では楕円形を基調とすると考えられる。規模は東西3.4m、南北は残存値で1.6mである。

〈壁・壁高〉基盤層で固く締まっており、やや外傾する。壁高は東壁9cm、西壁10cm、北壁6cmである。

〈埋土〉暗褐色土が主体で、基盤層である黄褐色土が径2cmのブロックとなって混入する。床直上には最大10cmの厚さで黒褐色土層が存在する。固く締まっており貼床の可能性もある。しかし、厚さは不均一である。

〈床・柱穴・施設〉前述した黒褐色土は埋土の最下層として把握する。西側は基盤層を、東側は土坑を埋めて床としている。全体に固く締まっている。柱穴は検出されなかった。

〈炉〉東壁寄りに地床炉1基を検出した。焼土は60×70cmの不整形の範囲に分布し、厚さは最大6cmである。固く締まっている。焼成は良好で、VID0g-2土坑の埋土も赤変している。

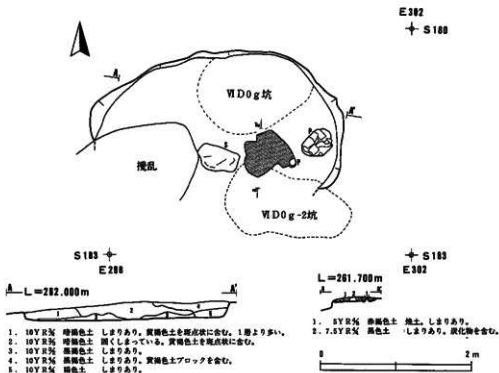
〈自然石〉炉の西側に隣接する床面に、35×55cmの不整形で偏平な角礫が位置する。加工痕も使用痕も認められないが、位置的に意味をもつものか。

遺物 (第53図、写真図版144)

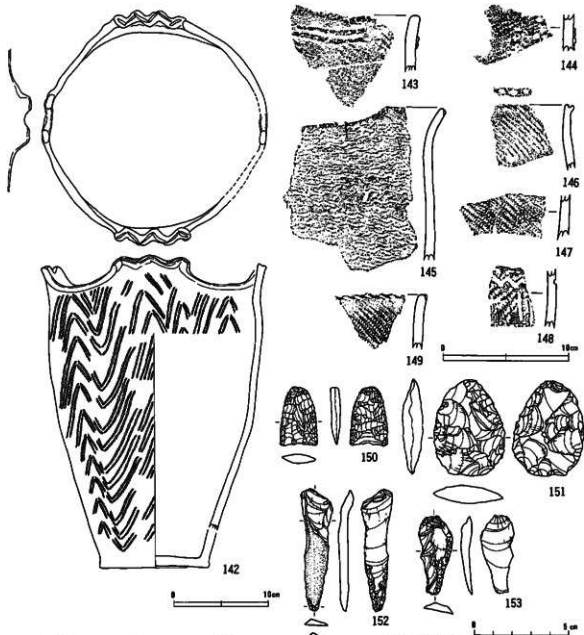
<土器>床面から4120g、埋土から856g出土した。142は東壁際の床面から出土したものである。焼成は良好で硬質である。口縁部の装飾体は1対は鋸歯状で、その上面に棒状工具により沈線が1画ずつ描く手法によって施される。他の1対は2単位の山形突起で、その頂部はやや凹みを有する。143と144は胎土・焼成から同一個体と考えられる。143は隆帯上に凹線が、144には竹管刺突が施される。145の横位綾絡文は節が不明瞭であり、S字連鎖状沈文とすべきかも知れない。148は鋸歯状沈線を有する。繊維は含まない。

<石器> 150は尖頭部が丸みを帯び断面形も鋭利ではない。151はほぼ全面加工しているがやや粗い剥離である。152は尖頭部に着目して石錐としたが、スクレーパーの可能性もある。他に図化は省略したが岩手山起源の溶岩が2点、Uフレ1点、Rフレ2点、フレーク6点が出土した。

時期 床面出土遺物から縄文前期後葉に属すると考えられる。



第52図 WID0g住居跡



番号	出土地点	層位	文様	地文	口径	底径	器高	番号	分類	写真
143	ⅧD0 g 住	床面上	波状口縁、曲歯状裝飾帯、裝飾体上沈縮。	L木目状燃承文。	29.9	11.7	33.2		Ⅱ6 a 7	144
142	ⅧD0 g 住	床面上	縁帯上沈縮。	R L 横。				144 と同一個体。	Ⅱ6 b 1	144
144	ⅧD0 g 住	埋土	縁帯上竹管刺突。	R L 横。				143 と同一個体。	Ⅱ6 b 7	144
145	ⅧD0 g 住	床面上	波状口縁、口縁部曲状工具による彫入、縁帯する模様焼付文。	R L 横。					Ⅱ7 b	144
146	ⅧD0 g 住	埋土	口縁部竹管刺突。	R L 0 段多摩。					Ⅱ8	144
147	ⅧD0 g 住	埋土		R L 横。					Ⅱ6	144
148	ⅧD0 g 住	埋土	沈縮。	L R 横。					Ⅱ5	144
149	ⅧD0 g 住	埋土	口縁部伸状工具による彫入。	R L 横。				縁縮わずか彫入。	Ⅱ2 b	144

番号	出土地点	層位	器種	材質	産地	長さ	幅	高さ	重量	番号	分類	写真	
150	ⅧD0 g 住	埋土	石鉢	硬質泥岩	宇石西部	3.1	2.0	0.5	3.06		Ⅱ a 2	144	
151	ⅧD0 g 住	埋土	尖頭形石鉢	硬質泥岩	宇石西部	5.1	3.8	1.1	12.75			144	
152	ⅧD0 g 住	石鉢	地質泥岩	宇石西部	6.5	1.6	0.5	4.64	今が尖った瓶底い形状、自然彫削す。			144	
153	ⅧD0 g 住	埋土	不定形石鉢	地質泥岩	宇石西部	4.5	1.9	0.5	2.02	左辺にも使用痕かと思われる小刻彫あり。		1 a 1	144

第53図 ⅧD0 g 住層跡出土遺物

#### VID 0 h 住居跡 (遺構番号17)

##### 遺構 (第54・55図、写真図版22)

<検出状況>西尾根の南麓の緩斜面に位置する。基盤層上面で検出した。掘り込みが浅く、南半は斜面下方のため流失して不明である。

<形状・規模>遺存状態が悪く詳細は不明であるが、残存状況と柱穴の配置から推定すると、5×6.2m程度の隅丸長方形と考えられる。北東隅に10cm程高い部分がある。遺構の重複の可能性もあるが明らかではない。ここでは北壁のラインが一致することからテラス状施設と想定して単独の遺構と考えておく。

<壁・壁高>基盤層である黄褐色土で固く凹凸があり、やや外傾する。壁高は東壁13cm、北壁20cmである。

<埋土>南側は黒褐色土、北側は暗褐色土を主体とする。

<床・柱穴・施設>基盤層である黄褐色土であるが、一部暗褐色土がブロック状に混入し、全体的に固い。暗褐色土を取り除くと凹凸が生じることから、住居構築時の掘り方ないしは斜面下方が流失した際の痕跡かと考えられる。柱穴は5個検出された。位置と規模の対応関係からP1～P4が主柱穴と考えられる。床面の北西方向に土坑が検出された。

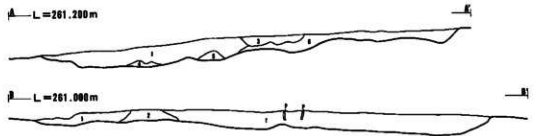
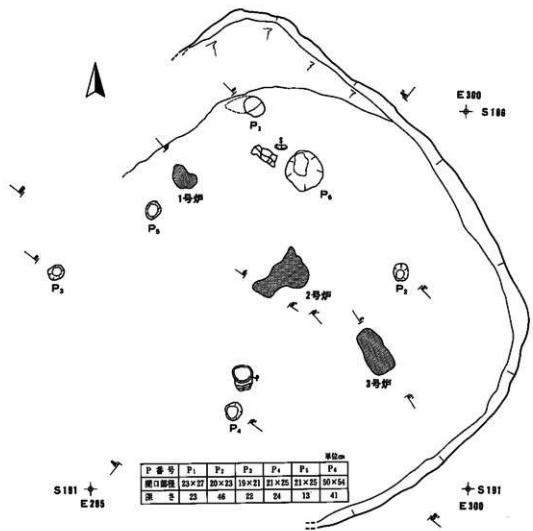
<炉>ほぼ長軸線上に地床が3基検出された。西側から東側へ向かってそれぞれ1号炉、2号炉、3号炉とする。1号炉の焼土は、22×35cmの不整形の範囲に分布し、厚さは最大3cmである。2号炉の焼土は、45×72cmの不整形の範囲に分布し、厚さは最大5cmである。3号炉の焼土は、27×65cmの楕円形状の範囲に分布し、厚さは最大4cmである。いずれも基盤層が焼成をうけてレンズ状に焼土が形成されている。

##### 遺物 (第55・56図、写真図版144～146)

<土器>床面から2825g出土した。154はP1の東側床面から出土したものである。地文施工後、頸部に指頭を左斜めから押圧した隆帯を巡らし、胴部にも同様の隆帯が曲線的に貼り付けられるようだが剥落しているので詳細は不明である。口唇部の断面形は丸みを帯びる。155は埋土断面図(B-B')および平面図に図化された土器で、木目状燃糸文の土器である。156は輪積み部からの破損であるが、破損断面部に木葉痕が観察される。

<石器>160は石匙のつまみ部が欠損したものかも知れない。164は2対に打減痕が観察されることからピエス・エスキューとした。167は棒状の素材を両面から交互に二次加工している。169は上半が両面から小さい剥離で立面観鋸歯状となる。170は階段状剥離で両面から加工している。他にUフレ1点、Rフレ3点、フレーク42点(半石産・硬質泥岩他)が出土している。

時期 出土土器から縄文時代前期後葉に属すると推定される。

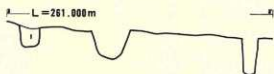


- 1. 10YR5 黄褐色土 ややしりあり。草木根、褐色土粒を含む。
- 2. 10YR5 暗褐色土 ややしりあり。黄褐色土を粒状に含む。
- 3. 10YR5 黄褐色土 しりあり。暗褐色土をわずかに含む。
- 4. 10YR5 褐色土 ややしりあり。
- 5. 10YR5 におい黄褐色土 しりあり。
- 6. 10YR5 暗褐色土 ややしりあり。黄褐色土を含む。

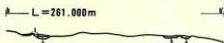


第54図 WIDOH住居跡(1)

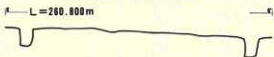




1. 10YR% 暗褐色土 しまりなし。黄褐色土粒を含む。



1. 5YR% 赤褐色土 しまりあり。  
2. 10YR% 黄褐色土 しまりあり。  
3. 5YR% 暗赤褐色土 しまりあり。  
4. 5YR% 赤褐色土 焼土。しまりあり。



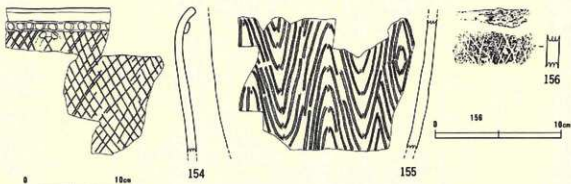
f-L=261.000m-尺

5YR% 赤褐色土 しまりあり。

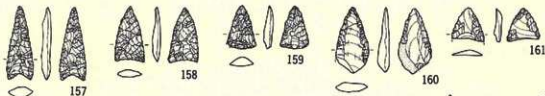
L=260.800m



1. 5YR% 濃い赤褐色土 焼土。しまりあり。  
2. 10YR% 暗褐色土 しまりあり。



154・155



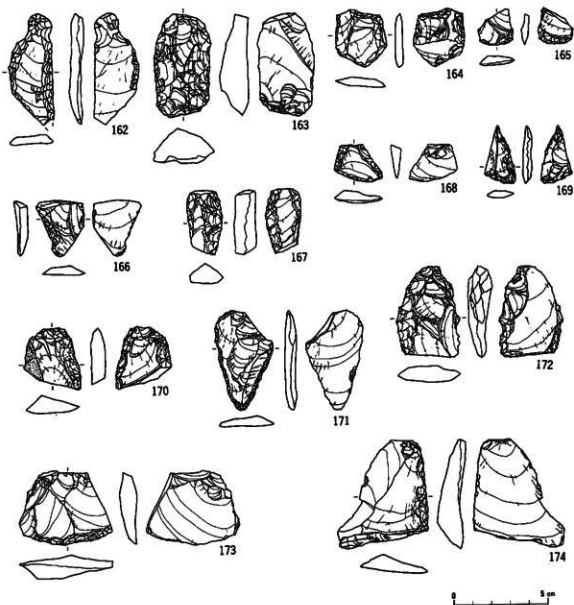
157~161

番号	出土地点	層位	文様	地文	口径	通身径	器高	備考	分類	写真
154	VID 0 h 住	住居	口縁部帯土左方向からの帯状文様。	灰緑目紋赤系文			15.4		II b 1	145
155	VID 0 h 住	Q 4 埋土下位		L + R の木目状燃赤文。			14.0		II c	146
156	VID 0 h 住	埋土		r 網目紋赤系文。				横断面に木炭残存。	II c	147

番号	出土地点	層位	器種	材質	産地	長さ	幅	厚さ	重さ	備考	分類	写真
157	VID 0 h 住	Q 4 埋土	石剣	粘板岩	北上山地	3.9	1.4	0.5	2.19		II b 1	145
158	VID 0 h 住	Q 3 埋土	石剣	粘板岩	北上山地	2.9	1.6	0.4	1.43		II b 2	145
159	VID 0 h 住	Q 4 埋土	石剣	硬質泥岩	宇石西部	2.3	1.5	0.5	1.19		III 1	145
160	VID 0 h 住	Q 1 埋土	石剣	硬質泥岩	宇石西部	(3.4)	1.7	0.4	(2.66)	石筋の可能性あり。		145
161	VID 0 h 住	Q 3 埋土	石剣	硬質泥岩	宇石西部	(1.5)	(1.7)	(0.3)	(0.82)			145

第55図 VID 0 h 住居跡(2)・出土遺物(1)



番号	出土地点	層位	器種	石質	産地	長さ	幅	厚さ	備考	分類	写真
162	ⅤD0h住	Q4堆土	石匙	硬質泥岩	宇石西部	5.9	2.4	0.8	8.73		1a 2 145
163	ⅤD0h住	Q1堆土	石匙	硬質泥岩	宇石西部	5.4	3.0	1.3	26.81		11 145
164	ⅤD0h住	床面	ピュス・エス・ケ・ユ	硬質泥岩	宇石西部	3.2	2.3	0.4	4.52	2列。	145
166	ⅤD0h住	Q4堆土	不定形石匙	硬質泥岩	宇石西部	1.9	1.9	0.4	1.23		1a 2 145
166	ⅤD0h住	Q4堆土	不定形石匙	硬質泥岩	宇石西部	2.9	2.6	0.4	3.85		1b 145
167	ⅤD0h住	Q4堆土	不定形石匙	硬質泥岩	宇石西部	3.4	1.9	1.0	9.19		11 145
168	ⅤD0h住	Q1堆土	不定形石匙	硬質泥岩	宇石西部	2.0	2.5	0.6	2.26	右辺にも二次加工あり。やや急。	1c 1 145
169	ⅤD0h住	堆土	不定形石匙	硬質泥岩	宇石西部	3.1	1.6	0.4	1.68		11 145
170	ⅤD0h住	Q4堆土	不定形石匙	硬質泥岩	宇石西部	3.3	3.0	0.9	8.14		11 146
171	ⅤD0h住	Q4堆土	不定形石匙	硬質泥岩	宇石西部	5.3	3.1	0.5	8.46		11 146
172	ⅤD0h住	Q1堆土	不定形石匙	硬質泥岩	宇石西部	4.8	3.4	0.9	17.66		11 146
173	ⅤD0h住	Q4堆土	不定形石匙	硬質泥岩	宇石西部	3.9	5.0	0.9	17.21		1a 2 146
174	ⅤD0h住	Q4堆土	不定形石匙	粘板岩	志上山麓	5.7	4.8	0.9	21.46		1a 1 146

第56図 ⅤD0h住居跡出土遺物(2)

#### VID 0 i 住居跡 (遺構番号18)

##### 遺構 (第57図、写真図版23)

〈検出状況〉西尾根の南麓の緩斜面に位置する。暗褐色土上面で検出した。掘り込みが浅いため斜面下方にあたる南半は流失していて不明である。VID 0 i 土坑によって北壁が僅かに切られている。

〈形状・規模〉北側は10cmほど高く平坦になっている。遺構の重複も想定されたが、埋土は同一であることから、テラス状の施設を有する単独の住居と考えた。詳細は不明だが、残存状況から推定すると4×5m程度の、長方形を基調とする平面形と考えられる。

〈壁・壁高〉暗褐色と黄褐色の混土で外傾する。壁高はテラス状施設の北壁7cmで他は不明である。

〈埋土〉上位は混土物少ない漆黒の土である。下位は暗褐色土や黄褐色土を粒状に含む。

〈床・柱穴・施設〉暗褐色と黄褐色の混土層で、やや固めで少し凹凸がある。柱穴は4個検出した。位置と規模からP1～P3は対応し、主柱穴となると考えられる。

〈炉〉ほぼ中央部と推定される位置に地床炉1基を検出した。焼土は27×30cmの不整形に分布し、厚さは最大5cmである。基盤層が焼成をうけたもので、レンズ状に焼土が形成されている。

##### 遺物 (第58・59図、写真図版146～148)

〈土器〉床面から3480g、埋土から4170g出土した。175・177・178の3点は東半部床面から出土したものである。176は綾絡文が横走するが、装飾的效果は低く、単に縄の末端処理によるものかも知れない。他の燃糸文の土器と、器形が異なる点が注目される。177は口唇部に指頭圧痕を、口縁部を除く器全体には燃糸文を施す。原体は、軸の右端に穿孔して燃紐を潜し玉止めしたものである。

〈石器〉184は対称性を欠くが、石鏃の未完成品と考えた。189は折断面と剝離により尖頭部を形成する。190と191は欠損品か。他にUフレ2点、Rフレ2点、フレーク17点が出土した。

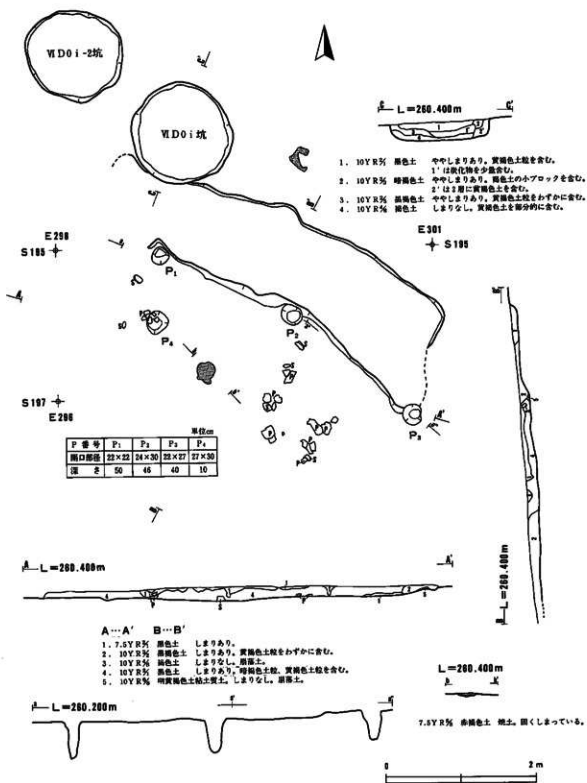
時期 出土土器から、縄文時代前期後葉から末葉に属すると考えられる。

#### VIC 3 g 住居跡 (遺構番号19)

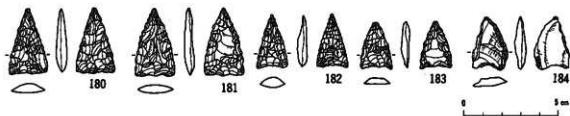
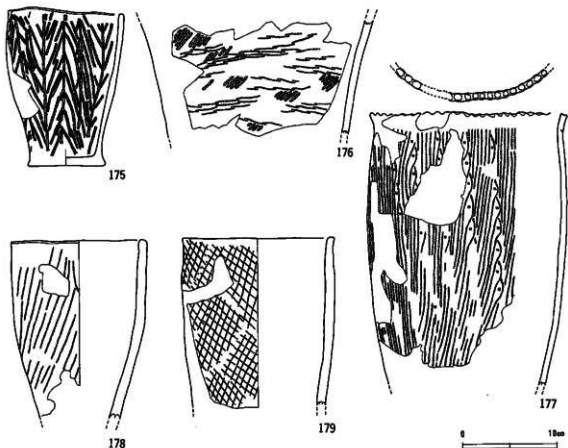
##### 遺構 (第60図、写真図版24)

〈検出状況〉西尾根の西斜面に位置し、厚い再堆積層中に部分的に暗褐色土が多く入りこんでいることから検出できた。急斜面であり、下方は流失していて遺存しているのはごく一部と思われる。

〈形状・規模〉遺存状態が悪く形状・規模とも不明である。残存値は南北2.2m、東西1.2mである。



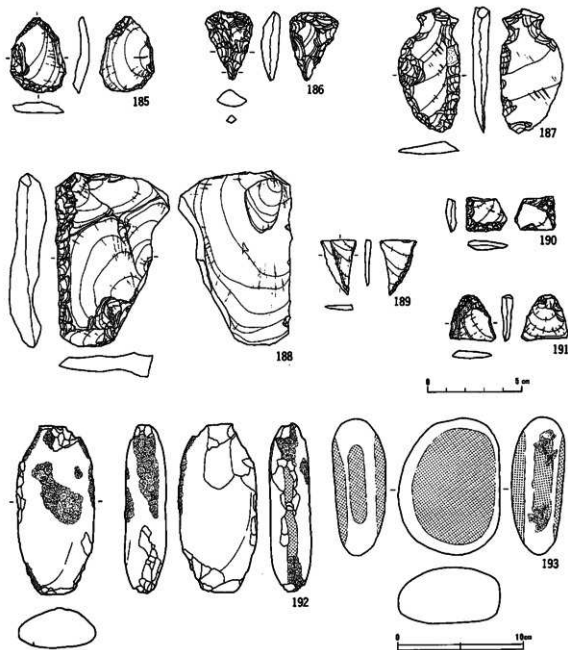
第57図 VID0 i 住居跡



番号/出土地点	層位	次第 文様	地文	口径	底径	器高	備考	分類	写真
175	VID 0 i 住	床面	磁器張り出し。	L 本目状捺糸文。	12.1	8.2	16.8		II 4 b 0 146
176	VID 0 i 住	床面		L 京横、横位綾糸文。	-	-	(12.0)		II 4 b 1 146
177	VID 0 i 住	床面	口唇部磁器状圧痕。	L 捺糸文。	20.8	-	(24.0)		II 4 b 2 147
178	VID 0 i 住	床面		L 捺糸文。	(14.5)	-	(13.0)		II 4 b 0 147
179	VID 0 i 住	埋土		L 網目状捺糸文。	(16.2)	-	(17.0)		II 4 b 0 147

番号/出土地点	層位	器種	石質	産地	長さ	幅	厚さ	重量	備考	分類	写真
180	VID 0 i 住	Q1 埴土	石版	輪坂寄	3.4	2.0	0.5	3.12		I 1	147
181	VID 0 i 住	Q1 埴土	石版	硬質泥岩	4.0	2.1	0.5	3.34		I 2	147
182	VID 0 i 住	Q3 埴土	石版	硬質泥岩	2.7	1.7	0.4	1.46		II b 2	147
183	VID 0 i 住	Q4 埴土	石版	硬質泥岩	2.3	1.7	0.5	1.64		II a 1	147
184	VID 0 i 住	Q3 埴土	石版	硬質泥岩	2.8	1.8	0.4	2.17		II b 2	147

第58図 VID 0 i 住居跡出土遺物(1)



番号	出土地点	層位	器種	石質	産地	長さ	幅	厚さ	重量	備考	分類	器具
185	VID 0   住	Q 3 礫土	尖頭礫石片	硬質泥岩	宇石西部	2.9	4.0	0.5	6.77			147
186	VID 0   住	Q 3 礫土	石鏃	硬質硬質泥岩	宇石西部	3.6	2.5	1.0	6.41	基部のくびれ部、上部に角状の突起部あり。		147
187	VID 0   住	Q 3 礫土	石鏃	硬質硬質泥岩	宇石西部	6.8	3.2	0.9	14.23			147
188	VID 0   住	Q 3 礫土	不定形石片	硬質泥岩	宇石西部	5.2	6.0	1.1	68.80			147
189	VID 0   住	Q 3 礫土	不定形石片	硬質泥岩	宇石西部	2.9	1.9	0.3	1.34	基部が折断 (or 折断) 三角形の形状。基部、		147
190	VID 0   住	Q 3 礫土	不定形石片	硬質泥岩	宇石西部	1.7	2.1	0.4	1.66	右端は片面加工で鋭い、左端は不規則。		147
191	VID 0   住	Q 3 礫土	不定形石片	硬質硬質泥岩	宇石西部	2.4	2.4	0.3	2.40	刃状し部分あり。		147
192	VID 0   住	床面	緑褐色硬質泥岩	北上山地	12.3	6.2	3.0	410	+ 凹石。		148	
193	VID 0   住	床面	緑褐色硬質泥岩	北上山地	10.8	8.2	4.2	530	側面に磨面と打痕。		148	

第59図 VID 0 | 住層跡出土遺物(2)

〈壁・壁高〉暗褐色と黄褐色の混土で再堆積層の一部と考えられる。締まりはあまりない。壁高は斜面上方の東側で35cmを測る。

〈埋土〉暗褐色の締まりのないシルトによる単層である。下位には崩壊土と思われる褐色土が混入する。

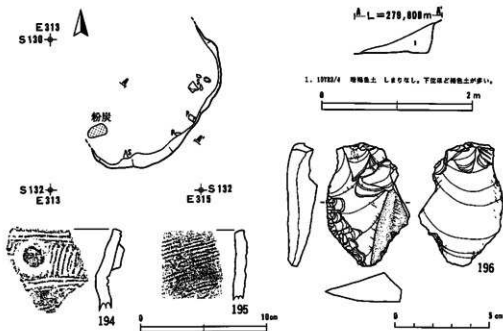
〈床・柱穴・施設〉暗褐色土に黄褐色土がブロック状に混入する。ほぼ水平で平坦である。全体的に軟質である。柱穴は検出されない。

〈炉〉検出されない。南壁寄りに粉炭がまとまって検出された。

遺物 (第60図、写真図版148)

〈土器〉床面から50g出土している。194は、頸部で屈曲する器形で、棒状工具により口縁部と頸部に横位沈線を施し、その間を縦位短沈線で充填する。

〈石器〉196は1側辺に二次加工が施されている。他に床面からフレック1点が出土している。時期 破片資料からではあるが、床面出土遺物から縄文時代前期末葉から中期初頭と考えられる。



番号	出土地点	層位	支那	地文	口縁部形	器高	備考	分類	写真
194	VIC 3 g 住	床面	ボタン状貼り付け。沈線文。	L 2 線。				皿 7 b	148
195	VIC 3 g 住	床面		L 2 線。					148

番号	出土地点	層位	器種	材質	産地	長さ	幅	厚さ	重さ	備考	分類	写真
196	VIC 3 g 住		不足形石器	珪質泥岩	宇石西郡	6.5	4.4	1.6	23.25	粗い割削のあとと磨削加工。	I a 2	148

第60図 VIC 3 g 住居跡・出土遺物

#### ⅦC 6 f 住居跡 (遺構番号20)

##### 遺構 (第61図、写真図版24)

〈検出状況〉西尾根の西斜面に位置する。再堆積層を掘り下げ中に炉と考えられる焼土が検出されたこと、多くの遺物が出土したことから住居跡を想定して精査を進めたところ、基盤層においてかろうじて南壁を検出できた。急斜面であり、下方は流失していて遺存しているのはごく一部である。埋土断面図はとれなかった。

〈形状・規模〉詳細は不明であるが、残存状況から南北方向に長軸をもつ隅丸長方形を基調とするものと推定される。残存値は南北3.85m、東西2.6mである。

〈壁・壁高〉基盤層の黄褐色土で、固く締まり、ほぼ直立する。壁高は斜面上方の東壁で10cm、南壁で10cm、最大値は南西隅壁で22.5cmを測る。

〈埋土〉暗褐色の締まりのないシルトによる単層である。

〈床・柱穴・施設〉基盤層を直接床とし、固く締まっておりやや凹凸がある。柱穴は検出されない。

〈炉〉北側に焼土が1基検出された。40×45cmの不整円形に分布し、厚さは3cm程度である。

##### 遺物 (第61・62図、写真図版148・149)

〈土器〉床面から5170g、埋土から325g出土した。197～199は南寄りの床面から一括出土したものである。197の地文は2段の縄を用いた網目状燃糸文である。198は斜縄文を施文後に縦位の綾絡文を施している。口唇部は平らになてられている。201は弁状突起で、頂部に指頭状瓦庇、外面に鋸歯状の沈線(凹線)が施文される。204は木目状燃糸文を地文として凹線が施された隆帯が、口頸部にタガ状に巡り、胴部には半円状に展開するらしい。

〈石器〉207は床面から出土したものである。

時期 床面出土遺物から縄文前期後葉から末葉に属するものと考えられる。

#### ⅦC 6 g 住居跡 (遺構番号21)

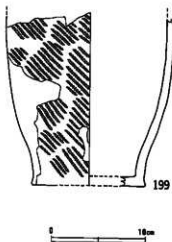
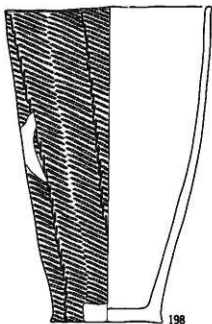
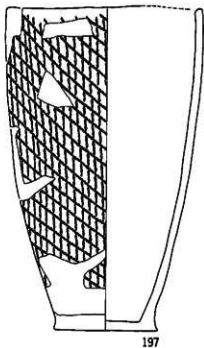
##### 遺構 (第63図、写真図版25)

〈検出状況〉西尾根の西斜面に位置し、厚い再堆積層中に部分的に暗褐色土が多く入りこんでいることから検出できた。斜面下方にあたる西壁は流失している。ⅦC 6 g-2土坑と南壁で重複し、ⅦC 6 g土坑とは完全重複している。

新旧関係については、本住居はⅦC 6 g土坑を埋めて構築されていることから、本住居の方が新しい。ⅦC 6 g-2土坑との関係では、同土坑の検出が遅れたため、明確な資料を残せなかったが、精査時の観察では本住居跡の方が新しいと考えられた。

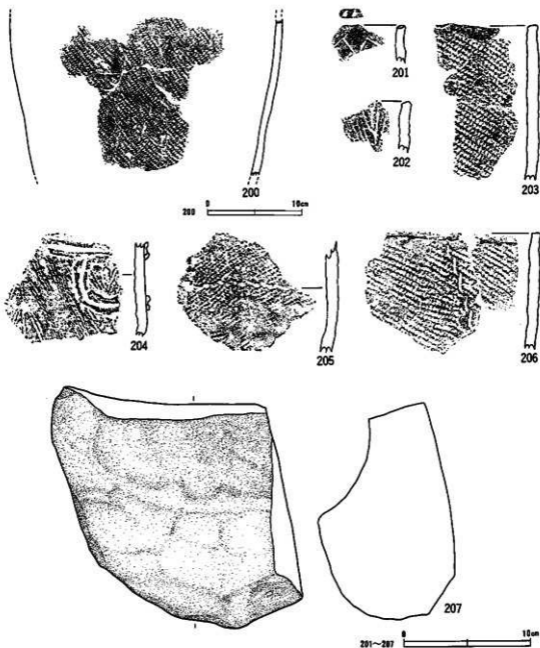
〈形状・規模〉残存状況から小形の楕円形が推定される。長軸は2.25m、短軸は推定で1.7m





番号	出土地点	層位	文様	地文	口縁部取附器高	番号	分層	写真
197	ⅧC 6 f 住	床面		L 2 網目状焼赤文	(20.7)	11.0 34.2		D 6 b 9 148
198	ⅧC 6 f 住	床面		L 2 斜線、縦位破線文	(21.8)	11.9 33.6		D 6 b 9 148
199	ⅧC 6 f 住	床面		L 2 斜線	-	(22.0) 10.9		D 6 b 9 148

第61図 ⅧC 6 f 住層跡出土遺物(1)



番号	出土地点	層位	文様	地文	口徑	底面直徑	高さ	備考	分類	写真
200	ⅥC6f住	床直上		L.R.縦。	-	-	(16.6)		Ⅱ6	149
201	ⅥC6f住	床面	波状口縁。頂部部環状圧痕。口縁部屈曲状沈凹。						Ⅱ6 a 7	149
202	ⅥC6f住	灰土	波状口縁。	R本日状粗糸文。					Ⅱ6 b	149
203	ⅥC6f住	床面		L.R.縦。					Ⅱ6 b	149
204	ⅥC6f住	床面	陰帯上に沈凹。	R本日状粗糸文。					Ⅱ6 b 7	149
205	ⅥC6f住	床面		L.R.縦。横に縦筋文。					Ⅱ6	149
206	ⅥC6f住	床面		L.R.縦。					Ⅱ6	149

番号	出土地点	層位	形種	材質	産地	長さ	幅	厚さ	重さ	備考	分類	写真
207	ⅥC6f住	床面	石皿・白石皿	陸奥貫焼灰巻	北.L.14地	(19.7)	(28.1)	10.6	(298)			149

第62図 ⅥC6f住居跡出土遺物(2)

前後になるものと思われる。

〈壁・壁高〉固く締まった褐色土で、ほぼ直立している。重複部分の壁は軟質である。壁高は斜面上方の東側で40cm、北で10cm、南で7cmを測る。西壁は流失している。

〈埋土〉褐色土を主体とする。上位は5mm～1cm大の礫を10%程度含むが、下位には礫は多くなく粉炭を含む。斜面上方の壁際には崩落土がみられる。

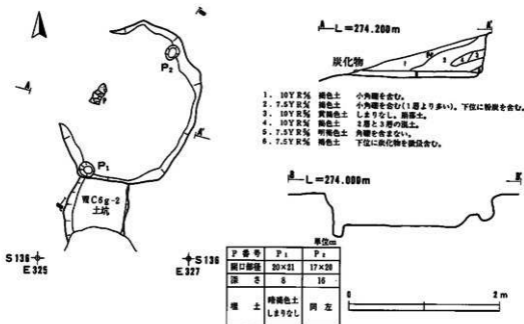
〈床・柱穴・施設〉床はほぼ水平で平坦であり、やや軟質である。ⅧC6g土坑を埋めた土を床としている。柱穴は2個検出された。両者とも締まりを欠く暗褐色土を埋土とする。P2の方は、埋土下位に黄褐色の礫を含む。しかし、P1とP2とは底面で40cmのレベル差があり、主柱穴とするには疑問がある。

〈炉〉検出されない。

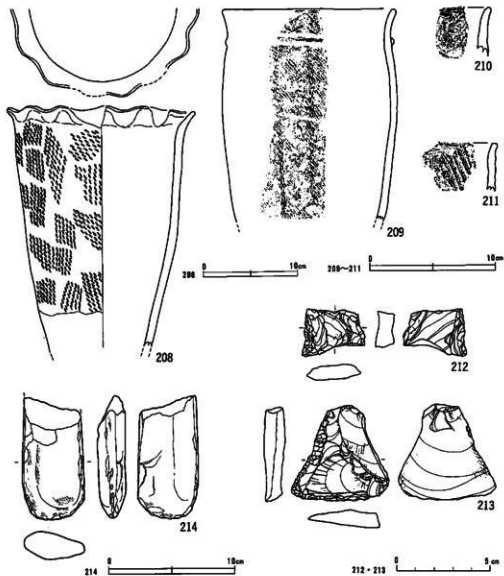
遺物 (第64図、写真図版149)

〈土器〉床面から2275g、埋土から1170g出土した。図示した他には縄文時代前期の網目状捺糸文、多軸絡糸体の土器片が出土している。

〈石器〉212は刃部側面観が鋸歯状を呈する。石筈等の欠損品か。213はエンド方向に急角度の、サイド方向にスクレーパー状の刃部を有する。214は石斧としたが、自然礫の形状を活用



第63図 VII C6g 住居跡



番号	出土地点	層位	文様	地文	口径	底径	高さ	備考	分類	写真
208	ⅦC 6 g 住	床面	花弁状口縁。	R L 多軸斜糸文。	30.0	—	(25.5)		B 6 b x	149
209	ⅦC 6 g 住	埴土	環状瓦紋、陽華。	L R 縦、縞斜文。	(16.4)	—	(12.5)		B 6 a i	149
210	ⅦC 6 g 住	床面		L + R による木目状斜糸文。					B 6 b	149
211	ⅦC 6 g 住	床面		L 木目状斜糸文。					B 6	149

番号	出土地点	層位	器種	材質	産地	長さ	幅	厚さ	重さ	備考	分類	写真
212	ⅦC 6 g 住	埴土	不定形石筥	硬質泥質磁灰岩	宇石西原	2.5	3.3	0.5	8.57	側面編組曲状を呈する。	Ⅶ	149
213	ⅦC 6 g 住	床面	不定形石筥	粘板岩	北上山地	5.1	5.2	1.1	27.06		I b 3	149
214	ⅦC 6 g 住	床面	磨製石斧	粘板岩	北上山地	(9.6)	4.8	2.1	(150)	自然磨の形状を沿用。刀面は研磨。	Ⅱ	149

第84図 VII C 6 g 住居跡出土遺物

し最小限の加工にとどめている。表には調整のための擦痕と使用痕の剥離が観察される。図示した他にUフレ3点、Rフレ1点、フレーク4点出土した。

時期 床面出土遺物から、縄文時代前期後葉から末葉に属すると考えられる。

#### ⅦC 6 h 住居跡(遺構番号22)

遺構(第65図、写真図版25・26)

〈検出状況〉西尾根の頂部に位置し、厚い再堆積層中に部分的に若干の暗褐色土のにごりとして検出された。北西壁の中央部に一部倒木痕による擾乱がある。

〈形状・規模〉長円形ないしは隅丸長方形で、長軸方向は等高線にほぼ沿っている。規模は、長軸6.3m、短軸3.4mである。

〈壁・壁高〉斜面上方にあたる南東壁の下半部は基盤層、他は暗褐色土でほぼ直立している。重複部分の壁は軟質である。壁高は北東壁30cm、北西壁7cm、南東壁68cm、南西壁30cmである。

〈埋土〉色調や小角礫の混入の度合いによって細別できるが、おおむね上位にはぶい黄褐色土、下位には暗褐色土、壁際には壁の崩落土が堆積する。

〈床・柱穴・施設〉基盤層を直接床とし、固く締まっている。凹凸がみられる。柱穴は検出されなかった。

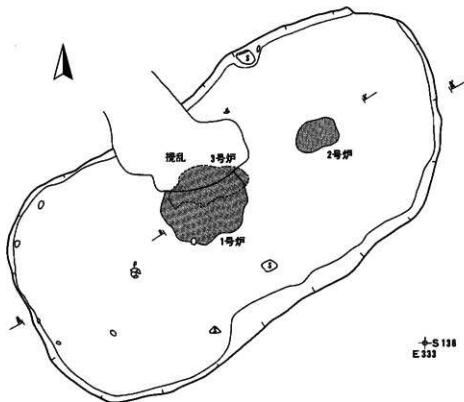
〈炉〉床面の長軸線上に2基、床面よりやや下のレベルから1基の計3基の焼土が検出された。位置および焼成の度合いから地床炉と考えられる。床面南側のものを1号炉、北側のものを2号炉、床面より下のレベルから検出されたものを3号炉とする。1号炉の焼土は105×15cmの不整形の範囲に分布し厚さは6cm、2号炉の焼土は40×60cmの楕円形状の範囲に分布し厚さは5cmでいずれも固く締まっている。3号炉は、2号炉の上面から5～7cm程下から検出された。焼土は50×105cmの不整形の範囲に分布し、厚さは5cmである。3号炉は2号炉に先行する炉で、床面を掘り下げて使用されたものと考えられる。

遺物(第66～68図、写真図版149～151)

〈土器〉床面から1270g、埋土から5295g出土しているが接合するものがなく、詳しい資料は得られない。215は手づくねによる無文の小型土器である。217は上下がはっきりしない。隆帯断面は三角形状である。219は波状口縁気味で細い棒状工具による沈線が粗雑に施されている。221と222は同一個体であるが、口唇部に指頭状圧痕が連続するものと思われる。他には縄文時代前期の木目状捺糸文の地文のみの破片である。

〈石器〉239は岩手火山起源の溶岩であるが、擦痕は明瞭に観察できないものの、床面からの出土であり遺物として取り上げた。より小さい溶岩が他に1点出土している。240も使用痕・加工痕は明瞭には観察できない。しかし、本遺跡の土層にないものであり、本住居に持ち込ま

E 327  
S 134



L = 275.600m



- |                    |                     |                     |                         |
|--------------------|---------------------|---------------------|-------------------------|
| 1. 10Y R% におい-黄褐色土 | しまりなし。小角礫を少量含む。     | 11. 10Y R% 黄褐色土     | しまりなし。小角礫を少量含む。         |
| 2. 10Y R% 明黄褐色土    | しまりなし。小角礫を少量含む。     | 12. 10Y R% 褐色土      | しまりなし。小角礫を多く含む。         |
| 3. 10Y R% 褐色土      | ややしまる。砂を含む。         | 13. 10Y R% 褐色土      | 凹凸不均で全体にしまりなし。小角礫を少量含む。 |
| 4. 10Y R% におい-黄褐色土 | しまりなし。小角礫を少量含む。     | 14. 10Y R% 暗褐色土     | しまりあり。塊土をブロック状に含む。      |
| 5. 10Y R% 黄褐色土     | しまりなし。砂を少量含む。       | 15. 10Y R% 黄褐色土     | 小角礫を少量含む。礫状を含む。         |
| 6. 10Y R% 明黄褐色土    | ややしまる。小角礫を多く含む。     | 16. 10Y R% におい-黄褐色土 | しまりあり。小角礫を少量含む。         |
| 7. 10Y R% におい-黄褐色土 | しまりあり。小角礫を多く含む。     | 17. 10Y R% におい-黄褐色土 | しまりなし。小角礫を微量含む。         |
| 8. 10Y R% 灰黄褐色土    | しまりあり。炭化物をブロック状に含む。 | 18. 10Y R% 褐色土      | しまりなし。砂を多く含む。           |
| 9. 10Y R% におい-黄褐色土 | しまりあり。礫を多く含む。       | 19. 5Y R% 明赤褐色土     | しまりなし。小角礫を微量含む。         |
| 10. 10Y R% 黄褐色土    | しまりなし。小角礫を少量含む。     |                     |                         |

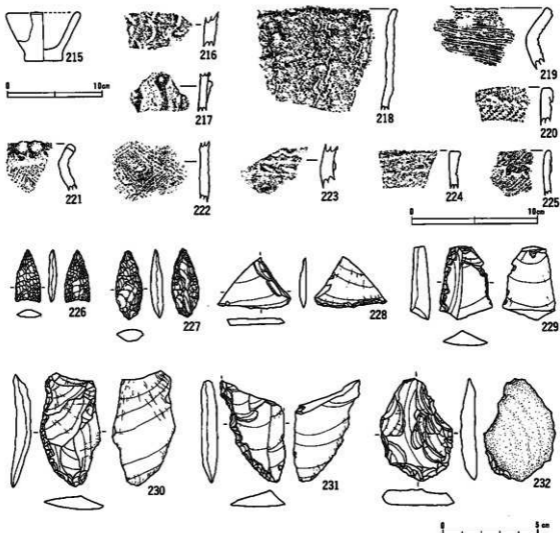
L = 274.200m



- |                |                    |
|----------------|--------------------|
| 1. 5Y R% 明赤褐色土 | 塊土。しまりなし。小角礫を少量含む。 |
| 2. 10Y R% 褐色土  | ややしまる。             |
| 3. 5Y R% 明赤褐色土 | しまりなし。             |
| 4. 5Y R% 明赤褐色土 | しまりなし。砂を少量含む。      |

2m

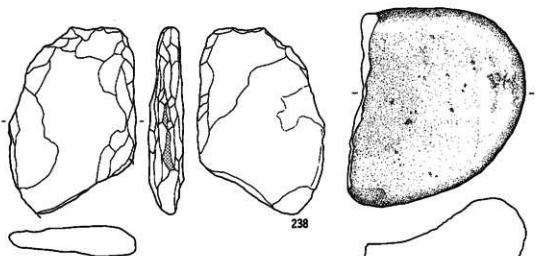
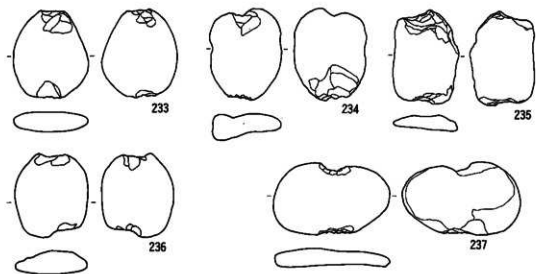
第65図 VII C8h住居跡



番号	出土地点	層位	文様	地文	滑り面	断面	器高	備考	分類	写真
215	VII C 6 h 住	埋土		無文		7.0	4.0	6.2	小型土器、手づね。	149
216	VII C 6 h 住	床面		縦位線文。						149
217	VII C 6 h 住	埋土	縁部に縦位線文による凹凸、縁部上につ。							149
218	VII C 6 h 住	埋土		L.R 縦、片縁に縦位線文。						149
219	VII C 6 h 住	埋土	沈没。							図 1 b 149
220	VII C 6 h 住	埋土	唇合口縁、口縁直下 L.R 縦位線文。	L.R 縦。						図 1 b 149
221	VII C 6 h 住	埋土	唇合口縁による変形文、縁部状口縁。					222 と同一個体。		149
222	VII C 6 h 住	埋土	唇合口縁による変形文。					221 と同一個体。		149
223	VII C 6 h 住	埋土	縁部上縁部工具による凹凸、沈没。							150
224	VII C 6 h 住	埋土	L.R 縦位線文。							図 1 b 150
225	VII C 6 h 住	埋土	唇合口縁、縁部 (縁上縁 M 字)。	L.R 縦。						150

番号	出土地点	層位	器種	石質	産地	長さ	幅	厚さ	重さ	備考	分類	写真
226	VII C 6 h 住	Q 3 埋土	石鏃	硬質灰岩	平石西部	2.0	1.3	0.4	1.24		図 b 2	150
227	VII C 6 h 住		石鏃	硬質泥岩	平石西部	3.7	1.4	0.7	2.78		図 a 2	150
228	VII C 6 h 住		不定形石器	硬質磁灰岩	平石西部	2.7	3.8	0.5	2.16	平面形は三角形、折断面と違あり。	図 a 1	150
229	VII C 6 h 住		不定形石器	硬質磁灰質泥岩	平石西部	3.9	2.8	1.0	8.27	右面は微小刺傷。	図 a 1	150
230	VII C 6 h 住	床面	不定形石器	硬質泥岩	平石西部	6.1	3.3	1.0	12.62	素材面を多く残す。	図 a 2	150
231	VII C 6 h 住	ベルト埋土	不定形石器	磁質泥岩	北上山地	6.0	3.4	0.9	10.69	持握面はいは折断面あり。	図 a 2	150
232	VII C 6 h 住	床面	不定形石器	硬質泥岩	平石西部	5.4	3.8	0.8	14.48	表面は自然磨。	図	150

第66図 VII C 6 h 住居跡出土遺物(1)



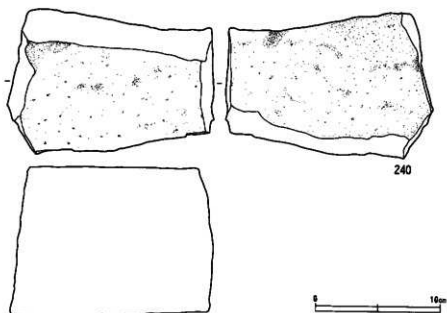
233~238 0 10cm

239 0 10cm

番号	出土地点	層位	器種	材質	産地	長さ	幅	厚さ	底さ	備考	分類	写真
233	ⅧC 6 h 住	埋土	石鏝	凝灰岩	北上山地	7.0	6.0	1.6	100		I	150
234	ⅧC 6 h 住	Q 4 埋土	石鏝	凝灰質礫砂岩	北上山地	7.3	5.8	2.1	100		I	150
235	ⅧC 6 h 住	Q 4 埋土	石鏝	粘板岩	北上山地	7.8	5.1	1.1	60		I	150
236	ⅧC 6 h 住	埋土	石鏝	凝灰岩	北上山地	6.6	5.8	1.8	100		I	150
237	ⅧC 6 h 住	灰面	石鏝	凝灰岩	北上山地	5.8	9.3	1.5	120		II	150
238	ⅧC 6 h 住	灰面	磨房器類 A 群	凝灰質礫砂岩	北上山地	(14.7)	10.1	2.1	(650)		類 b 3	150
239	ⅧC 6 h 住	灰面	石皿・白石皿	内峰石安山岩	狩子火山	(8.8)	(21.7)	8.9	(178)			151

第67図 ⅧC 6 h 住層跡出土遺物(2)





番号	出土地点	層位	群像	材質	産地	長さ	幅	高さ	重さ	備考	分取	写真
240	ⅦC 6 h 住	床面	石皿・台石類	陸奥貫成所産	北上山地	11.0	14.5	11.0	2000			151

第68図 ⅦC 6 h 住居跡出土遺物

れたものである。また半円状扁平打製石器に形状が類似する花崗岩質岩（半円状花崗岩質岩と仮称する。以下同じ。）が3点、Uフレが4点、フレークが15点出土している。

時期 破片資料のみであり詳細は不明であるが、出土遺物から縄文前期後葉から中期初頭の範囲に属すると考えられる。

#### ⅦC 7 f 住居跡（遺構番号23）

遺構（第69図、写真図版26）

〈検出状況〉西尾根の西斜面に位置する。埋土と壁土が殆ど同一色で区別がつかず、平面的な検出はできなかった。再堆積層を30cmほど下げたところで焼土が検出され、その斜面下方から遺物が多く出土したことから、遺構であることを想定して精密を進めたところ東壁を検出することができた。斜面下方にあたる西側は流失している。

〈形状・規模〉残存状況が悪く不明である。残存値は、東西2.1m、南北2mである。

〈壁・壁高〉斜面上方のみ残存し、暗褐色土でやや軟質である。東壁は18.5cm、南壁13cmであ

る。

<埋土>検出が遅れたため埋土断面図をとれなかった。褐色ないしは暗褐色土で、締まりに欠ける。

<床・柱穴・施設>再堆積層である暗褐色土を床としやや軟質である。柱穴は検出されなかった。

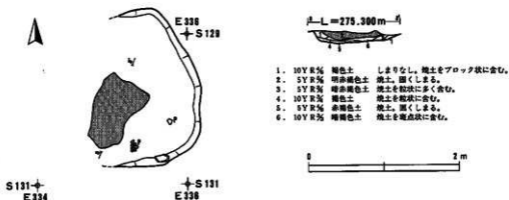
<炉>地床炉1基を検出した。焼土は55×100cmの範囲に分布し、厚さは最大12cmである。床面を構成する暗褐色土がレンズ状に焼成をうけたもので、固く締まっている。

遺物(第70図、写真図版151)

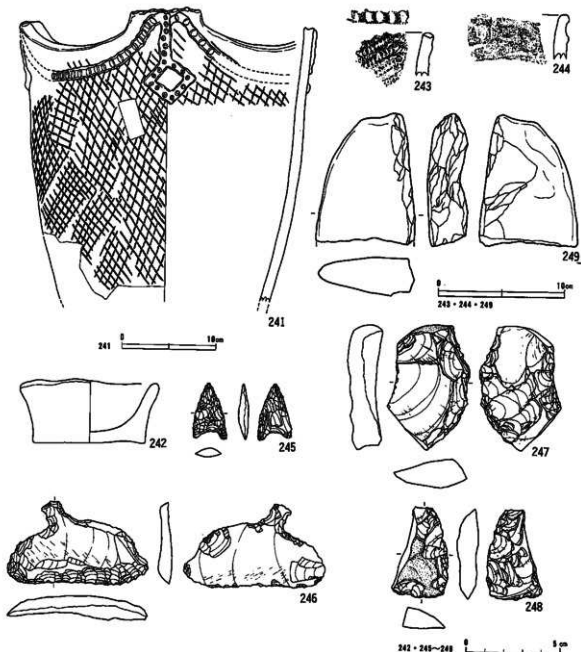
<土器>241は床面出土の破片と、遺構外で取り上げたものと接合したものである。4つの弁状突起をもつ波状口縁で、1対はやや高く他の1対はそれよりやや低いと考えられる。弁状突起の口唇部には右方向から指頭が押圧される。口唇部はなでられていて平らである。胴部には地文施文後に隆帯を貼り付けているが、頂部と頂部を連結するものと、頂部から垂下して菱形を形成するものとある。前者はやや平たい隆帯上に左側の隆帯には左側から、右側のそれには右側から指頭を押圧しているが、剥落のため図示した部分以外は不明である。後者は断面形が長方形のやや角ばった隆帯上に、器体に対して直角に竹管が刺突される。242は手づくねによる無文の小型土器である。

<石器>248は自然面を残し粗い剝離である。打製石斧の欠損品の可能性もある。図示した他に床面から半円状花崗岩質岩が1点、埋土からUフレ1点、フレーク7点が出土している。

時期 床面土器から、縄文時代前期後葉に属すると考えられる。



第69図 VII C7 f 住居跡



番号	出土地点	層位	文様	地文	口径	底径	高さ	備考	分類	写真
241	ⅦC 7 f 住	床面	縦横の線、斜交の線、交点部に細い線が交差し、斜交した管状物、斜交した線状物。	1. 網目状水穴。	10.4	-	20.8		Ⅱc f	151
242	ⅦC 7 f 住	床面	無文		7.4	6.0	3.4			151
243	ⅦC 7 f 住	Q 4 層土	放射口縁。斜交の管状物。口縁部棒状工具による押圧。							151
244	ⅦC 7 f 住	Q 4 層土	凹文(盲孔)							151

番号	出土地点	層位	器種	石質	産地	長さ	幅	厚さ	重さ	備考	分類	写真
245	ⅦC 7 f 住		石鏃	凝灰岩	甲石西部	2.0	1.8	0.5	1.70		Ⅱc f	151
246	ⅦC 7 f 住	Q 1 層土	石鏃	硬質泥岩	新橋三軒屋	4.3	7.3	0.4	25.36		Ⅱb	151
247	ⅦC 7 f 住	Q 1 層土	不定形石鏃	硬質泥岩	甲石西部	6.6	4.3	1.4	31.18		Ⅱa 3	151
248	ⅦC 7 f 住	Q 1 層土	不定形石鏃	硬質泥岩	甲石西部	4.8	3.0	1.1	15.06		Ⅱ	151
249	ⅦC 7 f 住	Q 4 層土	船形器類A群	凝灰質千枚岩	北上山地	10.3 (7.8)	7.6 (5.8)			欠損品。		151

第70図 ⅦC 7 f 住居跡出土遺物

ⅦC f 住居跡 (遺構番号24)

遺構 (第71図、写真図版26)

〈検出状況〉西尾根の西斜面に位置する。埋土と壁土が殆ど同一色で区別がつかず、平面的な検出はできなかった。再堆積層下位で土器が多く出土し、焼土も検出されたことから遺構であることを想定して精査を進めたところ東壁を検出することができた。斜面下方にあたる西側は流失している。

〈形状・規模〉残存状況が悪く不明である。残存値は、東西1.9m、南北3.6mである。

〈壁・壁高〉斜面上方のみ残存し、暗褐色土でやや軟質である。やや外傾する。壁高は東壁22cmである。

〈埋土〉褐色土で構成されるが、下位にはにぶい褐色土を混入する。

〈床・柱穴・施設〉再堆積層である暗褐色土を床としやや軟質で凹凸がある。柱穴は検出されなかった。

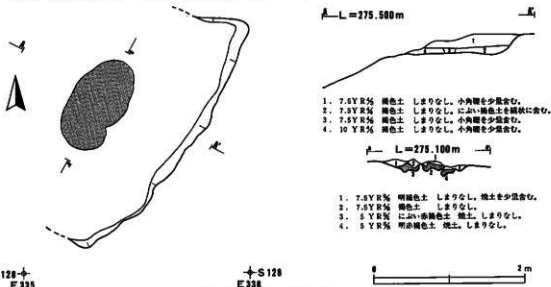
〈炉〉地床炉1基を検出した。焼土は38×65cm楕円形状に分布し、厚さは最大7cmである。木根により一部攪乱されている。

遺物 (第72図、写真図版152)

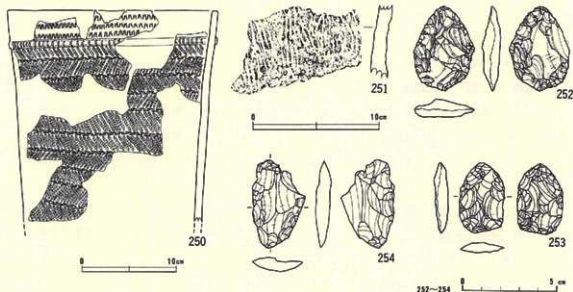
〈土器〉床面からは251が、埋土から250を含め450gが出土した。250は頸部に爪形を連続押圧した隆帯を貼付けて口縁部文様体を区画し、口縁部には絡糸体圧痕により「V」または「X」を連続させている。胴部地文は第2種結束による羽状縄文である。

〈石器〉252、253は粗い刺刃だが全面を加工している。254は欠損品である。加工は粗い。

時期 床面出土土器から、縄文前期末葉に属すると考えられる。



第71図 ⅦC f 住居跡



番号	出土地点	層位	支保	地文	口径	底径	高さ	備考	分類	写真
250	VII C 8 f 住	埋土	磁器片(磁、陶器上(陶器による?) 注釈)	L R × R L 第2種結束別状縄文。	(22.3)	-	(22.3)			152
251	VII C 8 f 住	床面		天然赤文。						152

番号	出土地点	層位	器種	材質	産地	長さ	幅	厚さ	重さ	備考	分類	写真
252	VII C 8 f 住	床面	尖頭器縁石器	粘板岩	北上山地	4.5	3.2	0.8	11.30			152
253	VII C 8 f 住	埋土	尖頭器縁石器	泥質凝灰岩	平石西部	2.7	2.5	0.7	5.80			152
254	VII C 8 f 住	埋土	不定形石器	粘板岩	平石西部	4.6	2.6	0.7	9.90	折損部あり。		152

第72図 VII C 8 f 住居跡出土遺物

### VII C 8 g 住居跡 (遺構番号25)

#### 遺構 (第73図、写真図版27)

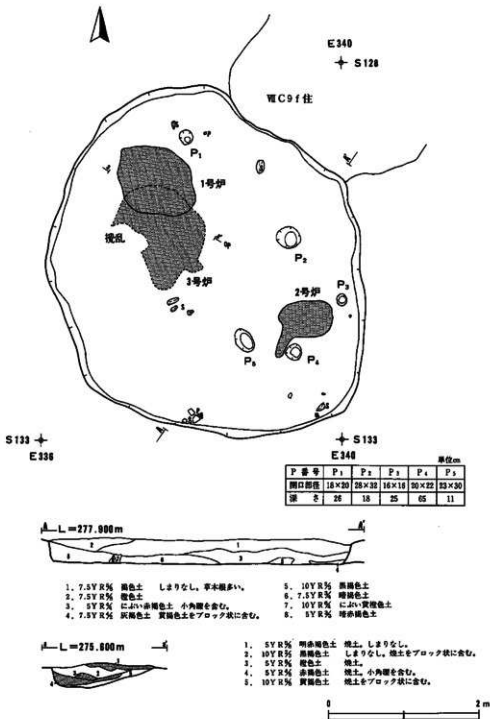
〈検出状況〉西尾根の頂部に位置する。再堆積層を10cm程下げたところで、若干の土の濁りとして検出された。VII C 9 f 住居跡と北壁で重複する。図面をとれなかったが精査時の観察で、本住居の埋土がVII C 9 f 住居跡まで入り込むことが確認されており、本住居の方が新しい。

〈形状・規模〉不整な円形で、径は4.2mから5mの範囲にある。

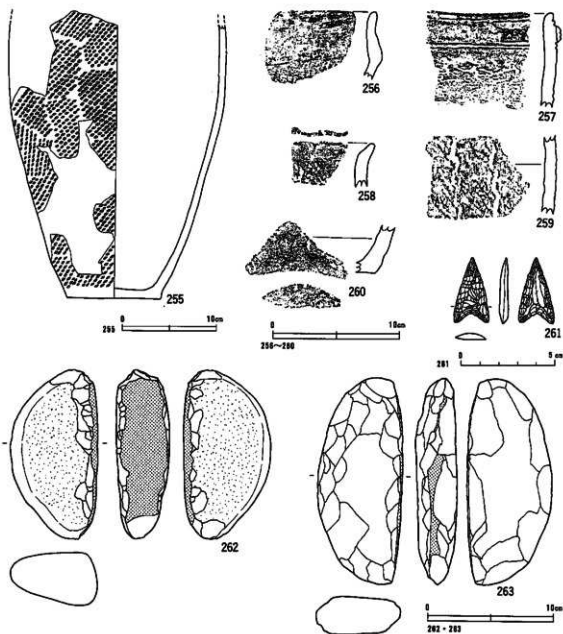
〈壁・壁高〉再堆積層を構成する褐色土でやや軟質である。やや外傾する。壁高は東壁15cm、西壁で8cm、南壁19cm、北壁25cm。VII C 9 f 住居跡との重複部分の床面の比高は2～3cmである。

〈埋土〉上位は褐色土、下位は暗褐色土が主体をなし、中位はその混土でやや赤味を帯びる。いずれも締まりに欠ける。

〈床・柱穴・施設〉ほぼ水平で平坦であり、固く締まっている。黄褐色土と褐色土の混土であ



第73図 VE C 8 g 住居跡



番号	出土地点	層位	文様	地文	口徑	通径	長さ	分厚	重量	備考	分類	写真
255	ⅦC 8 g 住	床直上		R L R 縦	-	10.0	30.5					152
256	ⅦC 8 g 住	床面	口縁部磨損し無文。胴部竹管凹文。	0 状多象。R L 縦。							Ⅱ 1	152
257	ⅦC 8 g 住		竹管内部による平行沈線。半線竹管割欠。	R 状木文。							Ⅱ 1	152
258	ⅦC 8 g 住	伊	花弁状口縁。	L R 縦。片結び縦位磨損文。								152
259	ⅦC 8 g 住	床面		L R 縦。片結び縦位磨損文。								152
260	ⅦC 8 g 住	床面	無文。								Ⅱ 1	152

番号	出土地点	層位	部種	石質	産地	長さ	幅	厚さ	重さ	備考	分類	写真
261	ⅦC 8 g 住	塚土	石鏃	地質泥岩	宇石西郡	3.5	1.8	0.4	2.22		Ⅱ d 2	152
262	ⅦC 8 g 住	床面	胎輪形類人形	硬砂岩	北上山地	13.4	7.0	4.2	540	平墳墓 2 号。	Ⅱ a 2	152
263	ⅦC 8 g 住	塚土の中	胎輪形類人形	粘板岩質千枚岩	北上山地	16.2	6.7	2.9	480		Ⅱ b 3	152

第74図 ⅦC 8 g 住居跡出土遺物

る。柱穴は5個検出された。P1とP3は位置・規模から対応すると考えられる。

〈炉〉床面で2基、床面よりやや下のレベルで1基の計3基の焼土が検出された。位置・規模・焼成の様子から地床炉と考えられる。床面で検出された炉のうち、西側のものを1号炉、東側のものを2号炉とし、床面より下のレベルで検出されたものを3号炉とする。1号炉の焼土は90×120cmの楕円形状に分布し、厚さは最大10cmで固い。2号炉は50×70cmの不整形の範囲に分布し、厚さは最大2cmである。色調は淡いが床面が焼成を受けたものである。3号炉は1号炉の上面から5～8cm下のレベルで検出された。焼土は90×140cmの不整形の範囲に分布し、厚さは最大20cmで固く締まっている。1号炉と2号炉の間には黒褐色土が堆積する。炉の使用は2時期と考えられるが、それに伴う建替えや平面形等は確認できなかった。このことから、3号炉は床を掘り込んで使用したもので、その後黒褐色土で埋めて再びその位置を炉として使用したと考えられる。

遺物（第74図、写真図版152）

〈土器〉床面から2775g、埋土から475g出土した。255は口縁部を欠損するが、複節の斜縄文を地文とし、焼成良好で硬質である。256は頸部で屈曲する器形で、口縁部は無文である。無文帯との境界に竹管刺突文が連続する。

〈石器〉262は磨面の幅がほぼ器体の最大幅に等しい。磨面断面形は凸状である。

時期 床面出土土器と重複関係から、縄文時代中期初頭と考えられる。

ⅦCⅡJ 住居跡（遺構番号26）

遺構（第75図、写真図版28）

〈検出状況〉西尾根の東斜面に位置する。再堆積層を10cmほど下げたところで、若干土の濁りみられ、斜面下方において焼土が検出されたことから確認できた。東側は流失により不明である。

〈形状・規模〉残存状況が悪く不明であるが、斜面に平行する長方形を基調とするものと推定される。規模は、残存値で1.56×3mである。

〈壁・壁高〉基盤層で固く、凹凸がある。ほぼ直立する。壁高は西壁12cm、南壁10cmである。

〈埋土〉上位は褐色土、下位は暗褐色土が主体をなす。自然堆積の様相を示す。

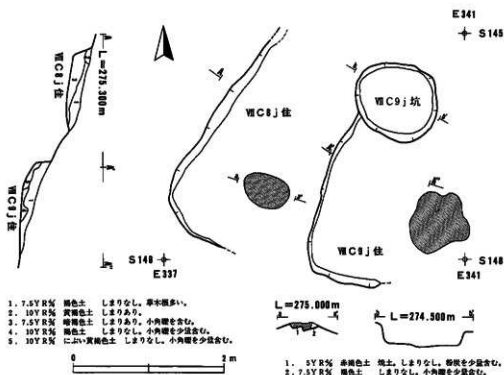
〈床・柱穴・施設〉暗褐色土でやや軟質であり、ほぼ平坦である。柱穴は検出されなかった。

〈炉〉地床炉を1基検出した。焼土は34×64cmの楕円形状に分布し、厚さは最大5cmである。固く締まっている。

遺物（第76図、写真図版153）

〈土器〉床面から75g、埋土から770g出土した。264は波状口縁頂部の突起先端部が2又と





第75図 VII C 8・VII C 9住居跡

なっている。265は棒状工具による沈線が施文され、比較的硬質である。ほかに横位綾結文の破片が出土している。

時期 特定する資料を欠くが、床面出土土器片から縄文時代前期末葉から中期初頭に属するものと考えられる。

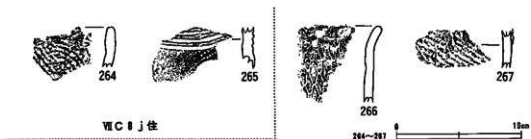
#### VII C 9 f住居跡 (遺構番号27)

##### 遺構 (第77図、写真図版28)

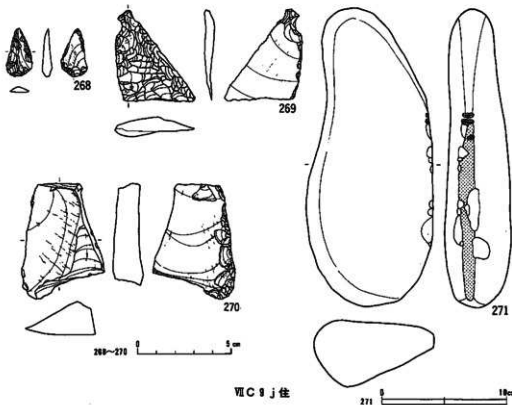
<検出状況>西尾根の頂部に位置する。再堆積層を10cmほど下げたところで、若干土の濁りがみられたことから検出した。VII C 8 g住居跡と南西壁で重複している。図面が取れなかったが精査時点の観察で、VII C 8 g住居跡の埋土が本住居まで入り込むことから、VII C 8 g住居跡の方が新しいと考えられる。

<形状・規模>径2.8m前後の円形である。

<壁・壁高>北壁は基盤層、東西壁は暗褐色土でほぼ直立する。壁高は東壁40cm、西壁26cm、



ⅦC 8 j 住



ⅦC 8 j 住

番号	出土地点	層位	文様	地文	口徑	蓋部厚	器高	器容	備考	分類	写真	
264	ⅦC 8 j 住	埋土	口縁部突起。	L.R 境。						Ⅷb 1	153	
265	ⅦC 8 j 住	床面	沈没。	L.R 境。						Ⅷb 1	153	
266	ⅦC 8 j 住	床面	花卉状口縁。	R 顔目状部赤文。						Ⅷb 1	153	
267	ⅦC 8 j 住	埋土	胎巻上に縄文。	L.R 境。						Ⅷb c	153	
番号	出土地点	層位	器種	材質	産地	長さ	径	厚さ	重さ	備考	分類	写真
268	ⅦC 8 j 住	床面	石錘	埴質泥岩	宇石西部	2.0	1.3	0.5	1.24		Ⅷb 1	153
269	ⅦC 8 j 住		石匙	埴質泥岩	宇石西部	4.8	4.2	1.1	31.40		Ⅷb 2	153
270	ⅦC 8 j 住		不定形石器	埴質泥岩	宇石西部	6.1	4.3	1.8	42.84		Ⅷ	153
271	ⅦC 8 j 住	床面	陶器器種A群	緑色凝灰岩	奥羽山地	24.6	10.1	5.1	1680		Ⅷa 1	153

第76図 ⅦC 8 j・ⅦC 8 j 住居跡出土遺物

北壁30cmである。

〈埋土〉暗褐色土を主体とし、全体に締まりを欠く。下位では小角礫が多く混入する。

〈床・柱穴・施設〉暗褐色土で、ほぼ水平で平坦である。柱穴は検出されなかった。

〈炉〉石圍炉1基を検出した。中央からやや南西寄りに位置する。偏平な歪角礫を8個用いて、ほぼ長方形に構成される。南西側は石が抜き取られた痕跡がある。その方向はⅦC8g住居跡と重複する方向と一致し、何らかの関係があった可能性があるが、埋土からは確認できなかった。規模は、構成礫の外法で短軸が92cm、長軸は推定で110cmである。礫の大きさは10cmから50cmまであり、礫自体には被熱の痕跡は残っていない。うち1個の石質は、古生界の北上山地産珪長質凝灰岩である。

遺物（第78図、写真図版153）

〈土器〉小破片のみの出土である。275は焼土内からの出土であり、他の土器とは時期が異なり本遺構に先行する可能性がある。

〈石器〉283は偏平な自然礫の両側面に擦痕があり、両平坦部に凹部を形成する。他に床面からフレーク1点が出土している。

時期 破片資料のみであるが、床面出土土器から縄文中期初頭に属すると推定される。

### ⅦC9i-3住居跡

遺構（第79図、写真図版29）

〈検出状況〉西尾根の頂部付近の東斜面に位置する。再堆積層を10cmほど下げたところで、若干土の濁りとして検出した。当初1棟と考えられたが、埋土断面と床面の高さから、西側でⅦC9i-4住居跡と重複していることが分かった。またⅦC9i-3住居跡も、床面精査で本住居に先行する周溝が検出され、建替えをしていることが分かった。新期のものをⅦC9i-3a住居跡、古期のものをⅦC9i-3b住居跡として記載する。南側でⅦC9j-2住居跡を切る。本住居の床面下から原位置を保つ焼土が検出された。これはⅦC9i-3b住居跡より更に古期のものである。東側は斜面のため流失していて不明である。

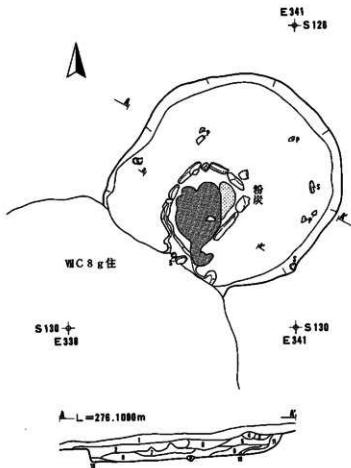
ⅦC9i-3a住居跡（遺構番号28）

〈形状・規模〉詳細は不明であるが方形ないしは長方形を呈するものと推定される。南北4.9m、東西は残存値で4.3mである。

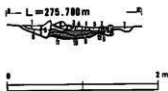
〈壁・壁高〉基盤層で固く、緩やかに立ち上がる。壁高は西壁10cm、南壁15cm、北壁5cmである。

〈埋土〉3層に大別される。最下層には粉炭を含む。自然堆積の様相を示す。

〈床・柱穴・施設〉斜面上方は基盤層、他はにぶい黄褐色土で全体にやや凹凸がある。柱穴は

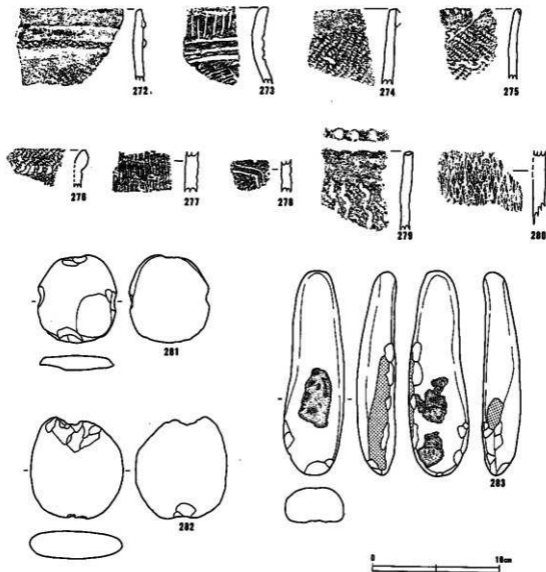


- |                  |               |                    |                    |
|------------------|---------------|--------------------|--------------------|
| 1. 7.5Y R% 褐色土   | しまりなし。草木根多い。  | 7. 7.5Y R% 褐色土     | 小角礫を含む。            |
| 2. 5Y R% 赤褐色土    | しまりなし。小角礫を含む。 | 8. 7.5Y R% 暗褐色土    | しまりあり。黄褐色土、黒色土を含む。 |
| 3. 7.5Y R% 明褐色土  | しまりなし。        | 9. 7.5Y R% におい褐色土  |                    |
| 4. 7.5Y R% 暗褐色土  | しまりなし。黒色土を含む。 | 10. 7.5Y R% 明褐色土   | 黄褐色土を含む。           |
| 5. 5Y R% 赤褐色土    |               | 11. 7.5Y R% におい褐色土 |                    |
| 6. 5Y R% におい赤褐色土 |               |                    |                    |



- |                   |                  |
|-------------------|------------------|
| 1. 10Y R% 褐色土     | しまりなし。砂を含む。      |
| 2. 7.5Y R% 明褐色土   | しまりなし。砂を少量含む。    |
| 3. 10Y R% 明黄褐色土   | しまりなし。小角礫を多量に含む。 |
| 4. 10Y R% 明黄褐色土   | しまりなし。粘土を粒状に含む。  |
| 5. 10Y R% 暗褐色土    | しまりなし。小角礫を少量含む。  |
| 6. 7.5Y R% 褐色土    | しまりなし。砂、小角礫を含む。  |
| 7. 10Y R% 暗褐色土    | しまりなし。砂、小角礫を含む。  |
| 8. 10Y R% におい黄褐色土 | しまりなし。砂を含む。      |
| 9. 5Y R% におい赤褐色土  | しまりなし。腐炭を含む。     |
| 10. 5Y R% 明赤褐色土   | しまりなし。砂を少量含む。    |
| 11. 5Y R% 褐色土     | しまりなし。砂を少量含む。    |
| 12. 5Y R% 明赤褐色土   | しまりなし。           |

第77図 WC 8 f 住居跡

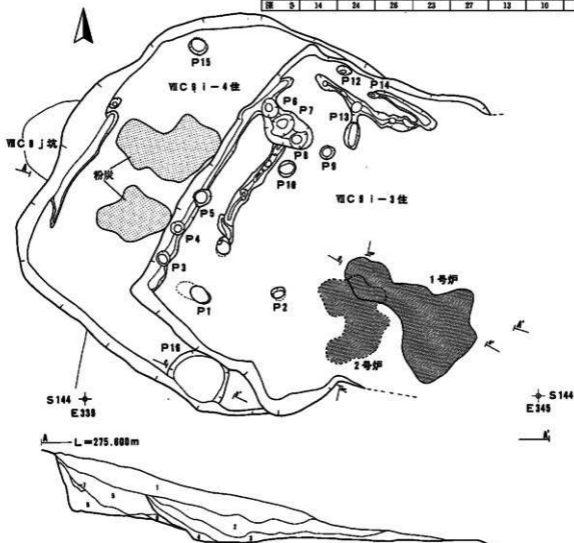


番号	出土地点	層位	文様	地文	口径	底径	高さ	個数	分類	写真
272	ⅥC9f住	床面	幾合口縁。幾合上地文と同じ層位による回転施文。	ⅠL施。					Ⅲb	153
273	ⅥC9f住	床面	幾合文。	ⅠL施。					Ⅲa	153
274	ⅥC9f住	伊内	折り返し口縁(刺繍)。	ⅠL施。					Ⅲb	153
275	ⅥC9f住	伊内	口唇部棒状工具による割み。	ⅠL施。片割ひ破位幾合文。					Ⅲb	153
276	ⅥC9f住		口縁部肥厚。口縁直下に幾合?による爪形凹痕。	ⅠL施。					Ⅲb	153
277	ⅥC9f住	床面		ⅠL施無文。						153
278	ⅥC9f住	床面	半截竹管内面による平行波線。竹管刺突。							153
279	ⅥC9f住	埋土	口縁部無文。口唇部指環状正成。	ⅠL施。片割ひ破位幾合文。					Ⅲb	153
280	ⅥC9f住	伊内		ⅠL施目状幾合文。						153

番号	出土地点	層位	部題	材質	産地	長さ	幅	厚さ	個数	分類	写真	
281	ⅥC9f住	伊内	石鏝	湖尻群	北上山地	6.8	6.3	1.1	80	Ⅲ	153	
282	ⅥC9f住	埋土	石鏝	岐阜管地民器	北上山地	5.0	7.3	2.2	190	I	153	
283	ⅥC9f住	床面	龍崎器類A群	緑色凝灰岩	真羽山地	16.1	4.6	2.6	310	瀬田2型。+別石。	Ⅲa2	153

第78図 ⅥC9f住層跡出土遺物

P番号	P <sub>1</sub>	P <sub>2</sub>	P <sub>3</sub>	P <sub>4</sub>	P <sub>5</sub>	P <sub>6</sub>	P <sub>7</sub>	P <sub>8</sub>
開口部径	20×20	17×20	12×17	18×19	21×22	22×20	26×26	21×24
深さ	47	56	12	25	34	45	50	46
P番号	P <sub>9</sub>	P <sub>10</sub>	P <sub>11</sub>	P <sub>12</sub>	P <sub>13</sub>	P <sub>14</sub>	P <sub>15</sub>	P <sub>16</sub>
開口部径	18×18	20×22	16×20	14×20	14×17	10×14	22×24	70×80
深さ	14	24	26	23	27	13	10	22



1. 10Y R 列 黄褐色土 しまなし、草木灰多い。
2. 7.5Y R 列 におい黄褐色土 しまなし、砂、小角礫を含む。
3. 10Y R 列 黄褐色土 しまあり、褐色土を塊状に含む。
4. 10Y R 列 におい黄褐色土 しまあり、小角礫、砂、炭化物を塊状に含む。

5. 10Y R 列 黄褐色土 しまりあり、小角礫を多く含む、炭化物を少量含む。
6. 10Y R 列 におい黄褐色土 しまりあり、小角礫、炭化物を多量に含む。
7. 10Y R 列 黄褐色土 しまりあり、小角礫を多く含む。
8. 10Y R 列 におい黄褐色土 しまりなし、小角礫、粉炭を多く含む。



1. 10Y R 列 黄褐色土 しまりなし、草木灰多い。
2. 10Y R 列 におい黄褐色土 しまりなし、小角礫を多く含む。
3. 10Y R 列 黄褐色土 しまりなし、小角礫を少量含む。
4. 5Y R 列 赤褐色土 焼土、固くしまる。
5. 10Y R 列 褐色土 中やしまる、草木灰多い。
6. 5Y R 列 明赤褐色土 焼土、固くしまる。

1. 5Y R 列 明赤褐色土 焼土、固くしまる。
2. 5Y R 列 赤褐色土 焼土、しまりなし、粉炭を少量含む。



第79図 WC I-3・WC I-4住居跡



284



285



286



287



288



289



290



291



292



293



294



295

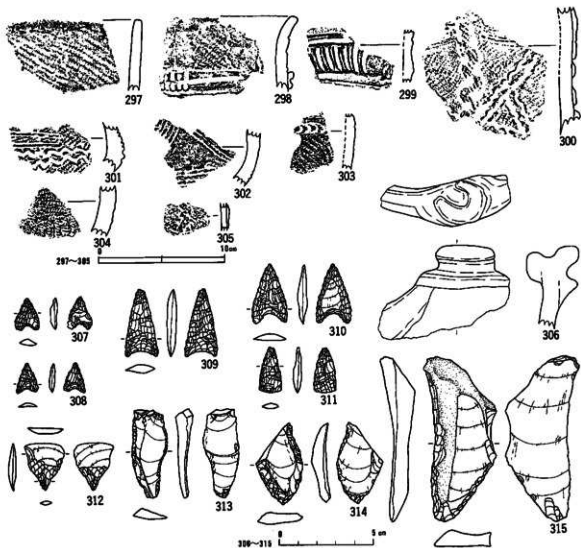


296



番号	出土地点	層位	文様	地文	口縁	底縁	器高	備考	分類	写真
284	ⅧC9i-3住	埋土	複合口縁、山形状突起(2山)、縦位の弧状隆帯上にも地文	L.縦縞	29.4	-	(4.7)		Ⅷb	154
285	ⅧC9i-3住	埋土		R.L.縦	29.4	-	(5.0)		Ⅷd	154
286	ⅧC9i-3住	埋土	複合口縁。	無文	29.4	-	(5.0)		Ⅷd	154
287	ⅧC9i-3住	埋土	複合口縁、隆帯上にも縦文。	L.縦縞。					Ⅷb	154
288	ⅧC9i-3住	埋土	複合口縁。	L.縦縞。					Ⅷb	154
289	ⅧC9i-3住	埋土	複合口縁。	L.縦縞。					Ⅷb	154
290	ⅧC9i-3住	埋土	複合口縁。	L.縦縞。					Ⅷb	154
291	ⅧC9i-3住	埋土	波状口縁。	L.縦縞面圧痕。					Ⅷc	154
292	ⅧC9i-3住	埋土	橋梁状口縁。						Ⅷa	154
293	ⅧC9i-3住	埋土	口縁部沿縁状圧痕(爪跡明瞭)、半截竹管平行縞条状口縁。						Ⅷa	154
294	ⅧC9i-3住	埋土	隆帯上に左方向からの指痕状圧痕。	灰褐色文。					Ⅷc?	154
295	ⅧC9i-3住	埋土	口縁部無文、口縁下波縞。	R.網目状褐色文。					Ⅷc?	154
296	ⅧC9i-3住	埋土	波状口縁。	L.褐色文。					Ⅷc	154

第80図 ⅧC9i-3住居跡出土遺物(1)

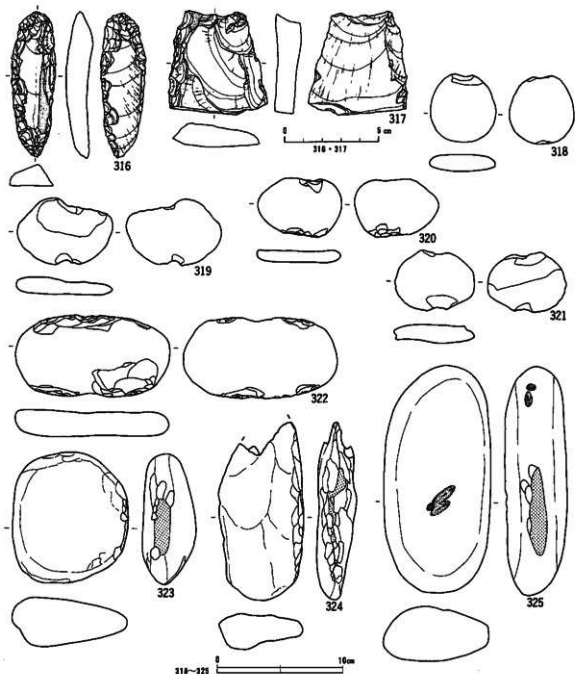


番号	出土地点	層位	文様	地文	透彫部	番号	分類	写真
297	ⅧC9I-3住	埴土		L.R.縦。			Ⅷd	154
298	ⅧC9I-3住	埴土	腰帯上挿杖工具による沈線跡のみ。	L.R.縦、片側/傾斜沈線跡。			Ⅷa	154
299	ⅧC9I-3住	埴土	沈線。				Ⅷa	154
300	ⅧC9I-3住	埴土	腰帯上L.R.施え、半横竹管平行沈線による方形印痕、挿杖工具による波状沈線跡。				Ⅷa	154
301	ⅧC9I-3住	埴土	波状沈線、半横竹管内面による平行沈線。	L.R.横。			Ⅷa	154
302	ⅧC9I-3住	埴土	半横竹管内による平行沈線。				Ⅷa	154
303	ⅧC9I-3住	埴土	半横竹管内面による押し引き。	L.R.縦。			Ⅷa	154
304	ⅧC9I-3住	埴土	内面沈線。	○多数条L.R。			Ⅷa	154
305	ⅧC9I-3住	埴土	腰帯上に縦文。				Ⅷc	154
306	ⅧC9I-3住	埴土	内面沈線。				Ⅷa	154

番号	出土地点	層位	器種	材質	産地	長さ	幅	厚さ	重さ	備考	分類	写真
307	ⅧC9I-3住	埴土	石鏃	硬質泥岩	平石西部	1.7	1.3	0.3	0.47		Ⅷc2	155
308	ⅧC9I-3住	埴土	石鏃	チャート	北上山地	1.6	1.1	0.3	0.28	小径、脚部一部欠損。	Ⅷd2	155
309	ⅧC9I-3住	埴土	石鏃	河原産泥岩	平石西部	3.6	1.7	0.5	2.40		Ⅷb1	155
310	ⅧC9I-3住	埴土	石鏃	河原産泥岩	平石西部	3.3	1.8	0.5	1.90	器底の持ちが大きい。	Ⅷc2	155
311	ⅧC9I-3住	埴土	石鏃	河原産泥岩	平石西部	2.4	1.1	0.3	1.00		Ⅷe2	155
312	ⅧC9I-3住	埴土	石鏃	硬質泥岩	平石西部	2.5	2.1	0.3	1.00	器底は扁平、身管はやや厚い、尖部薄くなり出し顕著。	Ⅷa	155
313	ⅧC9I-3住	埴土	不定形石鏃	粘板岩	北上山地	4.7	1.9	0.9	5.30	1辺は方形、1辺は数小斜線。	Ⅶa1	155
314	ⅧC9I-3住	床面	不定形石鏃	粘板岩	北上山地	4.3	2.4	0.6	5.94		Ⅶb2	155
315	ⅧC9I-3住	埴土	不定形石鏃	硬質泥岩	平石西部	5.7	3.4	1.3	31.60	縦対する2側面に二次加工。自然磨損す。	Ⅶd3	155

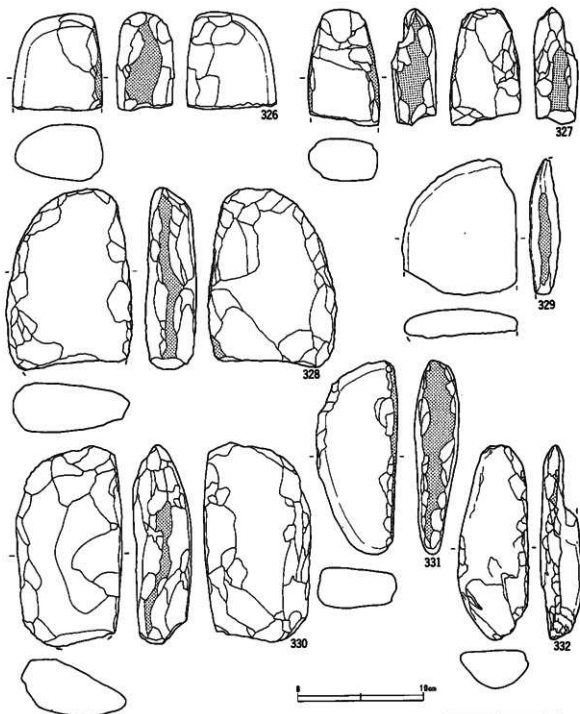
第81図 ⅧC9I-3住層跡出土遺物(2)





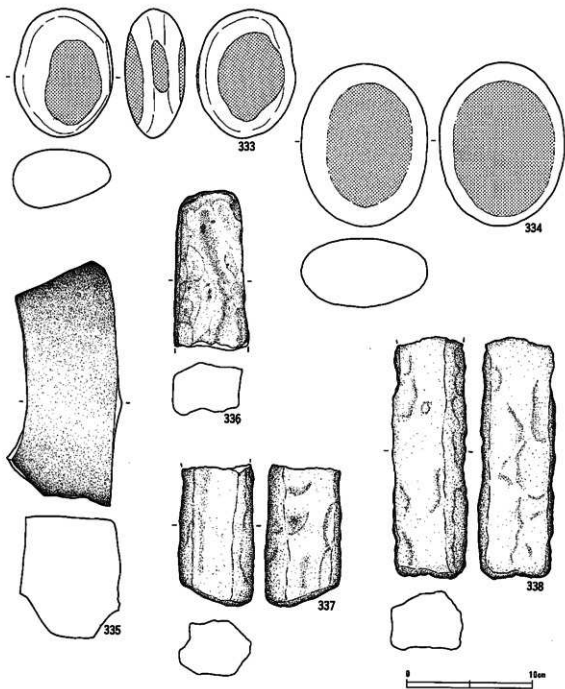
番号	出土地点	層位	器種	材質	産地	長さ	幅	厚さ	重さ	備考	分類	器具
316	ⅦC9i-3住	床面	不定形石器	綠泥質砂	宇石磨部	7.7	2.4	1.3	21.00		Ie	155
317	ⅦC9i-3住	床面	不定形石器	硬質泥岩	宇石磨部	5.4	5.2	1.1	46.50	急角度のステップ状刻痕。	Ⅱ	155
318	ⅦC9i-3住	床面	石鏃	凝灰岩	北上山地	5.3	5.3	1.3	65		I	155
319	ⅦC9i-3住	床面	石鏃	凝灰岩	北上山地	5.2	7.0	1.3	70		II	156
320	ⅦC9i-3住	床面	石鏃	凝灰岩	北上山地	4.6	6.7	1.0	50		II	156
321	ⅦC9i-3住	床面	石鏃	ホルンフェルス	北上山地	4.8	6.3	1.4	60		II	156
322	ⅦC9i-3住	床面	石鏃	凝灰岩	北上山地	6.5	12.3	2.1	300		II	156
323	ⅦC9i-3住	横出面	扇形器類A群	凝灰岩	北上山地	10.3	9.2	4.3	365		Ia1	156
324	ⅦC9i-3住	床面	扇形器類A群	凝灰岩千枚岩	北上山地	14.0	6.8	2.9	380		Ib3	156
325	ⅦC9i-3住	床面	扇形器類A群	河津石安山岩	奥羽山地	18.0	8.5	5.0	1170	+附石。	Ila1	156

第52図 ⅦC9i-3住層跡出土遺物(3)



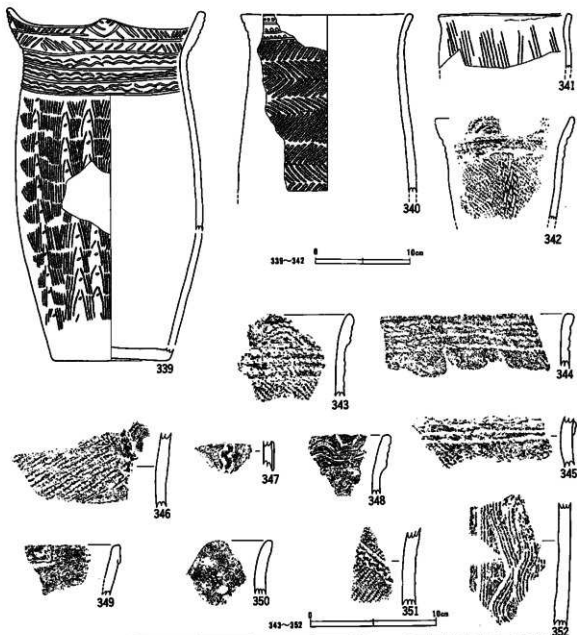
番号	出土地点	層位	器種	材質	産地	長さ	幅	厚さ	重さ	備考	分類	号数
326	ⅧC 9 i - 3 住	床面	放射形割A群	褐色岩	北上山地	7.7	7.3	6.4	0.80		II a	156
327	ⅧC 9 i - 3 住	鉢状面	放射形割A群	緑色凝灰岩	北上山地	9.0	5.6	5.4	0.60	磨面 2面。	II b	156
328	ⅧC 9 i - 3 住	ピット埋土	放射形割A群	褐色質硬砂岩	北上山地	14.0	10.2	9.0	0.80		III b	156
329	ⅧC 9 i - 3 住	放射形割A群	阿部石安山岩	船平大山	11.0	9.8	9.0	0.60			III b	157
330	ⅧC 9 i - 3 住	床面	放射形割A群	褐色質硬砂岩	北上山地	16.0	8.4	4.4	0.60		III b	157
331	ⅧC 9 i - 3 住	放射形割A群	褐色質硬砂岩	北上山地	16.4	3.5	6.5	4.60			III b	157
332	ⅧC 9 i - 3 住	床面	放射形割A群	褐色質千枚岩	北上山地	11.3	3.0	5.3	0.80		III b	157

第83図 ⅧC 9 i - 3 住層跡出土遺物(4)



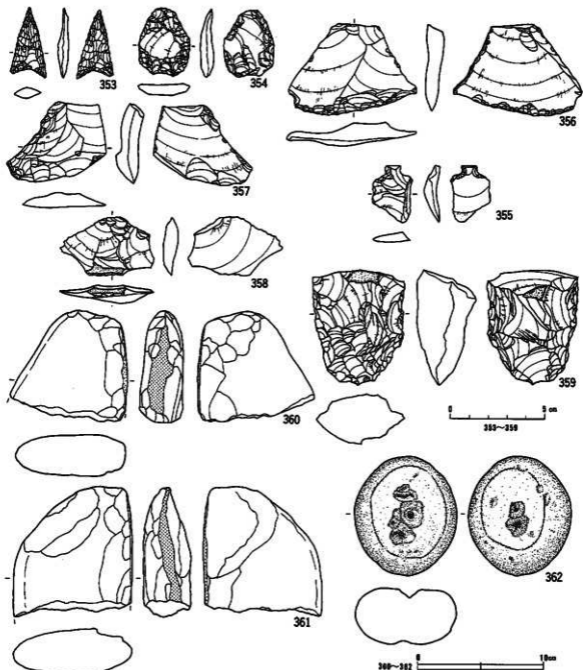
番号	出土地点	層位	器種	石質	産地	長さ	幅	厚さ	重さ	備考	分類	写真
333	VII C 9 i - 3 住	床面	磨面磨製石片	阿蘇石・安山岩	鳥羽山地	10.3	7.5	4.7	510	磨面はざらつき。	I	157
334	VII C 9 i - 3 住	床面	磨面磨製石片	阿蘇石・安山岩	鳥羽山地	12.9	9.8	5.3	900	全面に磨面。光沢あり。	I	157
335	VII C 9 i - 3 住		石皿・白石類	桃長賀瀬灰岩	北上山地	(26.1)	(12.4)	(12.6)	(600)	使用の痕跡は明確でない。		157
336	VII C 9 i - 3 住	ベルト層土	石棒	アイサイト	鳥羽山地	(12.6)	5.9	3.7	(470)			157
337	VII C 9 i - 3 住		石棒	流紋岩	北上山地	(11.6)	6.0	4.4	(460)	切取を微々有する。		157
338	VII C 9 i - 3 住		石棒	流紋岩	鳥羽山地 松尾	(19.1)	6.0	5.6	(640)	磨面部分が短五角形状の痕を有する。		157

第04図 VII C 9 i - 3 住居跡出土遺物(5)



番号	出土地点	層位	文様	地文	口径	底径	高さ	胎厚	分類	寸法
339	ⅧC91-4住	灰層		水目状磨糸状	21.8	(12.4)	27.6		Ⅱ7a	158
340	ⅧC91-4住	灰土	口縁部棒状工具による右方向からの刮突。沈線(凹線)	L.R.Y&L.R.1層状刷文	(24.3)	-	(18.7)		Ⅱ7a	158
341	ⅧC91-4住	灰土		沈線糸文	(14.0)	-	(4.8)		Ⅱ5b	158
342	ⅧC91-4住	灰土		L.R.縦、横筋文	(14.0)	-	(2.8)		Ⅱ5d	158
343	ⅧC91-4住	灰土	波状口縁。L.R.側面沈線。	L.R.縦。					Ⅱ5e	158
344	ⅧC91-4住	灰土	L.R.側面沈線。	L.R.縦、片割/刷文					Ⅱ5f	158
345	ⅧC91-4住	灰土	胎骨上にL.R.側面沈線。	L.R.縦。					Ⅱ	158
346	ⅧC91-4住	灰土	胎骨	L.R.縦。					Ⅱ1c	158
347	ⅧC91-4住	灰土	胎骨						Ⅱ1c	158
348	ⅧC91-4住	灰土	短小口縁。浅い凹部を有する工具による沈線。						Ⅱ1b	158
349	ⅧC91-4住	灰土	短小口縁。	無文。					Ⅱ1b	158
350	ⅧC91-4住	灰土	波状口縁。	無糸文。						158
351	ⅧC91-4住	灰土	竹管外面による沈線。袋形爪形文	L.R.横。					Ⅱ1a	158
352	ⅧC91-4住	灰土上住	波状沈線。						Ⅱ9a	158

第85図 ⅧC91-4住層跡出土遺物(1)



番号	出土地点	層位	器物	材質	産地	長さ	幅	厚さ	重さ	備考	分類	写真
353	ⅧC91-4住	埋土	石鏃	泥質硬灰岩	宇石西部	3.7	1.9	0.6	2.15		IIa1	156
354	ⅧC91-4住	床面	尖頭部石鏃	陸質泥岩	宇石西部	3.6	3.7	0.5	6.81			156
355	ⅧC91-4住	床面	石鏃	チャート	北上山地	3.0	2.1	0.9	3.19		Ⅷ	156
356	ⅧC91-4住	埋土	不定形石鏃	陸質泥岩	宇石西部	4.9	4.8	0.9	25.91	右辺に使用痕あり。	Ia2	156
357	ⅧC91-4住	埋土	不定形石鏃	陸長質細粒凝灰岩	宇石西部	4.2	4.6	1.0	15.29	先端部に打痕あり。	Ib3	159
358	ⅧC91-4住	床面	不定形石鏃	硬質泥岩	宇石西部	3.0	3.0	0.8	11.12	裏面に大ききくさこ。	Ⅷ	159
359	ⅧC91-4住		打製石斧	陸質泥岩	宇石西部	(6.7)	4.9	3.1	80.90	欠損品(大半)。周縁が歪い異状。	II	159
360	ⅧC91-4住	床面	扇形部環A群	西輝石安山岩	長瀬山地	(8.0)	(8.2)	(3.0)	380	欠損品。	IIIa	159
361	ⅧC91-4住	床面	扇形部環A群	西輝石安山岩	長瀬山地	(10.3)	8.5	3.5	(400)	欠損品。	IIIb2	159
362	ⅧC91-4住	床面	扇形部環A群	西輝石安山岩	若手火山	8.4	8.1	4.5	310		II	159

第86図 ⅧC91-4住層出土遺物(2)

ⅦC9i-3b住居跡のものも含めて14個検出された。所属関係は不明であるが、位置関係から本住居に伴うものはP3～P9かと思われる。周溝は斜面上方に当たる西壁際と北壁際に位置し、幅14～18cm、深さ7～14cmである。

〈炉〉地床炉を1基検出した。焼土は65×10cmの不整形の範囲に分布し、厚さは最大04cmである。木根により攪乱を受けており締まりに欠ける部分がある。

#### ⅦC9i-3b住居跡（遺構番号29）

〈検出状況〉ⅦC9i-3a住居跡の床面精査で、同住居跡の周溝に切られたより古い時期周溝が検出され、建替えをしているものと考えた。規模等は不明であるが、ⅦC9i-3a住居跡よりやや北よりに位置し、P2が本住居に対応すると仮定すれば、拡張と考えられるものの詳細は不明である。

〈施設〉周溝は、ⅦC9i-3a住居跡と同様北壁際と西壁際につくられ、幅10～16cm、深さ11～14cmである。

#### 遺物（第80～84図、写真図版154～157）

〈土器〉床面から1450g、埋土から8880g出土した。284は2山を1単位とする山形突起を有し、頂部から2段の縄の側面を押圧した「C」字状の粘土紐を貼り付けている。粘土紐の下端までの幅で口縁部を全周する肥厚帯があり、更に粘土紐の上端から口縁部の内外両面を複合口縁としている。285は口唇部が平らになてられ断面形は角ばる。286は無文の大型浅鉢である。口縁部裏側に明瞭な稜をもつ複合口縁である。287～290は複合口縁である。287は複合口縁の下に隆帯を巡らす。300・305は細い波状の隆帯が縦方向に貼付けられている。

〈石器・石製品〉336・338は明瞭な稜を有する棒状礫で、奥羽山地産であり本住居に持ち込まれたものである。335は図示面以外は割れている凝灰岩である。表面に微細な凹凸が全面に分布するが使用痕・加工痕と断定するにはやや躊躇する。しかし、他の住居からも同種のもので出土している。図示しなかったが他に、岩手火山起源の燧岩4点、半円状花崗岩質岩が5点、大きく欠損した特殊磨石1点、Uフレが7点、フレークが46点（礫石産・珪質泥岩、礫石産・流紋岩質細粒凝灰岩他）出土した。

時期 床面出土土器から縄文時代中期初頭に属すると考えられる。

#### ⅦC9i-4住居跡（遺構番号30）

##### 遺構（第79図、写真図版29）

〈検出状況〉西尾根の東斜面に位置する。ⅦC9i-3住居跡より一段高い床面を有する。東側は斜面により流失している。

〈形状・規模〉詳細は不明だが、方形ないしは長方形を基調すると推定される。規模は南北

5.1m、東西は残存値5.1mである。

〈壁・壁高〉斜面上方の北壁と西壁は基盤層、南壁はにぶい黄褐色土で緩やかに立ち上がる。壁高は西壁38cm、南壁14cm、北壁22cmである。

〈埋土〉上位は黄褐色土、下位はにぶい黄褐色土で、両者とも粉炭と小角礫を含むが、下位ほど粉炭と遺物を多く混入する。

〈床・柱穴・施設〉斜面に沿ってやや傾斜し、西壁から東側1mまでの範囲は緩やかなスロープとなる。その部分では粉炭が2箇所集中的に分布することから、本住居は焼失住居と考えられる。柱穴は北西隅に1個検出された。深さは10cmしかないが、埋土はにぶい黄褐色土で住居の埋土に等しい。南壁際には土坑が検出された。埋土は黄褐色土で小角礫を含む。西壁際に部分的に周溝が存在する。幅10～21cm、深さ10～16cmで黄褐色土を埋土とする。

〈炉〉地床炉が1基検出された。焼土は105×110cmの不整形の範囲に分布し、厚さは最大9cmである。木根の攪乱を受けている。

遺物（第85・86図、写真図版158・159）

〈土器〉339は床直上から一括出土したものである。4個の突起をもつ小波状口縁で、頸部は平行沈線と波状沈線を、口縁部は矢羽状の短沈線を施文している。340は胴下半部に最大径を有し、口縁部に棒状工具による沈線と左方向からの半截竹管外面による刺突文を施文している。口唇部は平らになでられている。346・347は細い波状の隆帯が縦走する。隆帯上には施文されない。348の沈線内部には筋状の稜があることから植物性の棒状工具による施文と考えられる。350は波状頂部が丸山状である。

〈石器〉355は石匙の欠損品または未製品で刃部二次加工はない。358は全体に素材面を残し、1辺に急角度の二次加工を施す。362は岩手火山起源の燧岩である両輝石安山岩で、両面に凹部が明瞭に観察される。側面も磨石として用いた可能性もある。図示した他に、台石状の凝灰岩の小破片と半円状花崗岩質岩が各1点、Uフレが5点、フレークが29点、それぞれ埋土から出土している。

時期 床面出土土器から縄文時代前期末葉から中期初頭に属すると考えられる。

### ⅦC 9 j 住居跡 (遺構番号31)

#### 遺構 (第75図、写真図版30)

〈検出状況〉西尾根の東斜面に位置する。再堆積層を10cmほど下げたところで焼土を検出し、斜面上方でそれに対応すると考えられる壁を確認したことから、住居と認定した。北壁でⅦC 9 j 土坑と重複する。埋土断面図をとることができなかったが、精査時の観察では、本住居のほうが新しい。東側は斜面のため流失している。

〈形状・規模〉詳細は不明であるが方形ないしは長方形を基調とすると考えられる。規模は南北2.5m、東西は残存値で2.1mである。

〈壁・壁高〉西壁は基盤層、南壁は褐色土でほぼ直立する。壁高は西壁34cm、南壁12cmである。

〈埋土〉暗褐色土を主体とし、全体に締まりを欠く。下位では小角礫が多く混入する。

〈床・柱穴・施設〉西壁側は基盤層、東側はにぶい黄褐色土である。全体にやや凹凸がある。柱穴は検出されなかった。

〈炉〉地床炉1基を検出した。焼土は80×90cmの不整形の範囲に分布し、厚さは最大5cmである。

#### 遺物 (第76図、写真図版153)

〈土器〉ほとんど出土していない。267は細い隆帯が縦位に貼付けられ、隆帯上にも縄文が施文されている。

〈石器〉269は丁寧な加工により全周を調整している。裏面は1辺のみ微小剥離が観察される。図示した他に、床面から台石状の凝灰岩片1点、Uフレ2点、埋土からUフレ1点、フレーク2点が出土している。

時期 特定する資料を欠くので不明であるが、検出状況・埋土・出土遺物から縄文前期後葉ないし中期初頭と推定される。

### ⅦC 9 j-2 住居跡 (遺構番号32)

#### 遺構 (第87図)

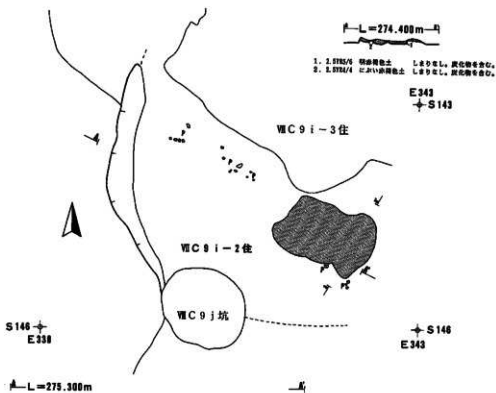
〈検出状況〉ⅦC 9 j 住居跡およびⅦC 9 j 土坑の精査中に検出した。埋土断面図をとれなかったが、平面上でⅦC 9 j 土坑の方が新しいことを確認している。北側ではⅦC 9 i-3 住居跡に切られている。東側は斜面のため流失して不明である。

〈形状・規模〉詳細は不明である。残存値は、東西4m南北2.4mである。

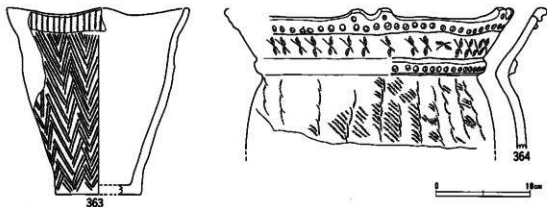
〈壁・壁高〉基盤層で固く、緩やかに立ち上がる。壁高は西壁57cmである。

〈埋土〉8層に分けられる。再堆積層起源と考えられる黄褐色土、明褐色土を主体とし、壁際には崩落土が混入する。自然堆積の様相を示す。



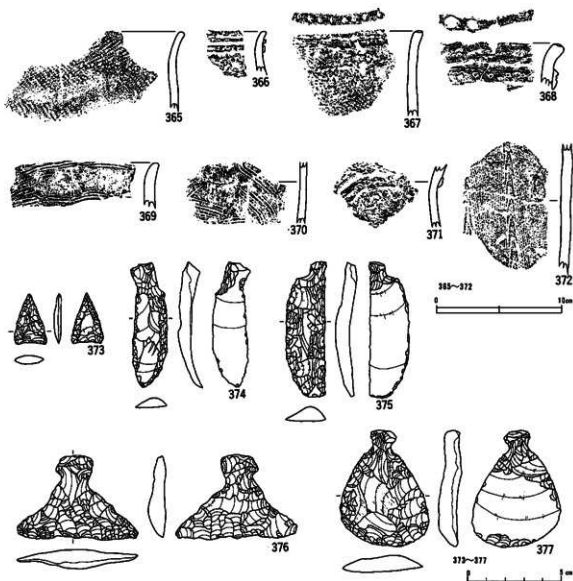


- |                  |               |                  |               |
|------------------|---------------|------------------|---------------|
| 1. 7.5Y R/7 褐色土  | しまりなし、小角礫を含む。 | 6. 7.5Y R/7 褐色土  | しまりなし、小角礫を含む。 |
| 2. 7.5Y R/7 褐色土  | しまりなし、小角礫を含む。 | 7. 7.5Y R/7 褐色土  | しまりなし。        |
| 3. 10Y R/7 黄褐色土  | しまりなし、小角礫を含む。 | 8. 7.5Y R/7 暗褐色土 | しまりなし、小角礫を含む。 |
| 4. 10Y R/7 黄褐色土  | しまりなし、小角礫を含む。 | 9. 5Y R/7 明赤褐色土  | 焼土、固くしまっている。  |
| 5. 10Y R/7 明赤褐色土 | しまりなし、崩壊土を含む。 |                  |               |



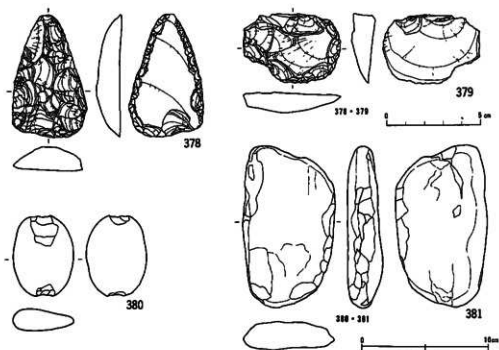
番号	出土地点	層位	文様	地文	口径	通径	器高	容量	分類	写真
363	WIC 9 j-2 住	床面	口縁部裏の狂草、やや肥厚な縁	L + R 木目状燃焼文	24.0	9.0	19.9		III d	159
364	WIC 9 j-2 住	床面	複合口縁、胴部隆帯上竹管割突、口縁部厚体不明	L 縦、片筋び腐位線繪文。	21.0	-	16.6		III d	159

第87図 WIC 9 j-2 住層跡・出土遺物(1)



番号	出土地点	層位	文様	地文	口径	底部径	器高	器容	分類	写真	
365	ⅦC 9 j - 2 住	埴土		L × R × H 部 1 種類取柄状残文						159	
366	ⅦC 9 j - 2 住	埴土	縦糸口縁、折り返し部に縞状工具による文様							159	
367	ⅦC 9 j - 2 住	埴土	R 面縦圧痕?、口唇部圧痕、工具不明(繩地?)	多筋線条体?						159	
368	ⅦC 9 j - 2 住	床面	縁部上に竹管割突、口唇部一帯指頭状圧痕。						Ⅱ1a	159	
369	ⅦC 9 j - 2 住		指輪状圧痕。						Ⅱ9a	159	
370	ⅦC 9 j - 2 住	埴土	指輪状圧痕文。						Ⅱ9a	159	
371	ⅦC 9 j - 2 住	埴土	縁部上に面周圧痕? 胴部 R 面周圧痕。							159	
372	ⅦC 9 j - 2 住			L 本目状筋条文。						159	
番号	出土地点	層位	器種	材質	座地	長さ	径	厚さ	器容	分類	写真
373	ⅦC 9 j - 2 住	埴土	石碗	硬質泥岩	平石面部	2.7	1.7	0.4	1.40	Ⅱa2	160
374	ⅦC 9 j - 2 住	石胎	輪板石	北上山地	6.6	2.0	1.2	8.30		Ia2	160
375	ⅦC 9 j - 2 住	石胎	硬質礫岩	平石面部	7.2	2.1	1.1	10.77		Ⅲ	160
376	ⅦC 9 j - 2 住	石胎	輪板石	北上山地	4.4	6.5	1.0	16.65		Ⅱa1	160
377	ⅦC 9 j - 2 住	石胎	硬質泥岩	平石面部	6.2	4.7	1.3	25.20		Ib1	160

第88図 ⅦC 9 j - 2 住層跡出土遺物(2)



番号	出土地点	層位	器種	石質	産地	長さ	幅	厚さ	重さ	備考	分類	専長
378	ⅧC 9 j - 2 住	埋土	石筈	地質泥岩	宇石西部	6.5	4.0	1.2	20.25		I	160
379	ⅧC 9 j - 2 住	床面	不定形石器	地質凝灰岩	宇石西部	3.7	5.1	1.1	22.0		Ⅷ	160
380	ⅧC 9 j - 2 住	埋土	石筈	凝灰岩	北上山地	6.4	4.8	1.7	80		I	160
381	ⅧC 9 j - 2 住	床面	輪郭不明A群	凝灰質千枚岩	北上山地	12.8	7.2	2.4	160		Ⅷc1	

第89図 ⅧC 9 j - 2 住居跡出土遺物(3)

〈床・柱穴・施設〉斜面上方は基盤層、下方はにぶい黄褐色土で全体にやや凹凸がある。柱穴は検出されなかった。

〈炉〉地床炉を1基検出した。焼土は80×126 cmの不整形の範囲に分布し、厚さは最大6 cmである。木根により攪乱を受けており縮まりに欠ける部分がある。

遺物 (第87～89図、写真図版159・160)

〈土器〉床面から2245 gが出土した。363は口縁部に1段の縄の側面を縦位に連続的に圧痕している。364は2山を1単位とする突起を、5単位有すると考えられる平縁の土器である。頸部と口縁部に、断面形が長方形に近い幅広の隆帯を全周させ、その上に竹管刺突を器体に対して直角方向に施す。地文は1段の縄を片結びして縦に回転させたものである。口縁部は、無節の部分が節を有する部分を切る「X」状の文様が施文されるが、回転によるものか圧痕によるものか判断できなかった。表現はしていないが、実測図の口縁部右側部分には胴部と同じ原

体が横回転された後「X」状文を施文しており、同一原体の圧痕である可能性が高いと思われるものの、復元できなかったことから不明としておく。367の地文は節が右斜位、左斜位にそれぞれ揃っている。

〈石器〉374は尖頭部が作り出されるが鋭いものではない。表面左辺は小剝離である。376はつまみ部に一部自然面を残すが全面加工して両端に尖頭部をつくり出す。図示した他にUフレ1点、フレーク12点が出土している。

時期 床面出土土器から縄文時代中期初頭に属すると考えられる。

### ⅧC0g住居跡（遺構番号33）

#### 遺構（第90図）

〈検出状況〉西尾根の頂部から東斜面にかけて位置する。再堆積層下位で検出した。当初1棟と考えて精査にはいったが、レベルを異にする焼土が検出され、それに対応する壁を部分的ではあるが確認したことから、2棟の住居の重複と考えられた。新期のものをⅧC0g住居跡、古期のものをⅧC0g-2住居跡とする。東壁は斜面のため流失している。

〈形状・規模〉検出の不手際により、北壁は部分的に観察用のベルトで確認した。隅丸長方形が推定される。規模は残存値で長軸3.6m、短軸2.2mである。

〈壁・壁高〉再堆積層を構成するにふい黄褐色土で固く締まっている。ほぼ直立する。壁高は西壁31cm、南壁16cm、北壁33cmである。

〈床・柱穴・施設〉ほぼ水平であり、やや軟質である。柱穴は検出されなかった。

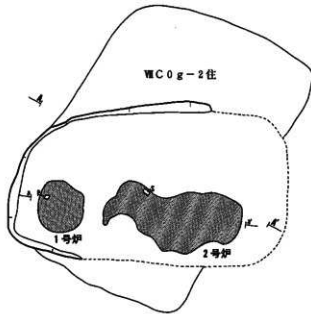
〈炉〉長軸線上に地床炉を2基検出した。西側のものを1号炉、東側のものを2号炉とする。1号炉の焼土は55×70cmの楕円形状に分布し厚さは最大8cm、2号炉の焼土は80×182cmの不整形の範囲に分布し厚さは最大10cmで、いずれも木根の攪乱を受けてはいるが、固く締まっている。

#### 遺物（第91・92図、写真図版161・162）

〈土器〉382は口縁部に沿って円形竹管が連続刺突される。385は、2種の結束羽状縄文をもちいたものか。386は円形竹管刺突が縦位に施される。387は円形竹管刺突に加えて半（多？）截竹管による平行沈線が施文されるが、鋸歯状を描くものか。390は口唇部から続く隆帯が右に屈曲しクランク状を呈する。右側には沈線が3本観察される。391は隆帯が垂下するが、隆帯と器体の境界が目立たぬように撫でられる。

〈石器〉392の石鐮の尖頭部は断面形もやや丸みを帯びる。397は表面中央部に瘤状の自然面を残す。裏面は加工が粗い。403は小型でやや厚めの磨製石斧で、整形時の擦痕が面的に観察され稜線が明瞭である。図示した他に、半円状花崗岩質岩が1点、Uフレが2点、フレークが

E351  
+ S130



E135  
+ E347

+ S135  
E351



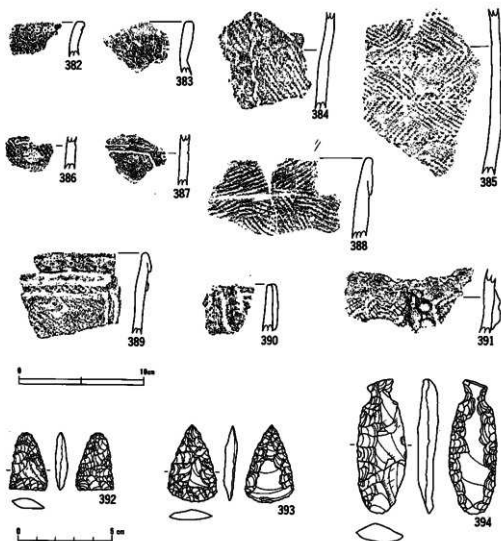
- |                |                 |                |                   |
|----------------|-----------------|----------------|-------------------|
| 1. 7.5YR5 褐色土  | しまりなし。小角礫を少量含む。 | 6. 10YR5 灰褐色土  | ややしまりあり。小角礫を少量含む。 |
| 2. 7.5YR5 暗褐色土 | しまりなし。小角礫を少量含む。 | 7. 10YR5 褐色土   | しまりなし。小角礫を少量含む。   |
| 3. 7.5YR5 褐色土  | しまりなし。小角礫を少量含む。 | 8. 7.5YR5 明褐色土 | しまりあり。小角礫を多く含む。   |
| 4. 10YR5 灰褐色土  | しまりあり。小角礫を少量含む。 | 9. 5YR5 明赤褐色土  | しまりなし。砂炭を少量含む。    |
| 5. 10YR5 褐色土   | しまりあり。小角礫を少量含む。 | 10. 5YR5 赤褐色土  | しまりなし。            |



- |                 |                              |                  |                     |
|-----------------|------------------------------|------------------|---------------------|
| 1. 5YR5 におい赤褐色土 | しまりなし。褐色土をブロック状に含む。砂炭を微量に含む。 | 7. 5YR5 明赤褐色土    | しまりなし。小角礫を少量含む。     |
| 2. 7.5YR5 明赤褐色土 | しまりなし。小角礫を少量含む。              | 8. 5YR5 におい赤褐色土  | しまりなし。              |
| 3. 6YR5 明赤褐色土   | しまりなし。小角礫を含む。                | 9. 5YR5 におい赤褐色土  | しまりなし。焼土粒。小角礫を少量含む。 |
| 4. 10YR5 褐色土    | しまりなし。砂を多く含む。焼土粒。砂炭を微量含む。    | 10. 5YR5 赤褐色土    | しまりなし。小角礫を少量含む。     |
| 5. 7.5YR5 褐色土   | しまりなし。砂炭。小角礫を少量含む。           | 11. 5YR5 におい赤褐色土 | しまりなし。焼土粒。小角礫を少量含む。 |
| 6. 7.5YR5 褐色土   | しまりなし。焼土粒。砂炭。小角礫を少量含む。       |                  |                     |



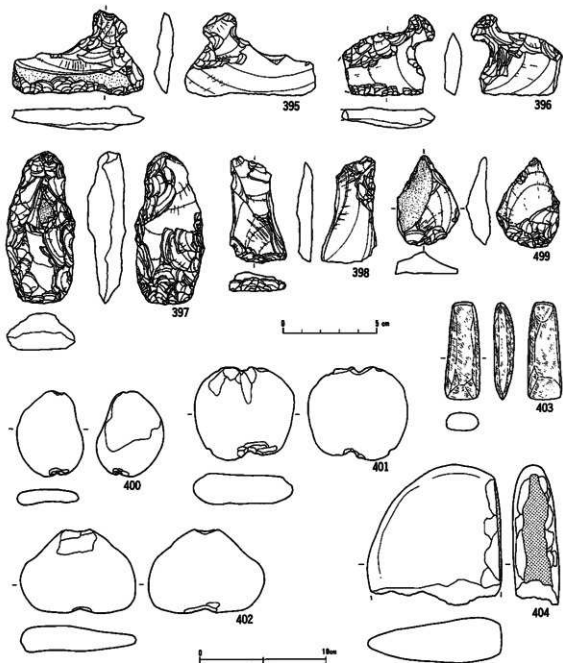
第90図 WIC 0 g住居跡



番号	出土地点	層位	文様	地文	口径	径	厚	高さ	備考	分類	写真
382	ⅦC 0 g 住	床面	竹管割欠。	R + L 穂糸文。					304 と同一體形	Ⅲb	161
383	ⅦC 0 g 住	床面	波状口縁。	L + R の穂糸文。							161
384	ⅦC 0 g 住			L R 縦。片結び縦位綾絡文。							161
385	ⅦC 0 g 住	床面		L R × R L 第1相結菱羽状綾文。							161
386	ⅦC 0 g 住	埋土	竹管割欠。沈蝕。	L R 縦。							161
387	ⅦC 0 g 住	埋土 Q 1	竹管割欠。半截竹管内面による沈蝕。								161
388	ⅦC 0 g 住	埋土	割合口縁。	L R。別転方向を裏えている。					内面はミガキ。	Ⅲb	161
389	ⅦC 0 g 住	埋土 Q 1	割合口縁。口縁部無文。尾帯上に縄文施文。	R L 縦。						Ⅲc	161
390	ⅦC 0 g 住	埋土	尾帯。沈蝕。								161
391	ⅦC 0 g 住	埋土	尾帯上指環状圧痕(爪跡残る)。	L R 縦。						Ⅲc	161

番号	出土地点	層位	器種	石質	産地	長さ	幅	厚さ	重さ	備考	分類	写真
292	ⅦC 0 g 住	埋土	石鏃	硬質泥岩	早石西部	3.1	1.9	0.5	2.85	先端部やや丸い。	I 2	161
293	ⅦC 0 g 住	埋土	尖頭器鏃石器	硬質泥岩	早石西部	4.1	2.6	0.5	4.75			161
304	ⅦC 0 g 住	埋土	石鏃	硬質泥岩	新第三系中新統	7.1	2.6	1.1	17.81		Ib3	161

第91図 ⅦC 0 g 住層跡出土遺物(1)



番号	出土地点	層位	器種	材質	産地	長さ	幅	厚さ	重さ	備考	分類	写真
395	ⅧC0 g 住	埋土	石匙	硬質礫状質泥岩	半石器部	1.2	7.0	1.2	28.39		Ⅱ b	161
396	ⅧC0 g 住	埋土	石匙	軟泥岩	北上山地	1.1	(4.8)	1.1	(8.00)		Ⅱ	161
397	ⅧC0 g 住	床面	打製石斧	軟泥岩	北上山地	2.0	3.6	2.0	(8.80)	中央上部に自然の礫状の盛り上がりを残す。	I	161
398	ⅧC0 g 住	埋土	不定形石匙	硬質泥岩	半石器部	1.0	3.0	1.0	13.55		Ⅱ a	161
399	ⅧC0 g 住	埋土	不定形石匙	硬質泥岩	半石器部	1.3	2.4	1.3	15.06		Ⅱ	161
400	ⅧC0 g 住	焼土層	石匙	軟泥岩	北上山地	1.3	8.3	1.3	76		I	161
401	ⅧC0 g 住	床面	石匙	礫状砂千枚岩	北上山地	2.9	8.0	2.9	210		Ⅱ	161
402	ⅧC0 g 住	床面	石匙	礫状砂	北上山地	2.0	9.2	2.0	150		Ⅱ	161
403	ⅧC0 g 住	埋土	磨製石斧	軟泥岩	北上山地	1.1	1.8	1.1	30	磨痕が多く観察される。	Ⅱ	162
404	ⅧC0 g 住	床面	磨製石器人跡	同層石安山岩	奥羽山地	3.3	10.7	3.3	(98)		Ⅱ a	162

第92図 ⅧC0 g 住層跡 出土遺物(2)

18点出土している。

時期 特定は困難であるが、床面出土遺物から縄文時代前期末葉から中期初頭に属すると推定される。

#### ⅦC0g-2住居跡（遺構番号34）

遺構（第93図、写真図版30）

〈検出状況〉ⅦC0g住居跡の床面下から検出された。ⅦC1g住居跡、ⅦC0g-3住居跡の上に構築されている。

〈形状・規模〉長軸方向が等高線にほぼ平行する長方形を基調とする。規模は、短軸2.7m、長軸3.9mである。

〈壁・壁高〉にぶい黄褐色土で、ほぼ直立している。壁高は東壁4cm、西壁38cm、南壁16cm、北壁36cmである。

〈床・柱穴・施設〉にぶい黄褐色土で、ほぼ平坦である。柱穴は検出されなかった。

〈炉〉長軸線上に地床炉を2基検出した。南側のものを1号炉、北側のものを2号炉とする。1号炉の焼土は104×120cmの不整形の範囲に分布し、厚さは最大12cmである。2号炉の焼土は110×128cmの不整形の範囲に分布し、厚さは最大15cmである。いずれも固く締まっており、断面がレンズ状に形成されている。

遺物（第93図、写真図版162）

〈石器〉1408は強い丸凸刃状で、欠損又は折断している。図示した他にフレークが8点出土した。

時期 時期を特定する資料が欠くが、検出状況・重複関係から縄文時代前期末葉から中期初頭に属すると推定される。

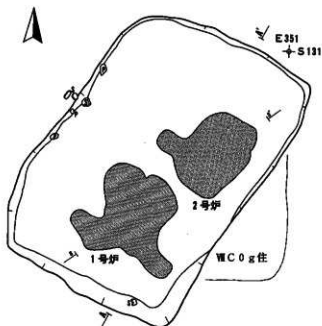
#### ⅦC0g-3住居跡（遺構番号35）

遺構（第94・95図）

〈検出状況〉ⅦC0g-2住居跡の床面の下から検出され、それより南西方向に広がる規模をもつ。南東側は斜面のため流失している。北西壁のほぼ中央部でⅦC9g土坑と重複する。埋土観察から同土坑の方が新しい。また、本住居の下からはⅦC1g住居が検出されている。新旧関係をまとめると次のようになる。

(新) ⅦC0g-2住居跡 ←—— ⅦC0g-3住居跡 ←—— ⅦC1g住居跡 (古)  
ⅦC9g土坑 ←—— ⅦC0g-3住居跡





- |               |         |                      |                |         |                    |
|---------------|---------|----------------------|----------------|---------|--------------------|
| 1. 5Y R 5/6   | にぶい赤褐色土 | しまりなし。小角礫を少量含む。      | 7. 5Y R 5/6    | にぶい赤褐色土 | しまりなし。小角礫を少量含む。    |
| 2. 7.5Y R 5/6 | 褐色土     | しまりなし。小角礫を少量含む。      | 8. 10Y R 5/6   | 黄褐色土    | しまりなし。             |
| 3. 7.5Y R 5/6 | 褐色土     | しまりなし。小角礫を少量含む。      | 9. 5Y R 5/6    | 明赤褐色土   | ややしまりあり。小角礫を多く含む。  |
| 4. 10Y R 5/6  | 黄褐色土    | しまりなし。小角礫を多く含む。      | 10. 10Y R 5/6  | にぶい黄褐色土 | ややしまりあり。褐色土を凝状に含む。 |
| 5. 5Y R 5/6   | 黄褐色土    | しまりなし。小角礫を少量含む。      | 11. 7.5Y R 5/6 | 明褐色土    | しまりなし。小角礫を少量含む。    |
| 6. 10Y R 5/6  | 褐色土     | しまりなし。黄褐色土をブロック状に含む。 |                |         |                    |



- |               |       |                    |
|---------------|-------|--------------------|
| 1. 2.5Y R 5/6 | 明赤褐色土 | 焼土。しまりなし。炭化物を少量含む。 |
| 2. 2.5Y R 5/6 | 赤褐色土  | 焼土。しまりなし。炭化物を少量含む。 |



405・408



406

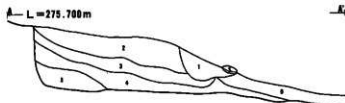
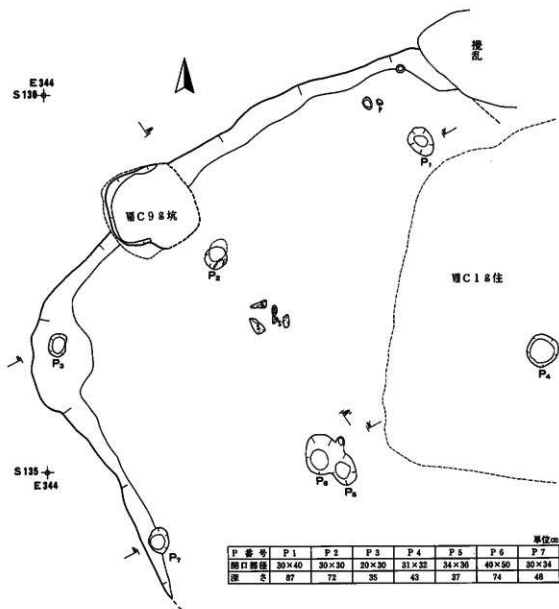


407

407

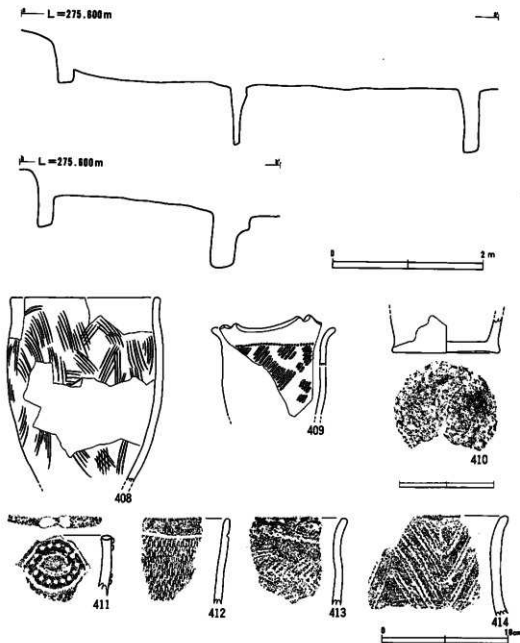
番号	出土地点	層位	器種	石質	産地	長さ	幅	厚さ	重さ	備考	分類	等尺
405	VII C 0 g-2 住	扉面	石版	チャート	北上山地	3.5	1.5	0.5	2.03		IV 2	162
406	VII C 0 g-2 住	塚土	不定形石器	硬質硬岩	宇石西郡	3.9	3.4	1.0	12.51	鋭い丸凸刀をくり出し、欠損又は折衝。	Ia1	162
407	VII C 0 g-2 住	塚土	扇形磨石	陸奥質硬灰岩	北上山地	6.0	0.9	4.5	0.98		II	162

第93図 VII C 0 g-2 住層跡・出土遺物



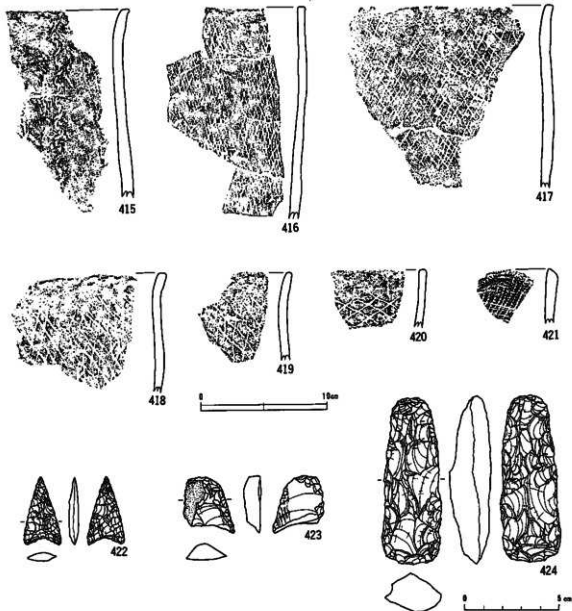
- |                      |                      |                     |                    |
|----------------------|----------------------|---------------------|--------------------|
| 1. T. 5792/4 暗褐色土    | L. 275.70, 小角礫を含む。   | 4. 10 726/4 褐色土     | L. 275.70, 小角礫を含む。 |
| 2. T. 5794/6 暗褐色土    | L. 275.70, 小角礫を少量含む。 | 5. 10 725/4 比較的暗褐色土 | L. 275.70, 炭化物を含む。 |
| 3. T. 5795/6 比較的暗褐色土 | L. 275.70, 炭化物を少量含む。 | 6. T. 5794/6 暗褐色土   | L. 275.70          |

第94図 ⅦC 0 g - 3 住層跡(1)



番号	出土地点	層位	文様	地文	口縁	底面	高さ	備考	分類	写真
408	ⅧC0g-3住	埋土	縞縞状片断		15.4	-	19.3		Ⅱ9a	162
409	ⅧC0g-3住	埋土	縞縞状口縁、底部2山、R.L.側面汗流。	R.L.縞	14.6	-	10.5			162
410	ⅧC0g-3住	埋土		不明	-	11.4	3.8			162
411	ⅧC0g-3住	埋土	波状口縁、頂部縞縞状汗流、底面上斜突文(棒状工具?)						Ⅱ6a	162
412	ⅧC0g-3住	埋土	口縁部無文、口縁下波縞。						Ⅱ6b	162
413	ⅧC0g-3住	埋土	L.R.側面汗流。	L.R.×R.L.縞? 縞縞状汗流文?						162
414	ⅧC0g-3住	埋土		L.×R.による本目状縞縞文。					Ⅱ6	162

第95図 ⅧC0g-3住居跡(2)・出土遺物(1)

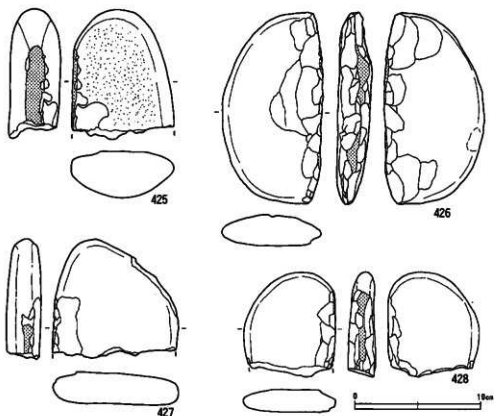


番号	出土地点	層位	文様	施文	口径	底径	高さ	備考	分類	写真
415	ⅧC0g-3住	埴土		L.R網。片断び縦位線跡文。						162
416	ⅧC0g-3住	埴土		R網目文。					Ⅱ6b	162
417	ⅧC0g-3住	埴土		R網目状施文。					Ⅱ6b	162
418	ⅧC0g-3住	埴土	右端に網目等が一部観察される。	R網目状施文。					Ⅱ6b	162
419	ⅧC0g-3住	埴土		L網目状施文。					Ⅱ6b	162
420	ⅧC0g-3住	埴土		R網目状施文。横溝彫。					Ⅱ2C	163
421	ⅧC0g-3住	埴土		波状口縁。真鍮線跡仔痕。					I	163

番号	出土地点	層位	器種	石質	産地	長さ	幅	厚さ	重さ	備考	分類	写真
422	ⅧC0g-3住	埴土	石鏃	硬質泥岩	宇石西郡	3.5	1.9	0.4	2.12		Ⅱb1	163
423	ⅧC0g-3住	埴土	不定形石鏃	軟質岩	北上山地	2.9	2.7	0.9	6.15	自然面を残す。新製品か?	Ia1	163
424	ⅧC0g-3住	埴土	打製石斧	硬質泥岩	宇石西郡	8.8	3.2	2.1	61.51	断面形は肉厚。辺の網目は粗い。	I	163

第98図 ⅧC0g-3住層跡出土遺物(2)



番号	出土地点	層位	器種	材質	産地	長さ	幅	厚さ	重さ	備考	分類	写真
425	ⅧC 0 g-3住	埋土	鉢形器類A群	往来黄褐色	北上山地	10.1	8.1	2.7	(450)	平滑面1面。	Ⅷ a	163
426	ⅧC 0 g-3住	埋土	鉢形器類A群	硬砂岩	北上山地	15.3	7.8	2.3	420		Ⅷ b 1	163
427	ⅧC 0 g-3住	埋土	鉢形器類A群	阿曇石安山岩	奥羽山地	9.2	10.0	2.5	(400)		Ⅷ b 2	163
428	ⅧC 0 g-3住	埋土	鉢形器類A群	アイサイト質凝灰岩	卑石	8.2	7.2	1.7	(180)		Ⅷ b	163

第97図 ⅧC 0 g-3住層跡出土遺物(3)

〈形状・規模〉詳細は不明であるが、隅丸長方形が推定される。規模は北東壁から南西壁まで6.9m、北西壁から床面南東の最大残存部まで4.5mである。

〈壁・壁高〉基盤層ではほぼ直立する。壁高は北西壁67cm、南西壁40cmである。

〈埋土〉上位は再堆積層起深で締まりを欠く。中位の第4層は基盤層に類似した色調で固く締まっている。粉炭を僅かに含む。下位は粉炭の他遺物を混入する。

〈床・柱穴・施設〉基盤層で、ほぼ水平で平坦である。柱穴は6個検出された。P3とP7はやや浅いが、位置的には対応関係をもつ。埋土は住居のそれとほぼ等しく、上位は砂粒を含む褐色土、中位は砂粒を含む黒褐色土～暗褐色土、下位は粉炭を含む黄褐色土である。

〈炉〉検出されなかった。

遺物 (第95～97図、写真図版162・163)

〈土器〉埋土から5110g出土した。408の胎土は砂に比し粘土の量が多く、色調はにぶい橙色である。胴部全体に小さな凹凸が多く、口縁部の厚さも均一性を欠き、やや手づくね土器の仕上がり似る。器面全体に、櫛歯状の沈線が6本を1単位として施文されるが、所により3～5本の沈線として表れる。特定のモチーフは看取されず、縦横に不規則に施文している。409は2山を1単位とする山形突起を有する小波状口縁の土器である。突起は4単位あるものと思われるが、1対はやや高く、他の1対はそれよりやや低い。412は多軸絡条体を回転施文後に口縁部下に沈線を施している。口縁部の無文帯にも一部地文が観察されることから、磨消しによるものではない。420は網目状燃糸文の横回転で、本遺跡では数少ない。421は丸山状で口縁部断面は外削ぎである。

〈石器〉424は断面が肉厚で、長幅比が大きいため打製石斧とした。基部の断面形は丸い。側辺の剝離は粗い。他に埋土から、岩手火山起源の溶岩1点、半円状花崗岩質岩が1点、フレークが7点出土している。

時期 時期を特定する資料を欠くが、検出状況・重複関係・出土遺物から縄文前期後葉から中期初頭に属すると推定される。

ⅧC0h住居跡 (遺構番号36)

遺構 (第98図)

〈検出状況〉西尾根の東斜面に位置する。ⅧC1h住居跡の床面の下から検出された。ⅧC1h-2住居跡およびⅧC0h-2住居跡に切られる。

〈形状・規模〉詳細は不明であるが方形ないしは長方形を基調とするものと推定される。規模は残存値で、南北2.9m東西1.3mである。

〈壁・壁高〉西壁は基盤層、北壁は褐色土で緩やかに立ち上がる。壁高は西壁20cm、北壁20cmである。

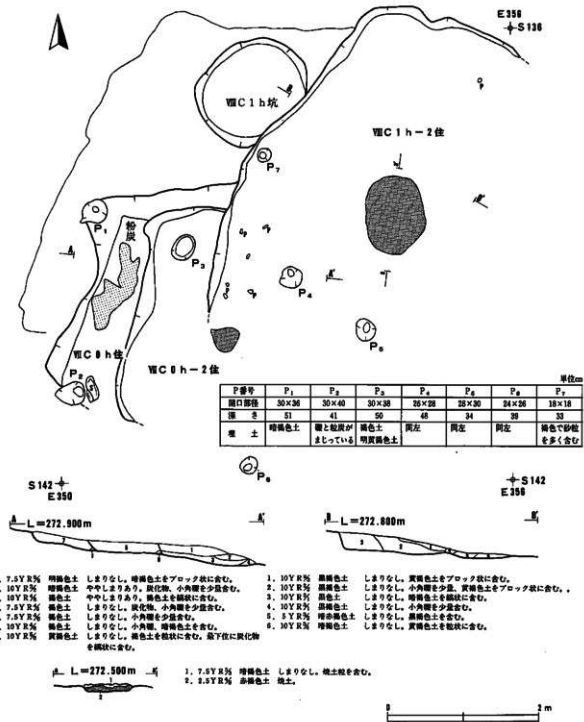
〈埋土〉褐色土をブロック状に含む黄褐色土の単層で、下位に粉炭を塊状に混入する。

〈床・柱穴・施設〉基盤層で固くやや凹凸がある。壁際30×110cmの不整形の範囲に粉炭が分布する。柱穴はP1とP2の2個検出された。埋土は暗褐色土で小角礫と粉炭を含む。粉炭の分布から本住居は焼失住居と考えられる。

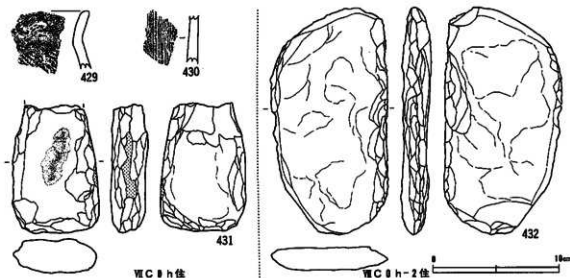
〈炉〉検出されなかった。

遺物 (第99図、写真図版163)

〈土器〉429の左端は破損ではなく旧状を残しており、弁状となる可能性がある。他に埋土から単節斜縄文、木目状燃糸文、組縄縄文の小破片が出土した。



第98図 WC0h・WC0h-2・WC1h-2位層部



番号	出土地点	層位	文様	地文	詳細図	断面図	番号	分類	写真			
429	ⅧC0h住	埋土	波状口縁、黏土粘貼り付付。	L.R.面、片縁の位置線跡文。				Ⅷ1	163			
430	ⅧC0h住	埋土	帯條状沈堀。					Ⅷ9	163			
番号	出土地点	層位	器種	石質	産地	長さ	幅	厚さ	重さ	備考	分類	写真
431	ⅧC0h住	床面	敲磨器類A群	粉灰質黄千枚岩	北上山地	10.1	6.8	2.6	(290)	+同石。	Ⅷb3	163
432	ⅧC0h-2住	床面	敲磨器類A群	凝灰質千枚岩	北上山地	17.8	9.3	2.4	515		Ⅷc2	163

第99図 ⅧC0h・ⅧC0h-2住居跡出土遺物

〈石器〉431は床面から出土したものであるが、1側面に擦面と刺離が観察されることから敲磨器類とした。敲打による凹みと周縁の刺離から、凹石・打製石斧などの多目的使用が考えられる。他にフレークが2点出土した。

時期 特定する資料を欠くが、検出状況・重複関係・出土遺物から縄文前期後葉から中期初頭に属するものと推定される。

#### ⅧC0h-2住居跡（遺構番号37）

##### 遺構（第98図）

〈検出状況〉西尾根の東斜面に位置する。ⅧC1h住居跡の床面の下から検出された。ⅧC0h住居跡を切り、ⅧC1h-2住居跡に切られる。

〈形状・規模〉詳細は不明であるが、柱穴の位置から方形を基調とするものと推定される。規模は推定値で、南北3.1m東西3.2mである。

〈壁・壁高〉ⅧC0h住居跡の埋土である黄褐色土を壁とし、内湾気味に外傾する。壁高は西



壁11cm、北壁18cmである。

〈埋土〉締まりを欠く褐色土で、小角礫を少量含む。

〈床・柱穴・施設〉暗褐色土で固くやや凹凸がある。柱穴は、推定範囲に4個検出されたが、本住居に明瞭に帰属するものはP3のみである。P4とP5は、規模・位置から本住居に帰属する可能性もあるが不明である。

〈炉〉本住居の推定範囲に焼土が1基検出されている。38×40cmの不整形の範囲に分布し、厚さは1cm程度であるが、一応地床炉としておく。

遺物（第99図、写真図版163）

〈土器〉床面から90g、埋土から155g出土したが、すべて縄文時代前期の斜縄文小片である。

〈石器〉432の1点とフレークが7点出土した。

時期 特定する資料を欠くが、検出状況・重複関係・出土遺物から、縄文時代前期後葉から中期初頭に属するものと推定される。

#### ⅦD1d住居跡（遺構番号38）

遺構（第100図、写真図版32）

〈検出状況〉西尾根の南斜面に位置する。小角礫を含む暗褐色土中に焼土を検出し、斜面上へ方にそれに対応する壁を確認したことから住居として認定した。南側でⅦD1d-3住居に切られている。南西部は掘り過ぎてしまった。

〈形状・規模〉詳細は不明であるが、長軸方向が等高線にはほぼ平行する長方形を基調とするものと推定される。長軸は6.3m、短軸は残存値で1.7mである。

〈壁・壁高〉上半部は暗褐色土層、下半部は基盤層である黄褐色土層を壁とし、内湾気味に外傾する。壁高は北壁50cm、西壁19cmである。

〈埋土〉上位には暗褐色土、下位には褐色土が堆積する。

〈床・柱穴・施設〉北壁際は一部基盤層であるが、南側は褐色土である。全体に固く平坦である。柱穴は検出されなかった。

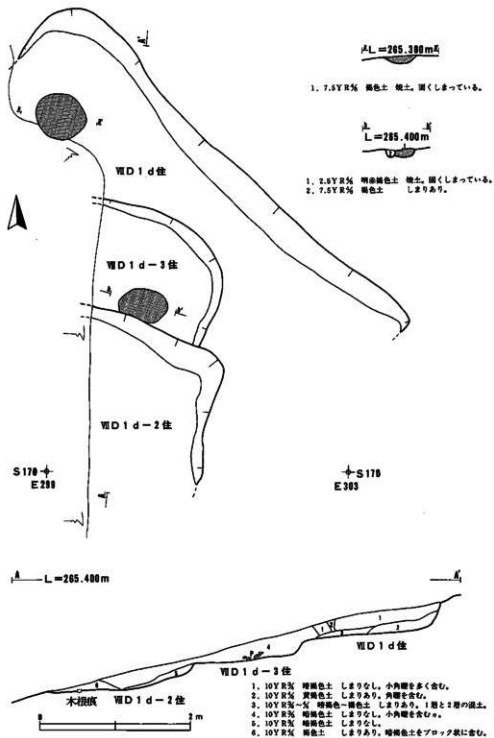
〈炉〉西壁寄りに地床炉1基を検出した。焼土は60×70cmの長丸状に分布し、厚さは最大12cmと発達している。断面はレンズ状で、床面が焼成を受けたものである。

遺物（第101図、写真図版164）

〈土器〉435は植物性繊維を混入する。ループ状圧痕は、いわゆるループ文とは異なる。

〈石器〉フレークが1点出土した。

時期 特定する資料を欠くが、検出状況・重複関係・出土遺物から縄文時代前期後葉から末葉に属するものと推定される。



第100図 WD1d・WD1d-2・WD1d-3位層跡

#### ⅦD1d-2 住居跡 (遺構番号39)

遺構 (第100図、写真図版31)

〈検出状況〉西尾根の南斜面に位置する。西側から小角礫を含む暗褐色土層を掘り下げている段階で、断面に住居の掘り込みを確認し、ⅦD1d-2住居跡とⅦD1d-3住居跡を同時に検出した。埋土と壁が殆ど同色で平面的な検出ができなかったことから西側は掘り過ぎてしまった。北壁でⅦD1d-3住居跡と重複している。断面観察ではⅦD1d-3住居跡の埋土が本住居にも及んでいることから、本住居の方が古いと考えられる。

〈形状・規模〉詳細は不明であるが、方形ないしは長軸方向が等高線にはほぼ平行する長方形を基調とするものと推定される。残存値は東西1.8m、南北2.2mである。

〈壁・壁高〉暗褐色土層で固く締まり、内湾気味に外傾する。壁高は北壁17cm、東壁16cmである。

〈埋土〉第5層が純粋な本住居の埋土と考えられる。

〈床・柱穴・施設〉小角礫を含む褐色土を床面とする。斜面に沿って傾斜するが、北壁側に特にその傾向がある。柱穴は検出されなかった。

〈炉〉検出されなかった。

遺物〈土器〉埋土から縄文時代前期の横位綾絡文、網目状捺糸文、組縄縄文などの小破片が計200g出土したが、図示は割愛した。

時期 時期を特定する資料を欠くが、検出状況・重複関係・出土遺物などから縄文時代前期後葉から末葉後葉に属するものと推定される。

#### ⅦD1d-3 住居跡 (遺構番号40)

遺構 (第100図、写真図版31)

〈検出状況〉西尾根の南斜面に位置する。ⅦD1d-2住居跡と同時に検出した。平面的な検出ができなかったことから西側は掘り過ぎてしまった。南側でⅦD1d-2住居跡と重複する。埋土断面観察から、本住居の方が新しいと考えられる。

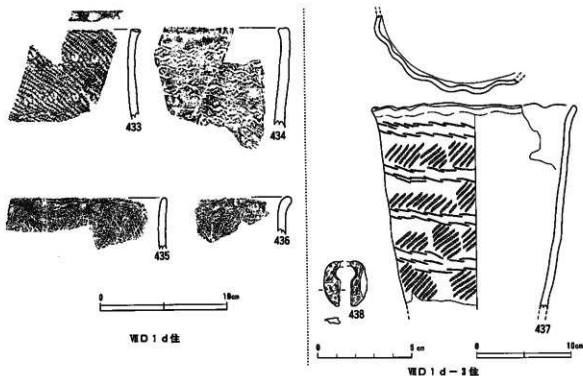
〈形状・規模〉詳細は不明であるが、方形ないしは長軸方向が等高線にはほぼ平行する長方形を基調するものと推定される。残存値は東西1.7m、南北1.5mである。

〈壁・壁高〉暗褐色土層を壁とし固く締まり、内湾気味に外傾する。壁高は北壁17cm、東壁22cmである。

〈埋土〉締まりを欠く暗褐色土で、ⅦD1d-2住居の範囲にも及ぶ。

〈床・柱穴・施設〉小角礫を含む褐色土である。ほぼ水平で平坦である。柱穴は検出されない。

〈炉〉検出されなかった。



番号	出土地点	層位	文様	地文	口唇部形状	器高	備考	分類	写真
433	WD 1 d 住	埋土	ループ文?。口唇部無縁状圧痕。	直線段反折?又はO段多条				II 1 b	164
434	WD 1 d 住	埋土	一部口唇部斜目。直線する縦位縞線文。	L.R横。片結び縦位縞線文。			2条おきにループが現れる。	II 3 a	164
435	WD 1 d 住	埋土		R横目状断永文。				II 6 c	164
436	WD 1 d 住	埋土		L本目状断永文。				II 6 c	164
437	WD 1 d - 3 住	埋土		L.R横。縦位縞線文	II 4	-	II 2 形	II 6 c	164

番号	出土地点	層位	器種	石質	産地	長さ	幅	厚さ	重さ	備考	分類	写真
438	WD 1 d - 3 住	埋土	瓦物	チャート	北上山地	2.4	-	0.3	(1.19)			164

第101図 WD 1 d・WD 1 d - 3 住居跡出土遺物

遺物 (第101図、写真図版164)

〈土器〉埋土から1140g出土した。437は埋土から一括出土したものである。上面観が花卉状を呈する口縁を有する。口唇部は平らになでられ断面は角張っている。胴部は2段の縄を横回転後、綾絡文を施文したものと考えられる。

〈石製品〉438が1点出土したのみである。

時期 時期を特定する資料を欠くが、検出状況・重複関係・出土遺物などから縄文時代前期後葉から末葉に属するものと推定される。

ⅦD1e住居跡 (遺構番号41)

遺構 (第102図、写真図版32)

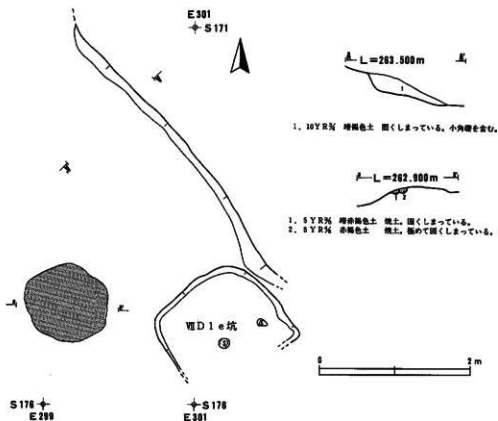
〈検出状況〉西尾根の南斜面に位置する。小角礫を含む暗褐色土層を下げている過程で焼土を検出、その斜面上方で壁を確認し住居として認定した。斜面のため南側は流失しており、遺存状態が悪い。東側でⅦD1e土坑と重複するが、本住居は同土坑を埋めて構築されている。

〈形状・規模〉不明であるが、北東壁の遺存状態から等高線にほぼ平行する長方形を基調とする可能性がある。規模は、残存値で3.1×4.3mである。

〈壁・壁高〉北東壁のみ残存し、再堆積層下位の褐色土でやや外傾、壁高は29cmである。

〈埋土〉再堆積層起源の暗褐色土の単層である。小角礫を含む。

〈床・柱穴・施設〉東側は平坦であるが、西側は掘り過ぎもあるものの斜面に沿って傾斜し、最大比高32cmである。全体に固いが、ⅦD1e土坑部分も同様であり踏み固めた可能性がある。柱穴は検出されなかった。



第102図 ⅦD1e住居跡

〈炉〉地床炉が1基検出された。焼土は100×108cmの不整形形状に分布する。断面観察では、強い焼成を受けている部分は平面形ほど広くなく、厚さは最大6cmである。

遺物 遺物は出土しない。

時期 時期を特定する資料を欠き不明である。検出状況・埋土・焼土の生成状況などから、縄文時代前期に属する可能性が高い。

#### ⅦD1g住居跡（遺構番号42）

遺構（第103図、写真図版32）

〈検出状況〉西尾根の南麓斜面に位置する。基盤層上面で暗褐色土の落ち込みとして検出した。西側は小角礫含みの暗褐色土層が連続し、壁を確認できなかった。北西隅でⅦD1f土坑と重複している。ⅦD1f土坑はより上の層で確認しており、本住居の方が古い。西側の一部でⅦD0g住居跡と接するが、直接的な切り合いは観察できない。本住居の床面下からⅦD1g-2住居跡が検出された。

〈形状・規模〉西側は不明であるが、長軸方向が等高線にほぼ平行する隅丸長方形と推定される。長軸は推定で4m、短軸は3.1mである。

〈壁・壁高〉基盤層である黄褐色土で固く、外傾する。壁高は東壁19cm、北壁37cmである。

〈埋土〉固く締まる暗褐色土を主体とする。径5mm以下の炭化物を含むが、下位程多い。

〈床・柱穴・施設〉ⅦD1g-2住居跡の埋土を床としており、全体に固い。床および直上に焼土と多量の炭化物が分布することから焼失住居と考えられる。柱穴は3個検出された。いずれも北東隅付近に位置しており、上層構造は不明である。床直上から34×40cmの偏平な自然礫が検出されている。

〈炉〉長軸中央の東寄りに地床炉1基を検出した。焼土は26×50cmの不整形の範囲に分布し、断面はレンズ状で厚さは最大6cmである。焼土の西隅に径22cmの角礫が埋められているが、被熱の痕跡はない。粉炭が混入する黒褐色土が焼土の南側に巡る。

遺物（第104～108図、写真図版164～168）

〈検出状況〉北東四半部の床面ないしその直上で数個体が、おり重なるように出土した。直上としたものも、床面出土のもの一括資料となり得る出土状況である。

439は口径・器高とも他より大きい。第1種結東羽状縄文を器面全体に施した後、口縁部に粘土紐を鋸歯状に貼り付けて全周させる。粘土紐の屈曲部分はやや曲線的な印象があり、断面形は長方形に近い。粘土紐上には棒状工具（先端が閉鎖している竹管か）により、器面に対してほぼ直角に刺突が施される。口唇部は丸みを帯びる。内面は全体に丁寧になでられている。440と441は同一固体であるが、口径・器高とも不明である。439と同様口縁直下に粘土紐を鋸

歯状に巡らしているらしいが剥落しており詳細は不明である。鋸歯状粘土紐の下端に接して馬蹄状の粘土紐が貼り付けられる。粘土紐には器体に対してほぼ直角に竹管刺突が連続的に施文される。442は焼成良好で硬質である。口縁部分で急に外反する。443は焼成がやや不良で脆い印象をもつ。網目状の地文は全周せず器面の約3分の1は無文である。444と445、456は同一固体であるが、器高は不明である。胴中央部から口縁部まで内弯し、口縁直下で外反する。446は口縁部に上面観が鋸歯状となる装飾体を有する波状口縁の土器である。破損部の観察では、波状口縁を作出した後に装飾体を貼り付け、内面と外面から指頭で調整している。同装飾体の中央部には竹管刺突がほぼ直角に連続的に施文され、端の部分は浅い凹みがつけられる。447は灰褐色で焼成不良でやや脆い。口縁部内面にも、外面に用いたものと同じ原体で施文している。内面は縦にみがかきかけられている。448は口縁直下に綾格文、胴上半部には第2種の、胴下半部には第1種の結束羽状縄文が施文される。上の地文が下のそれより後に施文されている。口唇部は丸みを帯びる。色調は灰褐色で、焼成は良好である。451は口縁部がやや外反し、口唇部は平らになでられ断面形は角張る。453の胎土は、表面観察では砂に比し粘土が多い印象がある。地文は0段の燃糸文として表現したが、あるいは緩い燃りの縄である可能性もある。衆間が比較的離れ、衆そのものもやや太めである。口唇部は平らになでられ、地文と同一の原体が押圧される。454と455は埋土から出土した同一固体であるが、本住居とは時期を異にするもので混入と思われる。

<石器> 470は尖頭器椽石器としたが1側辺は入念な加工であるのに対し、他の2側辺の加工はやや粗く、若干対称性を欠く。471は上辺と下辺に打減痕が観察されることからピエス・エスキューとした。476はやや粗い剝離であるが、石笥の未製品の可能性もある。477は急角度の細かい加工が施され、折断面とかがわって尖頭部を形成する。図示した他にUフレ2点、フレークが床面から36点、埋土から47点（北上山地産・粘板岩、礫石産・硬質泥岩、奥羽山地産・流紋岩他）が出土した。

時期 床面出土遺物から縄文時代前期後葉に属すると考えられる。

#### ⅦD1g-2住居跡（遺構番号43）

遺構（第103図、写真図版34）

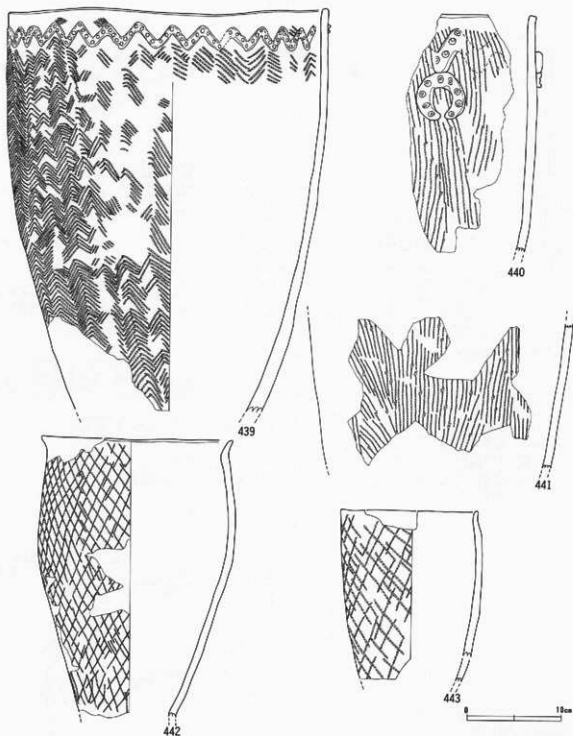
<検出状況>ⅦD1g住居跡床面で、同住居の壁より内側を巡る黒褐色土のプランとして検出した。南西壁は確認できなかった。

<形状・規模>長軸方向が等高線にほぼ平行する凸辺隅丸長方形で、規模は、短軸2.9m長軸4.2mである。

<壁・壁高>基盤層で固く、やや外傾する。壁高は東壁35cm、西壁4cm、南壁10cm、北壁45cm

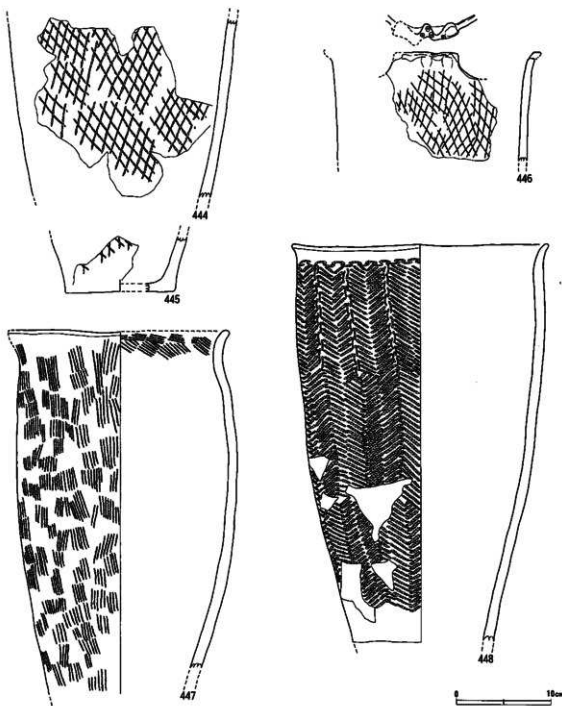






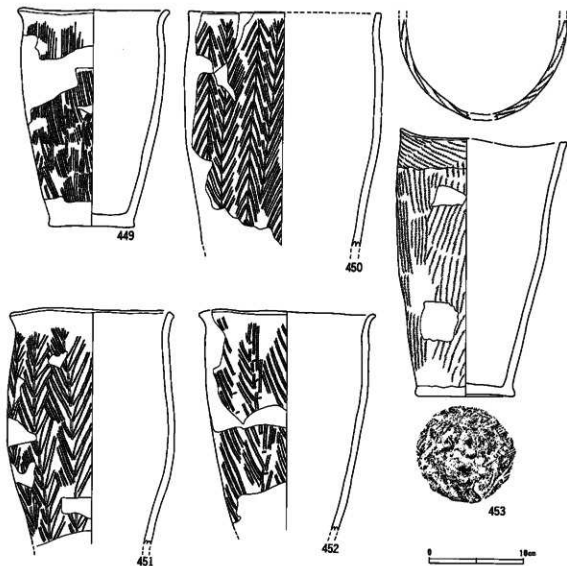
番号	出土地点	部位	文様	地文	口径	底径	高さ	備考	分類	写真
439	ⅤD 1 g 住	床面	口周部刷毛状縁帯上竹管刺突	L R × R L 第 1 種結文斜状織文	34.0	-	(42.7)		Ⅱ6b7	164
440	ⅤD 1 g 住	床直上	刷毛状縁帯、馬蹄状縁帯上竹管刺突	R 斜糸文	-	-	(20.8)	441 と同一個体	Ⅱ6b7	164
441	ⅤD 1 g 住	床直上		R 斜糸文	-	-	(15.6)	446 と同一個体	Ⅱ6b7	164
442	ⅤD 1 g 住	床直上		R 網目斜糸文	(20.3)	-	(20.7)		Ⅱ6b7	164
443	ⅤD 1 g 住	床面		L 網目斜糸文	(14.5)	-	(19.0)		Ⅱ6b7	164

第104図 ⅤD 1 g 住居跡出土遺物(1)



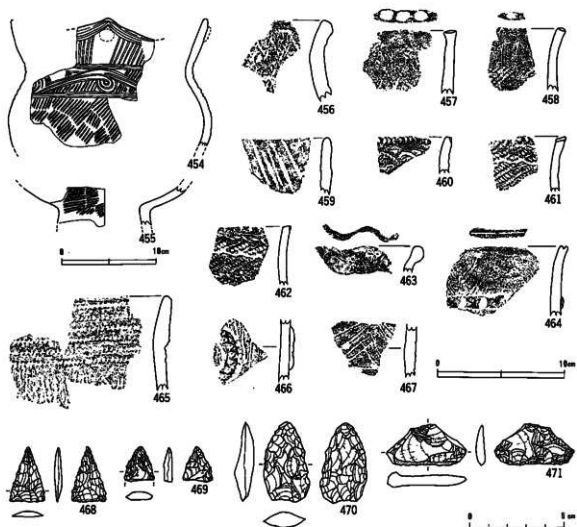
番号	出土地点	層位	文様	地文	口徑	直徑	高さ	番号	分類	写真
444	Ⅷ D 1 g 住	床面上		L R 網目状燕水文	-	-	(18.4)	445, 446 之同一断片	Ⅱ 6 b	164
445	Ⅷ D 1 g 住	床面上		L R 網目状燕水文	-	(11.6)	(5.8)	444, 446 之同一断片	Ⅱ 6 b	164
446	Ⅷ D 1 g 住	床面上	口縁部弁状突起、側面状隆起物体上竹管制突	R 網目状燕水文	(23.9)	-	(11.5)		Ⅱ 6a 7	165
447	Ⅷ D 1 g 住	床面上	口縁部内側 6 筋文	R 燕水文	(23.5)	-	(29.9)		Ⅱ 6b 6	165
448	Ⅷ D 1 g 住	床面上	面上半部 1 段縞状燕水文、面下半部 1 段縞状燕水文	L R × R L	(27.2)	-	(42.4)	織繰遺入	Ⅱ 6b 6	165

第105圖 Ⅷ D 1 g 住層跡出土遺物(2)



番号	出土地点	層位	文様	地文	口径	胴部径	器高	番号	分瓶	写真
449	ⅧD1g住	床直上		R木目状澁承文	16.1	(9.0)	23.2		Ⅱ6bカ	165
450	ⅧD1g住	床直上		R木目状澁承文	20.4	-	(24.8)		Ⅱ6bカ	165
451	ⅧD1g住	床直		L木目状澁承文	17.4	-	(25.1)		Ⅱ6bカ	165
452	ⅧD1g住	壇土上部		L木目状澁承文	18.8	-	(23.5)		Ⅱ6bカ	165
453	ⅧD1g住	床直上	口唇部にも施文	I捺承文	17.7	10.6	28.6	粘土多し、	Ⅱ6bカ	165

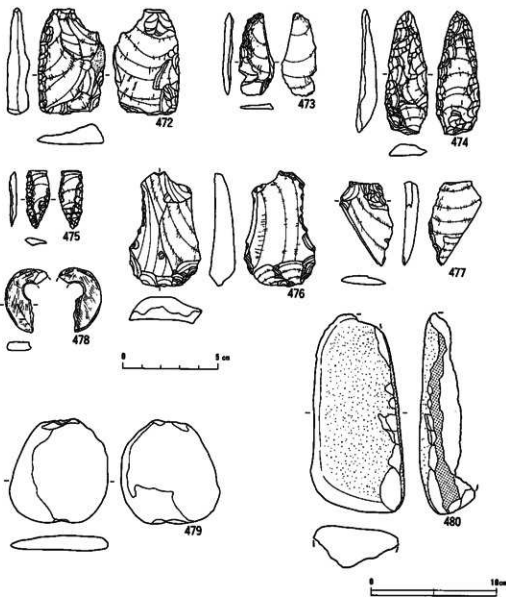
第106図 ⅧD1g住居跡出土遺物(3)



番号	出土地点	層位	文様	地文	口径	底口径	器高	備考	分類	写真
454	ⅦD 1 g 住	埴土	波状口縁、沈線	L.R. 横	20.9	-	(11.6)	455と同じ器体	Ⅶ 1 a	165
455	ⅦD 1 g 住	埴土	金魚鱗形	L.R. 横	-	-	(4.3)	454と同じ器体	Ⅶ 1 a	165
456	ⅦD 1 g 住	床面		L.R. 網目状沈糸文。				444, 445と同じ器体	Ⅶ 6b i	166
457	ⅦD 1 g 住	床面	口縁部指環状圧痕。	R. 網目状沈糸文。					Ⅶ 6b 才	166
458	ⅦD 1 g 住	Q 4 埴土	口縁部指環状圧痕。口縁部縮文。	L.R. 横。					Ⅶ 6b 才	166
459	ⅦD 1 g 住	埴土	口縁部指環状圧痕。	L. 沈糸文。					Ⅶ 6b c	166
460	ⅦD 1 g 住	Q 4 埴土	口縁部縮い刺目目。口縁部縮位線縮文。						Ⅶ 3 a	166
461	ⅦD 1 g 住	埴土上部	動物の皮、先地へ凸部口平乳、口縁部縮位線縮文、口縁部縮位線縮文。	L. 沈糸文。					Ⅶ 3 a	166
462	ⅦD 1 g 住	埴土上部	口縁部縮い刺目、刺目文文口縁部縮十字子、口縁部縮位線縮文。	L.R. 横。					Ⅶ 3 a	166
463	ⅦD 1 g 住	Q 4 埴土	縮部縮位線。器体上指環状圧痕(左面から)。						Ⅶ 6a 7	166
464	ⅦD 1 g 住	Q 4 埴土	縮部縮位線。	R 2 表木目状沈糸文。					Ⅶ 6b i	166
465	ⅦD 1 g 住	床底土	前縁部縮位線上に竹管刺突。	R. 沈糸文。					Ⅶ 3 b	166
466	ⅦD 1 g 住	Q 4 埴土	前縁部縮位線上に竹管刺突。	R. 沈糸文。					Ⅶ 6b i	166
467	ⅦD 1 g 住	埴土	波状口縁。沈線。						Ⅶ 7	166

番号	出土地点	層位	器種	石質	産地	長さ	幅	厚さ	重さ	備考	分類	写真
468	ⅦD 1 g 住	Q 3 埴土	石鏃	硬質泥岩	宇石西部	3.1	1.7	0.4	1.70		I 1	167
469	ⅦD 1 g 住	床底土	石鏃	硬質泥岩	宇石西部	(1.8)	1.6	0.4	(1.27)	高部側大半欠損。	不明	167
470	ⅦD 1 g 住	Q 1 埴土	先端部縮位線	硬質泥岩	宇石西部	4.3	2.4	0.8	8.23			167
471	ⅦD 1 g 住	床底土	ピエヌ・エヌキ一ユ	硬質泥岩	宇石西部	4.2	2.2	0.7	5.54	台形状。		167

第107図 ⅦD 1 g 住層跡出土遺物(4)



番号	出土地点	層位	器種	石質	産地	長さ	幅	厚さ	重さ	備考	分類	写真
472	ⅦD1 g 住	埋土	不定形石器	砂礫岩	北上山地	5.9	3.5	1.0	21.8		I a1	167
473	ⅦD1 g 住	Q1床土	不定形石器	硬質泥岩	宇石西郷	4.3	1.6	0.2	2.55		I a2	167
474	ⅦD1 g 住	Q3埋土上	不定形石器	硬質泥岩	宇石西郷	6.5	2.5	0.6	12.05		I a	167
475	ⅦD1 g 住	Q3埋土上	不定形石器	硬質泥岩	宇石西郷	3.0	1.2	0.3	1.47	側面が鋭角。	II	167
476	ⅦD1 g 住	埋土上位	不定形石器	硬質泥岩	宇石西郷	0.1	3.8	1.1	25.20	厚状石器の未製品の可能性あり。	IV	167
477	ⅦD1 g 住	埋土上位	不定形石器	硬質泥岩	宇石西郷	4.5	2.5	0.5	6.40	折断面とかわって尖頭部を形成。	Ⅴ	167
478	ⅦD1 g 住	Q3埋土	耳飾	チャート	北上山地	3.4	(2.0)	0.4	(4.03)			167
479	ⅦD1 g 住	床土上	石匙	赤色凝灰岩	北上山地	8.3	7.7	1.2	129		I	167
480	ⅦD1 g 住	床土上	船形磨盤A群	河津石宝山群	鳥羽山地	15.7	(7.5)	(6.8)	(460)	平滑面1面。欠損品。		168

第168図 ⅦD1 g 住層跡出土遺物(5)

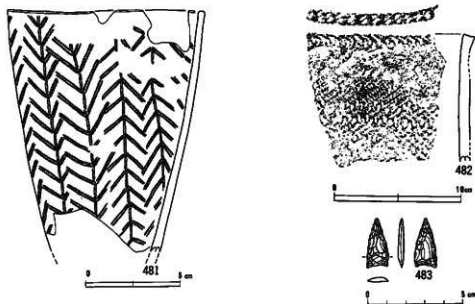
である。

〈埋土〉暗褐色土を主体とし、微細な炭化物を含む。第9層には、ⅧD1g住居による被熱の痕跡が残る。全体に固く締まっている。

〈床・柱穴・施設〉基盤層で固くやや凹凸があり、中央部が少し窪む。柱穴は5個検出された。概ね壁際に位置し、P2を除けば規模もほぼ等しい。埋土は暗褐色土で固く締まっている。周溝が北壁際と西壁側の一部に断続的に通る。幅10~20cm、深さ5~7cmで固く締まった黒褐色土を埋土とする。

〈炉〉長軸線上西側に焼土が検出された。径40cmの不整な円形に分布し、厚さは1~1.5cm程度と薄い。微細な炭化物を含みやや締まりを欠く。焼土の発達が悪いが一応地床炉としておく。  
遺物 (第109図、写真図版168)

〈土器〉481は床面出土であるが、胎土に砂を多く含み、焼成は良好、色調は明黄褐色である。



番号	出土地点	層位	文様	地文	口径	底径	器高	器容	備考	分類	写真
481	ⅧD1g-2住	床面上		黒木目状赤土	28.0	-	(25.7)			Ⅱb2	168
482	ⅧD1g-2住	床面	口唇部側の胎面残痕。織線遺入。	L.R.磁灰層。					織線遺入	Ⅱ1a	168

番号	出土地点	層位	器種	石質	底地	長さ	幅	厚さ	重量	備考	分類	写真
483	ⅧD1g-2住	床面上	石鏃	霞貫礫灰岩	礫石西郡	2.6	1.1	0.2	0.02		Ⅱb2	168

第109図 ⅧD1g-2住居跡出土遺物

口唇部はなてにより平坦である。482は繊維土器であり混入したと思われる。

<石器>石鏃1点の出土である。他にUフレ2点、フレーク9点が出土した。

時期 重複関係・床面出土遺物から、縄文時代前期後葉に属すると考えられる。

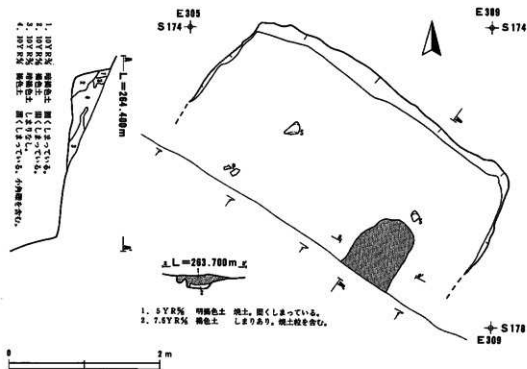
#### VII D 2 f 住居跡 (遺構番号44)

##### 遺構 (第110図、写真図版34)

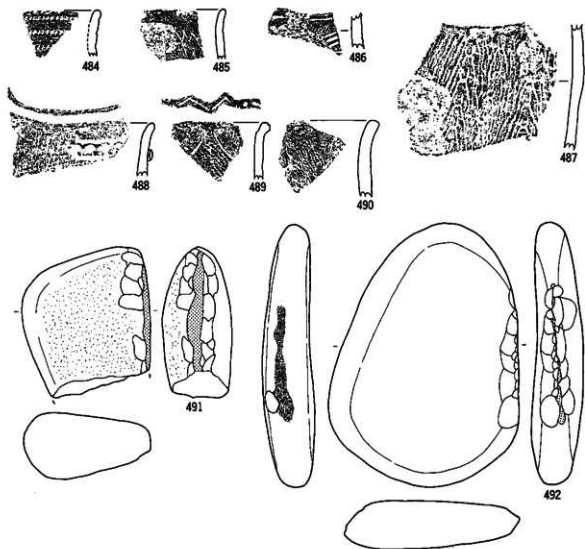
<検出状況>西尾根の南斜面に位置する。表土除去後に小角礫含みの暗褐色土層上面で検出した。南側の東西壁は斜面のため流失、さらに調査直前まで使用されていた道路のため大きく削割されている。

<形状・規模>詳細は不明であるが、方形ないしは長軸方向が等高線にほぼ平行する長方形と推定される。東西4.3m、南北は残存値で2.4mである。

<壁・壁高>暗褐色土層で、直立気味に立ち上がる。壁高は東壁25cm、西壁18cm、北壁39cmで



第110図 VII D 2 f 住居跡



番号	出土地点	層位	文様	地文	口径	器身径	器高	備考	分類	写真
484	VII D 2 f 住	床面	輪条体圧痕。						II 8 b	168
485	VII D 2 f 住	床面		R網目状體糸文。					II 6	168
486	VII D 2 f 住	床面	半截竹管平行比線。内面ミガキ。	L R 痕。					III 1	168
487	VII D 2 f 住	床面		互木目状體糸文。(沈部部切)					II 6	168
488	VII D 2 f 住	塚土	波状口縁。胎骨上部環状圧痕。	多輪條条体。					II 6	168
489	VII D 2 f 住	塚土	上部環状波状胎骨。底部体上面沈痕。口唇部切欠。	L R 痕。					II 6a 7	168
490	VII D 2 f 住	塚土		互木目状體糸文。					II 6	168

番号	出土地点	層位	器種	石質	産地	長さ	幅	厚さ	重さ	備考	分類	写真
491	VII D 2 f 住	床面	胎骨器個人群	両輝石安山岩	奥羽山地	(10.5)	10.1	5.5	( 920)	平滑面 1 面。	I a	168
492	VII D 2 f 住	床面	胎骨器個人群	硬砂岩	北上山地	30.9	15.0	4.1	1800	+ 胎石。	III b 1	168

第111図 VII D 2 f 住層跡出土遺物



ある。

〈埋土〉褐色土を主体とし、全体的に固く締まっている。斜面下方は暗褐色土で締まりを欠く。

〈床・柱穴・施設〉暗褐色土層で、東側に木根による細かい凹凸がある他はほぼ平坦であるが、全体に斜面沿ってやや傾斜する。柱穴は検出されなかった。

〈灰〉地床灰が1基検出された。焼土は68×90（残存値）cmの推定楕円形状に分布し、厚さは最大18cmである。断面観察では概ねレンズ状に形成され固く締まっており、強い焼成を受けている。

遺物（第111図、写真図版168）

〈土器〉床面から640g、埋土から1310g出土したが接合するものはなかった。488は左側に裝飾体がつくのではないかと思われるが不明である。489の口唇部の鋸歯状沈線は一面毎に施されたものである。

〈石器〉図示した2点のみの出土である。

時期 破片のみの出土であり特定はできないが、検出状況・出土遺物から縄文時代前期後葉から中期初頭に属するものと推定される。

ⅦD2h住居跡（遺構番号45）

遺構（第112図、写真図版35）

〈検出状況〉西尾根の南麓に位置する。調査直前まで使用されていた道路に南接している。西側は暗褐色ないし黒褐色土のやや方形のプランとして確認したが、東側は暗褐色土層が厚く埋土との区別が困難だったことおよび遺構の重複により、平面的な検出はできなかった。

南側でⅦD2h-2住居跡と重複するが、本住居は同住居を埋めてつくられる。東側ではⅦD3h-2住居跡と重複するが、埋土断面による切り合い関係は明らかにできなかったが、本住居の方が新しい。それは次のような精査時点の観察による。すなわち、ⅦD3h-2住居跡の床面は本住居より10cm程度高いにもかかわらず、本住居の埋土と重複部分の埋土は同じと判断され、周溝がまわっていくと、ⅦD3h-2住居跡による貼床は観察できなかったことに基づく。

本住居の北側東半には断続的ではあるが2条の周溝が検出され、建替えによる2棟の重複と考えられた。1棟は床面東半部にある内側の周溝と西半の北壁を結ぶプランを想定したもの（aとする）であり、他の1棟は外側の周溝をもつものである。後者には2つの場合（それぞれb、cとする）が考えられる。bは残存する西側から東側まで現有する北壁のラインでとらえる場合。cは2重になった周溝の部分とそれに対応する壁のみの範囲が残存したとみる場合である。野外調査での観察ではcと考えられた。それは北壁の東半がやや北側にやや突き出し、

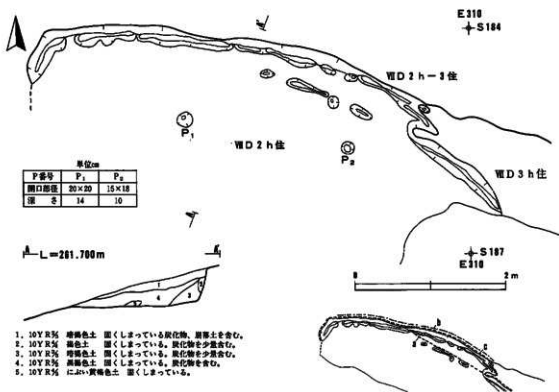
西半の北壁とは方向を若干異にすると考えられたからである。しかし、周溝が検出してから重複に気づいたため、その部分の埋土断面はとれなかった。bの可能性もなしとはしない。

遺構名は、aの想定でとらえたものをⅦD2h住居跡、cの立場でとらえたものをⅦD2h-3住居跡とする。ⅦD2h-3住居跡の壁がⅦD2h住居跡によって切られたと考えれば、新旧関係は次のようになる。

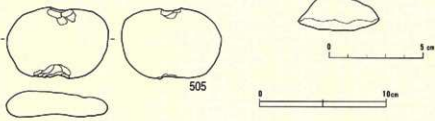
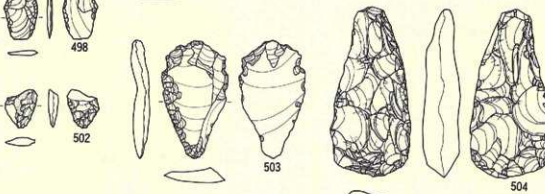
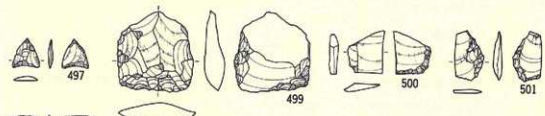
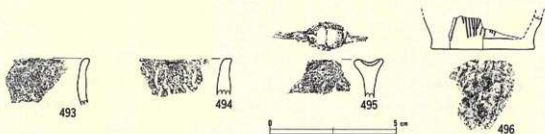
(新) ⅦD2h住居跡←ⅦD2h-3住居跡←ⅦD3h-2住居跡 (旧)  
←ⅦD2h-2住

<形状・規模>南側は斜面のため流失して不明であるが、長軸が斜面に平行する楕円形状と推定される。規模は、長軸6.7m、短軸は残存値で3.5mである。

<壁・壁高>基盤層である黄褐色土で固く締まり、残存する西壁北壁ともほぼ直立している。壁高は西壁18cm、北壁41cmである。



第112図 ⅦD2h・ⅦD2h-3住居跡



番号	出土地点	層位	文様	地文	口径	表径	器高	備考	分類	写真
493	ⅤD 2 h 住	床直上	波状口縁。	黒燃赤文。					Ⅱ b	169
494	ⅤD 2 h 住	Q 2 埋土		L 及紅、片形不明の残片。					Ⅱ b	169
495	ⅤD 2 h 住	Q 2 埋土	波状口縁、頂面上に1箇の突起を有する円形彫刻。	黒 2 条木目状燃赤文。					Ⅱ 6a	169
496	ⅤD 2 h 住	埋土		L 燃赤文	-	[11.0]	(3.4)	銅代板。		169

番号	出土地点	層位	器種	石質	産地	長さ	幅	厚さ	重さ	備考	分類	写真
497	ⅤD 2 h 住	床直上	石	高貴燧石	平石西部	1.5	1.4	0.2	0.39	小型。	Ⅱ b 2	169
498	ⅤD 2 h 住	埋土	不定形石器	硬質泥岩	平石西部	2.5	1.8	0.3	1.40	薄く扁平。左辺の刃は不規則。刃こぼれ。	I c 2	169
499	ⅤD 2 h 住	埋土	石鏝	珉質泥岩	平石西部	4.2	4.0	1.0	30.63	基部側欠損。	Ⅱ	169
500	ⅤD 2 h 住	Q 2 埋土	不定形石器	硬質泥岩	平石西部	2.2	2.0	4.5	1.65	折断面 2 面あり、三角形状となる。扁平。	I b 1	169
501	ⅤD 2 h 住	Q 2 埋土	不定形石器	硬質泥岩	平石西部	2.7	1.8	0.2	1.39	下辺に微小刻線あり。	I b 2	169
502	ⅤD 2 h 住	Q 2 埋土	不定形石器	砂岩	北上山地	2.1	1.7	0.4	1.36		Ⅲ	169
503	ⅤD 2 h 住	埋土	不定形石器	珉質泥岩	平石西部	6.3	3.5	1.0	15.71	尖眼筋(丸み)も調整、きれいなストレーパー。	I b 1	169
504	ⅤD 2 h 住	床直上	打製石斧	硬質泥岩	平石西部	6.9	4.2	1.9	69.47	裏面の調整は粗く平坦。	I	169
505	ⅤD 2 h 住	埋土	石鏝	湖沢燧石	北上山地	5.5	8.0	2.1	130		Ⅱ	169

第113図 VII D 2 h 住居跡出土遺物

〈埋土〉3層に大別される。第1層には基盤層を形成する黄褐色土が径3mmのブロックで混入する。粉炭を含む。第3層は炭化物が第1層より多い。断面からⅦD 2 h-2 住を埋めて床としていることが分かる。

〈床・柱穴・施設〉基盤層で固く、やや凹凸はあるがほぼ水平である。柱穴は2個検出されたがいずれも浅いものである。周溝が断続的に巡る。埋土は10Y R 5/6の床よりやや濁った黄褐色土で締まりを欠き粉炭を含む。幅10cm程度、深さは最大で12cmである。ⅦD 2 h-3 住居跡の周溝と切り合いは平面では観察できなかった。

〈炉〉検出されなかった。

遺物 (第113図、写真図版169)

〈土器〉床面から120g、埋土から825g出土した。495は装飾体頂部に浅い凹みが施されたものである。図示した他には網目状撚糸文、組縄縄文の小破片が埋土から出土した。

〈石器〉499は基部側を欠損しているが、断面形状から打製石斧とした。504の裏面の調整は粗く平坦で、断面形はカマボコ状を呈する。図示した他にフレーク18点出土した。

時期 破片のみの出土で時期を特定する資料を欠くが、検出状況・重複関係から縄文時代前期後葉から末葉に属するものと思われる。

ⅦD 2 h-2 住居跡 (遺構番号46)

遺構 (第144図、写真図版35)

〈検出状況〉西尾根の南麓の平地、旧畑地に位置する。耕作土下で焼土を検出した。壁と埋土の大半は耕作のために攪乱消失している。北壁はⅦD 2 h 住居跡に埋められていて僅かに残る。東側でⅦD 3 h 住居跡と重複する。同住居跡が新しいことが同住居の平面検出時に確認されている。新旧関係は次のようになる。

(新) ⅦD 3 h 住居跡←ⅦD 2 h 住居跡←ⅦD 2 h-2 住居跡 (旧)

ⅦD 2 h-3 住居跡←ⅦD 3 h-2 住居跡

また、床面でⅦD 2 h 土坑を検出した。本住居に先行すると考えられる。

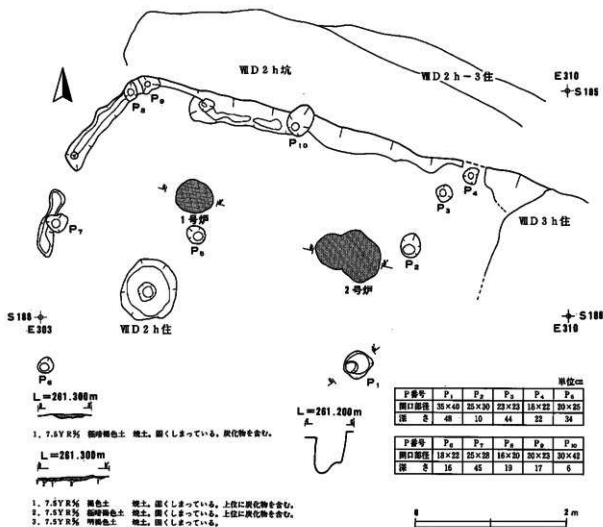
〈規模・形状〉壁の残存状況が悪く不明であるが、長軸が等高線にほぼ平行する長方形を基調とするものと推定される。規模は残存値で、東西5.7m南北3.2mである。

〈壁・壁高〉北壁のみ残存、基盤層である黄褐色土で固く、緩やかに立ち上がる。壁高は東7cmである。

〈埋土〉耕作により攪乱され不明である。一部ⅦD 2 h 住居跡に埋められた土は暗褐色土でやや軟質である。

〈床・柱穴・施設〉基盤層である黄褐色で固く、殆ど凹凸なく平坦である。柱穴は10個検出さ

れた。うち4個は周溝に伴う。P1~P3がほぼ一直線上にのる他は特に規則性は見出だせない。埋土は概ね黒褐色~暗褐色土で、粉炭を含み固く締まるものが多い。周溝は西側と北壁際の一部に遡る。幅は最大20cm、深さ最大10cmである。埋土は黒褐色土で固く締まり粉炭を含む。〈炉〉長軸線上に地床炉を2基検出した。西側のものを1号炉、東側のものを2号炉とする。1号炉の焼土は42×50cmの卵形に分布し、厚さは最大6cmである。断面はレンズ状で固く締まっている。2号炉の焼土は66×90cmの不整形の範囲に分布し、厚さは最大5cmである。断面は帯状で固く締まっている。



第114図 WD 2 h-2 住跡

**遺物** 本遺構に帰属するとして取り上げた遺物はない。

**時期** 時期を特定する資料を欠くが、検出状況・重複関係から縄文前期後葉に属すると考えられる。

#### ⅦD 2 h-3 住居跡 (遺構番号47)

**遺構** (第112図、写真図版35)

〈検出状況〉ⅦD 2 h 住居跡の精査で、同住居の壁および周溝と想定されるラインより北側にやや突出する部分を検出し、このことから2棟の重複であると考えられた。この突出する壁およびそれに対応する周溝をもってⅦD 2 h-3 住居跡とした。新旧関係については、ⅦD 2 h 住居跡の埋土内に本住居の壁に相当する部分は観察できなかったことから、ⅦD 2 h 住居跡の方が新しいと考えられた。

〈形状・規模〉不明であるが、北壁のラインからはⅦD 2 h 住居跡に類似した平面形を推定できる。残存値は0.45×3 mである。

〈壁・壁高〉北壁のみ一部残存する。基盤層である黄褐色土で固く、ほぼ直立する。壁高は50 cmである。

〈床・柱穴・施設〉ⅦD 2 h 住居跡と同レベルである。周溝は幅10cm、深さ10cmで断続的に巡る。

**遺物** 本遺構に伴う遺物はない。

**時期** 時期を特定する資料を欠くが、検出状況・重複関係から縄文時代前期後葉から末葉に属するものと推定される。

#### ⅦD 3 g 住居跡 (遺構番号48)

**遺構** (第115図、写真図版36)

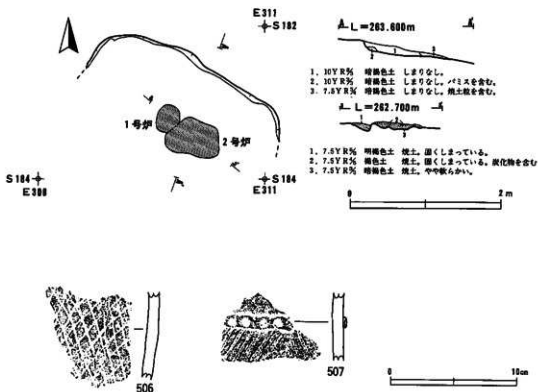
〈検出状況〉西尾根の南麓に位置する。表土除去後小角礫含みの暗褐色土層上面で検出した。南側は斜面および耕作のため流失している。

本住居の床面の下から、ⅦD 2 g 土坑およびⅦD 3 g 土坑が検出された。

〈形状・規模〉詳細は不明であるが、方形ないしは長軸方向が等高線にほぼ平行する隅丸長方形と推定される。規模は残存値で、東西2.8m、南北1.2mである。

〈壁・壁高〉暗褐色土で固くしまっており、緩やかに立ち上がる。壁高は西壁5cm、北壁15cmである。

〈埋土〉やや明るい暗褐色土で、壁際にパミス状のものを僅かに含むが、サンプリングはできなかった。



番号	出土地点	層位	文様	地文	口径	底径	高さ	備考	分限	写真
506	ⅧD 3 g 住	炉内		R網目状燃糸文。					E 6	169
507	ⅧD 3 g 住	Q 3 埋土	残存上左側からの指環状正臥。	R 2 桑木目状燃糸文。					E 6 b f	169

第115図 ⅧD 3 g 住居跡・出土遺物

〈床・柱穴・施設〉暗褐色土で固い。斜面に沿ってやや傾斜する。壁際に木根によると思われる攪乱がある。柱穴は検出されなかった。

〈炉〉床面において焼土が不整形に検出され、断面観察から2単位あることが明らかになった。西側の部分を1号炉、東側の部分を2号炉とする。1号炉の焼土は30×37cmの円形に、2号炉のそれは45×65cmの不整形の範囲に分布し、厚さは両者とも最大8cmで概ねレンズ状に形成され固く縮まっている。

#### 遺物 (第115図、写真図版169)

土器は、図示した他に焼土内から木目状燃糸文、R L横の小破片が出土した。石器はフレークが床面から6点、埋土から10点出土したのみである。

時期 破片のみの出土で特定する資料を欠くが、検出状況・埋土・出土遺物から縄文時代前期後葉から末葉に属すると考えられる。

### ⅦD3g-2住居跡（遺構番号49）

遺構（第116図、写真図版37）

〈検出状況〉西尾根の南麓に位置する。ⅦD3g-4住居跡の床面において黒褐色土が分布することから検出できた。

南側は、ⅦD3h-2住居跡と重複する。ⅦD3h-2住居跡の精査を先行させたため切り合いを断面図であらわすことができなかった。野外調査での観察では、ⅦD3h-2住居跡の方が新しいと考えられた。それは、床面レベルで45cm程の差があるにもかかわらず、同住居の埋土に本住居の床あるいは埋土は観察できなかったということに基づく。

〈形状・規模〉詳細は不明であるが、等高線に斜行する方形ないし長方形を基調すると推定される。規模は、残存値で1×1.2mである。

〈壁・壁高〉基盤層である黄褐色土で固く締まり、ごく緩やかに立ち上がる。壁高は東壁4cm、西壁10cm、北壁41cmである。

〈埋土〉固く締まる黒褐色土であり、上位に長さ10mm程度の炭化物を混入する。

〈床・柱穴・施設〉基盤層で固く、ゆるやかな凹凸がある。柱穴は検出されなかった。床上に20×20cm、厚さ5cmの角礫を検出した。使用痕も加工痕も観察されない。意図的に置いたものかどうかは不明である。

〈炉〉検出されなかった。

遺物（第116図、写真図版170）

〈土器〉埋土から980g出土した。508は浅い刺突である。511は指頭圧痕を伴う隆帯が、頸部にタガ状に巡り、胴部には円形に貼り付けられる。

〈石器〉513はつまみの対辺には刃部加工がない。未製品か。図示した他にフレークが3点埋土から出土した。

時期 時期を特定する資料を欠くが、検出状況・重複関係・出土遺物から、縄文前期後葉から末葉に属すると考えられる。

### ⅦD3g-3住居跡（遺構番号50）

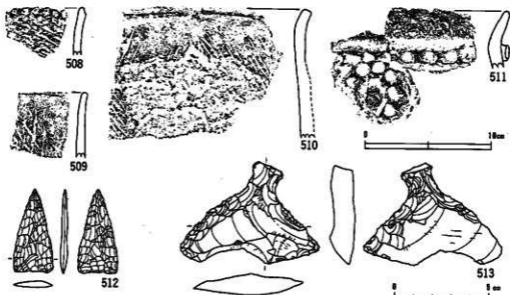
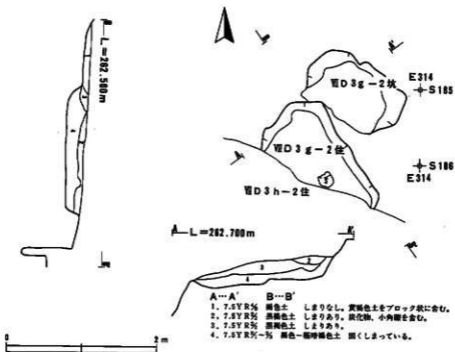
遺構（第117図、写真図版37）

〈検出状況〉西尾根の南斜面、道路に南接する。小角礫含みの暗褐色土層下位で黒褐色の落ち込みとして確認、斜面下方は流失していると考えられた。

〈規模・形状〉南側は不明であるが、長軸が等高線にほぼ平行する隅丸長方形と推定される。規模は、長軸3.4m、短軸は残存値で1.4mである。

〈壁・壁高〉小角礫含みの暗褐色土で固く締まり、直立気味に立ち上がる。壁高は東壁23cm、





番号	出土地点	層位	文様	地文	口径	底径	高さ	番号	分類	写真
508	WD 3 g-2 住	埋土	口縁焼剥状。(竹管かどうか不明)	R線系文。					II 60-9	170
509	WD 3 g-2 住	埋土		L網目状線系文。					II 6	170
510	WD 3 g-2 住	埋土		R木目状線系文。				下半部割取。	II 60-0	170
511	WD 3 g-2 住	埋土	器身上部縦状圧痕。	L線系文。					II 60-1	170

番号	出土地点	層位	器種	材質	産地	長さ	幅	厚さ	重さ	番号	分類	写真
512	WD 3 g-2 住	埋土	石鏃	粘板岩	北上山地	4.4	2.1	0.4	9.14		I 2	170
513	WD 3 g-2 住	埋土	石鏃	粘板岩	北上山地	5.4	7.4	1.3	34.60		II	170

第116図 WD 3 g-2 住層跡・出土遺物

西壁5cm、北壁13cmである。

〈埋土〉黒褐色土を主体とする。褐色土のブロックを含む。全体に締まりを欠く。

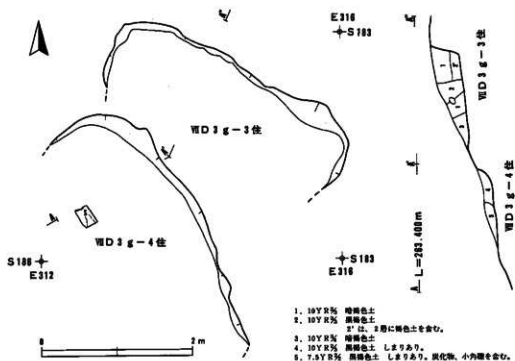
〈床・柱穴・施設〉再堆積層である暗褐色土で固い。凹凸はあまりないがやや西側が低くなる。

柱穴は検出されなかった。

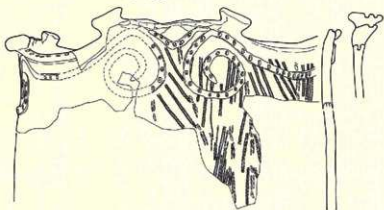
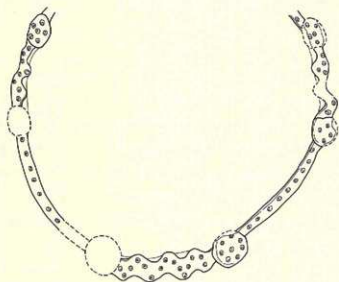
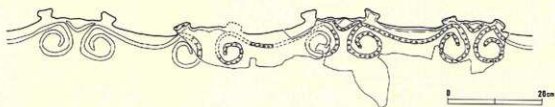
〈炉〉検出されなかった。

遺物 (第118・119図、写真図版170・171)

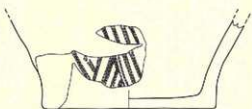
〈土器〉床面から765g、埋土から2996g出土した。514と515は同一個体である。本遺構の他、WD3h土坑埋土および遺構外出土の破片が接合したものである。口径33.5cm、底径18.2cm、器厚1.1cmの大ぶりの土器である。口縁部は緩い波状となり、その頂部には裝飾体が3個残存する。向かい合う2個の裝飾体は、他の1個と比較して長さ・幅・高さいずれも下回る。当初は2個一対の裝飾体が二対で構成されていたものと推定される。裝飾体は、上面観鋸歯状を基調としてその両端には円文が配される。裝飾体および口唇部には、その形状に沿って竹管



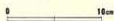
第117図 WD3g-3・WD3g-4住居跡



514

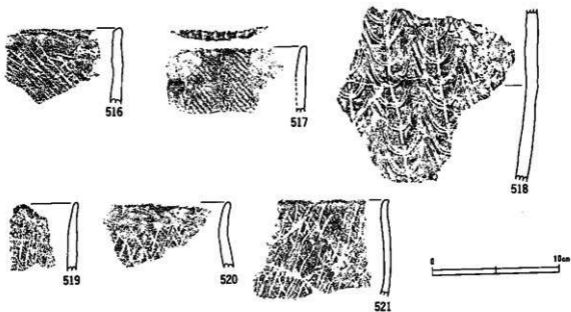


515

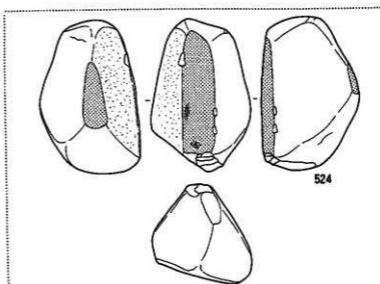


番号	出土地点	層位	文様	口径	底径	高さ	備考	分層	写真
514	VII D 3 g-3 住	埋土上位	縦・横波状線、口縁部縁線が器体上部を覆い、器体上部を閉じる	L+Rの木目状燃赤文	34.5	— (21.2)	515と同一個体	II 6a 7	170
515	VII D 3 g-3 住	埋土上位		L+Rの木目状燃赤文	—	(18.2) (8.8)	514と同一個体	II 6a 7	170

第118図 VII D 3 g-3 住居跡出土遺物(1)



ⅧD3g-3住



ⅧD3g-4住

番号	出土地点	層内	文様	施文	口径	底径	高さ	備考	分類	写真
516	ⅧD3g-3住	炉内		R線赤文(燃りあまい)					Ⅱ6b方	170
517	ⅧD3g-3住	埋土	白帯部爪形圧痕。	L.R線。片結び縦位線跡文。					b	170
518	ⅧD3g-3住	埋土		L2条本目状燃赤文。					Ⅱ6b方	170
519	ⅧD3g-3住	埋土	波状口縁。	R線赤文。					Ⅱ6b方	170
520	ⅧD3g-3住	床面		L網目状燃赤文。					Ⅱ6b方	170
521	ⅧD3g-3住	埋土		網目状燃赤文。					Ⅱ6b方	170

番号	出土地点	層位	胎体	石質	産地	長さ	幅	厚さ	備考	分類	写真	
522	ⅧD3g-3住	埋土	不定形石胎	硬質泥質	宇石西郡	3.1	2.4	0.4	3.28	扁平。不整形。	Ⅰa 2	171
523	ⅧD3g-3住	床面	不定形石胎	地質泥質	宇石西郡	2.9	2.2	0.5	3.40	丸縁部とするに似。対称性を欠く。	Ⅰb 2	171
524	ⅧD3g-4住	埋土上位	及磨器類A群	西礫石安山岩	奥羽山地	11.5	7.8	6.3	780	断面3面。平切面2面。	Ⅰa 2	171

第119図 ⅧD3g-3住居跡出土遺物(2)、ⅧD3g-4住居跡出土遺物

刺突が全体的に施される。口縁下には太めでやや平たい隆帯が貼り付けられ、口唇部同様竹管刺突が連続する。隆帯はその両端で渦を巻き、裝飾体同士を連絡するように4単位センチメートルに貼付けられている。粗砂を多く含み、やや脆い印象がある。色調は7.5Y R6/8橙色である。〈石器〉523は尖頭部が意識的に加工されている。図示した他にUフレ1点が埋土から出土した。

時期 時期を特定する資料を欠くが、検出状況・埋土・出土遺物から縄文時代前期後葉から末葉と考えられる。

#### ⅦD3g-4住居跡（遺構番号51）

##### 遺構（第119図）

〈検出状況〉西尾根の南斜面に位置する。再堆積層下位で黒褐色の落ち込みとして確認、斜面下方は流失していると考えられた。斜面上方にあたる北壁は、基盤層まで掘り込み明瞭である。床面は、西側は基盤層であるのに対し、中央部はなお黒褐色土である。これは、ⅦD3g-2住居跡の上に構築されたためであると判明したが、本住居の床面と想定した部分はすこぶる固く、精査時点の指標となった。

〈規模・形状〉詳細は不明であるが、長軸が等高線にほぼ平行する長方形を基調とするものと推定される。規模は、残存値で1.2×3.75mである。

〈壁・壁高〉基盤層まで掘り込んで壁としており、緩やかに立ち上がる。壁高は北壁12.5cm、西壁5.5cmである。

〈埋土〉締まりある黒褐色土で2層に分けられ、上位は炭化物を含む。

〈床・柱穴・施設〉基盤層である黄褐色土であるが、中央部は重複があり黒褐色土である。すこぶる固く締まる。柱穴は検出されなかった。斜面下方の床上に偏平な角礫が検出された。18×26cmの大きさで加工痕、使用痕は認められない。意図的に置いたものかどうかは不明である。

〈炉〉検出されなかった。

##### 遺物（第119図、写真図版171）

〈土器〉埋土から縄文時代前期の網目状撚糸文の破片2点、撚糸文1点、無文の底部が出土したが、いずれも小破片であり図示は省略した。

〈石器〉図示した1点のみの出土である。

時期 時期を特定する資料を欠くが、検出状況・出土遺物から縄文時代前期後葉から末葉に属すると推定される。

### ⅧD3h住居跡（遺構番号52）

#### 遺構（第120図、写真図版38）

〈検出状況〉西尾根の南麓の斜面に位置する。表土除去後、小角礫含みの暗褐色土層上面で黒色土の長方形のプランとして検出した。南側は斜面および畑作により消失している。

北側でⅧD3h-2住居跡、西側でⅧD2h-2住居跡と重複する。平面および埋土断面観察から、本住居の方が新しい。

〈形状・規模〉南側は不明だが、長軸が等高線にほぼ平行する長方形と推定される。規模は長軸が4.8m、短軸は残存値で2.3mである。耕作により剝削された部分から、4個の柱穴を検出している。これは本住居の推定範囲内におさまるものであるが、15cm程レベルが下がることから所属を断定することはできない。仮に、この4個の柱穴が本住居に伴うものとする、短軸は3.5m前後になろう。

〈壁・壁高〉暗褐色土層から基盤層まで掘りこんで壁としている。西側は、重複するⅧD2h-2住居跡の埋土である。圓く締まり、ほぼ直立する。埋土断面図では、壁の立上がり部分が有段となっているがこれはごく部分的なものである。壁高は東壁10cm、西壁20cm、北壁57cmである。

〈埋土〉第1層～第3層を主体とする。第1層には長さ2cm程度の炭化物を多く含む。第2層には炭化物は微量となり、径3cmので黄褐色土ブロックを含む。全体に固く締まっている。

〈床・柱穴・施設〉基盤層で固く、やや凹凸がある。中央部分がやや窪み、かつ全体的には西側に傾斜し、比高最大値は15cmある。柱穴は床面レベルで7個検出された。P2～P5はほぼ一直線状に並ぶ。P1は北東隅に位置し、深さは55cmと群を抜いており、他と性格を異にするものかもしれない。柱穴の埋土には基盤層である礫混じりの黄褐色土を含む層の存在が特徴である。

〈炉〉住居の中央部と推定される位置に、炭化物および焼土粒を多く含む褐色土が分布する。締まりを欠き、長期間使用された炉とはいえない。

#### 遺物（第121図、写真図版171）

〈土器〉埋土から1840g出土した。そのほとんどが地文のみの小破片であり、特徴を有するものは少ない。木目状燃糸文、網目状燃糸文、組縄縄文土器片や、土師器の小破片も出土した。

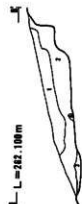
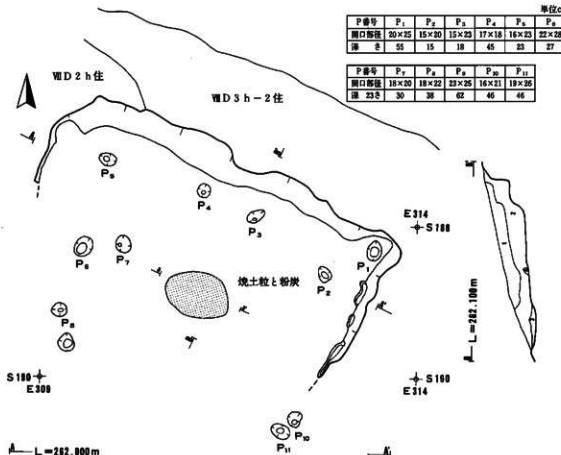
〈石器〉533は幅広の剝離が施され、1辺には使用痕が認められる。528の尖頭部の欠損はごく新しいもの（発掘時？）である。図示した他にUフレ1点、フレーク18点（うち6点は床面）が出土した。

時期 時期を特定する資料を欠くが、検出状況・埋土・出土遺物から縄文時代前期後葉から末葉と考えられる。

単位cm

P番号	P <sub>1</sub>	P <sub>2</sub>	P <sub>3</sub>	P <sub>4</sub>	P <sub>5</sub>	P <sub>6</sub>
開口形状	20×25	15×20	15×23	17×18	16×23	22×28
深	2	55	15	18	45	23

P番号	P <sub>7</sub>	P <sub>8</sub>	P <sub>9</sub>	P <sub>10</sub>	P <sub>11</sub>
開口形状	18×20	18×22	23×25	16×21	19×26
深	23	30	38	62	46



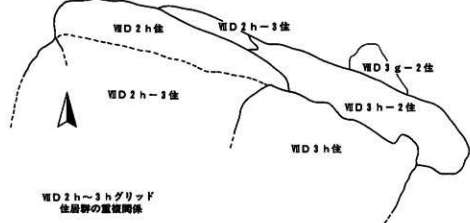
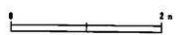
A—L=262.900m

A—L=262.100m



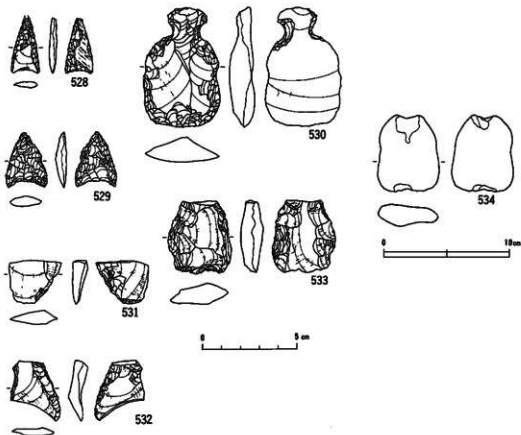
1. 10Y R% 褐色土 砂状、焼土粒を含む。
2. 10Y R% 褐色土 焼土、粉炭、焼土粒を含む。

- A—A' B—B'
1. 10Y R% 褐色土 しまりあり、炭化物を含む。
  2. 10Y R% 褐色土 ややしまりあり、炭化物、黄褐色土を含む。
  3. 10Y R% 褐色土 細くしまっている、炭化物を含む。
  4. 10Y R% 黄褐色土 やや軟らかい。
  5. 10Y R% 暗褐色土 しまりあり。
  6. 10Y R% 近い黄褐色土



WD 2 h ~ 3 h グリッド  
住居群の重複関係

第120図 WD 3 h 住居跡



番号	出土地点	層位	文様	地文	口径	底径	器高	器容	分類	写真
525	ⅧD3h住	Q1 埴土	口縁部を上方からの彫入、腹に口縁部をナシ、または丸み付いた線状彫入。						口縁部	Ⅷb 1 171
526	ⅧD3h住	埴土	縁部上線状彫入。						胴部した角等部分。	Ⅷb 6 171
527	ⅧD3b住	埴土	沈線(凹線)。口縁部縁部上線状工具による彫み。	■×L木目状彫入文。						Ⅷ7a 171

番号	出土地点	層位	器種	石質	産地	長さ	幅	厚さ	器容	分類	写真
528	ⅧD3h住	埴土	石鏃	粘板岩	北上山地	3.0	1.5	0.3	1.25	尖頭部の欠損は発掘時のものか、ごく新しいもの。	Ⅷb 1 171
529	ⅧD3h住	埴土	石鏃	硬質泥岩	宇石西部	2.9	2.3	0.6	2.90		Ⅷb 2 171
530	ⅧD3h住	埴土	石鏃	硬質泥岩	宇石西部	6.3	4.1	1.4	28.14		Ⅷb 2 171
531	ⅧD3b住	Q2 埴土	不定形石鏃	硬質泥岩	宇石西部	2.3	2.8	0.6	4.00	切斷面あり。刀部に線状彫入あり。	Ⅷa 1 171
532	ⅧD3b住	べルト埴土	不定形石鏃	硬質泥岩	宇石西部	3.2	2.6	0.4	3.93	切斷面あり。不整形。	Ⅷa 2 171
533	ⅧD3b住	Q3 灰土	不定形石鏃	硬質泥岩	宇石西部	3.7	3.3	1.1	15.13	尖頭部を6mm幅で加工。	Ⅷ 171
534	ⅧD3b住	Q3 灰土	石鏃	硬質質凝灰岩	北上山地	6.0	4.9	1.6	80		Ⅷ 171

第121図 ⅧD3h住層跡出土遺物



ⅦD3h-2住居跡 (遺構番号53)

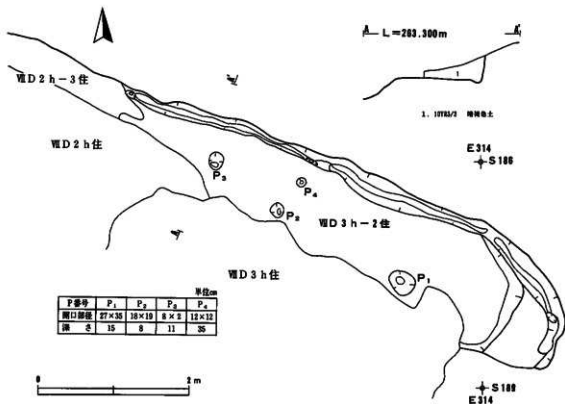
遺構 (第122図、写真図版38)

〈検出状況〉西尾根の南麓に位置する。ⅦD2h住居跡の精査で検出した。本住居の北壁は、当初はⅦD2h住居跡に帰属すると想定していたが、次の理由により別個の住居として認定した。すなわち、①ⅦD2h住居跡と本住居跡の床面レベルが10cm程度異なること、②ⅦD2h住居跡の周溝がその内側で帰結すること、③ⅦD2h住居跡のものと異なる周溝が検出されたことである。

新旧関係は、本住居のほうが古いと考えられる。それは、本住居の床面レベルが高いにもかかわらず重複部分の埋土はⅦD2h住居跡の埋土と同じであることによる。図式化すると次のようになる。

(新) ⅦD3h住居跡←ⅦD2h住居跡←ⅦD3h-2住居跡 (旧)

〈形状・規模〉詳細は不明であるが、長軸が等高線にはほぼ平行する楕円形状と推定される。規



第122図 ⅦD3h-2住居跡



とから、本住居はさらに重複している可能性がある。しかし、床面と考えられる明瞭な平坦部や明瞭な壁を確認できなかったため、稜線を図示して可能性を指摘するにとどめる。

〈規模・形状〉南側は不明であるが、方形と推定される。規模は、東西4.4 m、南北は残存値で2.8 mである。

〈壁・壁高〉基盤層である明褐色土で固く、外傾気味に立ち上がる。壁高は東壁23 cm、西壁5 cm、北壁13 cmである。

〈埋土〉暗褐色土～黒褐色土を主体とする。中位～下位の黒褐色土は固く締まっている。

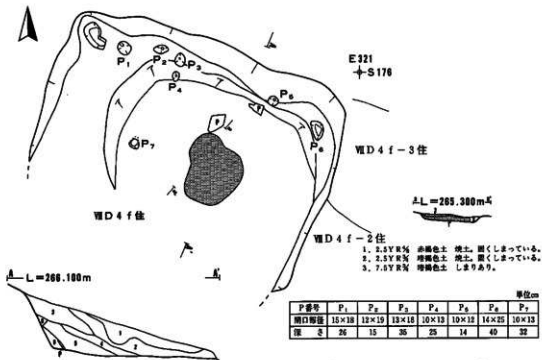
〈床・柱穴・施設〉北西側は基盤層で固く、南東側は重複するⅦD 4 f-2 住居跡の埋土を床としている。全体的に斜面に沿って傾斜する。西壁寄りには凹凸があり不明瞭だが段になっている可能性がある。柱穴は7個検出された。うち6個は斜面上方にあたる北壁寄りに位置する。規模は一定しないものの、特につけ離れた値を示すものもない。

〈炉〉地床炉を1基検出した。焼土は80×90 cmの不整な楕円形状に分布し、厚さは最大8 cmである。ⅦD 4 f-2 住居跡の埋土に形成されており、全体に強い焼成を受けている。

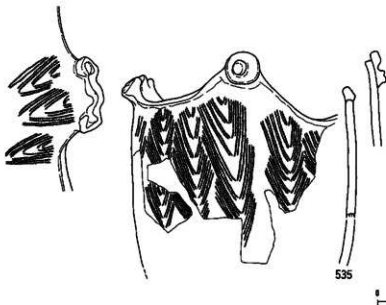
遺物 (第123～126図、写真図版171～174)

〈土器〉埋土からは5580 g出土した。535は北壁際床面から出土したものである。4つの頂部をもつ波状口縁で、口唇部はやや肥厚し平らになでられる。波状頂部には鋸歯状と円環状の裝飾体を、対向させてそれぞれ2個1対つけている。円環状裝飾体は盲孔で胴部とはほぼ等しい傾きで貼り付けられる。鋸歯状裝飾体の両端はやや円環状または渦巻き状となる。全体として器体に対して斜位につけられる。地文はL1段の木目状燃糸文である。外面はススの付着が著しい。536は網目状燃糸文を施文後に、無文の偏平な粘土紐を貼り付けている。537は燃糸文の上に縦位の綾絡文が施文される。538は平縁で、胴部は内穹気味に外傾するが、下半部は不明である。2段の縄を用いて器面全体に地文を施し、口縁部にはW字状に、口縁下には円環状または波状に、粘土紐を貼り付けて断面形が半円状の隆帯としている。W字状の隆帯の上には、半截竹管の内面をもちいて刺突文が連続して施文される。口唇部はW字状の両端をつなぐ部分にも同様の刺突が施される。口縁下の波状隆帯上には1段の縄の側面を押圧している。隆帯貼り付け後に、矢羽状・弧状・鋸歯状等の沈線文が施される。焼成良好で硬質である。539は弁状突起の両端が若干角状に突出している。543は口唇部右側が欠損しているが細めの棒状工具を用いて押圧したのか。

〈石器〉炉に隣接してのその東側から集中的に石織が出土した。形状・計測値が類似するばかりでなく、6点(552、554、556、557、560、563)は礫石産の流紋岩を用いている点も同一である。569はヒンジ・フラクチャーをおこした部分に粗い二次加工を疎らに施し、全体として均一性のある刃部を作り出している。図示した他にUフレ2点、フレーク33点(礫石

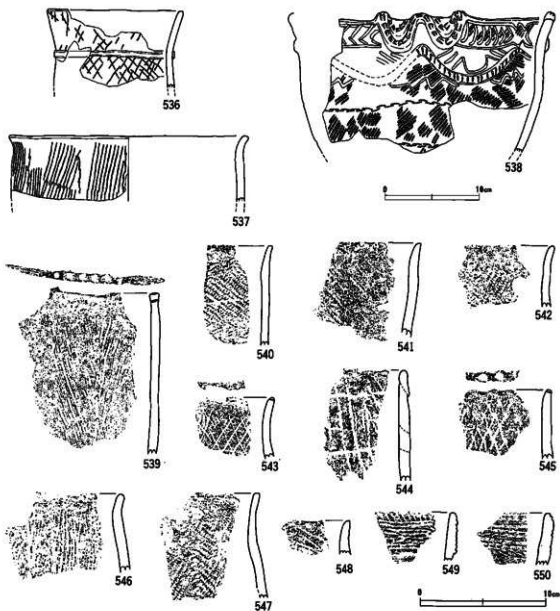


1. 7.5YR<sup>5/2</sup> 暗褐色土 しまりなし。明褐色土をブロック状に含む。
2. 7.5YR<sup>5/2</sup> 暗褐色土 中やしまりあり。炭化物を含む。
3. 7.5YR<sup>5/2</sup> 褐色土 しまりなし。炭化物を含む。
4. 7.5YR<sup>5/2</sup> 暗褐色土 しまりあり。炭化物を含む。
5. 10YR<sup>5/2</sup> 暗褐色土 固くしまっている。炭化物を含む。
6. 10YR<sup>5/2</sup> 暗褐色土 しまりなし。炭化物を含む。



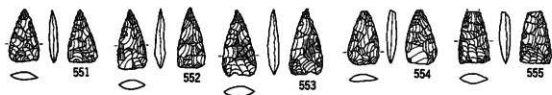
番号	出土地点	層位	文様	地文	口径	底径	高さ	番号	分類	写真
535	VID 4 f 住	床面	口縁部周縁状裝飾帯、内縁状裝飾帯	L本目状無文	24.8	-	(22.8)		日6a7	171

第123図 VID 4 f 住居跡・出土遺物(1)



番号	出土地点	層位	文様	地文	口径	底辺長	高さ	番号	分類	写真
536	ⅦD 4 f 住	埋土	口頸部除き	R 網目状燃糸文	14.6	-	(8.1)		Ⅱ6b-f	171
537	ⅦD 4 f 住	埋土		R 燃糸文, 縦位織綿文	25.4	-	(17.0)		Ⅱ6b	171
538	ⅦD 4 f 住	埋土	口頸部中央部から上縁部を除く。上中縁部は斜上織綿文, 中央部は縦位織綿文	L, R, 横位織綿文	28.4	-	(15.0)		Ⅱ7b	172
539	ⅦD 4 f 住	埋土直下層	波状口縁, 頂部弁状, 縦縞状圧痕。	r 2 糸目状燃糸文。				Ⅱ6a-f		172
540	ⅦD 4 f 住	床面	横位燃糸文。	直前段反折?				内面スス網布。		172
541	ⅦD 4 f 住	床面		L 2 糸目目状燃糸文					Ⅱ6	172
542	ⅦD 4 f 住	床面		L R × R L 縞。						172
543	ⅦD 4 f 住	埋土	口唇部割突 (工具不明)	L 網目状燃糸文。					Ⅱ6	172
544	ⅦD 4 f 住	埋土		L 燃糸文 (大めの器杯)。					Ⅱ6	172
545	ⅦD 4 f 住	埋土	口唇部縦縞状圧痕。	網目状燃糸文。					Ⅱ6	172
546	ⅦD 4 f 住	埋土		R 木目状燃糸文。					Ⅱ6	172
547	ⅦD 4 f 住	埋土		L R × R L 縞斜織取戻文。						171
548	ⅦD 4 f 住	埋土	R L 縦縞圧痕。						Ⅱ8a-f	172
549	ⅦD 4 f 住	埋土	口唇部割突工具による割れ目, 半筒型管字目状燃糸文・縦縞。						Ⅱ9d	171
550	ⅦD 4 f 住	埋土	半筒型管字目状燃糸文。						Ⅱ9d	172

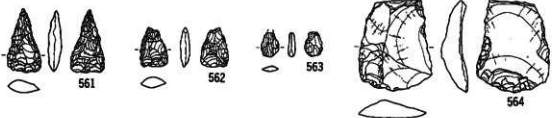
第124図 ⅦD 4 f 住居跡出土遺物(2)



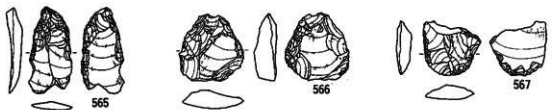
ターブル付着



560



564



565

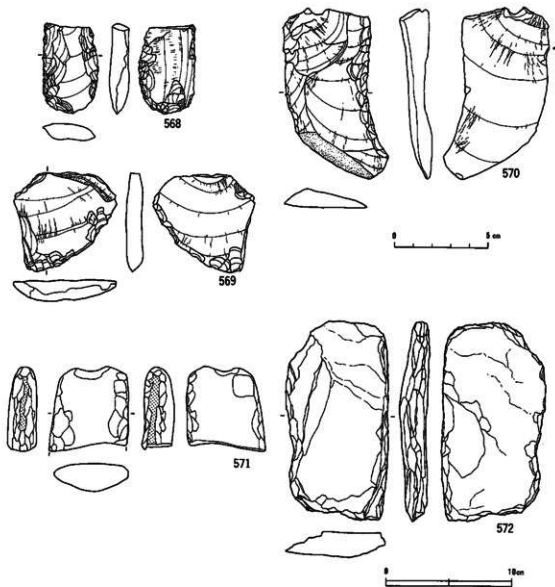
566

567



番号	出土地点	層位	器種	石質	産地	長さ	幅	厚さ	重量	備考	分類	写真
551	ⅦD4 f 住	床面	石鏃	泥質凝灰岩	宇石西部	2.8	1.6	0.5	1.86		1 2	172
552	ⅦD4 f 住	床面	石鏃	流紋岩	宇石	3.2	1.5	0.6	1.94		1 2	172
553	ⅦD4 f 住	床面	石鏃	泥質凝灰岩	宇石西部	3.5	1.8	0.6	2.86		1 2	172
554	ⅦD4 f 住	床面	石鏃	流紋岩	宇石西部	2.9	1.4	0.4	1.91		1 2	171
555	ⅦD4 f 住	床面	石鏃	硬質泥岩	宇石西部	2.7	1.6	0.6	2.22		1 2	172
556	ⅦD4 f 住	床面	石鏃	流紋岩	宇石	2.8	1.6	0.45	1.73		1 2	172
557	ⅦD4 f 住	床面	石鏃	流紋岩	宇石	2.7	1.5	0.4	1.47		1 2	172
558	ⅦD4 f 住	床面	石鏃	粘板岩	北上山地	3.0	1.6	0.5	1.82		1 2	172
559	ⅦD4 f 住	床面	石鏃	粘板岩	北上山地	3.6	1.7	0.4	2.01		1 2	172
560	ⅦD4 f 住	床面	石鏃	流紋岩	宇石西部 (2,3)	1.7	0.6		(1.74)		1 1	172
561	ⅦD4 f 住	床面	石鏃	硬質凝灰質泥岩	宇石西部	3.3	1.8	0.6	2.91		1 4	172
562	ⅦD4 f 住	床面	石鏃	泥質凝灰岩	宇石西部	2.1	1.5	0.5	0.70		1 2	173
563	ⅦD4 f 住	床面	石鏃	流紋岩	宇石西部	(1.3)	0.9	0.3	(0.30)			173
564	ⅦD4 f 住	埋土	不定形石鏃	硬質泥岩	宇石西部	4.8	3.8	0.9	16.80		1 b 2	173
565	ⅦD4 f 住	埋土	不定形石鏃	硬質泥岩	宇石西部	4.6	2.3	0.4	5.27		1 b 2	173
566	ⅦD4 f 住	埋土	不定形石鏃	硬質泥岩	宇石西部	3.5	3.4	1.0	12.48		1 c 1	173
567	ⅦD4 f 住	埋土	不定形石鏃	粘板岩	北上山地	2.9	3.0	0.8	8.11		1 b 4	173

第125図 ⅦD4 f 住層跡出土遺物(3)



番号	出土地点	層位	器種	石質	産地	長さ	幅	厚さ	重さ	備考	分類	写真
568	ⅧD 4 f 住	壤土	不定形石器	硬質泥岩	琴石西部	4.8	3.0	1.0	16.88	周縁全体二次加工。一部同層加工。	Ⅷ	173
569	ⅧD 4 f 住	壤土	不定形石器	硬質泥岩	琴石西部	5.2	5.4	1.0	33.49		Ⅷ a	173
570	ⅧD 4 f 住	壤土	不定形石器	硬質凝灰質泥岩	琴石西部	9.0	4.6	1.0	40.62	左片、磨竹片に一致(100μ、100μ?)	I b 3	173
571	ⅧD 4 f 住	壤土	扁圓形磨A部	ダイヤト質凝灰岩	琴石	(6.5)	6.1	2.3	( 136)	換り有り。	Ⅷb 3	173
572	ⅧD 4 f 住	壤土	扁圓形磨A部	凝灰質千枚岩	北上山地	15.7	8.2	2.0	390		Ⅷc 3	174

第126図 ⅧD 4 f 住層跡出土遺物(4)

産・硬質泥岩、礫石産・凝灰質泥岩他)埋土から出土している。

時期 床面出土土器から縄文前期後葉に属する。

#### ⅧD4f-2住居跡(遺構番号55)

遺構(第127図、写真図版40)

〈検出状況〉ⅧD4f住居跡の南西部床面で黒褐色土の落ち込みとして検出した。北東方向で、ⅧD4f-3住居跡と重複するが、新旧関係は不明である。南側は斜面のため流失している。

〈形状・規模〉詳細は不明であるが、方形ないし長軸が等高線にほぼ平行する長方形と推定される。規模は、長軸4.15m、短軸は残存値で2mである。

〈壁・壁高〉基盤層まで掘り込んで壁としており、緩やかに立ち上がる。壁高は東壁20cm、西壁15cm、北壁24cmである。

〈埋土〉黄褐色土を主体とする。

〈床・柱穴・施設〉基盤層である明黄褐色土で固い。やや中央部が窪む。柱穴が9個検出された。ほとんど斜面上方に当たる北壁際に位置する。P3、P4、P5、P8の底面はほぼ同じレベルを示す。

床面北西部で浅い土坑を検出した。円形の平面形で、規模は、径95×96cm深さ20cmである。埋土は上位は汚れた黄褐色土、下位は暗〜黒褐色土で構成される。層中に細かい炭化物が1〜3%程度混入する。いずれの層も締まりを欠く。土坑の埋土と住居の埋土がほぼ同じであることから、住居に伴うものと考えられる。土坑の東壁際に柱穴状土坑が検出された。埋土の観察から本土坑に先行するものと考えられる。

〈炉〉検出されなかった。

遺物(第127図、写真図版174)

〈土器〉埋土から573の他、網目状摺糸文、縦位の第1種結東羽状縄文の細片が出土した。574は円盤状土製品の破損品である。

〈石器〉575は尖頭部が意識的に作り出されている。尖頭器とすべきか。

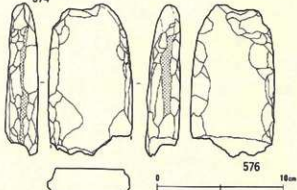
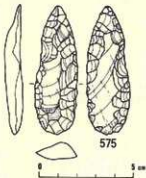
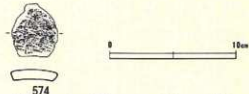
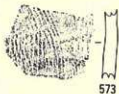
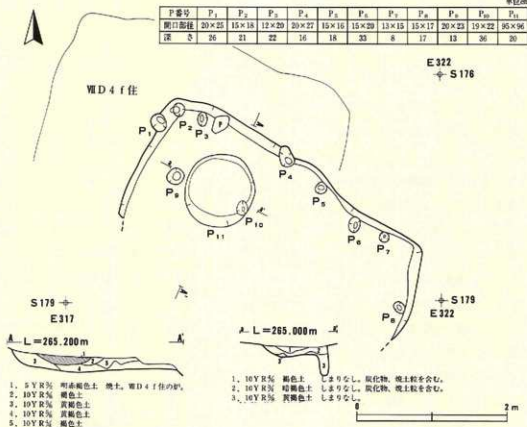
時期 特定する資料を欠くが、重複関係・出土遺物から縄文前期後葉と推定される。

#### ⅧD4f-3住居跡(遺構番号56)

遺構(第128図)

〈検出状況〉ⅧD4f住居跡の東壁からさらに東に延長する北壁を検出した。東側は倒木痕による擾乱を受けていて不明である。ⅧD4f住居跡と北壁と床面の一部を共有すると推定される。

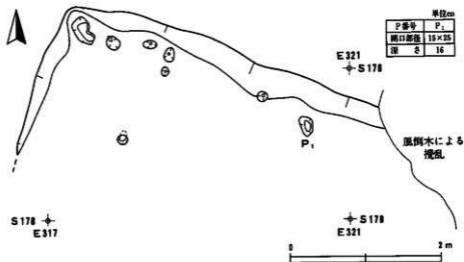




番号	出土地点	層土	文様	地文	口径	底部径	器高	備考	分類	写真
573	ⅦD 4 f-2 住	埋土		灰褐色文。					II 6	174
574	ⅦD 4 f-2 住	埋土						縦線記入。		175

番号	出土地点	層位	器種	石質	産地	長さ	幅	厚さ	重量	備考	分類	写真
575	ⅦD 4 f-2 住	埋土	不定形石器	綠泥岩	平石西郡	6.9	2.3	0.8	19.30		I e	174
576	ⅦD 4 f-2 住	柱穴内	龍骨形類A群	角礫石(安山岩)	奥羽山地	(12.1)	6.7	3.6	(320)	挟り有り。	III b 3	174

第127図 ⅦD 4 f-2 住居跡・出土遺物



第128図 VII D 4 f-3 住居跡

西側でVII D 4 f 住居跡に切られる。南側でVII D 4 f-2 住居跡と重複するが新旧関係は不明である。

〈形状・規模〉北壁のみ残存し不明である。壁高は56cmである。

〈壁・壁高〉基盤層である明褐色土で固い。

〈床・柱穴・施設〉VII D 4 f 住居跡と同じレベルで基盤層で固い。斜面に沿ってやや傾斜する。柱穴が2個検出された。柱穴の底面のレベルは等しい。

〈炉〉検出されなかった。

遺物 出土していない。

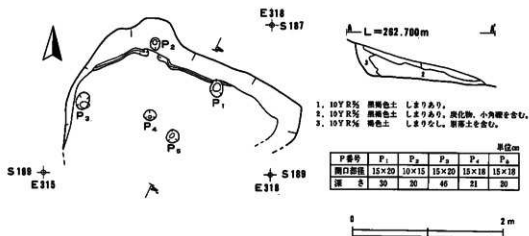
時期 特定する資料を欠くが、重複関係から縄文前期後葉と推定される。

#### VII D 4 h 住居跡 (遺構番号57)

遺構 (第129図、写真図版41・42)

〈検出状況〉西尾根の南麓に位置する。基盤層上面で黒褐色土の落ち込みとして検出した。南側は流失のため不明である。

東側はVII D 4 h-2 住居跡、VII D 4 h-4 住居跡と重複する。新旧関係は平面で確認し、VII D 4 h-2 住居跡、VII D 4 h-4 住居跡の方が新しい。VII D 4 h-4 住居跡はVII D 4 h-2 住



第129図 VII D 4 h 住居跡

居跡に先行する。

〈形状・規模〉北壁と西壁のみ残存し詳細は不明であるが、楕円形と推定される。規模は残存値で、南北2m東西2.8mである。

〈壁・壁高〉基盤層である黄褐色土で固く締まり、内湾気味に外傾する。壁高は、北壁47cm西壁10cmである。

〈埋土〉3層に分けられる。黒褐色土主体で、下層は長さ5～6mmの炭化物を含む。第3層は壁の崩落土を混入する。いずれも固く締まっている。

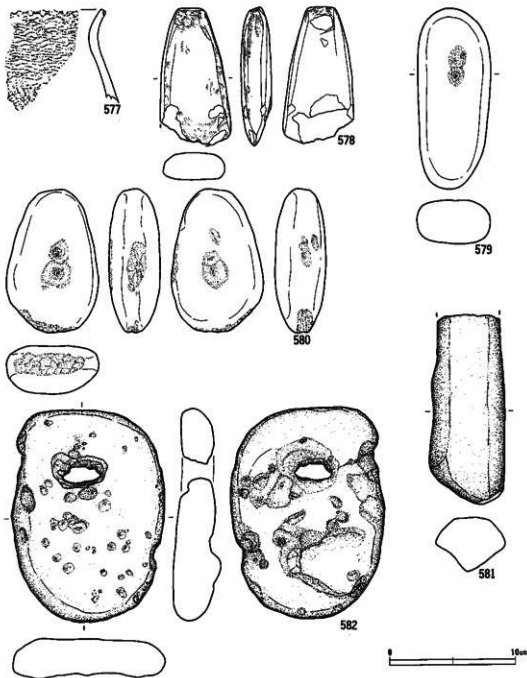
〈床・柱穴・施設〉基盤層で固く、斜面に沿ってやや傾斜する。柱穴は5個検出された。埋土は10YR2/3黒褐色土で固く締まる。規模はほぼ等しいが、底面のレベルには差異があり規則性はみられない。西壁際と北壁際の一部に周溝が検出された。埋土は柱穴と同じである。規模は幅10cm深さ2～5cmである。

〈炉〉検出されなかった。

遺物 (第130図、写真図版174)

〈土器〉床面からは撚糸文破片が1点出土したが、細片のため図化はできなかった。埋土からは240g出土した。577の他は、網目状撚糸文、木目状撚糸文の小片である。

〈石器〉578は裏面にザラつきを残している。表面と側面はよく研磨されている。580は扁平な碟の両平坦部に凹部が形成され、側辺にも敲打痕が観察される。582は床直上から出土した有孔の石である。表面に小さな凹みが多数観察されるが、使用痕とは認め難く、自然石と思わ



番号	出土地点	層位	文様		口縁	口縁部	器底	器身	分類	写真		
577	ⅧD 4 h 住	埴土	口縁部のみ目、口縁部重なる横線文。	R.L.状。					磁締わずかに含む。	13a, 174		
番号	出土地点	層位	品類	石質	産地	長さ	幅	厚さ	重さ	備考	分類	写真
578	ⅧD 4 h 住	埴土	磨製石斧	粘板岩	北上山地	19.0	5.6	2.1	0.29	両面にずラつきを帯び、裏面と裏面はよく磨製され、磨痕あり。	I	174
579	ⅧD 4 h 住	埴土	磨製器類(石鏃)	凝灰岩	北上山地	14.4	5.0	3.3	4.0	扁平な自然磨の平坦な一面に洗滌状の磨打痕。	II	174
580	ⅧD 4 h 住	埴土	磨製器類(石鏃)	凝灰質凝灰岩	北上山地	17.3	7.3	3.7	4.8	扁平な物の両方の平坦部に磨痕。裏面にも磨打痕。	Ⅷ	174
581	ⅧD 4 h 住		石押	洗灰岩	秋尾(長者郷)	26.9	5.9	4.2	0.40			174
582	ⅧD 4 h 住	埴土	有孔石	凝灰角礫岩	奥羽山地	16.7	12.3	2.2	0.8			174

第130図 ⅧD 4 h 住層跡 出土遺物

れる。奥羽山地産であり、住居に持ち込まれたものと考えられる。581も自然石であるが松尾（長者屋敷）産の流紋岩であり、同様に持ち込まれたものであろう。図示した他にフレーク2点が埋土から出土した。

時期 特定する資料を欠くが、重複関係・出土遺物から縄文前期後葉から末葉に属するものと推定される。

#### ⅦD4h-2住居跡（遺構番号58）

遺構（第131図、写真図版41）

〈検出状況〉西屋根の南麓に位置する。基盤層上面で、ⅦD4h住居跡の埋土プランを切る暗褐色土のプランとして検出した。本住居の床面下からはⅦD4h-3住居跡が検出されている。

〈規模・形状〉北壁と東壁の一部が残存し詳細は不明である。規模は残存値で、東西2.1m南北2.3mである。

〈壁・壁高〉ⅦD4h住居跡の埋土を壁とし、黒褐色土で固く締まる。ほぼ直立する。壁高は東壁20cm、北壁8cmである。

〈埋土〉3層に分けられる。下位ほど褐色土や明褐色土のブロックが混入する。

〈床・柱穴・施設〉黄褐色土と黒褐色土の混土層と、ⅦD4h-3住居跡の埋土である黒褐色土で構成され、固く締まっている。柱穴は検出されなかった。

〈炉〉本住居の床面のレベルで、本住居に伴うものと考えられる焼土を検出した。調査の手違いより北半部を掘りこんでしまった。5YR4/4にぶい赤褐色で固く締まり、厚さ3cmで断面形はレンズ状である。

遺物（第132図、写真図版175）

〈土器〉床面から766g、埋土から400g出土した。583は北西壁際床面から一括出土したものであるが上半部は不明である。584は木目状燃糸文としたが、燃糸文原体（絡糸体）の末端処理した部分の可能性もある。図示した他に埋土から網目状燃糸文、木目状燃糸文、組縄縄文の破片が出土した。

〈石器〉586は石鏃としたが、やや対称性を欠く。他にフレークが床面から1点、埋土から2点出土した。

時期 床面出土土器と重複関係から、縄文時代前期後葉から末葉に属するものと考えられる。

ⅦD4h-3住居跡（遺構番号59）

遺構（第131図、写真図版41）

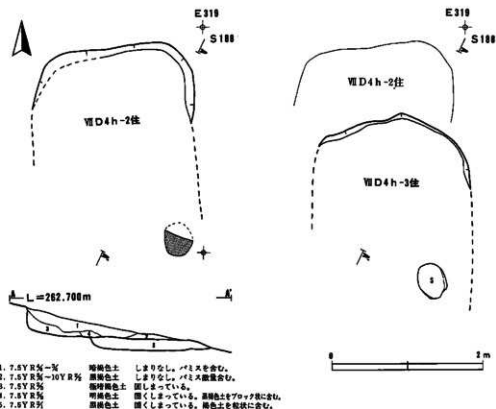
〈検出状況〉ⅦD4h-2住居跡の床面で黒褐色土の落ち込みとして、北壁のみを検出した。ⅦD4h-4住居跡と重複する。本住居は同住居の埋土の中に構築されており、同住居より新しい。これらを図式化するとつぎようになる。

（新）ⅦD4h-2住居跡←ⅦD4h-3住居跡←ⅦD4h-4住居跡（旧）

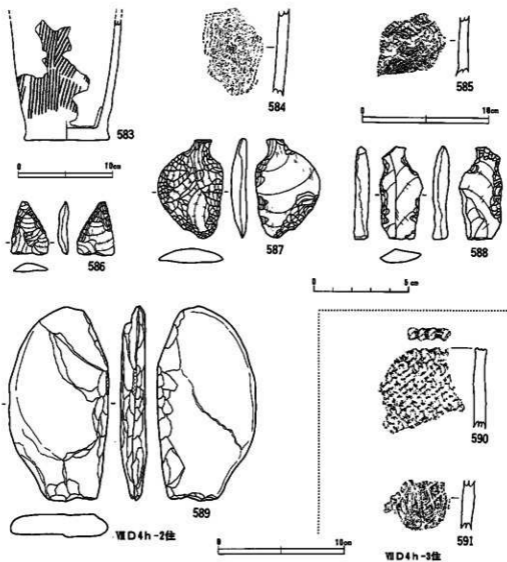
〈形状・規模〉残存状況が悪く不明である。規模は残存値で、2.1×2.2mである。

〈壁・壁高〉北壁のみ残存し、黄褐色土ブロックが混入する黒褐色土で固く、壁高13cmである。

〈埋土〉黒褐色土による単層で、固く締まり小角礫・粉炭・褐色土の細かいブロックをそれぞれ少量含む。



第131図 ⅦD4h-2・ⅦD4h-3住居跡



番号	出土地点	層位	文様	地文	口径	胴径	器高	器容	備考	分類	写真
583	VII D4h-2住	床面		及模赤文。	-	(9.0)	(12.7)			II 6	175
584	VII D4h-2住	床直上		L.木目状筋赤文。						II 6	175
585	VII D4h-2住	床直上		R.L.模。片断(イ)模位筋赤文。							175
586	VII D4h-2住	埴土		L.京羅垂刺。					編持遺入。	II 1 b	175
587	VII D4h-2住	埴土		L.網目状筋赤文。					内面スス付着。	II 6	175
589	VII D4h-2住	埴土									
590	VII D4h-3住	埴土									
591	VII D4h-3住	埴土									

番号	出土地点	層位	器種	石質	産地	長さ	幅	厚さ	器容	備考	分類	写真
586	VII D4h-2住	埴土	石匙	輪板岩	北上山地	2.8	2.0	0.4	2.54			175
587	VII D4h-2住	埴土	石匙	浅黄泥岩	宇石西部	5.3	3.4	0.9	12.97		I a 2	175
588	VII D4h-2住	埴土	石匙	硬質泥岩	宇石西部	4.0	3.3	0.9	7.52		I b 1	175
589	VII D4h-2住	埴土	飯厨器類A群	硬砂岩	北上山地	15.4	7.9	1.8	306		III c 2	175

第132図 VII D4h-2・VII D4h-3住居跡出土遺物

〈床・柱穴・施設〉ⅦD 4 h-4 住居跡と同じレベルで一部を共有する。基盤層である黄褐色土で固い。柱穴は検出されなかった。床面に偏平な重角礫が検出された。規模は径35×45cmで厚さは8cmである。ⅦD 4 h-4 住居跡の焼土の上ののることから、本住居に帰属するものと考えた。

〈伊〉床面レベルで焼土を検出しているが、ⅦD 4 h-4 住居跡に帰属するものと考えられた。それは、ⅦD 4 h-4 住居跡で検出された複数の焼土の位置に規則性がありそれに合致すること、焼土と偏平な重角礫とは時期差があると考えられること、の2点による。

遺物 (第132図、写真図版175)

〈土器〉埋土から 590 と木目状捺糸文、網目状捺糸文、捺糸文、単節斜縄文の細片 (いずれも地文のみ)、床面から 591 と木目状捺糸文の細片が出土した。

〈石器〉剥片が4点出土した。うち1点には微小剝離が認められたが製品とは考えにくい。ほかはフレークである。

時期 時期を特定する資料を欠くが、検出状況・重複関係・出土遺物から縄文時代前期後葉から末葉に属すると推定される。

#### ⅦD 4 h-4 住居跡 (遺構番号60)

遺構 (第133図、写真図版42)

〈検出状況〉ⅦD 4 h-2 住居跡の床面の下から検出された。南側は斜面のため流失している。

ⅦD 4 h-3 住居跡と重複する。同住居の北壁は本住居の埋土中にあり、本住居が同住居に先行する。また、北壁の一部では、ⅦD 5 i-3 土坑に切られ、ⅦD 5 i 住居跡によって北壁の一部と東壁を削平されていて原形をとどめず、範囲を確定することも困難である。ここでは残存した周溝によって東端とした。西側ではⅦD 4 h 住居跡の埋土を切っており、本住居の方が新しい。新旧関係を図式化すると次のようになる。

(新) ⅦD 4 h-2 住居跡 ← ⅦD 4 h-3 住居跡 (旧)  
ⅦD 5 i 住居跡 ← ⅦD 4 h-4 住居跡 ← ⅦD 4 h 住居跡  
ⅦD 5 i-3 土坑

〈形状・規模〉南側は不明であるが、長軸が等高線にはほぼ平行する長方形と推定される。規模は、長軸6.3m、短軸は残存値で2.6mである。

〈壁・壁高〉北壁は基盤層である黄褐色土、西壁はⅦD 4 h 住居の埋土を壁とし、いずれも固く締まっており、外傾する。壁高は北壁30cm、西壁15cmである。

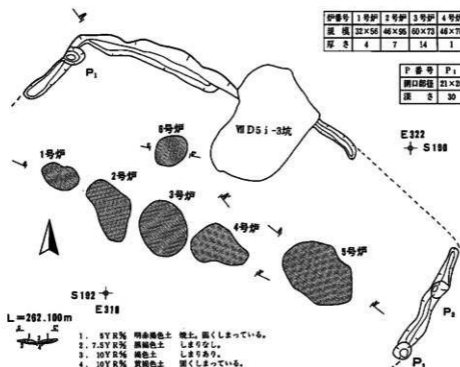
〈床・柱穴・施設〉基盤層である黄褐色土で固く、ⅦD 4 h-3 住居の床面とレベルはほぼ等しい。周溝が西壁際と北壁際および東側の一部に巡る。規模は、幅10～35cm深さ5～7cmで底面



単位cm

炉番号	1号炉	2号炉	3号炉	4号炉	5号炉	6号炉
縦横	22×56	46×96	60×72	46×78	72×106	38×48
厚さ	4	7	14	1	12	14

P番号	P <sub>1</sub>	P <sub>2</sub>	P <sub>3</sub>
開口部径	21×26	21×24	20×25
深さ	30	36	55



L=262.100m



1. 5Y R% 明赤褐色土 焼土、固くしまっている。
2. 7.5Y R% 黄褐色土 しまりなし。
3. 10Y R% 褐色土 しまりあり。
4. 10Y R% 黄褐色土 固くしまっている。

L=262.100m



1. 7.5Y R% 黄褐色土 しまりあり。炭化物を含む。
2. 7.5Y R% 暗褐色土 固くしまっている。炭化物を含む。小角礫を含む。
3. 7.5Y R% 褐色土 固くしまっている。炭化物を含む。
4. 10Y R% 褐色土 しまりあり。炭化物を含む。小角礫を含む。

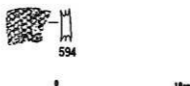


1. 5Y R% 明赤褐色土 焼土、固くしまっている。
2. 10Y R% 黄褐色土 しまりあり。
3. 10Y R% 褐色土 しまりあり。
4. 10Y R% 褐色土 固くしまっている。炭化物を含む。
5. 7.5Y R% 褐色土 固くしまっている。
6. 7.5Y R% 明褐色土 固くしまっている。炭化物を含む。
7. 5Y R% 赤褐色土 しまりあり。炭化物を含む。
8. 7.5Y R% 褐色土 しまりなし。焼土を含む。
9. 10Y R% 暗褐色土 しまりなし。
10. 7.5Y R% 明褐色土 固くしまっている。若干焼成を受けている。

L=262.100m



1. 5Y R% 明赤褐色土 焼土、固くしまっている。
2. 5Y R% 赤褐色土 しまりあり。炭化物を含む。
3. 5Y R% 黄褐色土 しまりあり。
4. 7.5Y R% 褐色土 しまりあり。
5. 10Y R% 褐色土 固くしまっている。
6. 10Y R% 暗褐色土 固くしまっている。炭化物を含む。



番号	出土地点	層位	文様	地文	口径	底部径	器高	備考	分類	写真	
592	竪D4h-4住	埴土								II 6	175
593	竪D4h-4住	埴土	埴帯上沈澱(円錐)と節線状圧痕。								175
594	竪D4h-4住	埴土		粗砂。						II 2	175

第139図 竪D4h-4住居跡・出土遺物

は凹凸がある。柱穴は3個検出されたが、全て周溝内にある。径は20数cmとほぼ等しく、深さは全て30cm以上ある。

〈炉〉地床炉が6基検出された。うち3基はⅦD4h-3住居跡の床面ですべてに検出されていたものである。6基のうち5基までが長軸線上に一直列に並びことから本住居に帰属すると考えた。残る1基はやや北に寄る。ⅦD4h-3住居跡に帰属すると仮定すると、あまりに東壁に寄り過ぎ、炉としての機能が果たせたかどうか疑問であることから、本住居に伴うものと考えて図化した。レベルは6基ともほぼ等しい。長軸線上西側から東側にそれぞれ1号炉から5号炉とし、2・3号炉の北に位置するものを6号炉とする。3、4、5号炉は特に強い焼成を受けており、断面形レンズ状で厚さは10～14cm、固く縮まっている。

	1号炉	2号炉	3号炉	4号炉	5号炉	6号炉	
分 布	32×53	46×95	60×73	46×78	72×104	38×48	
厚 さ	4	7	14	14	10	4	(単位cm)

遺物 (第133図、写真図版175)

〈土器〉埋土から605g出土した。図示した他、木目状燃糸文10点、網目状燃糸文3点、組縄縄文(いずれも地文のみ)が出土した。

時期 特定する資料を欠くが、重複関係・出土遺物から縄文時代前期後葉から末葉に属すると推定される。

ⅦD4i住居跡 (遺構番号61)

遺構 (第143図、写真図版43)

〈検出状況〉西尾根の南麓に位置する。耕作土を除去した基盤層上面で暗褐色土の落ち込みとして検出した。大部分が耕作により削平され、北壁のみ確認された。

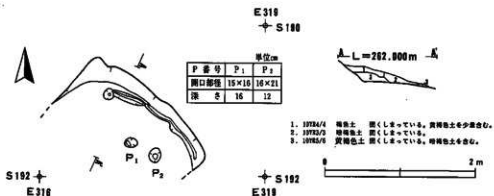
北側でⅦD4h-4住居跡と重複するが、新旧関係は確認できなかった。

〈形状・規模〉不明である。規模は残存値で、東西2m南北1mである。

〈壁・壁高〉基盤層である黄褐色土で固く縮まり、緩やかに外傾する。壁高は25cmである。

〈埋土〉3層に分けられる。上位は褐色土と暗褐色土で壁際は崩落土である黄褐色土でいずれも固く縮まる。

〈床・柱穴・施設〉基盤層である黄褐色土で固く、斜面に沿ってやや傾斜する。柱穴は2個検



第134図 VII D 4 i 住居跡

出された。規模はほぼ等しい。北壁際に周溝が検出された。規模は幅10～15cm、深さ7cm程度である。埋土は10Y R2/2黒褐色土で固く締まっている。

<伊>検出されなかった。

遺物 本遺構に伴うとして取り上げられた遺物はない。

時期 特定する資料を欠き不明であるが、検出状況・埋土から推して縄文前期に属するものと推定される。

#### VII D 5 g-2 住居跡 (遺構番号62)

遺構 (第135図、写真図版43)

<検出状況>西尾根の南斜面中腹に位置する。VII D 6 g-2 住居跡の床面精査で、同住居に先行する周溝と壁を検出し、住居跡として認定した。南側は道路により削刺されている。

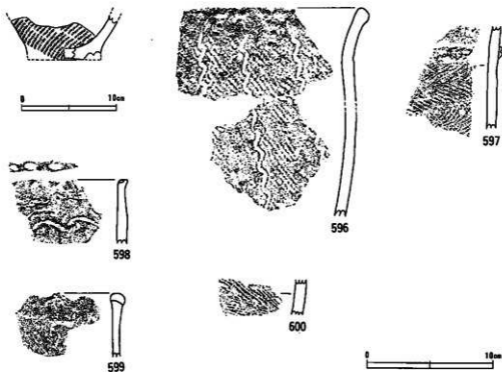
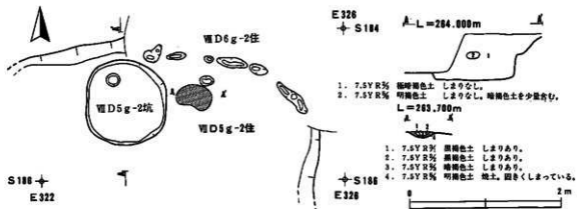
VII D 5 g-2 土坑は、本住居およびVII D 6 g-2 住居跡と重複する。埋土断面観察により同土坑が最も新しいと考えられる。これらを図式化すると次のようになる。

(新) VII D 5 g-2 土坑 ← VII D 6 g-2 住居跡 ← VII D 5 g-2 住居跡 (旧)

<規模・形状>詳細は不明であるが、長軸が等高線にはほぼ平行する長丸または楕円形と推定される。規模は残存値で、長軸4.2m短軸1.35mである。

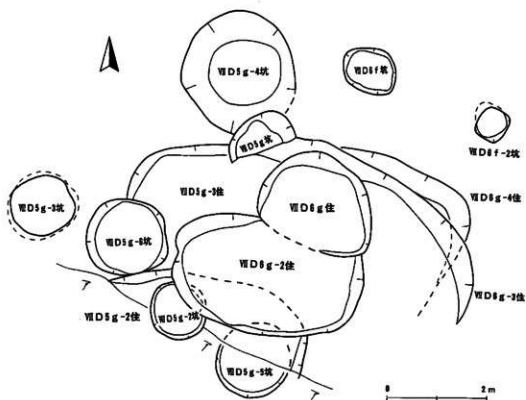
<壁・壁高>再堆積層である褐色土で固く締まっていてやや外傾する。壁高は東壁20cm、北壁34cmである。

<床・柱穴・施設>固くしまった褐色土で、細かな凹凸があるが全体的にはほぼ水平である。柱穴は検出されなかった。北壁の推定ラインから周溝と思われる断続的な窪みが検出された。



番号	出土地点	層位	文様	地文	口徑	底形	高さ	器宇	分類	写真
596	W D6 g-2住	埋土		R線。	—	(7.A)	(4.6)	織織器入。		175
596	W D5 g-2住	埋土		L R線。片縁の縦位綾持文。						175
597	W D5 g-2住	埋土	陸帯上下方向からの竹管刺突。	L R × R L 部 1 部 結束糸状綾持文。						175
598	W D5 g-2住	埋土	口縁部織紋。口縁部-器外縁に透ける。織織綾文。							II 4 b 才 175
599	W D5 g-2住	埋土	やや肥厚する山形口縁。	R 網目状綾持文。						II 4 a 175
600	W D5 g-2住	埋土		横位の木目状綾持文。						175

第135図 W D5 g-2住居跡・出土遺物



第136図 WD5g~6g グリッド遺構群重複関係

深さは3~13cmと一定しないことと、WD6g-2住居跡との重複部分のみから検出していることから、周溝でない可能性もありうる。

<炉>地床炉を1基検出した。焼土は23×49cmの範囲に分布し、厚さは4cmである。中央部は木根により攪乱されている。

遺物 (第135図、写真図版175)

<土器>埋土から2946g出土した。595の断面は細孔による間隙が多く比重が小さい。内面は急な曲線的カーブを描く。597の口縁部は無文である。599は3山状の肥厚する弁状突起部を有する破片である。600は木目状捺糸文の横位回転であるが、本遺跡では希有な例である。他に網目状捺糸文の破片が出土している。

<石器>フレーク2点が埋土から出土したのみで、製品はない。

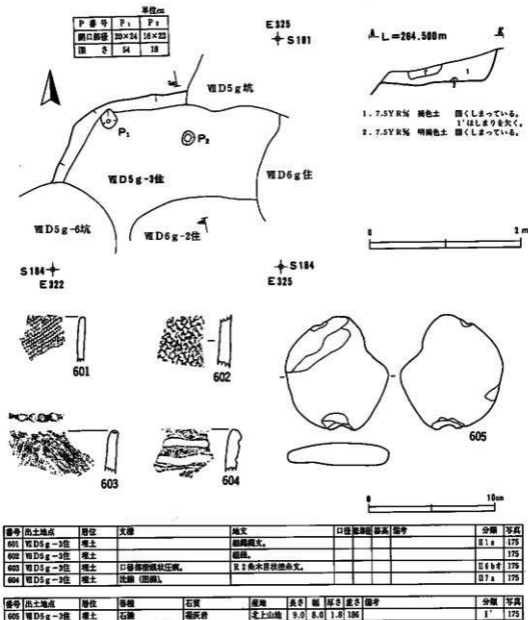
時期 時期を特定する資料を欠くが、検出状況・出土遺物から縄文時代前期後葉から末葉に属すると考えられる。

ⅧD5g-3住居跡（遺構番号63）

遺構（第137図、写真図版44）

〈検出状況〉ⅧD6g住居跡の西壁の精査で、さらに西に延びる壁を確認し、住居跡として認定した。

東側でⅧD6g住居跡と重複し、本住居の埋土中にⅧD6g住居跡の西壁が構築されること



第137図 ⅧD5g-3住居跡・出土遺物

から、本住居の方が古い。北側でⅦD 5 g 土坑、南西側でⅦD 5 g-6 土坑と重複する。ⅦD 5 g 土坑は本住居の北壁でその断面を確認したもので、本住居の方が新しい。ⅦD 5 g-6 土坑との関係では、同土坑の埋土観察から本住居の方が古い。これを図式化すると次のようになる。

(新) ⅦD 6 g 住居跡←ⅦD 5 g-3 住居跡←ⅦD 5 g 土坑 (旧)

#### ⅦD 5 g-6 土坑

本住居とⅦD 6 g-4 住居跡は北壁のラインがほぼ一致し、床面のレベルも同様であることから、この2つの住居は同一のものである可能性がある。ここでは別個に検出されたことと、推定の域を出ないことから可能性の指摘にとどめ、それぞれ別個に記載する。仮に同一ものとするれば規模が長軸6.7m短軸残存値で2mの隅丸長方形となると考えられる。

〈形状・規模〉残存状況が悪く不明であるが、長軸が等高線にほぼ平行する楕円形と推定される。規模は残存値で、1.5×2.7mである。

〈壁・壁高〉基壁層で固く締まっており、やや外傾する。壁高は西壁12cm、北壁28cmである。

〈埋土〉固く締まる褐色土を主体とする。

〈床・柱穴・施設〉基壁層で固く、ほぼ平坦である。柱穴は2基検出された。P1は北西隅に位置し深さは54cmであり、主柱穴の可能性がある。

〈炉〉検出されなかった。

遺物 (第137図、写真図版175・176)

〈土器〉埋土から863 g出土した。603は、口唇部に指頭圧痕を施し細波状口縁状を呈する。604の沈線施文はやや雑な印象である。

〈石器〉605の1点のみの出土である。

時期 特定する資料を欠くが、重複関係・出土遺物から縄文時代前期後葉から末葉に属すると考えられる。

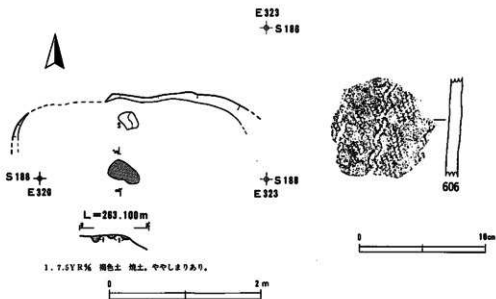
#### ⅦD 5 h 住居跡 (遺構番号64)

遺構 (第138図、写真図版44)

〈検出状況〉西尾根南麓旧道路下、黒褐色土層中に検出した。平面的なプランとしては確認できず、固さから壁を検出した。南側は耕作により削平されている。北壁の一部は確認できなかった。

〈形状・規模〉詳細は不明であるが、長軸が等高線にほぼ平行する楕円形を基調とするものと推定される。規模は、長軸3m短軸は残存値で1.15mである。

〈壁・壁高〉黒褐色土で堅く締まり、ほぼ直立する。壁高は北壁で14cmである。



番号	出土地点	層位	文様	地文	口徑	底径	高さ	備考	分類	写真
606	ⅧD5h住	埋土下位		L.R網、片結び縦位織柄文。						176

第138図 ⅧD5h住居跡・出土遺物

<床・柱穴・施設>黒褐色土である。埋土と床面との識別は固さによる。柱穴は検出されなかった。

<炉>地床炉が1基検出された。焼土は25×14cmの不整な楕円形状に分布し、厚さは最大10cmである。

遺物（第138図、写真図版176）

<土器>図示した他に組縄縄文、無文の破片など250g出土した。

<石器>埋土からフレーク3点が出土したが、製品はない。

時期 特定する資料を欠き不明であるが、検出状況・出土遺物から縄文時代前期後葉から末葉と推定される。

ⅧD5i住居跡（遺構番号65）

遺構（第139図、写真図版95）

<検出状況>西尾根の南麓に位置する。耕作土を除去し基盤層上面で黒褐色土の落ち込みとして検出した。西側でⅧD4h-4住居跡を切る。床下にはⅧD5i-2住居跡とⅧD5i-3



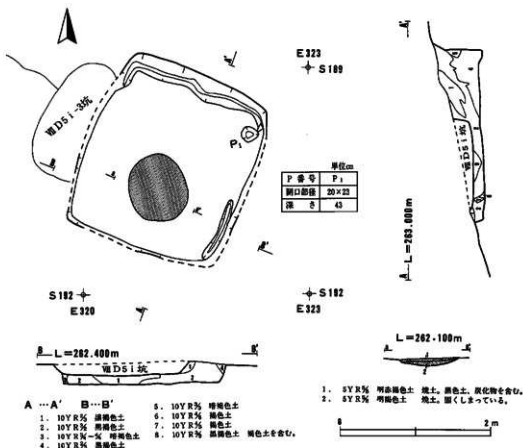
住居跡があり、本住居の埋土中にⅧD5 i 土坑がつくられる。重複が多いことから壁を確認できず、北壁を除き掘りすぎってしまった。埋土観察用ベルトで立ち上がりを確認して、範囲をとらえている。新旧関係を図式化すると次のようになる。

(新) ⅧD5 i 土坑 ← ⅧD5 i 住居跡 ← ⅧD5 i-2 住居跡 ← ⅧD5 i-3 住居跡 (旧)  
 ← ⅧD5 i-3 土坑 ← ⅧD4 h-4 住居跡

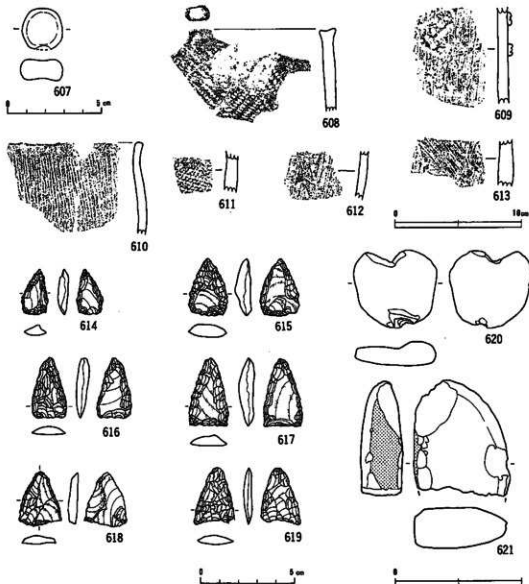
<形状・規模> やや南北に長い方形である。規模は、東西 2.3m 南北 2.5m である。

<壁・壁高> 北壁は基礎層である黄褐色土で固く締まる。ⅧD5 i-3 土坑と重複する西壁部分では、暗褐色土を壁土として厚さ 7~8cm 程度貼っているように観察された。壁高は東壁 26cm、西壁 27cm、南壁 11cm、北壁 55cm である。

<埋土> 黒褐色土を主体とし、自然堆積の様相を示す。埋土上部はⅧD5 i 土坑に切られる。



第139図 ⅧD5 i 住居跡



番号	出土地点	層位	文様	地文	長さ	幅	厚さ	備考	分類	写真
607	ⅧD51住	埴土	土製品(無文)		2.2	2.3	1.1			176
608	ⅧD51住	床面上	波状口縁、裏面やや凹む葉巻体。	R.L.					II6a?	176
609	ⅧD51住	床面上	縦位扇歯状胎土に竹管刺突。	R.L.					II6b?	176
610	ⅧD51住	床面上		L.燃承文。					II6c?	176
611	ⅧD51住	床面上		結晶。				縦線わずかに凸入	IIa	176
612	ⅧD51住	床面上		R 2条木目状燃承文。					II6	176
613	ⅧD51住	床面上		L+Rの木目状燃承文。				厚平。	II6	176

番号	出土地点	層位	母地	石質	産地	長さ	幅	厚さ	重さ	備考	分類	写真
614	ⅧD51住	埴土	石脈	硬質泥岩	宇石西部	2.3	1.4	0.6	1.41		I 2	176
615	ⅧD51住	Q1礫土	石脈	硬質凝灰質泥岩	宇石西部	3.0	2.0	0.7	4.10		I 2	176
616	ⅧD51住	Q1礫土	石脈	粘板岩	北上山地	3.2	1.8	0.6	3.06		I 2	176
617	ⅧD51住	埴土	石脈	硬質泥岩	宇石西部	3.6	2.1	0.8	5.03	先端部厚みがある。	I 2	176
618	ⅧD51住	Q1礫土	不定形石脈	硬質泥岩	宇石西部	2.8	2.3	0.5	3.00		Ⅷ	176
619	ⅧD51住	Q1礫土	石脈	粘板岩	北上山地	3.0	2.1	0.5	2.16		IIb?	176
620	ⅧD51住	埴土(へら)	石脈	砂質粘板岩	北上山地	6.1	6.8	1.5	100		I	176
621	ⅧD51住	埴土	陸前巻層A群	阿保石安山岩	奥羽山地 (B.4)	7.5	3.0	3.00	欠損品。		II a 1	176

第140図 ⅧD51住層跡出土遺物

〈床・柱穴・施設〉基盤層である黄褐色土で固く、ほぼ水平で平坦である。柱穴は北東隅に1個検出された。規模は径20cm深さ42cmである。周溝が北壁際および東壁際の一部に巡る。幅10～15cm深さ4～6cmである。

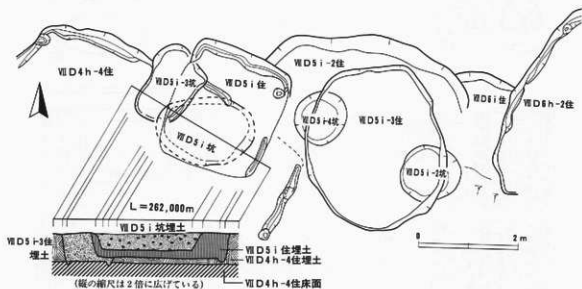
〈炉〉中央よりやや南に地床炉を1基検出した。焼土は84×86cmの不整な円形に分布し、厚さは最大10cmで、断面形はレンズ状である。上部には細かな炭化物がのりやや軟質であるが、下位はすこぶる固い。

遺物 (第140図、写真図版176)

〈土器〉床直上から330g、埋土から2657g出土した。607は本遺跡では唯一の円形の土製品である。608は弁状突起が縮小化したような突起を有する。609は隆帯が剥落して一部のみ残存しているが、円形竹管が刺突された鋸歯状隆帯が垂下している。他に埋土から、木目状摺糸文、摺糸文、縦位綾絡文、重層する横位綾絡文の破片が出土した。

〈石器〉614は石鏃としたが、裏面の加工は未製品の印象がある。617の尖頭部は厚みがありやや鈍い。図示した他にUフレ3点(うち床面1点)、フレック35点(同7点)が出土している。

時期 重複関係と床直上破片資料から、縄文時代前期後葉に属するものと推定される。



第141図 VII D4h～VII D5i グリッド遺構群重複関係

#### ⅧD5i-2住居跡 (遺構番号66)

遺構 (第142図、写真図版46)

<検出状況>西尾根の南麓旧道路下斜面に位置する。基盤層上面で黒褐色土の落ち込みとして検出した。南側は斜面のため流失している。

西壁はⅧD5i住居跡に切られる。本住居の床下からⅧD5i-3住居跡が検出されている。東側でⅧD6i住居跡と重複するが、同住居との新旧関係は不明である。

<規模・形状>詳細は不明であるが、不整形と推定される。規模は残存値で、3.2×4.25mである。

<壁・壁高>基盤層で固く締まっており、外傾する。壁高は西壁23cm、北壁37cmである。

<埋土>黒褐色土を主体とし、上位には木根による攪乱がある。壁際には壁の崩落土が混入する。

<床・柱穴・施設>ⅧD5i-3住居跡の埋土中にあり、固く締まっている。径5mmの粒状の炭化物を含んでいる。検出されなかった。

<炉>地床炉を1基検出した。焼土は48×60cmの楕円形の範囲に分布し、厚さは3cmである。中央部は木根により攪乱されている。

遺物 (第142図、写真図版176)

<土器>床面から木目状捺糸文の破片102g、埋土から網目状捺糸文、木目状捺糸文の破片390gが出土した。地文のみの小片のため図化は割愛した。

<石器>622の他、フレーク13点が埋土から出土した。

時期 特定する資料を欠くが、検出状況・重複関係から縄文時代後葉に属すると推定される。

#### ⅧD5i-3住居跡 (遺構番号67)

遺構 (第143図、写真図版47)

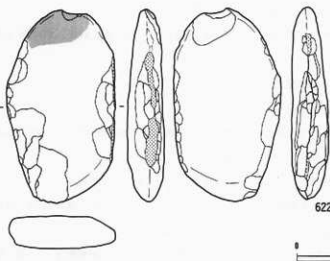
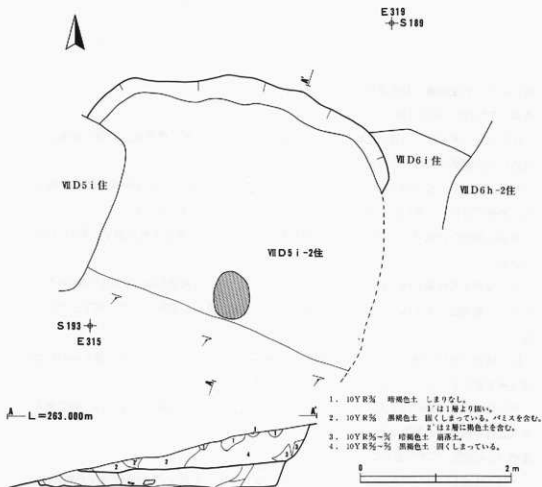
<検出状況>ⅧD5i-2住居跡の床面下から黒褐色土の落ち込みとして検出された。本住居の床面下からは、ⅧD5i-2土坑が検出されている。

<形状・規模>楕円形に近い不整形で、短軸2.8m長軸3.2mである。

<壁・壁高>基盤層である黄褐色土で固く締まっている。壁高は、東壁20cm、西壁10cm、南壁4cm、北壁17cmである。

<埋土>黒褐色土を主体とし、壁から40cm程内側には暗褐色土が堆積する。固く締まり、全体に炭化物を粒状に含む。

<床・柱穴・施設>基盤層で固く、ほぼ平坦である。南壁よりは8~10cm程度高い平坦部がある。柱穴は2個検出された。いずれも北壁際に位置し、規模はほぼ等しい。埋土は締まりを欠

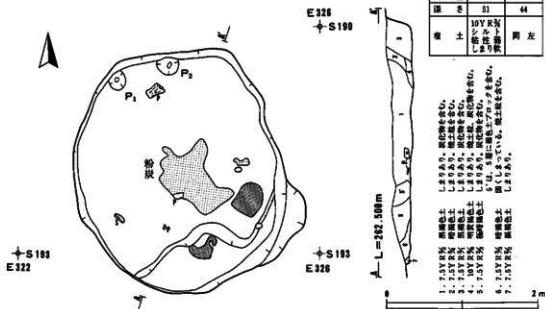


番号	出土地点	層位	器種	石質	産地	長さ	幅	厚さ	重さ	備考	分類	写真
622	VII D5 i-2 住	埋土上位	磁器器類A群	硬砂岩	北上山地	15.2	8.6	2.5	490	挟り有り。テール付着。	III b 2	176

第142図 VII D5 i-2住居跡・出土遺物

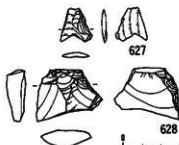
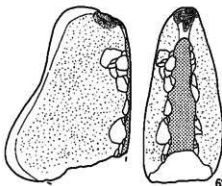
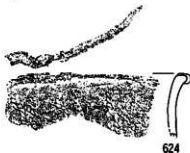
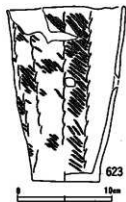
単位cm

P 番号	P <sub>1</sub>	P <sub>2</sub>
開口部径	30×26	23×26
深さ	51	44
層土	10YR系 L土質 L土質	黄 土



1. 7.5YR系 暗褐色土  
2. 7.5YR系 暗褐色土  
3. 7.5YR系 暗褐色土  
4. 10YR系 暗褐色土  
5. 7.5YR系 暗褐色土  
6. 7.5YR系 暗褐色土  
7. 7.5YR系 暗褐色土

1. 灰層を中心。  
2. 灰層を中心。  
3. 灰層を中心。  
4. 灰層を中心。  
5. 灰層を中心。  
6. 灰層を中心。  
7. 灰層を中心。



627・628

番号	出土地点	層位	文様	地文	口径	底部径	高さ	備考	分類	写真
623	ⅧD5i-3住	床直上		L.R縞。縦位線跡文。	13.6	7.2	18.7		Ⅷ66#	177
624	ⅧD5i-3住	埋土		L.R縞。片結び縦位線跡文。					Ⅷ66#	177
625	ⅧD5i-3住	Q4埋土		輪郭上に筒状工具による斜め方向からの削文。						177
626	ⅧD5i-3住	埋土		R縞赤文。						177

番号	出土地点	層位	砂物	石質	産地	長さ	幅	厚さ	重さ	備考	分類	写真
627	ⅧD5i-3住		石鉄	硬質泥岩	宇石百箇	1.8	1.7	0.2	0.38		Ⅷa2	177
628	ⅧD5i-3住	Q4埋土	不定形石砂	硬質泥岩	宇石百箇	2.7	3.5	1.0	8.89	両面磨削	Ⅷa1	177
629	ⅧD5i-3住	床直上	粘岩器類A群	阿羽石安山岩	奥羽山地	(12.7)	1.6	5.5	(940)	+結石。平持型2重。		177

第143図 ⅧD5i-3住層跡・出土遺物

く10YR3/4暗褐色土である。

〈炉〉焼土は3箇所検出された。断面観察では、厚さ2cm程度で発色も淡いもので、一定期間同一場所で火を使用した痕跡とはいえない。中央部には細炭・粉炭が分布する。樹種はクリとケヤキである。

遺物 (第143図、写真図版177)

〈土器〉床面から623他88g、埋土からは1272g出土している。623は北側の床面に横倒しの状態で出土したものである。縄端を結束した2段の縄で器面全体に施文している。胴部のほぼ中央部に孔が穿たれるが、焼成後のものである。内側がより剥がれていることから、外側から力が加えられたものと考えられる。全体に薄手で内面の剥落が激しい。624は口唇部を平坦になて、やはり平坦な粘土紐を鋸歯状に貼り付けたものである。625は横位隆帯とそこから左右両側に斜走する隆帯からなるが、先端がやや三角形の篋状工具によって斜位刺突されている。他は木目状燃糸文、網目状燃糸文の地文のみの破片である。

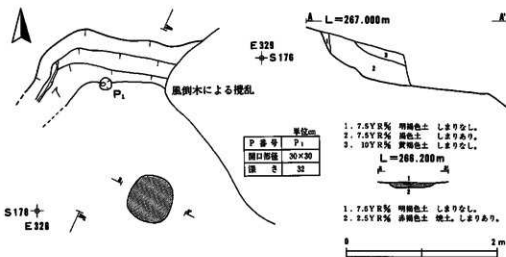
〈石器〉627は石鏃の未成品かと思われる。埋土上位から半円状花崗岩質岩が1点、フレークが13点出土している。

時期 床面出土遺物から縄文時代前期後葉に属すると考えられる。

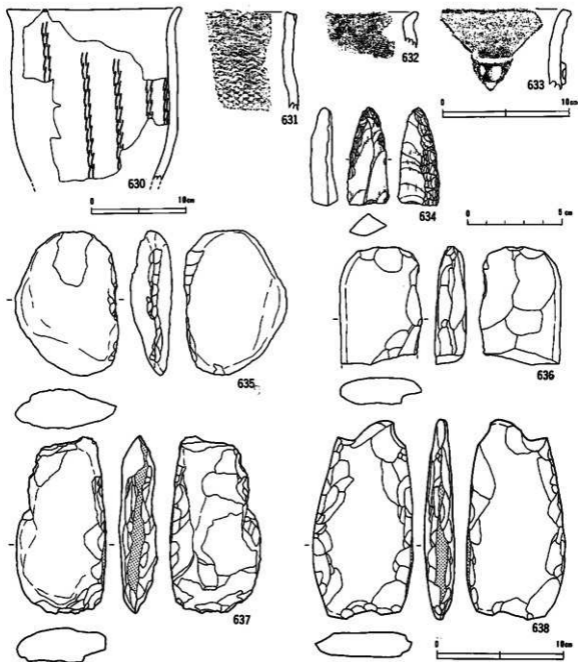
VII D 6 f 住居跡 (遺構番号68)

遺構 (第144図、写真図版47)

〈検出状況〉西尾根南斜面中腹に位置する。小角礫含みの暗褐色土層中に焼土を検出し、斜面



第144図 VII D 6 f 住居跡



番号	出土地点	層位	文様	地文	口径	基部幅	高さ	番号	分類	写真
630	ⅧD6f住	埴土		縦位線刻文(2角1単位)	38.4	-	38.3			
631	ⅧD6f住	埴土	口縁部右からの刻み、口縁部f(部不明)縦線文。	縦線。						177
632	ⅧD6f住	埴土下位	放射口縁。金魚鱗形の凸部か。	R.L.横。						177
633	ⅧD6f住	埴土	埴土上に指環状圧痕。口縁部はナデにより無文。						Ⅷ1	177

番号	出土地点	層位	器種	石質	産地	長さ	幅	厚さ	重さ	備考	分類	写真
634	ⅧD6f住	埴土	不定形石器	硬質泥岩	華石西部	5.2	2.2	1.2	12.36	側面観が断面状となる。	f b 2	177
635	ⅧD6f住	埴土	放射線型A群	福沢貫千枚岩	北上山地	11.6	6.1	3.3	330		Ⅷc 2	177
636	ⅧD6f住	埴土下位	放射線型A群	硬砂岩	北上山地	9.1	6.4	2.1	(180)		Ⅷc 2	177
637	ⅧD6f住	埴土	放射線型A群	福沢貫千枚岩	北上山地	14.1	7.1	3.0	380		Ⅷb 3	177
638	ⅧD6f住	埴土	放射線型A群	硬砂岩	北上山地	15.4	7.9	2.0	290	挟り有り。	Ⅷb 3	177

第145図 ⅧD6f住層跡出土遺物



上方において基盤層の立上りを確認し、住居として認定した。東側は倒木痕により擾乱を受けている。西側は、平面的な検出ができなかったことから掘りすぎてしまった。

〈形状・規模〉残存状況が悪く不明である。方形ないしは長方形を基調とするものか。規模は残存値で2.5×3.3mである。

〈壁・壁高〉北壁は基盤層、西壁は上位は暗褐色土層で下位は基盤層である。若干段差があり、緩やかに立ち上がる。壁高は、北壁62cm、西壁38cmである。

〈埋土〉よく締まった褐色土を主体とし、壁際は締まりを欠く。

〈床・柱穴・施設〉斜面に沿って緩く傾斜し最大比高20cmである。北側は基盤層を、南側は暗褐色土層を床面とする。北西隅に、柱穴が1個検出された。

〈炉〉地床炉が1基検出された。焼土は58×62cmの不整形円形状に分布し、厚さは最大7cmである。上位に一部擾乱があるものの、床面が強く焼成を受けたもので固く締まっている。

遺物 (第145図、写真図版177)

〈土器〉埋土から2100g出土した。630は器面全体に横方向にハケメ状の調整が見られる。2条1単位の綾絡文を縦に施す。綾絡文の周囲に短い斜縄文が僅かに観察されるようにも見えるが、不明瞭であり図示はしていない。他に木目状燃糸文、網目状燃糸文の破片が出土した。

〈石器〉634は側面観がやや鋸歯状となる。

時期 出土土器から、縄文時代前期後葉から中期初頭の範囲に属すると考えられる。

ⅦD6g住居跡 (遺構番号69)

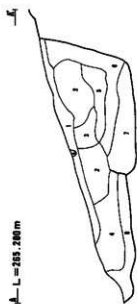
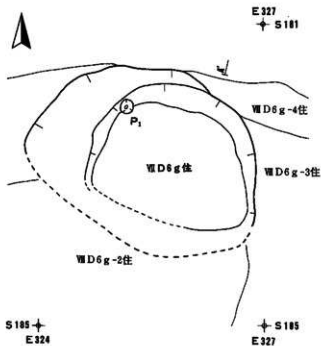
遺構 (第146図、写真図版48)

〈検出状況〉西尾根南斜面中腹に位置する。小角礫含みの暗褐色土層上面で検出した。ⅦD5g-3住居跡、ⅦD6g-2住居跡、ⅦD6g-3住居跡、ⅦD6g-4住居跡と重複する。それらのどの住居よりも新しいと考えられる。

〈形状・規模〉床面は不整な台形状で、規模は1.9m×3.2mである。

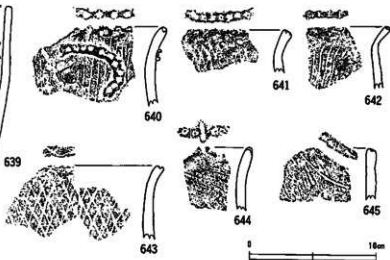
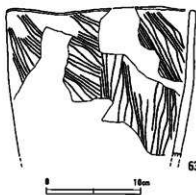
〈壁・壁高〉下位は基盤層である黄褐色土を、上位は暗褐色土層および重複する住居の埋土を壁とする。北壁はほぼ直立し、東壁と西壁は緩やかに立ち上がる。南壁は一旦直立した後、段をもって立ち上がることがベルトで確認された。壁高は東壁103cm、西壁112cm、南壁30cm、北壁138cmである。

〈埋土〉上半部は締まりを欠く暗褐色土を主体とし、中間に固い黄褐色土がブロッグ層をつくる。壁際から埋土下位にかけては崩落土と思われる褐色土層で、最下位は暗褐色土で固く締まっている。



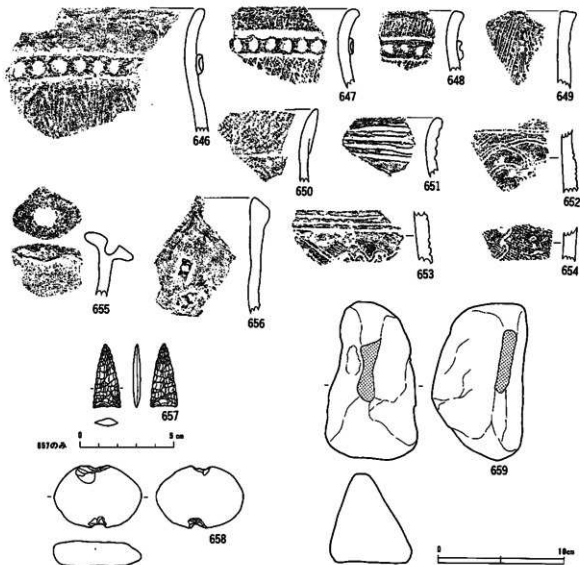
1. 10YR 5/4 褐色土
  2. 10YR 5/4 褐色土
  3. 10YR 5/4 褐色土
  4. 10YR 5/4 褐色土
  5. 10YR 5/4 褐色土
  6. 10YR 5/4 褐色土
  7. 10YR 5/4 褐色土
  8. 10YR 5/4 褐色土
- しきりなし、小内層を含む。  
しきりなし、小内層を含む。  
しきりなし、小内層を含む。  
しきりなし、小内層を含む。  
しきりなし、小内層を含む。  
しきりなし、小内層を含む。  
しきりなし、小内層を含む。  
しきりなし、小内層を含む。

単位cm	
P 番号	P <sub>1</sub>
開口部径	17×20
深さ	13



番号	出土地点	層位	文様	地文	口径	底部径	器高	備考	分類	写真
639	ⅦD6g住	埴土		R縹赤文。	20.2	-	136.8		Ⅱ6b9	178
640	ⅦD6g住	埴土	口唇部竹管削突。地帯上行管削突。	R縹赤文。				染帯削落。	Ⅱ6b7	178
641	ⅦD6g住	埴土	口唇部竹管削突。	R網目状縹赤文。					Ⅱ6	178
642	ⅦD6g住	埴土	口唇部微細状圧痕。	L縹赤文。					Ⅱ6b4	178
643	ⅦD6g住	埴土	口唇部網目状縹赤文(網部と同じ層位)。	L網目状縹赤文。					Ⅱ6	178
644	ⅦD6g住	埴土	縹赤口縁。頂部1山。口唇部竹管削突。	R L縹。0紋多量。					Ⅱ6	178
645	ⅦD6g住	埴土	縹赤口縁。口唇部竹管による右方向からの斜位削突。花彫(不明)。	L R縹。						178

第146図 ⅦD6g住居跡・出土遺物(1)



番号	出土地点	層位	文様	地文	口徑	底径	容高	備考	分類	写真
646	ⅧD 6 住	黒灰(赤)土	隆帯上指線状圧痕。	r (又はa(まい)) 2条本目状				647と同一個体?	Ⅷ b 4	178
647	ⅧD 6 住	埴土	隆帯左上方向からの指線状圧痕。	L網目状隆帯文。					Ⅷ b 4	178
648	ⅧD 6 住	埴土	なし。隆帯上指線状圧痕(不明)。	R網目文。					Ⅷ b 4	178
649	ⅧD 6 住	埴土	波状口縁。隆帯やや肥厚し平坦。	L木目状隆帯文。					Ⅷ b 4	178
650	ⅧD 6 住	埴土	波状口縁。口縁部より隆帯文隆帯の傾斜部。	L R 網。					Ⅷ b 4	178
651	ⅧD 6 住	埴土	沈線(凹線)。						Ⅷ 7	178
652	ⅧD 6 住	埴土	半截竹管平行沈線。						Ⅷ 7	178
653	ⅧD 6 住	埴土	沈線(凹線)。半截竹管平行沈線波状文。	R L 網。				654と同一個体。	Ⅷ a 9	178
654	ⅧD 6 住	埴土	半截竹管平行沈線波状文。	R L 網。				653と同一個体。	Ⅷ 7	178
655	ⅧD 6 住	埴土+ベルト	口縁部円文波状文。						Ⅷ 7	178
656	ⅧD 6 住	埴土	大波状口縁。隆帯上承影圧痕。						Ⅷ 7	178

番号	出土地点	層位	器種	材質	産地	長さ	幅	厚さ	重さ	備考	分類	写真
657	ⅧD 6 住	埴土	石鏃	粘板岩	北上山地	3.3	1.4	0.4	1.37	狭りの部分小さい。	Ⅷ a 2	178
658	ⅧD 6 住	埴土	石鏃	チャート	北上山地	4.9	7.0	2.1	100		Ⅷ	178
659	ⅧD 6 住	ベルト埴土	剝離砂類入鏃	凝灰岩	北上山地	12.6	7.3	7.0	630	側面2面。	Ⅷ a 1	178

第147図 ⅧD 6 住層跡出土遺物(2)

〈床・柱穴・施設〉基盤層である黄褐色土で固く、ほぼ水平で平坦である。柱穴は北西隅に1個検出された。規模は径20cm深さ13cmである。

〈炉〉検出されなかった。

遺物（第146・147図、写真図版178）

〈土器〉埋土から8100g出土した。640～645は口唇部にも施文されたものである。640は円形竹管刺突が施された馬蹄形の隆帯が口頸部に貼り付けられる。643は胴部地文と同じ減速によって押圧されたものであろう。644は波状口縁頂部を棒状工具で刻みを入れて2山にしたものである。646～648はタガ状に巡る隆帯を有するものである。651～654は竹管を主体とする施文である。656は平らな隆帯を口縁に沿って貼り付けたものと思われるが剥落している。上面観が変形花卉状口縁を呈する。他に多軸結条体、横位の羽状縄文などの破片が出土した。

〈石器〉図示した他にUフレ1点が埋土から出土した。

時期 特定する資料を欠くが、検出状況・出土遺物から縄文時代前期後葉から中期初頭に属すると思われる。

ⅦD 6 g-2 住居跡（遺構番号70）

遺構（第148図、写真図版48）

〈検出状況〉小角礫含みの暗褐色土層上面でⅦD 6 g 住居跡と同時に検出された。当初は、同一の住居と想定して精査に入ったが、床面および埋土断面の観察から2棟の重複であり、本住居の方が先行することが分かった。

他に、北西部分でⅦD 5 g-3 住居跡と、東側でⅦ 6 g-3 住居跡・Ⅶ 6 g-4 住居跡と、南側でⅦD 5 g-2 住居跡・ⅦD 5 g-2 土坑と重複する。埋土断面観察から、本住居跡はⅦD 5 g-2 住居跡より新しい。他の遺構との新旧関係は不明である。

〈規模・形状〉北側は不明であるが、長軸が等高線にはほぼ平行する楕円形と推定される。規模は長軸3.7m、短軸2.2mである。

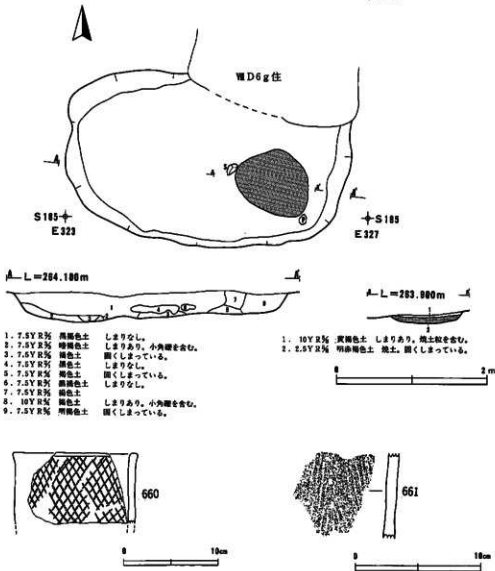
〈壁・壁高〉北壁の一部はⅦD 6 g 住居跡によって切られている。他は小角礫含みの暗褐色土で外傾する。壁高は東壁17cm、西壁25cm、南壁32cm、北壁64cmである。

〈埋土〉黒褐色土を主体とし、締まりを欠く。

〈床・柱穴・施設〉暗褐色土で、小さな凹凸があるが、ほぼ水平である。柱穴は検出されなかった。

〈炉〉南東寄りに地床炉を1基検出した。焼土は82×106cmの楕円形の範囲に分布し、厚さは8cmで、断面形がレンズ状である。

E 327  
+ S 187



番号	出土地点	層位	文様	地文	口径	底径	器高	番号	分類	写真
660	WD6g-2住	床面		L網目状無承文	(13.1)	-	(7.5)		Ⅱ 6	179
661	WD6g-2住	床面		r(又はあまい)2象木目状				646と同一器体?	Ⅱ 6	179

第148図 VI D6 g-2住層跡・出土遺物

遺物 (第148図、写真図版179)

〈土器〉床面から350g出土した。660は口縁部がやや肥厚する。

時期 床面出土遺物から、縄文時代前期後葉に属すると考えられる。

#### ⅦD 6 g-3 住居跡 (遺構番号71)

遺構 (第149図、写真図版49)

〈検出状況〉ⅦD 6 g 住居跡の東壁のダメ押しで、壁と平坦部を検出し住居として認定した。本住居はⅦD 6 g 住居跡によって切られる。また、本住居の床面下からⅦD 6 g-4 住居跡が検出されている。図式化すると次のようになる。

(新) ⅦD 6 g 住居跡←ⅦD 6 g-3 住居跡←ⅦD 6 g-4 住居跡 (旧)

〈形状・規模〉残存状況が悪く不明である。規模は、残存値で2×3mである。

〈壁・壁高〉暗褐色土で外傾する。壁高は、東壁22cm、北壁70cmである。

〈埋土〉上位は締まりを欠く暗褐色土、下位はやや締まる褐色土である。

〈床・柱穴・施設〉ⅦD 4 g-4 住居跡の埋土を床面とし固く締まっており、ほぼ水平で平坦である。柱穴は検出されなかった。

〈炉〉焼土が1基検出された。22×44cmの不整な楕円形状に分布する。断面形観察では、上位にレンズ状に形成された他に、更にその下からも焼土が検出された。上位の焼土の厚さは最大8cmである。地床炉としていいものと思われる。下位の焼土の性格は不明である。

遺物 (第149図、写真図版179)

〈土器〉埋土から815g出土した。663は口縁部にやや折り返し状の部分が観察されるが、構造的、装飾的意図は感じられない。図示した他に縦位羽状縄文、木目状然糸文、縦位綾絡文の破片が出土している。

〈石器〉図示した他にフレーク3点(うち床面2点)が出土している。

時期 特定する資料を欠くが、重複関係・出土遺物から縄文時代前期後葉から末葉に属すると考えられる。

#### ⅦD 6 g-4 住居跡 (遺構番号72)

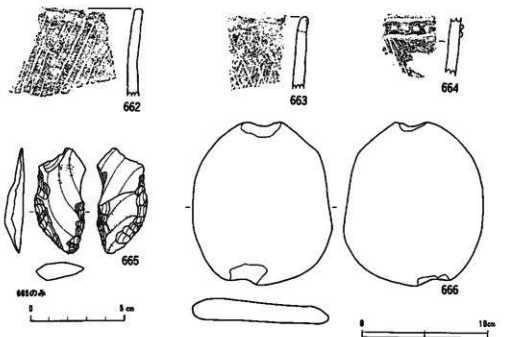
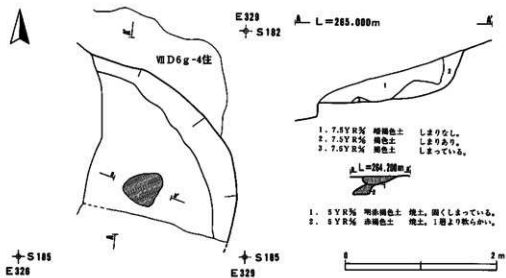
遺構 (第150図、写真図版49)

〈検出状況〉ⅦD 6 g-3 住居跡の床面から約20cm下で、焼土および固く締まった平坦な部分と立ち上がり検出し、住居として認定した。

ⅦD 5 g-3 住居跡と、北壁のラインが一致し、床面のレベルも等しいことから、本住居と同住居は同一のものである可能性がある。仮に同一とすれば、長軸6.7m、短軸残存値で2mの規模となる。ここでは、一応別個のものとして報告する。

〈形状・規模〉不明であるが、長軸が等高線にほぼ平行する楕円形と推定される。規模は残存値で2×3.5mである。

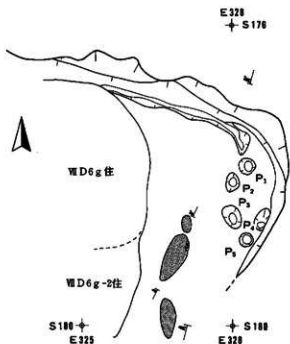
〈壁・壁高〉基盤層で固く締まっており、ほぼ直立する。壁高は、北壁95cm、東壁40cmである。



番号	出土地点	層位	文様	地文	口径	胴径	器高	備考	分類	写真
662	VII D6 g-3住	埋土		しまり赤文。					目 6	179
663	VII D6 g-3住	埋土	波状口縁? 接合口縁。	しまり赤文赤文。					目 6	179
664	VII D6 g-3住	埋土	器唇上割突(竹管かどうかは不明、割突底面は粗凸)。	しまり赤文。						179

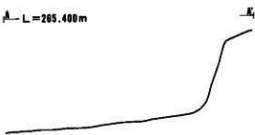
番号	出土地点	層位	器種	石質	高地	長さ	幅	厚さ	重さ	備考	分類	写真
665	VII D6 g-3住	埋土	不定形石器	硬質燧灰質泥岩	平石西形	5.6	2.6	0.9	11.22	刃は使用感かとも見える、矢鏃部を形成する。	目 6	179
666	VII D6 g-3住	埋土	石皿	燧灰質硬砂岩	北上山地	12.9	11.0	1.7	410		目 6	179

第149図 VII D6 g-3住居跡・出土遺物



単位cm					
P 番号	P <sub>1</sub>	P <sub>2</sub>	P <sub>3</sub>	P <sub>4</sub>	P <sub>5</sub>
開口部径	22×24	18×26	21×31	15×34	17×20
深さ	26	19	45	26	62

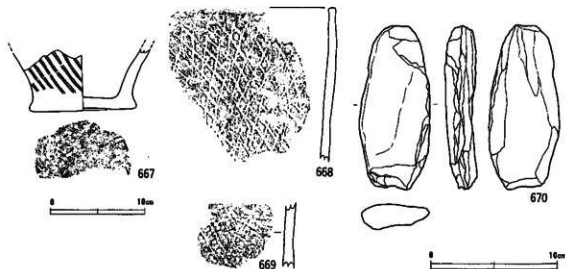
A-L = 265.400m



A-L = 264.100m



1. 5Y R% 赤褐色土 塊土、固くしまっている。
2. 5Y R% 赤褐色土 塊土、固くしまっている。



番号	出土地点	層位	文様	地文	口径部径(高さ)	備考	分類	写真
667	WD6g-4住	埋土		L+Rの本目状模赤文。	-	(11.4)(6.3)		179
668	WD6g-4住	埋土	波状口縁?	R+rの網目状模赤文。			II5b0	179
669	WD6g-4住	埋土		L.RにR附加条。			II6b0	179

番号	出土地点	層位	形状	石質	産地	長さ	幅	厚さ	重さ	備考	分類	写真
670	WD6g-4住	埋土	煎磨磨製A形	粘板岩	北上山地	13.0	5.6	2.0	110	鉄片有り。	IIc2	179

第150図 WD6g-4住居跡・出土遺物



〈埋土〉4層で構成され、自然堆積の様相を示す。断面の実測図をとらなてしまった。上位は10YR 4/6 褐色土で粉炭と焼土粒を僅かに含み、層厚10cm程度。中位は10YR 5/8 黄褐色土で、層厚20~30cm。下位は10YR 4/3 にぶい黄褐色土で粉炭を僅かに含み、層厚10cm程度である。中位と下位の間に10YR 4/6 褐色土を部分的に挟む。

〈床・柱穴・施設〉斜面に沿って緩く傾斜し最大比高20cmである。北側は基盤層を、南側は暗褐色土層を床面とする。柱穴が5個検出された。P1とP5はしっかりした規模・形状であり主柱穴となる可能性がある。

〈炉〉焼土が3基検出された。規模の点で疑問もあるが、いずれも強い焼成をうけており、一応全て炉という想定の下に、北から南へ1号炉・2号炉・3号炉と呼称する。1号炉の焼土は13×12cmの楕円形状に分布し、厚さは最大12cmである。2号炉の焼土は26×70cmの楕円形状に分布し、厚さは最大5cmである。3号炉の焼土は22×52cmの楕円形状に分布する。3号炉の断面図をとっていないが、いずれも固く締まっている。

遺物 (第150図、写真図版179)

〈土器〉埋土から1373g出土した。667は底面が外側に張り出す。668の口縁左側がやや高いが波状口縁となるものか、あるいは単に整形上のミスか。図示した他に木目状燃糸文、縦位羽状縄文、縦位綾絡文の破片が出土している。

〈石器〉図示した他に岩手火山起源の燧岩1点が床面から出土している。

時期 特定する資料を欠くが、重複関係・出土遺物から縄文時代前期後葉から末葉に属すると考えられる。

#### ⅥD Ⅱ h 住居跡 (遺構番号73)

遺構 (第151図)

〈検出状況〉西尾根南麓に位置する。平面的な検出はできず、土層観察用のベルト断面で壁の立上がりを確認したものの、調査の勝手際により、断面図をとらないうちに掘りこんでしまった。検出が遅れたためベルト以外の大部分を掘りすぎてしまい、詳細は不明である。焼土とベルトに残った平坦部および壁の存在から、住居跡として認定したものである。

〈形状・規模〉不明である。

〈壁・壁高〉褐色土層で、固く締まっていた外傾する。壁高は、北壁27.5cmである。

〈埋土〉10YR 4/4褐色土で締まりあり、径5mmの炭化物粒を含む。

〈床・柱穴・施設〉褐色土で埋土より固い。

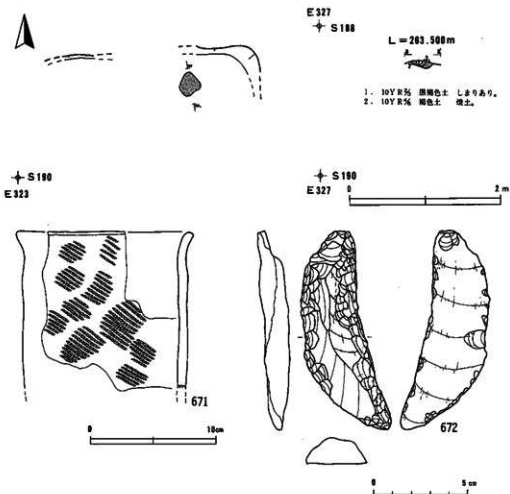
〈炉〉焼土が1基検出された。28×34cmの不整な円形に分布し、断面形がレンズ状に形成され固く締まっている。上位に攪乱がある。

遺物 (第151図、写真図版179)

<土器> 671には暖が多く混入し、内外面とも剥落している。口唇部は平らになでられ断面は角張る。他に埋土から、網目状燃糸文の細片1点が出土した。

<石器> 672はノッチの形成が弱いで石匙には含めなかった。表に自然面を残す。図示した他にUフレ1点が埋土から出土している。

時期 特定する資料を欠くが、出土遺物から縄文時代前期後葉から末葉に属するものと思われる。



番号	出土地点	層位	文様	地文	口縁部形	器高	番号	分類	写真			
671	ⅧD 6h 住	埋土		しまり。	凹	0.24	01.02	Ⅷ b 9	179			
番号	出土地点	層位	部種	石質	産地	長さ	幅	厚さ	重量	番号	分類	写真
672	ⅧD 6h 住	埋土	不足形石器	地質泥岩	平石西部	10.6	3.5	1.4	49.85	根対するノッチに二次加工。	Ⅷ b 3	179

第151図 ⅧD 6h住居跡・出土遺物

## ⅦD6h-2住居跡（遺構番号74）

遺構（第152図、写真図版50）

〈検出状況〉小角礫含みの暗褐色土上面で、黄褐色土ブロックを含む黒褐色土が不整形に分布することから検出された。南側は斜面のため流失している。

北壁でⅦD7i住居跡、東壁でⅦD8i住居跡と重複する。本住居の埋土断面観察から、いずれも本住居の方が新しい。ⅦD7i住居跡とⅦD8i住居跡は直接の切り合いはなく、新旧関係は不明である。

〈規模・形状〉南側は不明であるが、長軸が等高線にほぼ平行する隅丸長方形と推定される。規模は長軸6.9m、短軸は残存値で4mである。

〈壁・壁高〉上位には暗褐色土が僅かにあるものの、下位側の大半は黄褐色の基盤層で固く締まり、ほぼ直立する。壁高は東壁9cm、西壁58cm、北壁85cmである。

〈埋土〉17層に細別したが、大きくは上位暗褐色土、中位黒褐色土、下位褐色土に大別できる。全体に固く締まっており、小角礫と黄褐色土ブロックを含む。

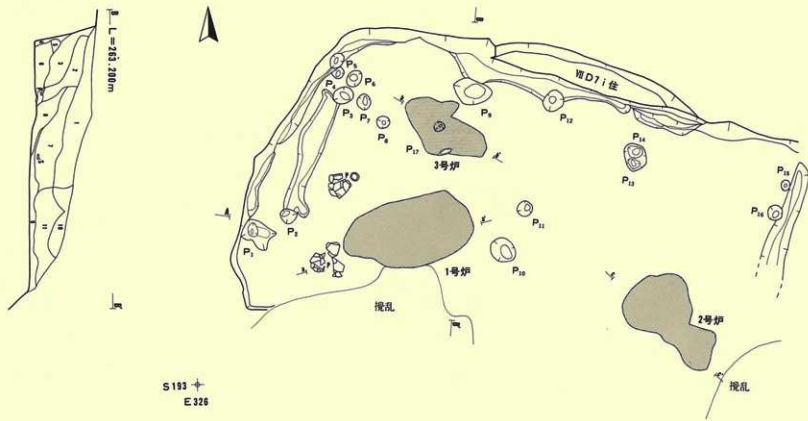
〈床・柱穴・施設〉基盤層である黄褐色土で固く締まり、細かな凹凸はあるがほぼ水平で平坦である。本住居と重複するⅦD7i住居跡の床面から16cm下がる。

本住居の床面で柱穴を17個検出した。この中には、埋土がⅦD7i住居跡に類似するものがあり、あるいは同住居に帰属する可能性も考えられる。周溝が北壁際、東壁際、西壁際に断続的に巡る。幅10～20cm、深さ10cmで、埋土は10TR4/3にぶい黄褐色土である。西壁際より内側の周溝は、位置関係から本住居に先行するもので、建て替えをしている可能性が高い。あるいはⅦD7i住居跡の深く掘られた周溝が残存したとも考えられるが、床面の比高からみて妥当かどうか疑問が残る。

〈炉〉西寄りに2基、東寄りに1基、計3基の地床炉を検出した。西側からそれぞれ1号炉、2号炉、3号炉と呼称する。1号炉の焼土は90×175cmの楕円形の範囲に分布し、厚さは最大9cmで、断面形がレンズ状に焼成を受けている。2号炉の焼土は70×145cmの不整形に分布し、厚さは最大4cmである。断面形は2単位のレンズ形状を示すが、平面形では分離できない。本炉の下からP17が検出された。3号炉の焼土は74×120cmの範囲に分布し、厚さは最大5cmで、断面形はレンズ状である。いずれも固く締まるが、特に1号炉は強く被熱している。

遺物（第153～155図、写真図版179～181）

〈土器〉床面から5340g、埋土から9925g出土した。673と674は同一個体である。1号炉に隣接した西南方向の床面で一括出土したものである。口縁部と胴部が接合しなかったが、底部から曲線的に外反し胴上半部で最大径となり再びすばんで口縁直下から直立する器形である。器高は38cm程度となろう。口縁下に粘土紐を貼り付けて隆帯とし、その上に沈線と指頸圧痕を



E 335  
+ S 188

A.L.=282.300m

1. 5YR 赤褐色土 焼土
2. 2.5YR 明赤褐色土 焼土
3. 10YR 赤褐色土

A.L.=282.300m

1. 10YR% 灰黄褐色土 焼土粒を含む
2. 5YR% 明赤褐色土 焼土
3. 10YR% 赤褐色土 焼土粒を含む

A.L.=282.300m

1. 5YR% 明赤褐色土 焼土

S 193 +  
E 326

+ S 193  
E 335



A...A' B...B'

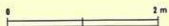
1. 10YR 暗褐色土 小角殻を含む
2. 10YR 暗褐色土
3. 10YR 暗褐色土
4. 10YR 暗褐色土
5. 10YR 暗褐色土
6. 10YR 暗褐色土
7. 10YR 暗褐色土
8. 10YR 灰黄褐色土
9. 10YR 暗褐色土

10. 7.5YR 黄褐色土
11. 7.5YR 黄褐色土
12. 10YR 暗褐色土 固くしまっている。焼土粒を含む
13. 7.5YR 黄褐色土 小内腔。暗色土ブロックを含む
14. 7.5YR 黄褐色土 粘土質。固くしまっている。小内腔。暗色土ブロックを含む
15. 10YR 暗褐色土 固くしまっている。小角殻。灰化粒を含む
16. 7.5YR 黄褐色土 小内腔。暗色土ブロックを含む
17. 10YR 暗褐色土

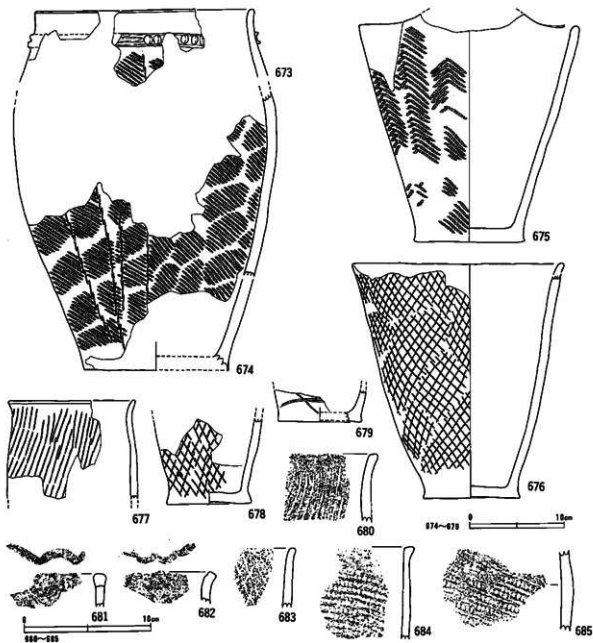
単位:cm

P番号	P1	P2	P3	P4	P5	P6	P7	P8
開口部径	26×45	18×21	22×26	15×16	18×22	19×22	17×21	17×19
深さ	48	10	41	17	43	29	44	31
埋土	10YR% にふく 黄褐色	ロー-Aを はる	10YR% にふく 黄褐色	10YR% にふく 暗褐色		10YR% にふく 黄褐色	10YR% にふく 黄褐色	10YR% にふく 黄褐色

P番号	P9	P10	P11	P12	P13	P14	P15	P16	P17
開口部径	34×53	30×37	20×21	26×30	13×15	16×20	13×15	18×20	13×15
深さ	24	33	21	32	41	42	9	37	23
埋土	10YR% にふく 黄褐色	10YR% 黄褐色		10YR% 暗褐色	10YR% 暗褐色	10YR% 暗褐色			10YR% 黄褐色

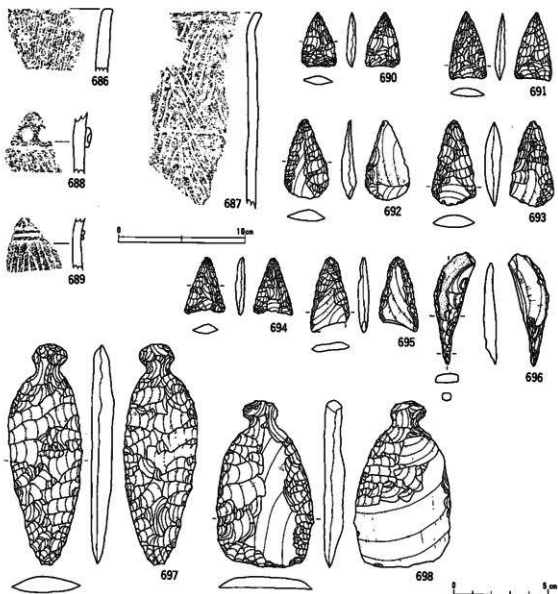


第152図 WD6h-2・WD7i住居跡



番号	出土地点	層位	文様	地文	口径	底径	高さ	層号	分類	写真
673	W D 6 h-2 住	床面	口縁部胎土上部に施す正交と右旋(四角)。	L.R縦、縦位線地文。	(22.2)	-	(8.0)	674と同一個体。	II 6 b I	179
674	W D 6 h-2 住	床面		L.R縦、縦位線地文。	-	(15.3)	(29.0)	673と同一個体。	II 6 b I	179
675	W D 6 h-2 住	竪穴へルト埋土	波状口縁。	L.R × R.L第1層に施す斜交地文。	(22.3)	(11.8)	(24.3)		II 6 a 7	180
676	W D 6 h-2 住	床面		R縦目状地文。	(22.3)	(10.3)	(28.1)		II 6 b 7	180
677	W D 6 h-2 住	埋土		R地文。	(22.5)	-	(10.5)		II 6 b 7	180
678	W D 6 h-2 住	床ピット17		L縦目状地文。	-	(8.0)	(8.0)		II 6	180
679	W D 6 h-2 住	埋土	草木灰によるキズ?	L地文。	(18.5)	(3.5)			II 6	180
680	W D 6 h-2 住	埋土		L地文。					II 6 a 7	180
681	W D 6 h-2 住	埋土	口縁部胎土。(中円状?)						II 6 a 7	180
682	W D 6 h-2 住	埋土	口縁部胎土。(上面縦線状)。						II 6	180
683	W D 6 h-2 住	埋土		L縦目状地文。					II 6	180
684	W D 6 h-2 住	埋土		L.R縦。					II 6	180
685	W D 6 h-2 住	埋土		L.RにR増加。					II 6	180

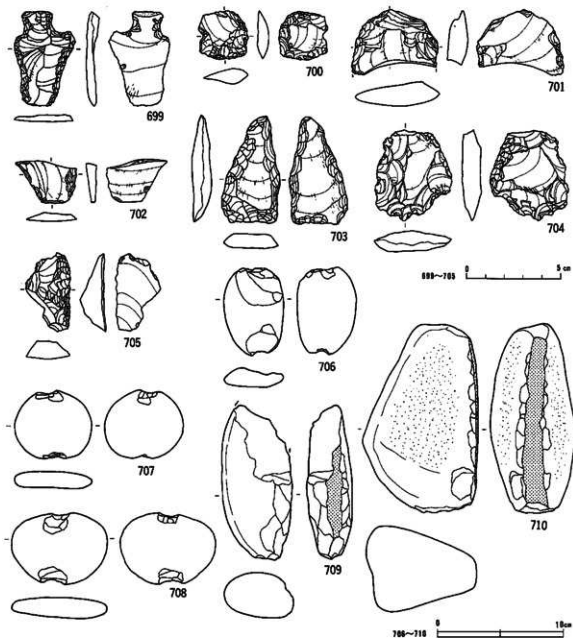
第153図 W D 6 h-2住層跡出土遺物(1)



番号	出土地点	層位	文様	地文	口徑	底面径	器高	備考	分類	写真
686	ⅧD6h-2住	埴土	L 2条	L 2条木目状断末文。				外面スス顕著。	II 6 b	180
687	ⅧD6h-2住	埴土		京木目状断末文。					II 6 b f	180
688	ⅧD6h-2住	埴土	陶器上層錐状圧痕。	r 2条木目状断末文。					II 6 b f	180
689	ⅧD6h-2住	埴土	陶器上沈積(組織)。	L 断末文。					II 6 b 0	180

番号	出土地点	層位	器種	材質	産地	長さ	幅	厚さ	器高	備考	分類	写真
690	ⅧD6h-2住	埴土	石鏃	硬質泥岩	宇石西部	2.9	1.9	0.5	1.86		I 2	180
691	ⅧD6h-2住	埴土	石鏃	硬質泥岩	宇石西部	3.6	2.0	0.4	2.97		I 2	180
692	ⅧD6h-2住	埴土	矢鏃器礫石器	硬質泥岩	宇石西部	4.2	2.3	0.8	4.82			180
693	ⅧD6h-2住	埴土	石鏃	粘板岩	北上山地	4.5	2.3	0.8	6.81		III 3	181
694	ⅧD6h-2住	埴土	石鏃	粘板岩	北上山地	3.0	2.1	0.5	2.12		III b 1	181
695	ⅧD6h-2住	埴土	石鏃	硬質泥岩	宇石西部	(4.0)	2.1	0.4	(3.90)			181
696	ⅧD6h-2住	埴土	石鏃	粘板岩	北上山地	6.0	1.6	0.5	6.08			181
697	ⅧD6h-2住	埴土	石匙	硬質泥岩	宇石西部	11.7	3.9	1.1	43.61		I a 1	181
698	ⅧD6h-2住	埴土	石匙	硬質泥岩	宇石西部	8.9	5.1	1.0	38.29		I b 2	181

第154図 ⅧD6h-2住居跡出土遺物(2)



番号	出土地点	層位	器種	材質	産地	長さ	幅	厚さ	重さ	備考	分類	写真
699	ⅧD6h-2住	埋土	石錐	赤色燧石層	北上山地	5.0	3.2	0.7	7.26	つばの基部に打痕付、基部に加工せず。	I b 1	181
700	ⅧD6h-2住	埋土上	ピヌ・コキ・コ	燧石泥岩	宇石西部	2.6	2.7	0.5	4.19			181
701	ⅧD6h-2住	埋土	不定形石器	燧石質燧石層	宇石西部	3.0	4.6	1.1	16.89		II	181
702	ⅧD6h-2住	埋土	不定形石器	燧石泥岩	宇石西部	2.2	3.2	0.5	4.18		I c 3	181
703	ⅧD6h-2住	埋土	不定形石器	硬質燧石質泥岩	宇石西部	5.7	3.8	0.8	15.75		I e	181
704	ⅧD6h-2住	埋土	不定形石器	燧石泥岩	宇石西部	4.8	4.1	1.0	20.22	片断の表面を大きく剥離部に、表に磨痕を認め。	I a 1	181
705	ⅧD6h-2住	埋土	不定形石器	燧石泥岩	宇石西部	4.1	2.6	1.4	9.23		I a 1	181
706	ⅧD6h-2住	埋土	石錐	燧石層	北上山地	6.9	4.8	1.6	80		I	181
707	ⅧD6h-2住	埋土	石錐	燧石質燧石層	北上山地	5.4	6.2	1.4	75		II	181
708	ⅧD6h-2住	Q9埋土	石錐	燧石質燧石層	北上山地	5.6	7.6	1.7	110		II	181
709	ⅧD6h-2住	埋土	腕磨器類A群	燧石安山岩	美野山地 (23.3)	(5.4)	(3.4)	(3.00)	欠損品。		III b 2	181
710	ⅧD6h-2住	埋土	腕磨器類A群	両岸石安山岩	美野山地	14.8	9.1	8.5	1100	平表面3面。+磨石?	I a 2	181

第155図 ⅧD6h-2住居跡出土遺物(3)

施すがその長さ・単位は不明である。沈線は棒状工具または竹管の外面を器面に当てたものである。指頭圧痕は左側から施され爪跡が明瞭に残っている。675は波状口縁の土器であるが頂部を欠損している。残存する口縁の形状から頂部は2個であるとおもわれるが詳細は不明である。欠損部の器厚は13mmと他に比べやや厚い。679は纖維質と思われる物による沈線が観察されるが、施文とするより単なるキズと考えたほうが妥当かもしれない。681は弁状突起で上面観が半円状となるものである。

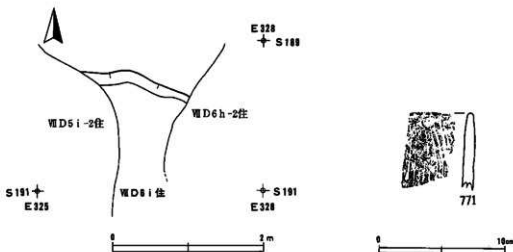
<石器> 692は平面形は石鏃に類似するが、裏面は無加工である。693を石鏃としたが、重さが本遺跡出土中で最大値を示す。703は石篋としたが、側辺の加工は一方のみ急角度で対称性を欠く。尖頭部が意図的に作り出されている。700は1対の両極剥離が観察されることからピエス・エスキーユとした。702は欠損品であろう。他に埋土から半円状崗岩質岩が1点、Uフレが7点、フレークが24点(零石産・硬質泥岩、零石産・凝灰質泥岩他)出土している。

時期 床面直上出土遺物から、縄文時代前期後葉から末葉に属するものと考えられる。

#### ⅦD6 i 住居跡 (遺構番号75)

遺構 (第156図、写真図版51)

<検出状況> ⅦD5 i - 2住居跡の東壁の精査で検出した。重複により遺存状態が悪い。土坑の可能性も考えられる。



番号	出土地点	層位	文様	地文	口縁部形状	器高	備考	分類	写真
771	ⅦD6 i 住	埋土		L様赤文				II b	182

第156図 ⅦD6 i 住居跡・出土遺物



ⅦD5 i-2 住居跡およびⅦD6 h-2 住居跡に切られている。

<形状・規模> 残存状況が悪く不明である。規模は、残存値で1.2×2.9mである。

<壁・壁高> 北壁のみ残存する。基盤層の黄褐色土で固く締まり、ほぼ直立する。壁高は30cmである。

<床・柱穴・施設> ⅦD5 i-2 住居跡の床面より約10cm、ⅦD6 h-2 住居跡床面より約20cmそれぞれ高く、基盤層を床として固く締まっている。柱穴は検出されなかった。

<炉> 検出されなかった。

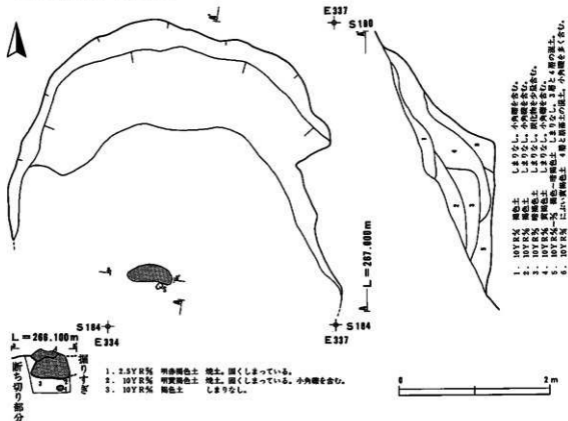
遺物 (第156図、写真図版182)

<土器> 埋土から711か<sup>1</sup>1点出土したのみである。

時期 特定する資料を欠くが、重複関係・破片資料から縄文時代前期後葉から末葉に属すると考えられる。

### ⅦD7 g 住居跡 (遺構番号76)

遺構 (第157図、写真図版51)



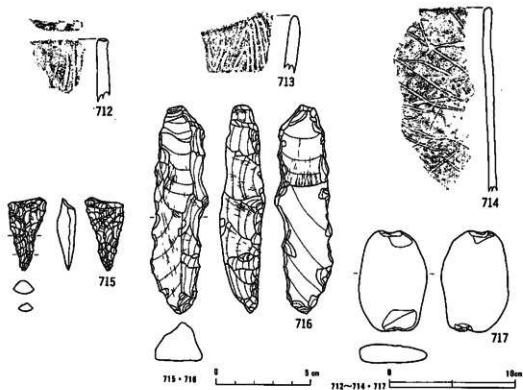
第157図 ⅦD7 g 住居跡

〈検出状況〉西尾根南斜面中腹に位置する。小角礫含みの暗褐色土層中に焼土を検出し、その斜面上方において基盤層を掘り込む壁を確認し、住居として認定した。南側は斜面のため流失して不明である。本住居跡の床面下からⅧD7g-2住居跡が検出されている。

〈形状・規模〉南側は不明であるが、径4m前後の円形と推定される。

〈壁・壁高〉斜面上方に当たる北壁は基盤層および礫層まで掘りこんでおり、凹凸が大きい。床から30cmまではほぼ直立するが、斜面上方に大きく外傾する。壁高は、東壁64cm、西壁31cm、北壁159cmである。

〈埋土〉6層で構成される。大別すると、上位は褐色土、中位に暗褐色土を挟んで、下位には崩落土を混入する層がある。全体的に締まりに欠け、小角礫を含む。



番号	出土地点	層位	文様	地文	口徑	底部	器高	備考	分類	写真
712	ⅧD7g住	埋土	口縁部筒状圧痕。(左方向から)	シ標赤文。					Ⅱ46才	182
713	ⅧD7g住	埋土		R本目状赤文。					Ⅱ6	182
714	ⅧD7g住	埋土	沈線。(工具は軟質の植物繊維状のものか?)。							182

番号	出土地点	層位	器種	石質	産地	長さ	幅	厚さ	重さ	備考	分類	写真
715	ⅧD7g住	埋土	石鏃	硬質泥岩	宇石西部	3.8	2.0	0.9	4.92	全面に二次加工。刃部と基部の境界不明瞭。		182
716	ⅧD7g住	埋土	不定形石鏃	硬質泥岩	宇石西部	11.0	2.9	2.0	68.90	折衝三角形。	I c	182
717	ⅧD7g住	埋土	石鏃	球状質硬質泥岩	志上山地	7.9	5.4	1.5	95		I	182

第158図 ⅧD7g住居跡出土遺物

〈床・柱穴・施設〉暗褐色土層で、ほぼ水平で平坦である。柱穴は検出されなかった。

〈炉〉地床炉を1基検出した。焼土の範囲は22×58cmと平面的には広い分布は見られないにもかかわらず、厚さは最大36cmで固く締まっている。ⅦD7g-2住居跡の炉は本住居の炉のほぼ真下に位置するが、本住居の焼土とは間層を挟み明瞭に区別できる。

遺物 (第158図、写真図版182)

〈土器〉埋土から1360g出土した。712の口唇部施文は全周せず部分的である。714はモチーフが不明で装飾性に乏しい。図示した他に埋土から、網目状燃糸文、木目状燃糸文、縦位羽状縄文、縦位綾絡文(いずれも地文のみ)の胴部破片が出土している。

〈石器〉716は断面三角形で1側面に二次加工が施されている。使用痕は2辺にステップ状剝離として残っている。剝離がやや磨耗しており、他の石器より古い時期のものか。

時期 特定する資料を欠くが、検出状況・出土遺物から縄文時代前期後葉から末葉に属すると考えられる。

#### ⅦD7g-2住居跡 (遺構番号77)

遺構 (第158図、写真図版52)

〈検出状況〉ⅦD7g住居跡の床面下から検出された。同住居の床面とは、約40cmのレベル差がある。南側は斜面のため流失して不明である。

〈形状・規模〉南側は不明であるが、長軸が等高線に斜交する不整な長円形を基調と推定される。規模は残存値で、4×4.7mである。

〈壁・壁高〉基盤層および礫層で凹凸が大きい。壁高は、東壁81cm、西壁33cm、北壁38cmである。

〈埋土〉5層からなる。褐色～明褐色土で小角礫を含み、再堆積層起源の埋土である。

〈床・柱穴・施設〉基盤層および礫層で斜面に沿って傾斜し、比高最大値は40cmもある。柱穴は検出されない。

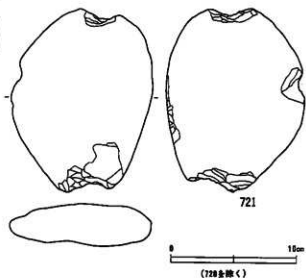
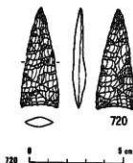
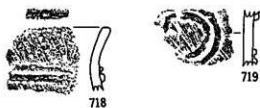
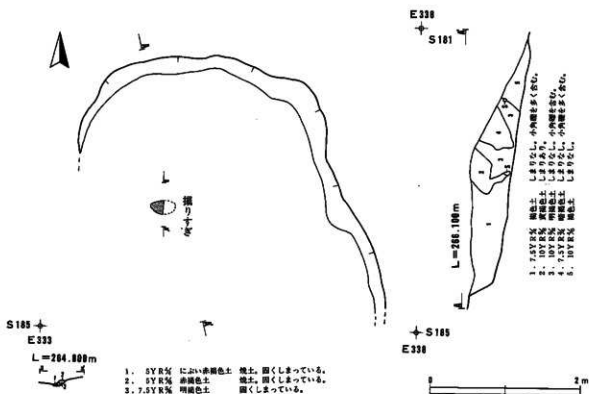
〈炉〉地床炉が1基検出された。ⅦD7g住居跡の焼土の断面観察のため東側を誤って掘りすぎてしまった。残存値で18×17cmの範囲に分布するが、東側に広がる楕円形状の平面形を有すると思われる。厚さは6cmで固く締まっている。

遺物 (第158図、写真図版182)

〈土器〉埋土から1070g出土した。718と719は同一個体かも知れない。図示した他には網目状燃糸文、木目状燃糸文、単節斜縄文の胴部破片(いずれも地文のみ)が出土している。

〈石器〉720は大ぶりの石鏃で丁寧な加工である。

時期 特定資料を欠くが、重複関係・出土遺物から縄文時代前期後葉に属すると推定される。



番号	出土地点	層位	文様	地文	口径	底径	器高	備考	分類	写真		
718	ⅦD7g-2住	埋土	輪帯上沈線(凹線)	R 2条水目状継承文。					Ⅱa 2	182		
719	ⅦD7g-2住	埋土	輪帯上沈線(凹線)	R 2条筋承文。					Ⅱb 7	182		
番号	出土地点	層位	器種	石質	産地	長さ	幅	厚さ	重さ	備考	分類	写真
720	ⅦD7g-2住	埋土	石鏃	地質泥岩	宇石西郡	5.3	2.0	0.7	4.68		Ⅱa 2	182
721	ⅦD7g-2住	埋土	石鏃	凝灰質硬砂岩	北上山地	14.4	11.3	3.4	790		Ⅱ	182

第159図 ⅦD7g-2住居跡・出土遺物

ⅧD7h住居跡 (遺構番号78)

遺構 (第160図、写真図版52・53)

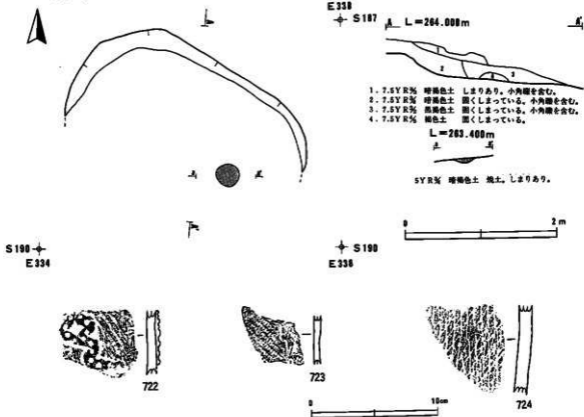
〈検出状況〉西尾根南斜面に位置する。小角礫含みの暗褐色土層中に焼土を検出し、斜面上方においてそれに対応すると想定される壁を確認し、住居として認定した。南側は斜面のために流失および道路によって削削されている。

〈規模・形状〉南側は不明であるが、長軸が等高線にほぼ平行する長円形と推定される。規模は長軸3.2m、短軸は残存値で2.2mである。

〈壁・壁高〉暗褐色土で固く締まっており、緩やかに立ち上がる。壁高は西壁6cm、北壁21cmである。

〈埋土〉斜面上方は暗褐色土、下方は黒褐色土で、上方からの流れ込みの様相を示す。

〈床・柱穴・施設〉暗褐色土で固く締まっている。斜面に沿ってやや傾斜する。柱穴は検出さ



番号	出土地点	層位	支保	地文	口径	遺跡番号	備考	分類	写真
722	ⅧD7h住	埋土	路面上竹管制梁。	L2条木目状痕末文。				Ⅱ6b7	182
723	ⅧD7h住	埋土		L3瓦。片結び縦位敷筋文。					182
724	ⅧD7h住	埋土		L横目状地文。				Ⅱ6	182

第160図 ⅧD7h住居跡・出土遺物

れなかった。

<炉>東寄りに地床炉1基を検出した。焼土は29×30cmのほぼ円形に分布し、厚さは最大7cmである。断面はレンズ状で固く締まっている。

遺物 (第160図、写真図版182)

<土器>埋土から340g出土した。722は剥落しているが、2本の鋸歯状隆帯が線対称に垂下している。他に単節斜縄文の胴部破片が出土している。

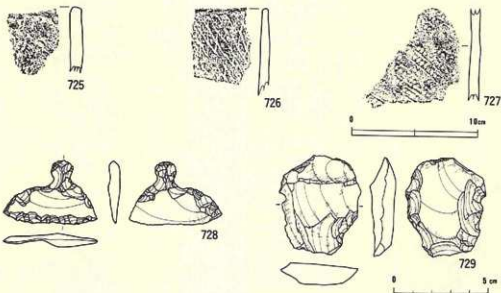
<石器>図示は省略したが、埋土から5.8×5.3×4.2cm大の卵形の白色細粒凝灰岩が出土した。奥羽山地零石産であることから持ち込まれたものと考えられる。

時期 特定する資料を欠くが、出土遺物・検出状況から縄文前期後葉のものと推定される。

#### ⅦD7 i 住居跡 (遺構番号79)

遺構 (第152図)

<検出状況>ⅦD6 h-2住居跡の精査で検出した。本住居の大半は同住居に切られ不明であ



番号	出土地点	層位	文様	地文	口径	胴部	器高	備考	分館	写真
725	ⅦD7 i 住	埋土		縦筋縞文。					Ⅱ 6	182
726	ⅦD7 i 住	埋土		縦目状縞文。					Ⅱ 6	182
727	ⅦD7 i 住	埋土		縞巻縞文。					Ⅱ 6	182

番号	出土地点	層位	器種	石質	産地	長さ	幅	厚さ	備考	分館	写真
728	ⅦD7 i 住	埋土	石匙	硬質凝灰岩	宇石西部	3.3	5.0	0.7	5.前) 打点はつまみ方向。	Ⅱ a 2	182
729	ⅦD7 i 住	埋土	不定形石器	硬質凝灰岩	宇石西部	5.2	4.3	1.1	29.6)	Ⅱ	182

第161図 ⅦD7 i 住居跡出土遺物

る。北側の壁および床面の一部が残存し、同住居の床面よりも16cm程高い。

〈壁・壁高〉北壁のみ残存する。基盤層の黄褐色土で固く締まり、ほぼ直立する。壁高は36cmである。

〈埋土〉壁寄りには黄褐色土主体で、崩落土をブロック状に含む層が断面鋸歯状に入り込む。南側は黒褐色土主体である。

〈床・柱穴・施設〉北側に一部残存する床面は基盤層で固く、ほぼ平坦である。ⅦD6 h-2 住居跡の床面で検出された柱穴のうち、本住居と同じ黄褐色土ブロックを含む埋土を有するものは、本住居に帰属する可能性も考えられる。

〈炉〉検出されなかった。

遺物 (第161図、写真図版182)

〈土器〉埋土からの出土である。図示した他には横位羽状縄文、単節斜縄文、無節斜縄文の胴部破片 (いずれも地文のみ) が出土している。

〈石器〉図示した他にはUフレ1点、フレーク11点が埋土から出土している。

時期 特定する資料を欠くが、重複関係・出土遺物から縄文前期後葉から末葉と考えられる。

#### ⅦD8 c 住居跡 (遺構番号80)

遺構 (第162図、写真図版53)

〈検出状況〉西尾根東斜面中腹に位置する。小角礫含みの暗褐色土層中に焼土を検出し、その斜面上方において基盤層を掘り込む壁を確認し、住居跡として認定した。

ⅦD8 c 土坑と東側で重複するが、斜面のため本住居の埋土および床面が流失していて新田関係は不明である。北壁は木根により一部攪乱されている。

〈形状・規模〉東側は不明であるが、径5m前後の円形と推定される。

〈壁・壁高〉斜面上方に当たる西壁は礫層まで掘りこんでおり、凹凸が大きい。緩やかに立ち上がる。壁高は、西壁33cm、北壁60cmである。

〈埋土〉上位には黄褐色土が流れ込んでいる。床上は、多量の粉炭が混入する暗褐色土である。いずれも締まりを欠く。

〈床・柱穴・施設〉基盤層および一部礫層で、固く締まっている。斜面に沿って南東方向に傾斜し、最大比高25cmである。柱穴は検出されなかった。

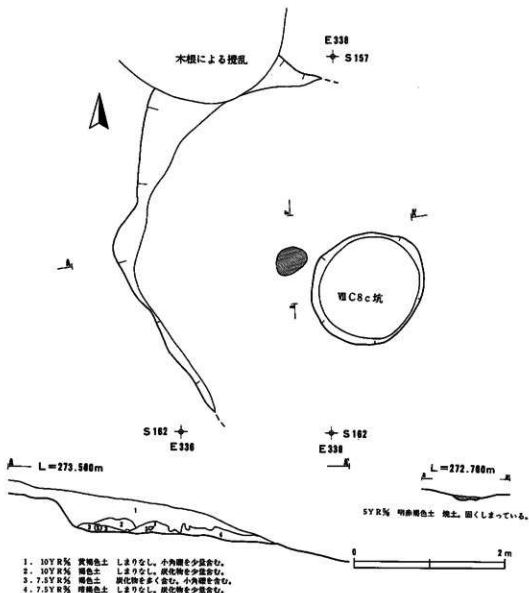
〈炉〉地床炉を1基検出した。焼土の範囲は32×44cmの卵形状に分布し厚さは最大6cmで、断面形はレンズ状である。

遺物 (第163・164図、写真図版182~184)

〈土器〉埋土から6615g出土した。730は口縁部は半截竹管の外面で器面に対して斜位に刺突

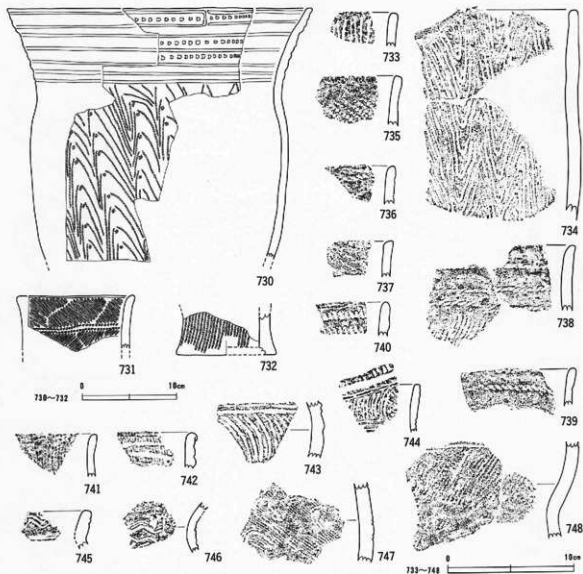
しているが、刺突列の最上段は平行沈線にて区画されている。どのような単位の区画が詳細は分からない。740は波状口縁である。図示した他に網目状捲糸文、横位羽状縄文、縦位綾結文の胴部破片（いずれも地文のみ）が出土している。

〈石器〉 752は自然面を残しやや不整形であるが断面形がかまぼこ状であり石筥とした。753は素材の傾斜を利用して刃部としている。755は急角度の大きな刺離が連続する。図示した他にUフレ2点、フレーク18点（礫石産・硬質泥岩他）が埋土から出土している。



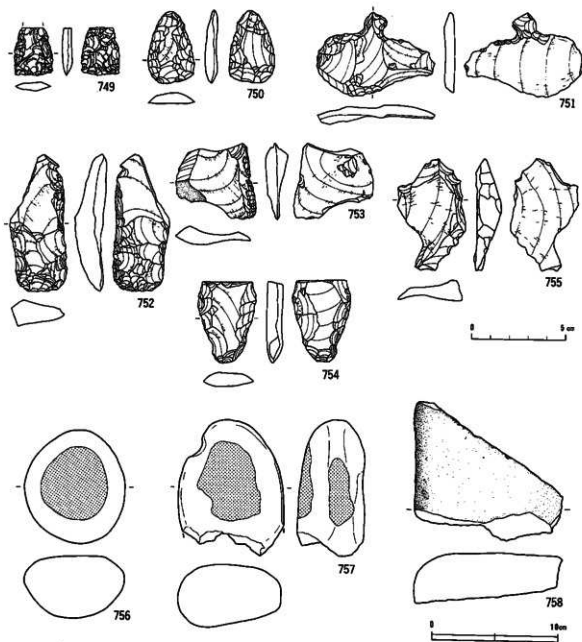
第162図 WD8c住居跡





番号	出土地点	層位	文様	地文	口縁	底面	器高	備考	分類	写真
730	ⅦD8c住	埋土	沈線(四線)、伸縮工具による割突。	L木目状横糸文。	ⅡA)	—	(26.4)		Ⅱ7a	183
731	ⅦD8c住	埋土	突し表面圧痕。	R L	ⅡA)	—	(5.8)	織線混入。		183
732	ⅦD8c住	埋土		L横糸文。	—	ⅡA)	(4.5)			183
733	ⅦD8c住	埋土		L横糸文。					Ⅱ6	183
734	ⅦD8c住	Q1埋土	波状口縁。	R木目状横糸文。					Ⅱ6	183
735	ⅦD8c住	埋土		L縦線。						183
736	ⅦD8c住	Q4埋土	L R側面圧痕。						Ⅱ8a7	183
737	ⅦD8c住	Q4埋土	L R側面圧痕。						Ⅱ8a7	183
738	ⅦD8c住	埋土上位	R側面圧痕。						Ⅱ8a7	183
739	ⅦD8c住	Q4埋土	L R側面圧痕。						Ⅱ8a7	183
740	ⅦD8c住	Q4埋土	L R多線格条体圧痕。						Ⅱ8b	183
741	ⅦD8c住	Q4埋土	柳歯状沈線。							183
742	ⅦD8c住	埋土上位	柳歯状沈線格条体沈線(四線)。						Ⅱ7	183
743	ⅦD8c住	埋土上位	沈線(四線)。						Ⅱ7	183
744	ⅦD8c住	埋土上位	口唇部伸縮工具による圧痕。半截竹管平行沈線(環状)、垂状沈線。						Ⅱ7	183
745	ⅦD8c住	埋土上位	半截竹管波状沈線。						Ⅱ7b	183
746	ⅦD8c住	埋土上位	波状沈線(四線)。						Ⅱ7b	183
747	ⅦD8c住	埋土上位	半截竹管平行沈線。	L横糸文。					Ⅱ7b	183
748	ⅦD8c住	埋土上位	半截竹管平行沈線。	L縦線。					Ⅱ7b	184

第163図 ⅦD8c住居跡出土遺物(1)



番号	出土地点	層位	器種	石質	産地	長さ	幅	厚さ	重さ	備考	分類	写真
749	ⅧD8c住	Q3層土	石鏃	凝灰質硬質泥岩	宇石西部	2.4	2.0	0.4	2.51	尖細部折損	I 2	184
750	ⅧD8c住	埋土	尖頭器縁石器	硬質泥岩	宇石西部	3.8	2.5	0.6	7.20			184
751	ⅧD8c住	Q1層土	石鏃	硬質泥岩	宇石西部	4.4	6.2	0.6	15.45		II b	184
752	ⅧD8c住	埋土	石鏃	硬質泥岩	宇石西部	7.3	3.0	1.3	38.71	磨面跡、縁部と破損に注意。	II	184
753	ⅧD8c住	Q4埋土	不定形石器	凝灰泥岩	宇石西部	4.0	4.2	0.9	38.44	資料の複製を利用して、刃部を形成する。	I a 1	184
754	ⅧD8c住	Q3埋土	不定形石器	粘板岩	北上山地	4.4	3.1	0.5	14.52	加工が粗く大きい。	I c 2	184
755	ⅧD8c住	Q4埋土	不定形石器	硬質泥岩	宇石西部	2.4	5.9	1.0	18.25		I c	184
756	ⅧD8c住	埋土上位	扇形器縁石器	硬砂岩	北上山地	9.0	8.0	5.0	960	片面に磨面。平端で先状あり。	I	184
757	ⅧD8c住	埋土上位	扇形器縁石器	硬砂岩	北上山地	10.8	8.4	5.0	970	片面と側面に磨面。平端部は先状あり。	I	184
758	ⅧD8c住	埋土上位	石皿・白石皿	凝灰質硬砂岩	北上山地	11.0	11.7	4.0	970			184

第184図 ⅧD8c住居跡出土遺物(2)

時期 特定する資料を欠くが、検出状況・出土遺物から縄文時代前期末葉に属すると考えられる。

#### ⅧD 8 h 住居跡 (遺構番号81)

遺構 (第165図、写真図版54)

〈検出状況〉西尾根南斜面中腹に位置する。小角礫含みの褐色土層上面で検出した。西壁の一部には倒木痕があり攪乱を受けている。

〈形状・規模〉径2.5 m程度の不整な円形である。

〈壁・壁高〉上半部は褐色土層、下半部は基盤層で、ほぼ直立する。壁高は、東壁41cm、南壁6 cm、北壁84cmである。

〈埋土〉上位は暗褐色土、下位は褐色土を主体とする。いずれも小角礫を多量に含み固く締まっている。

〈床・柱穴・施設〉斜面上方に当たる北側は基盤層、南側は褐色土層で、埋土より固く締まっている。殆ど凹凸がなくほぼ水平である。柱穴状ピットが2個検出されているが位置・規模から柱穴でない可能性が高い。北壁際の床面に扁平な自然礫が検出された。加工痕も使用痕も見られないが、他の住居にも同様の例があることから記載しておく。規模は18×35cm、厚さ5 cmである。石質は凝灰質千枚岩で古生界の北上山地である。

〈炉〉南壁寄りに石囲炉が1基検出された。外法で東西55cm、南北62cmのやや南北に長い円形に、長さが10～11cmの大きさの11個の角礫を用いている。礫を埋めた掘り方は検出されなかった。礫の内側の部分には強い熱を受けた痕跡が残る。内側には一面に焼土が形成されている。厚さは最大で6 cmで固く締まっており、西側は一部攪乱を受けている。

遺物 (第165図、写真図版185)

〈土器〉埋土から560 g出土した。いずれも小破片である。図示した他には木目状燃糸文、網目状燃糸文が多く、横位羽状縄文(第1種結束)、縦位綾絡文が少量出土している。

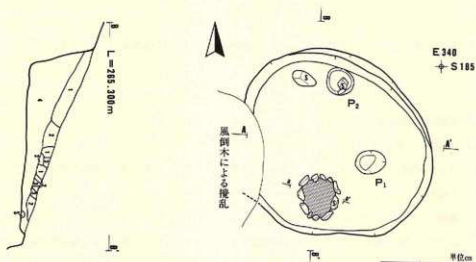
〈石器〉図示した1点のみの出土である。

時期 特定する資料を欠くが、検出状況・出土遺物から縄文時代前期後葉から中期初頭と考えられる。

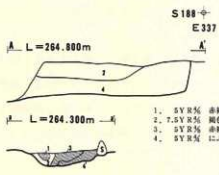
#### ⅧD 8 i 住居跡 (遺構番号82)

遺構 (第166図、写真図版55)

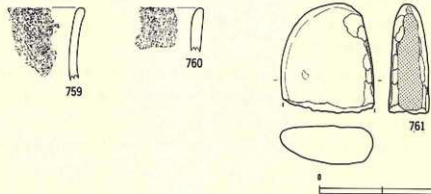
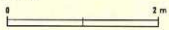
〈検出状況〉西尾根南斜面に位置する。腐植土の黒色土上面でⅧD 8 i - 2住居跡、ⅧD 8 i - 3住居跡の北壁のラインを検出し、本住居はその精査で確認された。南側は耕作のため削平



単位:cm		
P 番号	P <sub>1</sub>	P <sub>2</sub>
開口直径	30×42	36×39
深さ	12	21



- A' ... A' B' ... B'
1. 7.SY R% 赤褐色土 焼土、固くしまっている。
  2. 7.SY R% 褐色土 固くしまっている。
  3. 7.SY R% 赤褐色土 しまりあり。
  4. 7.SY R% におい赤褐色土 焼土、固くしまっている。



番号	出土地点	層位	文様	地文	口径	底径	高さ	備考	分類	写真		
759	ⅦD8h住	埋土		L 京羅, 片結び縦位線繪文。						185		
760	ⅦD8h住	埋土		R 網目状捺赤文。					Ⅱ 6	185		
番号	出土地点	層位	器種	石質	産地	長さ	幅	厚さ	重さ	備考	分類	写真
761	ⅦD8h住	埋土	磁胎砂類A群	岡輝石安山岩	熊野山池	(6.5)	7.4	2.9	(270)		Ⅲ a	185

第165図 ⅦD8h住居跡・出土遺物

されていて不明である。

ⅦD6h-2住居跡、ⅦD8i-2住居跡、ⅦD8i-3住居跡と重複する。ⅦD6h-2住居跡の埋土断面観察から、本住居のほうが古い。ⅦD8i-2住居跡、ⅦD8i-3住居跡は本住居の床面下から検出されており、本住居のほうが新しい。これを図式化すると次のようになる。

(新) ⅦD6h-2住居跡←ⅦD8i住居跡←ⅦD8i-2住居跡←ⅦD8i-3住居跡 (旧)

〈形状・規模〉南側は不明であるが、方形と推定される。規模は残存値で2.6×3.8mである。

〈壁・壁高〉基盤層である黄褐色土で固く締まっており、やや外傾する。壁高は東壁15cm、北壁10cmである。

〈埋土〉上位は褐色土、下位は黒色土が主体となる。北壁際には角礫混じりの極暗褐色土堆積する。

〈床・柱穴・施設〉焼土より北側は基盤層である黄褐色土で固く締まっている。南側は基本層序では黒色土であるが、にぶい黄褐色土を貼って斜面を平らにしている。柱穴は5個検出された。埋土・規模ではP2とP3がほぼ等しいが、位置・規模からはP1とP4が主柱穴となるかもしれない。周溝が、残存する壁際に全周する。規模は幅15cm、深さ10cm程度で、埋土は10YR2/2黒色土でP2やP3の埋土に近い。

〈炉〉地床炉1基を検出した。焼土は100×160cmの不整形に分布し、厚さは最大7cmである。断面はレンズ状で固く締まっている。

遺物 (第167図、写真図版185)

〈土器〉埋土から505g出土した。762は器厚がやや厚く、内面は凹凸がある。底部が外側に張り出す。763は隆帯を貼り付けて鋸歯状としたものである。図示した他には木目状燃糸文、網目状燃糸文の胴部破片が出土している。

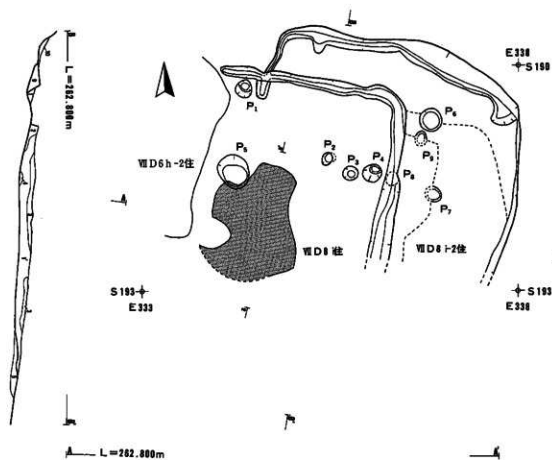
〈石器〉765は尖頭部の形成に着目し、石錐とした。他にフレーク5点が埋土から出土している。

時期 特定する資料を欠くが、出土遺物から縄文時代前期後葉から末葉に属するものと推定される。

ⅦD8i-2住居跡 (遺構番号83)

遺構 (第166図、写真図版55図)

〈検出状況〉腐植土である黒色土上面で本住居の北壁のラインを検出した。ⅦD8i住居跡、ⅦD8i-3住居跡と重複する。埋土断面観察及び貼り床の切り合いなどから、ⅦD8i住居跡より本住居のほうが古い。壁・焼土・周溝の切り合いから、本住居はⅦD8i-3住居跡よ



A...A' B...B'

- |                 |                  |                 |                       |
|-----------------|------------------|-----------------|-----------------------|
| 1. 7.5Y R% 褐色土  | しまりあり。           | 6. 10Y R% 黄褐色土  |                       |
| 2. 7.5Y R% 暗褐色土 | 1'は、1層に小角礫を少量含む。 | 7. 10Y R% 黄褐色土  | 黄褐色土を粒状に含む。           |
| 3. 7.5Y R% 暗褐色土 | しまりあり。小角礫を含む。    | 8. 10Y R% 黄褐色土  | (WD 8 i-2住埋土)         |
| 4. 7.5Y R% 暗褐色土 | しまりあり。小角礫を少量含む。  | 9. 10Y R% 黄褐色土  | 黄褐色土を含む。(WD 8 i-2住埋土) |
| 5. 7.5Y R% 褐色土  | しまりあり。           | 10. 10Y R% 黄褐色土 | しまりあり。                |
|                 |                  | 11. 10Y R% 黄褐色土 | しまりあり。黄褐色土を含む。        |



- |                 |          |
|-----------------|----------|
| 1. 7.5Y R% 褐色土  | 粒土を含む。   |
| 2. 5Y R% 明赤褐色土  | 粒土。      |
| 3. 7.5Y R% 黄褐色土 | 粒土を含む。   |
| 4. 10Y R% 褐色土   | 粒土を含む。   |
| 5. 10Y R% 黄褐色土  | 粒土。      |
| 6. 10Y R% 黄褐色土  | 粒土を多く含む。 |

P 番号	単位mm									
	P <sub>1</sub>	P <sub>2</sub>	P <sub>3</sub>	P <sub>4</sub>	P <sub>5</sub>	P <sub>6</sub>	P <sub>7</sub>	P <sub>8</sub>	P <sub>9</sub>	P <sub>7</sub>
開口部径	20×23	13×17	18×20	22×27	40×45	20×30	18×23	16×17	15×18	
深さ	34	25	25	37	29	16	8	25	15	
埋土	10Y R% 灰黄褐色	10Y R% 黄褐色	10Y R% 黄褐色	10Y R% 黄褐色	10Y R% 黄褐色	10Y R% 黄褐色	10Y R% 黄褐色	10Y R% 黄褐色	10Y R% 黄褐色	10Y R% 黄褐色



第186図 WD 8 i・WD 8 i-2住居跡

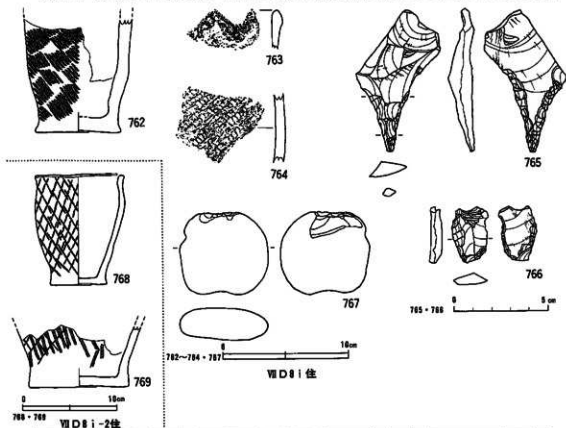
り新しい。

<形状・規模>西側と南側は不明であるが、方形と推定される。規模は、東西3.4m、南北は残存値で3.4mである。

<壁・壁高>上半部は腐植土の黒色土で下半部は基盤層であり、やや外傾する。壁高は東壁14cm、北壁35cmである。

<埋土>縮まりある黒褐色土で単層として把握した。

<床・柱穴・施設>北壁寄りには基盤層を床面としているが、南側は標準土層の黒色土に貼り床をしている。厚さ7cmの10YR5/4にぶい黄褐色土を貼り床に用いているが、大半はⅧD8i住



番号	出土地点	層位	文様	地文	口径	底径	高さ	備考	分類	写真
762	ⅧD8i住	埋土		L.R編。	-	9.6	12.8		II 6	185
763	ⅧD8i住	埋土	網状波状跡。香灰に配厚。						II 6 + 7	185
764	ⅧD8i住	埋土		扇形編文					II 6	185
768	ⅧD8i-2住	柱穴内		R網目状併赤文。	9.5	6.0	11.6		II 6 b 4	185
769	ⅧD8i-2住	床		L網赤文。	-	30.4	4.5		II 6	185

番号	出土地点	層位	器種	石質	産地	長さ	幅	厚さ	重さ	備考	分類	写真
765	ⅧD8i住	埋土	石鏃	粘板岩	北上山地	7.5	4.5	1.3	17.25	尖部の一部欠損。素材の形を大きく残す。	II 6	185
766	ⅧD8i住	埋土	不定形石鏃	粘板岩	北上山地	2.9	1.9	0.6	3.05	素材の一部を大きく残す。薄い。	I c 2	185
767	ⅧD8i住	Q1埋土	石鏃	堆長質凝灰岩	北上山地	6.5	7.1	2.5	185		II	185

第167図 ⅧD8i・ⅧD8i-2住層跡出土遺物

居跡に切られて、東側のみ残存する。柱穴は、P6～P8の4個が確定であるが、P5もⅦD8 i 住居跡より先行することから、本住居に属するものと思われる。埋土にはいずれも細かな黄褐色土ブロックを含む。周溝が北壁際と西壁際の一部に巡る。幅10cm深さ14cm程度で埋土は灰黄褐色土で、住居の埋土と異なる。

〈炉〉検出されなかった。

遺物（第167図、写真図版185）

〈土器〉床面から600g、埋土から340g出土した。768はP4の埋土から出土した完形品である。口唇部は平らになでられ、外側にめくれるようにやや外反する。外面にススが付着している。

時期 出土遺物から縄文前期後葉から末葉に属すると考えられる。

### ⅦD8 i-3 住居跡（造構番号84）

遺構（第168図、写真図版55）

〈検出状況〉ⅦD8 i-2 住居跡の精査で、それに先行する壁と焼土を検出した。大半はⅦD8 i-2 住居跡によって切れ、詳細は不明である。

〈形状・規模〉不明である。

〈壁・壁高〉北壁の一部のみ残存するが、基盤層である黄褐色土で固く締まっており、外傾する。壁高は10cmである。

〈埋土〉ⅦD8 i-2 住居跡の床面を構成する黒褐色土であり、固く締まっている。

〈床・柱穴・施設〉北側は基盤層である黄褐色土、東側はⅦD8 i-2 住居跡の貼り床の10cm下で黒褐色土でいずれも固く締まっている。東側の壁はダメ押しによっても確認できず、床面がどこまで広がるかは分からなかった。

〈炉〉地床炉を1基検出した。ⅦD8 i 住居跡の周溝によってその中央部を切れ、かつⅦD8 i-2 住居跡の貼り床の下から検出されている。焼土は70×100cmの不整形に分布し、厚さは最大4cmで、断面形はレンズ状である。

遺物（第168図、写真図版185）

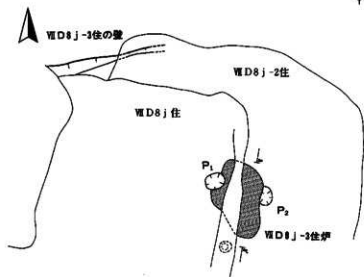
〈土器〉床面から370g、埋土から160g出土した。図示した他には木目状燃糸文の破片がある。

〈石器〉773はエンド方向に階段状の剥離が施されている。ノッチ状の部分も観察される。775はよく研磨され光沢を帯びる。刃部に大きめの刃こぼれが観察される。

時期 重複関係・床面出土土器から、縄文前期後葉から末葉に属すると推定される。



E 338  
+ S 188



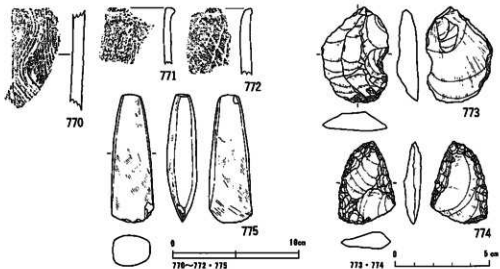
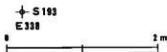
単位cm

P番号	P <sub>1</sub>	P <sub>2</sub>
開口部径	20×25	12×25
深さ	26	6

L = 262.300m<sub>北</sub>

5XR瓦 5YR瓦 赤褐色土 黄土

S 193 +  
E 334



番号	出土地点	層位	文様	地文	口径	深さ	器高	備考	分類	写真
770	WD8 i - 3 住	床面	模面状文様。						Ⅱ 9	185
771	WD8 i - 3 住	埋土	波状口縁。	L様赤文。					Ⅱ 6	185
772	WD8 i - 3 住	床下		反斜目状赤赤文。					Ⅱ 6	185

番号	出土地点	層位	品類	材質	産地	長さ	幅	厚さ	備考	分類	写真	
773	WD8 i - 3 住	埋土	不定形石器	硬質泥岩	甲石西部	5.1	3.6	1.1	17.68	ノッチ状の部分あり。	Ⅰ a 2	185
774	WD8 i - 3 住	埋土	不定形石器	硬質泥岩	甲石西部	4.4	3.0	0.9	10.43	扁平。片断性に欠ける。	Ⅰ b 2	185
775	WD8 i - 3 住	床面	磨製石斧	板岩	北上山地	10.1	3.3	2.3	130	擦り切り手法。刃こぼれ。	Ⅲ	185

第188図 WD8 i - 3住居跡・出土遺物

#### ⅦD9c 住居跡 (遺構番号85)

遺構 (第169図、写真図版56)

〈検出状況〉西尾根東斜面中腹に位置する。小角礫を含む暗褐色土層上面で検出した。斜面のため南側の一部は流失している。北側でⅦD9c-2住居跡と重複する。東西方向および南北方向の埋土断面観察から、本住居のほうが古い。

〈形状・規模〉長軸が等高線にほぼ平行する長方形である。北側部分が重複のため、本住居の範囲は不明であるが、残存値で4.9×4.5mである。

ⅦD9c-2住居跡の西側に一段高くなっている部分がある。これが本住居の床面である可能性もあるが、埋土はⅦD9c-2住居跡のものと同じであり同住居のテラス状施設として把握した。

〈壁・壁高〉斜面上方に当たる西壁は上半部は暗褐色土層、下半部は基盤層で、他は暗褐色土層であり、ほぼ直立する。壁高は、南壁9cm、西壁24cm、北壁30cmである。

〈埋土〉3層で構成され、上位は締まりを欠く黒褐色土とやや締まる暗褐色土、下位は締まりを欠く褐色土である。南壁寄りに部分的に粉炭を含む。

〈床・柱穴・施設〉南西四半分は基盤層を、他は暗褐色土層を床とし、斜面に沿ってやや傾斜する。柱穴状ピットは3個検出されたが、規模・位置に対応関係は見出せない。断面形状からはP2は柱穴とはならないであろう。

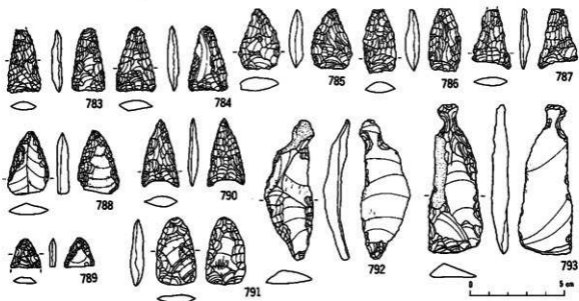
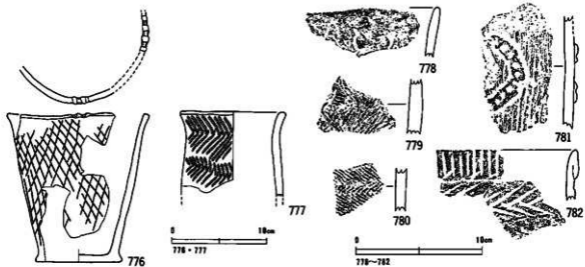
〈炉〉地床炉が6基検出された。焼土の規模は表に示した。特に1号炉、4号炉は強い焼成を受けている。4号炉のはほぼ中央部、焼土の下から埋設された土器が検出された。4号炉と埋設土器との関係は不明であるが、焼土は同土器の上に形成されていること、土器の法量と焼土の範囲などから、土器埋設炉とは性格を異にすると思われる。

遺物 (第170・171図、写真図版186・187)

〈土器〉本住居とⅦD9c-2住居跡の床面および埋土から合わせて10kgほど出土しているが、住居の範囲を確認する前にとりあげたものもあり、埋土出土の土器についてはその帰属を明確にすることができないものが多い。776は4号炉の焼土の下から検出された埋設土器である。口唇部の一部に棒状の工具を押圧して装飾性をもたせている。押圧が2単位の部分と4単位以上の部分が、対向してそれぞれ1対あるものと考えられる。777は胴部がややふくらみをもち、口縁部で緩やかに外反する。779は縄文施文後に半截竹管により平行沈線が施されるが「整正なものではない。

〈石器〉783、786は尖頭部が欠損しているが、前者は縦方向の衝撃によるもの、後者は横折れである。791は偏平ではほぼ左右対称であるが尖頭部の形成が弱い。803は両面に自然面を残す。表面の先端部は丁寧な加工が施されている。図示した他にUフレ2点(うち床面1点)、

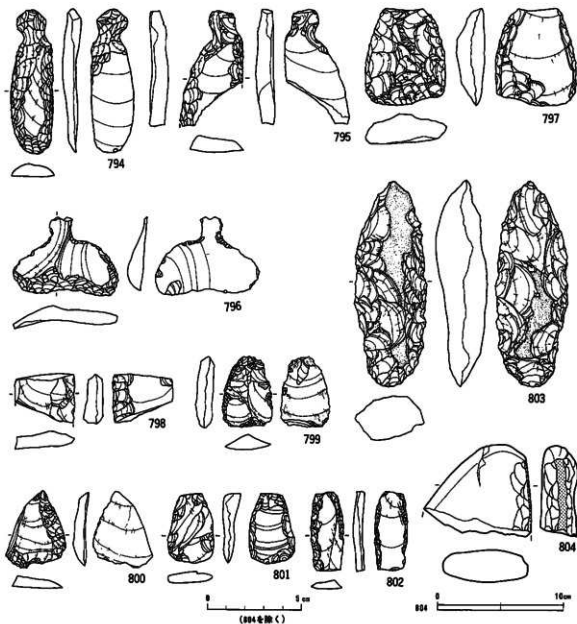




番号	出土地点	層位	文様	地文	口部 底面 器高	備考	分類	写真
776	ⅧD9c住	埋没土器	一面口縁部伸張工具による斜め(1種類4小所?)	及網目状燃承文。	(口) 9.0	(底) 15.9		Ⅷb 1 185
777	ⅧD9c住	埋土		L R X R L R 1 種類並列燃承文。	(口) 2	(底) 8.7		185
778	ⅧD9c住	床面		縦位線筋文。				186
779	ⅧD9c住	床面	半筋竹管平行沈線。	R L ?				186
780	ⅧD9c住	床面		L R X R L R 1 種類並列燃承文。			地文良好, 焼色, 厚薄。	186
781	ⅧD9c住	埋土	陸上伸張工具跡あり。(並列凹凸あり)	及燃承文。				Ⅷb 7 186
782	ⅧD9c住	埋土	沈線(凹線)。					Ⅷ 7 185

番号	出土地点	層位	器種	石質	産地	長さ	幅	厚さ	重さ	備考	分類	写真
783	ⅧD9c住	埋土	石胎	硬質泥岩	宇石西部	0.4	1.8	0.6	(2.54)		1 1	185
784	ⅧD9c住	埋土	石胎	粘板岩	北上山地	3.4	2.1	0.6	3.12		1 2	185
785	ⅧD9c住	埋土	石胎	粘板岩	北上山地	3.2	2.1	0.7	0.28		1 2	185
786	ⅧD9c住	埋土	石胎	粘板岩	北上山地	3.3	1.7	0.5	3.81		1 3	185
787	ⅧD9c住	埋土	石胎	硬質凝灰質泥岩	宇石西部	(3.1)	2.0	0.4	(1.48)		Ⅷb 4	185
788	ⅧD9c住	埋土	石胎	埴質泥岩	宇石西部	2.3	2.1	0.6	4.23		Ⅷ 2	185
789	ⅧD9c住	埋土	石胎	凝灰質硬質泥岩	宇石西部	(0.5)	1.5	0.3	(0.94)	基部欠損。尖部跡の可能性もある。		185
790	ⅧD9c住	埋土	石胎	埴質泥岩	宇石西部	3.4	1.9	0.5	2.77		Ⅷe 2	185
791	ⅧD9c住	埋土	尖頭形礫石器	硬質凝灰質泥岩	宇石西部	3.6	2.1	0.5	4.56			185
792	ⅧD9c住	埋土	石胎	硬質泥岩	宇石西部	7.4	2.6	1.3	(11.13)	打点は欠陥部。葉状の跡を大きく残している。	1 a 2	185
793	ⅧD9c住	埋土	石胎	硬質泥岩	宇石西部	8.0	2.9	0.9	(15.20)		1 b 2	185

第170図 ⅧD9c住居跡出土遺物



番号	出土地点	層位	器種	石質	産地	長さ	幅	厚さ	重さ	備考	分類	写真
794	ⅧD9c住	埋土	石匙	粘板岩	北上山地	7.7	2.2	0.6	15.63		1 b 3	186
795	ⅧD9c住	埋土	石匙	赤色凝灰岩	北上山地	(6.1)	(3.4)	1.0	(15.10)		1	186
796	ⅧD9c住	埋土	石匙	地質泥岩	甲石西側	4.2	5.5	1.3	18.82	刃縁の残、つまみ部がすり返し深い。	11 b	187
797	ⅧD9c住	埋土	石質	地質凝結砂岩	甲石西側	5.1	4.3	1.5	23.31	刃縁は粗い加工。	1	187
798	ⅧD9c住	埋土	不定形石器	粘板岩	北上山地	2.6	3.2	0.8	8.32		1 a 1	187
799	ⅧD9c住	埋土	不定形石器	泥質凝灰岩	甲石西側	3.7	2.6	0.8	7.72		1 a 2	187
800	ⅧD9c住	床面	不定形石器	地質泥岩	甲石西側	4.0	3.3	0.6	6.14	典型的なスクレーパーエッジをもつ。	1 b 2	187
801	ⅧD9c住	埋土	不定形石器	硬質泥岩	甲石西側	4.2	2.0	0.7	6.86		1 d 2	187
802	ⅧD9c住	埋土	不定形石器	粘板岩	北上山地	4.2	1.8	0.4	5.21	万部側面視は扇雲状となる。	1 d 2	187
803	ⅧD9c住	埋土	打製石斧	地質泥岩	甲石西側	10.8	3.9	2.3	94.57	両面に自然面。刃部は丁寧な削製がある。	11	187
804	ⅧD9c住	埋土	鉋形器類A群	地質凝結砂岩	北上山地	(7.6)	(6.6)	2.4	(24.0)		11 b	187

第171図 ⅧD9c住層跡出土遺物(2)

フレーク7点(うち床面3点)が出土している。

時期 床面出土土器片・重複関係から、縄文前期後葉から末葉に属すると考えられる。

#### ⅧD9c-2住居跡(遺構番号86)

遺構(第169図、写真図版56)

<検出状況>ⅧD9c住居跡と同時に検出した。埋土観察から同住居より新しい。斜面上方にあたる西側の床面が一段高く、テラス状の施設となる。

<形状・規模>長軸が等高線にほぼ直交する長方形で、3.3×4.2mである。

<壁・壁高>西壁および北・南壁の一部は基盤層である黄褐色土で他は小角礫を含む暗褐色土層である。西壁は外傾し、他はほぼ直立する。壁高は東壁7cm、南壁25cm、北壁25cmである。

<埋土>締めりある褐色～暗褐色土を主体とする。床上では粉炭を含む。

<床・柱穴・施設>西側は基盤層で、中央から東側にかけては暗褐色土である。柱穴は2個検出された。径はほぼ等しいが深さが大きく異なり、対応するものとは考えにくい。

<炉>地床炉1基を検出した。焼土は29×101cmの不整形に分布し、厚さは最大3cmである。

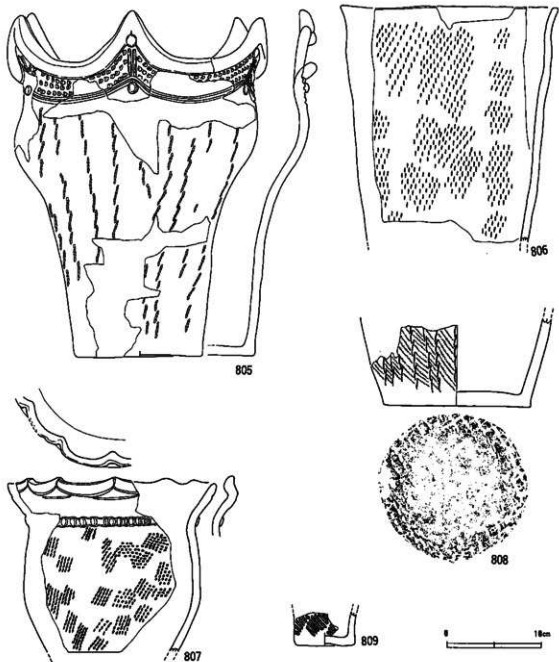
断面はレンズ状で固く締まっている。

遺物(第172～174図、写真図版187～189)

<土器>810は南東壁際に横倒しの状態で一括出土した土器である。埋設土器の可能性を考えて精査したが、掘り込みは確認できなかった。口縁部は欠損しているので器形は明らかではないが、胴中央部が膨らむ。地文は2段の縄を縦回転したもので、無文帯は磨り消したのではなく無施文によるものである。内部の土は住居埋土の最下層土にほぼ等しい。805、808、806は床面からの出土である。805は折り返しによる複合口縁で6つの頂部を有する大波状口縁である。頂部の隆帯下と口縁部文様帯の下端にボタン状の小突起が貼り付けられる。口縁部は半截竹管の内面を用いた平行沈線で文様帯を区画し、その間を円形の竹管による斜位の刺突文によって充填する。806の地文は2段の縄を用いた多軸絡条体による。807は上面観が花卉状口縁の変形となる。口縁部に棒状工具により沈線を施し、頸部には扁平な粘土紐を貼り付け、その上には爪形の圧痕を施す。地文は806に類似しており多軸絡条体であると思われるが、節が若干異なる。原体復元はできなかった。821は波長単位が大きい花卉状口縁である。

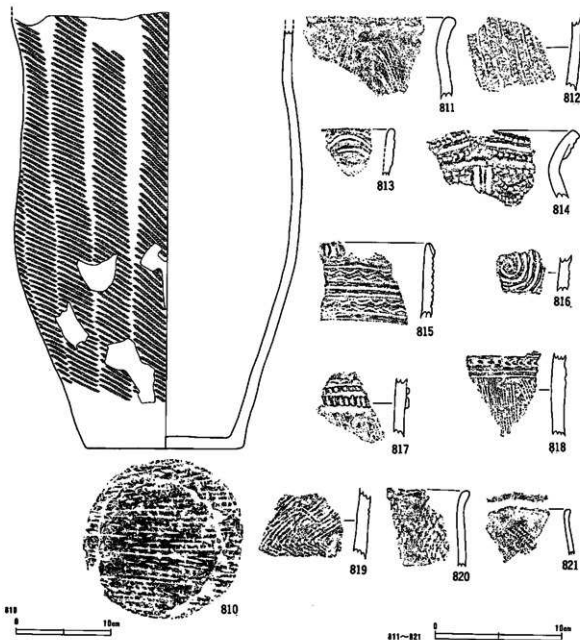
<石器>823は形にまとまりがあるが尖頭部を意識した加工はしていない。831は側面観が鋸歯状となる。835は石斧の欠損品であるが、全体的に敲打痕が残る。図示した他に岩手火山起源の溶岩1点、フレーク13点(うち1点が床面)が出土している。

時期 床面出土土器から、縄文前期末葉に属すると考えられる。



番号	出土地点	層位	支線	地文	口徑	底徑	高さ	備考	分類	写真
805	VII D 9 c-2 住	採掘	袋状口縁、袋状口縁、裾部下フノ袋状縁、袋状口縁に上と下と斜めハノ刺孔	縦紋斜刺文。	26.0	13.5	30.7		II 7 b	187
806	VII D 9 c-2 住	採掘		多輪斜条状。	20.0	—	25.0			188
807	VII D 9 c-2 住	採掘	袋状口縁口縁、袋状口縁、裾部下フノ袋状縁	多輪斜条状(詳細不明)	20.0	—	18.0			188
808	VII D 9 c-2 住	採掘		L 縦、縦位縞刺文。	—	15.7	(9.3)		銅代貨。	188
809	VII D 9 c-2 住	埋土		R L 縦。	—	8.4	(3.4)			188

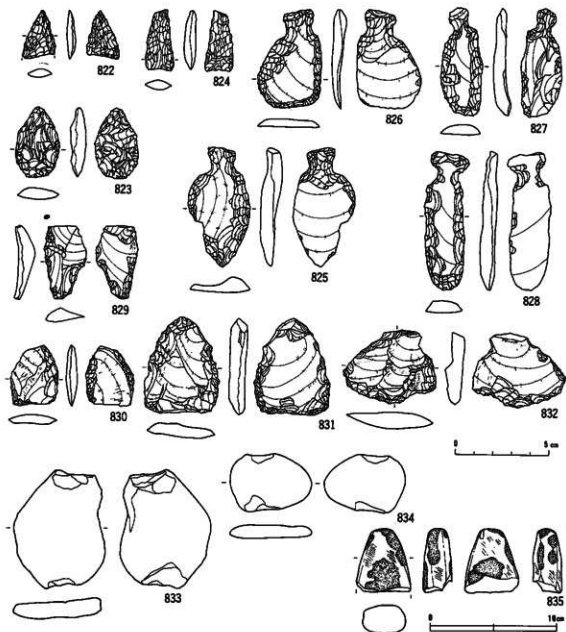
第172図 VII D 9 c-2住層跡出土遺物(1)



番号	出土地点	層位	文様	地文	口徑	底径	高さ	備考	分類	写真
810	ⅧD9c-2住	床面	縦位に横文帯あり。	L.R横。	—	17.0(47.0)			100	
811	ⅧD9c-2住	床面		R2条による木目状横文。					Ⅱ6	100
812	ⅧD9c-2住	床面		縦帯横文					100	
813	ⅧD9c-2住	埴土	沈跡(円縮)。						Ⅱ7	100
814	ⅧD9c-2住	埴土	竹管刺突(外周を使用)。沈跡(円縮)。						Ⅱ7b	100
815	ⅧD9c-2住	埴土	三角彫刻文。半篋竹管平行沈跡。						Ⅲ1a	100
816	ⅧD9c-2住	埴土	沈跡(円縮)。						Ⅲ1	100
817	ⅧD9c-2住	埴土	陰帯上押状工具による刻み。	R横条文。					100	
818	ⅧD9c-2住	埴土	半篋竹管刺突。沈跡。	L木目状横条文。					100	
819	ⅧD9c-2住	埴土	半篋竹管平行沈跡。	L.R×R.L第1種結束環状横文。					100	
820	ⅧD9c-2住	埴土		L.R多線縮条伴。					100	
821	ⅧD9c-2住	埴土	花卉状口縁。	R.L横。					Ⅱ6b.x	100

第173図 ⅧD9c-2住居跡出土遺物(2)





番号	出土地点	層位	種類	材質	産地	長さ	幅	厚さ	重さ	備考	分類	写真
822	ⅦD9c-2住	埋土	石鏃	凝灰岩	礫石産地	2.5	1.7	0.5	1.20		I b 2	189
823	ⅦD9c-2住	埋土	尖頭錐石鏃	塊状凝灰岩	礫石産地	3.7	2.3	0.6	6.30		I c 1	189
824	ⅦD9c-2住	埋土	石鏃	粘板岩	北上山地	3.1	1.5	0.5	2.26		I a 1	189
825	ⅦD9c-2住	埋土	石鏃	粘板岩	北上山地	6.3	2.2	1.0	14.42		I b 1	189
826	ⅦD9c-2住	埋土	石鏃	塊状凝灰岩	礫石産地	5.2	3.4	0.7	13.03		I b 1	189
827	ⅦD9c-2住	埋土	石鏃	粘板岩	北上山地	5.7	2.2	1.0	9.00	打点は横。	I b 3	189
828	ⅦD9c-2住	埋土	石鏃	砂質粘板岩	北上山地	7.3	2.4	0.8	14.46	打点はつまみ方向。	I b 3	189
829	ⅦD9c-2住	埋土	不定形石鏃	粘板岩	北上山地	3.8	2.2	1.1	5.73		I c 1	189
830	ⅦD9c-2住	埋土	不定形石鏃	硬質凝灰岩	礫石産地	3.2	2.5	0.5	4.33	扁平。両側性には欠けるが縁面加工。	I b 2	189
831	ⅦD9c-2住	埋土	不定形石鏃	硬質凝灰岩	礫石産地	5.1	4.0	0.7	18.85		II	189
832	ⅦD9c-2住	埋土	不定形石鏃	硬質凝灰岩	礫石産地	3.9	4.9	0.9	14.79	幅広い縁面	II	189
833	ⅦD9c-2住	べら土埋土	石鏃	凝灰岩千枚岩	北上山地	9.3	7.3	1.3	135		I	189
834	ⅦD9c-2住	埋土	石鏃	凝灰岩	北上山地	4.5	6.5	1.3	50		II	189
835	ⅦD9c-2住	埋土	磨製石斧	凝灰岩	北上山地	(5.1)	(4.4)	2.4	(80)			189

第174図 ⅦD9c-2住居跡出土遺物(3)

ⅦD9f住居跡 (遺構番号87)

遺構 (第175図、写真図版57)

<検出状況>西尾根南東斜面中腹に位置する。小角礫を含む暗褐色土層上面で検出した。東側は壁の立上がりを確認できなかった。南側は斜面のため流失している。

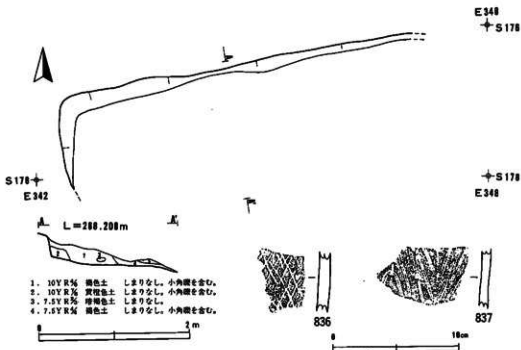
<形状・規模>詳細は不明であるが、長軸が等高線にほぼ平行する長方形と推定される。規模は、残存値で東西5m、南北1.8mである。

<壁・壁高>基盤層である明褐色土で固く締まっており、ほぼ直立する。壁高は西壁41cm、北壁34cmである。

<埋土>締まりを欠く褐色～黄褐色土を主体とし、壁際にはやや大きめの礫を含む黄褐色土が堆積する。崩落土と考えられる。

<床・柱穴・施設>北壁寄りには基盤層である明褐色土で、南側は褐色土である。斜面に沿ってやや傾斜し、比高15cm程である。柱穴は検出されなかった。

<伊>検出されなかった。



番号	出土地点	層位	文様	地文	口径	底径	器高	番号	分類	写真
836	ⅦD9f住	埋土		R網目状漆朱文。					Ⅱ6	190
837	ⅦD9f住	埋土		L本目条漆朱文。					Ⅱ6	190

第175図 ⅦD9f住居跡・出土遺物

遺物 (第175図、写真図版190)

<土器>埋土から610g出土した。図示した他に縦位綾結文の胴部破片が出土している。

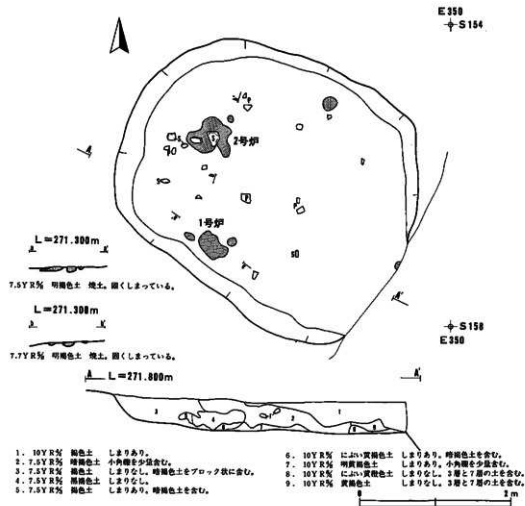
<石器>フレークが7点埋土から出土したのみである。

時期 特定する資料を欠くが、検出状況・出土遺物から縄文時代後葉から末葉に属すると考えられる。

ⅧD0b住居跡 (遺構番号88)

遺構 (第176図、写真図版57)

<検出状況>西尾根東斜面中腹に位置する。再堆積層上面で検出した。東側は試掘トレンチに

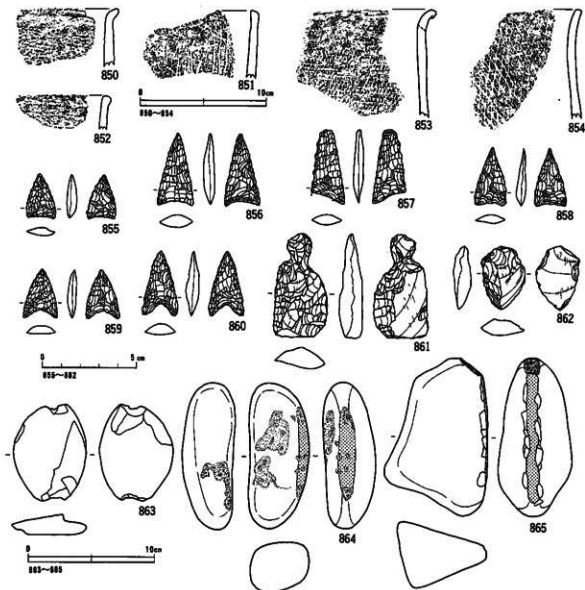


第176図 ⅧD0b住居跡



番号	出土地点	層位	文様	地文	口径	底径	器高	備考	分類	写真
838	Ⅶ D0b 住	床面	縦線並列模様、口唇部と器身部上竹管刺突。	L. 漆朱文。	26.0	16.0	47.0	840、842と同一個体。	Ⅱ 6 a 7	190
839	Ⅶ D0b 住	埴土	縦合口縁、ボタン状突起。	L. 朱文。	12.0	-	41.0		Ⅱ 6 a 7	190
840	Ⅶ D0b 住	床面	縦線並列模様、口唇部に竹管刺突。	L. 漆朱文。				838、842と同一個体。	Ⅱ 6 a 7	190
841	Ⅶ D0b 住	埴土上	文様。						Ⅱ 7	190
842	Ⅶ D0b 住	床面	口唇部竹管刺突。					838、840と同一個体。	Ⅱ 6 a 7	190
843	Ⅶ D0b 住	埴土	口縁部縦線、器身上部部縦線、上縁1部のみ。	R. 漆朱文。					Ⅱ 6 a 7	190
844	Ⅶ D0b 住	埴土	器身上部部(口縁部)、一番竹管刺突。	L. 縦、縦位線並文。					Ⅱ 6 b 1	190
845	Ⅶ D0b 住	埴土	器身上部部縦線、	R. 2条による木目状漆朱文。					Ⅱ 6 b 7	190
846	Ⅶ D0b 住	埴土	平直竹管平行突起、縦線状。	L. R. 縦、縦位線並文。					Ⅱ 1	190
847	Ⅶ D0b 住	埴土	平直竹管平行突起。					埴土に粗砂多く含む。	Ⅱ 7	190
848	Ⅶ D0b 住	埴土	L. R. 縦線並文。						Ⅱ 1	190
849	Ⅶ D0b 住	埴土	波状口縁、比高。						Ⅱ 1	190

第177図 Ⅶ D0b 住居跡出土遺物(1)



番号	出土地点	層位	文様	地文	口縁部	底面	器高	器径	分類	写真
850	ⅧD0b住	埴土		多餘餘糸付?					190	
851	ⅧD0b住	埴土	波状口縁。	R 襷糸文。					II 6	190
852	ⅧD0b住	埴土	L R 側面圧痕。						II 8 a	190
853	ⅧD0b住	埴土		多餘餘糸付。						
854	ⅧD0b住	埴土		R 網目状襷糸文。				外面スス付着。	II 6 b	190

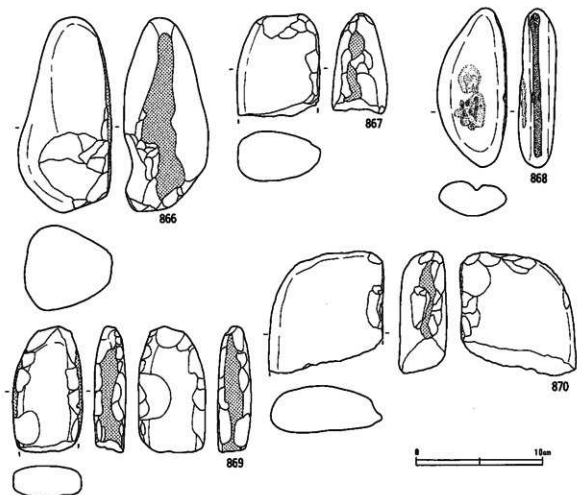
番号	出土地点	層位	器種	材質	産地	長さ	幅	厚さ	重さ	備考	分類	写真
855	ⅧD0b住	埴土	石鏃	砂礫岩	北上山地	2.5	1.5	0.5	1.33		II a 2	190
856	ⅧD0b住	ベルト埴土	石鏃	砂礫岩	北上山地	3.8	1.9	0.5	3.02		II b 1	190
857	ⅧD0b住	埴土	石鏃	洗灰岩	宇石	3.9	1.7	0.5	2.85		II b 1	190
858	ⅧD0b住	埴土	石鏃	泥質凝灰岩	宇石西部	3.0	1.7	0.4	1.94		II b 2	190
859	ⅧD0b住	埴土	石鏃	硬質凝灰質泥岩	宇石西部	2.5	1.8	0.4	1.53		II b 2	190
860	ⅧD0b住	埴土下位	石鏃	泥質凝灰岩	宇石西部	3.4	1.8	0.5	2.43	抜りの部分大きい。	II c 2	191
861	ⅧD0b住	埴土	石鏃	泥質凝灰岩	宇石西部	5.5	2.9	1.2	17.22		I b 1	191
862	ⅧD0b住	埴土	不定形石器	雑質泥岩	宇石西部	3.3	3.3	1.0	6.26		I a 1	191
863	ⅧD0b住	埴土	石鏃	凝灰岩	北上山地	7.5	8.8	1.6	100		I	191
864	ⅧD0b住	埴土	融解器類A群	凝灰質凝灰岩	北上山地	11.5	4.4	3.8	295	+ 附石。	I a 1	191
865	ⅧD0b住	埴土下位	融解器類A群	砂礫岩	北上山地	12.4	8.1	5.1	680		I a 1	191

第178図 ⅧD0b住居跡出土遺物(2)

より一部削刺されている。本住居の床面下からⅧD0b-2住居跡、ⅧD0b-3住居跡、ⅧD0b-4住居跡が検出された。本住居が最も新しい。

<形状・規模>長軸が等高線にほぼ直交する不整な楕円形で、短軸3.4m、長軸4mである。

<壁・壁高>小角礫含みの暗褐色土層を壁とし、やや外傾する。壁高は西壁36cm、南壁33cm、北壁48cmである。



番号	出土地点	居住	層位	石質	産地	長さ	幅	厚さ	備考	分類	分級
866	ⅧD0b住	埴土	最層砂礫A群	阿保石官山岩	長野山地	15.4	7.3	6.4	1010		I a 2 191
867	ⅧD0b住	埴土	最層砂礫A群	瀧尻岩	北上山地	8.0	6.8	4.3	(350)		I b 2 191
868	ⅧD0b住	埴土	最層砂礫A群	埴土質礫岩	北上山地	18.5	5.8	2.4	230 + 凹石。		II a 1 191
869	ⅧD0b住	埴土	最層砂礫A群	阿保石官山岩	長野山地	9.4	5.4	2.5	(220)	磨面2面。	II b 2 191
870	ⅧD0b住	埴土	最層砂礫A群	阿保硬砂岩	北上山地	9.7	9.0	3.7	(490)		III b 2 191

第179図 ⅧD0d住居跡出土遺物(3)

〈埋土〉暗褐色土から褐色土を主体として明瞭に区分できる層位を示す。自然堆積と思われる。

〈床・柱穴・施設〉北半部はⅦD0b-3住居跡の埋土を、南半部はⅦD0b-2住居跡の埋土をそれぞれ床面とする。柱穴は検出されなかった。

〈炉〉焼土を4箇所検出したが、うち2箇所は層厚もなく淡いものである。残る2箇所については、断面観察から地床炉と考えられる。南壁寄りのものを1号炉、西壁寄りのものを2号炉とする。1号炉の焼土は26×48cmの不整形の範囲に分布し、厚さは最大8cmである。2号炉の焼土は40×50cmの不整形の範囲に分布し、厚さは最大5cmである。いずれも固く締まっている。

遺物 (第177～179図、写真図版190・191)

〈土器〉床面から460g、埋土から12360g出土した。838は床面と埋土の破片を接合したものである。840も同一個体である。口縁部に鋸歯状の装飾体が貼り付けられ、その上面には円形竹管が、装飾体に沿って鋸歯状に連続的に刺突される。平縁部分にも、その口唇部に装飾体部分と同様の竹管刺突が施される。839は埋土出土である。折り返しによる複合口縁をなしその境界部分にボタン状の突起が貼り付けられている。地文は成形後に、折り返し部分を含め器面全体に施される。内面は棒状工具により調整されている。846は半(多?)截竹管による平行沈線で鋸歯状文が口頸部に巡る。沈線は浅い。850は筋が縦横斜めにそれぞれ揃っていること、および個々の筋が左から右方向に突き刺さるように表れていることなどが特徴である。原形は不明である。

〈石器〉図示したものの他に、半円状花崗岩質岩が埋土下位から2点、フレークが17点埋土から出土している。

時期 床面出土土器から、縄文前期後葉に属すると考えられる。

#### ⅦD0b-2住居跡 (遺構番号89)

遺構 (第187図、写真図版58)

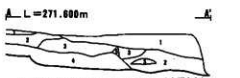
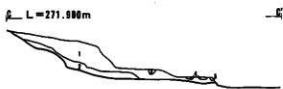
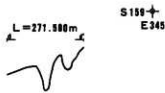
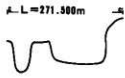
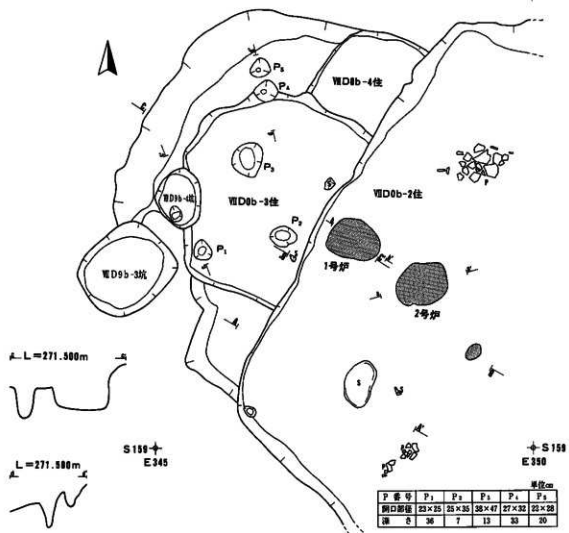
〈検出状況〉ⅦD0b住居跡の床面下から検出された。南側は斜面のため流失している。

北側でⅦD0b-3住居跡と重複するが、新旧関係は不明である。ⅦD0b-3住居跡の床面より本住居のそれは15cm程低い。

〈形状・規模〉南側は不明であるが、長軸が等高線にほぼ平行する長方形であると推定される。規模は長軸6.5m、短軸は残存値で2.75mである。

〈壁・壁高〉基盤層である黄褐色土で固く締まっている。壁高は、西壁8cm、南壁20cm、北壁23cmである。

〈埋土〉暗褐色土～褐色土を主体とし、ⅦD0b住居跡の壁および床面を構成していた層は固



1. 7.5Y R% 褐色土 しまりあり。炭化物を少量含む。
2. 7.5Y R% 暗褐色土 しまりあり。炭化物を含む。
3. 2.5Y R% 赤褐色土 固くしまっている。(VID0b位のもの)
4. 7.5Y R% 褐色土 しまりなし。
5. 7.5Y R% 褐色土 固くしまっている。灰土粒を少量含む。

1. 10Y R% 暗褐色土 しまっている。小内堀を含む。
2. 10Y R% 褐色土 しまりなし。小内堀を深く少量含む。
3. 10Y R% 褐色土 しまりなし。
4. 10Y R% 暗褐色土 しまりなし。炭化物を少量含む。
5. 10Y R% 暗褐色土 しまりなし。炭化物を少量含む。

P 番号	P <sub>1</sub>	P <sub>2</sub>	P <sub>3</sub>	P <sub>4</sub>	P <sub>5</sub>	単位cm
開口部径	23×25	25×35	38×47	27×32	22×28	
深さ	30	7	13	33	20	



- 5Y R% 明黄褐色土 雑土。固くしまっている。

1. 2.5Y R% 暗褐色土 雑土。固くしまっている。
2. 2.5Y R% 赤褐色土 雑土。固くしまっている。
3. 7.5Y R% 褐色土 しまりなし。



1. 10Y R% 暗褐色土 しまりなし。小内堀を含む。
2. 10Y R% 暗褐色土 固くしまっている。
3. 10Y R% 褐色土 固くしまっている。
4. 10Y R% 暗褐色土 しまっている。



第180図 VID0b-2・VID0b-3・VID0b-4住居跡



く締まっているものの、より下層は締まりを欠く。下位には粉炭を少量含む。

〈床・柱穴・施設〉北壁は基盤層を、南側は小角礫含みの暗褐色土層を床面とする。全体的に固く締まっている。柱穴は検出されなかった。

〈炉〉焼土が3箇所検出された。うち1基は範囲も狭く発光も淡いが、残る2基は地床炉と考えられる。西壁寄りのものを1号炉、1号炉の東側に位置するものを2号炉とする。1号炉の焼土は、50×70cmの楕円形状に分布し、厚さは最大10cmである。2号炉の焼土は60×70cmの楕円形状に分布し、厚さは最大5cmである。

遺物（第181図、写真図版192・193）

〈土器〉床面から5235g、埋土から4750g出土した。871は原体の末端片結びによる綾絡文が縦位に展開する。872は緩い波状口縁をなすものらしい。873は底部外面の断面形が鋭角をなして外側に強く張り出す。底面は平坦である。874・875の装飾体は内側が欠損している。

〈石器〉図示した他にUフレ2点が埋土から出土している。

時期 床面出土土器・重複関係から、縄文時代前期後葉に属すると考えられる。

#### ⅧD0b-3住居跡（遺構番号90）

遺構（第180図、写真図版58）

〈検出状況〉ⅧD0b住居跡の床面下から検出した。他にⅧD0b-2住居跡、ⅧD0b-4住居跡、ⅧD9b-4土坑と重複する。ⅧD0b-2住居跡、ⅧD9b-4土坑との新旧関係は不明である。本住居の埋土断面観察からⅧD0b-4住居跡の方が古い。

〈形状・規模〉東側は不明であるが方形を基調とするものと推定される。規模は南北2.7m、東西残存値で、2.6mである。ただし、西壁はかなり崩れている。

〈壁・壁高〉基盤層である黄褐色土で固く締まっている。西壁は段を有し緩やかに立ち上がっており、これは崩落しているものと考えられる。壁高は西壁50.5cm、北壁8cm、南壁13cmである。

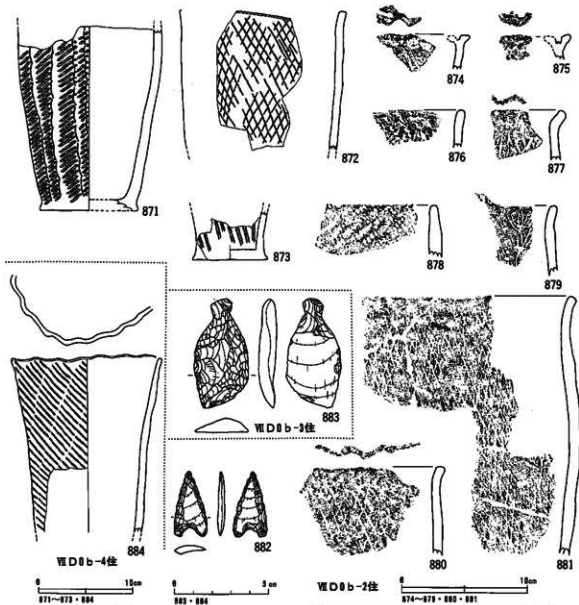
〈埋土〉2層で構成される。締まりある褐色～暗褐色土を主体とする。床上では粉炭を含む。

〈床・柱穴・施設〉西側は基盤層で、中央から東側にかけては暗褐色土である。斜面に沿ってやや傾斜し、最大比高27cmである。柱穴状土坑は5個検出された。P3は規模から柱穴にはなれないと思われる。P1とP4が対応する可能性がある。

〈炉〉検出されなかった。

遺物（第181図、写真図版193）

〈土器〉埋土から955g出土したが、縄文時代前期の網目状捺糸文、多軸絡条体の地文のみの小破片であり図化は省略した。



番号	出土地点	層位	文様	地文	口径	底径	高さ	備考	分類	写真
871	ⅧD0b-2住	床面		瓦し肌、縦位線文。	-	36.4	39.3			182
872	ⅧD0b-2住	床面	縦い波状口縁。	瓦網目状捺糸文。	39.4	-	34.5		Ⅷ6b9	182
873	ⅧD0b-2住	埋土		L捺糸文。	-	4.0	4.0			182
874	ⅧD0b-2住	床面	口縁部裝飾付。上面竹管割突と沈線。	L+瓦の捺糸文。					Ⅷ6a7	182
875	ⅧD0b-2住	埋土	口縁部裝飾付(凹文)。上面竹管割突。						Ⅷ6a9	182
876	ⅧD0b-2住	埋土		瓦捺糸文。					Ⅷ6	182
877	ⅧD0b-2住	埋土	波状(弁状)。口縁?頂部上面縦線文状。	網目状捺糸文					Ⅷ6a7	182
878	ⅧD0b-2住	床面		Lし肌。					Ⅷ6	182
879	ⅧD0b-2住	埋土	波状口縁。頂部縦線文?	L木目状捺糸文。					182	
880	ⅧD0b-2住	埋土	弁状口縁。頂部上面縦線文状	網目状捺糸文					Ⅷ6a7	182
881	ⅧD0b-2住	埋土		瓦網目状捺糸文。					Ⅷ6b9	182
884	ⅧD0b-4住	埋土	花卉状口縁。	L捺糸文	36.0	-	34.0		Ⅷ6a2	182

番号	出土地点	層位	器種	材質	産地	長さ	厚	径	重さ	備考	分類	写真
882	ⅧD0b-2住	ベト埋土	石碗	泥質凝灰岩	平石西部	3.5	1.0	0.4	2.00	狭りの部分が大い。	Ⅷc2	183
883	ⅧD0b-2住	埋土	石匙	珉質泥岩	平石西部	5.0	2.0	0.9	12.30		Ⅷa2	183

第181図 ⅧD0b-2・ⅧD0b-3・ⅧD0b-4住層跡出土遺物

〈石器〉883の1点のみの出土である。

時期 特定する資料を欠くが、重複関係・出土遺物から縄文前期後葉に属すると考えられる。

#### ⅧD0b-4住居跡（遺構番号91）

遺構（第180図、写真図版58）

〈検出状況〉ⅧD0b-3住居跡の精査時に検出された。ⅧD0b-3住居跡の南北に平坦な部分と壁の立上がりを確認し、平坦部のレベルと西壁のラインがほぼ一致することから、同一の住居と考えた。埋土断面では確認できなかったため、異なる遺構である可能性もあるが、ここでは野外調査時点の観察に従い1棟としておく。東側はⅧD0b-2住居跡によって切られている。

〈形状・規模〉詳細は不明であるが、長軸が等高線にほぼ平行する長方形を基調とするものと推定される。規模は、南北は推定値で5.2m、東西は残存値で1mである。北側部は南北1.2m、東西1m、南側部は南北1.2m、東西1.1mである。

〈壁・壁高〉基盤層である明褐色土で固く締まっており、北壁部はほぼ直立する。南側部は外傾する。壁高は北側部の北壁32cm、西壁15cm、南側部の西壁11cm、南壁10cmである。

〈床・柱穴・施設〉基盤層である明褐色土で、斜面にそってやや傾斜する。北側部と南側部の各中央部の比高は1.5cmである。柱穴は検出されなかった。

〈炉〉検出されなかった。

遺物（第181図、写真図版193）

〈石器〉埋土から370g出土した。884の口縁は前後波状となる花卉状口縁であるが、指頭大の凹凸が顕著に残っている。口唇部断面は丸みを帯びる。他に埋土から網目状摺糸文、木目状摺糸文の胴部破片が出土している。

時期 特定する資料を欠くが、重複関係・出土遺物から縄文前期後葉に属すると考えられる。

#### ⅧD0h住居跡（遺構番号92）

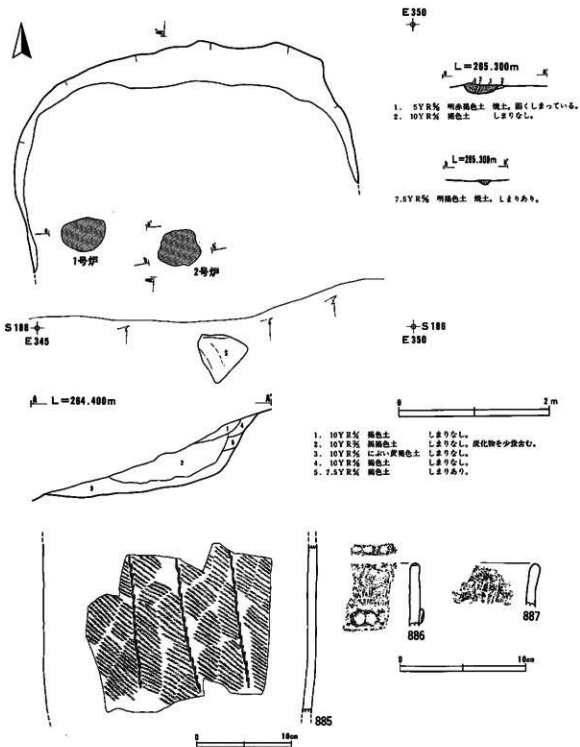
遺構（第182図、写真図版59）

〈検出状況〉西尾根南東斜面に位置する。小角礫含みの暗褐色土層上面で検出した。南側は斜面のため流失していて不明である。

〈形状・規模〉詳細は不明であるが、隅丸方形と推定される。東西4.5m、南北は残存値で2.9mである。

〈壁・壁高〉暗褐色土層を壁とし、外傾する。壁高は東壁17cm、西壁34cm、北壁101cmである。

〈埋土〉黒褐色土を主体とし、床面直上は基盤層起源のにぶい黄褐色土である。全体に締まり



番号	出土地点	層位	文様	地文	口徑	底径	高さ	図号	分類	写真
885	ⅧD0h住	灰土		し難、縦位縞地文。	—	—	10.0			195
886	ⅧD0h住	灰土	胎体上層縞状文様。	基本目状縞赤文。					II 6 b f	193
887	ⅧD0h住	灰土	波状口縁。	本目状縞赤文。					II 6	193

第182図 ⅧD0h住居跡・出土遺物(1)

を欠く。

〈床・柱穴・施設〉北半部はⅦD0b-3住居跡の埋土を、南半部はⅦD0b-2住居跡の埋土をそれぞれ床面とする。柱穴は検出されなかった。

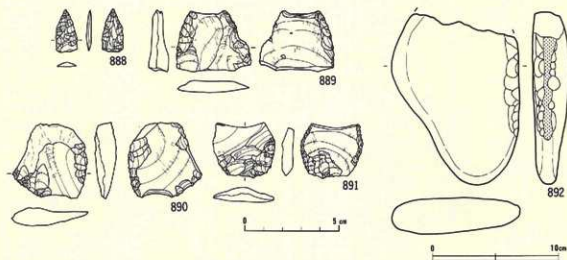
〈炉〉焼土を4箇所検出したが、うち2箇所は層厚もなく薄いものである。残る2箇所については、断面観察から地床炉と考えられる。南壁寄りのものを1号炉、西壁寄りのものを2号炉とする。1号炉の焼土は26×48cmの不整形の範囲に分布し、厚さは最大8cmである。2号炉の焼土は40×50cmの不整形の範囲に分布し、厚さは最大5cmである。いずれも固く締まっている。

遺物 (第182図、写真図版193)

〈土器〉埋土から1540g出土した。885は縦位に綾絡文が施されるが、その周囲には若干のなでが観察される。他に埋土から多軸絡条体の小片が出土している。

〈石器・石製品〉図示した他に、石刀・溶岩・花崗岩質岩が埋土から出土した。石刀は北上山地産の粘板岩を用いたものであるが、大幅な欠損品である。溶岩は岩手火山起源である。また、脆弱化した半円状花崗岩質岩が1点、Uフレ3点、Rフレ1点、フレーク7点が出土している。

時期 特定する資料を欠くが、出土遺物から縄文前期後葉から末葉に属するものと考えられる。



番号	出土地点	層位	器種	材質	産地	長さ	幅	厚さ	重さ	備考	分類	写真
888	ⅦD0b住	床面上	石鏃	硬質泥岩	宇石西部	2.3	1.1	0.2	0.61		I 2	193
889	ⅦD0b住	埋土	不定形石器	泥質凝灰岩	宇石西部	3.3	4.0	0.5	15.12		I a 2	193
890	ⅦD0b住	埋土	不定形石器	硬質泥岩	宇石西部	4.9	4.4	1.1	16.37		I c 2	193
891	ⅦD0b住	埋土	不定形石器	泥質凝灰岩	宇石西部	2.9	3.3	0.6	6.01		I d 2	193
892	ⅦD0b住	埋土	融跡器類A群	硬砂岩	北上山地	(12.7)	10.1	2.3	(200)		III b	193

第183図 ⅦD0b住居跡出土遺物(2)

### ⅧC 1 g 住居跡 (遺構番号93)

#### 遺構 (第184図、写真図版59)

〈検出状況〉ⅧC 0 g-3 住居跡の床面精査で、その東側において検出した。他にⅧC 0 g-2 住居跡、ⅧC 1 g-2 住居跡と重複する。ⅧC 1 g-2 住居跡が埋没後に本住居が構築されることから、本住居の方が新しい。ⅧC 0 g-2 住居跡に伴う焼土が、本住居の埋土に形成されることから本住居の方が古い。これを図式化すると次のようになる。

(新) ⅧC 0 g-2 住居跡←ⅧC 0 g-3 住居跡←ⅧC 1 g 住居跡←ⅧC 1 g-2 住居跡(旧)  
東側は斜面のため流失している。

〈形状・規模〉南側は不明であるが、方形と推定される。規模は残存値で東西5.1 m、南北4.4 mである。

〈壁・壁高〉斜面上方に当たる西壁は基盤層である黄褐色土で固く締まっている。北壁は小角礫含みの暗褐色土層で比較的軟質である。ほぼ直立している。壁高は、西壁20cm、北壁32cmである。

〈埋土〉2層に大別できる。上位は植生根を多く含み、締まりを欠く褐色土、下位はやや締まる褐色土で粉炭を含む。壁際には崩落土が混入する。

〈床・柱穴・施設〉斜面上方に当たる西側は基盤層である黄褐色土を、東側はⅧC 1 g-2 住居跡の埋土を床面とし、やや凹凸がある。斜面にそって幾分傾斜し、最大比高15cmである。柱穴は3個検出された。規模・位置からP2とP3が対応する可能性がある。周溝が西壁際と北壁際に検出されたが、北西隅部分は一部とぎれる。幅10~28cm、深さ12~14cmである。

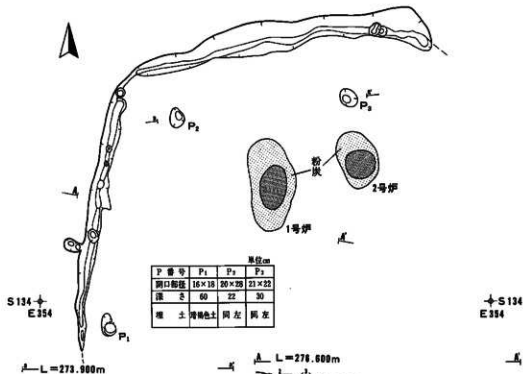
〈炉〉地床炉が2基検出された。西側のものを1号炉、東側のものを2号炉とする。1号炉の焼土は36×60cmの楕円形状に分布し、厚さは最大9cmである。2号炉の焼土は37×40cmの円形状に分布し、厚さは最大7cmである。いずれも固く締まっている。炉の周囲には同心円状に粉炭が分布する。

#### 遺物 (第184図、写真図版194)

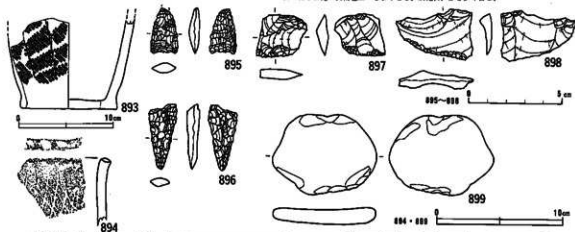
〈土器〉埋土から275 g出土した。893の胎土は砂などの混入物が少なく粘土の量が多い。縄文施文後に縦位の綾絡文が施される。底面には草木類による網代痕が一部観察されるが明瞭ではない。図示した他に埋土から縦位綾絡文の小片が出土している。

〈石器〉895の尖頭部は横折れしている。図示した他に、半円状花崗岩質岩が1点、Uフレグが1点、フレークが14点埋土から出土している。

時期 特定する資料を欠くが、重複関係・出土遺物から縄文前期後葉から末葉に属すると考えられる。



1. 10YR 5/6 褐色土 しまりなし、小角礫を少量含む、草木根を多く含む。
2. 7.5YR 5/6 褐色土 しまりあり、地土、炭化物、小角礫を含む。
3. 5YR 5/6 赤褐色土 地土、しまりあり。(重D<sub>10</sub>g-1位のもの)
4. 10YR 5/6 褐色土 ややしまりあり、炭化物、小角礫を少量含む。
5. 7.5YR 5/6 黄褐色土 しまりなし、炭化物、砂を多く含む。



番号	出土地点	層位	文様	地文	口縁	器高	器径	分層	写真
893	ⅧC1g住	埋土		L直線、縦位絞文。					194
894	ⅧC1g住	床面	口唇部僅数珠文。	R縦目状横糸文。		10.2	5.6		II b 7 194

番号	出土地点	層位	器種	材質	産地	長さ	幅	厚さ	重さ	備考	分層	写真
895	ⅧC1g住	埋土	石鏃	埴質泥岩	宇石西部(佐)	1.4	0.5	0.01			II e 2	194
896	ⅧC1g住	埋土	石鏃	硬質泥岩	宇石西部	3.5	1.5	0.6	2.90	基部は裏材面を残し、折損状である。		194
897	ⅧC1g住	埋土	ピエス・エスキュー	硬質泥岩	宇石西部	3.1	2.4	0.6	4.40			194
898	ⅧC1g住	埋土	不定形石鏃	埴質泥岩	宇石西部	2.7	4.0	0.6	5.78			I a 2 194
899	ⅧC1g住	埋土	石鏃	凝灰岩	北上山地	6.4	8.3	1.2	100			II 194

第184図 ⅧC1g住居跡・出土遺物

ⅧC1g-2住居跡 (遺構番号94)

遺構 (第185図、写真図版60)

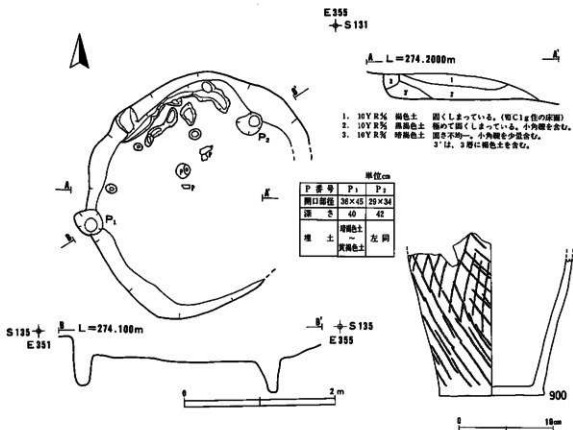
<検出状況>ⅧC1g住居跡の東側の床面下から検出した。東側は斜面のため流失している。

<形状・規模>やや歪な円形で2.9×3.2mの規模をもつ。

<壁・壁高>斜面上方に当たる西側は基盤層である黄褐色土を、他は小角礫を含む暗褐色土層を壁とし、ほぼ直立する。壁高は、西壁35cm、南壁16cm、北壁36cmである。

<埋土>4層で構成されるが、上位は褐色土で非常に固い。下位は小角礫を含む黒褐色土で固く締まっている。壁際には崩落土が混入する。

<床・柱穴・施設>西側は基盤層で、中央から東側にかけては暗褐色土である。斜面に沿ってやや傾斜し、最大比高12cmである。柱穴が2個検出された。位置・規模が対応すると考えられる。西壁際の一部に周溝が巡る。幅10~20cm、深さは5~7cmである。



番号	出土地点	層位	文様	地文	口徑	輪郭	器高	備考	分類	写真
900	ⅧC1g-2住	床面		反徳米文。	-	(11.1)	07.0		Ⅱ 6	194

第185図 ⅧC1g-2住居跡・出土遺物



〈か〉検出されなかった。

遺物 (第185図、写真図版194)

〈土器〉床面から1278g、埋土から425g出土した。900は床面出土で、やや太めの撚紐を用いた撚糸文である。埋土出土は網目状撚糸文、附加条の土器小片である。

時期 床面出土遺物・重複関係から、縄文時代前期後葉から末葉に属すると考えられる。

#### VIII C 1 h 住居跡 (遺構番号95)

遺構 (第186図、写真図版61)

〈検出状況〉西尾根東斜面に位置する。本住居の東側でVIII C 1 h-2住居跡、北側でVIII C 1 h土坑と重複する。本住居は、これらの遺構の上に構築されており、本住居の方が新しい。

〈形状・規模〉詳細は不明であるが、長軸が等高線にほぼ平行する長方形を基調とするものと推定される。規模は、南北は4.7m、東西は残存値で3.2mである。

〈壁・壁高〉基盤層である明褐色土で固く締まっており、ほぼ直立する。壁高は、西壁23cm、北壁51cmである。

〈埋土〉6層で構成される。いずれも締まりを欠き、自然堆積の様相を示す。北壁寄りの床面直上に粉炭が分布する。第5層からブロック状に混入するが、第6層の下位において著しい。焼土粒も埋土断面において縞状に分布する。このことから焼失住居と考えられる。

〈床・柱穴・施設〉西側は基盤層である明褐色土を床面とする。東側はVIII C 1 h土坑の埋土の上に貼り床しているほか、VIII C 1 h-2住居跡との重複部分も同様に暗褐色土により貼り床している。全体として斜面にそって傾斜し、西壁際と東端の比高は29cmになる。周溝が西壁際に巡る。幅16~26cm、深さ7~13cmである。一部二重になるところがあるが、埋土や深さに差異は認められなかった。そのため住居の重複は想定しなかった。柱穴が2個検出された。主柱穴は確認できない。

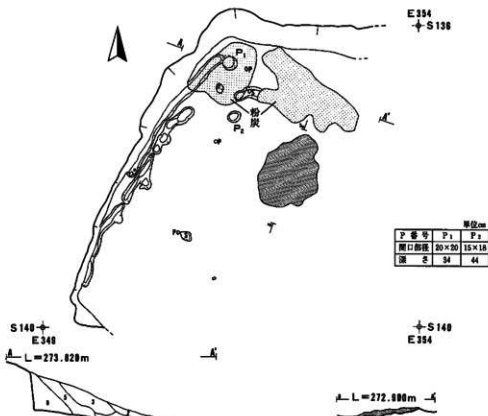
〈炉〉地床炉を1基検出した。焼土は78×110cmの不整楕円形状に分布し、厚さは最大10cmである。断面形はレンズ状で、固く締まっている。

遺物 (第186図、写真図版194)

〈土器〉床面から104g、埋土から400g出土した。床面出土は901の他、網目状撚糸文の小破片、横位の綾絡文の小破片である。

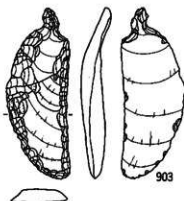
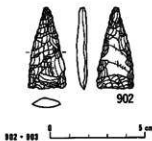
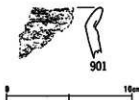
〈石器〉図示した他にはUフレ1点、フレーク13点が埋土から出土している。

時期 特定する資料を欠くが、出土遺物から縄文時代前期後葉から末葉に属すると考えられる。



1. 10Y R $\frac{5}{2}$  暗褐色土 しまりなし。黄褐色土を微次に少量含む。
2. 10Y R $\frac{5}{2}$  暗褐色土 しまりなし。砂を多く含む。
3. 7.5Y R $\frac{5}{2}$  暗褐色土 しまりなし。黄褐色土をプロック状に含む。炭化物、小角礫を少量含む。
4. 10Y R $\frac{5}{2}$  黄褐色土 最下位に炭化物、焼土粒を稀状に含む。
5. 7.5Y R $\frac{5}{2}$  暗褐色土 しまりなし。炭化物をプロック状に、小角礫を少量含む。
6. 10Y R $\frac{5}{2}$  暗褐色土 しまりなし。黄褐色土をプロック状に含む。最下位に炭化物、焼土粒を稀状に含む。

2.5Y R $\frac{5}{2}$  明赤褐色土 しまりあり。炭化物を上層に微量含む。



番号	出土地点	層位	文様	地文	口縁部	器高	器径	分類	写真
901	VII C1h 住	床面	復合口縁、散乱骨。					内外編ミカキ調骨。	194

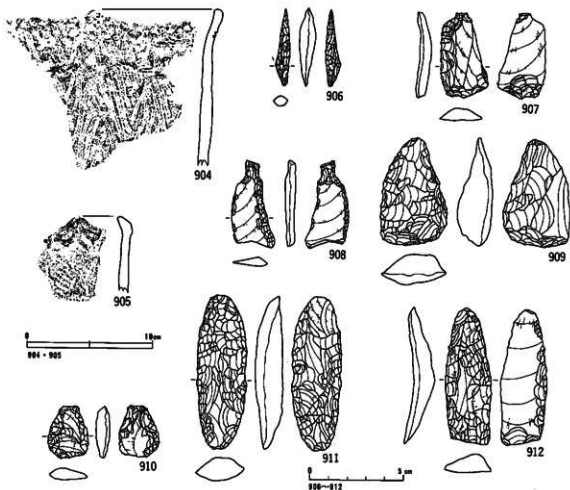
番号	出土地点	層位	砂粒	石質	産地	長さ	幅	厚さ	番号	分類	写真	
902	VII C1h 住	壁土	石粒	硬質泥岩	宇石西部	4.5	2.0	0.5	3.00	1 2	194	
903	VII C1h 住	ペルト壁土	石粒	硬質泥岩	宇石西部	8.2	3.2	0.9	26.83	すり合わせり、つまみ方向からの編み製法を利用。	1 2 2	194

第188図 VII C1h住居跡・出土遺物

ⅧC1h-2住居跡（遺構番号96）

遺構（第98図、写真図版61）

〈検出状況〉西尾根東斜面に位置する。西側でⅧC1h住居跡・ⅧC1h土坑、南側でⅧC0



番号	出土地点	層位	文様	地文	口徑	底径	器高	備考	分類	写真
904	ⅧC1h-2住	床面	竹管刺突。	R+L線赤文。						II 6 b 9 194
905	ⅧC1h-2住	埋土	飯蓋状敷物跡。	L R 線。縦位線絞文。						II 6 a 7 194

番号	出土地点	層位	器種	石質	産地	長さ	幅	厚さ	重さ	備考	分類	写真
906	ⅧC1h-2住	埋土の中	石鏃	地長貫結核燧石	甲石西部	6.11	0.7	0.67		欠損品。		194
907	ⅧC1h-2住	埋土	石鏃	硬質泥岩	甲石西部	4.5	2.4	0.8	7.60	つまみ部の作り出しが強い。		1 b 2 194
908	ⅧC1h-2住	埋土	石鏃	硬質泥岩	甲石西部	4.6	2.1	0.6	4.02	1) 用はれ、2) 用は重部に用いられる。先端部は磨かれた。		1 b 1 194
909	ⅧC1h-2住	床面	石鏃	硬質泥岩	甲石西部	6.7	3.5	1.8	33.30	全周縁あり、片側部が折れ、右側が欠け、左側部は片刃で磨いた。		194
910	ⅧC1h-2住	埋土	不定形石鏃	軟質泥岩	北上山地	2.7	2.1	0.6	3.49			1 d 2 195
911	ⅧC1h-2住	床面	打製石鏃	硬質砂岩	甲石西部	8.1	2.6	1.3	32.64			195
912	ⅧC1h-2住	床面	不定形石鏃	硬質泥岩	甲石西部	7.2	2.4	1.0	16.31			1 e 195

第187図 ⅧC1h-2住居跡出土遺物

h住居跡・ⅦC0h-2住居跡と重複する。ⅦC1h住居跡の炉が、本住居の埋土の上に形成されていることから、本住居の方が古い。ⅦC1h土坑・ⅦC0h住居跡・ⅦC0h-2住居跡は、本住居によって切られていることから本住居の方が新しい。これらの遺構の新旧関係を図式化すると次のようになる。

(新) ⅦC1h住居跡←ⅦC1h-2住居跡←ⅦC1h土坑 (旧)

←ⅦC0h-2住居跡←ⅦC0h住居跡

<形状・規模>詳細は不明であるが、長軸が等高線にはほぼ平行する歪な長方形と推定される。規模は残存値で、東西は2.4m、南北は4.7mである。

<壁・壁高>基盤層である黄褐色土で固く締まっており、ほぼ直立する。壁高は、西壁30cm、北壁35cmである。

<埋土>黒褐色土を主体とし、壁とは明瞭に区別される。全体に締まりを欠く。

<床・柱穴・施設>基盤層である黄褐色土で、ほぼ水平で平坦である。柱穴P7の埋土は住居のそれとは異なる褐色土で砂粒を多く含む。P4・P5はⅦC0h-2住居跡に所属する可能性もある。

<炉>地床炉を1基検出した。焼土の範囲は80×110cmの楕円形状に分布し、厚さは最大8cmである。断面形はレンズ状で、固く締まった焼土である。

遺物 (第187図、写真図版194・195)

<土器>904は緩い波状口縁で、口縁に沿って竹管刺突が連続する。905は器体に対して斜性に粘土紐を鋸歯状に貼り付けたものである。図示した他には網目状捺糸文、捺糸文、縦位綾絡文の土器小片が出土している。

<石器>908の表面右辺は裏側から、左辺は表側から二次加工を施す。912は中央部に瘤状に素材面を残す。911は疑問もあるが、断面形・刃部加工から打製石斧とした。他にフレック1点が床面から、Uフレ2点が埋土から出土している。

時期 床面出土土器片、重複関係から、縄文時代前期後葉に属すると推定される。

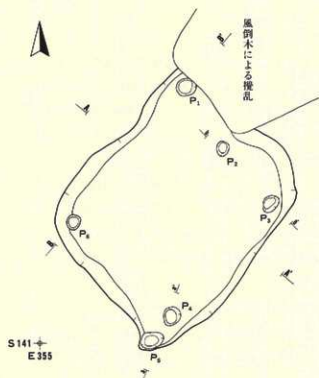
#### ⅦC2h住居跡 (遺構番号97)

遺構 (第188図、写真図版62)

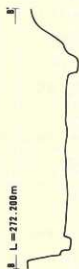
<検出状況>基盤層の上にいる小角礫含みのにぶい黄褐色土層中に褐色土の落ち込みとして検出した。北壁の一部は倒木痕により擾乱を受けている。

<形状・規模>長軸が等高線にはほぼ平行する歪な長方形を基調とする。規模は短軸2.6m、長軸2.9mである。

<壁・壁高>一部基盤層、他はにぶい黄褐色土層で、ほぼ直立する。壁高は、東壁9cm、西壁



単位cm						
P番号	P <sub>1</sub>	P <sub>2</sub>	P <sub>3</sub>	P <sub>4</sub>	P <sub>5</sub>	P <sub>6</sub>
開口毎径	22×26	17×20	20×22	23×24	22×30	16×20
深さ	16	11	10	15	25	9



A L = 272.200m

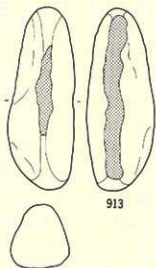


1. 7.5Y R 5/ 黒褐色土 しまりあり。炭化物、焼土、砂を少量含む。
2. 10Y R 5/ 褐色土 しまりあり。焼土、炭化物を粒状に、砂を少量含む。
3. 10Y R 5/ 暗褐色土 しまりなし。黒褐色土を細粒に、小角礫を少量含む。
4. 10Y R 5/ 黒褐色土 しまりあり。焼土粒、砂を微量含む。
5. 10Y R 5/ 黒褐色土 しまりなし。炭化物を多く、焼土粒、砂を微量含む。
6. 10Y R 5/ 黒褐色土 しまりなし。砂を少量含む。

A L = 271.900m



A L = 271.800m



913



番号	出土地点	層位	品種	材質	産地	長さ	幅	厚さ	重量	備考	分類	写真
913	ⅧC 2h 住	床面	磁器器盤A群	チャート	北上山地	14.5	5.4	5.2	490	磨面2面、刺蝋加工。	I a 1	195

第188図 ⅧC2h住居跡・出土遺物

48cm、南壁20cm、北壁23cmである。

〈埋土〉褐色土を主体とし、その上位および下位に黒褐色土の層が占める。全体に砂粒を含み、下位には粉炭を混入する。

〈床・柱穴・施設〉斜面上方に当たる西側は基盤層である黄褐色土を、東側はにぶい黄褐色土層を床面とし、ほぼ水平で平坦である。

〈炉〉検出されなかった。

遺物（第188図、写真図版195）

〈土器〉出土していない。

〈石器〉図示した1点のみの出土である。

時期 特定する資料を欠き不明であるが、検出状況・埋土・床面出土石器から縄文時代前期に属するものと考えられる。

#### ⅧC 2 j 住居跡（遺構番号98）

遺構（第189図）

〈検出状況〉西尾根東斜面に位置する。基盤層の上のいる小角礫を含みにぶい黄褐色土層上面で、暗褐色土の落ち込みとして検出した。東側は削平されており不明である。本住居の床面下からはⅧC 2 j 土坑・ⅧC 2 j - 2 土坑が検出されている。

〈形状・規模〉東側は不明であるが、長軸が等高線にほぼ平行する隅丸長方形と推定される。規模は南北5.6m、東西は残存値で3mである。

〈壁・壁高〉にぶい黄褐色土層で、壁高は西壁49cm、南壁16cm、北壁58cmである。

〈埋土〉上位は暗褐色土、下位は黒褐色土で、全体に締まりを欠く。下位には粉炭を多く含み、焼失住居と考えられる。

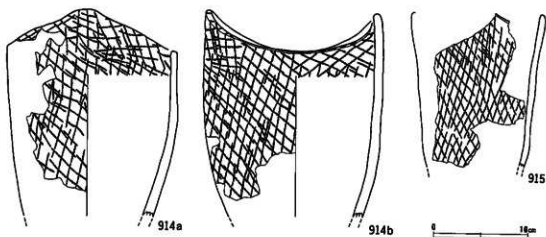
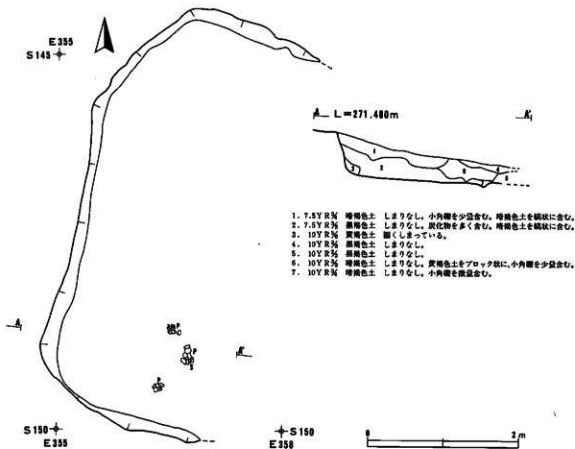
〈床・柱穴・施設〉にぶい黄褐色土で固い。柱穴は検出されなかった。

〈炉〉検出されなかった。

遺物（第189～191図、写真図版195・196）

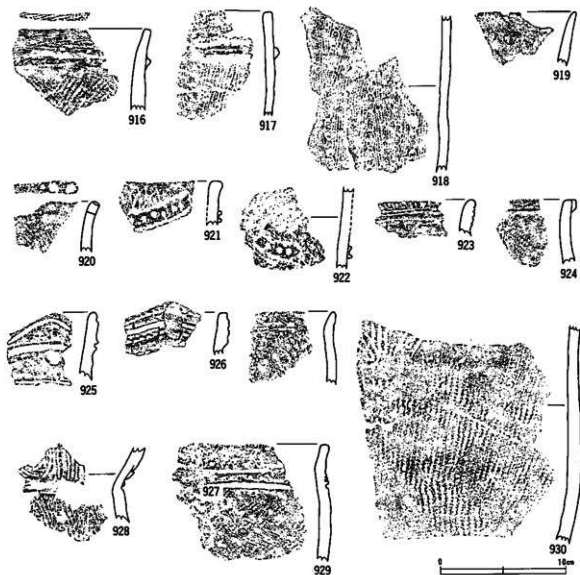
〈土器〉埋土から7565g出土した。914の器形はやや石炭バケツ状で長軸方向に1対の頂部をもつ波状口縁である。胴部と同じ原体で口唇部にも施文されている。胎土に細礫を多く含み、内外面とも剥落多い。915は比較的急な波状口縁となるらしい。916は隆帯で区画された狭い口縁部文様帯に、原体の側面圧痕が横位にやや不整に施文されている。920は弁状突起上に施文のあるものである。922の隆帯は剥落しているが、円を描くらしい。925～930は竹管文を主体とする。

〈石器〉933は黒曜石を素材とする。これは青森県出来島産の可能性が高いという鑑定の結果



番号/出土地点	層位	文様	地文	口徑	底径	器高	備考	分類	写真
914 VII C 2 j 住	棟土	一片の底部をもつ波状口縁、石状ハケツ形。	R網目状煎糸文	18.5	-	122.0	横断面輪郭図	II 6 b 9	195
915 VII C 2 j 住	棟土	波状口縁。	R網目状煎糸文	14.0	-	116.3		II 6 b 9	195

第189図 VII C 2 j 住居跡・出土遺物(1)



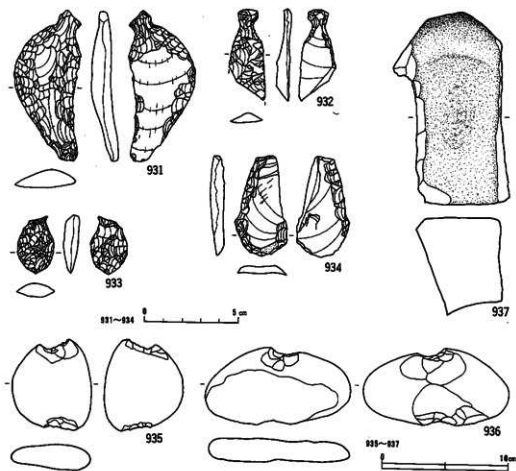
番号	出土地点	層位	実態	施文	口縁	底縁	器高	番号	分類	等尺
916	ⅧC 2 j 住	灰面	L側面圧痕。胎骨上R L側面圧痕。	L R × R L 第1輪破草押捺施文。						195
917	ⅧC 2 j 住	灰面	縁条押圧痕。胎骨上刺突?	R 本目状捺施文。						195
918	ⅧC 2 j 住	灰面	無文。	R 本目状捺施文。				II 4	195	
919	ⅧC 2 j 住	灰面	無文。							195
920	ⅧC 2 j 住	埋土	弁状口縁。頂部口唇部指捺状圧痕(底面明瞭に残る)。	捺施文。				III 1	195	
921	ⅧC 2 j 住	埋土	波状口縁。胎骨上捺状工具による刺突(底面凹みあり)。	L 捺施文。						195
922	ⅧC 2 j 住	埋土	胎骨上捺状工具による刺突(底面凹みあり)。	L 捺施文。				III 7	195	
923	ⅧC 2 j 住	埋土	口唇部捺状工具による刺突。手倉竹管平行波痕。押し引き。	L 捺施文。						195
924	ⅧC 2 j 住	埋土	縦合口縁。							195
925	ⅧC 2 j 住	埋土	波状口縁。沈線(何線)。内影凹文。					II 7	195	
926	ⅧC 2 j 住	埋土	波状口縁。胎骨上L R 捺状工具による刺突。胎骨上刺突。					II 7	195	
927	ⅧC 2 j 住	埋土	沈線(押し引き?)。	L R 縦。波線文。				III 1	195	
928	ⅧC 2 j 住	埋土	沈線(波状沈線に押し引き)。	R 本目状捺施文。						195
929	ⅧC 2 j 住	埋土	沈線(何線)。竹管刺突。	L R × R R 第1輪破草押捺施文。				II 7	195	
930	ⅧC 2 j 住	埋土	手倉竹管平行波痕。	R L 縦。				II 7	195	

第190図 ⅧC 2 j 住居跡出土遺物(2)



が出ている（付篇5参照）。図示した他に、台石の可能性がある破砕礫、半円状花崗岩質岩が各1点、フレークが12点埋土から出土した。

時期 床面出土遺物から、縄文時代前期後葉から末葉に属すると考えられる。



番号	出土地点	層位	器種	石質	産地	長さ	幅	厚さ	重量	備考	分類	写真
931	ⅧC2j住	埋土	石匙	凝灰質礫岩	宇石西部	8.0	3.4	1.0	23.80	縦長に歪み、6度(つまみ方向と刃部の内角)	I a 2	196
932	ⅧC2j住	埋土層下位	石匙	凝灰質礫岩	宇石西部	6.8	2.0	0.8	6.38		I	196
933	ⅧC2j住	埋土	石匙	凝灰岩	青森県赤島	3.1	2.0	0.8	4.82	尖頭部を作り出す。つまみ部破損。	I a 1	196
934	ⅧC2j住	埋土	不定形石匙	粘板岩	北上山地	6.3	2.6	0.8	10.18	側面磨面形状となる。	I b 4	196
935	ⅧC2j住	埋土	石鏝	球長質礫灰岩	北上山地	7.3	6.2	2.0	130		I	196
936	ⅧC2j住	埋土	石鏝	凝灰質礫砂岩	北上山地	6.3	11.5	1.8	170		II	196
937	ⅧC2j住	埋土	石皿・台石類	球長質礫灰岩	北上山地	65.2	19.2	9.7	1870	歪み、磨打によるものと見られる痕跡がある。		196

第181図 ⅧC2j住居跡出土遺物(3)

### ⅧC 3 f 住居跡 (遺構番号99)

#### 遺構 (第192図、写真図版62)

〈検出状況〉西尾根東斜面に位置する。近現代の削平および盛土が行われている。基盤層の上ののれ小角礫含みのぶい黄褐色土層上面で、暗褐色土の落ち込みとして検出した。

〈形状・規模〉不整な円形で、径は長いところで2.7m、短いところで2.5mである。

〈壁・壁高〉斜面上方に当たる西壁の一部は下位が基盤層であるが、他はぶい黄褐色土層で固く締まっており、ほぼ直立する。壁高は、東壁37cm、西壁70cm、南壁12cm、北壁49cmである。

〈埋土〉上位は暗褐色土、中位は黒褐色土、下位は褐色土および暗褐色土で、いずれも固く締まっている。断面レンズ状で、自然堆積の様相を示す。混入物は殆どないが、一部に壁の崩落土を含む。

〈床・柱穴・施設〉基盤層で、ほぼ水平で平坦である。中央西寄りに柱穴を1個検出したが、深さは9cmであり、主柱穴となるか疑問である。周溝が西壁際に巡る。幅8～15cm、深さ6～10cmで、底部に深さ4～5cmの小穴を連続的に穿つ。

〈伊〉検出されなかった。

#### 遺物 (第192図、写真図版196)

〈土器〉床面から255g、埋土から570g出土した。図示した他に、床面から多軸絡条体、網目状燃糸文、埋土から燃糸文、木目状燃糸文の破片が出土したが、地文のみの小破片であり図化は省略した。

〈石器〉941は相対する二辺に二次加工が施されているが、裏面右側縁は刃部とは認め難い。他に床面からUフレが1点、フレークが1点、埋土からフレークが8点出土している。

時期 床面出土土器片から、縄文時代前期後葉から末葉に属すると考えられる。

### ⅧD 2 g 住居跡 (遺構番号100)

#### 遺構 (第193図、写真図版63)

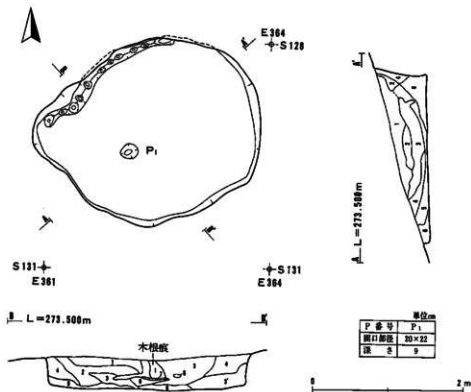
〈検出状況〉西尾根東麓に位置する。基盤層である黄褐色土上面で、黒褐色土の落ち込みとして検出した。北壁でⅧD 2 g 土坑と重複するが、新旧関係は不明である。

周溝が3条巡ること、および埋土断面観察から、本住居は3時期の建替えがあると考えられる。埋土断面から、内側の周溝を伴うものが最も新しいと考えられる。これをⅧD 2 g 住居跡とし、内側から外側へ向かって、ⅧD 2 g - 2 住居跡、ⅧD 2 g - 3 住居跡とする。

南壁と西壁の一部は斜面のため流失しており、南西隅は木根により攪乱を受けている。

〈形状・規模〉1辺が2.7m～3mの方形である。

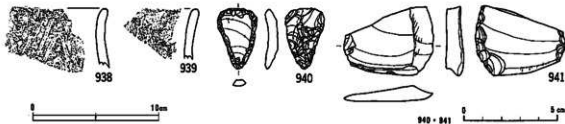
〈壁・壁高〉基盤層である黄褐色土で固く締まっており、ほぼ直立する。壁高は、東壁22cm、



A...A' 日...日'

1. 10Y R 7/2 暗褐色土 固さ不均一。
2. 10Y R 7/2 暗褐色土 1層より若干条状がみついている。
3. 10Y R 7/2 暗褐色土 固くしまっている。小角礫を少量含む。3'は、3層に褐色土を含む。
4. 10Y R 7/2 褐色土 しまりなし。

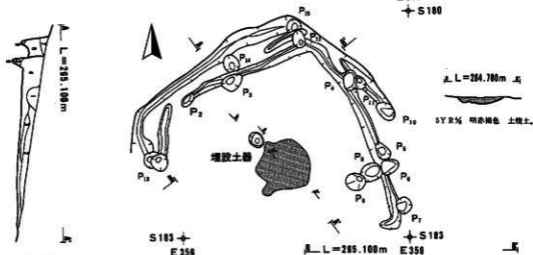
5. 10Y R 7/2 暗褐色土 しまりなし。
6. 10Y R 7/2 褐色土 しまりあり。パミスを含む。
7. 炭化物
8. 10Y R 7/2 褐色土 固くしまっている。
9. 10Y R 7/2 暗褐色土 しまりあり。



番号	出土地点	層位	文様	地文	口径	底径	高さ	備考	分類	写真		
938	ⅧC3f住	床直上		L 3条の半条帯赤文。					II 6	196		
939	ⅧC3f住	埋土		R 網目状赤文。					II 6	196		
番号	出土地点	層位	器種	石質	産地	長さ	幅	厚さ	備考	分類	写真	
940	ⅧC3f住	埋土	石錘	硬質泥岩	半石西部	3.2	2.0	0.5	4.12		196	
941	ⅧC3f住	床直上	不定形石器	泥質凝灰岩	半石西部	3.7	4.8	0.9	15.20	左辺にも二次加工があるが、刃部とは等でない。	I + 2	196

第192図 ⅧC3f住居跡・出土遺物

E 350  
+ S 180



S 183  
E 350

S 183  
E 350

A...A'

B...B'

1. 10Y R% 黄褐色土 炭化物、焼土粒を微量含む。
2. 10Y R% 褐色土 炭化物、焼土粒を微量含む。
3. 10Y R% 黄褐色土 炭化物、焼土粒を微量含む。
4. 7.5Y R% 黄褐色土 炭化物、焼土粒を微量含む。
5. 10Y R% 黄褐色土 焼土粒を微量含む。
6. 10Y R% 褐色土 炭化物、焼土粒を微量含む、やや粘性あり。
7. 7.5Y R% 黄褐色土 炭化物、焼土粒を微量含む。
8. 10Y R% 黄褐色土 炭化物、焼土粒を微量含む、黄褐色土を含む。
9. 10Y R% 褐色土 炭化物を含む。
10. 7.5Y R% 褐色土 しまりあり。
11. 10Y R% 暗褐色土 しまりなし、褐色土を含む。
12. 10Y R% 暗褐色土 しまりなし、褐色土を含む。
13. 10Y R% 黄褐色土 しまりあり、粘土質土。
14. 10Y R% 黄褐色土 しまりあり。



0 2m

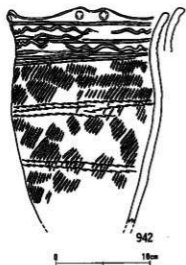


0 1m

L = 284.700m

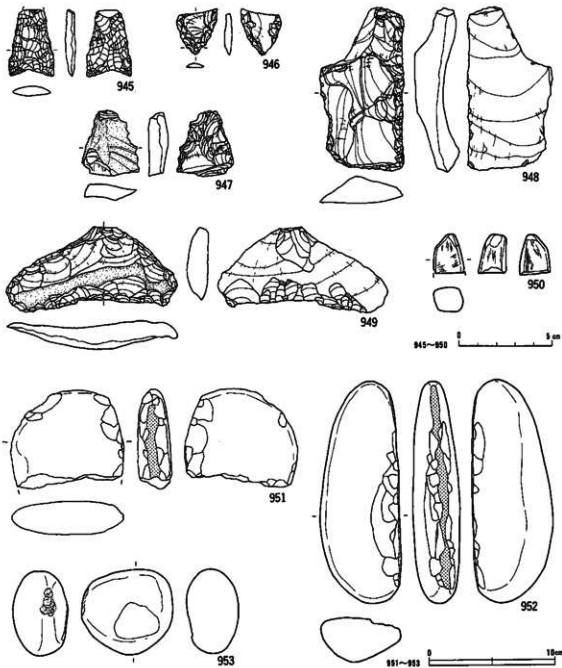
P 番号	P <sub>1</sub>	P <sub>2</sub>	P <sub>3</sub>	P <sub>4</sub>	P <sub>5</sub>	P <sub>6</sub>	P <sub>7</sub>	P <sub>8</sub>	P <sub>9</sub>	P <sub>10</sub>	P <sub>11</sub>	P <sub>12</sub>	P <sub>13</sub>	P <sub>14</sub>	P <sub>15</sub>
開口部径	23×23	12×20	21×30	18×28	17×25	20×24	20×22	23×30	23×17	18×20	17×21	16×23	20×22	20×25	19×21
深さ	26	11	30	15	25	20	13	12	18	13	33	21	19	42	2

単位cm



番号	出土地点	層位	文様	地文	口径	底径	器高	番号	分類	写真
942	堀D 2g 住	埋設土器	螺旋状口縁、山形(7山) 波状冠、流文、半横ひ管波状平行直線。	L R 横、横位線横文。	17.2		(23.1)		II 7 a	196
943	堀D 2g 住	埋土	R L R 圓面狂文。	R L R 縦。					II 8 a	196
944	堀D 2g 住	床底		不要扱承文。					II 9	196

第193図 堀D 2g 住層跡・出土遺物(1)



番号	出土地点	層位	形態	材質	産地	長さ	幅	厚さ	重さ	備考	分類	序具
945	ⅧD 2g 住	埴土	石鏃	埴質泥岩	宇石西郡	3.5	2.4	0.5	6.30		Ⅱ d 1	197
946	ⅧD 2g 住	埴土	不定形石部	硬質泥岩	宇石西郡	2.4	1.8	0.3	1.87		Ⅱ b 2	197
947	ⅧD 2g 住	埴土	不定形石部	硬質泥岩	宇石西郡	3.5	3.0	0.7	8.63	面に溝まで入る二枚並立あり、刃部とは届かない。	Ⅱ	197
948	ⅧD 2g 住	埴土	不定形石部	埴質泥岩	宇石西郡	8.6	4.5	1.4	58.01		Ⅱ a 1	197
949	ⅧD 2g 住	埴土	不定形石部	粘板岩	北上山地	3.9	9.1	1.3	41.42	自然面を中央に挟す。	Ⅱ c 3	197
950	ⅧD 2g 住	埴土	磨製石斧	粘板岩	北上山地	3.1	1.6	1.4	1.10	欠損品。		197
951	ⅧD 2g 住	Q 3 埴土	磨製部類A群	硬砂岩	北上山地	7.8	9.0	2.7	220.0	欠損品。	Ⅱ b 2	197
952	ⅧD 2g 住	埴土上住	磨製部類A群	硬砂岩	北上山地	17.6	6.4	3.6	500		Ⅱ b 2	197
953	ⅧD 2g 住	Q 4 埴土	磨製部類B群	凝灰質硬砂岩	北上山地	7.2	6.8	4.2	300	端面に浅い幾打痕あり。	Ⅱ	197

第194図 ⅧD 2g 住層跡出土遺物(2)

西壁11cm、北壁24cmである。

〈埋土〉黒褐色土を主体とし、粉炭と焼土粒を全体に含む。

〈床・柱穴・施設〉基盤層である黄褐色土で、中央部がやや凹む。全体的に斜面そってやや傾斜する。炉の北側は礫が多く固いが、他は総じて比較的軟質である。

炉の北側に埋設土器が検出される。床面から10cm程掘り込み、やや斜めに埋められている。柱穴は3棟含めて、15個検出された。位置関係からP1～P9が本住居に伴うものと考えられる。周溝は幅10cm、深さ15cmで住居の埋土よりややロームを多く含む。

〈炉〉ほぼ中央に地床炉を1基検出した。焼土の範囲は74×68cmの不整形に分布し、厚さは最大9cmである。断面形はレンズ状で、固く締まった焼土である。

#### ⅧD 2 g-2 住居跡 (遺構番号101)

ⅧD 2 g 住居跡の周溝の北および西の外側に一部残存する周溝を伴う住居をⅧD 2 g-2 住居跡とする。本住居に伴う柱穴は、位置関係からP10～P12と考えられる。周溝は幅10cm、深さ6～8cmの規模で、ごく一部が残存したものと推定される。

#### ⅧD 2 g-3 住居跡 (遺構番号102)

ⅧD 2 g 住居跡の周溝の外側に西壁際を中心に巡る周溝を伴う住居をⅧD 2 g-3 住居跡とする。本住居に伴う柱穴は、位置関係からP13～P15と考えられる。周溝は幅8cm、深さ6～8cmの規模で、ごく一部が残存したものと推定される。

#### 遺物 (第193・194図、写真図版196・197)

出土遺物は、そのほとんどが最も新しいⅧD 2 g 住居跡のものであると考えられるが詳細は不明である。

〈土器〉床面から5309を含めて1415g、埋土から715g出土した。942は炉の北側に埋設されていた土器で胴上半部にススが付着している。2山で1単位の頂部を4単位有する波状口縁の土器である。2山の頂部下にはそれぞれに指頭大の凹文がつけられる。口縁部文様帯は半截竹管の内面を用いて波状沈線と平行沈線を描くが、その順序は不規則で施文も粗雑であり、装飾的水準は低いという印象をもつ。2本1単位の沈線のうち、口縁に近い方の条が深く刻まれている。内面は繊維質の平らな工具でなでられている。埋土からは他に網目状断糸文、木目状断糸文、縦位綾絡文の小破片が出土している。

〈石器〉945は尖頭部が横折れしている。950は小型の磨製石斧の基部のみが残ったものである。他にJフレ1点、フレク1点が床面から、フレク2点が埋土から出土している。

時期 ⅧD 2 g 住居跡は、床面埋設土器から縄文時代前期末葉に属する。他の住居もほぼ同時期と考えられる。

#### ⅣD 0 i 住居跡 (遺構番号103)

##### 遺構 (第195図、写真図版64)

〈検出状況〉東尾根と西尾根に挟まれた狭隘な谷底平野部に位置する。腐植に富む黒色土の下層の褐色土層面で、黒色土の落ち込みとして検出した。

〈形状・規模〉長軸が等高線にほぼ平行する楕円形である。規模は短軸2.6 m、長軸3.8 mである。

〈壁・壁高〉褐色土層で、やや外傾する。壁高は、東壁20cm、西壁14cm、南壁8 cm、北壁26cmである。

〈埋土〉黒色土を主体とし、締まりを欠く。

〈床・柱穴・施設〉褐色土であるが、極めて軟質である。そのため、固く締まった黄褐色土まで掘り込んでしまった。仮にその面を床面とすると、炉と想定される焼土が床面から浮いてしまう結果となる。住居焼失に伴う焼土の可能性もないではないが、焼土の断面観察からは地床炉と考えられた。このことから、固さについては疑問があるものの、焼土のレベルが床面であったと考えられる。

〈炉〉地床炉が2基検出された。西側のものを1号炉、東側のものを2号炉とする。1号炉の焼土は80×120 cmの不整形に分布し、厚さは最大10cmである。2号炉の焼土は43×52cmの不整形に分布し、厚さは最大12cmである。全体的に軟質ではあるが、褐色土および基盤層である黄褐色土が焼成を受けたものである。

##### 遺物 (第195図、写真図版197)

〈土器〉床面から1080 g 出土しているが、図示した他に網目状捺糸文、組縄縄文、竹管文などの小片が混入している。

〈石器〉図示した他にフレーク6点が出土している。

時期 特定する資料を欠くが、検出面・出土遺物から縄文時代前期後葉から末葉に属すると考えられる。

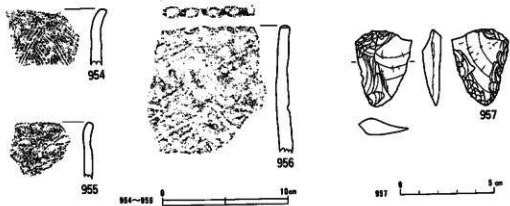
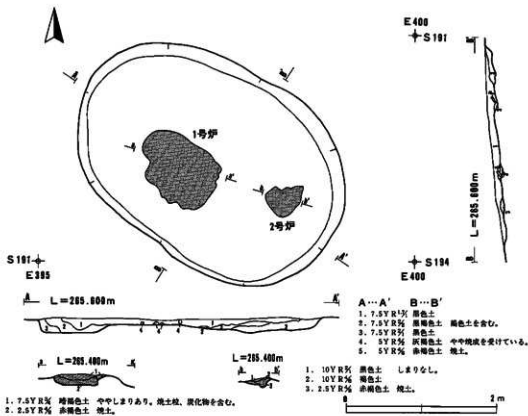
#### ⅣE 7 a 住居跡 (遺構番号104)

##### 遺構 (第196図、写真図版65)

〈検出状況〉東尾根南麓ないし東尾根と西尾根に挟まれた狭隘な谷底平野部に位置する。腐植に富む黒色土の下層の褐色土層上面で検出した。

〈形状・規模〉径3 m前後のはほぼ円形である。

〈壁・壁高〉上位は褐色土層、下位は基盤層にあたる黄褐色土層で、地形的に常時水を含む位置にあるためやや軟質である。壁高は東壁20cm、西壁3 cm、南壁11cm、北壁36cmである。



番号	出土地点	層位	文様	地文	口徑	底徑	器高	器身	分類	写真
954	ⅧD 01 住	床面	御歯状比較。						Ⅷ 9	197
955	ⅧD 01 住	床面		不明。						197
956	ⅧD 01 住	床面	口唇部指痕状圧紋。	L R 模。片結び痕位線跡文。					Ⅷ b 2	197

番号	出土地点	層位	器種	石質	産地	長さ	幅	厚さ	器身	分類	写真	
957	ⅧD 01 住		不定形石器	硬質泥岩	宇石西部	4.0	3.0	1.0	R.22	好形性にやや欠けるが、形にまとまりあり。	1 b 2	197

第195図 ⅧD 01 住居跡・出土遺物



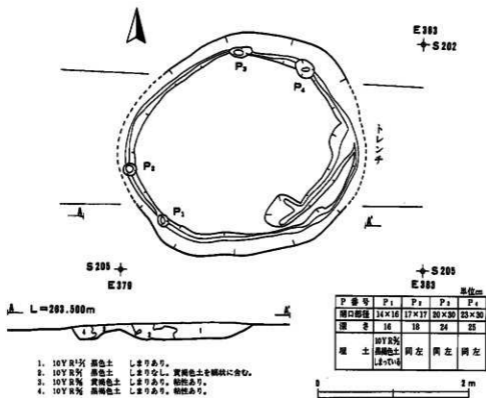
〈埋土〉住居中央部で断面観察できなかったが、黒色土、褐色土、およびそれらと黄褐色土との混土によって構成される。

〈床・柱穴・施設〉基盤層に当たる黄褐色土であるが、水分を多く含む表面は比較的軟質である。ほぼ水平で平坦である。柱穴は4個検出された。いずれも壁際周溝内に位置する。規模的に支柱穴とは考えにくい。埋土は黒褐色土で住居埋土に類似する。周溝が壁際に全周する。幅15~20cm、深さ10~20cmで、埋土は柱穴のそれと等しい。住居内南西方向に周溝が2重となる部分がある。建替えの可能性もあるが、埋土では区別できず、一応単一の住居としておく。

〈炉〉検出されなかった。

遺物〈土器〉埋土から、縄文前期に属すると考えられる無節の斜縄文の極小破片2点のみの出土である。図化に耐えないので省略した。

時期 特定する資料を欠くが、検出面・出土遺物から縄文時代前期と考えられる。



第166図 VII E7a 住居跡

ⅧE9b住居跡（遺構番号105）

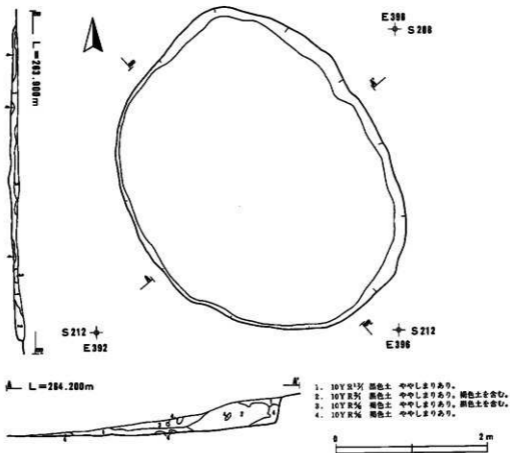
遺構（第197図、写真図版65）

〈検出状況〉東尾根南麓の平坦部に位置する。腐植に富む黒色土の下層の褐色土層上面で検出した。

〈形状・規模〉長軸が等高線にほぼ平行する楕円形で、短軸3.4m、長軸4.5mである。

〈壁・壁高〉上位は褐色土層を、下位は基盤層にあたる黄褐色土層を壁とし、ほぼ直立する。壁高は東壁30cm、西壁2cm、南壁3cm、北壁30cmである。

〈埋土〉腐植土である黒色土およびそれと褐色土との混土を基調とする。自然堆積の様相を示す。



第197図 ⅧE9b住居跡

〈床・柱穴・施設〉基盤層に当たる黄褐色土で、固く締まっている。ほぼ水平であるが植生根により小さな凹凸がある。柱穴は検出されなかった。

〈炉〉検出されなかった。

遺物 〈土器〉埋土から、沈線1条を有する他は無文の極小破片が1点出土したのみである。図化に耐えないので省略した。

時期 特定する資料を欠くが、検出面・出土遺物から縄文時代前期に属すると考えられる。

#### ⅧE 0 a 住居跡 (遺構番号106)

遺構 (第198図、写真図版66)

〈検出状況〉東尾根南麓の平坦部に位置する。腐植に富む黒色土の下層の褐色土層上面で検出した。西側は、掘りすぎてしまった。南側は斜面のため流失している。

〈形状・規模〉不明である。残存値で南北3.5m、東西4.8mである。

〈壁・壁高〉上位は褐色土層を、下位は基盤層である黄褐色土を壁とし、緩やかに立ち上がる。壁高は東壁22cm、北壁21cmである。

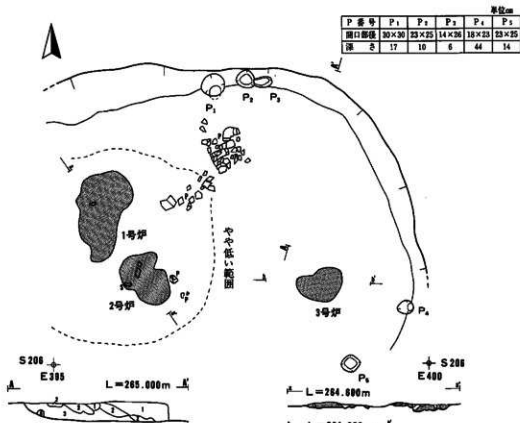
〈埋土〉腐植土である黒色土および黒褐色土で構成される。締まりは全体によくない。

〈床・柱穴・施設〉斜面上方に当たる北側は基盤層である黄褐色土で、南側は褐色土である。西側に3～4cm低い部分があり、そこに焼土が形成される。建替えの可能性もあるが、埋土は等しく、単一の住居と考えられる。全体に斜面沿ってやや傾斜し、南側は北側より10cm程低い。柱穴は検出されなかった。

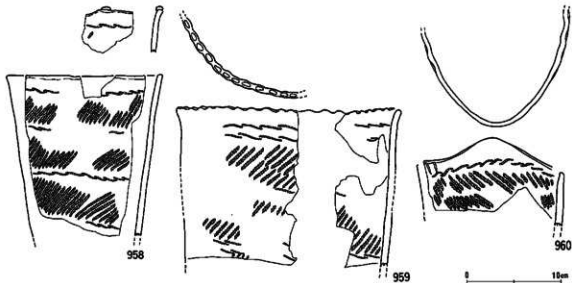
〈炉〉焼土が3基検出された。断面からいずれも標準土層が焼成を受けたものと観察されることから、地床炉と考えられる。西側から1号炉、2号炉、3号炉と命名する。1号炉の焼土は65×110cmの不整形に分布し、厚さは最大10cm、2号炉のそれは60×70cmの不整形に分布し、厚さは最大6cm、3号炉のそれは40×60cmの不整形に分布し、厚さは最大8cmである。やや軟質な部分もあるが、断面形はほぼレンズ状である。

遺物 (第198～200図、写真図版197・198)

〈土器〉床面から6095g、埋土から2115g出土した。958は口唇部に小さな瘤が貼り付けられるが、口唇部に数箇所の剥落部分があることから、貼瘤は複数個あった可能性が高い。器表面は磨耗していて不明瞭であるが、綾絡文は斜縄文原体の縄端片結びによるものと思われる。959は脆弱化していて剥落が著しく明瞭ではないが、縄端片結びによると思われる綾絡文が口縁下に2条走る。胴部についてはその単位は不明である。口唇部には指頭状の圧痕が右斜め方向から施される。内面にはハケメ状の調整が施される。胎土に繊維は含まれない。960は石炭・バケツ形の器形の土器と思われる。対向する位置に頂部を配し、その間を花卉状口縁で連絡

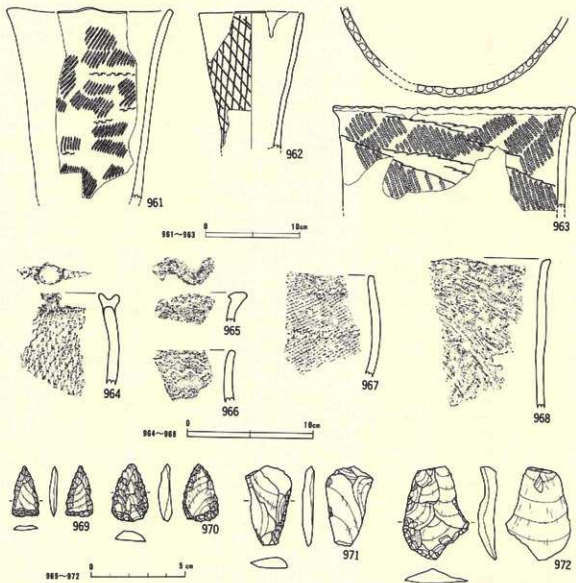


1. 10Y R<sup>1</sup>/2 褐色土 しまりなし。
2. 10Y R<sup>3</sup>/6 黄褐色土 固さ不均一。
3. 10Y R<sup>1</sup>/2 褐色土 しまりなし。黄褐色土を含む。
4. 7.5Y R<sup>3</sup>/6 黄褐色土 しまりなし。



番号	出土地点	層位	文様	地文	口縁部形状	編号	備考	分限	写真
958	ⅧE0a住	灰面	口縁部に壺状の粘付け。	L.R.横、横位線絶文。	(16.6)	-	(17.4)	Ⅷ6eウ	197
959	ⅧE0a住	灰面	口縁部に壺状粘付。	L.R.横、横位線絶文。	(20.8)	-	(17.4)	Ⅷ6bウ	197
960	ⅧE0a住	灰面	波状口縁、一部花卉状口縁、石炭・ケツツ形。	R.L.横、横位線絶文。	-	-	(17.8)	Ⅷ6bウ	198

第198図 ⅧE0a住居跡・出土遺物(1)



番号	出土地点	層位	文様	地文	口径	底径	器高	備考	分類	写真
961	ⅧE0a住	床面	横い波状口縁。	L. 縦縞、横斜線結文。	4.0	—	100.0		Ⅷ4b+	196
962	ⅧE0a住	床面		斜線目状結糸文。	11.2	—	104.6		Ⅷ5b+	196
963	ⅧE0a住			L. 縦縞。	26.0	—	106.7		Ⅷ4b+	196
964	ⅧE0a住	埋土	口縁部弦状飾付(凹文)。沿部溝入。	R. 縦縞?					Ⅷ4a+	196
965	ⅧE0a住	埋土	口縁部弦状飾付。						Ⅷ4a+	196
966	ⅧE0a住	埋土	横斜線結文。	L. 縦縞。					Ⅷ6a+	196
967	ⅧE0a住	埋土		L. 縦縞。					Ⅷ4	196
968	ⅧE0a住	埋土		L. 縦縞。片貼り横位幾何文。					Ⅷ4	196
969	ⅧE0a住	埋土		草木灰?による調整。					Ⅷ6	196

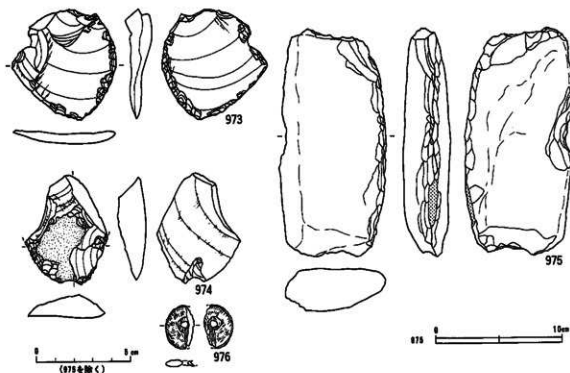
番号	出土地点	層位	器種	石質	産地	長さ	幅	厚さ	重さ	備考	分類	写真
969	ⅧE0a住	埋土	石鏃	武蔵燧石	平石西部	2.7	1.4	0.4	1.29		I 2	196
970	ⅧE0a住	埋土	矢頭器埋石器	チャート質粘板岩	北上山地	3.0	1.9	0.7	3.31			196
971	ⅧE0a住	埋土	不定形石器	硬質泥岩	平石西部	4.2	2.5	0.6	4.86		I a 1	196
972	ⅧE0a住	埋土	不定形石器	硬質泥岩	平石西部	4.9	3.4	0.8	11.24	3面に使用が認められる。1面は欠損部。	I c 2	196

第199図 ⅧE0a住居跡出土遺物(2)

するものであろう。地文は斜縄文と縄端片結びによる綾絡文と考えられる。胎土に黒雲母を含む。961は低平な頂部を有する緩い波状口縁をなすが、その単位は不明である。横位の綾絡文は斜縄文原体の縄端片結びによるものと思われる。内面はなでによって調整され、その胴下半部にはスガが付着している。963は口縁部がやや肉厚で口唇部には指頭状の圧痕が施される。地文は斜縄文と縄端片結びによる綾絡文であるが、縄文は筋が縦横斜めに揃う印象もある。胎土に細礫を多く含む。

〈石器・石製品〉970は表面の加工は粗く、特に尖頭部左辺は加工されていない。976の中央部の溝は表裏両側から加工しているが未貫通である。図示したほかに、岩手火山起源の溶岩が2点、フレークが1点埋土から出土している。

時期 床面出土土器から、縄文時代前期後葉に属すると考えられる。



番号	出土地点	層位	器種	材質	産地	長さ	幅	厚さ	重さ	備考	分類	写真
973	堀江0a位		不定形石器	硬質泥岩	宇石西部	5.8	5.6	0.7	25		I b 2	196
974	堀江0a位		不定形石器	粘板岩	北上山地	(5.8)	(4.4)	1.5	(38.4)	擦部	I a 2	196
975	堀江0a位		胎土赤褐色	透閃貫千枚岩	北上山地	18.0	8.5	3.7	790	挟り有り。	II b 2	196
976	堀江0a位	伊分近	石器	チャート	北上山地	2.2	(1.5)	0.3	(1.7)			196

第200図 VII E 0 a 住層跡出土遺物(3)

## ⅩD1e住居跡（遺構番号107）

### 遺構（第201図、写真図版67）

〈検出状況〉東尾根西斜面下位の傾斜交換点に位置する。小角礫含みの褐色土層上面で暗褐色土～黒褐色土の落ち込みとして検出した。西側は一部倒木痕により攪乱を受け、また斜面のため流失している。

〈形状・規模〉西側は不明であるが長軸が等高線にほぼ平行する長円形基調と推定される。規模は長軸6m、短軸は残存値で3.1mである。

〈壁・壁高〉上位は褐色土層を、下位は基盤層である黄褐色土を壁とする。植生根による小さな凹凸が顕著である。全体的には緩やかに立ち上がる。壁高は、東壁45cm、南壁17cm、北壁23cmである。

〈埋土〉斜面上方に当たる東側では、崩落土を含む。西側では倒木痕の影響を受けた黒褐色土が埋土となる。下位は極めて固い暗褐色土が主体をなすが、ブロック状に割がれ、土器破片、フレークを多く含む。

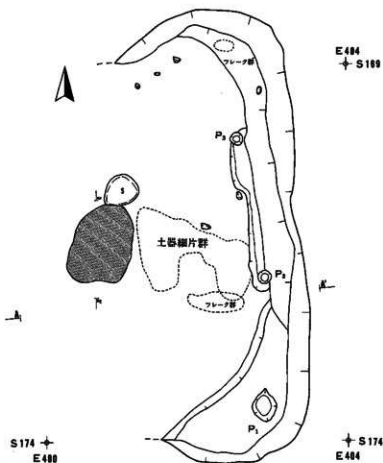
〈床・柱穴・施設〉基盤層である黄褐色土であるが、斜面下方に当たる西側は褐色土を床とする。小さな凹凸あり、全体としては住居中央部が皿状にやや凹む。南側に7～10cm程度高い部分がある。建替えの可能性もあるが、埋土で区別できなかったことから、単一の住居として考えた。柱穴は3個検出された。埋土は住居の埋土よりやや黄味がかかり、粉炭を混入する。P2とP3は、東壁際に部分的に巡る周溝の両端に位置し、対応するものと思われる。周溝の規模は幅15～30cm、深さ12～20cmで、住居の埋土である暗褐色土と等しい。焼土の北に隣接して扁平な重角礫が検出された。加工痕・使用痕は肉眼では観察できない。

〈炉〉焼土が1基検出された。80×120cmの不整な楕円形状に分布し、厚さは最大12cmである。基盤層である黄褐色土が被熱して漸移的に赤変したものであるが、倒木痕の影響を受けて黒褐色土が入り込んでいる部分がある。

### 遺物（第202・203図、写真図版199）

〈土器〉床面から4451g、埋土から1595g出土した。977は床面及びその直上から纏まって出土した破片を接合したものである。破線で図示した部分がそれである。口縁部は不明であるが、胴部は比較的太めの縄を用いて地文のみが施文される。内面は剥落が著しい。978は棒状の工具による縦方向のミガキが顕著である。胎土には細礫を多く含む。

〈石器〉986は扁平で石鏃の可能性はあるが対称性を欠き、表裏の加工が大きく異なる。988は幅の広い剥離でやや粗い加工である。側面観が鋸歯状となる。図示した他に、半円状花崗岩質岩が1点、Uフレが4点、フレーク・チップ類が115点出土している。フレーク・チップ類は床面に多く、その分布は全体に広がるが特に多かったのが図示した部分である。フレークの



A—L=270.000m



1. 10Y R% 褐色土 しまりなし。
2. 10Y R% 褐色土 しまりなし。
3. 10Y R% 暗褐色土 ややしまりあり。
4. 10Y R% 黄褐色土 ややしまりあり。
5. 10Y R% 暗褐色土 固さ不均一。
6. 10Y R% 暗褐色土 ややしまりあり。
7. 10Y R% 暗褐色土 ややしまりあり。
8. 10Y R% 暗褐色土 ややしまりあり。褐色土をブロック状に含む。

P 番号	単位cm		
	P <sub>1</sub>	P <sub>2</sub>	P <sub>3</sub>
開口部径	33×44	18×18	17×17
深さ	17	25	32
境土	生肌境土よりやや黄色味がかる。炭化物が混入する。		

B—L=298.200m—B

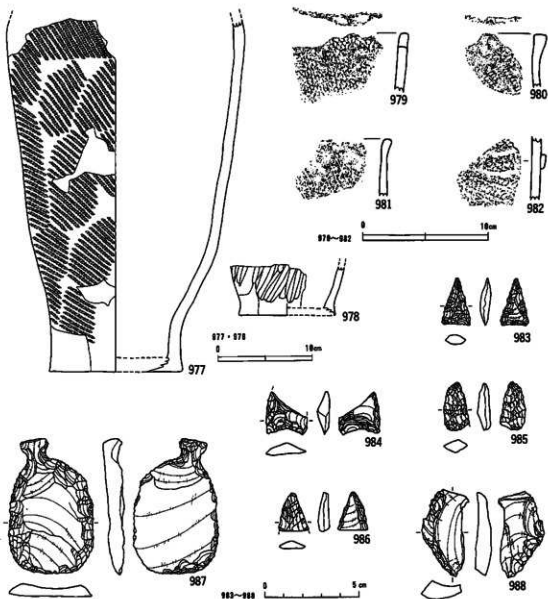


1. 7.5Y R% 暗褐色土 しまりなし。
2. 5Y R% 褐色土 境土。固くしまっている。



第201図 IX D1e住居跡

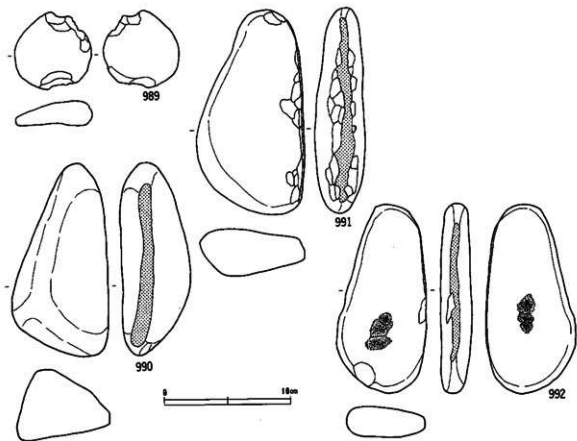




番号	出土地点	層位	文様	地文	口縁部形状	器高	備考	分類	写真
977	ⅨD1e住	床面		L.R線。		—	(M.1)(D7.40) 輪模み肌。	Ⅱ 6	199
978	ⅨD1e住	Q 4 塚土				—	(M.2)(E.5) 底部分近器状工具によるケズリ。		199
979	ⅨD1e住		山形口縁。頂部口唇部削み。	多輪線条体? (不明)。				Ⅱ 6 a 9	199
980	ⅨD1e住		山形口縁。	R.L線。				Ⅱ 6 a 9	199
981	ⅨD1e住			L.網目状線条文。				Ⅱ 6	199
982	ⅨD1e住		縁部上綱文。	網目状線文					199

番号	出土地点	層位	器種	材質	産地	長さ	幅	厚さ	重さ	備考	分類	写真
983	ⅨD1e住	床面	石鏃	粘板岩	北上山地	2.5	1.5	0.5	1.33		I 3	199
984	ⅨD1e住	床面	石鏃	洗砂岩	平石部部 (E.2)	2.2	0.6	0.47		尖頭部側の半分以上がない。	Ⅱ b 2	199
985	ⅨD1e住	床面	石鏃	硬質緻密質泥岩	平石部部	2.6	1.3	0.5	0.80		Ⅲ 1	199
986	ⅨD1e住		不定形石鏃	硬質硬質泥岩	平石部部	(2.0)	(1.4)	1.4	(1.53)	基部側の大平が欠損。破折れ。	I e	199
987	ⅨD1e住		石鏃	地質泥岩	平石部部	7.2	4.5	1.1	106.09		I b 1	199
988	ⅨD1e住		不定形石鏃	硬質泥岩	平石部部	4.6	2.4	1.0	8.19	両面縦線曲状。	Ⅳ	199

第202図 ⅨD1e住層跡出土遺物(1)



番号	出土地点	層位	器種	石質	産地	長さ	幅	厚さ	備考	分類	写真	
989	ⅨD1e住	床面	石鏃	チャート	北上山地	6.1	6.1	2.0	90		1	199
990	ⅨD1e住	床面	刮削器類A群	岡碑石宝山岩	長瀬山地	15.3	7.7	5.5	760	両面無し。	1 a 1	199
991	ⅨD1e住	床面	刮削器類A群	硬砂岩	北上山地	16.3	8.4	3.8	680		1 b 1	199
992	ⅨD1e住	床面	刮削器類A群	硬砂岩	北上山地	14.9	7.2	2.3	380	+磨石。	Ⅸ a 1	199

第203図 ⅨD1e住居跡出土遺物(2)

一部について石質鑑定をした結果、北上山地産・粘板岩、同・チャート、零石産・珪質泥岩、同・凝灰質泥岩であることが分かった。

時期 床面出土遺物から、縄文時代前期後葉から末葉に属すると考えられる。

#### ⅨD1h住居跡 (遺構番号108)

遺構 (第204図、写真図版68)

<検出状況> 東尾根南斜面に位置する。小角礫を含む褐色土層下位で極暗褐色土の落ち込みとして検出した。北側でⅨD1h土坑と僅かに重複するが、新旧関係は不明である。

<形状・規模> 長軸が斜面に平行する長円形で、規模は長軸3.3m、短軸2.2mである。

〈壁・壁高〉上位は褐色土層、下位は基盤層である黄褐色土を壁とし、外傾する。壁高は東壁34cm、西壁23cm、南壁6cm、北壁64cmである。

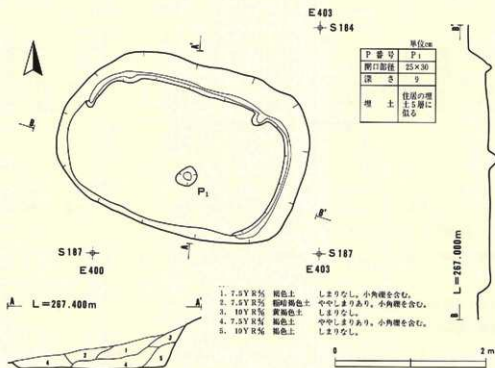
〈埋土〉上位中央部は極暗褐色土であるが、下位は褐色土主体で壁際には崩落土を含む。全体的に締まりを欠く。

〈床・柱穴・施設〉斜面上方に当たる北側は基盤層である黄褐色土を、南側は褐色土を床とし、ほぼ水平で平坦である。固く締まっている。中央部に柱穴状の小土坑を検出したが、規模・形状から柱穴とはならないと思われる。埋土は住居の埋土に似る。周溝が、西壁際の一部、東壁際および北壁際に巡る。幅10~20cm、深さ7~10cmで、埋土は住居の第5層に等しい。

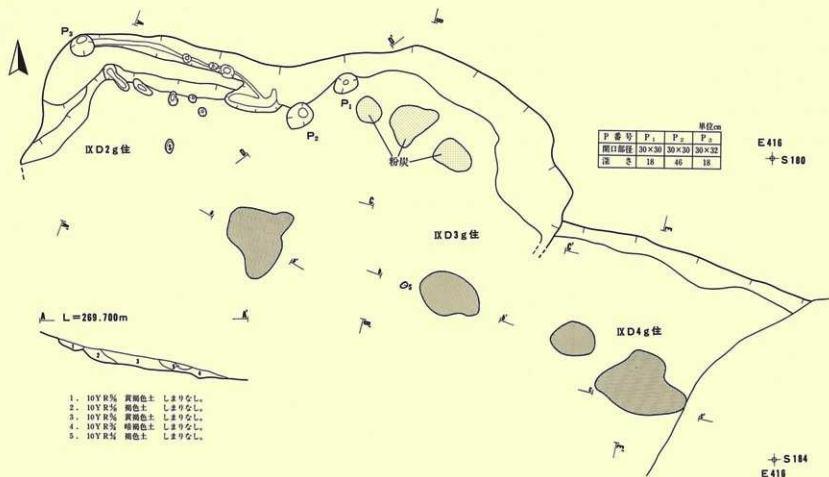
〈炉〉検出されなかった。

遺物 〈土器〉埋土から縄文時代前期の横位の綾絡文と多軸絡条体の小破片が各1点出土したのみである。図化に耐えないので省略した。

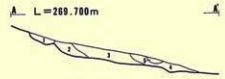
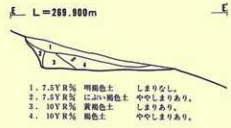
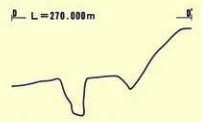
時期 特定する資料を欠くが、検出状況・埋土・出土遺物から縄文時代前期に属するものと思われる。



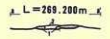
第204図 IX D1h住居跡



E 416  
+ S 100



- 10V R% 黄褐色土 しまりなし。
- 10V R% 褐色土 しまりなし。
- 10V R% 明褐色土 しまりなし。
- 10V R% 明褐色土 しまりなし。
- 10V R% 褐色土 しまりなし。

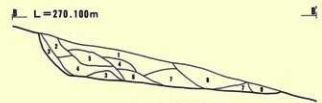


- 5V R% 明赤褐色土 焼土 しまりあり。
- 7.5V R% 褐色土 しまりあり。

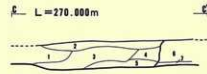


- 5V R% 赤褐色土 焼土 しまりあり。
- 7.5V R% 明褐色土 焼土 焼痕あり。
- 7.5V R% 明褐色土 焼土 しまりあり。
- 10V R% 褐色土 しまりなし。

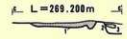
+ S 184  
E 416



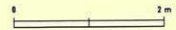
- 10V R% 褐色土 しまりなし。小角礫を含む。
- 10V R% 黄褐色土 しまりなし。小角礫を含む。
- 10V R% 黄褐色土 しまりあり。小角礫を含む。
- 10V R% 褐色土 しまりあり。小角礫を含む。
- 10V R% じいい黄褐色土 中中しまりあり。小角礫を含む。
- 7.5V R% 明褐色土 中中しまりあり。小角礫を含む。
- 7.5V R% 褐色土 しまりあり。小角礫を含む。
- 7.5V R% 褐色土 しまりあり。小角礫を含む。
- 7.5V R% 明褐色土 しまりなし。小角礫を含む。



- 7.5V R% 褐色土 しまりあり。小角礫を含む。
- 7.5V R% 明褐色土 しまりあり。褐色土をフロッツ状に含む。
- 7.5V R% 褐色土 しまりあり。小角礫を含む。
- 7.5V R% じいい褐色土 しまりなし。小角礫を含む。
- 7.5V R% 明褐色土 しまりなし。褐色土をフロッツ状に含む。
- 10V R% 褐色土 しまりあり。小角礫を含む。
- 10V R% 黄褐色土 しまりなし。



- 5V R% 赤褐色土 焼土 中中しまりあり。
- 5V R% 赤褐色土 焼土 中中しまりあり。
- 10V R% 褐色土 しまりなし。



第205図 IXD2g・IXD3g・IXD4g住居跡

IX D 2 g 住居跡 (遺構番号109)

遺構 (第205図、写真図版68)

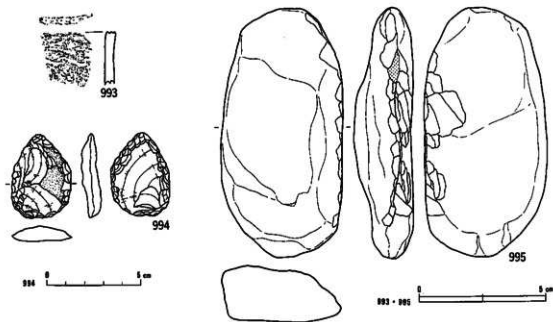
〈検出状況〉東尾根南斜面中腹部に位置する。平面的には検出できなかったが、褐色土層上で炉と考えられる焼土を検出、その斜面上方で基盤層まで掘り込んだ壁を確認し、住居跡として認定した。東側でIX D 3 g 住居跡と重複するが、埋土からその境界および新旧関係を判断することはできなかった。南側は斜面のため流失している。

〈形状・規模〉南側および東側は不明であるが、長軸が等高線にほぼ平行する長方形を基調とするものと推定される。規模は南北は残存値で2.5m、東西は不明である。

〈壁・壁高〉上位は褐色土層、下位は基盤層であるにふい黄褐色土を壁とし、北壁は階段状となる。壁高は西壁34cm、北壁48cmである。

〈埋土〉斜面上方は基盤層起源の黄褐色土を、下方は暗褐色土ないし褐色土を埋土とする。全体に締まりを欠く。

〈床・柱穴・施設〉斜面上方は基盤層を、下方は褐色土層を床面とする。ほぼ平坦であるが、



番号	出土地点	層位	文様	地名	口徑	底部	器高	備考	分類	写真
993	IX D 2 g 住	A-A'	舟状口縁、頂部口唇部竹管刺突、横位階梯文。	I. R 境。					II b 4	200

番号	出土地点	層位	器種	石質	産地	長さ	幅	厚さ	重さ	備考	分類	写真
994	IX D 2 g 住	床面	尖頭型礫石鈿	硬質礫状質泥岩	宇石西部	3.8	3.6	0.9	13.24			200
995	IX D 2 g 住	埋土	細磨器類A群	硬砂岩	北上山地	19.7	9.7	4.3	1820		II b 1	200

第206図 IX D 2 g 住居跡出土遺物

斜面沿って傾斜し、比高9cmである。柱穴がP2・P3の2個検出されたが、P2についてはⅡD 3g住居跡のものか所属不明である。周溝が北壁際に巡る。幅10～20cm、深さ6～7cmで底面には小さな凹凸がある。埋土は10YR6/6明黄褐色土で締まりを欠く。住居の埋土よりやや明るいみがある。床面から壁への変換点にも窪みが数箇所検出されたが、周溝とも柱穴ともならない。

〈炉〉地床炉が1基検出された。規模は74×90cmの不整形に分布し、厚さは最大4cmである。一部攪乱があるものの、床面を構成する褐色土層が焼土化したものもある。

遺物（第206図、写真図版200）

〈土器〉床面から横位の綾絡文を1条有する土器片と多軸絡条体によって施文された小さい破片が合わせて480g出土したが図化は省略した。埋土からは993の他に網目状燃糸文、縦位綾絡文の小破片270gが出土した。

〈石器〉図示した他にUフレ3点、フレイク14点（うち床面7点）が出土している。

時期 出土遺物から、縄文時代前期後葉から末葉に属するものと考えられる。

#### ⅡD 2g-2住居跡（遺構番号110）

遺構（第207図、写真図版69）

〈検出状況〉東尾根南斜面中腹部に位置する。ⅡD 2h住居跡の精査中に、同住居の北側に、一段高い平坦部と壁とを確認し、住居跡として認定した。南西側は流失している。

埋土断面観察から、本住居はⅡD 2h住居跡より古いと考えられる。

〈形状・規模〉不明であるが、長軸が等高線にほぼ平行する長方形を基調とするものと推定される。規模は、東西4.55m、南北は残存値で1.3mである。

〈壁・壁高〉小角礫を含む褐色土層を壁とし、やや外傾する。壁高は東壁18cm、西壁16cm、北壁24cmである。

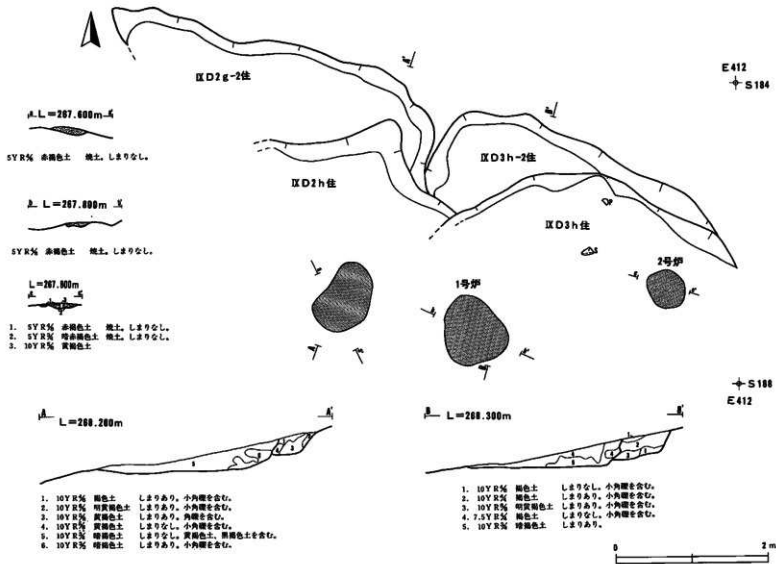
〈埋土〉西側では褐色土と暗褐色土で構成され、固さにむらがあり、ブロック状に割がれやすい。

〈床・柱穴・施設〉褐色土層でほぼ水平で平坦であり、固く締まっている。柱穴は検出されなかった。

〈炉〉検出されなかった。

遺物 〈土器〉埋土から、縄文時代前期の燃糸文の極小破片が4点（同一固体）出土したが、図化に耐えないので省略した。

時期 特定する資料を欠くが、重複関係・出土遺物から縄文時代前期後葉から末葉に属すると考えられる。



ⅨD 2 h 住居跡 (遺構番号111)

遺構 (第207図、写真図版69)

〈検出状況〉東根根南斜面中腹に位置する。平面的な検出はできなかった。小角礫を含む褐色土層上面で焼土を検出、その斜面上方に基盤層まで掘り込み壁を確認し、住居跡と認定した。北側でⅨD 2 g-2住居跡と、東側でⅨD 3 h住居跡と重複する。埋土断面観察から、ⅨD 2 g-2住居跡より新しいと考えられる。

ⅨD 3 h住居跡とは境界を明瞭にできなかった。ⅨD 3 h住居跡の炉は、本住居の床面より10cmほど高いことから本住居のほうが古いと考えられる。

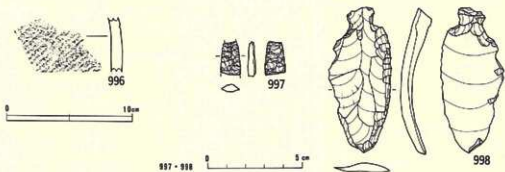
〈形状・規模〉南側は斜面のため流失しており、東側はⅨD 3 g住居跡との重複により不明である。規模も不明であるが、焼土から北壁までは3mである。

〈壁・壁高〉北壁のみ残存し、褐色土層ないし基盤層およびⅨD 2 g-2住居跡の埋土を壁とし、内湾気味に外傾する。壁高は20cmである。

〈埋土〉黒褐色土と黄褐色土を混入する暗褐色土を主体とする。固さにむらがありブロック状に割がれる。

〈床・柱穴・施設〉褐色土層を床面とし、ほぼ水平で平坦である。比較的軟質である。柱穴は検出されなかった。

〈炉〉地床炉が1基検出された。65×90cmの不整な楕円形状に分布し、厚さは最大8cmである。床面を構成する褐色土層が焼土化したものである。



番号	出土地点	層位	文様	地文	口徑	底面	器高	備考	分類	写真
996	ⅨD 2 h 住	焼土内		Ⅰ. 東横. 片給ひ横位横粒文.						200

番号	出土地点	層位	器種	石質	所在地	長さ	幅	厚さ	備考	分類	写真
997	ⅨD 2 h 住	焼土の中	石胎	板板岩	北上山地	0.7	1.1	0.4	0.80	基部、尖端部両方も欠損.	200
998	ⅨD 2 h 住		石胎	泥質凝灰岩	宇石西郡	7.7	3.3	0.8	16.28	刃部に粗粒する辺は粗い加工(素材)のまま.	1 a 1 200

第208図 ⅨD 2 h 住居跡出土遺物



遺物 (第208図、写真図版200)

〈土器〉996の他、埋土から繊維を混入する土器小片が数点出土している。

〈石器〉997は基部、尖頭部両方とも欠損している。尖頭部側はステップ状剥離、基部側は横折れである。

時期 出土遺物から、縄文時代前期後葉から末葉に属すると考えられる。

ⅡD3c住居跡 (遺構番号112)

遺構 (第209図、写真図版70)

〈検出状況〉東尾根西斜面から平坦部への変換点に位置する。小角礫を含む褐色土層上面で検出した。西側と北側は斜面のため流失している。

〈形状・規模〉西半分は不明であるが、長軸が等高線にほぼ平行する長方形と推定される。規模は残存値で、南北5.5m、東西3.2mである。

〈壁・壁高〉上位は褐色土層、下位は基盤層である黄褐色土を壁とし、外傾する。壁高は東壁28cm、南壁33cmである。

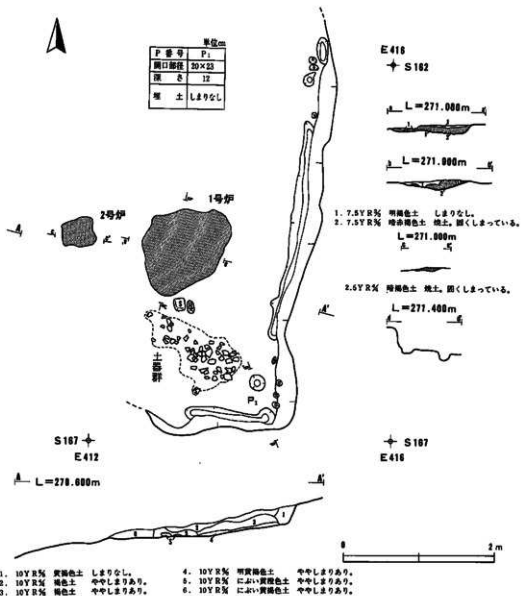
〈埋土〉壁際は締まりにむらがあつてブロック状に剥がれやすい。床に接する部分では、固く締まり遺物を含む。

〈床・柱穴・施設〉斜面上方に当たる東側は基盤層である黄褐色土、南側は褐色土層を床面とする。斜面に沿ってやや傾斜し、基盤層の部分は高く、比高16cmである。柱穴が南東隅に1個検出された。周溝が、東壁際および南壁際の一部に巡る。規模は、幅15～25cm、深さ4～10cmで住居の埋土と大差ない褐色～黄褐色土で締まりに欠ける。

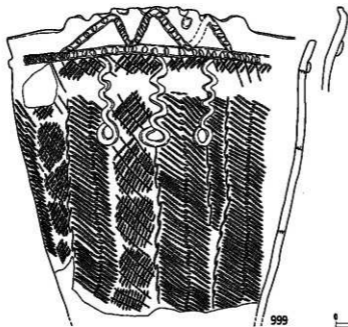
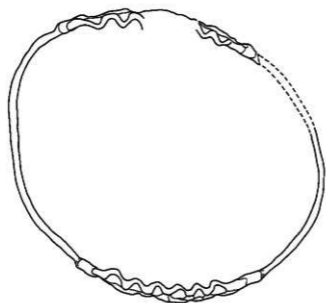
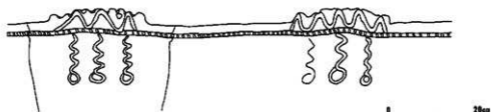
〈炉〉焼土が2基検出された。いずれも断面がレンズ状で基盤層まで漸移的に焼土化がおよぶことから地床炉と考えられる。東側のものを1号炉、西側のものを2号炉とする。1号炉の焼土は105×13cmの不整形に分布し、厚さは最大14cmである。2号炉の焼土は47×54cmの不整形に分布し、厚さは最大6cmである。

遺物 (第210～213図、写真図版200・201)

〈土器〉南壁より一括して出土したのが、999・1000・1001 (1002と同一個体) の3個体である。床面から床上20cmにかけて、原形をとどめることなく渾然として出土したものであり、共伴すると捉えていいものである。999はやや石炭バケツ状に類似する器形で、口縁部には上面観が鋸歯状となる装飾体が2単位、対向して位置する。装飾体の両端には三角形の山形突起が配される。口縁部下には胴部と区画するように隆帯が走り、その上を棒状の工具による連続刺突が施される。装飾体の口縁部分には口縁部下と同様の隆帯が鋸歯状に走るが、その屈折部分は折り返し手法によるものではない。一方は3個の三角形を形成するのに対し、他方は4

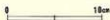
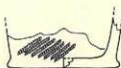
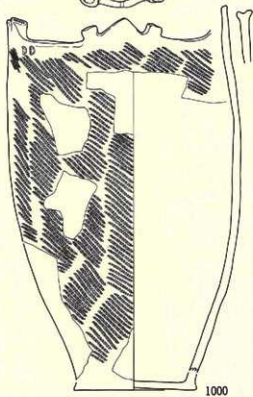
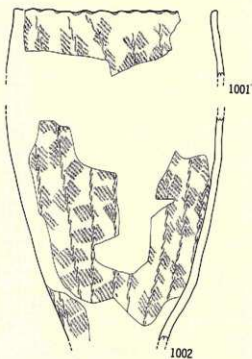
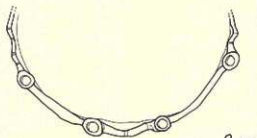


第209図 IXD3c 住居跡



番号	出土地点	層位	文様	地文	口徑	底径	高さ	番号	分類	厚尺
999	ⅨD3c住	灰面	鋸歯状の鋸歯、尾号上巻取工具による跡、ボツン状突起。	L.R結家。L.R部にR巻き付付?	32.9	-	32.6	内面ケズリ	Ⅸ627	200

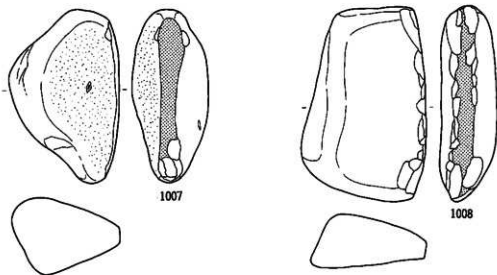
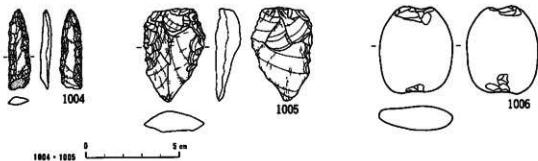
第210図 ⅨD3c住居跡出土遺物(1)



番号	出土地点	層位	文様	地文	口縁部の高	器高	備考	分類	写真	
1000	ⅨD3c住	床面	口縁部山形突起, 四文.	L.W縦.	23.4	13.1	46.8	縁飾孔.	Ⅱ6a7	200
1001	ⅨD3c住	床面	口縁部段縁状行底.	L.縦, 段位縁跡文.	21.6	-	17.0	1000と同一個体.	Ⅱ6b1	200
1002	ⅨD3c住	床面		L.縦, 段位縁跡文.	-	-	14.0		Ⅱ6b1	200
1003	ⅨD3c住			L.R縦.	-	11.0	4.2	銅代紙.		200

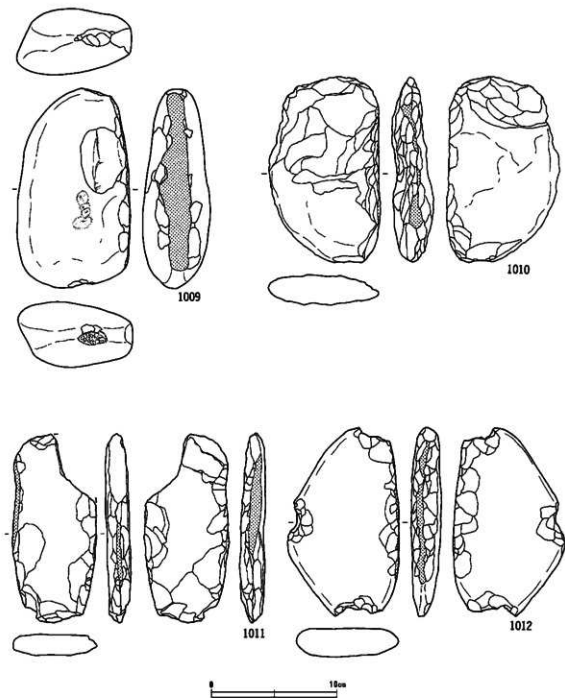
第211図 ⅨD3c住居跡出土遺物(2)

個であり一定していない。口縁部下の隆帯から胴上半部に波状の粘土紐が3本垂下し、その末端は円を描くように閉じられる。粘土紐上には施文されない。口縁部にボタン状の瘤が貼り付けられるが、1個のみであり、他の場所には剥落した痕跡は全くうかがえない。地文は複数の原体を用いている。LRを結束させ縄端を片結びしたものの縦回転、LRの縄端を片結び、Rを巻き付けたものと観察して実測したが、燃戻しと見られる部分もあり断定は避けた。地文施文後、口縁部は磨消して無文としている。ハケメ状の調整が施されている。1000は口縁部に3単位の突起が残存している。完全なものは1単位のみでその形状は、中央部に三角形状の



番号	出土地点	層位	器種	材質	産地	長さ	幅	厚さ	重量	備考	分類	写真
1004	ⅨD3c住		石甕	粘板岩	北上山地	4.2	1.1	0.4	2.63			200
1005	ⅨD3c住	塚土中位	不定形石器	硬質泥岩	宇石西部	5.0	3.3	1.3	16.48	二次加工の部分は一影に限られる。	Ⅱ	200
1006	ⅨD3c住	塚土中位	石甕	凝灰岩	北上山地	6.8	5.6	1.9	115		Ⅰ	200
1007	ⅨD3c住	塚土	縁部器類A群	硬砂岩	北上山地	13.8	8.7	6.1	780		Ⅰ a 1	201
1008	ⅨD3c住	塚土	縁部器類A群	河津石宝山岩	奥羽山地	15.5	10.0	4.4	1070		Ⅰ a 1	201

第212図 ⅨD3c住居跡出土遺物(3)



番号	出土地点	層位	形種	石質	産地	長さ	幅	厚さ	重量	備考	分類	写真
1009	ⅡD3c住	床面	刮削器類A群	地長貫硬灰岩	北上山地	25.7	9.0	8.0	1170	+ 剥石、+ 熱石。	Ⅱa 2	201
1010	ⅡD3c住	床面	刮削器類A群	綠色片岩	北上山地	24.7	8.8	3.4	510		Ⅱb 2	201
1011	ⅡD3c住	床面	刮削器類A群	西輝石質山岩	奥羽山地	34.8	6.6	1.6	250		Ⅱb 3	201
1012	ⅡD3c住	埋土	刮削器類A群	凝灰質硬砂岩	北上山地	34.9	6.9	2.3	430	換り有り。	Ⅱb 2	201

第213圖 ⅡD3c住層跡出土遺物(4)

山形を置き、その両側に中央部を囲ませた円文状突起を配する。欠損している他の2単位は、中央部の山形を2個おいてその両端に円文状突起を配するものと考えられる。これらの残存状況から、都合4単位の突起があって、対向する1対がそれぞれセットになるものであろう。地文は斜縄文で、装飾体部分まで施文されている箇所がある。口縁部付近に補修孔があるが、貫通せず盲孔のままである。焼成は良好で硬質である。内面はハケメ状の調整が施されている。胴下半部にはススが附着する。

〈石器〉図示した他にフレークが4点埋土から出土している。

時期 出土土器から縄文時代前期後葉に属すると考えられる。

### ⅡD3g住居跡（遺構番号113）

遺構（第205図、写真図版71）

〈検出状況〉東尾根南斜面中腹部に位置する。平面的には検出できなかったが、褐色土層上面で炉と考えられる焼土を検出、その斜面上方で基盤層まで掘り込んだ壁を確認し、住居跡として認定した。西側でⅡD2g住居跡、東側でⅡD4g住居跡と重複する。埋土の判別が困難だったため、ⅡD2g住居跡との境界は明らかにできなかった。ⅡD4g住居跡との境界は、埋土断面観察によって判断し、本住居のほうが新しいと考えられた。南側は斜面のため流失している。

〈形状・規模〉範囲を明瞭に把握できず、形状は不明である。規模は南北は残存値で3.4m、東西は不明である。

〈壁・壁高〉北壁のみ残存し、上位は褐色土層、下位は基盤層であるにぶい黄褐色土を壁とし、外傾する。壁高は66cmである。

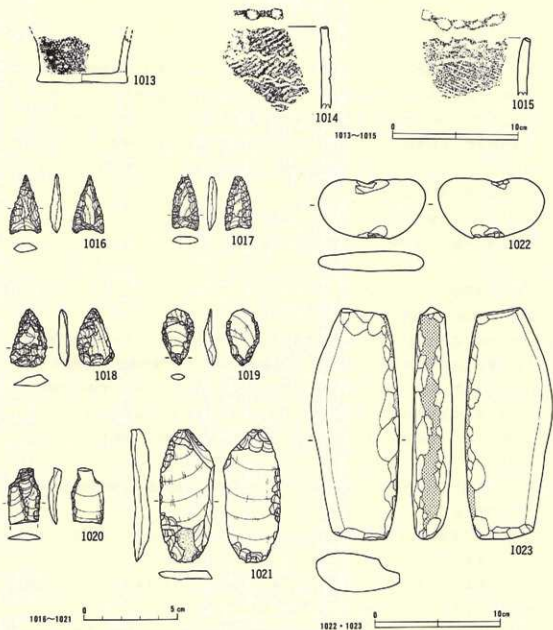
〈埋土〉斜面上方は褐色～黄褐色土、下方は暗褐色～褐色土で、下位は締まっている。自然堆積の様相を示す。

〈床・柱穴・施設〉斜面上方に当たる北側は基盤層で固く締まり、南側は褐色土層で比較的軟質である。斜面に沿って傾斜し、比高20cmである。北壁側に粉炭が3箇所集中的に分布する。厚さは1cm程度である。P1は断面形が摺鉢状で浅く、柱穴とはならないと考えられる。P2は本住居のものか、重複するⅡD2g住居跡のものか所属不明である。

〈炉〉地床炉が1基検出された。規模は55×85cmの不整楕円形状に分布し、厚さは最大10cmである。一部擾乱があるものの、床面を構成する褐色土層が焼土化したもので固く締まっている。

遺物（第214図、写真図版201・202）

〈土器〉床面から545g、埋土から962g出土した。1013は床面において底面を上にして出土したものである。網代底が観察されるが不鮮明なので図化は省略した。胴下半部の地文の原体



番号	出土地点	層位	文様	地文	口径	底部直径	器高	備考	分類	写真
1013	ⅨD 3 住	体面		オオノコ花輪 (詳細不明)	—	9.7	4.4			201
1014	ⅨD 3 住	べら卜埋土	口縁部指痕状圧痕。	七宝縷。片船シ儀位縁結文。					Ⅱ b 2	201
1015	ⅨD 3 住	Q 4 埋土	口縁部指痕状圧痕。	京撫赤文。					Ⅱ b 2	201

番号	出土地点	層位	器種	石質	産地	長さ	幅	厚さ	備考	分類	写真	
1016	ⅨD 3 住	Q 1 埋土	石鏃	硬質凝灰質泥岩	平石西部	3.1	1.7	0.6	1.90		Ⅱ b 2	201
1017	ⅨD 3 住	埋土	石鏃	硬質凝灰質泥岩	平石西部	4.2	1.4	0.4	0.50		Ⅱ b 2	201
1018	ⅨD 3 住	埋土	石鏃	粘板岩	北上山地	3.0	2.0	0.5	3.01		Ⅱ 2	201
1019	ⅨD 3 住	埋土	石鏃	硬質泥岩	平石西部	3.0	1.7	0.7	1.96	基部に厚い層にやや厚い。基部のくちあしに浅く深い。		201
1020	ⅨD 3 住	埋土	石甕	硬質泥岩	平石西部	0.6	1.7	0.4	0.30		I	201
1021	ⅨD 3 住	埋土	不定形石器	硬質泥岩	平石西部	7.6	2.9	0.6	17.70	裏面からの調整である。	I a 2	201
1022	ⅨD 3 住	埋土	石鏃	硬質泥岩	北上山地	4.7	3.5	1.0	100		Ⅱ	201
1023	ⅨD 3 住	埋土	粘板岩類 A 群	硬砂岩	北上山地	18.2	6.9	2.9	630		Ⅱ b 2	201

第214図 ⅨD 3 住居跡出土遺物



は、多軸結条体かと思われるが、個々の節は斜め上方向からの浅い刺突のようにも見え、不明である。1014・1015は地文は異なるが胎土および口唇部施文は類似する。他に網目状捲糸文の土器片が出土している。

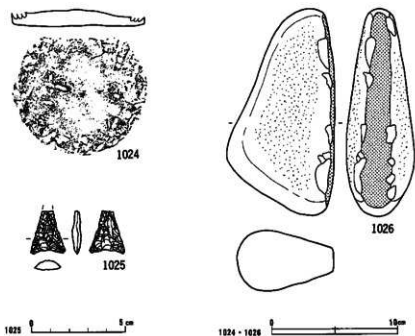
〈石器〉1017は横折れである。1018は表右辺が欠損又は未加工、裏右辺も未加工で対称性を欠く。1019は尖頭部がやや挟られているとみて錐としたが、石鏃かも知れない。図示した他に岩手火山起源の溶岩が2点、Uフレが3点、フレークが4点埋土から出土している。

時期 出土土器から、縄文時代前期後葉から末葉に属すると考えられる。

### ⅨD3h住居跡（遺構番号114）

遺構（第207図、写真図版72）

〈検出状況〉東尾根南斜面中腹に位置する。平面的な検出はできなかった。褐色土層上面で焼土を検出、その斜面上方に基盤層まで掘り込む壁を確認し、住居跡と認定した。



番号	出土地点	層位	文様	地文	口径	胴部直径	高さ	備考	分類	写真		
1024	ⅨD3h住	床面	網目状。							202		
番号	出土地点	層位	器類	材質	産地	長さ	幅	厚さ	備考	分類	写真	
1025	ⅨD3h住	埋土	石鏃	粘板岩	北上山地西縁	(2.2)	1.9	0.5	(1.2)	II b 4	202	
1026	ⅨD3h住	床面	粘板岩製人形	同層石製山骨	奥羽山地	16.5	8.4	4.9	960	平磨面2面。	I a 1	202

第215図 ⅨD3h住居跡出土遺物

北側でⅩD 3 h-2住居跡、西側でⅩD 2 h住居跡と重複する。埋土断面観察から、ⅩD 3 h-2住居跡より新しい。ⅩD 2 h住居跡とは境界を明瞭にできず、また新旧関係も明白にできなかったが、本住居の炉が一段高いこととその位置から、本住居の方が新しいと考えられる。

また本住居の床面下からⅩD 3 h土坑が検出された。

〈形状・規模〉南側は斜面のため流失しており、西側はⅩD 2 h住居跡との重複により不明である。規模も不明であるが、南北方向の残存値は2.1mである。

〈壁・壁高〉北壁のみ残存する。基盤層である黄褐色土で、やや外傾し、壁高8cmである。

〈埋土〉壁際と床直上の暗褐色土は、固さにむらがあり、ブロック状に割られる。

〈床・柱穴・施設〉西側は基盤層を、東側はⅩD 3 h土坑の埋土を、南側は褐色土層を床面とする。斜面に沿ってやや傾斜し、比高15cmである。柱穴は検出されなかった。

〈炉〉地床炉が2基検出された。西側のものを1号炉、東側のものを2号炉とする。1号炉の焼土は83×90cmの不整形に分布し、厚さは最大5cmである。平面的には広い分布をみせるものの、層厚はあまり大きな値を示さない。2号炉の焼土は45×53cmの不整形円形状に分布し、厚さは最大8cmである。いずれも床面を構成する褐色土層が焼土化したものである。

遺物（第215図、写真図版202）

〈土器〉床面から1024が1点、埋土からは文様不明の極細片が1点出土したのみである。

〈石器〉1025の尖頭部は、裏方向から力の加わった横折れである。他に埋土からフレーク4点が出土している。

時期 床面出土土器から、縄文時代前期後葉から末葉に属すると考えられる。

### ⅩD 3 h-2住居跡（遺構番号115）

遺構（第207図、写真図版72）

〈検出状況〉東尾根南斜面中腹部に位置する。ⅩD 3 h住居跡の精査中に、同住居の北側に一段高い平坦部と壁とを確認し、住居跡として認定した。大半はⅩD 3 h住居跡に壊されている。

〈形状・規模〉残存状況が悪く不明である。規模は残存値で東西3.8m、南北1.4mである。

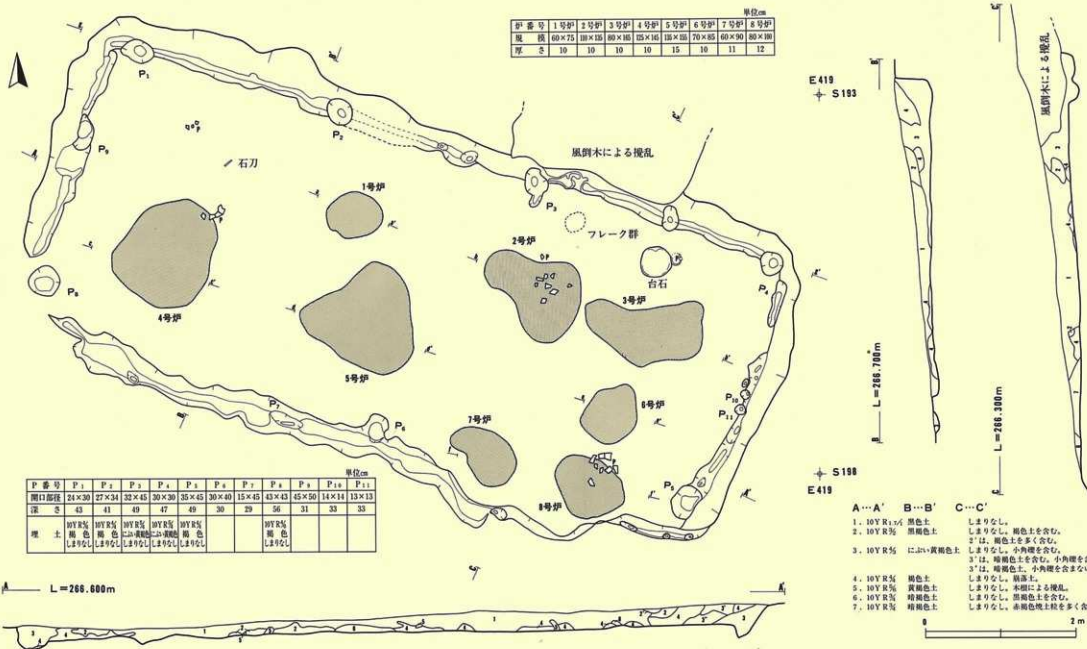
〈壁・壁高〉上位は褐色土層を、下位は基盤層を壁とし、外傾する。壁高は、西壁17cm、北壁26cmである。

〈埋土〉3層に細別したが、部分的な混土であり、褐色土1層で把握できる。重複するⅩD 3 h住居跡の埋土との区別は色調から明瞭である。

〈床・柱穴・施設〉一部褐色土層を床とするが、壁寄りには基盤層で固く締まる。斜面に沿ってやや傾斜し、比高10cmである。柱穴は検出されなかった。

〈炉〉検出されなかった。

L = 266.900m



第216図 IXD3j住居(1)

遺物 <土器>埋土から極細片が数点35g出土したが、文様不明瞭であり図化は省略した。  
 時期 特定する資料を欠くが、検出状況・重複関係から縄文時代前期後葉から末葉に属すると  
 推定される。

### ⅩD3 j 住居跡 (遺構番号116)

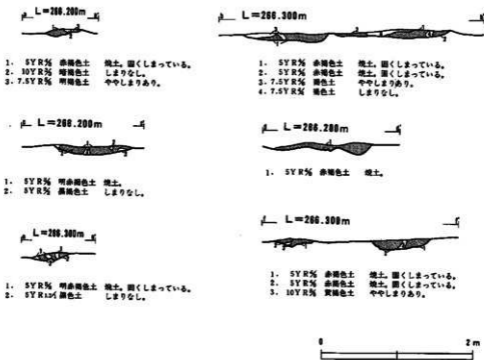
遺構 (第216・217図、写真図版73)

<検出状況>東尾根南麓の傾斜変換点付近に位置する。褐色土層上面で黒色土が分布すること  
 から検出した。北壁の一部は倒木痕により擾乱を受けている。南側は斜面のため壁は流失し  
 て、周溝と柱穴がかるうじて検出され、本住居の範囲を把握することができた。

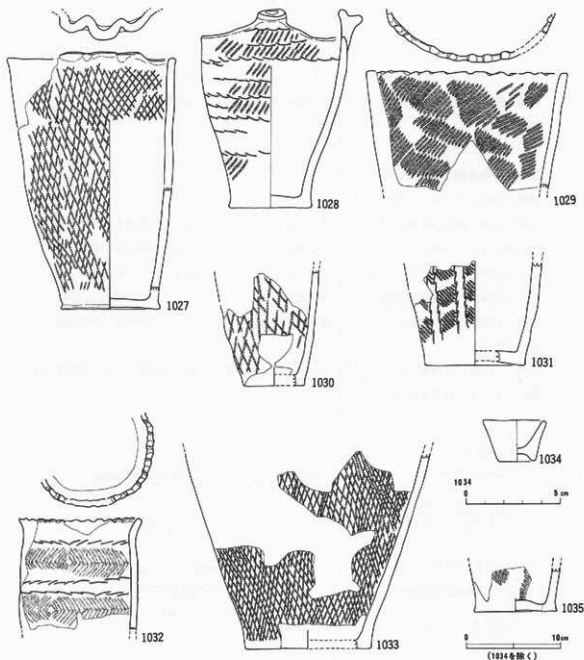
<形状・規模>長軸が等高線にほぼ平行する長方形で、長軸は10.1m、短軸は4.7mである。

<壁・壁高>上位は褐色土層、下位は基盤層でほぼ直立する。壁高は東壁40cm、西壁20cm、北  
 壁41cmである。

<埋土>上位には漆黒の締まりのない腐植土、下位には褐色土および崩落土である黄褐色土が  
 堆積している。自然堆積の様相である。

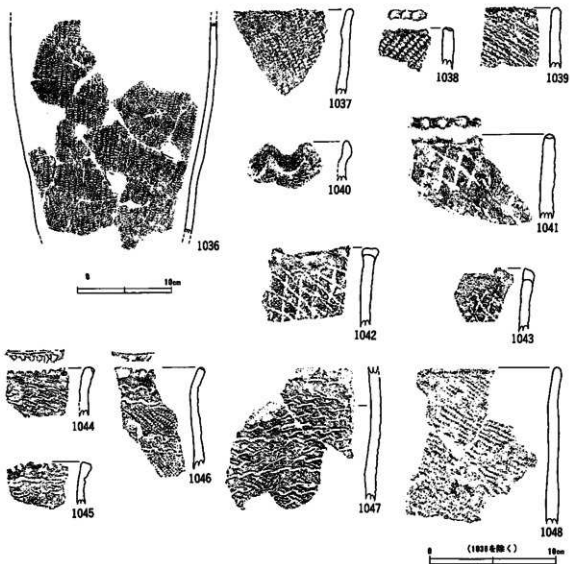


第217図 ⅩD3 j 住居跡(2)



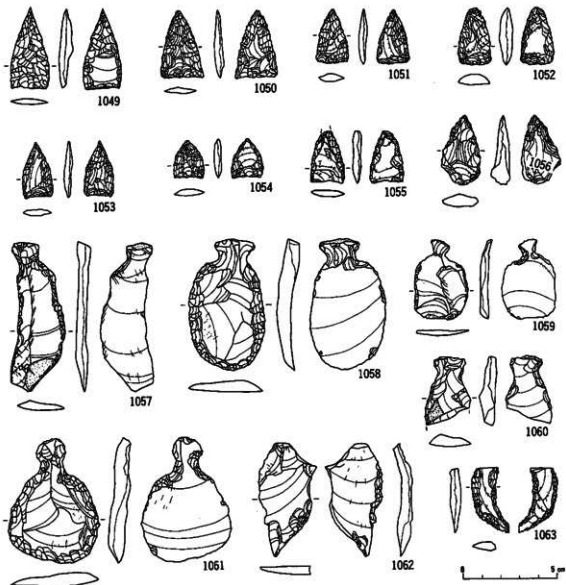
番号	出土地点	層位	文様	地文	口径	底部径	器高	備考	分類	写真
1027	ⅨD 3 j	住	卵麻状装飾体。	L網目状器文。	38.6	30.8	27.2		Ⅸ647	202
1028	ⅨD 3 j	住	波状口縁、口縁部内文状装飾体。	L点模、扇状模器文	15.5	6.8	21.0		Ⅸ647	202
1029	ⅨD 3 j	住	口唇部右方向からの卵麻状圧痕。	L点模。	21.2	-	22.2		Ⅸ657	202
1030	ⅨD 3 j	住	住	R網目状器文。	-	6.4	22.2		Ⅸ6	203
1031	ⅨD 3 j	住	住	L点模。	-	30.4	28.0			203
1032	ⅨD 3 j	住	Q 4 埋土	L × R 第 1 種結束糸状織文。	13.6	-	12.0		Ⅸ65	203
1033	ⅨD 3 j	住	埋土	R網目状器文。	-	13.4	20.8		Ⅸ6	203
1034	ⅨD 3 j	住	埋土、小型土器。		3.4	2.2	2.2			203
1035	ⅨD 3 j	住	埋土	R点模。	-	4.6	4.0			203

第218図 ⅨD 3 j 住居跡出土遺物(1)



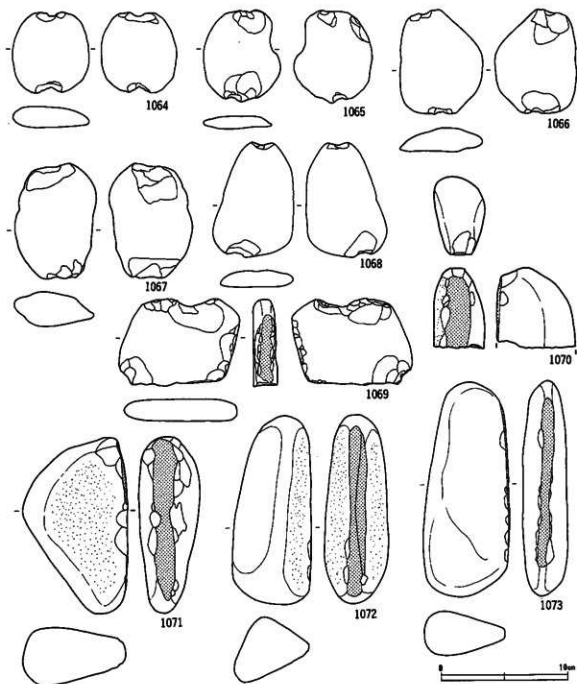
番号	出土地点	層位	支那	地文	口徑	底直徑	器高	備考	分類	写真
1036	ⅨD3j住	床面		R.L.焼.	-	-	32.5	1037と同一個体.	Ⅱc	203
1037	ⅨD3j住	床面		R.L.焼.				1036と同一個体.	Ⅱc	203
1038	ⅨD3j住	床面	口縁部右方向からの指紋状圧痕.	L.R.焼.					Ⅱc b 4	203
1039	ⅨD3j住	床面		R.R. (直前段反焼)?					Ⅱc	203
1040	ⅨD3j住	埴土	口縁部指紋状圧痕体.						Ⅱc a 7	203
1041	ⅨD3j住	Q3 埴土	口縁部指紋状圧痕.	R.網目状焼糸文.					Ⅱc	203
1042	ⅨD3j住	埴土	山形口縁?				1043と同一個体.		Ⅱc	203
1043	ⅨD3j住	埴土	山形口縁?				1042と同一個体.		Ⅱc	203
1044	ⅨD3j住	埴土	細かな網目状焼文に14部、口縁部斜行焼文、指紋状圧痕.						Ⅱc a	203
1045	ⅨD3j住	床面	細かな網目、口縁部斜行焼文に16部からの部、指紋状圧痕.						Ⅱc a	203
1046	ⅨD3j住	Q3 埴土	口縁部指紋状圧痕. 横位焼糸文.	R.L.焼. 片縁位焼糸文.					Ⅱc a	203
1047	ⅨD3j住	埴土						縦線糸文.	Ⅱc b	203
1048	ⅨD3j住	埴土	口縁下L.R.側面圧痕.	L.R.焼.					Ⅱc	203

第219図 ⅨD3j住居跡出土遺物(2)



番号	出土地点	層位	器種	石質	産地	長さ	幅	厚さ	重さ	備考	分類	写真
1049	ⅨD3j住	埴土	石鏃	地質泥岩	宇石西原	3.6	2.4	0.5	3.65		Ⅱa	204
1050	ⅨD3j住	埴土	石鏃	地質泥岩	宇石西原	3.5	2.3	0.5	2.58		Ⅱa	204
1061	ⅨD3j住	埴土	石鏃	地質泥岩	宇石西原	2.9	1.7	0.4	1.70		Ⅱa	204
1062	ⅨD3j住	埴土	石鏃	粘板岩	北上山地	3.0	1.8	0.5	3.41		Ⅱa	204
1063	ⅨD3j住	埴土	石鏃	硬質凝灰質泥岩	宇石西原	3.0	1.6	0.4	1.46		Ⅱa2	204
1064	ⅨD3j住	埴土	石鏃	地質泥岩	宇石西原	2.0	1.6	0.4	1.20		Ⅱa2	204
1065	ⅨD3j住	埴土	石鏃	硬質泥岩	宇石西原	(2.8)	1.7	0.3	(0.76)	基部部は平頭、尖頭部部に内湾、先端部欠損(備付あり)。	Ⅱa2	204
1066	ⅨD3j住	床層	石鏃	硬質泥岩	宇石西原	3.7	2.0	1.0	5.76		Ⅱa	204
1067	ⅨD3j住	埴土	石鏃	砂質粘板岩	北上山地	7.9	2.5	0.5	12.35		Ⅱb1	204
1068	ⅨD3j住	埴土	石鏃	砂質泥岩	宇石西原	6.9	4.1	1.2	22.33		Ⅱb3	204
1069	ⅨD3j住	埴土	石鏃	チャート	北上山地	4.2	2.8	0.7	3.73	刃のつくり出し、ノッチのつくり出しも詳しい。	Ⅱb1	204
1060	ⅨD3j住	埴土	石鏃	チャート	北上山地	(3.6)	2.3	0.8	(8.18)	欠損品。	Ⅱb	204
1061	ⅨD3j住	埴土	石鏃	赤色凝灰岩	北上山地	6.6	4.8	1.2	22.73	四角形状。つまみ方向からの打痕。	Ⅱa	204
1062	ⅨD3j住	埴土	不定形石器	粘板岩	北上山地	6.0	3.0	1.1	11.19	素材の形を大きく残す。	Ⅱ	204
1063	ⅨD3j住	埴土	不定形石器	硬質泥岩	宇石西原	3.5	2.0	0.6	2.87		Ⅱd2	204

第220図 ⅨD3j住居跡出土遺物(3)



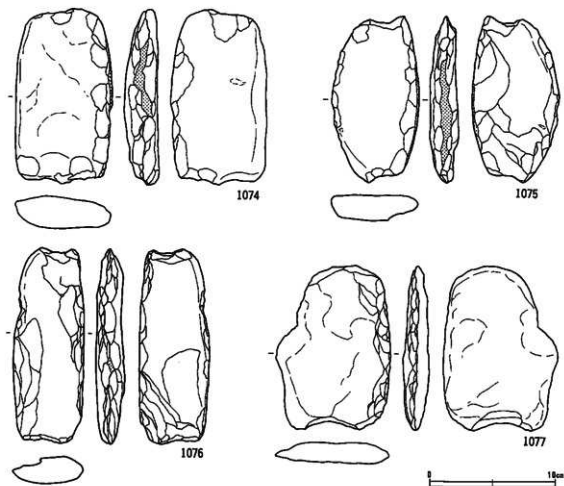
番号	出土地点	層位	器種	石質	産地	長さ	幅	厚さ	備考	分類	番号	
1064	ⅨD3j	住	石鏃	燧灰岩	北上山地	6.3	6.1	1.7	105		I	204
1065	ⅨD3j	住	石鏃	アルプス砂岩	北上山地	7.2	6.1	1.1	108, 12		I	205
1066	ⅨD3j	住	石鏃	燧灰岩	北上山地	8.2	6.5	1.9	150		I	206
1067	ⅨD3j	住	石鏃	燧灰岩	北上山地	9.0	6.2	2.7	180		I	207
1068	ⅨD3j	住	石鏃	燧灰岩	北上山地	9.0	5.8	1.3	145		I	205
1069	ⅨD3j	住	石鏃	綠長質燧灰岩	北上山地	6.9	9.6	1.7	180		Ⅲ	205
1070	ⅨD3j	住	段鋸形類A部	綠長質燧灰岩	北上山地	(6.2)	(4.0)	(6.3)	(240)	平滑面1面。	I a	205
1071	ⅨD3j	住	段鋸形類A部	阿拜石安山岩	農羽山地	14.0	8.4	4.9	850	平滑面1面。	I a 1	205
1072	ⅨD3j	住	段鋸形類A部	阿拜石安山岩	農羽山地	14.8	8.3	4.8	625	平滑面2面。	I a 1	205
1073	ⅨD3j	住	段鋸形類A部	燧灰質硬砂岩	北上山地	17.0	6.8	6.4	600		I a 1	205

第221図 ⅨD3j住層跡出土遺物(4)



〈床・柱穴・施設〉住居中央部は固く締まっている。北壁際は軟質で一部掘り過ぎ周溝の確認ができなかった。ほぼ水平で平坦である。柱穴を11個検出した。P1～P4の間隔は2.9～2.7mでほぼ等しい。P5～P8の場合は最大4m、最小1.2mと大きな差がある。規模・位置から対応関係を把握できるのは、北側の4個(P1～P4)と南側の2個(P5とP8)である。P6とP7は出入り口の施設などの可能性が考えられる。

周溝がほぼ全周する。北壁際と西壁際のは幅20～30cm、深さ15cm程でほぼ均一であるのに対し、東壁際のは一部がとぎれ、また南側のは深さ10～15cm、幅22～52cmと規模に



番号	出土地点	層位	群	石質	産地	長さ	幅	厚さ	備考	分類	写真
1074	ⅨD3J住	埴土	麻溝群A群	角礫石安山岩	奥羽山地	13.7	7.6	2.6	420		Ⅸb 2 205
1075	ⅨD3J住	埴土	麻溝群A群	礫砂岩	北上山地	12.0	6.9	2.0	260	挟り有り。	Ⅸb 3 205
1076	ⅨD3J住	埴土	麻溝群A群	緑泥石片岩	北上山地	15.3	5.5	2.0	260	挟り有り。	Ⅸb 3 205
1077	ⅨD3J住	埴土	麻溝群A群	礫砂岩	北上山地	12.0	9.1	2.0	270	挟り有り。	Ⅸc 2 206

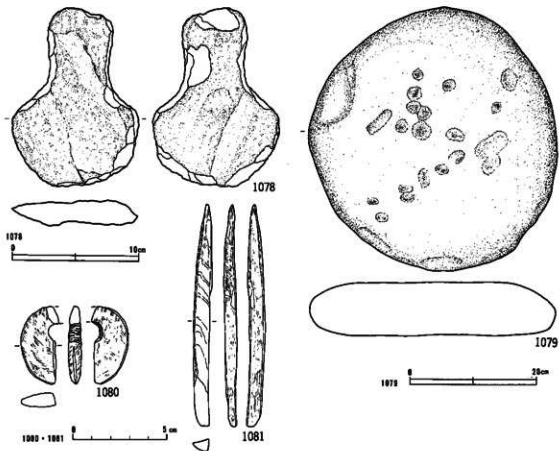
第222図 ⅨD3J住居跡出土遺物(5)

幅がある。埋土は締まりを欠く暗褐色土である。

<炉>焼土が8基検出された。いずれも床面を構成する黄褐色土が焼土化したもので地床炉と考えられる。住居の埋土および焼土の中あるいはその下に炭化材は殆ど混入しない。断面形は概ねレンズ状で、厚さはいずれも10cm以上である。北西方向から南東方向へ、それぞれ1号炉～8号炉と命名する。炉の位置は、住居の長軸方向に1～3号炉、4～6号炉、7・8号炉がそれぞれ一直線上に並ぶ。

遺物 (第218～223図、写真図版202～205)

<土器>床面から4725g、埋土から11,020g出土した。1027は口縁部に上面観が鋸歯状となる装飾体が1個のみ残存する。焼成は良好で硬質である。装飾体上は意図的に平坦につくられ、



番号	出土地点	層位	形種	石質	産地	長さ	幅	厚さ	重さ	備考	分類	写真
1078	ⅡD3j	住	埋土	石隕	ホルンフェルス	14.2	10.1	2.0	360			206
1079	ⅡD3j	住	床面	石隕・台石類	地長賢洞所産	41.8	39.3	8.4	20450			
1080	ⅡD3j	住	床面	写飾	チャート	4.1	(2.6)	0.7	(7.80)			208
1081	ⅡD3j	住	Q1埋土	石刀	粘板岩	17.6	1.4	0.9	30			208

第223図 ⅡD3j住居跡出土遺物(6)

口唇部も同様である。胴下半部にスガが付着する。1028は床面北東隅の1079の東に隣接して置かれていたものである。口縁部に中央が凹む円文状の突起を対向する位置に1対配する。1029は口唇部に右方向から指頭状の瓦痕が施され、その部分は上面観がややふくらむ。1031は胎土に細礫を多く含む。1032は1段の縄端を処理した綾絡文が横走する。口唇部は指頭瓦底で爪形が明瞭に残る。1034の小型土器は埋土からの出土である。1040は鋸歯状粘土紐を、器体にほぼ平行に貼り付けたものである。

〈石器〉1055は基部側は平坦、尖頭部側は肉厚である。尖頭部は横折れている。1059は二次加工の刻線は浅く小さい。つまみ部の加工も素材の形状を利用して最低限である。1069は1側面に磨面がある。敲磨器類からの転用か。1072は磨面中に線紋が走り、2面の使用痕が残存する。1078は表面が磨耗しているが、端部の使用痕は明瞭である。1079は床面北東方向に置かれていたもので、台石様の凹みが観察される。1080は穿孔のための加工痕が残っている。図示した他に40×42×6cm大の台石様の破砕礫（珪長質凝灰岩）が床面から出土している。他にフレークが144点（うち床面から52点）出土している。

時期 床面出土土器から、縄文時代前期後葉に属すると考えられる。

#### IX D 4 d 住居跡（遺構番号117）

遺構（第224図、写真図版74）

〈検出状況〉東尾根の西側鞍部に位置する。平面的な検出できなかったが、褐色土層で炉と考えられる焼土を検出、その斜面上方で基盤層まで掘り込んだ壁を確認し、住居跡として認定した。西側は斜面のため流失している。北側に一部張り出し部がある。掘り過ぎや重複の可能性を想定したが、埋土からはその両方とも考えられなかった。

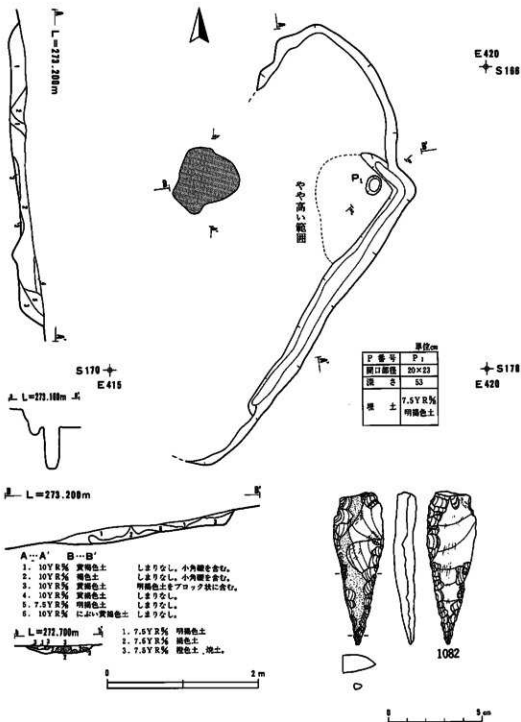
〈形状・規模〉一部張り出し部をもつが、長軸が等高線にほぼ平行する長円形基調と考えられる。規模は残存値で東西2.9m、南北は5.5mである。

〈壁・壁高〉東壁は岩盤の風化層を、張り出し部は褐色土層を壁とし、ほぼ直立する。壁高は、東壁35cm、北壁（張り出し部）18cmである。

〈埋土〉褐色～黄褐色土で締まりを欠く。第3層、第5層は岩盤風化層の崩落土である。

〈床・柱穴・施設〉北東寄りには岩盤風化層を床とし、他よりやや高い平坦部がある。南側は凹凸が大きい。全体に斜面に沿って傾斜し、最大比高23cmである。柱穴が1個、北東隅に検出された。埋土は住居の埋め土の第5層に等しい。締まりを欠く。周溝が斜面上方に当たる東壁際を巡る。規模は、幅17cm、深さ9～16cmで、岩盤風化層の崩落土である。南側はとぎれる。

〈炉〉地床炉が1基検出された。規模は75×97cmの不整形に分布し、厚さは最大10cmである。一部擾乱があるものの、床面を構成する基盤層が焼土化したもので固く締まっている。



番号	出土地点	層位	器種	材質	産地	長さ	幅	厚さ	重さ	備考	分類	写真
1082	IX D4d住	Q1埋土	石鏃	燧石(硬質燧石)	宇石西産	8.1	2.7	1.3	20.7g	基部と首部は連続した直線。		206

第224図 IX D4d住居跡・出土遺物

遺物 (第224図、写真図版206)

<土器>埋土から横位の綾絡文と縦織を含む縄文のみの細片が数点出土しているが、図化に耐えないので省略した。

<石器>1082は錐としたが、右側縁は刃部としての機能も有すると思われる。他にフレーク1点が出土している。

時期 特定する資料を欠くが、検出状況・出土土器から縄文時代前期と考えられる。

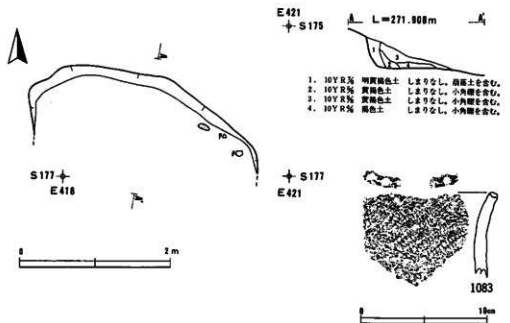
ⅨD4f住居跡 (遺構番号118)

遺構 (第225図、写真図版75)

<検出状況>東根根南斜面に位置する。基盤層上面で検出した。南側は斜面のため流失している。

<形状・規模>残存状況が悪く、不明である。規模は、東西3.1m、南北は残存値で1.2mである。

<壁・壁高>黄橙色の基盤層で、ほぼ直立する。壁高は東壁13cm、西壁16cm、北壁36cmである。



番号	出土地点	層位	文様	地文	口縁	遺跡番号	備考	分類	写真
1083	ⅨD4f住	床面	口唇部指環状瓦葺。	L.R.縦。片結び縦位綾絡文。			口縁部中央部分は欠落している。	D4b-d	206

第225図 ⅨD4f住居跡・出土遺物

〈埋土〉4層に分けられる。いずれも縮まりに欠ける。第1層には壁の崩落土をブロック状に含む。

〈床・柱穴・施設〉基盤層を直接床とし、やや凹凸があるが、全体としてはほぼ水平である。柱穴は検出されなかった。床面の東側で焼土と粉炭が検出された。いずれも層厚がなく異地性のものと考えられる。

〈炉〉検出されなかった。

遺物 (第225図、写真図版206)

〈土器〉1083の口縁部は一部欠落しているが、指頭状圧痕が全周するものと考えられる。埋土からは横位の綾絡文、単節斜縄文の細片が出土したが、図示は割愛した。

時期 床面出土土器から、縄文時代前期後葉から末葉に属すると考えられる。

#### ⅨD 4 g 住居跡 (遺構番号119)

遺構 (第205図、写真図版75)

〈検出状況〉東尾根南斜面中腹部に位置する。褐色土層上面で焼土を検出し、その斜面上方て基盤層を掘り込み壁を確認し、住居跡として認定した。南側は斜面のため流失している。

西側でⅨD 3 g 住居跡、東側でⅨD 4 g-2 住居跡と重複する。ⅨD 3 g 住居跡との新旧関係は、埋土断面観察から本住居の方が先行する。ⅨD 4 g-2 住居跡との関係は明瞭には把握できなかった。本住居の東壁が確認できなかったことから、ⅨD 4 g-2 住居跡によって壊されたものと理解し、本住居の方が古いと考えた。

〈形状・規模〉残存状況が悪く不明である。規模は残存値で東西2.6m、南北2.8mである。

〈壁・壁高〉北壁のみ残存し、上位は褐色土層、下位は基盤層で、ほぼ直立する。壁高は45cmである。

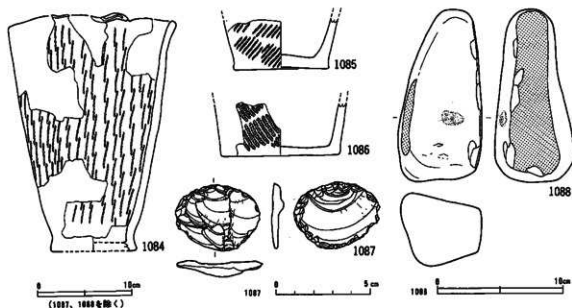
〈埋土〉4層で構成される。自然堆積の様相を示す。

〈床・柱穴・施設〉一部褐色土層を床とするが、壁寄りには基盤層で固く締まる。斜面に沿ってやや傾斜し、比高12cmである。柱穴は検出されなかった。

〈炉〉焼土が2基検出された。西側の1基は層厚が殆どないことから断面図は省略した。東側のものは床面を構成する褐色土層が焼土化したもので地床炉と考えられる。焼土は85×125cmの不整形に分布し、厚さは最大8cmである。断面形はほぼレンズ状で、固く締まっている。

遺物 (第226図、写真図版206)

〈土器〉床面から1240g、埋土から675g出土した。1084は口縁部の対向する位置に2単位の装飾体をつける。いずれもその中央部分が欠損しているので明らかではないが、鋸歯状になるものと考えられ、頂部平坦部(口唇部)に篋状工具によって鋸歯状沈線が施される。その深さ



番号	出土地点	層位	材質	地文	口径	底径	器高	備考	分類	写真
1084	ⅨD4g住	床面	口縁部磨蝕状装飾物、要助体上沈積。	縦位縞織文(2象1単位)	(口径)	(底径)	25.4		Ⅸ4g7	206
1085	ⅨD4g住	床面		上R縞。	-	10.0	5.0			206
1086	ⅨD4g住	床面		R.L縞。	-	(口径)	5.0			206

番号	出土地点	層位	器種	材質	産地	長さ	幅	厚さ	備考	分類	写真	
1087	ⅨD4g住	埋土	不定形石器	硬質泥岩	宇石西部	3.5	4.5	0.9	9.12		Ⅸd2	206
1088	ⅨD4g住	床面	磨層砂層A群	両碑石安山岩	奥羽山地	13.5	5.6	5.5	770	磨面2面。+面石。	Ⅸa1	206

第226図 ⅨD4g住居跡出土遺物

は一様ではなく、やや粗雑な印象がある。他に網目状縞糸文、多軸給条体の破片が出土している。

<石器>1087は裏側の全周を加工している。一次剝離面はリングが発達し凹凸が大きい。1088には磨面が2面観察される。他に埋土からフランク6点が出土している。

時期 床面出土土器から、縄文時代前期後葉に属すると考えられる。

#### ⅨD4g-2住居跡 (遺構番号 120)

遺構 (第227図、写真図版76)

<検出状況>東尾根南斜面中腹に位置する。ⅨD4g住居跡・ⅨD5g-2住居跡の精査で確認した。南壁は斜面のため流失している。東壁は、埋土観察用のベルトによってわずかに確認したものである。

西側でⅨD4g住居跡、東側ではⅨD5g-2住居跡と重複するが、新旧関係は必ずしも明白ではない。ⅨD4g住居跡の東壁が確認できないことから本住居の方が古いと考えた。また、

ⅡD 5 g-2 住居跡の床面に貼られた黄褐色土が重複部分では確認されないことから、本住居によって切られたと考えた。さらに、本住居の床下から、ほぼ同規模のⅡD 4 g-3 住居跡が検出された。

〈形状・規模〉南側は不明であるが、長軸が等高線にほぼ平行する楕円形と推定される。規模は、東西6.5m、南北は残存値で4.1mである。

〈壁・壁高〉上位は褐色土層、下位は基盤層でほぼ直立する。壁高は東壁18cm、西壁37cm、北壁72cmである。

〈埋土〉暗褐色土～褐色土および崩落土で、下位ほど締まりあり、自然堆積の様相を示す。

〈床・柱穴・施設〉北壁寄りには基盤層を、南側はⅡD 4 g-3 住居跡の埋土を床とし、いずれも固く締まっている。ほぼ水平で平坦である。柱穴を2個検出した。埋土は締まりを欠く暗褐色土で住居の埋土に類似する。P1は先行する炉を壊してつくられている。

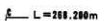
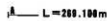
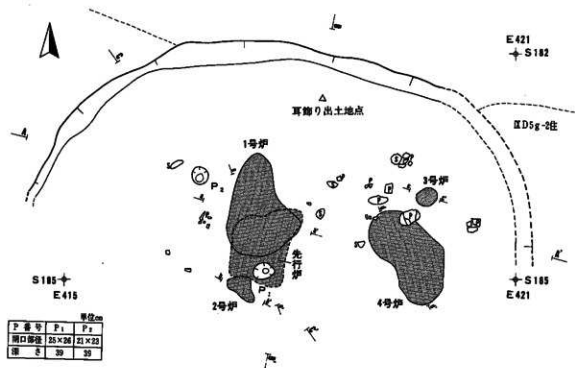
〈炉〉地床炉が4基検出された。1号炉・4号炉は、住居の中軸線上にあり、焼土の分布範囲および厚さから長期間の使用が想定される。

〈先行炉〉1号炉の下10cmのレベルで、1号炉に先行する焼土が検出された。P1はこの焼土を壊してつくられ、埋土に焼土のブロックが混入する。焼土の範囲は100×130cm、厚さは最大5cmである。後述するⅡD 4 g-3 住居跡の床面より高レベルにあり、同住居に伴うものではない。遺物（第228～231図、写真図版206～209）

〈土器〉床面から6655g、埋土から5510g出土した。1089は底部から大きく外反する器形である。1090は口縁部に2条の綾絡文が横走するが、押圧にむらがあり装飾性は高くない。口唇部には篋状工具により刻みが施される。器体表面は小さな凹凸がある。内面には全体にススが付着している。1092は口唇部全体に右方向から指頭状の押圧が施される。地文はための原体を用い、その回転方向を種々変えることにより羽状・菱形状となるが、装飾性を意識したような規則性はみられない。内面はハケメ状の調整が施されている。1093は胴下半部で底部に近い部分の破片である。1095は中央部がやや凹む扁平な円文状突起を有する。1個のみ残存するが、対向する位置に2単位あったものと考えられる。地文は胴上半部はRL、下半部はLRを横回転したものらしい。RL側には縄端処理による綾絡文が一部観察される。胎土には黒雲母を多く含み、内面は小さな凹凸があり指で押さえて調整したものであろう。1100の花弁状口縁は、全体に外側にまくれるような印象がある。1104は波状口縁頂部を指頭状の押圧により2山としている。1108は緩い波状口縁で、断面が角張っている。

〈石器〉1113は加工痕の上に微小打減痕が観察される。1114は床面のダメ押し時に出土したもので、重複するⅡD 4 g-3 住居跡に所属するものかも知れない。粗雑な加工である。1115は側面観が鋸歯状となる。1辺は粗く大きい剝離が3単位施されている。1116はよく研磨され滑





- | 番号  | 土質     | 特徴                    |
|-----|--------|-----------------------|
| 1.  | 7.5YR% | 明褐色土 しまりあり。           |
| 2.  | 7.5YR% | 褐色土 固くしまっている。小角礫を含む。  |
| 3.  | 10YR%  | 褐色土 固くしまっている。小角礫を含む。  |
| 4.  | 7.5YR% | 暗褐色土 ややしまりあり。小角礫を含む。  |
| 5.  | 7.5YR% | 暗褐色土 固くしまっている。小角礫を含む。 |
| 6.  | 10YR%  | 褐色土 しまりなし。小角礫を含む。     |
| 7.  | 7.5YR% | 暗褐色土 しまりなし。小角礫を含む。    |
| 8.  | 10YR%  | 褐色土 しまりあり。小角礫を含む。     |
| 9.  | 7.5YR% | 暗褐色土 しまりあり。小角礫を含む。    |
| 10. | 10YR%  | にじみ質褐色土 しまりあり。小角礫を含む。 |



- |    |        |       |                |
|----|--------|-------|----------------|
| 1. | 7.5YR% | 暗褐色土  | しまりあり。炭化物少量含む。 |
| 2. | 5YR%   | 明赤褐色土 | しまりあり。         |
| 3. | 10YR%  | 褐色土   | しまりなし。         |



- |    |      |       |             |
|----|------|-------|-------------|
| 1. | 5YR% | 明赤褐色土 | 焼土。しまりあり。   |
| 2. | 5YR% | 明赤褐色土 | 焼土。暗褐色土を含む。 |



- |      |       |           |
|------|-------|-----------|
| 5YR% | 明赤褐色土 | 固くしまっている。 |
|------|-------|-----------|



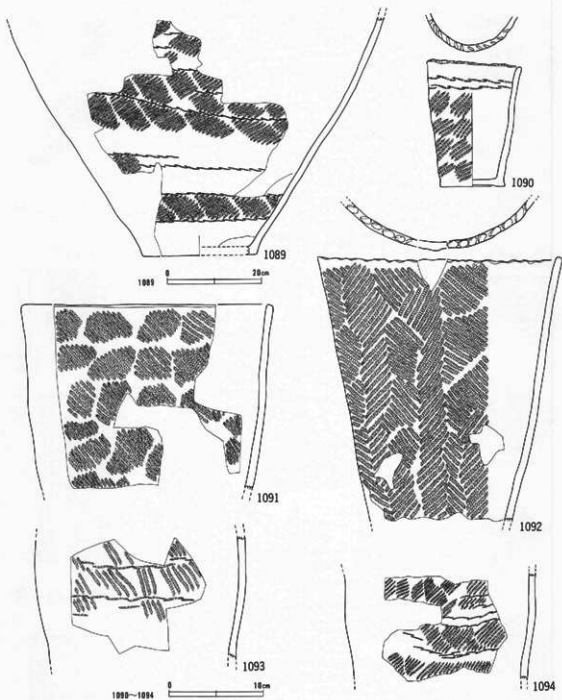
- |      |     |        |
|------|-----|--------|
| 5YR% | 褐色土 | しまりなし。 |
|------|-----|--------|



- |    |      |      |        |
|----|------|------|--------|
| 1. | 5YR% | 赤褐色土 | しまりあり。 |
| 2. | 5YR% | 赤褐色土 | しまりなし。 |

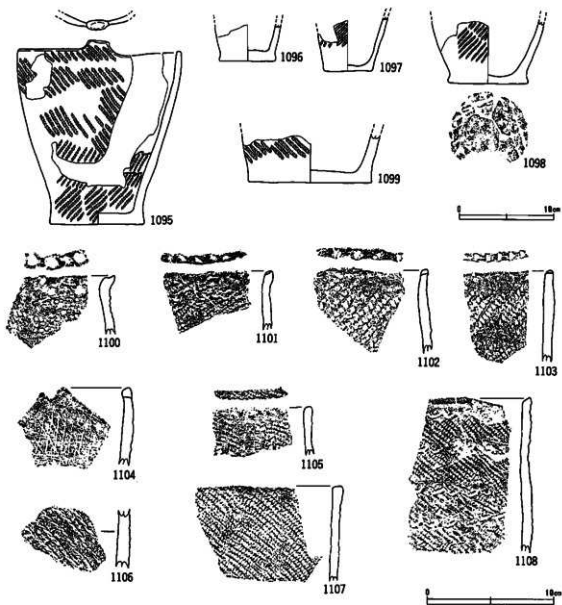


第227図 IXD4g-2住居跡



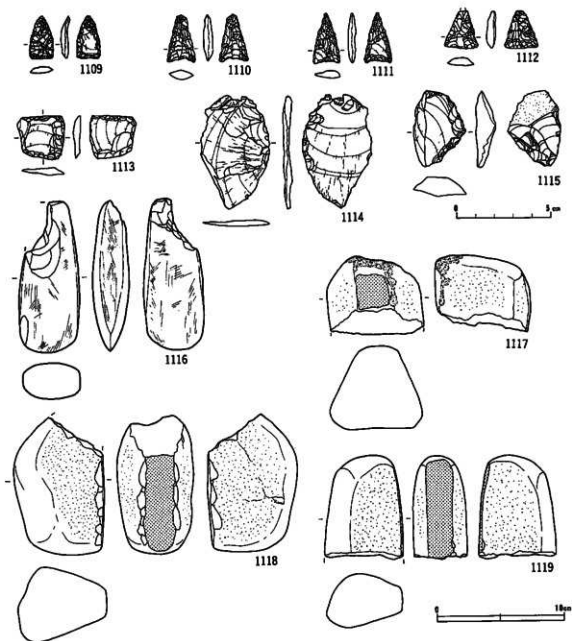
番号	出土地点	層位	文様	地文	口徑	底径	器高	備考	分類	写真
1089	Ⅸ D 4 g-2 住	床面		L 斜織、横位綾給文。	—	(18.0)	(27.3)		Ⅱ 6	206
1090	Ⅸ D 4 g-2 住		口縁部裨状工品による残片。口縁部綾位綾給文。	L 斜織	(10.2)	7.0	13.6		Ⅱ 6 b 7	207
1091	Ⅸ D 4 g-2 住			R L 織	(26.4)	—	(19.7)		Ⅱ 6 b 8	207
1092	Ⅸ D 4 g-2 住	床直上	口縁部右方向からの増織状残片。	R L の回転方向を変えた羽状。	(25.4)	—	(26.3)		Ⅱ 6 b 9	207
1093	Ⅸ D 4 g-2 住			R L 織、横位綾給文。	—	—	(12.0)		Ⅱ 6	207
1094	Ⅸ D 4 g-2 住			L 斜織、横位綾給文。	—	—	(11.0)		Ⅱ 6	207

第228図 Ⅸ D 4 g-2住居跡出土遺物(1)



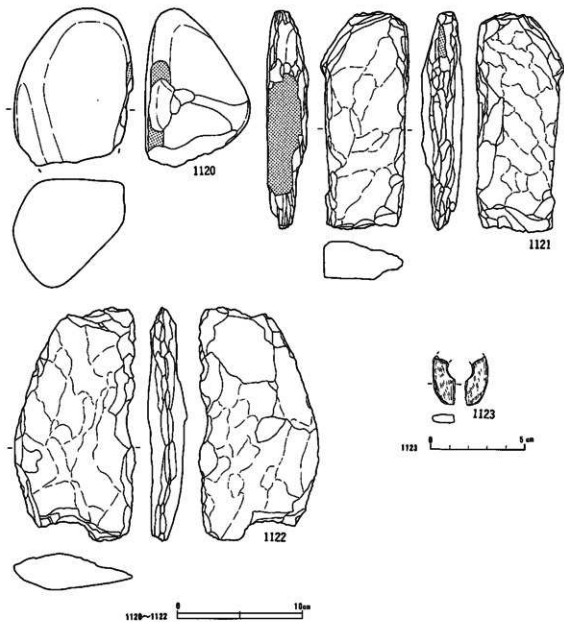
番号	出土地点	層位	文様	地文	口径	底径	器高	備考	分類	写真
1095	IX D 4 g - 2住	埴土	舟状突起、頂部削文。	L R横	17.5	10.0	19.4		II 4 a 2	207
1096	IX D 4 g - 2住		無文		-	6.0	3.0			207
1097	IX D 4 g - 2住	漆器		L R横						207
1098	IX D 4 g - 2住			L R横		8.4	6.5	網代文。		207
1099	IX D 4 g - 2住	埴土		R L横		13.0	5.0	網代文。		207
1100	IX D 4 g - 2住	漆器	花卉状口縁。	L L ?				口縁による花卉状口縁明瞭。	II 4 b 2	207
1101	IX D 4 g - 2住	埴土	口縁部削文(船底又は舟状工具)。	R L横。片結び横紋地文。					II 4 b 2	207
1102	IX D 4 g - 2住		口縁部左方向からの削文(耳部明瞭)。	L R横。					II 4 b 2	207
1103	IX D 4 g - 2住	埴土	口縁部削文(舟状工具)による右方向からの削文。	L R横。片結び。					II 4 b 2	207
1104	IX D 4 g - 2住	漆器	波状口縁。頂部2山。	R 網目状網糸文。					II 4 a 7	207
1105	IX D 4 g - 2住	漆器	口縁部削文(L L 区画 ?)。	L R × L L 網目状網糸文。						207
1106	IX D 4 g - 2住	漆器		R 網糸文。						207
1107	IX D 4 g - 2住	漆器		R L 横。						208
1108	IX D 4 g - 2住	埴土		R L 横。片結び波状地文。						208

第228図 IX D 4 g - 2住層跡出土遺物(2)



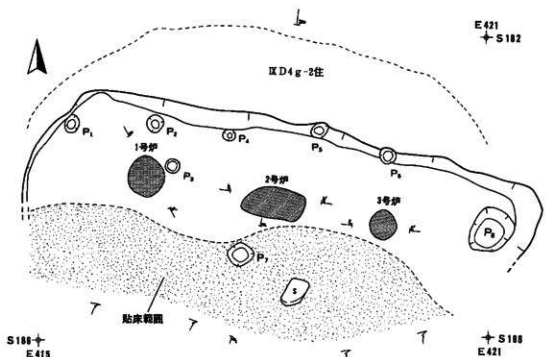
番号	出土地点	層位	品種	石質	産地	長さ	幅	厚さ	備考	分限	写真	
1109	IXD4g-2住	埴土	石鏃	粘板岩	北上山地	2.2	1.2	0.3	1.05		1 2	208
1110	IXD4g-2住	埴土	石鏃	粘板岩	北上山地	2.5	1.5	0.5	1.40		目b 1	208
1111	IXD4g-2住	埴土	石鏃	流紋岩	宇石西部	2.7	1.4	0.25	1.00		目b 2	208
1112	IXD4g-2住	埴土	石鏃	粘板岩	北上山地	(2.0)	1.8	0.4	(1.8)		目1	208
1113	IXD4g-2住	埴土	ピエス・エス・ユ	硬質凝灰質泥岩	宇石西部	2.3	2.5	0.4	3.67	打痕あり。		208
1114	IXD4g-2住	床/ノ屑上	不定形石鏃	粘板岩	北上山地	6.0	3.7	0.4	8.78	薄く。	1 a 2	208
1115	IXD4g-2住	埴土	不定形石鏃	粘板岩	北上山地	4.1	2.8	1.1	9.64	断面が傾斜状。1面は縁(大きい)半部の剥離。	目	208
1116	IXD4g-2住	床面	磨製斧	流紋岩	北上山地	12.0	4.8	2.8	(130)	基部一部欠損。刃があり、磨かである。	7	208
1117	IXD4g-2住	床面	磨製器類人形	両輝石安山岩	鳥取山地	(4.2)	7.5	7.3	(40)	磨面2面。平滑面3面。+鋭石?	1 a	208
1118	IXD4g-2住	埴土	磨製器類人形	両輝石安山岩	鳥取山地	(8.8)	7.1	5.9	(80)	平滑面2面。	1 a	208
1119	IXD4g-2住	埴土	磨製器類人形	硬砂岩	北上山地	(4.0)	6.2	6.1	(30)	平滑面2面。	1 a	208

第230図 IXD4g-2住層跡出土遺物(3)

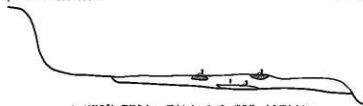


番号	出土地点	層位	器種	材質	産地	長さ	幅	厚さ	重さ	備考	分類	写真
1120	ⅨD4g-2 住	床面	胎層母體A群	礫砂岩	北上山地	12.25	8.8	0.5	100g		1 a	208
1121	ⅨD4g-2 住	床面	胎層母體A群	胎層岩質千枚岩	北上山地	17.3	7.0	3.2	510		1 b 3	208
1122	ⅨD4g-2 住	床面	胎層母體A群	胎層岩質千枚岩	北上山地	18.6	9.5	3.0	560	換り有り。	照 c 3	209
1123	ⅨD4g-2 住	床面上	河物	チャート質凝灰岩	北上山地	( 2.0)	(1.1)	0.4	(2.25)			209

第231図 ⅨD4g-2住層跡出土遺物(4)



L=209.600m



1. 10YR% 黄褐色土 固くしまっている。炭化物、小角礫を含む。
2. 5YR% 明赤褐色土 焼土。(IXD4g-2住のもの)
3. 10YR% 暗褐色土 固くしまっている。炭化物を含む。

L=209.600m

5YR% 赤褐色土 焼土。しまりあり。

L=209.600m

5YR% 明赤褐色土 焼土。しまりあり。

L=209.600m

5YR% 赤褐色土 焼土。しまりあり。

L=209.500m



1. 10YR% 明黄褐色土 固くしまっている。
2. 10YR% 褐色土 固くしまっている。暗褐色土を含む。

P 番号	P <sub>1</sub>	P <sub>2</sub>	P <sub>3</sub>	P <sub>4</sub>
開口直径	20×24	24×24	18×20	16×18
深さ	14	34	24	33

P 番号	P <sub>5</sub>	P <sub>6</sub>	P <sub>7</sub>	P <sub>8</sub>
開口直径	18×25	21×21	34×35	50×65
深さ	41	41	20	6

炉 番号	1号炉	2号炉	3号炉
縦 横	50×35	40×75	37×40
厚さ	3	3	2



第232図 IXD4g-3住居跡

らから光沢がある。1119は擦面以外も磨きにより調整している。他にも特殊磨石1点が出土しているが大幅な欠損品であり図化は省略した。またUフレが3点、フレークが27点、半月状花崗岩質岩が1点出土している。

時期 出土遺物・重複関係から縄文時代前期後葉に属すると推定される。

#### ⅨD4g-3住居跡（遺構番号121）

遺構（第232図、写真図版77）

〈検出状況〉ⅨD4g-2住居跡の床面下、約20cmのところで検出された。南側は斜面のため流失している。

〈形状・規模〉南側は不明であるが、長軸が等高線にほぼ平行する長円形と推定される。規模は、東西6.7m、南北は残存値で2.2mである。

〈壁・壁高〉基盤層を外傾する。壁高は東壁19cm、西壁20cm、北壁12cmである。

〈埋土〉ⅨD4g-2住居跡の床を構成する、固く締まった黄褐色土である。

〈床・柱穴・施設〉凹凸は殆どないが、やや西側に傾斜する。北側は基盤層で固く締まっている。南側は基盤層の傾斜に沿って最大18cmの厚さで貼り床されている。柱穴が7個検出された。うち5個は北壁際に位置し、規模はP1の深さがやや不足する他はほぼ等しく、またおよそ1m間隔に並ぶ。東壁際に土坑が1基検出された。径50×65cm、深さ6cmと小規模のものである。

〈炉〉住居の中軸線上に3基の焼土が検出された。いずれも層厚は薄いものの床面が焼土化したもので地床炉と考えられる。1号炉の上には粉炭の層が約2～3cmの厚さで乗る。

遺物（第233図、写真図版209）

〈土器〉床面から1170g出土している。1124はrの熱糸文であるが、施文は不明瞭であり網目状である可能性もある。口唇部は平坦で断面が角ばる。器体表面は小さな凹凸がある。

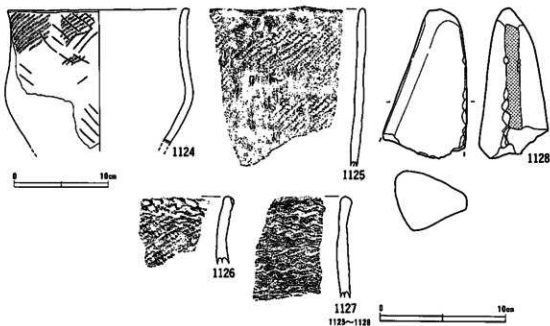
時期 出土土器・重複関係から、縄文時代前期後葉に属すると推定される。

#### ⅨD4h住居跡（遺構番号122）

遺構（第234図、写真図版78）

〈検出状況〉褐色土層上面で黒色土の落ち込みとして検出した。南側は斜面のため流失している。

当初は単独遺構と想定して精査に入ったが、ⅨD4h-2住居跡・ⅨD5h住居跡・ⅨD5i住居跡の計4棟の重複であることが分かった。本住居は重複するいずれの住居の埋土も切っていることから、本住居が最も新しい。また、ⅨD5h住居跡の埋土をⅨD5i住居跡が切ることからⅨD5i住居跡の方が新しい。新旧関係を図式化すると次のようになる。



番号	出土地点	層位	文様	地文	口縁	底縁	器高	器径	分類	写真
1124	ⅩD4g-3住	床直上		RにR巻き付け?	39.2	-	94.9			209
1125	ⅩD4g-3住	床直上		L.R線。片結び。				縦位にケズリ。	目6	209
1126	ⅩD4g-3住	床直上	口縁部片状工具による方向からの削み。横位線付文。	L.RにR線加え?						209
1127	ⅩD4g-3住	床直上		直磨する横位線付文。					目3	209

番号	出土地点	層位	器種	石質	産地	長さ	幅	厚さ	重さ	備考	分類	写真
1128	ⅩD4g-3住	風土	船形砂瓶A群	河原石安山岩	奥羽山地	01.8	6.7	4.6	(400)		1a1	209

第233図 ⅩD4g-3住居跡出土遺物

(新) ⅩD4h住居跡←ⅩD4h-2住居跡 (旧)

←ⅩD5i住居跡←ⅩD5h住居跡

<形状・規模>南側は不明であるが、長軸が等高線にほぼ平行する楕円形と推定される。規模は、東西7.9m、南北は残存値で4.5mである。

<壁・壁高>上位は褐色土層、下位は基盤層で、やや外傾する。壁高は東壁9cm、西壁16cm、北壁36cmである。

<埋土>下位は褐色土主体で、上位に濃黒の腐植土が乗る。床面直上には粉炭混じりの暗褐色土が分布する。

<床・柱穴・施設>北壁側は基盤層を床とし、南側は貼り床されている。北壁から約70cmの距離に低い段差があり、ほぼその段差のラインに柱穴が位置する。この段差の存在と柱穴の位置から建替えの可能性も考えられるが、埋土の第8層の存在から、1棟と把握した。柱穴より南



側は比較的軟質で、10～15cmの厚さに貼り床される。柱穴が15個検出された。主柱穴は、規模と配置から、P2・P3・P5・P7・P13・P14の6個と考えられる。周溝が、北壁際を巡る。北東壁際で一部断続的となる。幅は15cm前後であるが、深さは10～20cmと一定しない。ただし、底面に大きな凹凸は観察されない。

〈炉〉地床炉が8基検出された。いずれも貼り床された軟質の暗褐色土が焼土化したものである。住居の中軸線上に一列に並ぶように位置する。このうち2号炉の焼土が特に発達している。

遺物（第235・236図、写真図版209・210）

〈土器〉埋土から5910g出土した。1129は胴部の四半分弱が残存しているが表面の剥落が著しく文様等は明瞭でない。口縁部に鋸歯状の装飾体を有する。その頂部（口唇部）には棒状または篋状の工具を用いて沈線が施される。それは連続的に一気に施されたものではなく、一面一面施したものである。幅・深さは一律ではなく、やや粗雑な印象がある。実測図右側は正面の装飾体より高い位置にまで口縁部が波状を描く。1133・1134は胎土・焼成・器厚などが1129に酷似し、同一個体と考えられる。2種の装飾体を、対向する位置に各1対配するものであろう。

〈石器〉1109は断面形が直角三角形で、二次加工は素材の角度を大きく変更するものではない。1141は尖頭部が横おれにより折損している。他に岩手火山起源の溶岩、つまみ部のみ残存した石匙、Uフレ1点、フレーク27点（うち床面4点）が出土したが図化は省略した。フレークはその一部について石質鑑定した結果、北上山地産・粘板岩、雫石産・硬質泥岩であることが分かった。

時期 特定する資料を欠くが、出土遺物から縄文時代前期後葉に属すると推定される。

#### ⅡD4h-2住居跡（遺構番号123）

遺構（第234図、写真図版78）

〈検出状況〉ⅡD4h住居跡の精査で検出した。南側は同居居によって切られており、北壁のみ残存する。

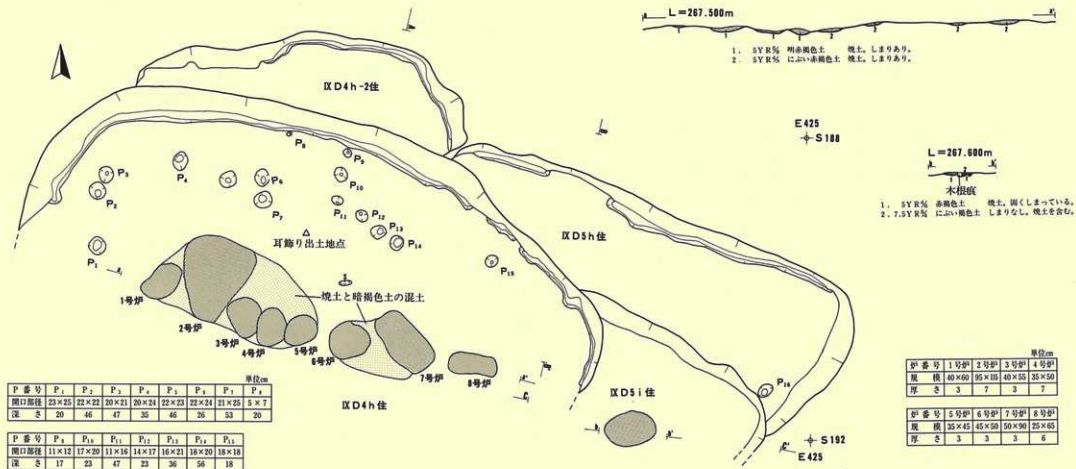
〈形状・規模〉残存状況が悪く、不明である。規模は、残存値で東西4.3m、南北1.1mである。

〈壁・壁高〉標準土層第Ⅳ層で構成されほぼ直立する。壁高は東壁28cm、北壁33cmである。

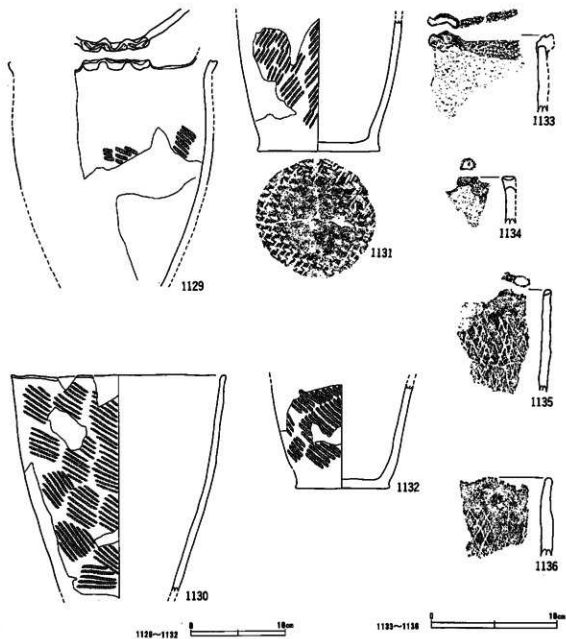
〈埋土〉やや締まる暗褐色土を主体とする。西側の一部で壁と区別が不明瞭だった。

〈床・柱穴・施設〉斜面に沿ってやや傾斜するが、ほぼ平坦である。柱穴は検出されなかった。周溝が北壁際の一部を巡る。幅10cm前後で深さ4～10cmで、底面に大きな凹凸は見られない。

〈炉〉検出されなかった。

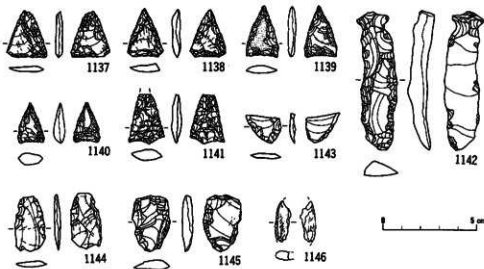


第234図 IXD4h・IXD4h-2・IXD5h・IXD5i住居跡



番号	出土地点	層位	文様	地文	口徑	底脚径	高さ	備考	分類	写真
1129	ⅨD 4h 住	埋土上位	口縁部に波状突起物、腹部に口唇部状線(約線)	R L 模。	20.0	-	24.0	1133、1134と同一個体。	Ⅱ6a7	209
1130	ⅨD 4h 住	埋土		L R 模。	20.8	-	22.8		Ⅱ6b8	209
1131	ⅨD 4h 住	埋土上位		L R 模。	-	13.0	14.0	網代文。		209
1132	ⅨD 4h 住	埋土		R L 模。	-	9.9	11.5			209
1133	ⅨD 4h 住	埋土上位	口縁部に波状突起物、腹部に口唇部状線(約線)	R L。				1129、1134と同一個体、刺青なし。	Ⅱ6a7	210
1134	ⅨD 4h 住	埋土上位	口縁部に突起物、頸部凹み。					1129、1133と同一個体。	Ⅱ6a7	210
1135	ⅨD 4h 住	埋土下位	口唇部に波状突起物。	L 網目状地文。					Ⅱ6a9	210
1136	ⅨD 4h 住	埋土	波状口縁。	R 網目状地文。					Ⅱ6	210

第235図 ⅨD4h住居跡出土遺物(1)



番号	発土地点	層位	図柄	石質	産地	長さ	幅	厚さ	重さ	備考	分類	写真
1137	IX D 4h 住	埋土上段	石鏃	硬質礫状質泥岩	宇石西部	2.4	2.1	0.3	1.24		11	210
1138	IX D 4h 住	埋土	石鏃	粘板岩	北上山地	2.5	1.9	0.4	1.60		11a 1	210
1139	IX D 4h 住	埋土上段	石鏃	硬質礫状質泥岩	宇石西部	2.7	1.7	0.4	1.57		11a 2	210
1140	IX D 4h 住	埋土	石鏃	粘板岩	北上山地	2.1	1.3	0.4	1.43		11a 2	210
1141	IX D 4h 住	埋土上段	石鏃	硬質礫状質泥岩	宇石西部	0.79	1.9	0.5	0.70	裏のつくりが不明である。表面が粗い(図柄参照)。	11	210
1142	IX D 4h 住	埋土	石鏃	埴質泥岩	宇石西部	7.3	2.1	1.4	12.46	断面が三角形。	11a 2	210
1143	IX D 4h 住	床面	不定形石器	粘板岩	北上山地	1.5	1.9	0.3	0.72	折損または、折断。薄く小さい。	11b 2	210
1144	IX D 4h 住	埋土上段	不定形石器	埴質泥岩	宇石西部	2.9	1.6	0.3	1.30	厚く扁平。不整形。	11c 2	210
1145	IX D 4h 住	埋土上段	不定形石器	埴質泥岩	宇石西部	3.0	2.0	0.6	3.47	扁平の不整形。後面が粗い。	11	210
1146	IX D 4h 住	床面	河砂	チャート	北上山地	(0.1)	(0.9)	0.5	(1.33)			210

第236図 IX D 4h 住居跡出土遺物(2)

**遺物** 出土していない。検出作業時に比較的多くの遺物が出土したが、遺構外遺物として取り上げており、本住居の埋土の遺物も含まれているかもしれない。

**時期** 特定する資料を欠くが、重複関係から縄文時代前期後葉に属すると推定される。

#### IX D 5 c 住居跡 (遺構番号124)

**遺構** (第237図、写真図版79)

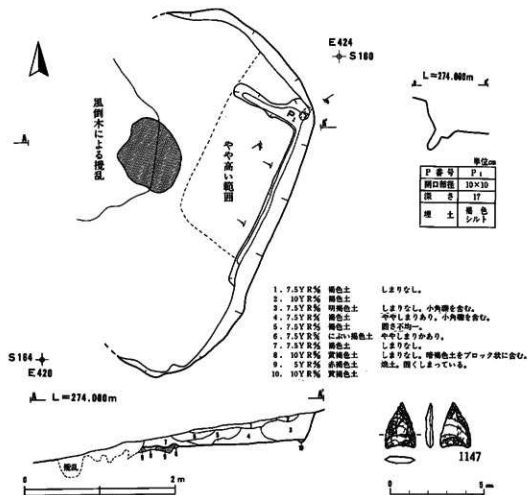
〈検出状況〉東尾根西斜面に位置する。平面的な検出はできず、褐色土層上面で焼土を検出し、その斜面上方で基盤層を掘り込む壁を確認し、住居跡として認定した。西側は斜面により、流失している。また一部倒木痕により壊されている。

〈形状・規模〉西側は不明であるが、長軸が等高線にほぼ平行する長円形基調と推定される。規模は、南北4.6m、東西は残存値で2.7mである。

〈壁・壁高〉上位は褐色土層、下位は基盤層を壁とし、やや外傾する。壁高は、東壁38cm、南壁20cm、北壁38cmである。

〈埋土〉斜面上方にあたる東壁側はしまりを欠く褐色土、崩落土を含む明褐色土で自然堆積の様相を示す。斜面下方では、倒木痕により層序が乱れる。

〈床・柱穴・施設〉東壁寄りには基盤層を、炉の付近は褐色土層を床とする。北東四半部は一段高く、西側に向かって緩やかに傾斜する。柱穴が北東隅に1個検出された。径10cm、深さ17cm、



番号	出土地点	層位	器種	材質	産地	長さ	径	厚さ	重さ	備考	分類	専長
1147	ⅨD5c住	埋土	石皿	硬質焼成灰質泥岩	宇石西部	2.4	1.6	0.3	1.05		Ⅸa2	210

第237図 ⅨD5c住居跡・出土遺物

締まりを欠く褐色土を埋土とする。住居内側に向かって斜位につくられる。周溝は、幅12cm前後、深さ7～8cm、締まりを欠く黄褐色土を埋土とする。床面の一段たかまった部分を囲むように巡る。北側では壁からはなれ、南側では検出されない。

〈炉〉焼土が1基検出された。西側の一部が攪乱を受けているが焼土が残存し、その範囲を推定できる。焼土は83×100cmの範囲に分布し、厚さは最大7cmである。攪乱を受けない部分では床を構成する層が焼土化したもので地床炉と考えられる。

遺物（第237図、写真図版210）

〈土器〉床面から網目状燃糸文、横位の綾絡文をそれぞれ有する小破片が各1点出土している。図示は割愛した。

〈石器〉石鏃1点のみの出土である。

時期 特定する資料を欠くが、床面出土土器片から、縄文時代前期後葉から末葉に属すると考えられる。

ⅨD5g住居跡（遺構番号125）

遺構（第238図、写真図版80）

〈検出状況〉東尾根南斜面中腹に位置する。褐色土層上面で検出した。南側でⅨD5g-2住居跡と重複する。埋土断面の観察から本住居の方が新しい。斜面のため南側は流失している。

〈形状・規模〉南側は不明であるが、長軸が等高線にほぼ平行する楕円形と推定される。規模は、東西3.4m、南北は残存値で1.8mである。

〈壁・壁高〉上位は褐色土層、下位は基盤層を壁とし、内湾気味に外傾する。壁高は東壁12cm、西壁27cm、北壁35cmである。

〈埋土〉褐色土のほぼ単層で、壁際に崩落土の層が混入する。

〈床・柱穴・施設〉東側は褐色土層、西側は基盤層を床とし、やや凹凸がある。斜面に沿って緩やかに傾斜する。柱穴は検出されなかった。

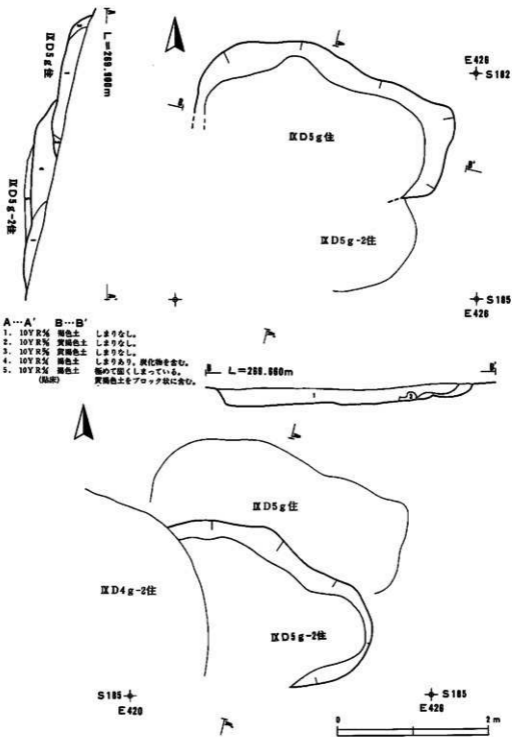
〈炉〉検出されなかった。

遺物（第239図、写真図版210）

〈土器〉床面からは1148、埋土からは1149の他は単節斜縄文の小片が出土した。

〈石器〉1150は尖頭部側が肉厚なのに対し基部側は扁平である。1151は鋭い尖頭部を作り出している。表面中央部には素材の一部が瘤状に残る。他にUフレ1点、Rフレ1点、フレーク7点が出土している。

時期 特定する資料を欠くが、検出状況・出土遺物から縄文時代前期後葉と推定される。



第238図 IXD5g・IXD5g-2住居跡

IX D 5 g-2住居跡 (遺構番号126)

遺構 (第238図、写真図版80)

<検出状況> IX D 5 g住居跡と同時に検出した。当初同一の住居と考えられ、同時に精査に入ったが、床面レベルが異なり、2棟の重複と分かった。埋土の断面観察から本住居の方が先行する。IX D 4 g-2住居跡と西側で重複する。本住居の貼り床がIX D 4 g-2住居跡にまで及んでいないことから、本住居の方が古いと考えられる。

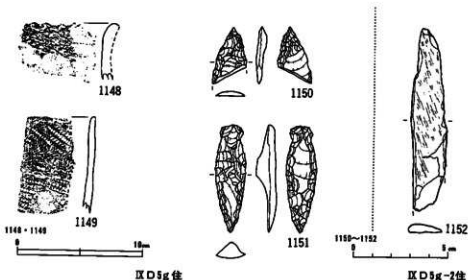
南側は斜面のため流失している。

<形状・規模> 南側は不明であるが、長軸が等高線にほぼ平行する楕円形と推定される。規模は、東西3m、南北は残存値で2.5mである。

<壁・壁高> 基盤層で、外傾する。壁高は東壁22cm、北壁22cmである。

<埋土> 褐色土であるが、縮まりと炭化物の混入の有無により2層に分けられる。

<床・柱穴・施設> 東側がやや高いが、中央部分はほぼ水平で平坦である。南側は約9cmの厚



番号	出土地点	層位	文様	地文	口徑	壁高	備考	分類	写真
1148	IX D 5 g 住	表面	波状口縁、口縁部(隅地)による7字形、直線する縦筋文。					II 6	210
1149	IX D 5 g 住	埋土		R L 線、片結び横位縦筋文。				II 6	210

番号	出土地点	層位	器種	石質	産地	長さ	部	厚さ	重さ	備考	分類	写真
1150	IX D 5 g 住		石皿	硬質泥岩	甲石西部	(1.1)	(1.4)	(0.4)	(1.50)	左側面が内傾。基部は扁平で管唇又は折損している。		210
1151	IX D 5 g 住		石匙	泥質凝灰岩	甲石西部	5.7	1.6	1.1	6.67	鋭い尖頭部を併り出す。素材のこぶを一部に残す。	I a 1	210
1152	IX D 5 g-2 住	埋土	石刀	粘板岩	北上山地	(14.0)	2.9	0.7	(30)			210

第238図 IX D 5 g・IX D 5 g-2住居跡出土遺物



さで貼り床される。柱穴は検出されなかった。

〈炉〉検出されなかった。

遺物（第239図、写真図版210）

〈土器〉埋土から単節縄文の小破片1点出土したのみであり、図化は省略した。

〈石製品〉石刀1点、フレーク3点のみの出土である。

時期 特定する資料を欠くが、重複関係から縄文時代前期後葉と推定される。

#### ⅨD 5 h 住居跡（遺構番号127）

遺構（第234図、写真図版78）

〈検出状況〉ⅨD 4 h 住居跡の精査中に、その東側において同住居と異なる壁を検出した。南側は同住居およびⅨD 5 i 住居跡によって切られており、北壁と東壁のみ残存する。

〈形状・規模〉詳細は不明であるが、長軸が等高線にほぼ平行する長方形を基調とするものと推定される。規模は、残存値で東西7.7m、南北2mである。

〈壁・壁高〉暗褐色土層でほぼ直立する。壁高は東壁16cm、北壁36cmである。

〈埋土〉締まりの程度で4層に細分したが、大局的には褐色土の単層で把握できる。

〈床・柱穴・施設〉北西部は基盤層を、東側は基盤層への漸移層である褐色土層を床とする。ほぼ水平で平坦である。柱穴が東壁際に1個検出された。周溝が北壁際に断続的に巡る。幅17～26cm、深さ4～7cmである。

遺物 〈土器〉埋土から、縄文時代前期に属するR L縦回転に横位の綾絡文を有する小破片が少量出土しているが図化は省略した。

時期 特定する資料を欠くが、出土遺物・重複関係から縄文時代前期後葉に属すると推定される。

#### ⅨD 5 i 住居跡（遺構番号128）

遺構（第234図、写真図版78）

〈検出状況〉ⅨD 4 h 住居跡の精査で、同住居の周溝の外側に焼土と壁を検出し、住居跡として認定した。埋土断面の観察では、切り合い関係は不明であり、同住居の付風施設の可能性があるが、床面レベルが同住居より10～15cm高く、焼土を伴うことから重複として把握した。埋土全体は、ⅨD 4 h 住居跡に傾斜することから、本住居の方が先行すると考えられる。

〈炉〉検出されなかった。

（新）ⅨD 4 h 住居跡←ⅨD 5 i 住居跡←ⅨD 5 h 住居跡 （旧）

〈形状・規模〉詳細は不明であるが、長軸が等高線にほぼ平行する長円形と推定される。規模

は、残存値で東西2.6m、南北2mである。

<壁・壁高>基盤層を壁とし、外傾する。壁高は、北壁15cmである。

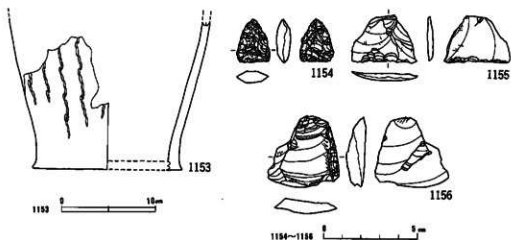
<埋土>斜面上方にあたる東壁側はしまりを欠く褐色土、崩落土を含む明褐色土を主体とし、自然堆積の様相を示す。斜面下方では、倒木痕により層序が乱れる。

<床・柱穴・施設>東壁寄り基盤層を、炉の付近は褐色土層を床とする。北東四半部は一段高く、西側に向かって緩やかに傾斜する。柱穴が北東隅に1個検出された。径10cm、深さ17cm、締めりを欠く褐色土を埋土とする。住居内側に向かって斜位につくられる。周溝は、幅12cm前後、深さ7~8cm、締めりを欠く黄褐色土を埋土とする。床面の一段たかまった部分を囲むように巡る。北側では壁からはなれ、南側では検出されない。

<炉>焼土が1基検出された。西側の一部が攪乱を受けているが焼土が残存し、その範囲を推定できる。焼土は83×100cmの範囲に分布し、厚さは最大7cmである。攪乱を受けない部分では床を構成する層が焼土化したもので地床炉と考えられる。

遺物 (第240図、写真図版210)

<土器>1153はやや太めの原体を結節回転させているが、その押圧は一様でなく粗雑な印象が



番号	地点	層位	文様	出土地点	地文	口徑	底形	器高	備考	分類	写真
1153	ⅩD5i住				縦位破断文。	—	(14.4)	(16.4)			210
番号	出土地点	層位	器種	石質	産地	長さ	幅	厚さ	備考	分類	写真
1154	ⅩD5i住	埋土	石鏃	燧石	宇石西部	2.2	1.8	0.6	2.54 全体に肉厚。尖端部はやや鈍い。	12	210
1155	ⅩD5i住	埋土	不定形石器	燧石	宇石西部	2.5	3.5	0.5	2.73 扁平な板状。	123	210
1156	ⅩD5i住	埋土	不定形石器	燧石	宇石西部	3.6	3.8	1.1	2.75 素材の傾斜面を利用しての刃部形成。	121	210

第240図 ⅩD5i住居跡出土遺物

あり装飾性を欠く。

〈石器〉1154は全体に肉厚で、尖頭部はやや鈍い。1155は扁平な台形状の形状で、側面視は鋸歯状となる。1156は素材の縁辺の傾斜を利用して刃部形成をしている。他に、石鎌の欠損品、Uフレ2点、フレーク14点が出土している。

時期 特定する資料を欠くが、重複関係・出土遺物から縄文時代前期後葉に属すると考えられる。

#### ⅡD 5 j 住居跡 (遺構番号129)

遺構 (第241図、写真図版81)

〈検出状況〉東尾根南麓に位置する。褐色土層上面で黒色土の落ち込みとして検出した。

〈形状・規模〉長軸が等高線にほぼ平行する長円形で、長軸5.3m、短軸3.5mである。

〈壁・壁高〉褐色土層および基盤層で、ほぼ直立する。壁高は東壁65cm、西壁68cm、南壁41cm、北壁82cmである。

〈埋土〉9層に分けられる。黒色土ないし黒褐色土と明褐色土ないし黄褐色土とが、レンズ状に互層をなす。全体に粉炭と小角礫を含み、固く締まっている。

〈床・柱穴・施設〉基盤層を床とし、全体に固く締まっている。東側がやや高く、西側・南側に緩く傾斜し、最大比高22cmである。柱穴がP1～P8の8個検出された。規模・埋土はほぼ等しく、位置はおおむね対応関係を有するが、P5に対応する位置には柱穴は検出されなかった。

〈炉〉検出されなかった。

遺物 (第242図、写真図版211)

〈石器〉床面から160g出土したが、いずれも繊維を混入する小破片である。

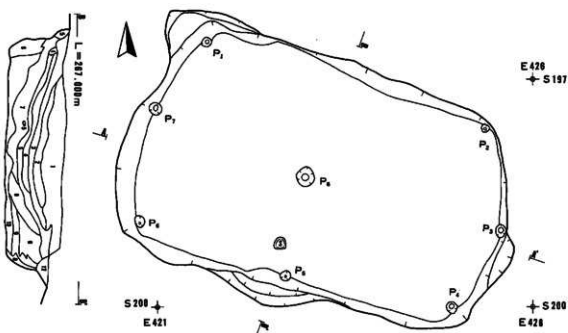
〈石器〉1161・1162の尖頭部は鋭い。1163の剥離は粗いが微少な打減痕が観察され、楔としても用いられた可能性がある。他にフレーク8点が床面から出土している。

時期 床面出土土器片から、縄文時代前期初葉から前葉に属すると考えられる。

#### ⅡD 6 f 住居跡 (遺構番号130)

遺構 (第243図、写真図版81・82)

〈検出状況〉東尾根南斜面中腹に位置する。褐色土層上面で粉炭と焼土を検出し、その斜面上方に基盤層を掘りこむ壁を確認したことから、住居跡として認定した。当初は単独遺構という想定のもとに調査したが、炉の位置・壁の平面形などから西半部と東半部の重複遺構と考えられる。西半部をⅡD 6 f 住居跡、東半部をⅡD 6 f-2 住居跡とする。東端に一段高い部分があり、他の遺構との重複の可能性も考えたが、埋土断面観察からは切り合い関係を確認すること



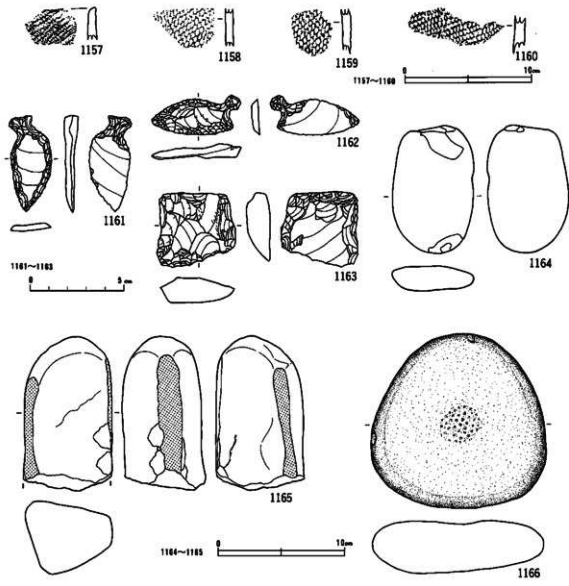
A...A' B...B'

1. 10Y R 5/6 褐色土 しまりなし、小角礫、草木根を含む。
2. 10Y R 5/6 褐色土 ややしまりあり、炭化物、小角礫を少量含む。
3. 10Y R 5/6 褐色土 ややしまりあり、炭化物、小角礫を少量、褐色土をブロック状に含む。
4. 7.5Y R 5/6 褐色土 しまりあり、炭化物、小角礫を少量、褐色土を粒状に含む。
5. 7.5Y R 5/6 褐色土 しまりあり、黄褐色土をブロック状に含む。
6. 10Y R 5/6 褐色土 しまりなし、炭化物、小角礫を少量含む。
7. 7.5Y R 5/6 褐色土 しまりあり、炭化物、小角礫を少量含む、褐色土をブロック状に含む。
8. 10Y R 5/6 褐色土 しまりなし、炭化物、小角礫を少量含む。
9. 10Y R 5/6 褐色土 しまりあり、炭化物、小角礫を少量含む、暗褐色土をブロック状に含む。
10. 10Y R 5/6 褐色土 しまりなし、炭化物、小角礫を少量含む。
11. 10Y R 5/6 褐色土 しまりなし、炭化物、小角礫を少量含む。
12. 7.5Y R 5/6 暗褐色土 しまりなし、炭化物、小角礫を少量含む。

P 番号	単位cm							
	P <sub>1</sub>	P <sub>2</sub>	P <sub>3</sub>	P <sub>4</sub>	P <sub>5</sub>	P <sub>6</sub>	P <sub>7</sub>	P <sub>8</sub>
開口幅径	11×11	11×14	13×15	13×14	13×13	13×13	14×16	20×23
深さ	19	34	23	17	34	34	26	43
埋土	10Y R 5/6 に近い黄褐色	同左	同左	同左	同左	同左	同左	10Y R 5/6 褐色 粒状を少量含む



第241図 IX D 5 j 住居跡



番号	出土地点	層位	文様	地文	口徑	底径	器高	備考	分類	写真
1157	ⅨD5j 住	床面		まじ網				網線混入。	Ⅸ1b	211
1158	ⅨD5j 住	床面		網線混文。				網線混入。	Ⅸ1a	211
1159	ⅨD5j 住	床面		網線混文。				網線混入。	Ⅸ1a	211
1160	ⅨD5j 住	床面		網線混文。				網線混入。	Ⅸ1a	211

番号	出土地点	層位	母地	石質	産地	長さ	幅	厚さ	重さ	備考	分類	写真
1161	ⅨD5j 住	埋土	石灰	燧石	宇石西端	5.1	2.2	0.8	6.00		1a2	211
1162	ⅨD5j 住	埋土	石灰	燧石	宇石西部	1.9	4.7	0.8	4.41	古い穴跡をつくり、つぎの穴からの塊。	Ⅸa1	211
1163	ⅨD5j 住	埋土	不定形石	粘板岩	北上山地	4.0	4.2	1.3	36.05	ビスヌスキースとしても認めらる(宇石西端)。	Ⅸ	211
1164	ⅨD5j 住	埋土	石灰	燧石	北上山地	10.1	6.4	2.0	235		1	211
1165	ⅨD5j 住	埋土	湖塘砂層A群	両碑石安山岩	鼻刺山地	12.1	7.0	5.7	780	磨面3面。欠損品。	1a	211
1166	ⅨD5j 住	床面	石灰・台石層	燧石	北上山地	13.9	13.9	4.2	1290	中央部に打痕が乱中する。磨みは浅い。		211

第242図 ⅨD5j 住層跡出土遺物

はできなかつたことから、テラス状の施設として把握した。

南側は斜面のため流失している。

〈形状・規模〉南側は不明であるが、長軸が等高線にはほぼ平行する楕円形と推定される。規模は、東西は推定値で4.2m、南北は残存値で3.1mである。

〈壁・壁高〉上位は褐色土層、下位は基盤層を壁とし、やや外傾する。壁高は、西壁22cm、北壁83cmである。

〈埋土〉暗褐色～褐色土を主体とする。ⅨD 6 f - 2 住居跡との重複部分では黄褐色土が混入し、層理はかならずしも明瞭ではない。南北方向の土層は自然堆積の様相を示している。

〈床・柱穴・施設〉斜面上方に当たる北壁寄りには基盤層を、南側は褐色土層を床とし、全体に固く締まっている。中央部がやや低く、西壁寄りと中央部の比高20cmである。柱穴は17個検出されたが、本住居の推定範囲内にはP1～P6、P11の7個が入る。対応関係は不明であるが、壁際に位置するP1～P4、P6はほぼ同規模であり、同じ性格を有するものと考えられる。

〈炉〉床面において地床炉が5基検出された。本住居の推定範囲内にあるものは1号炉～3号炉・5号炉であるが、その全てが同時に用いられたか否かは位置関係から若干疑問がある。5号炉の上には粉炭が5cm厚さで堆積している。

#### 遺物 (第244図、写真図版211)

当初は単独遺構と想定したことから、ⅨD 6 f - 2 住居跡の遺物も本住居のものとして取り上げ、処理してしまった。

〈土器〉埋土から1167と1168の2点のみの出土である。

〈石器〉1170は基部縁辺が傾斜し、対称性を欠く。1171は側面観がやや鋸歯状を呈する。他にUフレ2点、フレク17点が埋土から出土している。

時期 特定する資料を欠くが、重複関係・出土遺物から縄文時代前期に属すると考えられる。

#### ⅨD 8 f - 2 住居跡 (遺構番号131)

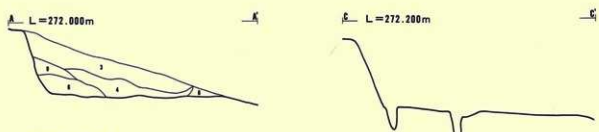
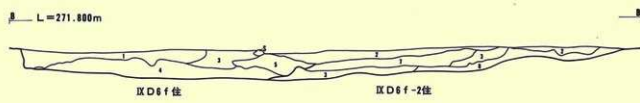
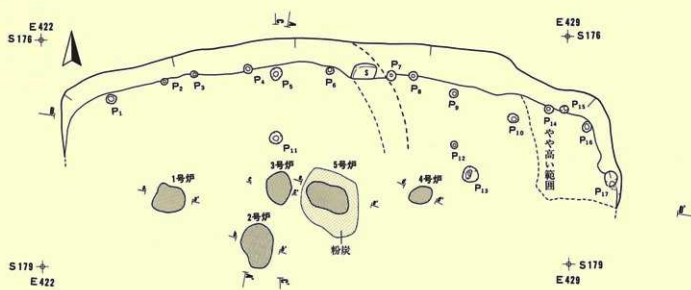
##### 遺構 (第243図、写真図版81・82)

〈検出状況〉ⅨD 6 f 住居跡と重複し、その東側に位置する。東端に一段高い部分があり、他の遺構との重複の可能性も考えたが、埋土断面観察からは切り合い関係を確認することはできなかつたことから、テラス状の施設として把握した。

南側は斜面のため流失している。

〈形状・規模〉南側は不明であるが、長軸が等高線にはほぼ平行する楕円形と推定される。規模は残存値で南北2.5m、東西は不明である。

〈壁・壁高〉上位は褐色土層、下位は基盤層を壁とし、やや外傾する。壁高は、東壁27cm、北



- A...A' B...B'
1. 7.5Y R% 褐色土 しまりなし。小角礫を含む。
  2. 7.5Y R% 黄褐色土 しまりなし。
  3. 10Y R% 黄褐色土 しまりなし。小角礫を含む。
  4. 10Y R% 褐色土 しまりなし。小角礫を含む。
  5. 10Y R% 黄褐色土 しまりなし。
  6. 7.5Y R% 褐色土 しまりなし。
  7. 10Y R% 黄褐色土 しまりなし。
  8. 7.5Y R% 褐色土 しまりあり。
  9. 10Y R% 褐色土 しまりあり。小角礫を含む。

P番号	単位cm									
	P <sub>1</sub>	P <sub>2</sub>	P <sub>3</sub>	P <sub>4</sub>	P <sub>5</sub>	P <sub>6</sub>	P <sub>7</sub>	P <sub>8</sub>	P <sub>9</sub>	P <sub>10</sub>
開口面積	10×13	7×9	9×10	17×20	8×9	12×11	11×11	10×11		
深さ	17	14	16	23	20	11	26	18	18	
埋土	明褐色	10Y R% 明黄褐色	明黄褐色	黄褐色	明黄褐色	黄褐色	黄褐色	黄褐色	黄褐色	10Y R% に近い黄褐色

P番号	単位cm						
	P <sub>11</sub>	P <sub>12</sub>	P <sub>13</sub>	P <sub>14</sub>	P <sub>15</sub>	P <sub>16</sub>	P <sub>17</sub>
開口面積	14×14	16×17	20×20	20×25	10×11	11×12	17×20
深さ	19	45	32	46	12	16	17
埋土	10Y R% 明黄褐色	10Y R% 黄褐色	明黄褐色	褐色	褐色	褐色	褐色
	10Y R% 明黄褐色	10Y R% 明黄褐色	明黄褐色	褐色	褐色	褐色	褐色

P番号	単位cm				
	1号P	2号P	3号P	4号P	5号P
面積	40×47	45×63	23×43	23×35	30×19
深さ	4	5	5	3	2

L=271.300m



1. 5Y R% 赤褐色土 焼土。固くしまっている。
2. 7.5Y R% 褐色土 しまりなし。

L=271.200m



1. 5Y R% 赤褐色土 焼土。固くしまっている。

L=271.100m



1. 5Y R% 赤褐色土 焼土。固くしまっている。

L=271.200m

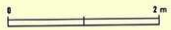


1. 5Y R% 赤褐色土 焼土。固くしまっている。
2. 10Y R% 黄褐色土 しまりあり。粘性なし。

L=271.100m



1. 5Y R% 赤褐色土 焼土。固くしまっている。
2. 10Y R% 褐色土 しまりなし。



第243図 IXD6f・IXD6f-2位層跡

壁83cmである。

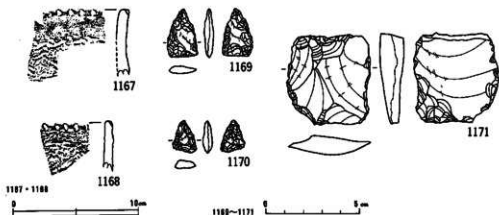
〈埋土〉褐色土～黄褐色土を主体とし、ⅨD6f住居跡との重複部分では層理はかならずしも明瞭ではない。南北方向の土層は自然堆積の様相を示している。

〈床・柱穴・施設〉斜面上方に当たる北壁寄りには基盤層を、南側は褐色土層を床とし、全体に固く締まっている。柱穴は、ⅨD6f住居跡のものを含めて17個検出された。その帰属関係は明白ではないが、本住居の推定範囲内にあるP7～P10はほぼ同規模であり、同じ性格を有するものと考えられる。

〈炉〉重複するⅨD6f住居跡のものも含め地床炉が5基検出された。本住居の推定範囲内にあるものは4号炉であるが、3号炉または5号炉とセットになる可能性も否定できない。

遺物 本住居の遺物も、ⅨD6f住居跡のものとして処理した可能性がある。

時期 特定する資料を欠くが、重複関係・出土遺物から縄文時代前期に属すると考えられる。



番号	出土地点	層位	支線	地文	口径	縁部	高さ	備考	分類	写真
1167	ⅨD6f住	埋土	口縁部棒状工具による右方向からの刻み。重層する横位線跡文。						Ⅱ3a	211
1168	ⅨD6f住	埋土	口縁部棒状工具による刻み。横位線跡文。	I.R様。					Ⅱ3a	211

番号	出土地点	層位	器種	石質	産地	長さ	幅	厚さ	重さ	備考	分類	写真
1169	ⅨD6f住	埋土	石鏃	硬質燧石質凝岩	宇石西郡	2.5	1.6	0.3	1.36		I 2	211
1170	ⅨD6f住	埋土	石鏃	燧石	宇石西郡	1.7	1.3	0.4	0.73	基部線定が横位線。射撃痕に欠ける。小形。		211
1171	ⅨD6f住	埋土	不定形石器	硬質燧石質凝岩	宇石西郡	4.8	4.5	1.3	23.56	側面線が曲線状。	Ⅱ	211

第244図 ⅨD6f・ⅨD6f-2住居跡出土遺物



ⅨD7j住居跡（遺構番号132）

遺構（第245図、写真図版82）

〈検出状況〉東尾根南麓に位置する。基盤層上面で黒色土の落ち込みとして検出した。南側は斜面のため流失している。

〈形状・規模〉南側は不明であるが、長軸が等高線にはば平行する楕円形と推定される。規模は、東西3.6m、南北は残存値で1.8mである。

〈壁・壁高〉基盤層で緩やかに立ち上がる。壁高は東壁12cm、西壁12cm、北壁28cmである。

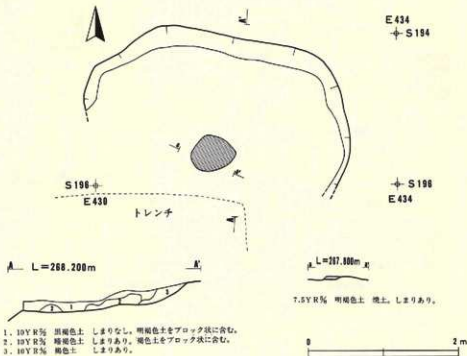
〈埋土〉黒褐色土と崩落土およびその混土で構成される。

〈床・柱穴・施設〉斜面上方に当たる北側は基盤層、南側は褐色土層を床とする。西側はやや凹凸がある。全体としては斜面に沿ってやや傾斜し、最大比高15cmである。柱穴は検出されなかった。

〈炉〉地床が $g_1$ 基検出された。47×60cmの楕円形状に分布し、厚さは最大4cmである。

遺物 フレーク4点が埋土から出土したのみである。

時期 特定する資料を欠くが、検出状況・住居形態から縄文時代前期と考えられる。



第245図 ⅨD7j住居跡

#### ⅨD 8 f 住居跡 (遺構番号133)

遺構 (第246図、写真図版83)

〈検出状況〉褐色土層上面で、暗褐色土の落ち込みとして検出した。南側でⅨD 8 g 住居跡、ⅨD 8 f 土坑と重複する。ⅨD 8 g 住居跡との新旧関係は、精査時点の観察では、本住居の方が古いと考えられた。また、ⅨD 8 f 土坑は本住居の床面で検出されたことから、本住居の方が新しいと考えられる。

〈形状・規模〉南側に不明な部分があるが、長軸が等高線にほぼ平行する長方形である。規模は、東西3.6m、南北2.3mである。

〈壁・壁高〉上位は褐色土層、下位は基盤層を壁とし、やや外傾する。壁高は、東壁28cm、西壁28cm、北壁48cmである。

〈埋土〉暗褐色土を主体とし、自然堆積の様相を示す。全体に固く締まっている。

〈床・柱穴・施設〉概ね基盤層を床とし、全面固く、凹凸なくほぼ平坦である。斜面に沿ってやや傾斜し、最大比高17cmである。柱穴状土坑が2個検出された。このうちP1としたものは断面形が摺鉢状であり、柱穴にならない可能性がある。東壁寄りに土坑が位置する。床面で検出されたことから、本住居の施設として処理してきた。

〈炉〉検出されなかった。

遺物 (第246図、写真図版211)

〈土器〉1172は床面において、土坑上で検出された。4つの頂部を有する小波状口縁である。口唇部には指頭状の圧痕が施される。図示したほかには組縄縄文、横位の綾絡文を有する小土器片が埋土から出土したのみである。

〈石器〉石鏃1点とUフレ1点が出土した。

時期 床面出土遺物から、縄文時代前期に属すると考えられる。1172の土器の時期の位置づけが不明であり、よって遺構の時期も詳細は明らかにできない。

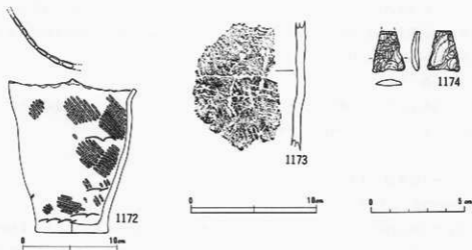
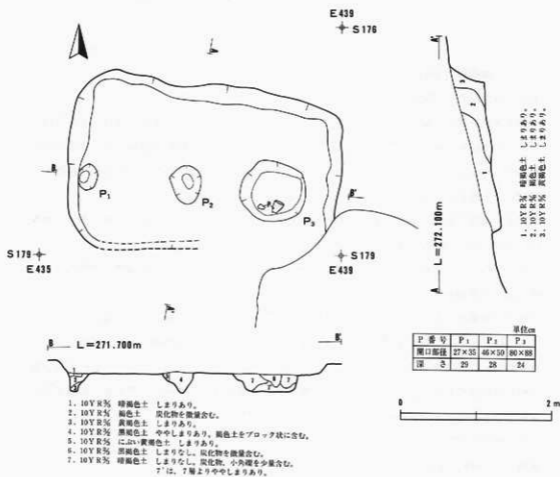
#### ⅨD 8 f-2 住居跡 (遺構番号132)

遺構 (第247図、写真図版84)

〈検出状況〉東尾根南斜面に位置する。褐色土層上面で、ぶい褐色土の落ち込みとして検出した。壁の立上がりか緩やかにはあるが、平坦な部分を床面として把握し、住居跡として認定した。南側は斜面のため流失している。

〈形状・規模〉残存状況が悪く不明である。規模は、東西3.1m、南北は残存値で1.7mである。

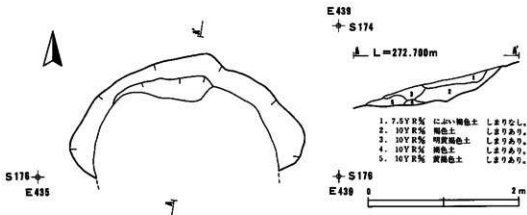
〈壁・壁高〉西側は基盤層を、東側は褐色土層を壁とし、緩やかに立ち上がる。壁高は東壁



番号	出土地点	層位	文様	地文	口径	底部径	高さ	備考	分類	写真
1172	ⅡD8f住	床面	4つの意匠を有する横い波状口縁。口縁部微細縦行筋。	R L 模。	14.3	7.8	15.7		Ⅱ9	211
1173	ⅡD8f住	床面		R L O 段米。縄地紋面。						211

番号	出土地点	層位	器種	材質	産地	長さ	幅	厚さ	備考	分類	写真
1174	ⅡD8f住	P3埋土	石版	粘板岩	北上山地	(2.6)	1.7	0.3	(R.50)	Ⅱ9	211

第246図 ⅡD8f住居跡・出土遺物



第247図 IX D 8 f-2住居跡

5 cm、西壁25cm、北壁44cmである。

〈床・柱穴・施設〉西側は基礎層を、東側は褐色土層を床とし、全体に固く締まっている。ほぼ水平で平坦である。柱穴は検出されなかった。

〈炉〉検出されなかった。

遺物 出土していない。

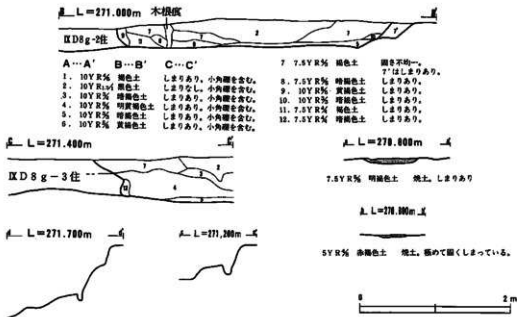
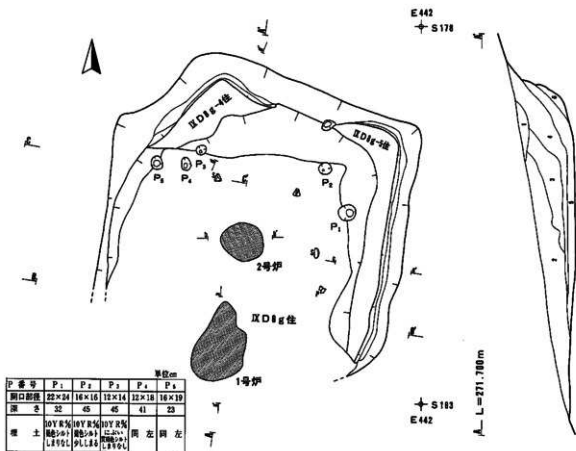
時期 特定する資料を欠き不明であるが、形態から縄文時代に属すると思われる。

#### IX D 8 g 住居跡 (遺構番号135)

遺構 (第248図、写真図版84・85)

〈検出状況〉東尾根南斜面中腹に位置する。褐色土層上面で黒色土の落ち込みとして検出した。当初は単独の遺構を想定していたが、床面精査の段階で、床面レベル、壁・周溝の方向等から3回の建替えと考えられた。埋土断面観察から中央部が最も新しい。これをIX D 8 g 住居跡とする。北西隅のやや高い部分をIX D 8 g-4住居跡、東壁際の一段高い部分を床面とするものをIX D 8 g-5住居跡とする。IX D 8 g-4住居跡とIX D 8 g-5住居跡の新旧関係は不明である。

南西隅でIX D 8 g-2住居跡、西側でIX D 8 g-3住居跡と重複する。この2住居は本住居の床より下から検出されたこと、および本住居の埋土断面観察から本住居の方が新しいと考えられる。



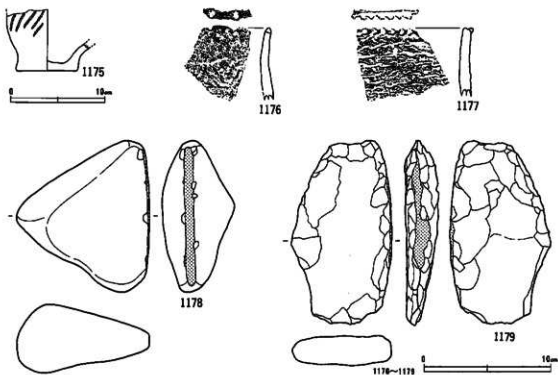
第248図 IXD8g・IXD8g-4・IXD8g-5住居跡

南側は斜面のため流失している。

〈形状・規模〉南側は不明であり、北側もプランを確定することは困難であるが、長軸が等高線にはほぼ直交する長方形を基調とするものと推定される。規模は、東西3.4m、南北は残存値で4.5mである。

〈壁・壁高〉上位は褐色土層を、下位は基盤層を壁とし、やや外傾する。壁高は、東壁40cm、西壁31cm、北壁96cmである。

〈埋土〉上位から黒色土、暗褐色土、明黄褐色土、暗褐色土の4層が主体をなし、自然堆積の様相を示す。すこぶる固く締まっている。



番号	出土地点	層位	文様	地文	口径	底径	高さ	備考	分類	写真
1175	ⅨD 8g 住	床面		1.R 視。	-	6.6	(0.8)		Ⅱ 1	212
1176	ⅨD 8g 住	床面	口唇部に成が地文され小波状口縁となる。	横位線跡文(破片の下端)。					Ⅱ 6	212
1177	ⅨD 8g 住	Q 3 埋土	口唇部に成が地文され小波状口縁となる。	横位線跡文(破片の下端)。					Ⅱ 3	212

番号	出土地点	層位	母体	石質	産地	長さ	幅	厚さ	備考	分類	写真
1178	ⅨD 8g 住	埋土下位	乱焼砂岩人形	硬砂岩	北上山地	12.0	10.6	5.4	690		I a 1 212
1179	ⅨD 8g 住	床面	乱焼砂岩人形	河原岩石安山岩	奥羽山地	14.5	8.1	2.3	380		Ⅱ b 3 212

第249図 ⅨD 8g 住居跡出土遺物

〈床・柱穴・施設〉斜面上方に当たる北側は基盤層を、南側は褐色土層を床とし、全体に固く締まっている。柱穴は5個検出された。規模と位置からP2とP3の対応関係が考えられるが、他は不明である。

〈炉〉南北方向中軸線上に地床炉が2基検出された。いずれも断面形がレンズ状である。

遺物 (第249図、写真図版212)

〈土器〉1175は東壁際の床上5cmの高さで出土した。底部から外反気味に大きく湾曲する器形である。地文の原体は太めである。図示した他には、埋土から組縄縄文、網目状然糸文の小片が出土している。

〈石器〉図示した他に北西四半部の埋土からUフレが2点、フレークが8点出土している。

時期 床面出土土器から、縄文時代前期後葉から末葉に属すると考えられる。

#### ⅡD 8 g-2 住居跡 (遺構番号136)

遺構 (第250図、写真図版86)

〈検出状況〉ⅡD 8 g 住居跡の西南隅の床面下から検出された。本住居の方が古い。南側は斜面のため流失している。

〈形状・規模〉南側は不明であるが、長軸が等高線にほぼ平行する長方形と推定される。規模は、東西は推定値で3.7m、南北は残存値で2.2mである。

〈壁・壁高〉基盤層で、内湾気味に外傾する。壁高は東壁22cm、北壁35cmである。

〈埋土〉5層で構成されるが、黒褐色土が主体をなす。第4層はⅡD 8 g 焼土である。

〈床・柱穴・施設〉基盤層で固く締まっており、小さな凹凸がある。斜面に沿ってやや傾斜する。柱穴は検出されなかった。

〈炉〉地床炉を1基検出した。44×54cmの不整な楕円形状に分布し、厚さは最大6cmである。

遺物 (第250図、写真図版213)

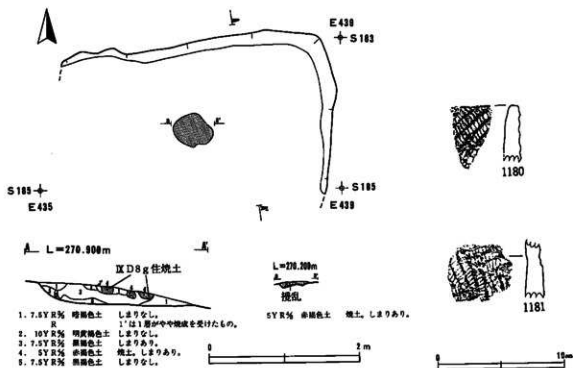
〈土器〉埋土からのみの出土である。図示した2点は、同一個体と考えられる。0段多条のLRとRLにより羽状縄文をつくり出している。

時期 出土遺物から縄文時代前期初頭から前葉に属すると推定される。

#### ⅡD 8 g-3 住居跡 (遺構番号137)

遺構 (第251図、写真図版86)

〈検出状況〉北側でⅡD 8 g 土坑、東側でⅡD 8 g 住居跡と重複する。本住居とⅡD 8 g 土坑の埋土断面観察から、同土坑は本住居の埋土堆積後に構築されたと考えられる。またⅡD 8 g 住居跡との関係では、同住居の東西埋土断面観察により、本住居の方が先行すると考えられる。



番号	出土地点	層位	文様	地文	口径	底径	器高	備考	分類	写真
1180	IXD8g-2住	埋土下位		LR×RL第1層結晶状焼土。				LR, RLとも6段多糸。編織混入。	01c4	212
1181	IXD8g-2住	埋土下位		LR×RL第1層結晶状焼土。				LR, RLとも6段多糸。編織混入。	01c4	212

第250図 IXD8g-2住層跡・出土遺物

南側は斜面のため流失している。

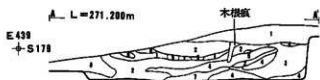
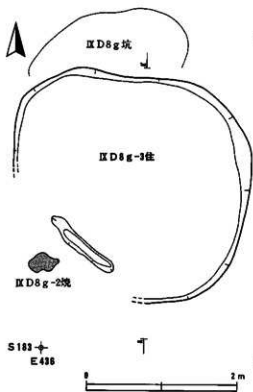
〈形状・規模〉南側に不明な部分があるが、径3m程度の不整な円形と考えられる。

〈壁・壁高〉基盤層を壁とし、外傾する。壁高は、東壁8cm、西壁11cm、北壁37cmである。

〈埋土〉褐色土と黒色～黒褐色土が互層をなし、自然堆積の様相を示す。

〈床・柱穴・施設〉基盤層を床とし、全面固い。小さな凹凸がある。柱穴は検出されなかった。床面南西側に部分的な溝が検出された。規模は幅7～9cm、長さ108cm、深さ8cmである。本住居の推定プランと一致しないこと、床面の他の位置に溝が検出されないことから、周溝とするには疑問がある。また、溝に近接した位置に焼土が検出された。本住居に伴う可能性がないとはいえないが、本住居の推定範囲外と考えられ、IXD8g-2焼土として別に報告す





1. 10 Y R 5% 黒褐色土 ややしまりあり。小角礫を多数に含む。
2. 10 Y R 5% 褐色土 しまりあり。小角礫を多数に含む。
3. 10 Y R 5% 黒褐色土 しまりあり。小角礫、褐色土を含む。
4. 10 Y R 5% 褐色土 しまりあり。炭化材を含む。腐植に富む。
5. 10 Y R 5% 褐色土 しまりあり。
6. 10 Y R 5% 褐色土 小角礫を含む。
7. 10 Y R 5% 黒褐色土 しまりあり。褐色土を含む。小角礫を含む。
8. 10 Y R 5% 褐色土 黒褐色土を含む。小角礫を含む。



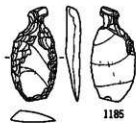
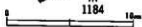
1182



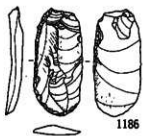
1183



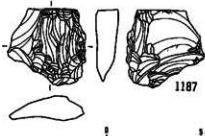
1184



1185



1186



1187



番号	出土地点	層位	支様	地文	口徑	接部開	容積	備考	分類	写真
1182	IX D 8 g-3 住	埋土	口唇部指輪状片痕。					横筋混入。	B 1 b	212
1183	IX D 8 g-3 住	Q 4 埋土		L R 統。縦紋線結文。					B 2 b	212
1184	IX D 8 g-3 住	埋土		L R 統。					B 3 b	212

番号	出土地点	層位	種類	材質	産地	長さ	幅	厚さ	置き	備考	分類	写真
1185	IX D 8 g-3 住	埋土	石匙	埴質泥岩	宇石西層	5.0	2.4	0.7	7.54	2 月は急角度。1 月は鈍い角度。	B 1 b	212
1186	IX D 8 g-3 住	埋土	不定形石匙	埴質泥岩	宇石西層	5.7	2.6	0.8	8.87	表面には肥田土と混じられたる微小角礫もある。	B 4 a	212
1187	IX D 8 g-3 住	埋土	石狭	凝灰質硬質泥岩	宇石西層	4.1	4.2	1.3	24.28			212

第251図 IX D 8 g-3住層跡・出土遺物

る。

遺物 (第251図、写真図版212)

〈土器〉埋土からのみの出土である。図示した他には、埋土から組縄縄文、織維を含む斜縄縄文の小さい破片が出土している。

〈石器〉1187は表面に縦方向の打撃による剝離が数回観察されることから石核とした。

時期 出土遺物・重複関係から、縄文時代前期初頭から前葉に属すると推定される。

ⅨD 8 g-4 住居跡 (遺構番号137)・ⅨD 8 g-5 住居跡 (遺構番号138)

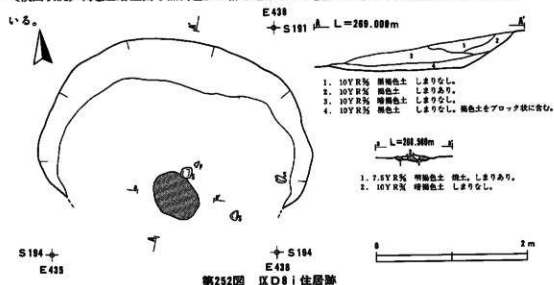
遺構 (第248図、写真図版85)

ⅨD 8 g 住居跡の床面で検出した。同住居の北西隅床面の一段高い平坦部とそれに付随する周溝は、同住居に先行する住居跡の残欠部と考えられる。これをⅨD 8 g-4 住居跡とする。また、東側床面の一段高い平坦部とそれらに付随する周溝も、同様にⅨD 8 g 住居跡に先行する住居跡の残欠部と考えられる。これをⅨD 8 g-5 住居跡とする。これらの住居の床面はⅨD 8 g 住居跡の床面より約20~30cmほど高い。周溝は両者とも幅約13~18cm、深さ約10cmで同規模である。ⅨD 8 g-4 住居跡とⅨD 8 g-5 住居跡は単一の住居である可能性もあるが、壁の軸方向が異なることから別個のものとして取り上げた。

ⅨD 8 i 住居跡 (遺構番号140)

遺構 (第252図、写真図版87)

〈検出状況〉褐色土層上面で黒褐色土の落ち込みとして検出した。南側は斜面のため流失している。





1188



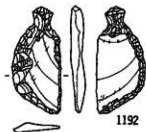
1189



1190



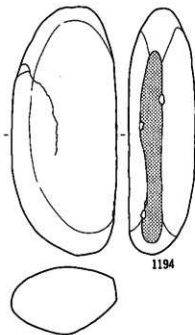
1191



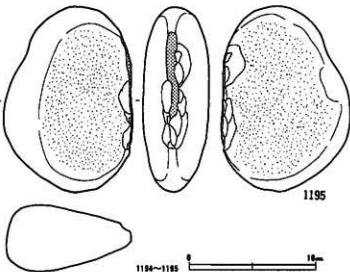
1192



1193



1194



1195



番号	出土地点	層位	文様	地文	口徑	底徑	高さ	番号	分類	写真
1188	ⅨD81住	Q3層土		縞縞刺文。					Ⅱa2	212
1189	ⅨD81住	床面	R1様。						Ⅱ1b	212

番号	出土地点	層位	母体	石質	用途	長さ	幅	厚さ	番号	分類	写真	
1190	ⅨD81住	ベ4層土	石髓	硬質泥岩	字石磨部	12.61	1.3	0.3	0.70		Ⅱe2	212
1191	ⅨD81住	Q3層土	石髓	粘板岩	北上山地西縁	1.4	1.4	0.3	0.79		Ⅱa2	212
1192	ⅨD81住	Q1層土	石髓	硬質凝灰岩	字石磨部	5.7	2.6	0.8	8.60	先端部つくり出し。	Ⅱa2	212
1193	ⅨD81住	Q3層土	石髓	硬質泥岩	新第三系中新統	3.6	4.8	0.7	19.04		Ⅱa1	212
1194	ⅨD81住	床面	凝結砂岩A群	凝砂岩	北上山地	19.7	8.3	5.1	1360		Ⅱa1	213
1195	ⅨD81住	床面	凝結砂岩A群	塊状質凝灰岩	北上山地	14.6	10.7	10.0	1000	平磨面2面。	Ⅱ1b	213

第253図 ⅨD81住居跡出土遺物

〈形状・規模〉南側は不明であるが、長軸が等高線にほぼ平行する楕円形と推定される。規模は、東西3.6m、南北は残存値で2.6mである。

〈壁・壁高〉上位は褐色土層を、下位は基盤層を壁とし、緩やかに立ち上がる。壁高は東壁22cm、西壁17cm、北壁49cmである。

〈埋土〉4層で構成されるが、いずれも締まりを欠く。第4層は褐色土をブロック状に含む。

〈床・柱穴・施設〉基盤層で固く締まっており、小さな凹凸がある。中央部にやや傾斜する。柱穴は検出されなかった。

〈炉〉地床炉を1基検出した。50×70cmの不整な楕円形状に分布し、厚さは最大8cmである。

遺物（第253図、写真図版212・213）

〈土器〉床面から、0段多条の織維を含む微小破片が出土した。埋土からは図示した2点の他組縄文の破片が出土しているが図化は省略した。

〈石器〉図示した他に岩手火山起源の燧岩が1点、フレークが19点埋土から出土している。

時期 床面出土遺物から、縄文時代前期初頭から前葉に属すると考えられる。

#### ⅩD 9 f 住居跡（遺構番号141）

遺構（第254図、写真図版88）

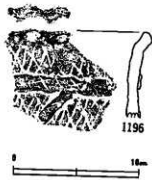
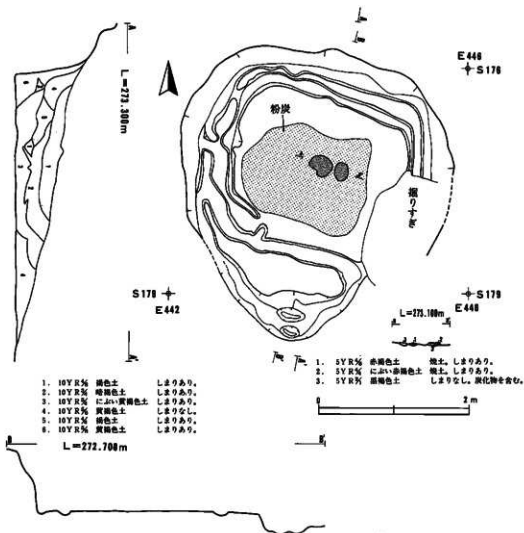
〈検出状況〉褐色土層上面で検出した。東側は誤って掘りすぎてしまった。周溝が2条巡ることから、建替えと思われるが、埋土断面から切り合いは確認できないことから、拡張したものと考えられる。現存する壁と外側の周溝を有する新期のものをⅩD 9 f 住居跡、内側の周溝を有する古期のものをⅩD 9 f-2 住居跡とする。

〈形状・規模〉斜面下方に当たる南側の壁は流失しており、詳細は不明であるが、出入り口にかかわるものかと思われる張り出し部が周溝から確認される。その部分を除くと、長軸が斜面に平行する隅丸長方形で、長軸にあたる東西は3.7m、短軸に当たる南北は推定値で3mである。

〈壁・壁高〉褐色土層と基盤層を壁とし、ほぼ直立する。壁高は、東壁82cm、西壁63cm、北壁84cmである。

〈埋土〉6層に分けられるが、全体がレンズ状の層をなす自然堆積の様相を示す。

〈床・柱穴・施設〉基盤層を床とし、全面固い。ほぼ全面に粉炭が分布する。厚さは1cm程度である。柱穴は検出されなかった。周溝が2条巡る。外側のものが本住居に伴い、内側のものが本住居に先行するⅩD 9 f-2 住居跡に伴うと考えられる。外側の周溝は幅13～25cm、深さ6～11cmで、締まりある明褐色土（10YR6/8）を埋土とする。南側に張り出した部分は、規模が一定せず、埋土は締まりを欠く褐色土（10YR4/4）である。壁際のものとは性格を異にする



番号	出土地点	層位	文様	地文	口縁部	器高	備考	分類	写真
1196	ⅨD9f住	Q3埋土	花卉状口縁、椀帯上木目状無承文施文。	Ⅸ木目状無承文。				Ⅸ6b7	213

第254図 ⅨD8f・ⅨD8f-2住居跡・出土遺物

ものと考えられる。

〈炉〉焼土が2基検出された。東側のものは粉炭の上に乗ることから、炉とは考えられない。西側のものは、24×30cmの不整形に分布し、厚さは最大3cmと薄いものではあるが、床を構成する層が焼土化したものであり、一応地床炉としておく。

遺物（第254図、写真図版213）

〈土器〉埋土のみの出土である。1196は花卉状口縁で隆帯が口頸部を巡り、胴部にも同隆帯が展開するがモチーフは不明である。隆帯上には地文と同じ原体で施文される。焼成は良好で硬質である。他に組縄縄文、横位の絞結文を有する土器小片が出土している。

時期 特定する資料を欠くが、検出状況・出土遺物から縄文時代前期後葉に属すると推定される。

#### ⅡD9f-2住居跡（遺構番号142）

遺構（第254図、写真図版88）

ⅡD9f住居跡の床面の内側を巡る周溝を伴う住居跡である。周溝は幅10～22cm、深さ6～8cmで南側は、断続的である。規模は、東西2.4m、南北2mである。

#### ⅡD9g住居跡（遺構番号143）

遺構（第255図、写真図版89）

〈検出状況〉東尾根南斜面に位置する。褐色土層上面で焼土を検出し、その斜面上方において基盤層を掘り込む壁を確認し、住居跡と認定した。南側でⅡD9g-2住居跡と重複する。本住居の焼土は一部ⅡD9g-2住居跡の埋土に形成されており、本住居のほうが新しい。

南側は斜面のため流失している。

〈形状・規模〉南側は不明であるが、径3.6m程度の円形基調と推定される。

〈壁・壁高〉上位は褐色土層、下位は基盤層を壁とし、外傾する。壁高は東壁24cm、西壁16cm、北壁41cmである。

〈埋土〉粉炭を含む褐色土を主体とし、全体に締まりを欠く。

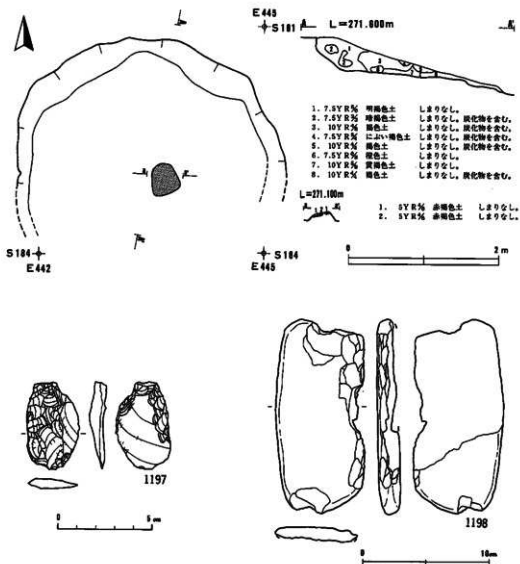
〈床・柱穴・施設〉斜面上方に当たる北側は基盤層、南側は褐色土層ないしⅡD9g-2住居跡の埋土を床とし、小さな凹凸が激しい。柱穴は検出されなかった。

〈炉〉地床炉を1基検出した。南側の一部はⅡD9g-2住居跡の埋土に形成される。35×40cmの楕円形状に分布し、厚さは最大4cmである。一部攪乱を受けている。

遺物 (第255図、写真図版213)

<石器>図示した2点のみの出土である。

時期 特定する資料を欠くが、検出状況から推して縄文時代前期に属すると推定される。



番号	出土地点	層位	器種	石質	産地	長さ	幅	厚さ	重さ	備考	分類	写真
1197	ⅨD9g住		不定形石器	凝灰質硬質泥岩	宇石西麓	4.0	2.8	0.07-0.04			111	213
1198	ⅨD9g住	床面	凝灰質硬質泥岩	硬砂岩	北上山地	15.3	7.1	0.8	200	持ち寄り。		213

第255図 ⅨD9g住居跡・出土遺物

ⅡD9g-2住居跡 (遺構番号144)

遺構 (第250図、写真図版89)

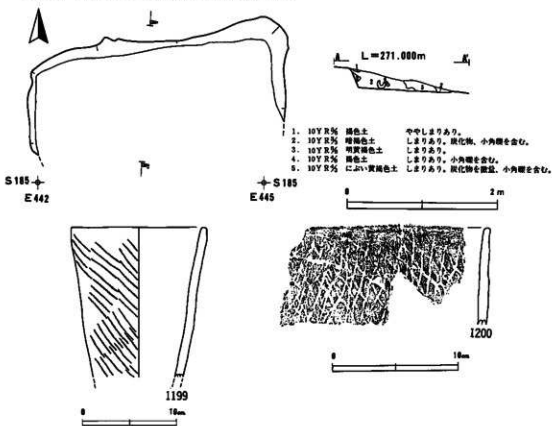
<検出状況>ⅡD9g住居跡の床面下から検出された。同住居に先行する。南側は斜面のため流失している。

<形状・規模>南側は不明であるが、方形ないしは長方形基調と推定される。規模は、東西3.5m、南北は残存値で1.8mである。

<壁・壁高>上位は褐色土層、下位は基盤層を壁とし、外傾する。壁高は東壁16cm、西壁9cm、北壁24cmである。

<埋土>粉炭を含む暗褐色土を主体とし、全体に固く締まっている。

<床・柱穴・施設>斜面上方に当たる北側は基盤層、南側は褐色土層を床面とする。ほぼ水平で平坦である。柱穴は検出されなかった。



番号	出土地点	層位	文様	地文	口徑	遺物	器名	備考	分數	写真
1199	ⅡD9g-2住	埋上下位		炭素灰文	34.4	-	(16.0)		1/6b9	213
1200	ⅡD9g-2住	埋上		L.R.黒目状炭灰文					1/6b0	213

第250図 ⅡD9g-2住居跡・出土遺物



〈炉〉検出されなかった。

遺物 (第256図、写真図版213)

〈土器〉埋土からのみの出土である。1199の地文の原体はやや太めのものを用いている。焼成は良好である。図示した他には横位の綾絡文を有する土器小片が1点出土している。

時期 出土土器から、縄文時代前期後葉から末葉に属すると考えられる。

ⅨD9h住居跡 (遺構番号145)

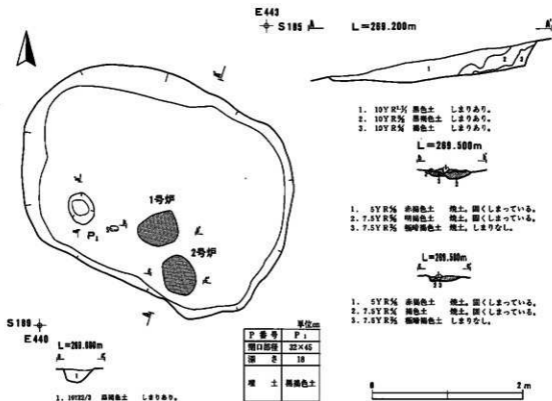
遺構 (第257図、写真図版87図)

〈検出状況〉東尾根南斜面に位置する。褐色土層上面で黒褐色土の落ち込みとして検出した。

〈形状・規模〉長軸が等高線にほぼ平行する長円形である。規模は、東西3.7m、南北2.8mである。

〈壁・壁高〉上位は褐色土層、下位は基盤層を壁とし、外傾する。壁高は、東壁19cm、西壁16cm、南壁4cm、北壁53cmである。

〈埋土〉黒褐色土を主体とし、自然堆積の様相を示す。



第257図 ⅨD9h住居跡

〈床・柱穴・施設〉斜面上方に当たる北側は基盤層、南側は褐色土層を床とする。やや凹凸があり、中央部はやや低い。柱穴を1個検出した。

〈炉〉南西四半部に地床炉2基を検出した。西側のものを1号炉、東側のものを2号炉とする。1号炉の焼土は、45×52cmの楕円形状に分布し、厚さは最大12cmである。2号炉の焼土は、40×55cmの楕円形状に分布し、厚さは最大7cmである。一部に攪乱があるが、2基とも基盤層にまで焼成がおよび、断面形はレンズ状で固く締まっている。

遺物 〈土器〉床面から繊維を含む組縄縄文が1点（厚さ1cm）、他に細片が数点出土しているが図化に耐えないので割愛した。

〈石器〉フレークが3点出土したのみである。

時期 床面出土破片から、縄文時代前期初頭から前葉に属すると考えられる。

#### ⅨD0f住居跡（遺構番号146）

遺構（第258図、写真図版90）

〈検出状況〉東尾根南斜面に位置する。平面的な検出はできなかった。褐色土層上面で焼土を検出し、住居跡を想定して精査を行った結果、本住居とⅨD0f-2住居跡が重複していることが分かった。埋土断面観察から、本住居の方が新しいと考えられる。

当初は重複に気付かなかったことから、古期のⅨD0f-2住居跡の精査を先行させたため、本住居の床面を掘り進んでしまった。そのため埋土観察用のベルトによって本住居の範囲を把握した。南側は斜面のため流失している。

〈形状・規模〉南側は不明であるが、方形ないしは長方形基調と推定される。規模は東西は2.8m、南北は残存値で2.3mである。

〈壁・壁高〉上位は褐色土層、下位は基盤層を壁とし、ほぼ直立する。壁高は、東壁44cm、西壁20cm、北壁69cmである。

〈埋土〉3層で構成される。褐色土層起源の埋土で自然堆積の様相を示す。

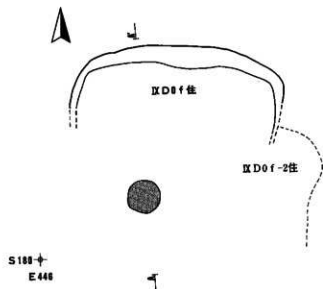
〈床・柱穴・施設〉北側は基盤層、南側はⅨD0f-2住居跡の埋土を床とする。柱穴は検出されなかった。

〈炉〉地床炉を1基検出した。径40cmの円形に分布し、厚さは最大10cmである。本住居の床面として用いられたⅨD0f-2住居跡の埋土に形成される。

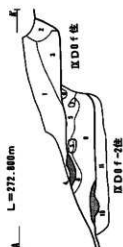
遺物 〈土器〉単節斜縄文の細片が数点出土しているが図化に耐えないので割愛した。

〈石器〉Uフレ1点、フレーク21点が埋土から出土したのみである。

時期 出土遺物・重複関係から、縄文前期後葉から末葉に属すると考えられる。



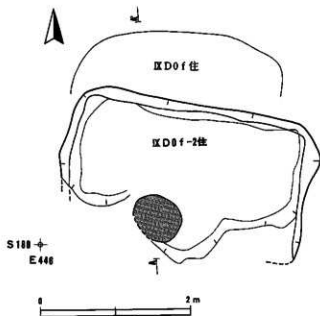
E450  
+ S177



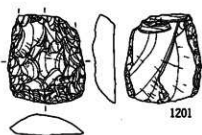
+ S180  
E450

1. 10YR5/1 暗褐色土 ややしまりあり、小角礫を含む。
2. 7.5YR5/6 褐色土 しまりあり。
3. 10YR5/1 暗褐色土 褐色土、小角礫を含む。
4. 5YR5/6 赤褐色土 焼土。
5. 10YR5/1 暗褐色土 褐色土、小角礫を含む。
6. 7.5YR5/6 褐色土 固くしまっている。
7. 10YR5/6 暗褐色土
8. 7.5YR5/1 暗褐色土
9. 7.5YR5/1 褐色土 固くしまっている。
10. 5YR5/6 赤褐色土 焼土。
11. 7.5YR5/1 褐色土 固くしまっている。暗褐色土との混土。

+ S177  
E450



+ S180  
E450



番号	出土地点	層位	種類	材質	産地	長さ	幅	厚さ	重さ	備考	分類	写真
1201	IXD0f-2住	埋土	石瓦	焼反貫網紋磁灰岩	宇石原郡	(4.7)	4.1	1.1	3.9g	基部欠損。方部の割裂は丁寧。	I	213

第258図 IXD0f・IXD0f-2住層跡・出土遺物

## IXD0f-2住居跡（遺構番号 147）

遺構（第258図、写真図版90・91）

〈検出状況〉褐色土層上面で焼土を検出し、精査に入った。北側でIXD0f住居跡と重複する。本住居の方が同住居より古い。南側は斜面のため流失している。

本住居の地床炉と考えられる焼土のレベルを床面と把握したが、そこから更に15cmほどの深さで、基盤層を掘り込んでいることが確認された。その掘り込みの平面形は、本住居の内側で完結する。北側は本住居と殆ど一致するが、南側では不整な出入りがある。埋土は、本住居の主体をなす黒褐色土に類似する。底面は、基盤層である黄褐色土で、焼土・柱穴等は検出されない。

本住居の床面がここまで下がるという想定もできる。また、建替えまたは独立した住居の重複ととらえることも可能である。しかし、前者の立場に立つと、焼土が原位置を保っていると考えられたことと整合しない。後者に立つと南側の壁のラインは不自然である。いずれも積極的根拠を見出だせず、不明である。ここでは野外調査時点の想定に基づき、とりえず本住居の掘り方・貼り床として報告する。

〈形状・規模〉南側は不明であるが、方形ないしは長方形と推定される。規模は、東西3.3m、南北は残存値で2mである。

〈壁・壁高〉基盤層で固く締まり、ほぼ直立する。壁高は東壁20cm、西壁21cm、北壁44cmである。

〈埋土〉下位の黒褐色土が主体をなす。小角礫を多く含み、非常に固く締まっている。

〈床・柱穴・施設〉地床炉と考えられる焼土のレベルを床面ととらえた。埋土と殆ど区別がつかない黒褐色土を、南側の一部を除くほぼ全面に15cm程の厚さで貼り床している。掘り方の底面は基盤層である黄褐色土で、ほぼ水平で平坦である。柱穴は検出されなかった。

〈炉〉焼土が1基検出された。径40cm程度の円形に分布し、厚さは最大10cmである。断面形はレンズ状で、原位置を保っているものと考えられることから、地床炉とする。

遺物（第258図、写真図版213）

〈土器〉埋土上位から繊維を含む組縄縄文、および埋土中位から網目状摺糸文、摺糸文の小破片が数点出土したが図化は省略した。

〈石器〉1201は基部側を欠損しているが刃部は精巧な加工である。1点のみの出土である。

時期 特定する資料を欠くが、出土土器から縄文時代前期に属すると考えられる。

Ⅸ E 2 b 住居跡 (遺構番号148)

遺構 (第259図、写真図版92)

<検出状況>東尾根南麓の平坦部に位置する。褐色土層上面において、黒色土の落ち込みとして、比較的明瞭にプランを検出できた。

<形状・規模>長軸が等高線に平行する楕円形である。規模は、東西3.1m、南北2mである。

<壁・壁高>黒褐色土と黄褐色土の混土層で軟質で、やや外傾する。壁高は東壁17cm、西壁18cm、南壁9cm、北壁12cmである。

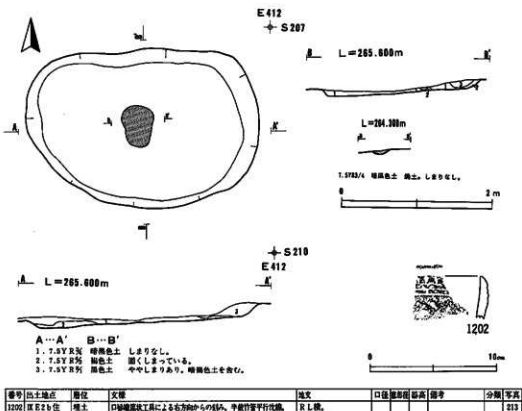
<埋土>3層で構成される。上位から、黒色土・暗褐色土・褐色土が堆積する。

<床・柱穴・施設>黒褐色土と黄褐色土の混土層で、やや軟質であり、埋土との区別が困難だった。南側にやや傾斜する。柱穴は検出されなかった。

<炉>中央部に地床炉を1基検出した。40×52cmの範囲に分布し、厚さは最大6cmである。断面形はレンズ状である。

遺物 (第258図、写真図版213)

<土器>床面から0段多条の小破片 (厚さ1.3cm、繊維を含む)、埋土から1202の他網目状炆糸



第259図 Ⅸ E 2 b 住居跡・出土遺物

文、木目状燃糸文、横位の綾絡文を有する小破片が出土している。

時期 特定する資料を欠くが、出土遺物から縄文時代前期に属すると考えられる。

### Ⅸ E 5 a 住居跡 (遺構番号149)

遺構 (第260図、写真図版93)

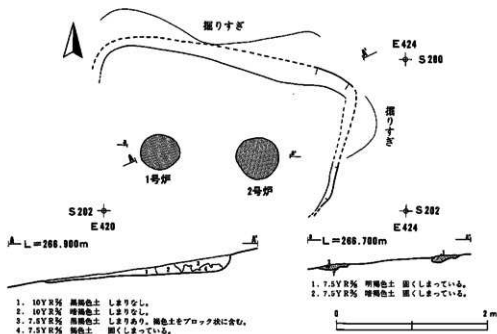
〈検出状況〉東尾根南麓の平坦部に位置する。黒褐色土と黄褐色土の混土層上面において、焼土を検出し、その北東部に壁のたちあがりの一部を確認したことから、住居跡と認定した。埋土と壁の区別がつかず、範囲を確定することはできなかったが、床面の土色・固さから、およその範囲を推定した。

〈形状・規模〉不明である。推定では長軸が等高線にほぼ平行する長方形を基調とするものと推定される。規模は、2×3 m程度と推定される。

〈壁・壁高〉一部残存する北東壁は、黒褐色土と黄褐色土の混土層で軟質で、内湾気味に外傾する。壁高は20cmである。

〈埋土〉4層で構成される。いずれもしまりを欠く。

〈床・柱穴・施設〉黒褐色土と黄褐色土の混土層で、やや軟質である。柱穴は検出されなかった。



第260図 Ⅸ E 5 a 住居跡

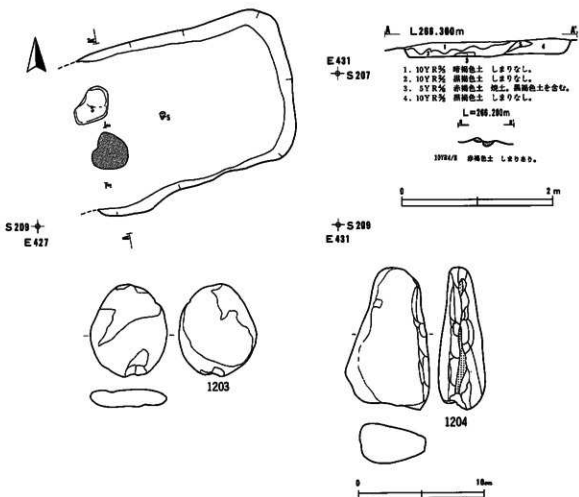
<炉> 推定長軸線上に地床炉を2基検出した。西側のものを1号炉、東側のものを2号炉とする。1号炉の焼土は径50cm程度の円形に分布し、厚さは最大7cmである。2号炉の焼土は径55cm程度の円形に分布し、厚さは最大10cmである。いずれも断面形はレンズ状である。

遺物 本遺構に伴う遺物は無い。

時期 特定する資料を欠き不明であるが、検出状況から縄文時代前期に属すると推定される。

### Ⅸ E 6 b 住居跡 (遺構番号150)

遺構 (第261図)



番号	出土地点	層位	器種	材質	産地	長さ	幅	高さ	重量	分類	写真
1203	Ⅸ E 6 b 住	床面	石皿	赤色凝灰岩	北上山地	7.3	6.1	1.3	300	I	213
1204	Ⅸ E 6 b 住	床面	凝結凝灰A群	凝灰質千夜岩	北上山地	10.9	6.7	3.5	350	I b 1	213

第261図 Ⅸ E 6 b 住居跡・出土遺物

〈検出状況〉東尾根南麓の平坦部に位置する。黒褐色土と黄褐色土の混土層上面において焼土を検出し、その後に壁のたちあがりの一部確認したことから、住居跡と認定した。埋土と壁の区別が難しく、北側は掘りすぎてしまった。西側は不明である。

〈形状・規模〉西側が不明であるが、長軸が等高線にほぼ平行する長方形を基調とするものと推定される。規模は、東西は残存値で3m、南北は2.2mである。

〈壁・壁高〉黒褐色土と黄褐色土の混土層で軟質であり、やや外傾する。壁高は、東壁14cm、南壁10cm、北壁17cmである。

〈埋土〉4層で構成される。黒色土を主体とする。いずれもしまりを欠く。

〈床・柱穴・施設〉黒褐色土と黄褐色土の混土層で、やや軟質である。柱穴は検出されなかった。

〈炉〉地床炉1基検出された。径50cmの歪な円形状に分布し、厚さは最大8cmである。断面形はレンズ状となる。

遺物（第261図、写真図版213）

〈土器〉埋土から繊維を含む斜縄文の小破片が6点出土したが、図化に耐えないので省略した。

〈石器〉図示した2点が出土した。

時期 特定する資料を欠くが、出土土器から縄文時代前期初頭から前葉に属すると考えられる。

#### XD1g 住居跡（遺構番号151）

遺構（第262図、写真図版94）

〈検出状況〉東尾根南斜面に位置する。試掘トレンチの断面に原位置を保つ焼土があり、その斜面上方に基盤層を掘り込む壁を確認し、住居跡と認定した。北壁は明瞭だが東西壁ははっきりしない。

西隣には、XD1g-2住居跡が位置する。本住居と直接の切り合いはない。北西壁でXD1g-3住居跡と重複するが、新旧関係は明らかにできなかった。

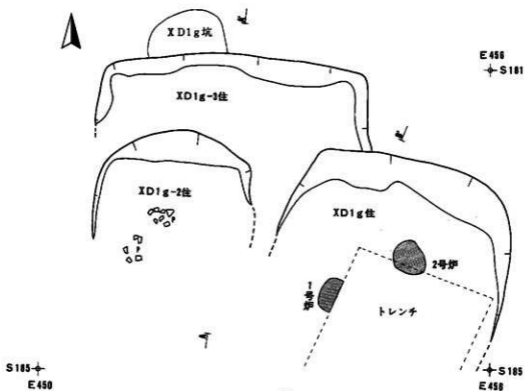
〈形状・規模〉詳細は不明であるが、方形と推定される。規模は東西3.1m、南北は残存値で3mである。

〈壁・壁高〉斜面上方に当たる北壁は、上位は褐色土層、下位は基盤層でやや外傾する。壁高は、東壁13cm、西壁27cm、北壁39cmである。

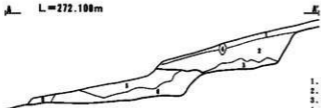
〈埋土〉黒色土と暗褐色土の混土層が主体で、締まりを欠く。埋土最上部から十和田a降下火山灰が検出されている（付篇1参照）。

〈床・柱穴・施設〉床面の大半は試掘トレンチによって削剝され、詳細は不明である。北壁際は基盤層である黄褐色土であるが、南側は暗褐色土～黒色土であり、全体に固く締まっている。



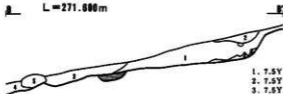


▲ L=272.100m



1. 7.5Y R 7/1 暗褐色土 しまりなし、小角礫を含む。
2. 7.5Y R 7/1 暗褐色土 しまりなし、黒色土との混土。
3. 7.5Y R 7/1 暗褐色土 小角礫を含む。
4. 7.5Y R 7/1 黒色土
5. 7.5Y R 7/1 暗褐色土 黒色土を含む。
6. 7.5Y R 7/1 黒色土 小角礫を含む。

▲ L=271.000m



1. 7.5Y R 7/1 黒色土 暗褐色土との混土。しまりなし。小角礫を多く含む。
2. 7.5Y R 7/1 暗褐色土 しまりなし。小角礫を多く含む。
3. 7.5Y R 7/1 暗褐色土
4. 7.5Y R 7/1 黒色土 しまりなし。小角礫を多く含む。



第262図 XD1g・XD1g-2・XD1g-3住層跡

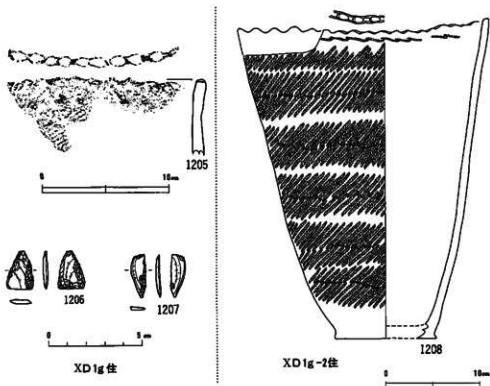
残存した部分では、柱穴は検出されなかった。

〈炉〉地床炉が2基検出された。西側のものを1号炉、東側のものを2号炉とする。1号炉の焼土は南北40cmで、厚さは10cm程度である。2号炉の焼土は40×50cmの楕円形状に分布する。遺物（第263図、写真図版214）

〈土器〉1205の他、埋土から繊維を含む斜縄文、横位の綾絡文を有する土器小片が出土した。

〈石器〉図示した2点の他Uフレカが1点、フレークが2点出土している。

時期 特定する資料を欠くが、検出状況・出土遺物から縄文前期後葉から末葉に属すると考えられる。



番号	出土地点	層位	文様	施文	口徑	底徑	器高	備考	分類	写真
1205	X D1g 住	埋土	口唇部定方向からの物類状況印痕。	L R 縦。					II 6 b 才	213
1208	X D1g - 2住	床面	口唇部指痕状況印痕。	L R × L R 第1種縮克。	28.7	16.8	33.6		II 6 b 才	214

番号	出土地点	層位	器種	材質	産地	長さ	幅	厚さ	重さ	備考	分類	写真
1206	X D1g 住	埋土	石鏃	硬質燧石質泥岩	甲石西郡	2.0	1.4	0.3	0.76		I 2	214
1207	X D1g 住	埋土	不定形石器	硬質燧石質泥岩	甲石西郡	2.3	0.8	0.2	0.39	扁平	III	214

第263図 X D1g・X D1g-2住居跡 出土遺物

### XD1g-2住居跡（遺構番号152）

遺構（第262図、写真図版94）

〈検出状況〉東尾根南斜面に位置する。褐色土層上面で検出した。北側でXD1g-3住居跡と重複する。埋土断面観察から、本住居の方が先行すると考えられる。

当初は重複に気付かず、本住居の調査を先行させたため、XD1g-3住居跡の床面まで掘りすぎてしまった。

斜面のため南側は流失している。

〈形状・規模〉詳細は不明であるが、方形ないしは長方形と推定される。規模は東西2m、南北は残存値で3mである。

〈壁・壁高〉斜面上方に当たる北壁は、やや外傾する。壁高は、東壁2cm、西壁9cm、北壁34cmである。

〈埋土〉上位は褐色土を、下位は黒色土を主体とし、壁際は崩落土が混入する。

〈床・柱穴・施設〉北壁際は基盤層である黄褐色土であるが、南側は暗褐色土～黒色土であり、全体に固く締まっている。柱穴は検出されなかった。

〈炉〉検出されなかった。

遺物（第263図、写真図版214）

〈土器〉1208はRLを結束させて横回転しているが、口縁直下の横走する綾絡文は原体の末端処理によるものである。実測図には表れないが胴部にも一部観察される。口唇部は右方向から指頭状の圧痕が施される。焼成は良好である。

〈石器〉台石様の破砕礫が出土しているが図示は割愛した。

時期 出土遺物から、縄文前期後葉から末葉に属すると考えられる。

### XD1g-3住居跡（遺構番号153）

遺構（第262図、写真図版94）

〈検出状況〉東尾根南麓の平坦部に位置する。XD1g-2住居跡の精査時に検出した。同住居と重複し、埋土断面観察から本住居のほうが新しいと考えられる。XD1g-2住居跡の精査を先行させたため、誤って、本住居の床面の一部を掘りすぎてしまった。南側はベルトによって範囲を把握した。

南東側でXD1g住居跡と重複するが、新旧関係は明らかにできなかった。

北側でXD1g土坑と重複する。切り合い関係をを表す断面図はとれなかったが、本住居精査後に北壁との床面から同土坑の掘り込みが確認されたこと、および本住居の埋土断面に同土坑の立上がりは確認できないことから、同土坑は本住居に先行すると考えられる。

〈形状・規模〉南側は不明であるが、方形ないしは長方形と推定される。規模は、東西3.6 m 南北は残存値2 mである。

〈壁・壁高〉斜面上方に当たる北壁は上位は褐色土層を、下位は基盤層を壁とし、比較的明瞭である。一部XD1g土坑の埋土を壁とする。東西壁は、褐色土層でありはっきりしない。壁高は、東壁7cm、西壁15cm、北壁23cmである。

〈埋土〉黒色土を混入する褐色土を主体とし、床面直上に締まりを欠く黄褐色土層が堆積する。

〈床・柱穴・施設〉北側は基盤層である黄褐色土およびXD1g土坑の埋土を、南側は褐色土層およびXD1g-2住居跡の埋土を床とする。柱穴は検出されなかった。

〈炉〉検出されなかった。

遺物 出土していない。

時期 特定する資料を欠き不明であるが、検出状況から縄文時代前期後葉から末葉に属すると推定される。

#### XD1j住居跡（遺構番号154）

遺構（第264図、写真図版94）

〈検出状況〉東尾根南麓の平坦部に位置する。試掘トレンチにおいて黒色土が広がることから、本住居の東半部を検出した。

東側でXD1g-2住居跡と重複する。実測図は取れなかったが、精査時の観察では本住居の方が新しい。

〈形状・規模〉南側は不明であるが、径3.5 m程度の円形ないしは長軸が同程度の楕円形と推定される。

〈壁・壁高〉黒褐色土と黄褐色土の混土層で軟質であり、ほぼ直立する。試掘トレンチにより削られてたことと、試掘トレンチで検出したため、壁高残存値は3～5cm程度であるが、ベルトで確認した立上がりでは35cm程度となる。

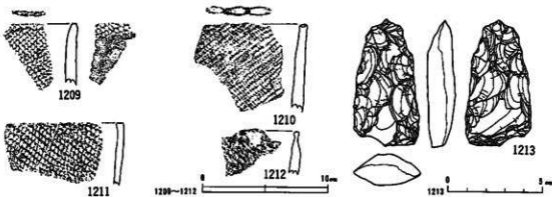
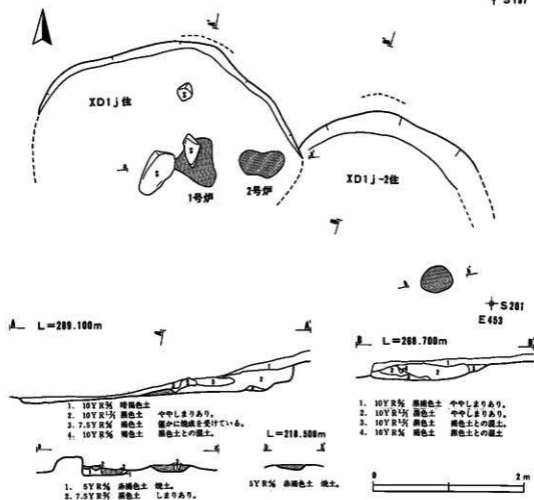
〈埋土〉腐植土である黒色土を主体とする。締まりはあまりない。

〈床・柱穴・施設〉黒褐色土と黄褐色土の混土層で、やや軟質である。柱穴は検出されなかった。

〈炉〉地床炉が2基検出された。いずれも断面形はレンズ状である。西側のものを1号炉、東側のものを2号炉とする。1号炉の焼土は60×60cmの不整形に分布し、厚さは最大8cmである。2号炉の焼土は33×60cmの楕円形状に分布し、厚さは最大10cmである。固く締まっている。

遺物（第264図、写真図版214）

〈土器〉図示した他に、埋土から繊維を含む組縄縄文、綾絡文を有する土器小片が出土した。



番号	出土地点	層位	文様	地文	口縁	器高	器径	分類	写真			
1309	XD1j住	堆土	口唇部と口唇端にも施文。口縁部内面にも施文。	斜刺網文。				織物混入。	II a 214			
1210	XD1j住	床面	口唇部指痕状正縁。	L R 模。				織物混入。	II b 214			
1211	XD1j住	埋土		R L 模。					II a 214			
1212	XD1j住	埋土	小波状口縁。痕跡側面の施文は意図的か？	R L 模。				織物混入。	II b 214			
番号	出土地点	層位	器種	材質	産地	長さ	幅	厚さ	重さ	備考	分類	写真
1213	XD1j住	埋土	石甕	硬質泥岩	平石西部	6.6	3.5	1.8	32.0g	断面は復元図。	II	214

第264図 XD1j・XD1j-2住居跡・出土遺物

〈石器〉1213の刃部は、強い打撃によると思われる階段状剥離を示す。

時期 出土遺物から縄文時代前期初頭から前葉に属すると考えられる。

#### XD1j-2住居跡（遺構番号155）

遺構（第264図、写真図版96）

〈検出状況〉東尾根南麓の平坦部に位置する。試掘トレンチにおいて黒色土が広がることから検出した。南側は不明である。西側でXD1j住居跡と重複する。精査時の観察では本住居の方が古い。

〈形状・規模〉南側は不明であるが、径3.5m程度の円形ないしは長軸が同程度の楕円形と推定される。

〈壁・壁高〉黒褐色土と黄褐色土の混土層で軟質であり、緩やかに立ち上がる。試掘トレンチにより削られており、壁高は最大で13cmである。

〈埋土〉腐植土である黒色土を主体とする。締まりはあまりない。

〈床・柱穴・施設〉黒褐色土と黄褐色土の混土層で、やや軟質である。柱穴は検出されなかった。

〈炉〉地床が1基検出された。34×44cmの楕円形状に分布し、厚さは最大7cmである。断面形はレンズ状である。

遺物 出土していない。

時期 特定する資料を欠くが、重複関係およびXD1j住居跡と類似する住居形態であることから縄文時代前期初頭から前葉と推定される。

#### XD2i住居跡（遺構番号156）

遺構（第265図、写真図版96）

〈検出状況〉東尾根南斜面に位置する。試掘トレンチにおいて焼土が検出されており、その斜面上方において、僅かではあるが壁の立ち上がりを確認し、住居跡と認定したものである。

〈形状・規模〉残存状況が悪く不明であるが、長方形基調か。規模は残存値で東西4m、南北2mである。

〈壁・壁高〉斜面上方に当たる北壁のみ残存し、黒色土と黄褐色土の混土層で、壁高は最大で8cmである。

〈埋土〉層厚5cm程度の単層で、締まりを欠く黒色土である。

〈床・柱穴・施設〉黒色土と黄褐色土の混土層でやや固めである。柱穴は検出されなかった。

〈炉〉焼土が2基検出された。発達が良いが、床面を構成する層が焼成をうけたものと考え

えられ、一応地床炉としておく。西側のものを1号炉、東側のものを2号炉とする。1号炉の焼土は25×48cmの不整な楕円形状に分布し、厚さは最大4cmである。2号炉の焼土は40×47cmの不整形に分布し、厚さは最大3cmである。

遺物 出土していない。

時期 特定する資料を欠き不明である。検出状況から縄文時代前期と推定される。

#### ⅩD3h住居跡（遺構番号157）

遺構（第266図、写真図版97）

〈検出状況〉東尾根南斜面に位置する。黒色土と黄褐色土の混土层上面において黒色土の広がりと検出した。

〈形状・規模〉長軸が等高線にほぼ平行する長円形で、規模は、東西3.2m南北2.1mである。

〈壁・壁高〉上位は黒色土と黄褐色土の混土层を、下位は基盤層である黄褐色土を壁とし、北壁と西壁はほぼ直立し、南壁と東壁はそれよりやや外傾する。壁高は、東壁40cm、西壁20cm、南壁28cm、北壁45cmである。

〈埋土〉上位は腐植土である黒色土で、やや粘性があり固い。下位は褐色のロームを主体とする層で、固く締まっている。

〈床・柱穴・施設〉基盤層である黄褐色土で、ほぼ水平で平坦である。柱穴は検出されなかった。

〈炉〉検出されなかった。

遺物 〈土器〉埋土から繊維を含む組縄縄文の土器小片が2点出土したのみである。剥落が著しいので図示は割愛した。

時期 出土土器から縄文前期初頭から前葉に属すると考えられる。

#### ⅩD3i住居跡（遺構番号158）

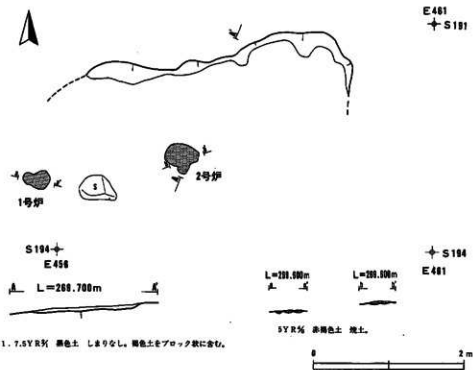
遺構（第267図、写真図版97）

〈検出状況〉東尾根南壁の平坦部に位置する。黒色土と黄褐色土の混土层上面で焼土を検出し、その斜面上方に10cm程度であるが壁の立上りを認め、住居跡と認定した。

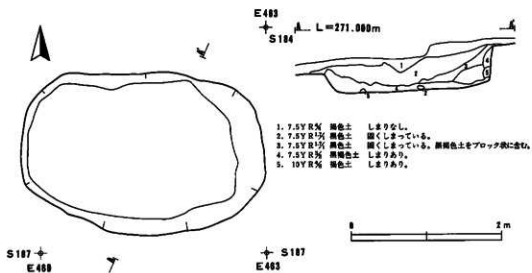
南側は斜面のため流失している。

〈形状・規模〉南側は不明であるが、径3m程度の円形ないしは長軸が同程度の楕円形と推定される。

〈壁・壁高〉北壁のみ残存する。黒褐色土と黄褐色土の混土层で軟質であり、外傾する。壁高は10cmである。



第265図 ID2 i 住居跡



第266図 ID3 h 住居跡



<埋土>しまりを欠く褐色土を主体とする。

<床・柱穴・施設>黒褐色土と黄褐色土の混土層で、やや軟質である。柱穴は検出されなかった。

<炉>地床炉が1基検出された。45×55cmの歪な楕円形状に分布し、厚さは最大10cmである。断面形はレンズ状である。

遺物 出土していない。

時期 特定する資料を欠き不明であるが、検出状況から縄文時代前期に属すると推定される。

#### X D 4 f 住居跡 (遺構番号159)

遺構 (第268図、写真図版98)

<検出状況>東尾根南斜面に位置する。基盤層上面で検出したが、断面観察からは上層の褐色土層を掘り込んでいることが分かる。北東部は倒木痕により攪乱を受けている。

<形状・規模>攪乱部と南側は不明であるが、長軸が等高線にはば平行する長方形を基調とするものと推定される。規模は、東西3.4m、南北は推定値で2mである。

<壁・壁高>上位は褐色土層、下位は基盤層を壁とし、やや外傾する。壁高は、北壁45cm、である。東壁・西壁は、検出した基盤層上面からの計測値で、それぞれ18cm・13cmである。

<埋土>腐植土である黒色土と黒褐色土を主体とする。

<床・柱穴・施設>基盤層である黄褐色土層で、固く締まっている。柱穴は検出されなかった。床面東側で土坑を検出した。埋土断面観察からは、本住居の床面からの掘り込みと考えられることから、本住居に伴うものとしておく。規模は、径66×70cm、深さ35cmで、底面は平坦である。

<炉>検出されなかった。

遺物 (第268図、写真図版214)

<石器>図示した他に台石様の破砕礫が埋土から出土している。

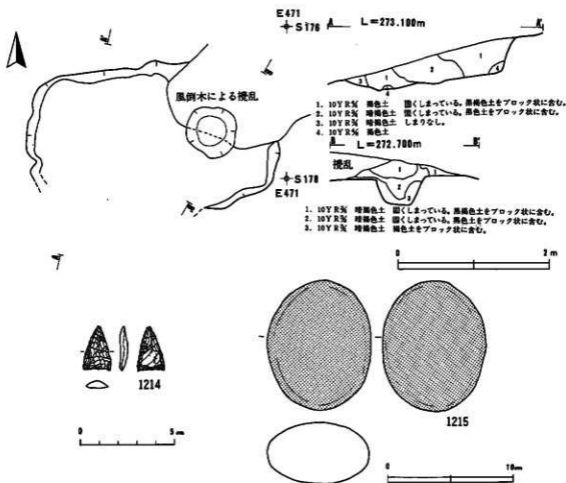
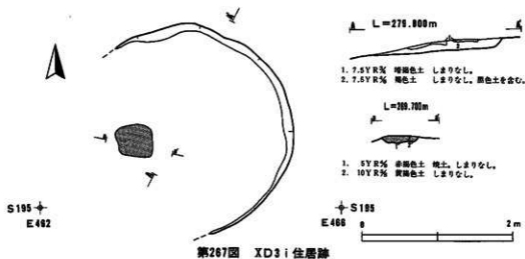
時期 特定する資料を欠き不明であるが、検出状況から縄文時代前期に属すると推定される。

#### X D 4 g 住居跡 (遺構番号160)

遺構 (第269図、写真図版98・99)

<検出状況>東尾根南斜面に位置する。試掘トレンチで、黒色土と黄褐色土の混土層上面において黒色土の落ち込みとして検出した。断面観察から上層の褐色土層から掘り込まれていることが確認された。

地床炉と考えられる焼土が分布する面を、本住居の床面として把握したが、その面から更に



番号	出土地点	層位	器種	材質	産地	長さ	幅	厚さ	重さ	備考	分類	写真
1214	XD4 f 住	焼土	石皿	地質泥岩	宇石西郡	2.4	1.4	0.4	1.96		II a 2	214
1215	XD4 f 住	焼土	敲磨石皿 B群	硬砂岩	北上山地	10.2	8.2	4.9	415	全面に磨面状あり。	I	214

第280図 XD4 f 住居跡・出土遺物

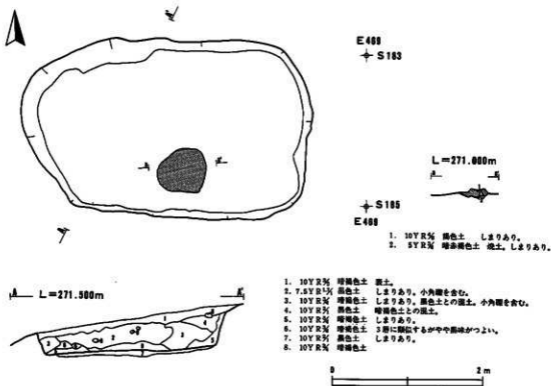
深さ7~8cmほど基盤層を掘り込んでいることが確認された。その掘り込みの平面形は本住居のそれと一致する。埋土は、本住居のものより黒味を多く帯び、固く締まっている。掘り込みの底面は概ね平坦であり、炉や柱穴などの施設は検出されない。この掘り込みの性格について詳細は不明であるが、調査時点の想定に基づき、本住居に伴う掘り方とし、その埋土を貼り床として報告する。

<形状・規模>長軸が等高線にほぼ平行する長円形で、規模は東西3.8m、南北2.3mである。

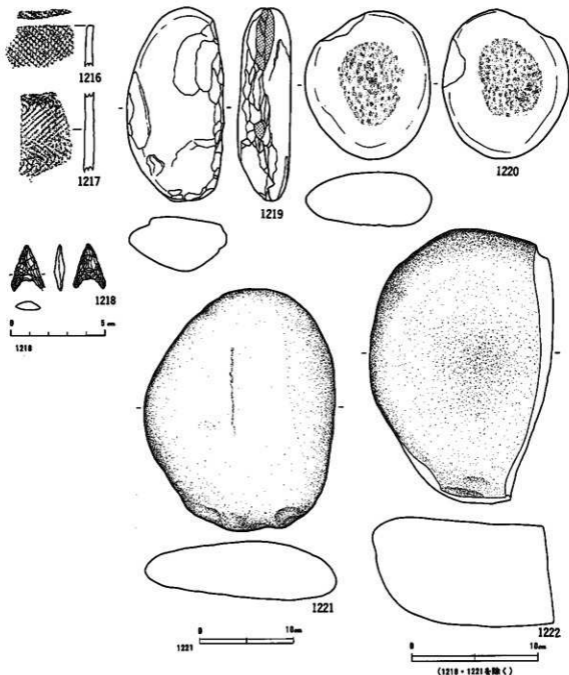
<壁・壁高>上位は黒色土と黄褐色土の混土層を、下位は基盤層を壁とし、ほぼ直立する。壁高は、東壁30cm、西壁12cm、南壁10cm、北壁44cmである。

<埋土>腐植土である黒色土層と、黒色土と褐色土の混土層を主体とする。粘性があり、よく締まっている。

<床・柱穴・施設>後述する焼土を地床炉として把握した。その検出面が本住居の生活面と考えられる。床面は固く締まった黒色土の層で構成され、その厚さは7~8cmである。この下の面が基盤層である。平面形が完全に一致しており、重複や壁替えと考えるにはやや不自然な感じは否めない。一応、掘り方および貼り床としておく。柱穴は検出されなかった。



第269図 XD4 g 住居跡



(1218・1221を除く)

番号	出土地点	層位	文様	施文	口徑	蓋径	器高	容量	分類	写真
1216	X D 4 g 住	埴土	口縁部刻文施文。	R L R 線。結繩施文?					II b 2	215
1217	X D 4 g 住	埴土		L R × R L 線? 種結髪羽状施文。					II c	215

番号	出土地点	層位	器種	材質	産地	長さ	幅	厚さ	重さ	備考	分類	写真
1219	X D 4 g 住	原洞	鼓腹器腹A形	赤色凝灰岩	北上山地	15.4	7.6	4.0	700		II b 2	215
1220	X D 4 g 住	原洞	鼓腹器腹B形	岡野石安山岩	奥羽山地	11.6	9.9	4.2	670		III	215
1221	X D 4 g 住	原洞		不明	不明	25.7	20.1	6.1	1450			215
1222	X D 4 g 住		石皿・台石皿	地味質凝灰岩	北上山地	(28.9)	(19.2)	(2.2)	(890)			215

第276図 X D 4 g 住居跡・出土遺物

〈炉〉南壁寄りに焼土が1基検出された。径40cm程度の歪な円形に分布し、厚さは最大10cmで、床面を構成する層が焼土化したもので、地床炉と考えられる。

遺物 (第270図、写真図版216)

〈土器〉埋土から組縄縄文、0段多条、横位の結束羽状縄文等の土器小片6点が出土した。内4点は繊維を含む。

〈石器〉1220は平坦部両面に、浅い凹凸がほぼ円形に分布する。1221は明瞭な使用痕は観察できないが床面から出土したものである。他にフレーク4点が出土している。

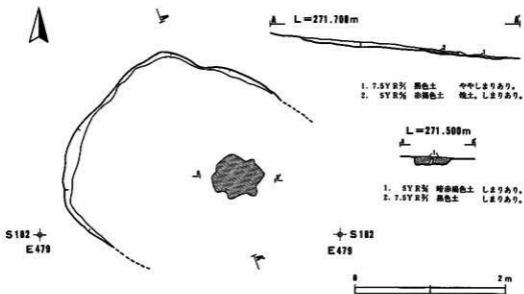
時期 出土土器から、縄文時代前期初頭から前葉に属すると考えられる。

#### XD 6 g 住居跡 (遺構番号 161)

遺構 (第271図、写真図版100)

〈検出状況〉東尾根南斜面の谷へ移行部に位置する。黒色土と黄褐色土の混土层上面で焼土を検出し、その斜面上方において、僅かであるが壁の立上がりを確認し、住居跡と認定した。平面的な検出はできず、土の固さによって壁を決定した。埋土の方が明らかに軟質である。検出が遅れたことから、壁の大部分は掘り過ぎにより残存しない。

〈形状・規模〉不明であるが、長軸が等高線に斜交する長方形基調と推定される。規模は、東西は残存値で2.5m、南北は2.8mである。



第271図 XD 6 g 住居跡

<壁・壁高>黒色土と黄褐色土の混土層で、壁高は、西壁4cm、北壁6cmである。

<埋土>やや締まる黒色土であるが、壁よりは明らかに軟質である。

<床・柱穴・施設>黒色土と黄褐色土の混土層で、ほぼ水平で平坦である。柱穴は検出されなかった。

<炉>地床炉が1基検出された。55×70cmの不整形の範囲に分布し、厚さは最大10cmである。一部攪乱がある。

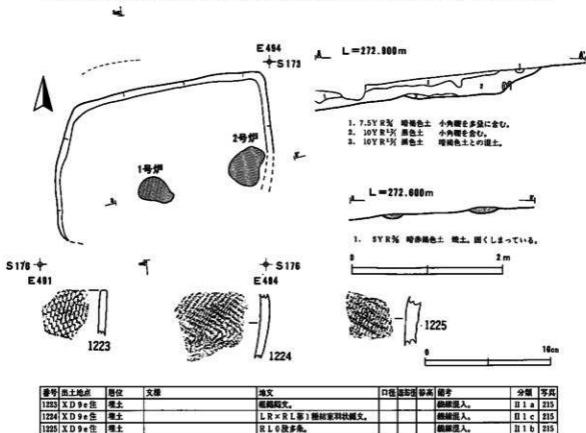
遺物 遺構内遺物はない。検出作業の段階で取り上げた土器が本住居に伴う可能性があるが明らかではない。

時期 特定する資料を欠き不明であるが、検出状況から縄文時代前期に属すると推定される。

### X D 8 ●住居跡 (遺構番号162)

遺構 (第272図、写真図版100)

<検出状況>東尾根南東斜面に位置する。黒色の腐植土層を掘り込んでいる。埋土、壁とも黒



第272図 X D 8 ●住居跡・出土遺物

色土であり、平面的には検出できなかった。炉と想定される焼土の検出が先行し、その後斜面上方において壁を確認したが、埋土と明瞭に区別することは困難だった。土層断面では、立ち上がりを確認できる。南側は斜面のため流失していると考えられる。精査中に焼土が更に1基検出された。

〈形状・規模〉南側は不明であるが、長軸が斜面に平行する長方形を基調とするものと推定される。規模は、東西2.9cm、南北は残存値で2mである。

〈壁・壁高〉埋没腐植層である黒色土で、埋土よりやや固めて褐色味を帯びる。緩やかに立ち上がる。壁高は、北壁30cmであるが、検出が遅れ15cm程さげてしまい、残存する壁は15cmである。西壁は7cmである。

〈埋土〉小角礫に富む黒色土を主体とする。

〈床・柱穴・施設〉埋土よりやや固めて褐色味を帯びる黒色土で、ほぼ水平で平坦である。

柱穴は検出されなかった。

〈炉〉地床炉が2基検出された。いずれも断面形レンズ状で、やや縮まり小角礫を含む。西側のものを1号炉、東側のものを2号炉とする。1号炉の焼土は、30×45cmの歪な楕円形状に分布し、厚さは最大6cmである。2号炉の焼土は、45×50cmの不整形に分布し、厚さは最大7cmである。

遺物（第272図、写真図版215）

〈土器〉埋土から200g出土したが、いずれも繊維を混入する。

時期 出土遺物から縄文時代前期初頭から前葉に属すると考えられる。

## (2) 平安時代の壑穴住居跡

### ⅪC8b住居跡I(遺構番号163)

遺構(第273～277図、写真図版101・102)

〈検出状況〉東尾根東側の谷頭凹型斜面に位置する。黒色土上面で検出した。斜面上方において煙出し部の構成礫が数個現れ、それより4.5m離れた斜面下方に若干の焼土が検出されたことから本遺構の存在が分かった。埋土も壁も黒色土で殆ど区別がつかず、平面形は検出時点で不明であった。

〈形状・規模〉隅丸長方形で、規模は東西3.4m、南北3.6mである。床面積は、約12.3㎡である。

〈壁・壁高〉黒色土層～黒褐色土層で、上位は脆く崩れやすい。凹凸はなく、ほぼ直立する。壁高は、西壁49cm、東壁15cm、北壁55cmである。

〈埋土〉黒色土を主体とし、十和田a降下火山灰(付窟1参照)を粒状にごく少量含む。特に壁際に見られる。下位には焼土粒、細かい炭化材を含む。黒色土の下には厚さ5～10cmの焼土が面的広がりをもって分布する。焼土層の下は大小様々の炭化材が混入した黒色土層で、この最下層から板材が検出された。

〈炭化材・焼土〉多量の炭化材が、床面から床面直上にかけて分布する。カマド周辺には細かいものが多く、脆弱でとりあげることができなかったが、現地での観察ではほとんどが径5cm以下の細い丸材であった。西側と南側には、細かい炭化材の他に大型の材が比較的良好的状態で遺存している。この大型材は西側のものは南北方向に、南側のものは東西方向に整然と並ぶ。幅20cm程度、厚さ3～5cm程度の柁目板で、南北方向には5～6列、東西方向には4列の単位が認められ、これらは敷板と考えられる。この敷板の上にもやや大きめの炭化材片がある。特に北壁際、西壁際に多く検出された。これらの断面も板材の様相を示している。これら炭化材の樹種は、(55～59)がクリの他は、すべてケヤキであると鑑定された。

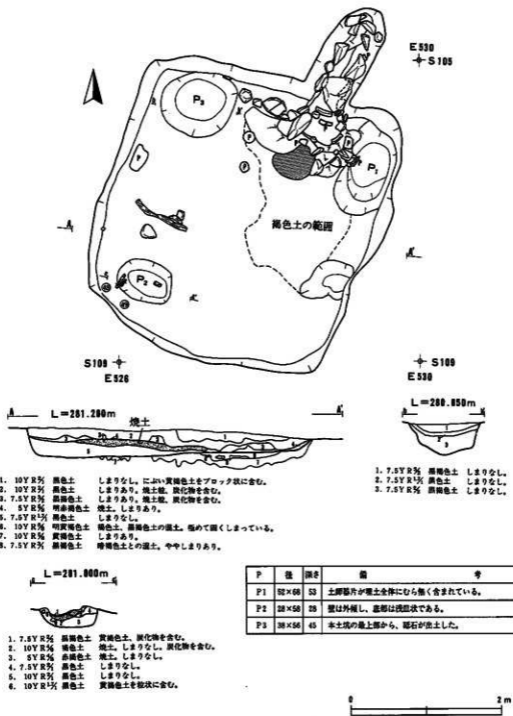
焼土の分布は、カマド周辺と東壁付近には見られず、西側と南側に偏り、敷板の範囲とほぼ一致する。シルト質土が焼土化したもので固く締まっている。

これらのことから、本住居は焼失住居であると考えられる。

〈床・柱穴・施設〉北東四半分は、褐色土によって貼り床され、非常に固く締まっている。特にカマド周辺の床はガリガリとしている。この貼り床の部分に対応する位置に掘り方が検出された。西側には見られない。掘り方は深いところで20cm、貼り床として用いた褐色土は厚さ5～10cmである。西側と南側の敷板の下からは、丸太材1箇所、直角礫が数箇所検出された。敷板の下の床面は、しまりを欠き極めて軟質である。柱穴・溝は検出されなかった。

土坑が3基検出された。いずれも本住居に伴うものである。P1は埋土中位に15×20cmの炭化





第273図 XI C 6 b 住居跡(1)

材や、カマドの構成礫も混入する。上位からは繊維質の遺物が出土した。P2は、焼土の層にパックされた炭化材の層が薄く存在する。P3は、敷板の炭化材を取り除いた後に検出された。

〈カマド〉北壁中央より東寄りに位置する。煙道部長軸方向はN-24°-Eで、斜面に対しほぼ直交する。比較的良好な遺存状態である。焚口部から煙出し部まで約2.3 m、壁外は約1.4 mである。

西側の袖部にやや大きめの亜角礫を芯材として立て、側壁・天井部とも礫を構築材として用い、礫間の間隙を埋めるように土師器甕・坏などの破片を配して、シルト質粘土・シルト質土で全体を被覆している。東側袖部には芯材となる礫は見当たらず、全体として礫の位置に規則性を見出すことは困難である。西側袖部から西方向にはほぼ同規模の亜角礫が数個一直線上に並ぶが、褐色粘土を用いてカマド本体に向かって斜位に固定している。東側の土坑P1と接する部分には、土師器甕の破片を瓦を葺くように階段状に組み、崩落を防ぐように構築されている。

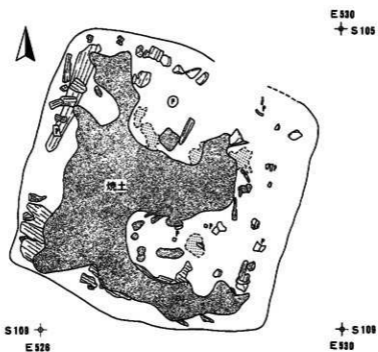
燃焼部の焼土は52×90cmの楕円形状に分布し、厚さは最大6 cmで、固く締まっている。支脚として10×10×15cmの亜角礫をたてる。煙道部は掘り込み式で、底面は緩やかに立ち上がった後、水平となり、煙出し部で下降し直立気味に立ち上がる。天井部と側壁は、扁平な亜角礫を材としてトンネル状に構築している。側壁の礫の掘り方は検出されないことから、掘り込んだ後に壁側に礫を押しつけただけの構造と考えられる。天井部は一部構築礫を欠くが、側壁の礫と対応するものがあつたものと考えられる。天井部の構築礫の最大のものは、住居の壁の境界部にあり、40×55×12cmの規模である。

煙出し部は、礫を外周させ、褐色粘土質土で上部を固めているが、礫は原位置をとどめていないものがある。

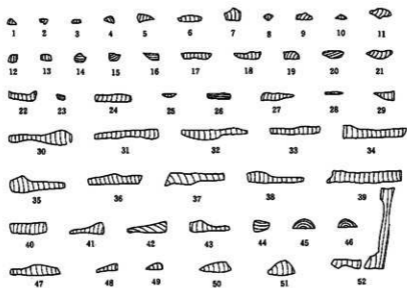
本住居で使用されている礫の石質は、支脚として用いられた礫1点のみをサンプリングした。その結果、北上山地古生界の赤色凝灰岩と鑑定された。他の礫も同質と思われる。

遺物（第278～281図、写真図版215～217・294）

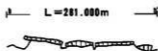
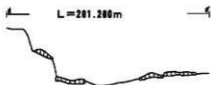
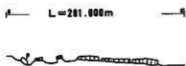
床面から多量の土師器と、砥石、釘状鉄製品が出土した。土師器の器種は、坏(1226～1235)・鉢(1236)・甕(1237～1247)である。1226～1229は内面ヘラミガキ後黒色処理されている。1226・1227には刻書文字がみられるが、これは焼成後に線刻されたものである。工具は鋭利な針状のものであると思われるが、刻みは表層のみで浅い。この2点は、他の坏より器高が高く、内湾気味に立ち上がる。底部はヘラケズリによって調整される。1228～1235は黒色処理のないものである。底部は回転糸切りの痕跡が顕著に残る。1236はロクロ成形による鉢である。甕はロクロ調整されているものは1241・1245・1247、他はロクロ不使用である。器形は1245がやや胴部が張る他は、おおむね長胴である。砥石は北西隅と西壁際から出土したものである。1248



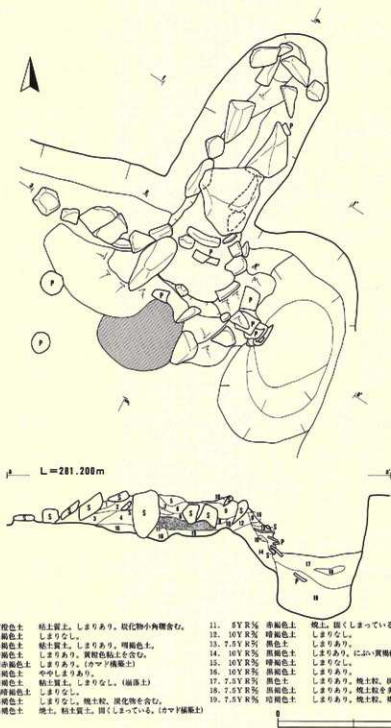
第274圖 XI C 8 b 住居跡(2)



〈樹種〉ケヤキ…1~31、40~52  
ク リ…32~39



第275図 XI C 6 b 住居跡(3)

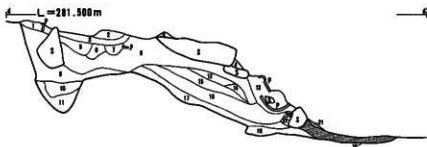


第276図 XIc8b住居跡(4)

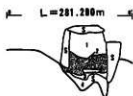
は多面を使用、1249は1面を使用している。1250・1251はほぼ同地点から出土した。鑑定の結果、砂鉄を原料とする鋼であることが判明した(付篇5参照)。

2539は炭化系塊である。P1の埋土上位、黒褐色土層から炭化材・土師器片・焼土粒と混在して出土した。極めて脆弱な状況であり、土と一緒に取り上げた。土を含めておよそ親指大きさほどの量である。周囲を丁寧に調べたが他には見当たらなかった。(付篇6参照)。

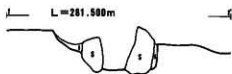
時期 出土遺物から、平安時代9世紀末から10世紀初めに属すると考えられる。



- |                  |                        |                                 |                         |
|------------------|------------------------|---------------------------------|-------------------------|
| 1. 10Y R% 赤褐色土   | しまりなし。                 | 12. 7.5Y R <sup>1</sup> /5 黒色土  | しまりなし。焼土粒を微量含む。         |
| 2. 7.5Y R% 黒色土   | しまりなし。焼土粒を含む。          | 13. 10Y R% 黄褐色土                 | 粘土質土。しまりあり。下段は焼成を受けている。 |
| 3. 10Y R% 黒褐色土   | しまりなし。                 | 14. 5Y R% 暗赤褐色土                 | しまりなし。焼成を受けている。         |
| 4. 10Y R% 黄褐色土   | 粘土質土。しまりなし。焼土粒を含む。     | 15. 7.5Y R% 黒色土                 | しまりなし。灰を含む。             |
| 5. 7.5Y R% 黒色土   | しまりなし。焼成を受けている。        | 16. 5Y R% 暗赤褐色土                 | しまりなし。                  |
| 6. 7.5Y R% 暗赤褐色土 | しまりなし。                 | 17. 7.5Y R <sup>1</sup> /5 黒褐色土 | しまりなし。下段に焼土粒を含む。        |
| 7. 7.5Y R% 暗赤褐色土 | しまりなし。焼土をブロック状に含む。     | 18. 7.5Y R <sup>1</sup> /5 黒褐色土 | しまりなし。                  |
| 8. 7.5Y R% 黒色土   | しまりなし。サラサラしている。焼土粒を含む。 | 19. 5Y R% 暗赤褐色土                 | 焼土。固くしまっている。            |
| 9. 5Y R% 暗赤褐色土   | ややしまりあり。               | 20. 7.5Y R% 黒色土                 | しまりなし。                  |
| 10. 7.5Y R% 黒色土  | 粘土質土。しまりあり。            | 21. 5Y R% 暗赤褐色土                 | ややしまりあり。                |
| 11. 7.5Y R% 黒色土  | ややしまりあり。               |                                 |                         |



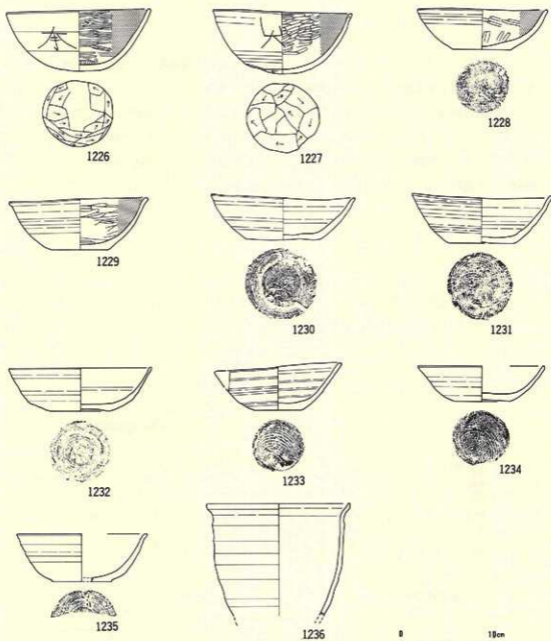
- |                               |               |
|-------------------------------|---------------|
| 1. 7.5Y R% 暗赤褐色土              | しまりなし。焼土粒を含む。 |
| 2. 5Y R% 暗赤褐色土                | 焼土。しまりなし。     |
| 3. 5Y R% 暗赤褐色土                | しまりなし。焼土粒を含む。 |
| 4. 7.5Y R <sup>1</sup> /5 黒色土 | しまりなし。        |



- |                |               |
|----------------|---------------|
| 1. 7.5Y R% 黒色土 | しまりなし。焼土粒を含む。 |
|----------------|---------------|

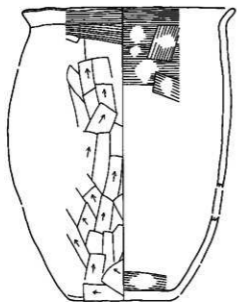


第277図 XI C 8 b 住居跡(5)

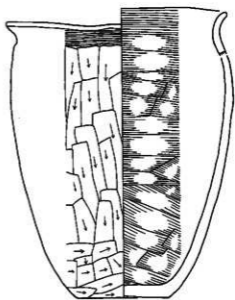


番号	出土地点	層位	調整	口径	底径	高さ	備考	分類	号点
1226	XI C 6b 住	床面	ロクロ、内面黒色処理、ヘラミガキ、底部ヘラケズリ。	15.4	7.4	6.5	研習土器	甕	215
1227	XI C 6b 住	床面	ロクロ、内面黒色処理、ヘラミガキ、底部ヘラケズリ。	14.7	7.8	6.9	研習土器	甕	215
1228	XI C 6b 住	床面	ロクロ、内面黒色処理、ヘラミガキ、底部回転糸切り。	13.9	6.9	4.3		甕	215
1229	XI C 6b 住	床面	ロクロ、内面黒色処理、ヘラミガキ、底部回転糸切り。	14.8	6.4	5.5		甕	215
1230	XI C 6b 住	床面	ロクロ、底部回転糸切り。	15.3	7.5	5.0		甕	216
1231	XI C 6b 住	床面	ロクロ、底部回転糸切り。	14.9	6.9	5.3		甕	216
1232	XI C 6b 住	カマド	ロクロ、底部回転糸切り。	15.2	6.7	4.6		甕	216
1233	XI C 6b 住	床面	ロクロ、底部回転糸切り。	(13.4)	6.5	5.0		甕	216
1234	XI C 6b 住	カマド	ロクロ、回転糸切り。	(13.4)	6.3	3.7		甕	216
1235	XI C 6b 住	カマド	ロクロ、回転糸切り。	(13.4)	6.3	5.1		甕	216
1236	XI C 6b 住	カマド	ロクロ	(15.2)	-	12.0		甕	216

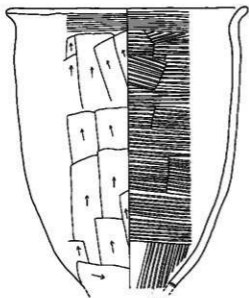
第278図 XI C 6b 住居跡出土遺物(1)



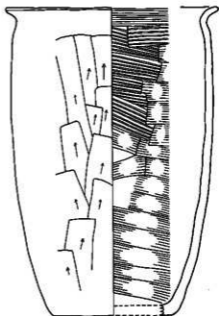
1237



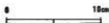
1238



1239



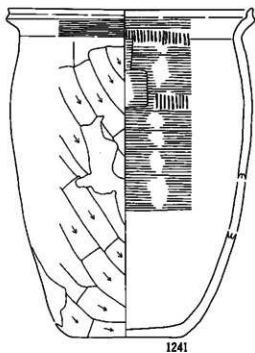
1240



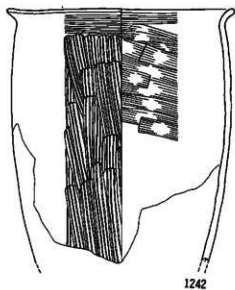
番号	出土地点	層位	調整	口径	底径	器高	備考	分類	写真
1237	ⅩC 6 b 住	床面	外面ケズリ、内面ハケメ ナデ、口縁部内外面ヨコナデ。	22.6	10.9	31.2		甕	216
1238	ⅩC 6 b 住	床面	外面ケズリ、内面ハケメ ナデ、口縁部内外面ヨコナデ。	23.4	9.6	30.5		甕	216
1239	ⅩC 6 b 住	カマド	外面ケズリ、内面ハケメ ナデ、口縁部内外面ヨコナデ。	26.4	-	30.8		甕	216
1240	ⅩC 6 b 住	カマド	外面ケズリ、内面ハケメ ナデ、口縁部内外面ヨコナデ。	22.4	12.6	33.0		甕	216

第278図 ⅩC 6 b 住居跡出土遺物(2)

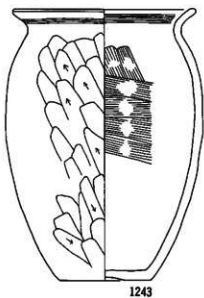




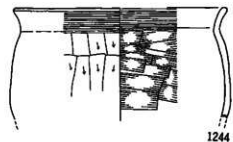
1241



1242



1243



1244

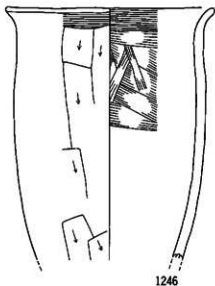


1245

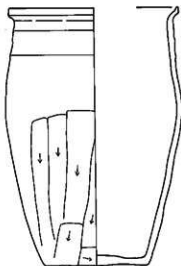


番号	発土地点	層位	調査	口径	口縁部幅	口縁部高	番号	分類	写真
1241	ⅢC6b住	カマド	ロクロ、外面ヘラタズリ、内面ハケメ ナデ。	25.9	12.0	35.0		Ⅲ	217
1242	ⅢC6b住	カマド	外面ハケメ、内面ナデ、口縁部内外面ヨコナデ。	24.3	-	27.0		Ⅲ	217
1243	ⅢC6b住	塚面	外面ヘラタズリ、内面ナデ、ロクロ調査、口縁部ヨコナデ。	19.3	9.5	29.1		Ⅲ	217
1244	ⅢC6b住	カマド	外面タズリ、内面ナデ、口縁部内外面ヨコナデ。	22.4	-	31.7		Ⅲ	217
1245	ⅢC6b住	カマド	ロクロ。	22.6	-	9.5		Ⅲ	217

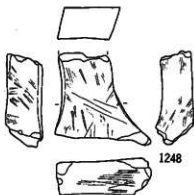
第280図 ⅢC6b住居跡出土遺物(3)



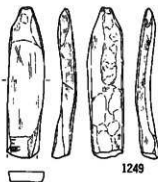
1246



1247



1248



1249



1250



1251



番号	出土地点	層位	陶物	内面ナデ	口縁	口縁部	器高	番号	分類	写真		
1246	ⅩC6b住	床面	外蓋ケズリ、内面ナデ、口縁部内外面ヨコナデ。		22.0	-	27.0		Ⅹ	217		
1247	ⅩC6b住	床面	外蓋ロクロ、ケズリ、内面不明。		18.0	11.0	27.5		Ⅹ	217		
番号	出土地点	層位	器種	石質	産地	長さ	幅	厚さ	重さ	備考	分類	写真
1248	ⅩC6b住	床面	磁石	陸奥質緑粘板灰岩	鳥羽山地	(8.0)	(4.0)	2.0	(160)	器底の痕が2ヶ箇所あり、持ちかたの曲面を形成する。		217
1249	ⅩC6b住	床面	磁石	陸奥質緑粘灰岩	北上山地	(11.0)	2.9	0.8	(50)	主な使用痕は持ちかたの曲面を形成する。		217
番号	出土地点	層位	器種			長さ	幅	厚さ	重さ	備考	分類	写真
1250	ⅩC6b住	床面	釘?			(2.2)	0.7	0.3	(1.46)			217
1251	ⅩC6b住	床面	釘?			(3.0)	0.5	0.3	(0.77)			217

第201図 ⅩC6b住居跡出土遺物(4)

XC9a住居跡 (遺構番号164)

遺構 (第282・283図、写真図版103・104)

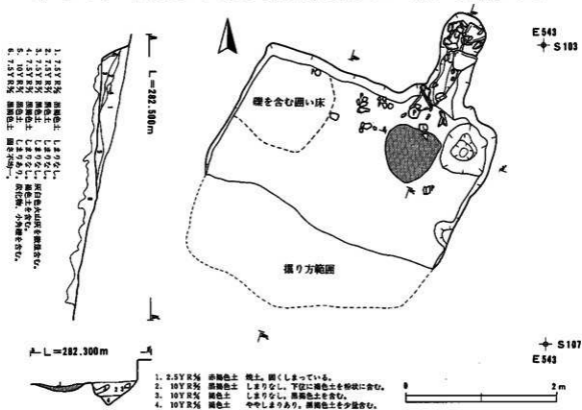
<検出状況>東尾根東側の谷頭凹型斜面に位置する。表土直下、基盤層への漸移層である黒色土と黄褐色土の混土层上面で煙出し部の構築礎を検出した。西側は、倒木底の黒色土を壁とする。南側は斜面のため流失し、掘り方のみ残存する。

<形状・規模>南側は不明であるが、隅丸方形と推定される。規模は、東西3.2m、南北は残存値で2m、掘り方の範囲は南北3.2mまで確認できる。

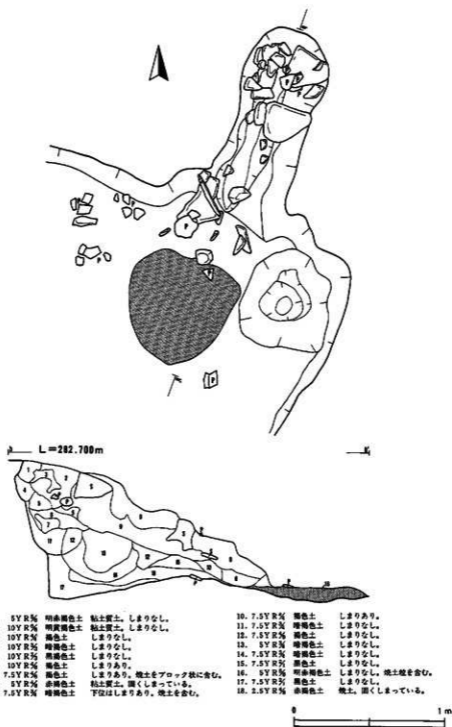
<壁・壁高>上位は黒色土と黄褐色土の混土层を、下位は基盤層を壁とし、ほぼ直立する。壁高は、東壁14cm、西壁20cm、北壁33cmである。

<埋土>黒色土～黒褐色土が主体で、一部崩落土を含む。第3層には灰白色火山灰の微細粒がごく少量混入する。

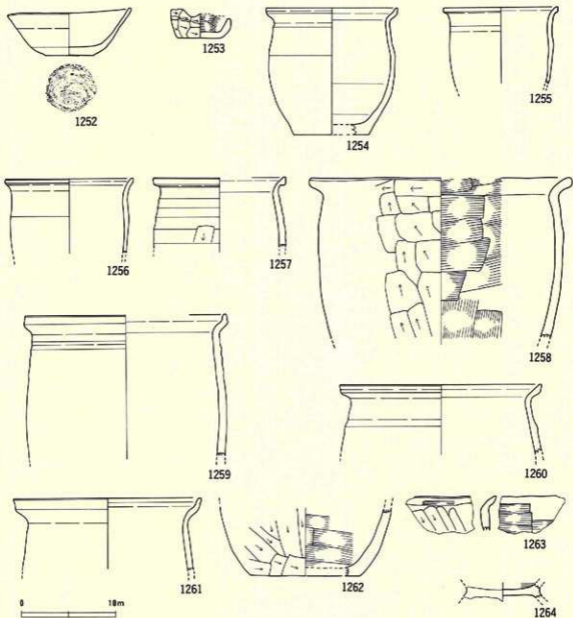
<床・柱穴・施設>北西四半部は、基盤層を直接床とし、礫混じりで固い。東側・南側は暗褐色土～褐色土によって貼り床されている。ガリガリとした固さはない。掘り方は斜面上方では深いところでは10cm程度であるのに対し、下方では推定床面より30cmの深さになる部分がある。



第282図 XC9a住居跡(1)



第283図 XI C 9a住居跡(2)



番号	出土地点	層位	調整	口径	底径	器高	備考	分類	写真
1252	XI C 9 a 住	床面	ロクロ、蓋部回転糸切り(調整有?)	10.1	5.0	5.0		甕	218
1253	XI C 9 a 住	床面	手づくね	6.4	4.6	3.0		甕	218
1254	XI C 9 a 住	縁部部	ロクロ	14.0	8.0	13.5		甕	218
1255	XI C 9 a 住	床面	ロクロ	12.2	-	( 8.2)		甕	218
1256	XI C 9 a 住	床面	ロクロ	12.6	-	( 8.0)		甕	218
1257	XI C 9 a 住	埋土下位	ロクロ	11.0	-	7.5		甕	218
1258	XI C 9 a 住	縁出部	外面ケズリ、内面ナデ。	28.0	-	(17.0)		甕	218
1259	XI C 9 a 住	床面	ロクロ	21.0	-	(15.2)	縁出部	甕	218
1260	XI C 9 a 住	床面	ロクロ	11.4	-	( 7.1)		甕	218
1261	XI C 9 a 住	床面	ロクロ	20.0	-	( 7.7)		甕	218
1262	XI C 9 a 住	縁部部	外面ケズリ、内面ナデ。	-	(11.0)	( 7.3)		甕	218
1263	XI C 9 a 住	埋方埋土	外面ケズリ、内面ナデ。	-	-	-		甕	218
1264	XI C 9 a 住	Q1埋土上位	ロクロ、内面黒色処理。	-	-	-		甕	219

第284図 XI C 9 a 住居跡出土遺物

カマドの東脇に土坑を検出した。規模は、開口部径60×66cm、深さ33cm、歪な楕円状の形状で、締まりを欠く黒褐色～褐色土を埋土とする。東壁のほぼ中央部に固く締まった褐色土が盛り上がった状態で壁と繋がる。柱穴は検出されなかった。

〈カマド〉北壁中央より東寄りに位置する。煙道部長軸方向はN-25°-Eである。焚口部から煙出し部まで約2.35m、壁の外は約1.1mである。西側煙道部入り口の構築材と想定される礫は、長さ30cm、幅20cm、厚さ15cmで、壁にも焼成痕が観察されることから、原位置を保っているものと思われる。この礫の掘り方は確認されず、壁に押し付けただけの構造である。他の部分はすべて破壊され、構築礫や土器片が原位置をとどめずに散在・残存する。燃焼部西側に焼土塊と粘土質シルトの混交した層が分布し、土師器片も混入する。意図的に破壊したものかと思われる。

燃焼部焼土は、径70cm程度の歪な円形に分布し、厚さは最大で10cmである。基盤層が焼土化したもので固く締まっている。煙道部は底面が淡く焼成を受けている他、最下層の第16層には天井部の焼土が崩落して混入している。第17層は灰を含みきわめて脆い。第8層、第9層では暗褐色シルトの中に、褐色粘土質シルトの焼成痕がブロック状に観察される。これらのことから、基盤層を掘り込み、天井部を暗褐色シルトと褐色粘土質シルトで構築したものと考えられる。煙出し部付近には25×25×10cmの歪角礫をはじめ、大小十数個の礫と土師器片が集中しているが、規則性は観察されなかった。

燃焼部付近の礫は同一石質と考えられ1点のみ鑑定した結果、北上山地古生界赤色凝灰岩であった。煙出し部には奥羽山地新第三系中新統の両輝石安山岩の角礫が1点混入していた。

遺物 (第284図、写真図版218・219)

出土した遺物は、土師器の環 (1252・1264)、鉢 (1254～1256)、甕 (1257～1263)、手捏ね土器 (1253) である。多くはロクロを用いている。1264は高台付き環の欠損品である。内面は黒色処理され、高台部はハの字状に開くが詳細は不明である。

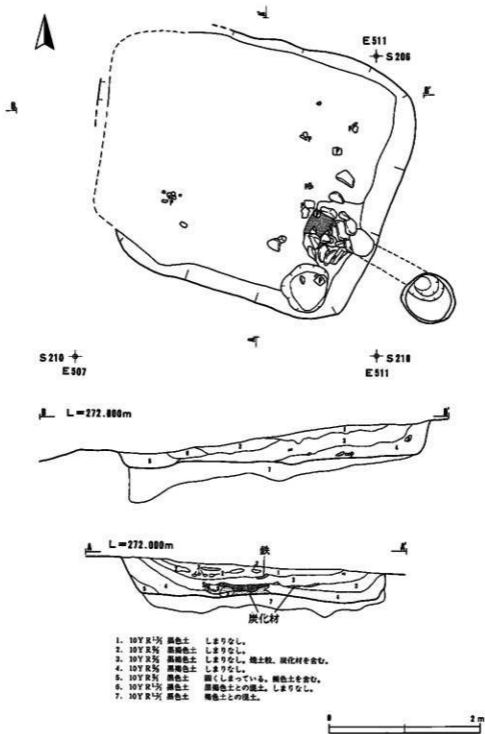
時期 出土遺物から、平安時代9世紀末から10世紀初めに属すると考えられる。

## Ⅺ E 2 b 住居跡 (遺構番号165)

遺構 (第285～287図、写真図版104・105)

〈検出状況〉C区西斜面に位置する。表土直下の黒色土層上面で、炭化材片を含む黒褐色土が矩形に広がり、その内側にはほぼ円形の黒色土の広がりことから検出した。南側は、壁と埋土の区別が不明瞭で掘り過ぎてしまった。土層断面で立ち上がりを確認し、本住居の範囲を確定した。

〈形状・規模〉隅丸台形で、南北3.4m、東西4mである。



第285図 XI E2b 住居跡(1)

〈壁・壁高〉上位は黒色土層、下位は基盤層である黄褐色土で、ほぼ直立する。壁高は、東壁60cm、西壁19cm、南壁29cm、北壁39cmである。

〈埋土〉上位は腐植土である黒色土、下位は炭化材の細片・焼土粒を含む黒褐色土が主体である。レンズ状に堆積する。埋土上位および下位に、十和田a降下火山灰（付篇1参照）が粒状に混入する。

〈焼土・炭化材〉床面直上の住居中央部南北方向に、焼土が部分的に分布する。厚さは最大で10cm程度で、締まりを欠く。焼土の上または下から炭化材が検出された。住居中央部南北方向に多く、概ね住居中央に向かって放射状の分布を示し、木目の方向も同様である。これらのことから本住居は焼失住居と考えられる。これら炭化材の樹種は、11がナラの他はすべてクリであった。

〈床・柱穴・施設〉全体規模の掘り方もち、黒色土と褐色土の混土で貼り床する。ややおきめにうねるような凹凸がある。

カマドの右脇に土坑が検出された。規模は、開口部径60×60cmの歪な円形で、深さは30cmである。底面から炭化材の細片と土師器片が出土した。

〈カマド〉東壁中央より南寄りに位置する。煙道部長軸方向はN-120°-Eで、斜面に対しほぼ直立する。上から押し潰された状態であるが、遺存状況は良い。袖部芯材として扁平な角礫(25×34×10cm、25×42×8cm)を直立させ、煙道部入り口に向かって礫を配列し、褐色粘土質シルトで被覆している。支脚として環をふせて用いている。燃焼部の焼土は、構築礫の内側、支脚の位置まで35×40cmの範囲に分布する。厚さは最大13cmで固く締まっている。

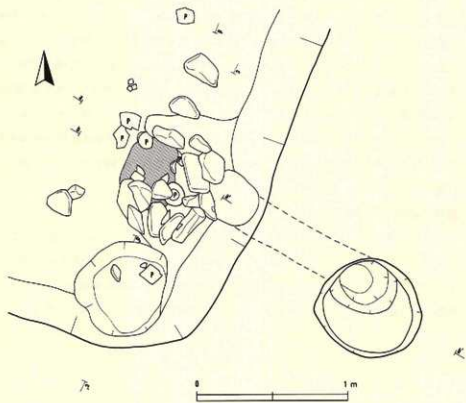
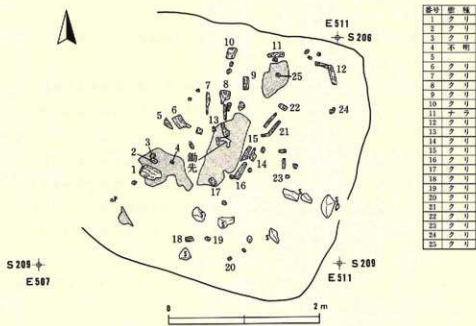
煙道部はくりぬき式で径25cm程度の円形の穴を穿ち、やや下降気味に壁外80cmまで至り上昇する。埋土は焼土粒を含む褐色土と黒色土との混土できわめて締まりを欠く。煙出し部には特に施設を設けないが、径60×70cm程度の土坑状となる。

遺物（第288図、写真図版219）

出土した遺物は、土師器の環（1265～1267）および甕（1268～1271）、鋤先（1272）である。1266はカマドの支脚として用いられていたものである。1272は原料鉱石を特定することはできないが、炭素含有量の低い鍛造鉄器であることが判明した（付篇5参照）。

時期 出土遺物から、平安時代9世紀末から10世紀初めに属すると考えられる。





第286図 XI E 2b 住居跡(2)

片 L=271.700m



1. 10YR 6/ 褐色土 褐色土との混土。しまりなし。

片 L=272.000m



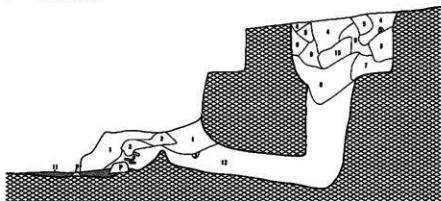
1. 10YR 6/ 褐色土 褐色土との混土。しまりなし。

片 L=272.800m



- |                 |                     |
|-----------------|---------------------|
| 1. 10YR 6/ 黒褐色土 | 褐色土との混土。しまりなし。      |
| 2. 10YR 6/ 黒色土  | 粘土質土。しまりあり。(カマド構築土) |
| 3. 10YR 6/ 褐色土  |                     |
| 4. 10YR 6/ 暗褐色土 | しまりなし。              |
| 5. 10YR 6/ 褐色土  | しまりなし。              |
| 6. 10YR 6/ 褐色土  | 褐色土との混土。しまりなし。      |
| 7. 10YR 6/ 褐色土  |                     |

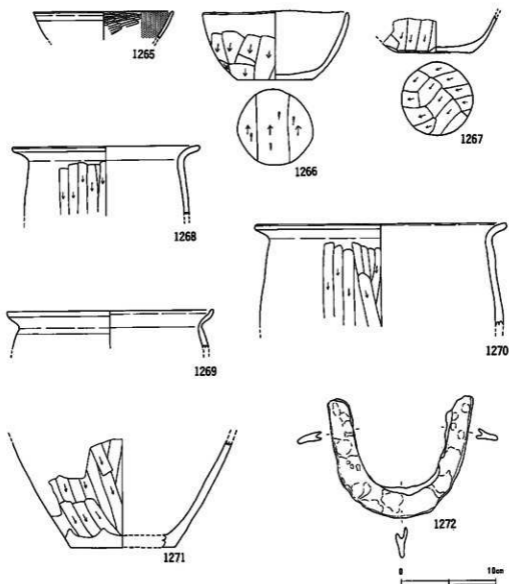
片 L=272.600m



- |                   |                       |
|-------------------|-----------------------|
| 1. 10YR 6/ 褐色土    | しまりなし。                |
| 2. 10YR 6/ 褐色土    | 赤褐色土を含む。              |
| 3. 10YR 6/ 褐色土    | 粘土質土。しまりあり。(カマド構築土)   |
| 4. 10YR 6/ 褐色土    | 褐色土との混土。しまりなし。        |
| 5. 10YR 6/ 褐色土    | しまりなし。                |
| 6. 10YR 6/ 褐色土    | しまりなし。                |
| 7. 10YR 6/ 褐色土    | 褐色土を含む。               |
| 8. 10YR 6/ 褐色土    | しまりなし。                |
| 9. 10YR 6/ 褐色土    | 赤褐色土を含む。              |
| 10. 10YR 6/ 褐色土   | 褐色土との混土。              |
| 11. 7.5YR 6/ 暗褐色土 |                       |
| 12. 10YR 6/ 褐色土   | 褐色土との混土。しまりなし。粘土質を含む。 |



第267図 XI E 2 b 住居跡(3)



番号	出土地点	層位	形状	口径	通径	器高	備考	分類	写真
1265	Ⅺ E 2 b 住	縄土	ロケロ、内面2ガキ。	14.8	-	3.0		甕	219
1266	Ⅺ E 2 b 住	カマド支脚	外面ヘラケズリ。	15.5	6.0	7.3		甕	219
1267	Ⅺ E 2 b 住	カマド	外面ケズリ、内面不明、経部ケズリ。	-	7.8	4.0		甕	219
1268	Ⅺ E 2 b 住	床面	ロケロ、外面ケズリ。	20.0	-	7.4		甕	219
1269	Ⅺ E 2 b 住	床面	ロケロ。	22.0	-	4.0		甕	219
1270	Ⅺ E 2 b 住	カマド	ロケロ、外面ケズリ。	26.4	-	12.9		甕	219
1271	Ⅺ E 2 b 住	カマド	外面ケズリ。	-	11.0	11.1		甕	219

番号	出土地点	層位	器種	幅	長さ	厚さ	重さ	備考	分類	写真
1272	Ⅺ E 2 b 住	床面	燧矢	112.8	115.5	1.3	115.1			219

第200図 Ⅺ E 2 b 住居跡・出土遺物

XI E 2 c 住居跡 (遺構番号166)

遺構 (第289図、写真図版106)

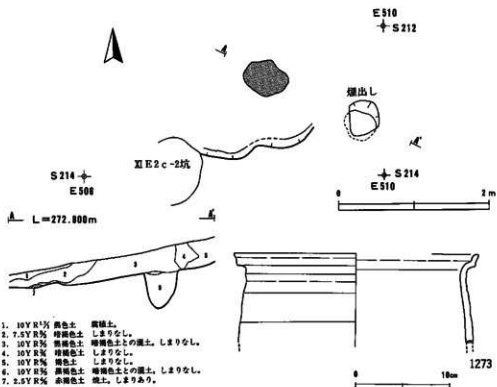
<検出状況>C区西斜面に位置する。試掘トレンチの底面において検出した。煙道部、煙出し部、燃焼部焼土のみ残存する。カマドの構築材は、その可能性のある黄褐色粘土質シルトが焼土の南側に少量検出された他は見当たらず、断面観察から、床面および壁は斜面のため流失、または耕作により削剥されたものと考えられる。

焼土は50×60cmの楕円形状に分布し、厚さは最大8cmで、固く締まる。

遺物 (第289図、写真図版219)

ロクロ使用の土師器製のみの出土である。

時期 詳細は不明であるが、出土遺物および他遺構との関連から、平安時代前期に属すると推定される。



番号	出土地点	層位	調査	口縁 底縁 高さ	番号	分類	写真
1273	XI E 2 c 住	埋土	ロクロ。	(25.4)	- (31.5)		219

第289図 XI E 2 c 住居跡・出土遺物

---

---

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第227集

## 上八木田 I 遺跡発掘調査報告書

新盛岡競馬場建設関連遺跡発掘調査

分冊 1 (住居跡・住居跡内出土遺物)

印刷 平成 7 年 3 月 25 日

発行 平成 7 年 3 月 31 日

発行 (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

〒020 盛岡市下飯岡11-185

電話 (0196) 38-9001・2

印刷 株式会社 熊谷印刷

〒020 盛岡市上田一丁目6-49

電話 (0196) 53-4151